
真言の紡ぎ手

旅のマテリア売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真言の紡ぎ手

【Nコード】

N6496P

【作者名】

旅のマテリア売り

【あらすじ】

気が付いたら見知らぬ空間にいた。なんでも神の夫婦喧嘩で自分は死んでしまったらしい。いろいろと諦めて消滅を待とうとするが異世界に送られることになりました。ですがその世界は『ネギま』で、遠慮しようかと思っただけなら無理やり送られることになりました。「死んだ人間を死ぬ危険性がある世界に送るってどうなんでしょうか・・・生き残ることはできるのか!？」いろいろとグダグダで、しかも亀の歩みですが、生温かい目で読んでもらえるとうれしいです。

プロローグ：流されて・・・

気がつけば、知らない場所でした。周りは流動し、色が常に変化し続けている。正直に言っ、気持ち悪いし目も疲れる。

「ここはどこでしょうか？」

疑問に思い、そう口に出す。

確か私はレポートの資料探しに図書館に向かっていたはずですが・

「ここは世界のどこでもない場所。」

「あなたが此処にいる理由は、図書館に向かっていて途中で雷に打たれて死んだから。」

物思いにふけっていると、背後から声がした。

振り向いてみると、そこには二人の女性が立っていました。誰でしょうか？

「あなた方は誰でしょうか？あと此処にいる理由を教えてくださいがとうございます。」

「わたしは秩序^{コスモス}。あなた方から見れば、調和を司る神です。それにしても、随分と落ち着いているのですね。」

「変わり者なんでしょう。人間にはそういう者が意外に多いと聞きます。わたしは混沌^{カオス}。混沌にして、なにもない空間を司る神。それよりあなたも名乗りなさい。」

初対面のヒト？に変わり者扱いされてしまいました。まあ、慣れて

ますけどね。

友人にも両親にも言われてましたし。まあ、たしかに名乗らないのは失礼でしたね。

「すみません、失念していました。私は緋乃宮 昴と申します。死んだ、ということは、此処は死後の世界なのですか？随分とイメージが違いますね。」

純粹にそう思う。死んだら三途の河を渡ると思っていたから、少し予想外だ。

「違います。此処は世界のどこでもない場所です。」

そう秩序コスモスと名乗った女性が否定する。

どうということだろうか。

疑問に思い問おうとするが

「つまり、死後の世界ではないということですよ。当然、死んだのですから現世でもありません。」

混沌カオスと名乗った女性に先に言われました。

ですが理解できません。死後の世界でないというのなら、この空間は何なのでしょう。

そもそも、死んだのなら死後の世界に行くのが常ではないのか。

「あなたは本来、あの時間、あの場所で死ぬ運命ではありませんでした。死因の雷も、自然現象で発生したものではありません。」

「どうということですか？」

「つまり、あなたが死んだ原因の雷は自然に発生したものではありません。死んだ原因の雷は自然に発生したものではありません。」

いえ、そうではなくて・・・

「自然に発生したものではありませんのなら、何が原因で発生したんですか？」

そう問いかける。

すると秩序は申し訳なさそうに、混沌は苦々しげな顔で話した。

「原因は二柱の神のケンカです。」

「ケンカ・・・ですか？」

「はい。」

「ゼウスとその妻、ヘラを知っていますか？」

「はい、一応知っています。」

「あの女の敵が、また浮気しようとしたところをヘラに見つかって、今までのことも掘り返されて文句を言われ、それで怒ったゼウスが文句を言い返して始まったケンカがああ雷の原因です。」

「さらにその夫婦喧嘩が原因で世界のシステムが狂い、死んだ人が存在したという歴史がすべて消えてしまいました。幸いと言っては失礼ですが、死んだのはあなただけでした。」

それはまた・・・

「奇跡的ですね。世界中で死んだのが私だけとは。」

「怒らないのですか？」

「怒って何になるんですか？」

「夫婦喧嘩という理不尽な理由で死んだのですよ？生き返らせろ、とか言うのが普通ではないのですか？」

たしかに理不尽だろう。文句も言いたい。

だが・・・

「文句を言っただけで生き返るものでもないでしょう？それに、さっきの話が本当なら、私が存在したという歴史はすでに無いんでしょう？だったら諦めて、此処でじっとしておくしかないでしょう。」

「此処にいても、あるのは消滅だけです？それでもいいのですか！？」

「神が人の心配とは珍しい。神は人の運命を弄ぶものではないのですか？」

様々な英雄譚で、神は英雄の運命を操っていた。

ギリシア神話のヘラクレス然り、北欧神話のシグムント然り、神によって死を決められ破滅した。

「確かに、神にはそういう者も存在しています。ですが、あなたは此処に留まることはできません。」

「どういうことですか？」

「あなたには別の世界に渡ってもらいます。あなたが生まれ育った世界には存在の空きがありませんが、別の世界には空きがあります。その世界のシステムに、あなたの存在を入れます。」

「別にそれはかまいませんが、その世界のシステムが狂いませんか？」

「問題ありません。」

「戦いのある世界かもしれませんが、一つだけ能力をあなたに付与して送ります。欲しい能力があれば言ってください。」

「テンプレですね。」

欲しい能力・・・

色々あるが、使ってみたいのはあれかな。

「だったら聖剣伝説のポキールの真言をください。設定だけだったんでどんなものか興味があったんです。」

「わかりました。それでは送ります。」

「会うことはもうないでしょうが、その壊れた思考が治ることを願っています。」

壊れたって……失礼な。

そういえば……

「行く世界って、何処なんですか？」

「あなた方の漫画……でしたか？そのうちの一つの世界です。」

「どの漫画なんですか？」

「『ネギま』とやらです。」

え……？

「あの、できればそこは遠慮したいのですが……」

「問答無用。聞く耳持ちません。」

「それでは、さようなら。」

そう言われると、光に包まれ、私の意識は途切れた。

ブローグ：流されて・・・（後書き）

やっしまった。いろいろと、文句などあるでしょうが、生暖かく見
てくれるとうれしいです。

1話・崖っぷち(前書き)

駄文です。そして今回も原作キャラは出てきません。

1話：崖っぷち

こんにちは、二柱の神にネギまの世界に送られた緋乃宮昴です。
現在、ピンチです。

なんでかって？

それはですね・・・

「私を食べても、おいしくないですよおおおおおおお！……！！」
「？」

ガチイン！！！！

「キヤーー！！！！！！？」

絶賛、魔獣達に追い回されています！

どうして魔獣とわかるのかって！！？

頭が二つある獣だったり、数種類の動物が混ざり合ったような獣が
魔獣でなくてなんですか！？

しかも私を餌と見ているのか、食べようとしてきます！

なんでこうなったのでしょうか。

とりあえず、回想に入りま「ガチイン！！！！」キヤーー！！！！！！

〈回想〉

目を覚ますと、崖に立っていました。

「何故えええええ!!?!?」

動こうにも足場がほとんどありません。

背中は岸壁で、下がることもできません。

足元なんて論外です。一步踏み出せば奈落の底に真つ逆さま。

異世界に来てすぐに死ぬなんて笑えません。

どうしましょう・・・

「と、とりあえず心を落ち着かせて・・・」

まず深呼吸して落ち着かせ・・・無理です!

こんな場所で、しかもこんな状況で落ち着けるわけありません!!

そんな奴がいるとしたらよほどのバカか肝が太い奴だけです!!

「どうしましょう・・・」

落ち着いているとは言いつらい思考で考える。

道・・・なし

ロープ・・・なし

道具・・・なし(そもそもかばんも何もなし)

結論・・・手段、なし
いやまで、たしか私は力をもらったはず。

「・・・試して、みますか」

真言・・・言葉としたものが現実になる究極の呪文。その初使用がこんな状況だなんて。
しかし命にはかえられません。
目を閉じて集中し、発動させる。

「『私の隣には、下まで続く梯子がある』」

声に出すと同時に、自分の中の何かが脈打つ。
閉じていた目を開けて、自分の隣を見る。

「おお・・・」

そこには壁に同化するように梯子が存在していた。
しかもきちんと下まで続いているようだ。
本当に使えるとは。
か、感動です・・・！

「って、感動している場合じゃありませんでした。」

ともあれ、これでこんないつ落ちるかもしれない恐ろしい状況から抜け出せます。

慎重に動いて、梯子まで近寄りつかまる。

ふう・・・あとは手を滑らせないように注意しながら降りるだけ。

「死ぬかと思いました。」

ぼやきながら降りていく。

それにしても此処はどこなのでしょう？

10分近く降り続けているのに未だ底につきません。こんな場所地球にありましたっけ？

いえ、そもそも・・・

「此処は地球なのでしょう？」

少なくとも、私の記憶にある此処と似た景色はアメリカのグランドキャニオンとアフリカの大地溝帯の

み。ですがこここの土の質は見た感じグランドキャニオンのものとも、大地溝帯のものとも異なる。

となると、私の知らないところか「ネギま」の・・・。

・・・ん？
待て、私は何か忘れていないか？

「ネギま」・・・そう、「ネギま」だ。

私を送った神の言葉が正しければ、この世界は「ネギま」の世界。

たしかあれには現実世界の他にもう
一つ、世界がなかったか？
たしか名は・・・

「魔法世界、でしたか」

とすると・・・。

そんなことを考えていると、足にかたい感触が。やれやれ、ようやく底までつきましたか。
随分と高い崖でしたね。

とりあえず、此処では何もできませんし、町か村でも探しますか。
そう思いながら振り返り、そして・・・固まった。

「・・・・・・・・」

振り向いて目の前にいたのは・・・どう考えても現実にはいないような動物の数々。

しかも口から涎を垂らして、目をぎらつかせていらっしやいます。
こ、これはひょっとして・・・

「私を、餌と違ってらっしやる、とか？」

意識せずに声に出たそれに、反応したのか

グウオオオオオオオンン！！！！

大音量で吠えながら、私に襲いかかってきました。

〈回想・了〉

現在、私は『真言』で自身の身体と運動能力を強化して魔獣達から逃げています。

此処は何処なのかを思い返していて、気付いたことが一つ。
とても深い渓谷で、さらに大量の魔獣がいる。
原作でそんな場所は、たった一つだけ。

「よりもよって、ケルベラス渓谷ですか！」

なんでこんな所に送ったのでしょうか、あの二柱の神は！恨みますよ！！！！

つて、そんなこと考えている暇なんてない！少しでも距離を開けなければ死ぬ！！

「出口はどこですかああああああ！！！！？」

そう絶叫しながら、強化した身体能力で爆走する。
しかし、それでも開いた距離は3メートルほど。

その事実には、軽く絶望した。

2話：一難去って・・・

こんにちは、緋乃宮昂です。

なんとかケルベラス渓谷から脱出できました。

脱出した後しばらくたって、自分が真言を使ったという事を思い出し軽く落ちこんでいます。

もう少し早く思い出せていれば・・・！

「過ぎたことで悩んでも仕方ないですね・・・」

真言の実践もすみましたし（逃げていただけですが）、町か村を探しますか。

とは言え

「どつちに行きましょうか・・・」

辺り一面、見渡す限りの荒野。

草はまるで生えていませんし、木なんて影も形も見えません。

「真言で転移しますかね？」

そう思うが、人のいるところに転移して驚かれると警察とか呼ばれないでしょうか？

そうするとまた追いかけてまわされることに？

それは嫌です、もう二度とあんな目に遭いたくありません。

人と魔獣の違いはあっても追いかけるのはもう嫌です。

仕方ありません。

「適当に歩きますか。」

せっかくの異世界です。

どんなものに出会えるか、興味があります。魔獣はもう勘弁ですが。

とりあえず・・・

「北に向かってみますか。」

さあ、向かう方向が決まったら早速歩きましょう。

町に着かない可能性は極めて高いですが、運が良ければオアシスぐらいには着けるでしょう。

いざー！そう思い歩こうとして

「・・・北は、どっちでしょうか？」

まず、コンパスを作ることにした。

歩きはじめて約30分、結構な距離を進みましたが・・・

「景色がほとんど変わりませんね」

目に映る景色は相も変わらず荒野のみ。地形もさほど変わりませんし、動物にも会えません。

魔獣に遭わないのはいいのですが、姿さえ見えないというのは少し寂しいですね。

そんなことを思いながらも、足は止めずに歩き続ける。

荷物が無いので楽ですね。

しかし、疑問が浮かびます。

「何故、疲れがないのでしょうか？」

そう、疲れがないのだ。

さすがに30分程度歩いたぐらいで息切れするほど体力がないというわけではないが、その前にケルベラスで走っているのだ。

そんなに長い時間は走っていないが、それでも強化しての全力疾走。

その後少し休んだとはいえ、何かおかしい。

「まあ、体力切れがあまりないと考えればいいですか。」

逃げる時にすぐにバテなくて済みそうですし。いざとなったら真言で動きを止めてしまえばいいでしょう。

ケルベラスのような醜態はもうさらしません。

ですが色々心配なので

「真言の練習をしながら行きますか。」

身体能力の強化はもうできましたし、物を発生させることもできました。

あとは・・・

「補助系統ですかね。」

攻撃や防御もあるでしょうけれど、私は傷つけたりするのはあまり好きではありません。

強いて試すとすれば、防御系統と回復系統ですか。

まあ、防御は後でもいいでしょうし、補助からいきますか。

強化も補助系の気がしますが、まあ気にせずにいきましょう。

まずイメージをまとめて、

「『風が吹きます』」

そついった直後、吹き飛びました。

「う、迂闊でした。」

まさか台風レベルの風が吹くとは。

私としては、スピードを加速させるくらいのも、少し強い程度の風をイメージしたのですが。

「馴染んでいないということでしょうか？」

自らが望んだとはいえ、この力は貰い物。貰ったばかりで扱いこなせないのは自明の理。

おそらく身体強化のときにうまくできたのは、火事場の馬鹿力とか、そういうものでしょう

(必死で逃げましたし)。

このまま町に着いたら、何かの拍子にとんでもないことになるかもしれないしれません。

ならばやることは一つです。

「まずはこの力を完全に制御できるようになりませんか。」

時間をおけば馴染むでしょうが、完全に制御できるかはわかりません。

幸いにしてここは荒野。先の風も、既に止まっています。周りに迷惑をかけることは（おそらく）ないでしょう。

食事などの問題はありますが、そこは『しばらく食事をとる必要はない』と真言を使えばどうにかなるでしょう。

「しばらく」がどのくらいの期間になるか心配ですが。

町に行くのは後回しです。

此処の地形には悪いですが、私の力の制御のための犠牲になってもらいます！

そして二年の間、荒野に雪が降ったり、火柱が立ったり、雷が落ちたりすることになる。

偶然にもその光景を見た人々はこう語る。

「荒野の異常現象」だと。

（二年経過）

こんにちは、緋乃宮昴です。

制御のための訓練を始めて二年ほど経ちました。

最初のうちは自分の力で何度も死にかけました。焚き火を起こそうとして巨大な火柱を発生させて火だるまになったり、暑さをやわらげようと冷風を起こしたら辺り一面氷漬けになったり、水を飲もうとしたら弾丸のような勢いの雨が降ってきたり……。

認識の齟齬があるにしても大きすぎでしょう。

自分の力で死にけるって、笑い話にもなりませんよ。

まあ、そのおかげか体にも馴染み、完全に制御できるようになりましたが。

しかし、なぜでしょうか。全然うれしくありません。

何度も死にかけたからでしょうか？

「さて、それでは北に向かいますか。」

グルウル

「あ、乗せてくれるんですか？ありがとうございます。」

グオウ

そうそう、二年の間に友人？ができました。黒竜のノワールです。

どうやら荒野に来た時に私を発見、食べようと襲いかかろうとした瞬間に制御しきれない真言の直撃を受けたらしく、私が発見したときには瀕死の状態でした。

ほっておいてもよかったです、なぜかそんな気になれず治してしまいました。何度も死にかけておかげか治療・回復系の真言は制御できるようになっていましたから。

傷を癒して話をしようかと思いましたが、怯えられて、敵意がないことを説明するのに苦労しました。

懇切丁寧に説明した結果、なぜか懐かれてしまいました。なぜでしょう？

まあ、いいですね。

ちなみに名前はなかったようなので勝手につけさせてもらいました。たしかどこかの国の言葉で「黒」がノワールだったはずなので。

はいそこ、安直とか言わない！

いいじゃないですか、分かりやすく。ネーミングセンスないんで

すよ私。

「それではお願いしますね。方向は北で。」

ノワールの背に乗り、そう言う。

この二年のうちで、背に乗せてくれるまで気を許してくれました。

グルウオウ

任せろ、というようにノワールも唸ります。

人ではないですけど、連れがいるのはいいものですね。寂しさが紛れます。

ですが、人とも話してみたいと思う今日この頃。

これから向かう場所に人がいるといいんですけど……。

そう思いながら竜の背に乗り空を飛ぶ。

以外にも揺れは少なく、結構快適です。風が少々寒いですがそこはこれ。

「『風の冷たさを私は受けぬ』」

真言でシャットアウトします。いや、ほんと便利ですね。完全に制

御できているのでもう自爆じみたことは起きませんし、体にも馴染んでるので齟齬もなくなりました。

そう言えば、

「今まで気にもしませんでした。今はいつの時代なのでしょう？」

そう、今がいつ頃なのかを私は知りません。原作よりも前、ナギ達『紅き翼』の活躍した時代なのか。

原作、子供先生の『白き翼』達の時代なのか。

それとも未来、似非中国人のいた時代なのか。

既に私の中の原作に関する記憶は登場人物しか覚えていません。今がどの時代でも、そこで何があったのか、次に何が起こるのかも分かりません。

まあ、別にいいんですけどね。既に知っているものよりも、そのほうがいろいろと楽しめますし。

楽しむことは全力で楽しまなければ損でしょう？

「おや？」

前方に目を向けると、何かが見える。

あれは何でしょうか？

「『我が眼は千里先を見る』」

千里眼を発生させて見てみる。

あれは・・・都市？やけに塔が多いですね。

その都市の周りに多くの艦隊と、巨大な鬼のようなものが複数いる。

はて？あれはいったいなんでしょうか？

気になりますね。

「ノワール、あちらに向かってください。」

グオオオオオオウ！

あそこに何かあるのか、楽しみです。

2話：一難去って・・・（後書き）

次回、ようやくナギ達と邂逅します。

主人公設定（前書き）

現在の主人公の設定です。

これから変わるかもしれませんが。

12月30日、追加しました

主人公設定

名前：緋乃宮 昴 ひのみや すはる

性別：男

髪：黒 眼：紅

年齢：22

身長：175cm

趣味：料理、小物作り、遺跡巡り、龍笛

性格：温和で冷静。丁寧な言葉遣いで話す。

混乱することは基本的にはないが、突発的に起こることには弱い。

一度混乱すると落ち着くまで時間がかかる。

他人の意志などを肯定も否定もせず、ただ受け入れる。

（自分が嫌う事柄に関してはその限りではない）

礼節を重んじ、それを蔑ろにする人には説教する。

能力：真言

言葉とした事が全て現実のものとなる能力。

どのような規模で発生させるか、イメージする必要がある。

魔法のように詠唱して発動するものではなく、本人が言葉に力を込めて発動する

ために回避や防御が非常に困難（というよりまず不可能）。

あらゆることを現実にするが、死者蘇生や時間跳躍は基本的

に不可能。

武具：龍笛・黒竜

パートナーである黒竜、ノワールの鱗と角を使い作り上げられた昴専用の漆黒の

横笛。

黒竜の素材でできているため、物理・魔法防御力が高い。

昴自信が手を加えており、イメージを乗せて奏でること
でイメージ通りの現象を引き起こす。

き起こす。

通常の楽器としても使用可能。

基本的に昴以外が奏でることは不可能。

奏でると空間を超えてノワールを呼び出すことが可能。

3話・紅き翼（前書き）

グダグダですが、それでも良ければ読んでやって下さい。

3話：紅き翼

Side：昴

都市からそう遠くない場所でノワールに滞空してもらい、状況を確認して戦っていることを理解する。

「どっしりしましょうか。」

考える。

戦闘に介入するか否か。

ようやく都市を見つけたと思ったらそこは戦場で、しかもどう考えても過剰戦力で攻め入られている。

時々鬼のようなものに光が奔ったり、鯨のような戦艦が火を吹きながら落下していくのが見えるが都市の劣勢は明らか。しかもよく見れば人が飛んで光線のようなものを打ち出しています。

このまま行けば、落とされるのも時間の問題でしょう。

ここはスルーして別の街を探したほうがいいでしょうか？

しかし人恋しいのも事実。この世界に来て二年、未だ誰とも話せていません。いい加減誰かと話がしたいとも思っています。

ですが戦場に入りたいとは思いません。自分の身を守るためなら戦いますが、傷つけるのも、傷つけられるのも私は好きになれません。そう考えていると、周りに存在する戦艦からビームのようなものが中央の塔に向けて打ち出されます。

ああ・・・これで終わりましたかね。

そう思い、別の場所に向かうようノワールに伝えようとしますが、打ち出された光線が突如消え失せました。

「・・・は？」

間抜けな声が出る。

ですが、それと同時に興味も湧きあがってきます。

見つめるのは中央塔。

「あそこに何かあるのでしょうか？」

知りたい。何をどうすればあの光線を消せるのか。

再び塔を見れば、巨鬼（もうこれでいいですね）が手を伸ばしている。物理的に壊すつもりですか。

戦闘には加わりたくありませんが、今を逃せば知ることができなくなるような気がします。

だったら

「『如何なるモノも我らを傷つけることあたわず。』」

真言で守りながら向かえばいい。そう思い絶対防御の言葉を紡ぐ。

これで何も私たちを傷つけることはできません。

大勢で来たら動きを止めてしまえばいいですし。

「ノワール、中央の塔に向かってください。それと、攻撃したら駄目ですよ？」

グルウオウ

多少不満そうながらも、了承の返事をしながら中央塔に向かってくれます。

しかし

「何か忘れている気がするんですね。」

一体何を忘れていたのでしょうか？

「まあ、着けば分かりますよね。たぶん。」

そう思いながら空を飛ぶ。

ふと巨鬼を見てみると、何か、光に吹き飛ばされていました。

あれは・・・人？

Side：紅き翼・ナギ

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。後は俺に任せときな。」

そう言っただけに出る。いくら国を守るためだったってガキを、しかも女の子を使うこたねえだろ。

つたく、気に入らねえぜ。

つと、そっぴや挨拶がまだだったな。俺は・・・

「お・・・お前は、『紅き翼』・・・『千の呪文』の・・・」

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンド

マスター！！！！」

そして『紅き翼』のリーダーだぜ！

「自分で言ったよ、コイツ。」

「フフ、ノリノリですね。」

詠春とアルがなんか言ってるが気にしねー！

それよりも

「えーと、『百重千重と重なりて、走れよ稻妻』」

アンチヨコを見ながら詠唱する。

カッコワリーとか言うな！呪文覚えんの苦手なんだよ！！魔法学校
中退なめんな！！

「行くぜオラアッ！！『千の雷』！！！！」

前にいる鬼神兵達を殲滅する。

他の奴らも詠春とアルの手で倒されていく。こりゃすぐに終わらせられるな。

「安心しな、俺達が全て終わらせてやる。」

「なっ！敵の数を見たのか！？あの数を相手にお前たちに何が・・・

「うっせーよ、俺を誰だと思ってんだジジイ。」

「ジツ！？」

なんか唸ってるが気にしねー。それよりこれ言うのが先だ。

大体雑魚ばかりじゃねーか。

「俺は、最強の魔法使いだ。魔法学校だきゃ中退だかな。」

「なっ！？」

「あんちよこ見ながら呪文を唱えるあなたが言っても説得力がありませんね、今ひとつ。」

「あーあーるせーよ。」

アルが茶々を入れてくる。だから中退だっつってんだろ。

いちいち茶々入れてくんな。

「それに、いかにあなたの力が強大であろうと、個人で世界を変えることなど到底……」

「るせーっつのアル。俺は俺のやりたいようにやってるだけだバ―カ。」

そう、俺は俺の気の向くままにやってるだけ。世界がどーだのは知ったこっちゃねー。

今回の戦いも気に入らねえから介入しただけだしな。

ん？

なんか視線を感じるな。誰だ？

そう思って見てみると、一人の女の子が俺を見ていた。

「よう嬢ちゃん、名前は？」

「ナ……マエ……？」

口から流してた血を拭ってやる。さて、どんな名前だ？

「アスナ・・・アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオ
フュシア。」

「なげーなオイ」

うん、ほんとになげー。最初のヤツ以外覚え切れる自信ねーぞ？

「けど良い名前だな。アスナか。」

名前も聞いたし、行くか！

「よし、アスナ、ちょっと待ってな。」

すぐ終わらせてやるからよ。

「行くぞ、アル！詠春！敵は雑魚ばかりだ、行動不能で十分だぜ！」

「はいはい。」

「やれやれだな。雑魚と言っても数は洒落にならんぞ？」

うっせーぞ詠春！うだうだ言ってねーでさっさと行くぞ！

そう思つて戦場に出ようとしたときだった。

「お取り込み中、失礼します。その少女は何者ですか？何故、血を流し、鎖に繋がれているのです？」

黒竜に乗ったそいつが、俺達の前にあられたのは。

Side: 昴

私の登場に驚いたのか、尋ねた三人が身構えます。もう少し登場方法を考えるべきでしたかね。

かといつて戦いが終わるのを待つていては、先の現象を起こした存在を知ることができない可能性が高いです。っと、いけませんね。好奇心が行き過ぎると他が置き去りになってしまいます。

いずれこの性格は矯正しますか。できるかは分かりませんが。

「き、貴様！何者だ！帝国の人間か！？」

此処の作業員らしい、ローブに身を包んだ男性？が聞いてきました。というか、四人以外にいたんですね。影が薄くて気がつきませんでした。

それよりも、帝国？何のことでしょうか？

現在の状況を鑑みるに、帝国とはこの都市を攻めているあの巨鬼や戦艦のことを言っているようですが。

「てめえ、何者だ！いったい何時此処に来やがった!？」

赤毛の少年がそう聞いてきます。それにしても、口が悪いですね。礼儀がなくなっていませんよ。

おっと、礼儀と言えば

「自己紹介がまだでしたね。私は昴、緋乃宮 昴と申します。先の方線の消失が気になり、此処に来ました。ちなみに此方は友人？のノワールです。」

グオウ

よろしく、とでもいつかのよつに喰ります。

「あ、どうもじ丁寧になって、そうじゃねえよ！」

赤毛の少年がノリツッコミ？をしています。何をしているんでしょう

うか。

それよりも

「此方は名乗ったのですから、そちらの名も教えてほしいのですけど?」

「む……青山詠春という。」

「私はアルビレオ・イマです。」

「俺はナギ・スプリングフィールド。最強の魔法使いだ!」

……えーと

「自分で最強とか言ってる、恥ずかしくないですか?」

「んなっ!」

「あーあ、やっぱり言われたな。」

どうやら他の人（少なくとも詠春と名乗った人）はあの言動に多少なりとも呆れているらしい。

まあ、普通は呆れますよね。私も若干呆れています。

「てめえ、ケンカ売ってんのか！？勝負しろこの野郎！！」

何故いきなりケンカだの勝負だのとなるのでしょうか。あれですか？俗に言う、口より先に手が出るとか、脳筋とか、そういうタイプの人間でしょうか。

それにしても、ナギに詠春、アルビレオですか。しかも見た感じかなり若い（一名ほどまるで変わらないだろう人がいますけど）。

とすると・・・

「大戦期・・・ですか。」

「あん？何言ってるんだ？」

「此方の話です。それよりも、その少女は誰ですか？何故鎖で繋がれているのです？」

そこがひどく気になる。こんな十歳になるかならないかの少女を繋いで、一体何をしていたのか。

まさか、非人道的なことでもしていたのだろうか？

「彼女は『黄昏の姫巫女』と言いまして、先ほどまで此処で防御結界を展開していました。」

アルビレオ・イマがそう言う。

なるほど、黄昏の姫巫女ですか。原作の記憶はもうほとんどありませんが、たしか『完全魔法無効化能力』とやらをもっていましたね。とすると先の現象はそれを使った防御結界？口に血の跡が付いているのは、その防御結界とやらの負担が大きすぎるから？

気に入りませんね。実に気に入りません。このような幼子の命を削ってまでして勝ちたい、もしくは護りたいのですか。

周りを見ればやや警戒している様子。どうやら不機嫌さが顔に出ていたようです。深呼吸をして、荒立った心を落ち着かせる。・・・よし、落ち着きました。

繋がれている少女を見て、彼女に近づきます。

「おい、何する気だ!？」

ナギがそう聞いてくる。

「癒すのですよ、彼女を。外見は無傷でも、身体の中はぼろぼろのようなので。」

外傷は見えないが、内臓もしくは血管が傷ついている可能性があるあり

ます。でなければ、切ってもいないのに口から血が流れるものですか。

そんなことを思っているうちに彼女のもとに着きました。無感動な目で私を見上げています。どうやら感情も抑えられているようですね。本当に気に入りません。ですが、申し訳ありませんが今回は身体の治療だけで我慢してくださいね。後ろでギヤーギヤーうるさいのは無視しましょう。

しゃがんで視線を合わせ、尋ねる。

「今晚は、私は緋乃宮昴と申します。あなたの名前はなんですか？」

「スバ・ル……？」

「はい、スバルです。あなたは？」

「アス、ナ。アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ
ユシア。」

な、長いですね。一度で覚えられるでしょうか。まあ、がんばりましょうかね。

「あなたの体を癒します。がんばりましたね。」

そう言って頭をなでる。む、以外にさわり心地がいいですね。

「ナオ、ス？」

「はい。といつてもすでに『癒えている』のですがね。」

さて、治療も終わりましたし、戦艦の動きでも止めてきますか。

「貴様、何をした!？」

作業員らしきローブが聞いてくる。うるさいですね。

「癒しただけですよ。聞こえていなかったのですか？」

「そんなこと信じられるか! いったい何が目的だ!！」

本当にうるさいですね。礼儀もなっていないませんし。

「少し『黙って』ください。ついでに『止まって』いてもらえますか?」

真言を発動する。結果は当然

「っ!・・・!?!?・・・っ!!!」

喋れず、そして動けない。

「事が済んだら戻してあげます。邪魔しないでくださいね。」

したくてもできないでしょうけど。あ、呼吸はできるよう調整したので安心してください。

S i d e o u t

S i d e : ア ル ビ レ オ

何が起こったのでしょうか。

作業員の彼がスバルと名乗った人に何かを言われたと思ったら、急に動かなくなりました。

それに喋れないようです。

停止と沈黙の魔法でも使ったのでしょうか?しかし魔力の動きは一切ありませんでしたし、どういうことでしょうか?

様々なことを見てきましたが、このようなことは初めて目にします。

実に興味深いですね。

「なあ、あんた。」

そうこう考えていると、ナギが彼に尋ねます。何を言いつつもりでしようか？

「何でしょうか？」

「紅き翼にはいらねーか？」

「は？」

は？

S i d e o u t

S i d e : 昴

突然のことに思考が止まってしまい、間抜けな声も出てしまいました。

いきなりなんなのですか、この少年は。何故そんなことを言つのでしょうか？

こう言うっては何ですが、私のような得体のしれない存在にかけるとは、葉ではないでしょう。

何を考え・・・何も考えてなさそうですね、この顔は。

「どついでいじことですか？」

「どつてもどつても、あんたがいたら面白そうだから言うてんだが。」

「面白そうって・・・」

顔が引き攣ります。面白そうだからと、そんな理由で初対面の人間を誘うとは。

前の世界でも見たことないですよ、そんな人は。

ですが、これはいろいろと渡りに船では？人とも話せますし、何より私はこの世界の地理と情勢を知りません。それらの情報を得るためにも、ここは申し出を受けたほうがいいでしょうか。

それに、この人達と居れば退屈せずに済みそうですし。決めました。

「分かりました。ですが、この戦いが終わってからでいいですか？」

「おう！これからよろしくな！」

「いえ、ですから。」

終わってからだと言ったでしょうに。あ、詠春が頭を抱えています。いろいろ文句言っていましたもんね。聞こえませんでしたし、ナギにもスルーされていましたけど。

こう言うては何ですが、不憫ですね。そのうち禿げるんじゃないでしょうか。

真言で禿げないようにしたほうがいいですかね？

S i d e o u t

S i d e : アスナ

ワタシノマエニキテ、ナマエヲキイテキタフタリ。

ヒトリハバカツポクテ、モウヒトリハヘンナヒトダッタ。

イママデソンナヒトハ、ダレモイナカッタカラ。

ダケド

アタマヲナデテクレタテハ、アタタカカッタ。

3話・紅き翼（後書き）

主人公、紅き翼に参入しました。

4話：バカ襲来（前書き）

グダグダですが、それでもよかったら読んでやってください

主人公が今回切れます。

4話：バカ襲来

ヘラス帝国・辺境

とある喫茶店。そこで二人の男が何かを話し合っている。

一人は帽子を目深にかぶり、黒のスーツで身を包んでいる、ぱっと見かなり怪しい男。

もう一人は額に鉢巻きを巻いた、筋骨隆々とした大男。

黒服の男が写真をテーブルに広げ、大男に言う。

「対象は、この4人の男。それに、この少年だ」

「何だ、ガキじゃねえか」

「子供と思って油断していると、痛い目を見るぞ。オスティア回復作戦の失敗の主因はこいつらだからな。精鋭で構成された討伐隊も送ったが、悉く返り討ちだ」

苦々しげに黒服の男が言う。写真の人物達を相当に嫌っているようだ。

「望むなら部下も付けよう。もつとも、正規兵ではなく、傭兵や賞金首に「いらねえよ。」「・・・なんだと？」

話している途中で切られたのが気に障ったのか、若干不機嫌気味に聞いたでした。

しかし、大男はそれに怯まずに言い放つ。

「俺一人で十分だ。任せときな」

その声には絶対の自信が込められていた。

S i d e : 昴

こんにちは、緋乃宮昴です。

私が『紅き翼』に参入してからそこそこ時間が経ちました。

あの後、いろいろと話し合いました。情報の共有とも言えますね。おかげでこの世界の情勢も知ることができました。

現在、この魔法世界は南に位置する『ヘラス帝国』と、それに敵対する北の『メセンブリーナ連合』とやらの戦争の最中だそうです。そして私達が出会ったあの都市は、オスティアと呼ばれる、ウエスペルタティア王国とやらの首都だったみたいです。

彼等がどういった存在なのかもわかりました。どうやらNGO団体『悠久の風』に属し、『メセンブリーナ連合』に味方して、世界中を回っているらしいです。

退屈しないだろうと思っていましたが、当たりでしたね。

あの戦いの後、私の力のことも聞かれました（主にアルビレオに）。聞けば魔力や気が一切動いていないのに現象が発動したとか。それでどういう原理か気になったらしいです。

まあ、それは気になって当然ですよ。魔力も気も使わずに現象を引き起こすのですから。

ですので私の力についても説明しました。さすがに全部を説明したわけではありませんが、どういう能力なのかは言いました。

能力の名前が『真言』だと言ったときに、詠春に「密教系か？」と聞かれましたが否定しました。

宗教系能力ではありませんから。

それを言い、言葉のみで現象を引き起こす能力だと説明したら大層驚かれました。どうやってたら習得できるのかも聞かれましたが、私以外には使えないだろうことを伝えたらひどく残念そうな顔をしました。何をするつもりだったのでしょうか。

仲間も一人増えました。

ゼクトという、白髪の子供ですが実年齢はなんと数百歳らしいです。なんでも魔法の実験中に術式が暴走、失敗し気がつけば不老長寿に

なっていたのだとか。

ナギの師匠でもあるらしく、よく「馬鹿弟子」と言っています。

私も魔法を習ってみようかとその旨を伝えたのですが、「魔力が魔法に使えるほどない」と言われてしまいました。ショックです。

その後どんなことができるのかと聞かれ、説明したら

「チートじゃの」

と言われてしまいました。

いえ、分かってはいましたが面と向かって言われると嬉しくありません。

詠春にも気のことを聞きましたが

「真言だけで充分だろう」

と言われ、断られました。

おのれ。何故そんなことを言うのですか。禿げにしますよ!?!? このムツツリめ!!

まあ、そんなことがいろいろあって現在

「んっふっふ、これが旧世界は日本のなべ料理ってやつか」

森の中で鍋をつついています。昼ですが、鍋です。私としては冬の寒い夜につつくほうが好きなのですが、楽しいですし美味しいので問題ありません。

ですが・・・

「んじゃ、早速肉を」

「あっ！ ナギおまつ、なに先に肉を入れてんだよ！！」

「トカゲ肉でも旨いのかのう」

詠春が注意しますが、ナギが好きなものを入れていくので順序がバラバラです。先に野菜を入れたほうがいいんですけどね。火が通るのに時間がかかりますし。

あとゼクト、美味しいかもしれませんが生臭くないですか？ とうかどこから持ってきたんですか、そんなもの。

「いいじゃねえか、うまいもんから先だよ！ ホラホラ！！」

「バツ、バカ！ 火の通る時間差というものがあってだな！ まず

は野菜を入れて・・・」

「あーうっせ！ うっせーぞえーしゅん！！」

「あーっ！ ちよっ！」

ナギがどんと肉を入れていきます。詠春が文句を言いますが聞きやしません。詠春も、いい加減に諦めて具材を入れたらいいのに・・・。

私ですか？ 私は自分で野菜や豆腐を入れていきますよ？

静かに、さりげなく、気付かれないようにですが。肉もいいですけど、私は野菜のほうが好きですから。胃にもたれるんですよ、肉って。あ、この白菜もいいですね。いただきますっ。

「ふふ・・・知っていますよ詠春。日本では貴方のような者を、『鍋將軍』と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン！？」

「っ、強そうじゃな」

アルがそう言います。ですが違いますね。

「將軍」ではなく「奉行」ですよ。鍋奉行。あ、ナギとゼクトが真に受けています。

「わかったよ、詠春。俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「すべて任す。好きにするが良い」

「鍋奉行じゃ？ んー、うれしくないな」

諦めなさい詠春。こうなったら訂正なんて不可能です。それより、シラタキ入りますよっと。

「おお？ なんじゃこのソース、うまいぞ」

「ほんとだうめえっ！」

「これこそが日本の誇る醤油だよ」

「それと大根おろしですね」

「これが醤油か！ すげーうめー！」

「ナギ、お前は前に日本に来た時に寿司食っただろ」

ナギ、あなた寿司食べたときに何もつけずに食べたんですか？ というか意外ですね。アルが大根おろしを知っているとは。っと、この豆腐も煮えていますね。

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

姫子ちゃん？

「姫子・・・？ ああ、オスティアの姫巫女のことじゃな」

「まあ、戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやもしれませ
ん」

ああ、アスナちゃんのことですか。

「そうですね。戦争が終わったら、彼女を連れてどこかに食べに行
きましようか？」

そう提案する。あの少女に、食の楽しさを教えてあげたいですね。

「お？ いいなそれ！ だったらさっさと終わらせて食いにいくつ
ぜ！」

ナギが賛同します。ほかのメンバーも笑みを浮かべながら頷いてい
ます。

「その戦だが、やはりどうにも不自然に思えてならん」

詠春が水を差してきました。不自然ですか。

「なにが？」

「なにもかもだよ。お前が言いだしたんだろうが、鳥頭。あと肉ばつか食うな、野菜食え野菜」

ナギ、あなたはもう少し頭の回転を鍛えなさい。自分で言い出したことを忘れてどうするのですか。葱がいい味出していますね、美味しいです。

そんな風に和気藹々と食事をとっていましたが、いきなり剣が飛んできました。

そして、鍋は吹き飛び、詠春にかかります。

ナギ、ゼクト、アルは回避して空中に投げだされた具材（肉のみ）を器用にとって食べていきます。ですが、今の私にとってそんなことは至極どうでもいいことです。

と、豆腐が・・・白菜が。入れたばかりのシラタキと葱が・・・取ろうと思っていたシイタケと水菜が・・・もう少して煮えたキノコたちが・・・

おのれ！　どこの誰ですか！　私の野菜たちを吹き飛ばした輩は！！

そう思い周囲を見渡しますが、何処にもいません。何処ですか！！
すると

「食事中失礼〜ッ！ 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

そんな声が崖の上から聞こえました。

「なんじゃ、あのバカは？」

「帝国のって訳じゃなさそーだな」

ナギとゼクトがそんなことを言っています。食べながら話さないように。行儀が悪いですよ。

それよりも

「えいしゅムオツ!？」

「フ、フフ・・・フフフフフ・・・」

詠春が不気味に笑っています。ですがそれすら今の私にはどうでも

いい。

そうですか・・・あの男が私の野菜を・・・

「フフ・・・食べ物を粗末にする奴は・・・」

「どーしたー！ こねーのかー！？ 来ねーならこっちから・・・」

「斬る」

男の剣を、詠春の刀が斬り飛ばしました。速いですね。

そして連続で斬りつけます。ですが

「お？ 詠春の攻撃凌いでるぜ、アイツ」

「あの男、やりますよ。見たことがあります」

アルがそう言う。何処で見たのでしょうか？

「ちょっと前に、南で話題になった剣闘士ですよ」

剣闘士ですか？

「ちよっ、タンマタンマ。マジで強えなあんだ！　チヨイ待たね？」

「ふざけるな貴様！　やる気なら本気を出せ！」

「そーかい。だがあんた達の情報はリサーチ済みだぜ！」

そういつてカプセルのようなものを複数取り出しました。なんでしようか、あれは。

それを男が投げると・・・って！

「なっ！？」

「情報その1。生真面目剣士はお色気に弱い」

カプセルから全裸の女性が4人出てきました。体の周りに火や水が浮いているので人間ではなく精霊種のようなようですが、なんというものを持っているのですかあの男は！！　は、破廉恥な！！

「くっ、なんのこれしき！　心頭滅却すれば火もまた　」

目をつむって心を落ち着かせようとしていますがつて、馬鹿ですかあなたは！　敵を前にして目を閉じるなど・・・！

注意しようとした途端、水を周りに浮かせた少女がタヌキの置物を詠春の頭に落としました。

あれは痛いですね。詠春、気絶してしまいました。しかし、何故タヌキ……？

「ほい、一丁上がり」

男がそう言います。ならば次は私が！ 吹き飛ばされた野菜たちの恨み、今こそ！

しかし私が行こうとすると、男に雷が落ちました。回避されましたが。

「お、出たな。情報その5、赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴、無敵」

ナギですか。というか、なんですか。特徴は無敵って。

「何を言っているのですか。弱点ならありますよ？ 頭とか、頭とか、頭とか……」

「うつせーぞ昂！ 呪文覚えんの苦手なんだっつーのー!!」

言われるのが嫌なら頭を鍛えなさい。アンチヨコ見ながら詠唱なんて、情けなさすぎです。

「んなことよりも、手え出すなよ、てめえら。俺がやる」

ナギがそう言います。なんだか嬉しそうですね。なんですか、あなた戦闘狂ですか？

「言われずとも」

「馬鹿の相手は馬鹿に任せるのが一番じゃ。昴も落ち着かんか」

ゼクトがそう言ってきます。しかし

「私は野菜の恨みを・・・」

「なら、あの殴り合いが終わってからやればよかるっ？」

なるほど、それもそうですね。というか、殴り合っの速すぎですよ。何時の間にあんな遠くまで行ったんですか。まあ、いいでしょう。今から復讐プランを立てておきますか。

どうしてくれましょうか、あの男。フッフ・・・

S i d e o u t

S i d e : ラカン

赤毛のガキと殴り合う。いや、ほんと強えのな。

この俺と互角な奴なんざそうそういねえってのに。だが楽しいねえ。南で無敵と滅法噂のこの俺と殴り合えるなんてな、ちーつとばかり侮ってたぜ。

「へっ」

うおっ、増えやがった！ ニンジャかよ！

「多いな、オイ！ えーと・・・」

どうするか考える。が、

「めんどいー！」

まとめてブツ飛ばす！

「っか、この！ 『百重千重と重なりて・・・』」

詠唱！ 大呪文か！ だが

「アンチヨコ見ながらとは、ホントに頭ワリ んだな！」

「うっせーよ！ 『千の雷』！！」

「『気合い防御』！！」

楽しいねえ！

（13時間経過）

「フ、フフ・・・やるじゃねえか、小僧」

この俺と此処まで張り合えるたーな、驚いたぜ。

「へっ、あんたこそな」

そう言ってくる。が、

「いや、4対1で挑んでおいてこの様じゃあ、俺の完敗か」

互いに満身創痍だが、コイツの他にもあと3人いるからな。

「俺は・・・俺に並ぶ人間が居たってだけで満足だぜ」

「コラ、てめえ、ナギ・スプリングフィールド！ リベンジすんぞ！
必ず決着、つけてやる・・・ぜえ！！」

「おおー、何時でもこいや！ 筋肉・・・ダルマあ！ 戦争やってる
より、気が晴れらあ！！」

俺もだぜ！ だが、次はぜってに俺が勝つ！

そう意気込んでいると

「終わりましたか？ なら次は私の番ですね」

そんな声が聞こえた。

みると額に青筋をいくつも浮かべて微笑んでいる、情報その4の男が、何やらどす黒いオーラを纏って立っついていらっしやった。

マジかよおい！　ここで俺にとどめをさす気か！？　つーか恐えよオイ！！　景色が歪んで見えるぞ！？

「お・・・オイ昂！？　とどめさすことねーだろ！？」

「何を勘違いしているのですか。別に殺すつもりなんてありませんよ」

「そ、そうなのか？」

「そうですよ」

こゝ、殺すつもりはねーのか。助か「ですが」った？

「肉体的に責めはしませんが、精神的に苦しんでもらいます」

精神的だと！？　なにするつもりだコイツ！？

「ちなみにナギ、あなたにも受けてもらいます。文句は聞きますが拒否は受け付けませんのであしからず。」

「俺もかよ！？　なんでだよ！！」

「いえ、あなたはどうも普段から落ち着きが足りないと思ひまして、
ですからついでに礼儀を叩き込もうかと思ひまして」

「ついでかよ！ つーか礼儀！？ やめてくれよ、そんな堅苦しい
モン叩き込むの！！ 俺がやっても似合わねーだろ！！ そいつだ
けにしてくれよ！！」

なんだとう！？ 礼儀なんて俺にも似合わねーに決まってるだろ！
！ テメ の方こそ受けやがれ！！

「問答無用です。さあ行きますよ」

「「「や、やめろおおおおおおお……！！」」」

4話：バカ襲来（後書き）

主人公、切れる。

ナギとラカンは真言で動けないようにして18時間延々と礼儀について説教されました。

5話・グレート・ブリッジ(前書き)

グダグダですが、よかったら読んでやってください。

5話：グレート・ブリッジ

Side：昴

こんにちは、昴です。

あの鍋事件から早数週間、私達『紅き翼』の周りはいたって静か？
です。

まあ、あの後何日か筋肉だるま　ラカンに付きまとわれ、ナギが
戦っていたりしたのですけどね。

あの二人、ぶつかり合うたびに周りの環境や地形を破壊してくれま
すから、後処理が大変です。

具体的には、破壊された地形の修復とか、破壊した二人への説教と
か。ゼクトとアルは我関せずで見ただけですし、詠春はいろい
ろと諦めた感じでした。

で、そんなことがあって現在

「あつ！　テメエ、ジャック！　その肉俺のだぞ！！」

「何言ってるんだ、早いもん勝ちだろ！　取られる方がわりーんだよ
！」

「んだと、テメエ！　ならこいつは貰ったぜ！！」

「あーっ！ テメエ、そいつは俺が焼いてたやつじゃねえか！！
返しやがれ！！」

「あーん？ 何言ってるんだ、取られる方がわりーんだろー？」

「こ、このヤロ！ ならコイツは貰ったあー！！」

「あーっ！ テメ、そいつは俺の取って置き！！ 返せやコラア！！
」

「オゴツ！ テメ、何しやがる！ オラア！！」

焼肉を食べています。鍋の時と似たシチュエーションですが、気に
しません。

何時の間にやらジャックが仲間になっていますが、気にしません。
気にしたら負けです。負けなんです、いろいろと。

というか、食事中に殴り合わないでください。迷惑ですから。

「あの二人は相変わらずですね」

「馬鹿ばかりじゃな」

「はあ……」

アル、あなた楽しんでいるでしょう。絶対に楽しんでいるでしょう

!?

ゼクトも、止めてください。せめてナギだけでも！師匠でしょうあなた！

詠春は・・・苦労していそうですね。これで止めるように言うのは少し、酷でしょうか？先ほどから溜息ばかりついていますし。

はあ・・・私もいろいろと諦めてしまいましたでしょうか？

グルウ

ああ、慰めてくれるのですか、ノワール。ありがとうございます。その気持ちだけでもうれしいですよ、私は。

「おらあああああ！！！」

「つりゃあああああ！！！」

「「「あ・・・」」」

「あだあ！？」

いきなり頭に衝撃が！！ なんですか！？ 何が起きたのですか！？
？ また礼儀知らずが襲ってきましたか！？ って、これは・・・
石？

「ヤベツ、逃げるぞジャック！ 決着はまた今度だ！！ あの説教はもう二度と聞きたくないぜ！？」

「そりゃ俺も同じだ！ よし逃げるぞ！！」

・・・そうですか。またですか。またあの二人なのですか。

毎回毎回食事のたびにぶつかり合って、私に迷惑を掛けて楽しんでいるのですね？ そうなのですか？

「フフ・・・フフフフ・・・」

「おや、昴もスイッチが入ったようですね」

「馬鹿弟子もじゃが、コヤツも変わらんのか」

「あの二人もですな。逃げたところで、余計に説教がひどくなるだけなのに」

周りが何か言っていますが気にしません。そんなことよりも

「テメツ！ コツチ来んな！ 向こう行け、俺がコツチ行くから！！」

「そっちの方が逃げやすいじゃねえか！ 俺が行くからお前がコツチ行け！！」

「何だとコラ!? やるか!?!」

「上等だコラ! ブツ飛ばしてやるよ!」

なにやら仲間割れをしていますが、二人とも

「逃がすと、お思いですか?」

「「あ」「

二人の手首をつかんで捕えます。さらに真言で動けないようにして・

「さあ、楽しい楽しい説教のお時間ですよ。良かったですねー今回は特別にどのコースか選ばせて差し上げましょう」

「こ、コース!?!」

「なんだコースって!?!」

「コースはコースです。ですから選んでください。厳しいコースがいいですか? それとも、燃え尽きるほど厳しいコースがいいですか? それとも神すら燃え尽きるほど厳しいコースがいいですか?」

「まで! なんだその選択肢!?! 3つとも厳しいヤツじゃねーか

「!!」

「つーかなんだ!?! 最後の神すら燃え尽きるほどって!!」

ナギとジャックがそう叫びます。厳しいのは当然です。あなた達に普通の説教なんて無意味でしょうから。優しい説教なんて、私がすると思いますか?

だとしたら甘すぎです。水飴に蜂蜜を掛けて食べるよりなお甘いです。

「そうですか。『神すら燃え尽きるほど厳しいコース』がご希望ですか」

「なあっ!?!」

「まで! まだ答えてねーよ!! 訂正!! 訂正を!!」

「却下します。それに、ジャックが聞いたのでしょうか。『神すら燃え尽きるほど』とはなにか、と。特別に教えてあげます。さて、それでは行きますよ? 燃え尽きる覚悟は十分ですか?」

「や、ヤメロオオオオオ!!」

「アル! 詠春! お師匠!! 助けてくれええええ!!」

二人を引きずって行くこうとすると、助けを求めています。往生際が

悪いですね。説教の量を増やしましょうか？

「頑張ってくださいね、二人とも」

「いい機会じゃ。修行と思って耐えてこい馬鹿弟子」

「今度からは暴れないで、逃げないようにな」

「は、薄情者　　！！！！」

見捨てられたようです。それでは行きましょうか。

（50時間後）

説教が終わって、他のメンバーのところに戻ってきました。どうやら説教していたときに食事は終わらせた模様です。

え？ 二人ですか？ 二人なら

「・・・・・・・・」

このように、真っ白に燃え尽きています。

某ボクシング漫画の主人公もビックリの白さです。

何か、口から魂のようなものが抜けかけているようですが大丈夫でしょう。

「ああ、終わったのですか」

アルが話しかけてきました。手に何か持っていますね。手紙でしょうか？

「何かあったのですか？」

「あったと言えば、あったんじゃないかの」

ゼクトが歯切れ悪く答える。どうしたのでしょうか。

「グレート・ブリッジが落とされたらしい」

「は？」

なんですって？ グレート・ブリッジが落とされた？

「どうやってですか？ あの要塞がそう簡単に落とされるとは、到底思えないのですが」

「大規模転移魔法で大軍を送られたらしい。いきなり大量に出てきたから、指揮系統も混乱したんだろう。そこを突かれたみたいだ」

「では、アルの持っているその手紙は」

「はい、連合からです。」

『前線に復帰し、グレート・ブリッジを取り戻せ』との命令書です」

「難攻不落のあの砦をですか。無茶を言ってくれますね」

「それだけ期待されているということじゃろう」

期待されるのはいいのですがね。仕方ありませんか。

「まずは二人を起こしましょうか」

燃え尽きて倒れていますし。このままでは、戦力になりませんからね。

S i d e o u t

S i d e : とある連合兵

現在、俺達は帝国に奪われたグレート・ブリッジを奪還する作戦を行っている。

奪われたとはいえ、もとは連合のもの。俺達しか知らない抜け道なども当然、存在する。

だが・・・

「敵対すると、此処までやりづらい相手とは!!」

そう、やりづらいのだ。それもこの上ないほどに!

守りはとんでもなく堅いし、水の上にあるから狙い撃ちされる。

自分達がどれだけあの防御能力の上に胡坐をかいていたか、よくわかる。

こんな形で分かりたくはなかったがな!

「どつにかならんか」

誰でもいい。あれを落としてくれ。俺たちでは到底無理だ。

そう思いながら空を見上げると、何かが飛んでいた。

夜の闇で見にくいが、あれは……

「黒竜？」

よく見れば周りにも数人飛んでいるのが分かる。飛んでいる人数は5人と黒竜が1体。よく見れば黒竜の背にも一人乗っているようだ。

まさか

「紅き翼か！」

連合最強の奴らが来た！ これで何とかなるだろう。だがあいつらだけに任せるつもりはない。

「隙について、中に入るか」

そして抜け道を通り、指令室を落とす。そうすれば、俺達の勝ちだ！

S i d e o u t

S i d e : ナギ

昴の説教から立ち直って飛び続けて、ようやくグレート・ブリッジまで来たぜ。

つたく、呼び戻すんなら辺境なんかには飛ばすなっつーの。おかげで散々な目に遭ったぜ。

具体的には昴の説教、説教、説教・・・

や、やめろ！ 思い出すな！！ あれを思い出したらヤバイ！！

そんなことより、今は目の前だ！

「つたく、ごちゃごちゃとっざつてーな」

「せつかく手に入れた要塞ですからね。取り返されたくないんでし
よう」

「空も戦艦が守っているな」

「連合は気が緩みすぎですね。自分の喉元に食いつかれるとは」

「情けない限りじゃな」

全員、緊張感なんざねーみて だな。よし

「突っ込むぞ！」

「落ち着きなさい」

「あだっ！」

昂に殴られた。こいつ最近遠慮しなくなったよな。

「なにすんだよ！」

「ハリセンで殴りましたが、なにか？」

どっから取り出したんだよ！ つーかハリセンの痛みじゃなかったぞ！

「なんで止めんだよ！」

「あなたは猪ですか。むやみに突っ込んで行っても、ダメージを受けるのがオチです」

「俺は攻撃なんざ受けねーよ」

雑魚ばっかだしな。

「空にも敵がいるでしょう。要塞を攻撃したら空から、空を攻撃したら要塞から攻撃されます。いくら私達が特化した力を持っていると言っても、一つだけを狙って行くのは危険です」

「じゃーどーすんだよ?」

「メンバーを二つのチームに分けましょう。私が言うのもなんですが、幸い、此処にいるのは全員が最強クラス。十分に渡り合えると思いますか?」

「妥当ではあるの。どう分けるつもりじゃ?」

「グレート・ブリッジをナギ・ゼクト・アル・詠春が、空を私とノール、あとジャックで行こうかと思います」

「どうしてだ?」

詠春が聞く。そーだよな、なんでジャックが空なんだ?

「ジャックにはアーティファクトで戦艦を切り落としてもらおうと思います。本当はナギにも空を担当してもらいたかったのですがね、呪文の破壊力ではあなたが一番強い。単純に火力で分けたのですよ。バランスを保つためですね」

「だったら俺かお師匠かアルを空に担当したのがよくないか?」

そう聞くと

「あなたとジャックと一緒にしたら、周りに被害が飛び火するでしょう？ アルはいろいろとあおりそうですし、ゼクトは詠春のサポートにまわってほしいのです。私も馬鹿を二人抑えることは無理ですから」

「待て昂！ まさかナギを抑えろと言っのか！？」

「頼みましたよ、詠春。私はジャックを抑えますから」

詠春が叫ぶ、つて！

「バカって俺のことかよ！？」

ジャックとハモる。

「あなた達二人以外にいますか？」

そう切り返された。チクシヨウ！ 返せねえ！

「おい昂！ これ終わったら殴るからな！」

「やってみなさい。また動けなくして説教してあげましょう」

説教はやめろ!!

「んじゃあ、行くぜ！ 紅き翼、出動だ!!」

「「「「「応!!」「」「」「」

グオオオオウ!

S i d e o u t

S i d e : 昂

ああは言いましたが、正直に言っつて疑問です。

「斬艦剣!!」

私、空にいる必要ありますか？ こんなことを考えている合間にも、ジャックが次々に戦艦を落としていきます。て言うか、なんですかあの剣。大きすぎでしょう。なんであんなの振ることができるのですか。

「考えても仕方ありませんか」

バグですしね。チートの私が言っても説得力ありませんが。つと、ポーっとしているわけにもいきませんね。

「『何物も我らに害なすことあたわず』」

絶対防御の真言を使い、さらに

「『我らは音を越え駆ける』」

速度上昇の真言を使います。これで

「ノワール、一直線に突っ込んでください」

グオオオオオオウ！！

戦艦が密集している場所に突っ込みます。

破城鎚と呼ばれるものをご存じでしょうか。速度と大質量をもって城門に叩きつけ、破壊するための攻城兵器の一つです。

鉄壁の防御力は場合によっては高い攻撃能力になります。つまり、何が言いたいのかと言うと、その破城鎚を再現しました。まあ、ただの破城鎚ではなく、音速で突っ込んだので戦艦を貫通してしまいましたかね。

今のだけで三隻沈みましたよ。しかし・・・

「やはり、慣れませんね」

人を殺すのはやはり慣れません。慣れるよりはましでしょうけれど、やはりつらいです。向こうにも帰るべき場所や、守りたい人がいるのでしよう。それを奪っていると思うと、心が軋みます。

ええい！ 覚悟を決めなさい緋乃宮昂！！ 紅き翼に入った時から命を奪うことは、恨まれることは想定していたはずです！！ 今更殺したくないなどと、そのような願いが通るものですか！！ 私にできることは既にただ一つのみ！！ 殺した人たちの事を、その時の気持ちを、決して忘れないことです！！

「謝罪はしません。そのような権利は、既に私にはありません。だからこそ、決して、忘れません」

今は戦争を一刻も早く終わらせる。そのためならば、人殺しと罵られようがかまいません。

「次です！」

ふとグレート・ブリッジを見れば、所々で爆発が起きています。順調のようですね。

結果からいえば、グレート・ブリッジ奪還作戦は成功しました。

このことが切掛けで、私達『紅き翼』は敵味方関わらずに知れ渡る
ことになり、連合も帝国領内に躍進しました。

私達のファンクラブとやらもできましたが、喜ぶことなどできません。
ん。

どう言い訳をしたところで所詮、私達は人殺しなのですから。

5話：グレート・ブリッジ（後書き）

主人公はこの戦いまでに既に人を殺していましたが、覚悟は固まっています。

今回の戦いで、完全に固まりましたが。

6話・完全なる世界（前書き）

今回、今までに比べて長くなりました。

次回大丈夫か、自分？

6話：完全なる世界

こんにちは、昴です。

グレートブリッジ奪還作戦が終了して既に数週間が過ぎました。

連合はアルギユレー大平原を越えてヘラス帝国の帝都ヘラスまで後わずかと言ったところまで軍を進めました。しかし帝国もただではやられずに、連合の戦力を静かに、しかし確実に削ぎ落としていきます。

このまま戦争が進めば、大打撃を受けながらの連合の勝利か、双方の滅びで終わるでしょう。

「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾があつてよ。こんな大戦はもう起こらないそつだ。戦争しちまったが最後、みんな滅びちまうからつてよ」

ナギが言う。核爆弾や、それに準ずる兵器の事ですね。

「だがこつちの、この戦はいつ終わる？帝都ヘラスまで攻め滅ぼすつてか？やる気になりや、この世界にだって旧世界の爆弾以上の破壊力を持った大魔法はある！こんなこと続けてどうなるんだよ？意味ねえぜ！！」

それは私も感じていました。

この戦争は訳が分かりません。連合が有利になったら、戦力を辺境に飛ばして攻められ易くして。不利になりはじめたらまた戦力を呼び戻し膠着状態にする、の繰り返しです。これでは戦争を終わらせるところか、長引かせているだけではありませんか。

まるで

「まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとしているようだ・・・ですか？」

アルが意味深げにそう言う。

こう言うては何ですが、私にはそう思えます。戦争を長引かせても得をするものなんて武器商人やその類の人間しかいません。一般人は皆、一刻も早い終戦を望んでいますから。

ですが、このままいけば、待っているものは高確率で滅びだけ。停戦の情報も何もなく、あるのはただ『戦え』という命令のみ。滅ぼそうとしているとしか思えません。

「ある意味、その通りかもしれないぞ」

「ガトウ」

この数週間で仲間になった、連合の元捜査官のガトウがそう言います。

「何か分かったのですか？」

「ああ。俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。」

どのような情報が手に入ったのでしょうか。敏腕捜査官だったガトウからの情報に全員が意識を向けます（ラカン除く）。

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社、『コズモエンテレケイア完全なる世界』だ」

『コズモエンテレケイア完全なる世界』……それがこの戦争の原因の名前、ですか。

~~~~~

メセンブリーナ連合本国首都、メガロメセンブリアに現在、私達はいます。

急にガトウに呼び出されました。なんでも

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

だそうですが。さて、どのような人なのやら。

「協力者？」

「そうだ」

なんか、聞き覚えのある声が聞こえました。この声は、確か・・・

「マクギル元老院議員！ あんたが協力者なのか！？」

「いや、わしちゃう」

なんですか。あなたが違うのならいったい誰なのですか？ その協力者とやらは。

「主賓はあちらのお方だ」

そう言って階段の方を見る元老院議員。つられて見てみると、誰かが上ってきていました。

この人でしょうか？

「ウエスペルタティア王国・・・アリカ王女殿下だ」

ウエスペルタティアですか？ それってもしかしくなくても、アスナちゃんの関係者でしょうか？

つて、おや？

「・・・・・・・・」

「ん？」

ナギが妙ですね。どうしたのでしょうか？アリカ王女を見てボクッとして。ジャックはなにか、面白い物を見つけたような変な顔をしていますし。

本当にどうしたのでしょうか？

~~~~~

アリカ王女との会合が終わり、現在私達は暇を持て余しています。

まあ・・・

「ワツハハハハハ！ 上手い事やりやがってこんガキヤア！」

「ああ！？ なんの話だよ！！！」

「とぼけんじゃねーよ！ あのお姫様とイチヤイチャキヤイキヤイお喋りしてたろーが！ この色男が！」

「なにがイチヤイチャだ、バカっ！ してねっつの！！！」

「何言つてんだよ。俺なんか『気安く話しかけるな、下衆が』だぜ
くくく？ いやーありゃイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？ マゾかあんた？ 俺あんなおつかねえ女、
はじめて見たぞ？」

この二人は先程からやかましいですけれどね。そしてナギ、私もあなたと同意見です。あそこまで気の強い女性は今まで見たことありません。そしてジャックが変なのはいつもの事でしょう。

「グツハハハハ！ そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだな
テメーは！」

「んだそりゃ。わけわかんねーよ！ つか触んなっつーの！ 勝負
すっかテメエ！！！」

本当にやかましいですね。周りの方の迷惑になるでしょうに。

しかし

「仲いな」

「若いつていいですねえ」

「昂、お前まだ二十代前半だろう。爺臭いぞ」

「黙りなさい」

何故か言いたくなつたんですよ、この言葉。次に言つたら禿げにしますよ、その頭。

「しかしよ、ウエスペルティアの王女つてこたーアレか？ 例の姫子ちゃんの姉君つてことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しにくいみたいだった」

「へえ？ なんでだよ？」

「知るかよ。俺だつて気になつてんだつーの」

そこは私も気になりましたね。アスナちゃんの事について聞いた時、とても話しづらそうでしたし。気になりますね。

「アリカ姫……か」

ナギが王女を見て咳く。

本当にどうしたのでしょうかこの男。明日は隕石が降ってきますかね？

「それにしても、厄介ですね」

「『コスモエンテレケイア完全なる世界』……か？」

「はい。聞けば帝国・連合のみならず彼女の国、ウエスペルタティアにも構成員が居るようではありませんか」

「世界全てが彼らに操られているかのようなのですね。やはり、これは思った以上に根が深いようです」

「いったい何を望んでいるのでしょうか？武器商人やマフィアのような、戦争で儲ける連中が作った組織にしては妙ですし」

「そこも含めて、調査しなけりゃならんな」

「休暇を利用して調べるか。まったく、たまの休暇ぐらいゆっくり休みたいものだが」

「仕方なからう。なにも情報がないのじゃから」

詠春、年寄り臭いですよ。私の事言えないじゃないですか、まったく。

~~~~~

現在、私達は『完全なる世界』コスモエンテレケイアについて調査をしています。と言っても、しているのは酒場などでの情報収集のみですけどね。

ちなみにメンバーはアル、詠春、私、ゼクト、タカミチ少年です。

ガトウは独自の情報ルートから調べるらしく別行動。ナギとラカンについては、こういうときには戦力になりませんからいません。

ラカンのはのんびりと休憩していましたし、ナギは王女のお忍びでの買い物に護衛兼、荷物持ちでついて行っています。（連れて行かれないとも言えますね）

しかし怖いですね、あの王女。ナギが文句を言ったらその直後にピントが飛んでくるのですから。

どういう教育をされてきたのでしょうか？なんだか彼女の事は、あまり好きになれそうにないですね。ナギはご愁傷様です。

「それにしても、スーツ似合いませんね」

黙りなさいタカミチ少年。これでも気にしているんですから。

Side:ガトウ

おいおい、冗談だろ？なんだよこれ・・・

「まさか・・・こんな・・・」

「んお？どうしたよガトウ。そんな深刻な顔して」

ラカンが。

「いや、ようやく奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだがな、これがどうにも信じがたい内容で。いや、情報ソースは確かなんだが」

信じていいのか悪いのか・・・だがこれが確かなら奴らの行動にも・・・

「んだよ、ハッキリしろよなガトウ。もっと分かりやすく言え」

「いや、言ってもあんたにや興味ない話だよ、多分」

理解できるか分からないしな。まだ付き合いは短いが、コイツとナギの馬鹿さ加減は理解してる。

「それよりも、こつちの方が深刻だ。この男にも『完全なる世界』コヌモエンテレケイアとの関連の疑惑が出てきた・・・大物だよ」

そう言って一枚のレポートを渡す。

「コイツは、今の執政官じゃねーか!! メガロメセンブリアのナンバー2までが奴らの手先なのか!？」

「確証はない。外で喋るなよ?」

そう釘をさす。その直後

ズズンッ!!

「っ!?! 何だ!?!」

爆音と衝撃がした方向を見ると、市街地から煙が!?!

S i d e o u t

Side:ナギ

姫さんに引きずられて街に出たら、いきなり仕掛けてきやがった。

「姫さん、大丈夫か!？」

「うむ」

くそがつ！ こんな街中でデカイ魔法使いやがって!!

「やはり今のは」

「ああ。奴らの刺客だろ。あんたと俺、どっちを狙ったかはわからねえが」

だがようやく尻尾を出しやがった!

「逃がさねえぞ! 追尾魔法もかけてやったしな!」

ここで逃がすわけにはいかねえ!

「姫さんは皆のところに戻ってる！俺は奴らを追って本拠地を潰グエツ！？」

首が！首が絞まる！何しやがんだこの女！！

「私も行こう」

「ああ？」

何言ってるんだこの姫さんは。

「あぶねーだろが」

「ここに私を一人残していく方が危険だと分からぬのか愚か者。それに私の魔法は役に立つぞ？忘れたか、この鳥頭」

・・・へえ、この姫さん意外に勇氣あるんだな。気に入ったぜ！

「ハツ・・・いいぜ姫さん。ついてきな！！」

よっしやいくぜー！けど・・・

「昴の能力の方が役に立つけどな」

バチィン！

「ウブオツ！？」

殴られた。走ってるときに殴んじゃねーよ！！

~~~~~

「・・・で、貴様は一昼夜、アリカ王女殿下を連れまわした挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか？」

「おう」

「どんな夜遊びだそれはっ！！」

「あとは警察に任せてきたぜ？」

「そういう問題ではない！！ 敵の下部組織を潰しても意味はないんだぞっ！ 何のために秘密裏に調査していると思ってる！？ 大体、万が一王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だ！！ お前責任とれるのか！？」

あー、うっせーな詠春のやつ。

そりゃちーっとやり過ぎたとは思ってたけどよ

「姫さんノリノリだったぜー？ 楽しかったー、って」

「嘘をつけっ！ どうせ貴様が無理矢理連れまわしたんだろ！ 姫にこんなご迷惑をおかけするとは、どう詫びればいいか。これは国際問題級の……」

あーあー、クドクドうつせーな。禿げるぞ？

「禿げるのはお前らの起こすストレスが原因だ！！」

心を読むんじゃねーよ！！

「詠春さーん」

「どうしたタカミチ君」

「あのコワイ冷血お姫様が今、廊下で僕に向かってニッコリと笑って！ 僕ビックリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。たしかに笑いましたよね！」

「うむ、驚いたのじゃ」

「な？」

「ぐっ」

にしても、あの仏頂面の姫さんも笑うんだな。どんな顔だったんだか。

ん？ どうした昴？

「タカミチ少年。少し、向こうで話しましょうか」

「あれ？ あの、昴さん？ どうしたんですか？ なんで手を掴んで引き摺るんです？」

「いえ、少しお説教しましょうかと。第一印象そのままとはいえ、女性に対して『冷血』とは言うてはいけません」

「え！？ あの、え、遠慮したいかなー、なんて」

「駄目です。安心しなさい、ほんの三時間ほどですから」

「え！？ い、嫌です！ た、助けてくださいーいー！」

タカミチが俺達を見る。だがすまん。俺も巻き込まれたくねえんだ
！！

もうあの説教は嫌なんだよ！！ 思いだそうとしただけで体が震えるんだよ！！ 見ればジャックも小刻みに震えてやがる。

そしてタカミチが扉の向こうに消える。

すまんタカミチ。お前の犠牲は忘れない。

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ？」

さっきまでの光景を封印して、奴らのアジトで見つけた手紙を開く。

そして浮かび上がる立体映像。

「！ それは・・・」

~~~~~

今、俺達は飛行場にいる。帝国の第三皇女との会談に行く姫さんを見送るためだ。

「つまり、あの証拠があれば戦を終わらせられるのじゃな？」

「多分な」

そこらへんはよく知らねーが、ガトウ達の話聞く限り可能性は高

そうだ。

「では、それは主に任す」

「あんたもよくやるな。戦火の中、こんなボロ舟で帝国第三皇女と接触しに行こうってんだから」

ホント、よくやるぜ。

「なんじゃ、心配しておるのか？」

「は？」

何言ってるんだコイツ？

「心配？ なんの？」

バチイン！！ バチイン！！！！

「へブツ！！ ウボアツ！？」

二連続でビンタされた。こゝこの女！！

S i d e o u t

S i d e : 昴

こんばんは、昴です。現在ガトウが、ナギが見つつけてきた証拠の事をマクギル元老院議員に報告しています。

『あの執政官がテロに関与！？ 確かなんだねヴァンデンバーグ元捜査官』

「ハ、確たる証拠もあります」

『よくやった。上手く行けば、これ以上の無意味な戦線拡大を防げるやもしれん。弾劾手続きだな。法務官を呼ぼう、証拠の品とナギ君を連れてきてくれ』

「了解しました」

ガトウが通信を切る。

「そういうわけだ。マクギル元老院議員のところに行くぞ」

「わかった」

「おう」

「わかりました」

私とジャックもついていきます。ジャックはどうか知りませんが、私はどうい内容なのか興味がありますからついていきます。

ですが

「何か、嫌な予感がしますね」

「どうかしたか？」

「いえ、なんでもありません」

おそらく、気のせいでしょう。

マクギル元老院議員の部屋にまでつきました。

「マクギル元老院議員」

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうか？」

「ハ……法務官はまだいらっしやいませんか」

「法務官は、来られぬこととなった」

「ハ？」

「どういふことでしょうか？」

「あれから少し考えたのだがね、せつかくの勝ち戦だ。ここにきて、慌てて水を差すのもどうかと思ってね」

「ハア」

「おかしいですね。マクギル元老院議員は停戦派だったはず。それがいきなり戦争続行とは、どういふつもりでしょうか？ いえ、それ以前に、この背筋がザワザワする感覚はいつたい？ 昼間に会った時はこんな感覚はしなかった。」

「この人は本当にマクギル元老院議員なのでしょうか？」

「ああ、いや。私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。」

「確かに、今弾劾手続きをすれば混乱が起きるでしょう。ですが、それで戦争が終結するのが早まるのならそうすべき筈。」

「時を待つのだ。君達も無念だろうが、今回は手を「まちな」……」

ナギ？ どうしたのですか？

「あんだ、マクギル議員じゃねえな、何もんだ？」

そう言っていきなり魔法を放ちました。

「「「な……」」」

なにをしているのでしょうかこの男は！？

「ちよ つ！？ ナギ、おまつ、なにやってんだよ！？ 元老院議員の頭いきなり燃やしておまつ」

「バーカ、よく見てみるよおっさん。別人だぜ」

「何っ！？」

言われて炎の方を見ると……どうやら、ナギの言う通りのようですね。

炎の中から出てきたのは、学生服を着た青年。

「よくわかったね、千の呪文の男。こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

不意打ちとはいえ、ナギのあれを喰らって無傷ですか！

「あなたはいつたい・・・いえ、それよりも、マクギル元老院議員は何処ですか？」

「ああ、ブラックドラゴン黒竜騎かい。本物のマクギル元老院議員は、残念ながら、既にメガ口湾の底だよ」

「てめえっ!!」

「ッ！ 待ちなさいナギ！」

ナギが一人で突っ込んで行きました。そして青年の左右に現れる二人の男。

「通しませんよ」

「くらえ」

二人から放たれたのは炎と水。ですが、この威力は

「強えぞこいつら！」

「ハツハ、だが生身の敵だ！ 政治家だなんだとガチ勝負できない連中にくらべりゃあ万倍！！ 戦いやすいぜ！！」

「フツ」

ジャックのセリフに対し、青年は笑います。そして耳に手をかざして・・・っ！ まずい！

「わ、ワシだ！ マクギル議員だ！ うむ、反逆者だ！ ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけた！ 早く救援を頼む！ スプリングフィールド、ラカン、ヒノミヤ、ヴァンデンバーグ、奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡を・・・」

「げっ」

「やられたな」

ガトウ、落ち着いて言っている場合ですか！

ナギとラカンが飛びかかりますが、



「君達は少し、やりすぎたよ。悪いが此処で退場してもらおうか」

「っー！」

間に合いません！

懐から急いで笛を取り出します。

この笛は龍笛・黒竜。私のパートナーともなったノワールの鱗と角から作り出した、私専用の笛です。これを吹けば、たとえ次元を隔てた場所にいようと、空間を越えてノワールが来てくれます。

く　く　く　く　く

グルウオオオオオオオンン！！

来てくれました！

「全員、飛び乗ってください！　早く！！」

「おっー！」

「すまん、助かる！」

「サンキュー！」

全員乗りましたね！

「ナギ！ 連絡は！？」

「もうやってる！」

よし！なら

「ノワール、全速力で離れてください！」

グオオオン！

最大速度で首都を離れます。他のメンバーが心配ですが、アルとゼクトならば切り抜けることはできるでしょう。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。いいねえ、人生は波乱万丈でなくちゃな」

「タカミチ君達は脱出できたかな」

「・・・姫さんがやべえな」

Side out

S i d e : アーウェルンクス

「・・・逃がしたか」

「どうします？ 追いますか？」

「今なら間に合うぞ？」

たしかにそうだね。でも

「いや、やめておこう。彼らもしばらくは何もできないだろうしね」

それよりも

「アリカ女王たちは？」

「既に捕えてある」

「夜の迷宮に監禁していますよ」

「そう」

一部予定外の事があつたけど、概ね計画通りだね。

「じゃあ戻るのか。他にもやることは沢山あるし」

## 6話：完全なる世界（後書き）

主人公たち、敗走？それと、ようやく黒幕の組織と初顔合わせ。  
そしたら何故か、こんなに長く・・・詰め込みすぎましたかね？

## 7話：救出と忠誠、そして・・・

Side：昴

こんにちは、昴です。

マクギル元老院議員になりすましていた『完全なる世界』のメンバーによって反逆者となった私達は現在、『紅き翼』の隠れ家の一つに身を潜めています。

まあ、別に反逆者だの言われても良いのですけどね、私は。個人的に、英雄だ勇者だと言われるのは嫌いですので。

他のメンバーもあの後、すぐに首都を脱出したそうです。連合兵に追いかけられたらしいですが、ゼクトとアルを相手にしては10分ともたなかったようです。（タカミチ少年からの情報です）

隠れ家に着いてすぐに、私達は情報を集め始めました。数日かけて集めた情報で分かったことは二つ。

一つは、帝国第三皇女・テオドラとの会談に行ったアリカ王女が、会談相手と共に『完全なる世界』のメンバーに捕えられたということ。また、その際に護衛は殺されたらしいです。

そしてもう一つ。どうやらその二人は、とある遺跡群に幽閉・監禁されているらしいということ。

監禁場所の名は『夜の迷宮』と呼ばれ、かつて、とある王族が建てた国の名残らしいです。既に国は滅び、遺跡はダンジョンとなって

冒険者に牙をむきます。当然、モンスターや精霊といったものも存在するようです。

こう言うっては不謹慎ですが、私は楽しみです。私の趣味の一つである、遺跡散策。広大な遺跡であればある程、古ければ古い程、探究心が刺激されます。状況が状況でなく、時間があれば徹底的に調べつくしているでしょう。ええい、口惜しや・・・!!

「なあ昂、どうしたんだ？ さつきから妙な威圧感を感じるんだが・・・」

そんなことをガトウに言われました。どうやら遺跡調査をできない悔しさが威圧感となって出ていたようです。

「ああ、気にしないでください。少し、悔しいだけですから」

主に遺跡探索・調査ができないことですけどね。

「そうか。まあ、その気持ちは分からなくもないが、少し抑えてくれ。タカミチ君が怯えてる」

「が、ガトウさん！ 僕は怯えてません!!」

「震えながら言っても説得力ないぞ？」

どうやらガトウは、私は反逆者にされたことを悔しがっていると勘違いしているようですね。他のメンバーも、アル以外そう思っているようです。面倒なので指摘はしませんが。

「それよりどうすんだよ。姫さん達がとっつかまってる場所はもう割れてんだ。さっさと助けに行つた方がいいんじゃないかねえか？」

ジャックがそう言います。しかしですね。

「しかし、慌てて助けに行つても、迎撃される可能性があります。それにこの情報が本当に正しい物なのかも分かりません。仮に正しかったとしても、簡単に手に入れられたことに疑問が出てきます」

アルがそう反論する。その意味するところはつまり……

「この情報自体が、畏の可能性もあると、そう言いたいのですね？」

アル

「はい」

「だが此処で手をこまねいている訳にもいかないだろう。このままいけば、この世界は間違いなく滅亡する。その情報が正しいのなら、急いで救出しに行くべきだ」



詠春が反論する。

「もし間違った情報だったらどうするのですか。王女たちを助けることはできず、無駄に時間を浪費することになります。もう数日、情報を集めて検討した方がいいのでは？」

「それこそ時間の無駄だろう！ こうして言い合っている時間にも、王女殿下達は待っているんだぞ！」

詠春が言います。

しかし

「それで、間違った情報だったらどうするのですか？ 正確な情報だったらいいでしょう。ですが間違った情報だったら、それは仲間を危険にさらすことになります」

「それは・・・だがっ！」

アルと詠春の言い合いが続きます。

アルの言っていることは正論です。偽の情報だったら、仲間を危険にさらすだけになる。

しかし詠春の言っていることも理解できます。このままじっとして

いても、戦火が広がり滅びを速めるだけ。悩みますね。

「ガトウ、情報の信憑性はどうですか？」

「数日しかなかったから碌に調べられなかったが、まず間違いなく夜の迷宮に捕えられている」

そうですか。

「ナギ、お前はどう思っておるのじゃ？」

ゼクトが問います。そう言えば、さっきからやけに静かですね。

「お前は『紅き翼』のリーダーじゃろう。ワシらだけが討論していても、お前が決めねば動けんぞ？」

そんなことはないと思うのですがね。ですが、確かにリーダーの意志を確認しなければなりませんね。

「ナギ、あなたはどう思っているのですか？ アルの言うように情報を集め、検討するか。それとも詠春のように、今すぐ助けに向かうのか」

「・・・ガトウ、さっき言ったのは本当なんだろうーな」

「ああ。間違いない」

「そうか」

そう言って、目を閉じて沈黙します。なんというか、ナギに沈黙は似合いませんね。違和感が凄まじいです。いつも騒いでやかましいからですかね？

しばらくの沈黙。そして目を開き

「よしっ！ 行くぞっ！！」

そう言い放ちました。

「いいのですか？ もし王女たちが居なかったらどうするのです？」

「昴、俺を信用してないのか？」

「いえ、もしもの可能性の話です」

ガトウが口をはさんできましたが、抑えます。

信用してないわけではありませんが、あらゆる可能性を想定してお

く必要がありますので。

「たとえそうだとしても、俺は行くぜ！ 此処でじっとしていても、何もできないからな！」

ナギはハッキリと言い放ちました。

「……………」

「……………」

しばらくの間、互いに目をそらさずにらみ合います。

ナギの瞳に映るのは自棄になった人間が持つ意志でも、『完全なる世界』に対する怒りでもない。あるのはただ、現状をどうにかするという決意のみ。

まったく、この男は…………

「…………分かりました。行くのならば急ぎましょう。幸い、殺されたという情報はありませんでしたから」

「ああ！ 行くぜ野郎ども！」

「…………おっつ！…………」

~~~~~

隠れ家から出てしばらく空を飛び、『夜の迷宮』まであとわずかと
言ったところまで私達は来ています。既に遠目で遺跡が見えます。

ああ、調べたい。遺跡の隅々まで調査したいです。ですが今は駄目
です。自重しなさい私。調査するのはこの戦争が終わってから心行
くまですればいいです。ですから今は我慢です。

「見えてきたな、あれが『夜の迷宮』か」

「そうだ。そしてあそこにアリカ王女とテオドラ第三皇女が監禁さ
れている」

「あそこに姫さんが・・・」

それにしても、先程からナギが妙です。事あるごとに姫さん姫さん
と、本当にどうしたのでしょうか？ ジャックとアルはなにやら訳
知り顔ですが・・・

「それで、どうする？ このまま突っ込んで、迎撃されるのがオ
チだぞ」

「ですが隠れながら行っても、王女たちを探し出すのに時間がかか

つてしまつてしょう。探している最中に見つかったらさらに時間が
かかります」

「だが急いだ方がいいのも事実だ。どんなことをされているか分か
らないからな」

詠春、アル、ガトウがそれぞれ言います。まずは情報ですね。

「『我が眼は千里先を見る』」

真言で千里眼を発動し、遺跡を見ます。これで遺跡の細部が見えま
す。ああ、いいですね。やはり遺跡は・・・って、違つてしょう！
自重しなさい私！

今はそれよりも見張りが居るか居ないかを知ることが先です！

「どうだ？」

「少し待つてください・・・・・・・・いますね。入口に見張りが四人」

「四人か。どうする？」

「眠らせるだけで十分とは思いますが」

「だが、眠らせる前に連絡されたらまずいぞ？」

そうですね。なら

「少し、近づきましょうか」

「近づくと、どうやってだ？ このまま近づいたらすぐに気付かれるぞ？」

「こうします。『我らの姿は誰にも見えず、何物にも感知されない』

」

強力な気配遮断と隠蔽の真言を使います。これで余程の相手でない限り、たとえその目に映していても、誰も私達を認識することはいきません。また、結界にも引っ掛かりません。

「毎回思っけどよ。反則だよな、その能力」

ジャックが言いますが気にしません。

それよりも近づいて、ああ

「一人だけ残しておいてください」

「なんでだ？」

「何らかの情報を持っているかもしれないから、引き出して見ようかと。ですから先に行ってください」

「わかった」

そして一人は気絶し、残りの三人は絶命します。流石というか、手際がいいですね。

全員中に入りましたし、さて

「『起きなさい』」

強制的に目覚めさせます。本当はこのような手は使いたくないのですが、そうも言っていられません。

「う・・・」

「あなたには聞きたいことがあります。ですからあなたは『私の質問に答えなければなりません』。それと、『余計なことで、嘘は喋れません』ので」

「っ!?!」

「ついでに言うと、あなたは既に『自殺など出来ません』から、あしからず」

真言で行動の全てを封じます。さて、尋問の開始です。

Side out

Side:ナギ

迷宮に入って既に三時間。姫さんが見つかる様子は一向にねえ。ほんとに此処にいるのか？そんな疑問が頭を過ぎる。つーかこのダンジョン広すぎんだよ！！

「居たぞ！ 侵入者だ！！」

「捕まえる！ 王女たちの所に行かせるな！！」

今王女つつたか！？ つーことは、姫さんは間違いなく此処にいる！

「姫さんは何処だ！？ 言え！」

「誰が言うか！ 貴様らは此処で死ね！！」

捕まえるんじゃないのかよ！ だがそんなもんはどうでもいい！

そっちがその気なら、こっちも遠慮なくやらせてもらっせー!

「上等だこの野郎！ ブツ飛ばしてやる！」

何処だ姫さん!!

~~~~~

襲いかかってきた敵をボコリながら姫さんの居る所を目指す。最初に出てきたやつを適当にボコツたらすぐに吐きやがった。根性ねえな。

どうやら姫さんは遺跡の中心部分に閉じ込められてるらしい。いちいち道を探して進むのもめんどくせえな。

「オラアッ!!」

ドゴオン!!

壁に穴あけながら進むか。その方が楽だし、早く着く。待ってるよ  
姫さん!

それにしても

「なんでこう、壁が多いかねえ!!」

脆いから別にいいけどよ、邪魔くせえ！ もう二十はぶっ壊したぞ  
!?

そんなことを考えながら進んでいると、なんか他の壁に比べて堅そう  
な壁が目前にあった。ここか!?

「オラアッ!」

即座にぶっ壊す。壁が多くてイライラしてたんだよ。此処にいねー  
とぶっ飛ばすぞ!

壁を壊した際に出た煙が薄まる。そこで中を見ると・・・居た!

「よう、姫さん。助けに来たぜ?」

「遅いぞ、我が騎士」

騎士って、どーいうだった?

~~~~~

姫さん達を助け出して、俺達は隠れ家に戻ってきた。どういう風に姫さん達のところに向かったのかを昂に聞かれて話したら、いきなり膝から崩れ落ちた。

どうしたのかを聞くと、なんでもないと言いながらやけに恨みがましい目で俺を見てきた。どうしたんだいったい？

「なんだ、『紅き翼』の秘密基地と言うからどんな所かと思えば、掘立小屋ではないか」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだ、このジャリはよ」

「なんだ貴様！ 無礼であろう！」

「生憎ヘラスの皇族には貸しはあっても借りはないんでね」

「なにい、貴様何者だ！」

ジャック、何やってんだ？そんなガキとじゃれて。うるせーぞ。

「あのやけに元気な少女が・・・」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね」

アルがそう言う。

ヘラスのねえ、なんで一緒に捕まってたんだ？

「アリカ姫と交渉のため出向いたところを敵組織と一緒に捕縛されていたのです」

そうかい。まあいいや

「さて、姫さん。助けてやった方がいいが、こっからは大変だぜ？
連合にも帝国にも、そしてあんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオステイアも似たような状況で、最新の調査ではオステイアの上層部が最も黒いという可能性まで上がっています」

・ 俺の言葉に、ガトウが続ける。コイツ、何時の間にそんな情報を・

「やはり、そうか・・・我が騎士よ」

「だからその『我が騎士』ってなんだよ姫さん！ クラスで言ったら俺は魔法使いだぜ！？」

恥ずかしーじゃねーか！

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ ならば主はもはや私のものじゃ」

「な・・・」

「この姫さんは・・・」

「連合に帝国、そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

「そうなりますね」

昴が肯定する。お前、何時立ち直ってたんだ？

「じゃが、主と、主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？ 世界全てが敵、良いではないか。此方の兵はたったの8人。だが最強の8人じゃ」

ん？ 8人？ 人数はあつてるがなんか忘れてるような・・・？

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣

となれ」

「・・・へっ」

ホント、気に入ったぜ。

「やれやれだぜ。相変わらずおつかねえ姫さんだ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

「のう、それはいいのじゃが・・・」

ん？どうした嬢ちゃん。さっきまでラカンの肩に乗ってたじゃねえか。

「あやつはどうしたのじゃ？ 急に黒竜の方に行ってしまったが・・・」

黒竜？・・・あ！ ノワール！ しまった、忘れてた！！

急いで見てみると・・・

「ああ、ノワール。そんなに落ち込まないでください。アリカ王女も態と忘れていたわけではないでしょうから」

グオウ・・・

落ちこんでる！ メツチャ落ちこんでる！！

「姫さん・・・」

「な、なんじゃ。私が悪いのか！？」

「どう考えてもあんたが悪いだろ」

さっきまでシリアスだったのに・・・

7話・救出と忠誠、そして・・・（後書き）

アリカ王女はこの後ちゃんとノワールに謝りました。

8話：決戦

こんにちは、昴です。

アリカ王女達を救出してから半年経ちました。その半年の間、私達は情報を集め、『完全なる世界』の構成員を虱潰しに倒してきました。もつとも、情報の判断は基本的に王女二人とアルと私、ガトウが担当していましたが。（ガトウは情報収集もしていました）

敵だと判断したら、あとはナギやジャック、詠春に任せました。前衛三人のおかげでそれほど時間をかけずにほとんどの敵を倒すことができました。敵のアジトの建物はすべて吹き飛びましたけどね。二人のストッパーになるだろう詠春が、率先して攻撃していましたからね。

・・・苦労、かけすぎましたかね？なんか、帰ってきたときにやけにスツキリした顔して帰ってきましたし。まあ、いいんですけどね。被害を被ったのは敵であるマフィアや私腹を肥やす役人でしたし、私達に愚痴を零すこともなくなりましたから。

王女達のおかげで中立存在であったアリアドネも仲間になってくれました。幸いなことに、アリアドネには『完全なる世界』の構成員が居ませんでした。なんでも、怪しい動きをしていた者は即座に排除されたいです。

しかし、朗報ばかりではありませんでした。私達が戦っている間に、『黄昏の姫巫女』ことアスナちゃんが、オスティアの王宮から『完全なる世界』に攫われてしまったのです。

このことを知った私達は急いで情報を集めました。しかし、戦いながらの行動なのでその動きはどうしても遅くなり、集めるまでに随分と時間がかかってしまいました。

ですが、その結果分かったものもありました。敵、『完全なる世界』の目的です。どうやら彼等は『完全魔法無効化能力者』であるアスナちゃんを使い、この魔法世界を無に帰そうと考え、動いていたようです。

このことに、私は驚きました。彼女の力で消せるのは、魔法や気と言った、理を超えた現象です。彼女の力でこの世界が消せるのなら、この世界は魔法で造り上げられた、人造の世界ということになります。いくら理を超えた力とはいえ、世界を一つ作り上げるとは・・・この世界を作り上げた方は、随分と規格外だったのでしょね。

とはいえ、この世界にも生きる人々が居ます。どのような理由があれ、世界を消すなど私は許容できません。さらに私達は情報を集めました。その結果、彼らの本拠地が分かりました。

ですが、それは意外過ぎる場所でした。

この魔法世界最古の都。ウエスペルティア王国王都オスティア、その空中王宮の最深部。通称、「墓守り人の宮殿」が、彼らの本拠地でした。

そして現在、私達は「墓守り人の宮殿」の手前にいます。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

ナギの言葉にジャックが返します。あなたはもう少し緊張というものを持ちなさい、まったく……しかし、本当に静かですね。嵐の前の静けさ、といったものでしょうか。

「ナギ殿！ 帝国・連合、アリアドネ 混成部隊、準備完了しました。何時でも行けます！」

「おう」

頭に角の生えた、色白の少女がそう報告してきました。なんでもアリアドネ の騎士隊の一人で、次期総長だそうです。大したものですね。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！ それで、あの、ナギ殿。ササ、サインをお願いしても、よろしいでしょうか？」

「んお？ おう、いいぜ、そんなくらい」

「ありがとうございます！ 尊敬していました！」

なんというか、此処だけ日常ですね。というか、アリアドネにもあったのですね、ファンクラブ。中立都市だからないかと思っっていましたよ。

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国の皇女とタカミチ君も同じだろう。決戦を遅らせることはできないのか？』

ガトウがそう連絡してきます。映像が空中に浮いて通話できるとは、便利ですなこれ。私も欲しいです。

「ガトウ、それは最早不可能です」

「既に、タイムリミットだ」

「はい、彼らは既に『世界を無に帰す』儀式を始めています。この世界の鍵である『黄昏の姫巫女』は彼等の手中に有るのです」

「ああ。・・・待つてるよ、姫子ちゃん」

「ナギ、逸り過ぎないで下さいよ？ 私も同じ気持ちですけどね」

アスナちゃんは必ず助け出します。喜びを知らないあの少女に、世界の楽しさを教えてあげたいですからね。

「おしつ！ 野郎ども、行くぜつ！！」

ナギの号令で一斉に飛び出します。前方には千は軽く超えるであろう自動人形と召喚された魔族と呼ばれる存在が。

「『我らに宿るは鉄壁の防御と撃ち抜く力』！！」

攻撃・防御能力上昇の真言を使います。これで多少は死傷者も減るでしょう。さらに……

「『其は天より降り注ぎし光雨、矢となりて敵を打ち滅ぼさん』！！」

光の矢を空より降らせる攻撃術を発動します。この術は光自体に攻撃性を持たせ、敵を攻撃する広域攻撃です。真言により発動したこれは私が仲間と認識しているものには一切ダメージを与えません。これで混合部隊を援護します。

「昂！ これなんだ！？」

「私の攻撃術の一つです！ 仲間にはダメージを与えませんから安心してください！」

「本当に反則じゃのう」

ほっといてくださいゼクト！ 今更出し惜しみはなしです！

「『其は全てを滅する怒りの炎』！ ノワール、最大出力でプレスをはいてください！！」

グルウ・・・ゴアアアアアアアア！！！！

ノワールにプレスをはかせ、さらにそれを真言で強化します。これで前方の敵の大半が居なくなりました。

「ナギ！」

「おう！ 突っ込むぞお！！」

外を部隊の皆に任せ、ナギ達は入口に突入します。そして私は、そこより若干上に降り立ちノワールを援護に向かわせます。

「ナギ！ 私は先に行きます！！」

「わかった！ 死ぬんじゃないぞぞ！！」

その言葉、そっくり返させてもらいますよ。

S i d e o u t

S i d e : ナギ

昴が離脱し、先に奥に向かった。

「しかし、大丈夫かね。いくらあいつでもヤベーんじゃないか？」

「私もそう思います。奥には幹部クラスが居る可能性が極めて高い。何故彼だけを行かせたのですか、ナギ」

「アイツなら大丈夫だろ。俺たち全員ですら動けなくするアイツだぜ？ 同じように乗り越えるだろうさ、ジャック。それと、アル、お前の懸念は外れたみて だぜ」

俺の言葉に、全員が前を見る。そこには

「やあ、『千の呪文の男』また会ったね。これで何回目だい？」

メガロメセンブリアで会ったあいつらが居やがった。

「何回目だ？ 数えてねえからしらねえよ」

「そうかい。まあ、いいんだけどね。僕達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ。だから、このあたりでケリにしようか」

「はっ！ 上等お！！」

ぶっ飛ばしてやるよ！！

S i d e o u t

S i d e : 昴

走る。薄暗い迷宮を、ただひたすらに走る。私が侵入した場所から随分と走りましたが、未だ出口は見えません。分かれ道などもなかったですし、このまま進めば着くと思うのですが・・・

「っと、敵ですか」

壁や床からまるで水面に顔を出すように現れた無数の召喚魔。おそらく後ろにも出てきていることであろう。

「ですが、止まるわけにはいきません。今の私はひどく腹が立っていますので」

一切の容赦なく、殲滅させてもらいましょう。

「『其は滅する焰の矢』」

前方の召喚魔を一撃で焼き尽くします。後方にも同じ物を放ち、走りだします。

しかし、どうやってこれだけの数を召喚しているのでしょうか？倒したそばからすぐに新しく召喚されるなど、いくらなんでもおかしすぎます。

「鬱陶しいですね！『其は呑み込み押し流す濁流』！！」

後方から追ってくるものに対し、洪水を発生させ、押し流します。出口はまだですか！

「！ あそこでしょうか？」

ようやく出口に着きました。って、外？ 前には新たな建物が。

「あの建物でしょうか？ 変な感じがしますね」

なんででしょうか、この感じは。まあいいです。あそこにアスナちゃん
んが居るのなら、向かうだけです。鍵がかかっているようですが

「『開きなさい』」

真言で扉の鍵を開けます。さらに奥に走り・・・見つけました！
結晶のような物の中に閉じ込められています。今助け・・・！
傍に何かが居ます。なんででしょうか？ あの黒づくめは・・・？

「あなたは何者ですか？ 何故この世界を消そうとしているのです
？」

「・・・・・・・・」

問いますが、目の前の黒いローブは答えません。気に入りませんね。

「あなたは・・・・・・・・何故」・・・・・・・・え？」

「何故、貴様がその力を持っている？」

「は？」

その力？

「その力は私の師の力。あの方の死とともに永遠に失われた力。全ての魔法の原点にして究極、私すらも至れなかつたもの・・・何故、貴様が使える？」

「それは真言の事を言っているのですか？　いえ、それよりもあなたの師の力？」

驚きですね。この世界に、既に真言が存在していたとは。どうやら、既に失われたものようですけど。

「そうだ。それは貴様ごときに相応しい物ではない。我が師に返せ、人形よ」

人形？　気に入りませんね。私は人間です。一度死にましたけど。そう言えば、私に肉体はあるのでしょうか？　この世界に来る前にいた場所では魂だけでしたし、此方に来て物に触ることができませんでしたから疑問にすら思いませんでした。

ですが、それよりも

「気に入りませんね、その言葉。私は人間です。それと、この力は私の力。神に貰ったものとはいえ、今まで私とともにあったものです。あなたの師が同じ力を持っていたとして、何故私があるの言う事を聞かねばならないのですか」

「人形を人形と言って何が悪い。貴様はこの世界で生まれたのだろ

う。ならば貴様は人形だ。人形は人形らしく、操り手の思うように動けばいい」

「気に入りませんね、実に気に入りません。あなたのその全てを見下した態度、言動。全てが私の癪に障ります。世界に生きる者たちには、それぞれの意志があります。あなたの言動は、その意志全てを否定している」

コイツはいったい何を言っているのでしょうか？ まるで、自分が全てを作り出したかのように行っていますが、神にでもなったつもりでしょうか？

「私はこの世界を創り上げた。人間達の新たな理想郷になるように願い、作ったのだ。だが人間は度し難い。争い続けるだけで、他には何もしない。だから一度、全てをリセットする。この世界に生きる者たちは、新たな理想郷へと移り住むだけだ。問題あるまい」

「あなたはふざけているのですか。人間は、いえ、生きる者は皆違うのです。違う意思がぶつかり合い、それが戦争になるのは認めましょう。ですが、その先にこそ進歩はあるのです。争うだけではない、より良い未来へと歩んでいける。それを度し難いなどと、あなたは理解しているのではない。理解しようとすらすらず、ただ否定しているだけです」

「この世界の現実を知らぬからこそ言える言葉だ。貴様こそ、人間の善性を信じているだけの夢想論者であるう。この世界の現状を知れば、嫌がおうにも理解できる。私のこの手段こそが、より多くを救うことができる唯一の次善解だと」

「……どつちやら、いくら言っても無駄のようですね」

「そのようだな。貴様を倒し、早々に儀式を発動させるとしよう」

「やってみなさい!」

Side out

Side:ナギ

ぶつかり合うこと20分。周りは既に瓦礫の山。他の連中はもうそれぞれ相手の相手を倒してる。俺の相手はこの石を使うやつだが、相変わらず強え。

互いに魔法を撃ち合っても、俺もあいつも決定打はまだ貰ってねえ。

「おおああっ!」

「くあああっ!」

雷の槍を無数に放つ。それに対して奴は石の槍を放ってくる。

だが

「あめえっ!!」

槍を全て爆破させ、視界を塞ぐ。これで!

「終わりだっ!!!!」

瞬動で一気に距離を詰め、零距离で攻撃を叩き込む!

~~~~~

随分とボロボロになっちまったが、なんとかコイツとの戦いに勝った。だがまだ終わってねえ。姫子ちゃんの場所を聞きださねーと。

「見事・・・理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫巫女は何処だ。消える前に吐け」

そう聞くと、いきなり笑いだした。なんだコイツ、狂ったか?

「フッフ・・・君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい?」

「なんだと?」

どういふことだ？コイツが裏で糸を引いてたんじゃねえのか？

ドゴオオン！！！

「なんだ！？」

「ナギ！！」

「無事か！？」

「今の衝撃はいつたいなんじゃ！？」

「向こうの建物からですね。昴でしょうか？」

皆が集まってくる。この場にはいないのなら、昴が原因だろう。

「『黒竜騎』が、先に行つてたのかい……彼は、死んだかな？」

「なんだと？」

「『あの方』には、誰も勝てないよ……この世界の存在じゃあ……誰も、ね」

そう言うとアイツは消えていった。くそっ！なんなんだよいったい



！！

全員で音のした方を見ると、ぶつかり合っている影が二つ見えた。

一つは昴だろう。もう一つは、全身を黒のローブで包んだよくわからない奴。アイツが全ての元凶か！

昴の加勢に行こうと、飛び出そうとするが

「待てナギ！ 奴はヤベエ！！ 別物だ！！ 死ぬぞ！！」

「何言ってるんだジャック。らしくねえな」

どうしたんだコイツ？ 臆病風にでも吹かれたか？

「此処は態勢を立て直して・・・」

「バーカ、んなことしてたら間に合わねえよ。それに、昴一人に任せてられるかよ」

「ふふ、よからう。ワシも行くぞ、ナギ。若いだけに任せてはおけんわ」

「お師匠・・・」

「待ちなさい！ 二人では無理です！！」

「無理でもなんでも、行かねばならんじやろつ。此処で奴を止められねば、世界が無に帰すのじゃ」

「安心しろよ、俺は最強の『千の呪文の男』だぜ？ 必ず勝つ！任せとけ！！」

「行くぞナギ」

「応！！」

待ってるよ、すぐに加勢に行くぜ！ 昂！！

S i d e o u t

S i d e : 昂

攻撃の応酬は既に百を超えています。ですが、決定打を与えるどころか一度も攻撃が当たりません。全て防がれてしまいます。

「『其は滅する光の槍』！！」

「無駄だ！！」

互いに攻撃を相殺し、膠着状態です。せめて、あと一人いれば！！

「昂！！ 無事か！？」

「間に合ったようじゃの」

「ナギ？ ゼクトも！ 何故ここに！？」

他の皆はどうしたのですか！！？

「お前の加勢に来たに決まってるんだろ！！ 安心しろ、他の奴らも全員倒して生きてる。あとはコイツだけだぜ！」

「そういうことじゃ。手早く終わらせるぞ」

そう言って攻撃を始める二人。なんとというか、早いですね。ですが、これで攻撃を当てることができるようになりました！あとは打ち倒すだけです！

「『其は滅する光の矢』！！」

「雷の暴風！！」

「ツク、フフハハハハハ・・・ハハハハハハ！！」

いきなり笑いだしました。なんでしょうか？ 気でも狂いましたか？

「私を倒すか人間！！ それもよからう！！ 私を倒し、英雄となれ！！ 羊達の慰めにもなるう！！」

「しぶてえ奴だぜ！」

「まったくですね！」

そう言いながらも攻撃の手は緩めない。

「だが、ゆめ忘れるな！！ 全てを満たす解はない！！ いずれ彼等にも絶望の帳が下りる！！ 貴様等も例外ではない！！！」

「ケツ。グダグダ、るっせええええええ！！！」

ナギが殴り飛ばし、さらに攻撃を繋げます。

「たとえ明日！！ 世界が滅ぶと知ろうとも！！ それでも、諦めねえのが人間ってモンだろうが！！！」

「つく、貴様等もいずれ知るだろう。私の語る「永遠」こそが、「全ての魂」を救いえる唯一の次善解だと」

「馬鹿ですか、あなたは」

造物主の言葉に反論します。

「「永遠」など、この世のどこにもありません。そんなものは、結局のところ幻想でしかないのですから」

そう、永遠などない。あらゆるものには必ず滅びがある。広がっていく宇宙にも、進んで行く時間にもいずれ終わりが訪れるでしょう。

「あなたがこの世界を幻想だと言ったように、あなたのその解すら幻想と言えます。あなたに都合のいい幻想を、世界全てに押し付けるな!!!」

「それでしか世界は救えぬ!!! 人間に委ねていては滅びるのみ!!! それは何故分からぬか!!!」

「人間を、舐めんじゃねえええ!!!」

ナギが杖を雷槍とし、造物主へと投げ放ちます。それは寸分の狂いもなく造物主を貫きます。

「『其は滅する天の焰』!!!」

さらに真言で極大の焰を発生させ、爆発させます。衝撃で周りの建

物がだいぶ破壊されましたが、造物主の姿はありません。倒すことは、できたようですね。

「昂！ 姫子ちゃんはどこだ!？」

そうでした！ まだ終わってない！

「こっちはです！ この建物の奥に」

そう言って走りだそうとした瞬間、腹部に衝撃がきました。

「がっ……」

「昂!！」

なんとか倒れずに踏み止まります。衝撃が来たのは後ろから。まだ、仲間がいたのですか!？ 痛みをこらえ、後ろを見るとそこにいたのはゼクトのみ。

「お師匠？ なにを……」

「武の英雄に未来を造ることはできぬ。貴様等には、結局何も変えられまいよ」

「！ まさか・・・あなたは、ゼクトの体に乗っ取ったのか！ 造物主！！！」

「なんだと！？」

血が流れますが気にしてられません。何処まで人を弄べば気が済むのか！

「だが果たして、自らに問うが良い。人とは身を捨ててまで、救うに足るものか？」

「てめえ、ふざけてんじゃねえぞ！！ お師匠を返しやがれ！！」

「人間は度し難い。英雄よ、貴様等も我が二千六百年の絶望を知れ。・・・さらばだ」

「待ち・・・なさい・・・！」

言いたいことを言い終えたのか、ゼクトの体に乗っ取った造物主は消えて行きました。

「お師匠！ 師匠おおお！！！」

「ナギ、気持ちは分からないでもないですが、今はアスナちゃんを・・・」

血を流し過ぎたのか、意識が朦朧とします。目も、霞んできましたね。ですが、まだ倒れるわけには……！

「……昴、姫子ちゃんはその塔の中なんだな？」

「はい、造物主と、戦う前に確認しました、から。……急ぎましたよう」

「昴、お前は休んでろ。俺が助け出すから」

そうですか。では

「では、お言葉に、甘えましょうか。彼女は、結晶の中に……閉じ込められて、います」

「わかった。死ぬんじゃないぞ！」

そう言うとナギは走って行きました。

それを見届けると同時に、私の意識は闇に落ちました。



## 9話：賢と英雄

世界の狭間、あらゆる世界に在って無い場所に、その二人は居た。一方は白を基調とした質素な服で、銀の髪を結びあげている女性。その顔立ちは端整だが、どこか無機質な作り物めいたものに見える。もう一方も女性だが、中性的で、見ようによっては男性にも見える。此方は金髪で、踝まである髪をそのまま下ろしている。服は紫を基調としているが、黒にも見えないこともない。

「『秩序』、あの子が行ってからどれくらい時間が経ったかしら？」

「この空間の時間で、約38、000、792時間です。人間換算で言えば、約4338年ですよ『混沌』」

『混沌』と呼ばれた金の髪の女性の問いに、『秩序』と呼ばれた銀の髪の女性が答える。

「そう、まだたったの4000年しか経ってないんだ」

「此処の時間の流れは、現実世界とは違いますからね。彼の時間では、まだ5年も経っていないでしょう。どうかしましたか？」

「んにゃ、別に。今頃あつちの世界に馴染んでるかなー、と思つてさ」

この二柱こそ、神の夫婦喧嘩に巻き込まれて殺された「緋乃宮 昴」を送り出した神である。

その二柱は現在、彼の人間の事で話をしていた。

「今更だけど、良かったのかな。『真言』なんて力渡して。いくらあの世界が魔法で満ちているとしても、あの力には勝てないでしょ。下手すれば世界も滅ぼせるし。死者蘇生とかされたら堪ったもんじやないよ?」

「その事なら安心してください。制限を掛けていますから」

「制限? どんな制限を掛けたのさ」

『混沌』が問う。

「死者蘇生や、時間の跳躍を行う事は出来ないようにしています。最初は力との間で認識の齟齬もあるでしょうから。副作用もありますし」

「それなら安心かな。副作用って何があるの?」

「力による魂の浸食です。正確に言えば、浸食ではなく『変革』なのですけどね。此処に来た時、彼の眼の色は何色だったか憶えていますか?」

「そりゃ憶えてるよ、茶色っぽい黒だった。あの眼は綺麗だったね。」

欲しいと思ったもん」

『秩序』からの問いに、『混沌』がそう答える。

眼を欲しいなどと言うとは、神の感性は人とは違うということの証であるうか？

「最後の言葉は置いておきましょうか。では、送り出した時の眼の色は？」

「確か、赤だったかな。燈色にも見えただけど。浸食ってそういうこと？」

「はい。そもそも、人間にあの力を使いこなせる訳がないのです。それはあなたも知っていると思いますが」

「それはね。あの力は大きすぎる。あらゆる魔法の原形みたいなものだからね。いくらあの子の魂が受け入れる事に特化しているとしても、あの力を受け入れきるのは無理がある。いずれ力に吞まれて消えるのがオチだよ」

「ですから彼の魂に、少し手を加えました。あの力を全て受け入れられるように、魂を強化しました。結果として、彼は人間から少し外れてしまいました」

「いいのそれ？ いくら消させないためとはいえ、問題ないかな？ 世界が軋むとか」

「大丈夫です。彼は現在、肉体が有って無いような存在です。あち

らの世界で固定されれば器も形成され、少し魂の位が高い人間になりますよ」

「あつちの世界に存在が固定化されるまで20年は掛かると思うんだけど、それまでに殺されたりしたらどうすんの？ 力が世界に馴染むのも時間がかかるし、完全に輪廻から外れて、今度こそ消滅すると思うけど」

「問題ありません。彼はそれまで死ねませんから。殺されかけた場合、力が彼を生かします。世界に彼を馴染ませながら、彼の器を構築し、癒すでしょう。幸い、あの世界にもかつて『真言』がありましたから、力が世界に馴染むのは1年あれば十分です」

そう答えた『秩序』の眼は、どこか冷たい輝きを持っていた。

「そして、彼にはあの世界の楔になってもらいます。あの世界を支えるために」

「それってあの子に永遠を生きろって言っているようなものでしょ。それ人間って言えるの？ 彼の気が狂う可能性もあるし。たまに思うんだけどさ、あなたって結構酷いわよね」

「永遠ではありません。寿命はありますよ、普通の人間よりもはるかに長く生きますけれど。それに、彼が狂う事はありません。魂を強化した時に、そうしましたから。それと、私が担うものをお忘れですか？ それくらいでなければ、『秩序』は護れません」

呆れた口調の『混沌』に対し、堅い口調で『秩序』は返した。

S i d e : 昴

目が覚めると、そこは何もない白い空間だった。

「何処でしょうか？ 此処は」

そう言っつて身を起こす。

自分は確か、ナギを見送った後、出血多量で倒れたはず。

それが何故、このような場所にいる？

「まさか、また死にましたかね」

実際、腹部を貫通した傷は致命傷と言ってもよかった。内臓はスタスタにされ、血管のほとんどが切れたのだろう。あの出血量はそれほどだった。ということは、私は死んだのだろう。そう考えながら腹部に触れるが

「傷がない？ 魂だからでしょうか？」

自分が死んでいるのならそう思っても不思議はない。だが心靈番組で出てくる霊は血だらけだったり、体のどこかがなかった気がする。前の世界でたまに見た幽霊は腕がなかったり、足がもげそうな状態のものもいた。

「考えてもしようがありませんね。とりあえず、歩きましょうか」

ここにおいても何もできないし、死んだのなら冥府に行くのが道理でしょう。

というか、ここ歩けるのでしょうか？

「アスナちゃんの事が心残りではありますが、ナギ達が何とかしてくれるでしょう」

押し付けるようで心苦しいですが、死んでしまったら何もできないのでそこは大目に見てほしいですね。そう思いながら歩き出す。

~~~~~

白。ただ白い空間をひたすら歩く。歩きはじめて既に二時間は経った気がするが、同じ色の為まだ数分しか歩いていない気がする。

そもそも、此処に時間や空間と言った概念が存在するのも疑問だ。

「変わりませんね。せめて色が一色でもあればまた違うでしょうに」

そうばやきながらも歩みは止めず、ただ歩く。

そうしていないと心が壊れそうだと感じていたから。

~~~~~

何も無い、ただ白いだけの空間。

既に100時間は歩いただろうか。肉体的な疲労はなくとも、精神的な疲労とストレスで倒れそうだ。

そして、限界に達し倒れそうになったその時に、それは起きた。

「・・・？ これは・・・？」

いつの間にか自分の周りを、黒い何かが円を描くように飛んでいた。目を凝らして見ると、それは単語のようで、模様のように、言葉のようだった。

見れば周りの色も白ではなくなっていた。

「文字？ 何故文字が？」

疑問を声に出しながら自分の周りを飛ぶソレに手を伸ばす。

するとそれらは、まるで吸い込まれるように手に入っていた。  
そして、全ての文字が入った途端

「がっ!？」

割れるような頭痛がした。

針で体を貫くような痛みが、鈍器で体を潰すような痛みが、刃物で切り裂くような痛みが、食い干切られるような痛みが、毒が蝕むような痛みが、抉るような痛みが、伸ばすような痛みが、引つ掻くような痛みが、剥がすような痛みが、焼くような痛みが、およそこの世の全ての痛みを凝縮したような痛みが来た。

「っぎあ、っく……あ、が、あああああああああ  
っ!!!!!」

頭を抱え転げまわるも、その痛みは消えず、むしろ悪化する。  
ただ、ワタシの脳に刻みつける。

言葉に込められた意志を、意味を、およそ全ての言葉の在り方を、  
痛みとして知識に、魂に、私と言う存在そのものに刻みつける。

「ぐあっは、が……ぎいっぐ、ううううあああああああ  
っ!!!!!」

死んだ方がまし、とはよく言ったもので。



痛みでシヨック死出来ればどれだけ楽であろうか。  
絶える事のない痛みで気が狂えばどれだけ楽になれるだろうか。  
だがその痛みで、狂いそうになる精神が正常状態に引き戻される。  
死にたい。私はただそれだけを望んだ。

「がぐつ、は、いぎいいいいあああつがああああああああ  
あ！！！！！」

だがその望みは叶えられず、自分の存在が壊れ、治されていくのを  
感じているしかできなかった。  
涙すら流せない痛みの中、ただそれが終わるのを待つしかできない。

「  
！！！！！」

既に自分が人の言葉を発しているのかすら分からず、ただ獣のよう  
に叫ぶ。

そして痛みの中で理解させられた。

これが『真言』だと。

自分が望み、与えられた力だと。

自分が今まで使っていたモノは、これのほんの一部分、上澄みでし  
かなかつたのだと。

それを理解した途端、痛みは止まり、私の意識は闇へと落ちた。

S i d e o u t

S i d e : アルビレオ

私は現在、ウエスペルタティア王国の酒場兼宿屋にいます。  
ナギと詠春、ラカンが離宮に、受勲式に出ています。  
私ですか？ 出ていませんよ。上がり症な物です。

あの戦いで造物主を倒すことはできましたが、儀式の発動を止めることはできず、連合と帝国が協力して反転封印式を展開、黄昏の姫巫女ごと封印することでようやく止める事が出来ました。

まあ、その黄昏の姫巫女は現在、昴の寝ている部屋で、昴の様子を見ているのですがね。  
ナギが救出してきました。

「しかし、あれはいったい何だったのでしょうか？」

思い出すのは穴だらけになり、今にも崩壊しそうな塔の前で、自らの血に横たわる昴の姿。

すぐに治療しようと治癒魔法を使いましたが、弾かれてしまいました。

それに驚きつつも、再度治癒魔法を使おうとした時にそれは起きませんでした。

貫通した腹部を、まるで包むかのように、昴の体から出てきた黒い何かが覆いました。

その直後に魔力減衰現象が発生し、治癒も攻撃もできなくなった状

態で私達はただ茫然とそれを見ていました。

そして黒い何かが収まった時、昴の腹部は元に戻っていました。

あの黒い物。私の見間違いでなければ

「文字、のようでしたね」

そう、回転が速すぎて良く見えなかったが、あれは確かに文字でした。

「ですが、何故文字が体から？」

あの後、彼を調べてみましたが、出てきた結果は『人間』というもの。ナギや詠春、ラカン仲間だからと気にしていませんでしたが、気になります。

ですが

「私の『イノチノシヘン』でも、人生を読み取れなかったのですよね」

我がアーティファクト『イノチノシヘン』は他者の人生を収集し、私の力として行使できる物。ほぼ全ての人間の人生を収集できるそれが、彼の人生を収集することができなかった。

まるで、何かに守られているように感じます。

「彼が起きたら、聞いてみましょうか」

それまで酒でも飲んでいましょうかね。  
そう思い、階段を降りようとすると

「アルビレオ」

後ろから声をかけられました。この声は

「アスナ姫ですか。どうかしましたか？」

「スバル、起きた」

「！それは本当ですか？」

「ん」

どうやら、思った以上に早く聞くことができそうです。

Side out

S i d e : ナギ

俺は今、離宮の一角で空を見ている。綺麗に澄んだ青空だが、俺の心は曇っていると云っている。

「お師匠・・・」

消えていった師匠を思う。

昴の言葉では造物主に体に乗っ取られたみて だ。

そしてその昴は今、宿で寝てる。

腹の傷は綺麗に治ったつてのに、アイツの眼はまだ覚めねえ。

「さっさと起きろよな」

聞きて 事が山ほどあんだよ。魔力減衰現象の中でどーやって傷を治したのか。

なんでお師匠が乗っ取られたのが分かったのか。そもそも本当に乗っ取られたのか。

他にもいろいろある。

「ここにいたか」

「んお？」

後ろから声が掛けられる。

「よお姫さん。終わったな・・・全部」

そう言うと、僅かに顔を堅くした気がした。仏頂面でよくわかんね  
けど。

「どうしたよ？ 世界は平和になったってのに何かあったか？ 仏  
頂面が能面みてーになってんぞ？」

「いや・・・」

姫さんが声を濁す。いつもならここでビンタの一発でも飛んでくる  
のに、どうしたよほんと。  
調子狂うな。

「ま、なんだな。これであんたの騎士役は終わりだな。あんたに預  
けた俺の杖と翼、そろそろ返してもらおうか。堅苦しいのは嫌いで  
ね」

肩がこる騎士役からもこれでおさらば。やっぱり縛られんのは俺の性  
にあわねーな。

「ナギ」

「んお？ ゴツ！？」

振り向こうとしたら首を無理矢理ねじられた。く、首が……この女、俺になんか恨みでもあんのか！？  
文句を言おうとしたら

ぎゅっ

なんか、抱きつかれた。

「お、おい姫さん！？ なんだよいきなり！？」

「もう少し……もう少しだけ、私の傍に居てはくれぬか？」

「は？」

「もう……少しだけ……」

いきなり抱きついて何言ってるんだ？ つーからしくねえな。このままじゃ動けねーし。

「あー、なんだ？ もー少し抱きしめてくれるか？ 胸の形が分かる」

そう言った直後

パンっ！！

「めぶおっ！！」

ビンタで吹っ飛ばされた。だが甘い！

空中で態勢を立て直し、ポーズを決めて着地する。

「な、なんでもない・・・忘れるがよい」

「オイオイ姫さん。なんでもないってことはねーだろ。なんだよ、

「もう少しだけ傍に」て？ まさか俺に惚れちまったとか？ 嬉し

いけどそりゃマズくね？ あんた王族だしウブオツ！！」

またビンタされた。だがまだ俺のターンだぜ！

「照れんなくて の。しっかしどーすつかね？ やっぱ駆け落ちエ

ベシユツ！！」

またかよ。つーかビンタのたびに空中回転ってどんだけ強えーんだ

よ。



「いて。マジいて。王家の魔力込めんなよ。俺でも死んじまうぞ？」

「つかラスボス倒して姫に殺されるとかどーなんだよ。笑い話にもなんねーよ。」

「自業自得じゃ・・・今のはなしじゃ、聞かなかった事にせよ」

「そう言っただけで離れていく姫さん。ホントにどうしたよ？  
いつもみてーな覇気がねーじゃねーか。」

「主らにこれ以上迷惑はかけられぬ。妾もこれからは一人で生きていくことになるうでな、少しの気の迷いじゃ・・・許せ」

「ちよ、オイ、待てよ姫さん！」

「もう姫ではない」

「ああ？ 何言っただ。待てっつもの！」

「もう姫じゃないってどっぴいっことだよ？」

「言わなかったか？ 妾は今やこの国の女王となった。二度と姫と呼ぶことは許さぬ」

「な・・・」

「もはや主などが気安く話しかけられる相手ではないのじゃ。ではな」

「おい姫さん！ 待てって！」

「触れるな不埒者が！」

「聞けって！」

「話すことなどないというに！」

「そっちがなくてもこっちにはあるんだよ！」

そう言っつて足払いを掛けて態勢を崩す。

「どっしたよ姫さん。何があつたんだよ。俺の翼はまだあんたのものだぜ？ ちゃんと話せよ」

倒れそうになる姫さんを支えて話しかける。こ　　いっつのは俺のキヤラじゃねーがこっつなりゃ自棄だ。言っつてやる！

「あんたが望むならどこへだって連れてってやる。世界の果てまでだってな」

S i d e o u t

S i d e : アリカ

支えられながらそう言われ、自分の頬が僅かに朱に染まるのを感じる。が

ゴギャツ!!

「ブエアツ!!」

殴り飛ばす。

「何すんだよ！　せつかく恥ずいの我慢してマジメにやってやったのによー!!」

「うるさいお調子者が。主は真面目なのか不真面目なのかわからぬわ」

そう返すも、自分の心臓が早鐘のようになっているのを自覚する。おそらく自分の頬は今、僅かでも朱に染まっているのだろう。

見せるわけにはいかぬ！

「ぜってー何か隠してるだろ姫さん。いきなり抱きついてくるとかキアラ違うしょ」

「・・・すぐに分かる」

「あん？」

「主こそ、何か隠しているのではないか？ 無理矢理明るく振舞っておるのが丸わかりじゃ。動揺しておるのが見え見えじゃぞ？」

「む・・・」

そう返すと何も言えないのか、唸る。

話したくない物を話させようとしたのじゃ、主も同じ気持ちを味わえ。

「俺は話したくない」

「奇遇じゃな。妾もじゃ」

「そりゃ気が合うなってオイ！ じゃあ話すから姫さんも話せよ」

何を言っておるのじゃ「やつは。

「話せば、主は……」

「おう、なんだ？」

「……」

「……やはり、言えぬ。」

「……なんでもない」

そう言ってその場を去る。

~~~~~

離宮の一角で、ただ遠くを見る。

脳裏にこれまでの日々を浮かばせながら。

『なんじゃ、これは？』

『ソフトクリームも知らねえのかよ!!　これは、ソ・フ・ト・ク
リーム!!』

『ソフト・・・クリ・・・クリ?』

『マジかよオイ! 演技じゃねえよな!?』

『仕方あるまい・・・王宮以外は、知らぬのじゃ・・・』

『んなつ、か　　っ! だったら今度、あんたを本格的なデートに連れてってやる!』

『・・・デートとは、なんじゃ?』

『んなことも知らねーのかよ! 手えつないで仲良く散歩することだよ』

『ほう? それはなかなか楽しそうじゃのっ』

『昴が言うには逢引きとも言つらしいがな』

『!!-- この不埒者が!!--』

『メゴッ!!--?』

思い浮かぶのは楽しかったと思える日々。

「案ずるな、ナギ。妾にはもう、そなたの言葉だけで・・・十分なのじゃ」

自分の声が僅かに震えるのが分かる。
このまま泣き出してしまいたい。そんな衝動に駆られる。

「陛下！！」

だがそうはいかないらしい。
即座に女王の仮面をかぶり、対応する。

「何事じゃ」

ガトウと言ったか。その者の報告を受ける。

「時間です。間もなく崩落の第一段階が」

「進捗状況は？」

「封印直後から全艦艇が全力であたっており、現在37%。陛下のお考え通り、式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制でこれまでの所混乱は見受けられませんが、崩落が始まればその限りではなく、全市民の救出は困難を極めるかと！！」

「……分かった。妾も直接指揮にあたる！！」

10話・言の葉を統べる者(前書き)

今回、無理矢理感がぬぐえません。

それでも良ければ読んでやってください。

10話：言の葉を統べる者

Side：昴

意識が覚醒する。

それと同時に自分の中にあつた何かが無くなっているのを感じる。
いや、これは・・・

「完全に体に適合した、と言つところでしょつか」

今まで自分の体にあつた微妙な違和感。

日常では気にならず、力を使えば感じたソレ。

ソレがなくなり、自分の存在に力が満ちている感覚もある。

アレを完全に受け入れたからだろうか？

「もう二度と、あんな経験はしたくないですね」

この世の全ての痛みを、自分の存在そのものに刻みつけられるようなあの感覚。

間断なく刻みつけられる痛みと、その原因である叩き込まれる言葉の意味。

あれのおかげで命が助かったとはいえ、気が狂うかと思つたそれを、二度と味わいたくはない。

「昴、起きてますか？ 入りますよ」

そう言つて部屋に入ってくるのはアルとアスナちゃん。

アスナちゃんに聞いたところ、ナギ達は受勲式に出るために離宮島に行っているらしい。アリカ王女に殴られている様子が目に浮かびます。

「昴、単刀直入に聞きます。あなたは『人間』ですか？」

アルがいきなりそんな事を聞いてきた。

「いきなりですね。そう言われても『人間』だと答えるしか私にはできないのですが」

「では、あなたの体から出てきた文字はいったい何なのですか？ 永い時を生きてきましたが、あのような物を見るのはあれが初めてです」

文字が体から？

「どづいことですか？ 腹部を撃ち抜かれてからの記憶がないもので、そこから説明してもらえると助かるのですが」

「分かりました」

そう言ってアルは説明を始めた。

~~~~~

「傷を文字が塞いだ、ですか」

「はい。私達にはあれが何か分かりませんでした。あなたの体を調べても『人間』という結果しか出ていません。あなたなら、自分の体の事ですから分かると思うのですが」

文字が体を癒した。しかもそれは私が意識を失っている時、あの白い空間にいたときだろう。だとしたら、あてはまるものはただ一つだけ。

「おそらくですが、『真言』でしょう」

「真言が、ですか？ 意識がない時に自動で発動するものなのですか？」

「そこまでは分かりません。この力は貰ったものですから、何らかの手を加えられていたのかもしれない」

「貰ったもの？ どういうことですか？」

しまった。少々口が滑りましたね。どうしましょうか。  
そう考えるも、誤魔化すことはできないでしょう。ならば、話した方が楽ですね。

「私は一度、死んでいるのです。その際に神と名乗るモノに出会いまして」

「神ですか？ にわかには信じられませんね」

それが普通でしょうね。ですが事実なのですよ、アル。

「続けますよ？ なんでも私は神々の夫婦喧嘩に巻き込まれて殺されたらしく、その侘びとしてこの力を貰って蘇らされたのです」

「また情けない死に方ですね」

「そこはほっといてください」

何気に気にしているのですから。

「その際に、力に何らかの手を加えられた可能性がある、と。そう言いたいのですね？」

「理解が早くて助かります」

「この話はナギ達には」

「当然、していません。アルとアスナちゃんに初めて話しましたよ」

そのうち話すつもりですけどね。

「それと、眠っている時に完全に力が体に馴染んだようです。今までできなかったことも、少しはできるようになっているかもしれない」

「例えば、どのような事が？」

そうですね。

「おそらくですが、時間の加速、遅延、停止、空間の歪曲が使えると思います。今まで使えていたものも、効果が上昇していると思います」

「チートがより進化したと、そう言う訳ですね？」

「うっ」

否定できません。

相変わらず死者蘇生と時間跳躍はできないようですが、それでも時

間・空間を使えるようになったのは強い。

まあ、死者蘇生なんて使えても、使うつもりなんてないんですけどね。

あれは世界の理を乱す。決して使ってはならないものです。

それにしても、遅いですね。

ナギ達は何をしているのでしょうか？

これはナギ達が帰ってくる二時間近く前の事。

このとき、私達はまだ気づいていませんでした。

この国の崩落が迫っている事を。

S i d e o u t

S i d e : アリカ

「空中王都の崩落拡大中！！ 本艦の周囲にも強力な魔力消失現象が発生！ 即席の対抗呪文塗装装甲がいつまでもつか分かりません！！！」

「泣き言はいらぬ！！ あと数時間持てば十分じゃ！！！」

戦艦の乗員の悲鳴に近い報告にそう返す。

たとえそうだとしても、諦めるわけにはいかぬ！！

「最も的確に市民を救えるよう最大効率で舟を回せ！！ 捨てて良

い命はない！！ 一人も救い漏らすな！！ これは厳命じゃ！！」

「貧民街の避難作業が難航しています！ このままでは！！」

なんじゃと！？

「理由は！？」

「街の構造が複雑な上、不法移民が多く全住民の把握ができません  
！！」

なんとということじゃ・・・だが、見捨てることなど出来ぬ！

「わかった、ここは任せる」

「陛下！ どちらへ！？」

クルトと言ったか、ガトウの助手の一人が聞いてくる。  
そんなもの、決まっておろっ！！

「貧民街は妾が直接赴き、島ごと不時着させる！」

「しかし！！」

「妾の魔法ならこの魔力消失現象の中でも無効化されぬ!!」

一秒とて無駄にはできぬ!! 行かねばそこに住む民たちが皆死んでしまうのじゃ!!

「いけません女王陛下!!」

『ゴルアアーツ、こんのバカ姫!!』

ええい、なんじゃ!! 妾の邪魔をする者は!!

『おいアリカ!! テメエ、これはどういつこった!?!』

「ナギ・・・」

どうもこうもなからう。

「見ての通りじゃ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。案ずるな、妾もいずれ地獄に落ちる」

『っ! なんて話さなかった、この唐変木!!』

「話しても無駄であろう! 戦いしか能のない主が一人でなんの役に立つ!」



『てめえ、今からそっちに向かうから待ってけ!』

「ここにそなたの力は必要ない!」

このバカは、言わねば分からぬのか!!

「妾を助ける余裕があるなら、避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する!! まだ崩落を始めていない地区を頼む!」

じゃが、この消失現象の中では満足に飛べまい。

「我らの逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪文処理を施してある!それを・・・」

『もう乗ってるよ!! 昴のノワールも一緒だ!』

「ならば良い。そなたらは救出活動に全力を尽くした後この場を去れ」

『何!?!』

「二度と戻るな、これは命令じゃ。最後のな」

『おい、そりゃどーゆーことだ!?!』

ええい、うるさいのうー！

「切るぞ。この通信の間にも、民が死んでゆく。そなた達には世話になった、さらばじゃ。通信終了」

クルトが説明してあるが時間がない。さらばじゃ、ナギ。

S i d e o u t

S i d e : 昴

私は今、ノワールの背に乗っています。

オステイアの崩落、ですか。

魔力消失現象、それによって空中王都を支える魔法が機能しなくなつたから、地に落ちる。

兵士達が懸命に救助活動をしています、それでも助けられない者は出てくるでしょう。

『一人も救い漏らすな』とは、アリカ女王も無茶を言う。

「どうしましょうか」

私の力なら、この現象を止めることも可能でしょう。失われた魔力も、補充することができるでしょう。

だが、それでいいのでしょうか？これが定められた事だとしたら、流れのままにしておいた方がいいのではないか？

不用意に力を使つては、生まれるはずだった者を消してしまうのではないか？

そんな恐怖が、心を覆う。

今さらだという事は分かっています。私がこの世界に来たことで、歴史に狂いが生じているであろう事は既に知っています。

歴史通りにするのなら、見捨てる事が最良。それは分かっています。ですが・・・ですが私は、私の心は助けたいと思っています。

偽善だと分かっていますが、それでも助けたいと思う。

だがこのままにした方が良いのではと思う事もまた事実。

どうすれば・・・。

「スバル、悩んでる・・・？」

舟の方から、そんな声が聞こえました。

顔を向けると、そこにはアスナちゃんが・・・って、危険ですよ！

「アスナちゃん、危ないですよ。中に入っていた方が・・・」

「なんで悩んでるの・・・？」

「え・・・」

何故、私が悩んでいる事を？

「顔に出てる」

「ぐはっ！」

そこまですか！　そこまで顔に出やすいですか、私は！！

「ナギみたいにしないの？」

「それは私に単純に考えて動けど、そういう意味でしょうか？」

「ん」

頷かれました。ナギ、あなた単純認定されていますよ。事実でしょうけど。

しかし私の性格上、それはとても難しいです。

「スバル、考えすぎてる」

「！……」

ああ、そういうことですか。

世界がどうのと考えすぎて、動けなくなっていましたか、私は。

ナギみたいに動けというのは、複雑に考えず、感情の赴くままに動けど、そういう意味ですか。

「ありがとうございます、アスナちゃん。おかげで覚悟が決まりました」

「ん」

「『我らは音を超え駆ける』。ノワール、王都の中心空域に飛んでください。全速力で！！」

グルウオオオオオオ！！

翼を翻し、来た道を戻るノワール。それに気付いてナギ達が舟から出てきますが、今は気にしません。

今回だけ、ただ思うままに、私は力を使います。

~~~~~

全速力で飛んで数分、王宮付近の空域に私はいます。

「ここが中心ですか」

ノワールを滞空させ、息を吸い込む。

始めましょうか。

「『連ねるは言。連言を以て全と為す』」

完全に馴染んだ真言を起動させる。

それと同時に体に魔力とも気とも違う、別の力が満ちるのを感じる。

「『我、言の葉の皇、昂が命ず。沈みし島よ、再び浮かべ。未だ汝ら沈むにあたわず』」

まず、落ちかけた島と、そうでない島を関係なく浮遊させる。

詠っている最中に沈まれたら元も子ありませんし、これで少しは時間が稼げるでしょう。

以前本で読みました。空中王都が空に浮いているのは、島自体にそういう魔法が掛かっており、空气中の魔力を使って沈まないように制御しているからだ。

島が沈むのは、魔力が消失し、その制御が不可能になったから。

ならば、再び魔力を満たせばいい。

「『我、言の葉の皇、昂が命ず。満ちよ、満ちよ。大気に満ちよ。失われしもの、消え去りしもの、源より出でて大気に満ちよ。汝らはまだ消えるにあたわず、再び満ちよ、魔導の素よ』」

失われた魔力を再び大気に充満させる。消失現象があるが、消えないように真言でカバーして満たす。

これでいいですね。消失現象で魔力が失われていく傍から発生、充満するので相殺し合い、いずれ魔力が満ちるでしょう。

世界全体は無理ですが、王都のあたりならまだ何とかありますから。さて、住民が避難することなくなりましたし、クルト少年が忠告したように

「逃げますか」

そう言ってノワールに全速力で離脱するように言う。

それに答え、全速力でその場を離脱するノワール。向かう場所は当然のごとく、ナギ達の乗っていた舟です。

少し経って追いついて、事情を話したら、なぜか皆に殴られました。何故でしょう？

11話：ナギのプロポーズ〜紅き翼、大暴れ〜

Side: 昂

オステイア崩落未遂から数日、それはすなわち私が皆に殴られてからも数日経ったという事。

殴られた後に「何をしに行った」とか、「どうして連れて行かなかった」と言われました。

理由を説明して何とか納得はしてもらえましたが、その後また殴られました、全員に一発ずつ。おかげで頬が痛いです。

オステイアは落ちませんでした。というか、落としませんでした。

『真言』を使い、魔力が消えていく傍から新たに魔力を発生させ魔力消失現象を相殺し、収まるまで発生させ続けました。

その結果、島の高度が下がるだけで済み死傷者も、負傷者こそ出ましたが死者は一人も出ませんでした。

この事で、ガトウとクルト少年から感謝されました。（通信ですけれど）

ですが、事はそれだけで済みませんでした。

メガロメセンブリア元老院に、アリカ女王が捕えられてしまったのです。どうやら彼女は、私達が『完全なる世界』と戦っている時に父王から玉座を篡奪したらしいです。

なんでも、その父王も『完全なる世界』に協力していたようで、クーデター気味に奪い取ったとか。

おそらく、元老院のメンバーでその父王と仲の良かった者の考えでしょう。アリカ女王を『完全なる世界』の協力者として世に公表し、

全ての罪を被せて処刑するつもりでしょう。

現にその情報が既に世界中を駆け巡っています。オステイアの住民はアリカ女王を信じていますが、長く続いた戦争の影響でしょうか。一人、また一人と彼女から離れていき、「災厄の女王」として、人々に対する生贄として二年後に処刑されることになってしまいました。

「気に入りませんね。実に、実に気に入りません」

戦争で疲れ果てていたのは分かります。ですが、戦争終結に一番尽力した人間を贄として処刑するなど、気に入りません。

確かに彼女にも罪はあるでしょう。ですが、それは私達にもありません。いえむしろ、戦争で直接人を殺している私達の方が罪としては重くはない。その私達がなにも責められずに、彼女だけが責められるなど……！

「昴、落ち着け」

「詠春！ ですが……！！」

彼女の民まで彼女に憎しみをぶつけているのですよ！？

彼女が全てを賭けてまで護ろうとした彼らまでが、彼女に贄となることを欲しているのですよ！？何故そんなことができるのですか……！！

ああ、駄目です私。落ち着きなさい。ここで感情を爆発させても何も意味がありません。

深呼吸して心を落ち着かせて……落ち着かせ……無理です。

本当は分かっているのです。今世界には、憎しみと怒りをぶつける事のできる贄が必要だという事は。ですが、それでも納得できません。感情が制御できません!!

「気持ちは分かりますが、これが今とれる最善の選択なのです。今はまだ、動く時ではありません」

「アル……!」

いけません。このままでは感情が制御できず、当たり散らしてしまう。それだけは避けねば……!

「何処に行くのですか?」

「今の私の精神状態では、冷静にいられません。ですから、暫く「紅き翼」を離れます」

「なっ……」

「二年後までには必ず戻ります。それまで、一人で考える時間が欲しいのです」

そう言つてノワールの背に乗る。
アルと詠春が追つてきますが、今は一人でいたいです。

「ナギ達に伝えてください。心が落ち着くまで二年間、私は一人で行動すると」

「待て、昴!!」

「それでは、二年後に……」我らに害なすことあたわず、我らは音を超え駆ける』」

ノワールに全速力で離脱してもらつ。今の私では、彼らに害を与えかねない。そんな精神状態で仲間の傍には居られません。ですが、そんな精神状態だからこそ気がつきませんでした。ノワールが飛び立つ直前に飛び乗ってきた、一人の少女の存在に。

S i d e o u t

S i d e : ア ル ビ レ オ

……行ってしまいましたか。

「昴、何故……」

「それだけ彼の怒りが強いという事でしょう。彼は仲間を何よりも大切にしますから、私達に当たり散らしたくなかったのでしょう」

彼も本当は理解しているでしょう。今世界に必要なのは何なのか。理性では分かっているいても、感情がそれを認めたくないから彼は混乱しているのでしょう。

若いですね。

「それよりも、見えましたか詠春」

「ああ、ノワールが飛び立つ直前に、アスナ姫が飛び乗っていった。あの小さな体のどこにあんな脚力と跳躍力があるのか・・・」

「気にするところはそこですか」

「昴なら大丈夫だろう。いくら感情が暴走しそうでも、小さい子供に当たり散らすことはないはずだ」

「随分と知っているのですね」

「これでも「紅き翼」の苦勞人仲間だからな。嫌でも愚痴り合つさ」

そうですね。なにについて愚痴っていたのか気になりますが、まずは

「昴の言葉をナギ達に伝えるに行きますか。そして、これからの行動の予定を話し合いますよ」

「そうだな。二年後には昴も戻ってくるだろう。その時はもう一度殴ってやるが」

そうですね。

Side out

Side:ガトウ

なんてこつた。

まさかこんな手を使ってアリカ女王を貶めてくるとはな。

女王が先王からクーデター気味に王座を奪ったのは事実だが、それは先王が『完全なる世界』に加担し、魔法世界を無に帰そうとしていたから。

世界を守るためにはやむをえない犠牲だと思っていたが、元老院め。

己の利権を守ることにしか頭がない老害どもが、いったい何を考えている？

ウエスペルタティア王家のみが知る秘密でも暴こうつてののか？

それともこの世界を支配しようとも思っているのか？

今分かっている事は、奴らが黄昏の姫巫女をその手に収めようとしているという事だけ。

だが、これに関しては問題ないだろう。なんせ彼女は今、「紅き翼」にいるからな。

墓所の最奥部に封印されたままでいるとせいぜい勘違いしておけ。

「だが、どうするか・・・」

黄昏の姫巫女に関しては大丈夫だろう。

だが問題は女王陛下の事だ。投獄された場所が、よりにもよってケルベラス無間監獄とは。これでは手が出せない。

連中の不正の情報を調べたいが、おそらく俺は監視されているだろう。これでは俺も動けない。だが・・・

「これで終わると、思わないことだ・・・」

処刑は二年後。その時にあいつらも動くだろう。それまで、出来る範囲の事しておくか。

S i d e o u t

～～二年後～～

S i d e : : ナギ

俺達は今、シルチス亜大陸の紛争地帯にいる。
姫さんの言葉に従って、傷ついた奴らを助けるためだ。

「う．．．」

「もう大丈夫だ。今治療してやる」

そう言っつて治癒魔法をかける。

大戦が終わっても、こういった紛争は無くならない。
なんでだろうな。

「あ、りが．．とう。立派な魔法使い．．ナギ」

立派、か。

皮肉なもんだな、戦争で殺しまくった俺が、世界を救ったら一転して「立派な魔法使い」だなんて。
ホント、皮肉だぜ．．．。

「ナギ、詠春さん！」

そう思っていると、タカミチが声を血相変えて走ってきた。
なんかあったのか．．．？

「どうした、タカミチ君」

「クルトから連絡が！ アリカ様の事です！！」

「クルト君から？ いったい何が」

『アリカ様の処刑が、十日後に行われます！』

「なんだと！？ それは本当かクルト君！！」

『はい・・・』

そっか・・・姫さん、処刑されんのか。

『おそらくアリカ様は今、絶望の底にいるのだと思われます。自分が全てを賭けてまで護ろうとした民に裏切られ、謂れのない罪を着せられ大罪人の烙印を押されたのですから・・・』

そう言うと、少し息をついてクルトは話し出した。

『アリカ様はこう言われました。『妾が多くの憎しみを受け処刑されることで、世にある不幸を少しでも減らすことができるのなら本望』だと。このまま捨て置いてくれと・・・』

「アリカ様・・・」

詠春の声が少し震える。背を向けてるからわかんねーが、多分涙ぐんでんだろーな。

「・・・なるほど。あのバカ姫らしい台詞だな」

『なるほどって、ナギ！！ 救出に行かないつもりですか！？』

「クルト！」

「アイツはこう言ったよ。「女一人救ってる余裕があるんなら、一人でも多く、謂れのない不幸で苦しむ無辜の民を救え。世界を救え」ってな」

『あの方も今、謂れのない罪で精神をすり潰され、希望を見失っておられるのです！ あなたが行かねば、誰があの方の名誉を守るのです！ 好きな女の一人も救えず、何が英雄ですか！！ 彼女を救い、真実を明らかにせねば！・・・ナギ！！』

クルトが声を張り上げる。だけどな、それでも・・・

『っ！！ 見損ないましたよ、ナギ！！ あなたの今の力と名声があれば、もっと大きく世界に関われるはず！！ 何故こんな地味な活動を続けるのです！？ それで世界の、何が変えられるというのです！！！？』

「それでも、また一人の命を救えたよ。クルト」

『っ！ 失礼します!!』

そうやってクルトは通信を切った。

「ナギ、どうする？ 彼が言うには、場所はケルベラス無間監獄らしいが・・・」

詠春がそう言う。

・・・十日後、か。

Side out

Side: 昴

「そうですね、十日後に処刑が・・・」

『ハイ、ナギ達にも伝えたのですが』

「良い返事は得られず、ですか」

まあ、それは分からないでもない。
オステイアが落ちるかもしれない。あの時、アリカ女王は自らの

手伝いではなく民を助ける事をナギに命令した。間接的には女王に力を貸したようなものだが、直接ではない。おそらくそれを引きずっているのでしょう。

まったく、あのバカは……。

「クルト少年。あなたはナギがケルベラスに行かないと黙っていませんか？」

『彼のあの反応では、来るようには思えません。だからこそ、別行動している昴さんにこうして伝えてはいるのです』

やれやれ、この少年は分かって無いですね。まるで二年前の自分を見ているようです。

「クルト少年、そう思っているのなら、あなたはナギについて勘違いしているでしょう。あのバカはケルベラスに行きますよ」

『っ！ 何故そう言い切れるのです！？ 彼は僕の言葉に何も返さなかったのですよ！』

「彼は二年前の女王の命令を守っているだけです。おそらく、感情を出来る限り抑えてやっているでしょう。彼が自分の抱く感情に気付く事が出来ているのならば、救出しに行かないわけがありません」

『どづいことですか？』

やれやれ、君も気付いているでしょうに・・・

「ナギは女王に恋愛感情を抱いているのでしょうか。曰く、一目惚れ、というやつです。初めのころこそ気付いていないようでしたが、二年前のあれで大きく揺れているはずですよ」

『は？』

「君はナギに対して、『好きな女』と言ったのですよね？ 彼が女王に対して抱いている想いはおそらくlikeではなくlove。たんなる『好き』ではなく、『愛』でしょう」

今だからこそわかる。最初のころこそ平然としていたが、彼女と相対したあと、若干ですが頬を染めていました。会話でも、女王の話題が出たら真っ先に反応していましたし。

「そんな思いを持つている相手が命の危機なのです。感情で動く彼が、助けに行かないはずがない」

『では、あなたは！？ あなたは救出しに行かないつもりですか！』？

「早とちりしていますね。誰も行かないとは言っていないでしょう。助けに行きますよ。彼女が死んでしまったら、アスナちゃんは一人きりになってしまいます。家族を失うことほど、つらいものはあり

ません」

『!?!』

「場所はケルベラスでしたね。では、十日後にまた会いましょう」

そう言って通信を切る。

急ぎますか。

「姉さま、殺されるの?」

「アスナちゃん、今の話を聞いていたのですか?」

「ん」

頷いて私の服を掴み、見上げてきます。

「スバル、姉さまを助けて・・・? 姉さまが死ぬと、ワタシも悲しい」

「無論です。ナギ達も助けに行くでしょう、安心してください」

そう言って抱きしめる。

そう、絶対に助け出す。この少女を独りにしないためにも。

それにしても、二年でここまで感情を育てるとは。二年前、飛び乗ってきた彼女に気付いてどうしようかと思いましたが、「ついていく」と言われてそのまま旅と救助活動に連れて行ってしまいました。

様々な場所で、様々な状況を見たのが成長を促しましたかね？

私としては、ついてきてほしくはなかったのですが。

そういえば、何故私についてきたのでしょうか？

S i d e o u t

〓〓十日後〓〓

S i d e : クルト

「それではこれより、戦争を引き起こした重戦争犯罪人、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの処刑を執り行う!!」

死刑執行人がそう読み上げる。

ここは連合最辺境の収容所、ケルベラス無間監獄。

現在アリカ様は、巨大な穴の淵に取り付けられた橋に立たされ、処

刑の時を待っている。

何故こんなことができる！？ あの方ほど戦争を止めるために尽力した方はいないのに！民を守ることには力を尽くした方はいないのに！！何故こんな残虐なことができる！！？

「魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は、魔法使いにとつてまさに「死の谷」。旧き残虐な処刑法ですが、この残虐さを以てようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げる事になりましたよ」

いやらしい声でそう言う元老院議員。

お前たちこそが裁かれるべきなのに……！！

「歩け！」

「触るな下郎。言われずとも歩く」

そう言って歩き始めるアリカ様。

ナギは、昴さんは……「紅き翼」はまだですかっ！！

そして橋の端につく。

彼女はそのまま、まるで水に飛び込むように身を投げた。

連ねるは言。連言を以て魔と為さん

そのとき、そんな声が何処からか聞こえた。

S i d e o u t

S i d e : アリカ

空しい。恐怖も何も感じない。

世界を守るために駆け、民を守るために力を尽くしたその終着が、この空しさ。

護るべき民に裏切られ、世界の贄となることを望まれて・・・それでも、何も感じない。

私は誰かを護れたのだろうか？ 何かの役に立てたのだろうか？

暗く、冷たい、奪い奪われるだけの王宮に生まれ落ちて。

血で血を洗い、喰らい合うだけの日々を生きて・・・

それでも世界を、民を、護りたいと願った。

父上はかつてこう言った。

『人の生も、この世界も、全ては儚い泡沫の夢』だと。

たとえそうでも、護りたいと願った。願ってしまった。

駆け抜けて、その終着がこれならば、それでもいい。

私の死で、人々に安寧がもたらされることを、せめてもの慰みとしよう。

アスナも、紅き翼がなんとかしてくれるであろう。

元老院は未だ、宮殿の最奥部にて封印されていると思ひ込んでいる
だろう。

彼女にはせめて、平穩を生きてもらいたい。

ただ一つだけ、心残りがあるとすれば・・・

「ナギ・・・」

出来る事ならば、もう一度だけ

「・・・さらばじゃ」

主の顔を見たかった・・・

「なに諦めてんだよ、バカ姫」

なぬ？

Side out

Side：ナギ

つたく、このバカ姫は。

勝手に絶望して諦めてんじゃねーよ。

「いつまで目え閉じてんだよ。ねてんじゃねーだろな？」

「え．．．？ ナ、ギ．．？ あれ？ 何故主が地獄に？ あれ？」

225

何勘違いしてんだこの姫さんは。
つーか勝手に殺してんじゃねーよ。

「バーカ、あんたを助けに来たんだよ。アリカ」

「は．．．？ 何故じゃ？」

こゝこの姫さんは．．．

「何故、何故主がここにおる？ なぜふわっ！？」

あーあー、ごちゃごちゃうっせーな。
周りの状況考えろってんだ。

「何故主がここにおるこの愚か者め！　いくら主でも自殺行為じゃ
！！　魔法の使えぬこの場では、主とて普通人じゃろう！　一撃で
も攻撃がかすれば即死は免れぬ！　無謀にも程があるじゃろう！！
何を考えておるこの鳥頭！！」

うっせーよ！

確かにヤベ　状態だよな。普通なら！！

「確かにいつもの状態じゃあヤバかったろうさ！　だがな、忘れた
か！？　俺たちには不可能を可能にする奴がいるんだぜ！？　『雷
の暴風』！！」

そう言つて魔法を発動させる。普通なら消えるだろうそれは、勢い
を一切落とすことなく魔獣の群れに風穴をあけた。

「な・・・バカな！　ここでは魔法は使えぬはず！　何故魔法が使
えるのじゃ！！」

「昴の力を忘れたか！？　『真言』でここを脱出するまで使えるよ
うにしてもらつたんだよ！！　ほんと、アイツの力は反則だよな！

！ オステイア崩落も、アイツが防いだんだぜ！？」

「なっ……」

おーおー、やっぱり驚いてんな。

俺も驚いたっつーか、もう呆れたな。あんなときは。

「それに、クリアの景品がアンタだってんなら、このスリルも悪くねえー！！」

「何を言ってるおる！？ 妾は何故かと聞いておるのじゃ！ 何故ここまで危険を冒して妾を助ける！？ 無意味であろう！！」

「忘れたのかよ！？ 前に言っただろ！！ どこへだって連れてってやるってな！！」

「！ り、理由になつておらぬ！ 妾はもはや、そなたの主君であるどころか王族ですらない！ かの戦争を引き起こした大罪人「災厄の女王」じゃ！！ 妾の救出に意味などない！！」

いまなんつったこのバカ姫！！

「妾の価値はもうこの死にしかないのじゃ！ たのむ、このま」うっせー！「まっ！？」

頭突きで黙らせる。状況考えろってんだよほんとによ。

「しゅちやしゅちやうっせーっつの！ この箱入りは・・・」

言わなきゃわかんねーんなら言ってやるよ！！

「理由だ！？ 知りたいんなら言ってやる、耳かっぽじってよく聞けよ！！ 俺が！ あんたを！！ 好きだからに決まってんだろーが！！！！」

「は？」

おい、なんだそのアホ面は。

「傷つくぜえ。なにが世界を救えだよ。好きな女一人救えねえ奴に、世界とか救えるわけねえだろ、バカ」

お、顔真っ赤だ。めずらしーな。

「で、あんたはどうだ？ 俺の「ト」どぶっ思ってる？」

「な、何故妾が言わねばならぬ！？」

いや、だってよー。

「俺が行ったんだからフツ 言うだろ」

「そ、そうなのか？」

「おう、昴じゃねえが、それが礼儀だ。一般常識だ」

「そ、そうか」

そーいや王族だったんだよな。一般常識知ってんのかね？

「しかし、妾は王族であるが故、もともと私心は許されぬ。それどころか今の妾は「災厄の魔女」という大罪人じゃ。そのようになうわつ「うっせーっつの「うきゅー!？」」

再度頭突きで黙らせる。今のあんた王族じゃねーだろが。

「何をするのじゃー!」

「あんたさつきももう王族じゃねーつつただらうが、自分で。それに「災厄の女王」もさつき死んだ。アンタを縛るもんはもう何もない。今のアンタはただ一人の人間、アリカだ」

「一人の・・・人間・・・」

「そ。そーゆーアリカさんとしてはどう思ってるか聞きてーんだ」

「な・・・う・・・その、そういう意味でなら・・・その・・・」

「聞こえねえすー。なんすかー？」

「嫌い・・・では、その・・・」

「声小さいすー」

全然聞こえねーよ。ホントは聞こえてるけどな。

「・・・!! ああそうじゃー! この二年、主の事を考えぬ日は一日とてなかったわ!! それがどうした悪いか!？」

「いや、悪かねえ」

そう言って引き寄せて、唇を塞ぐ。

一瞬か、それとも永遠か。そんな感じを持ちながら唇を離す。

「遅れてわりい。この瞬間しかなかったんだ」

「ぶっ・・・っく・・・」

嗚咽を漏らしながら涙をこらえてるんだろう。
その声が、涙が、俺の胸を絞めつける。

「・・・なあ、アリカ」

「む？」

「結婚すつか。アンタの罪も後悔も、全部一緒に背負ってやるぜ」

「・・・」

「なっ」

「む・・・はいっ」

花が開くような笑顔で、彼女はそう答えてくれた。

Side out

Side：タカミチ

「ラカン・・・インパクトオツ!!」

ラカンが気を圧縮した拳圧を放ち、それで重装備の兵が吹き飛び・・・

・

「斬空閃っ!!」

詠春さんの飛ぶ剣圧で鎧が切り裂かれ・・・

「フッフ・・・」

アルが重力魔法で押しつぶし・・・

「・・・・・・」

師匠が居合拳の拳圧で空中から狙い撃ち・・・

「『降り注ぐは流星雨。傷つける事はなく、されど衝撃にて吹き飛ばさん』」

昴さんが真言で隕石群を降り注がせる。

たまに隕石が兵に直撃しているけど、物理法則を無視した感じで遠くに吹っ飛んでいく。

真言の内容から死者は出てないだろうけど、ハッキリ言って、阿鼻叫喚？ それとも地獄絵図？

「あの、昴さん？ 流石に、やり過ぎでは……?」

クルトが流石に哀れに思ったのか、昴さんに言いに行く。
うん。僕もそう思うよクルト。だけど……

「クルト少年。私は今、とても怒っているのです。この程度でやめるなどとんでもないですよ」

「この程度!?!? これでもだましな方なんですか!?!?」

うん、そうだよね。信じられないよね。

僕も信じられなかったよ。けどほんとにこれでましな方なんだよ。本気で来た日には……あ、あれ? なんて目の前が真っ暗に? あれ? なんて体が動かないうえに震えてるの? あれ?

「タカミチ! しっかりしろタカミチ!! 戻って来い!!」

「はっ!?!?」

気付けばクルトが肩を掴んでゆすつてた。

なんか、トラウマのスイッチ入ってた!?!? もう二度と体験したくないようなものを見たような気が……

「さあ、さらに隕石の数を増やしましょうか」

「もうやめてあげてください……！」

流石に可愛いそうです……！

12話：鍋・・・鍋？（前書き）

ナギがおかしくなっていました。

できれば生暖かい目で見てください。

12話：鍋・・・鍋？

アリカさんをケルベラス溪谷より救出して既に三ヶ月が過ぎました。時が流れるのは早いものですね。

さて、戦争も終わりましたし、この三ヶ月で保護した戦災孤児の行き先も決まりました。

大多数の子はアリアドネ に行くみたいです。

あとやることと言ったら・・・何がありましたっけ？

正直に言って、何かしていないと嫌なんですよね。

アリカさんを救出したあの後から、ナギはアリカさんと四六時中イチャついていますし。もう砂糖を吐くとかそういうレベルじゃないですよ。蜂蜜を吐いてもまだ足りないレベルでイチャついているですよ、あの二人。

ジャックはともかく、アルすら辟易するレベルでイチャついているのですよ。

ああ、思い出しただけでまた胸やけが・・・吐き気が・・・

ですが、やることがないんですよ。趣味の遺跡散策や歴史研究も、出来る範囲では調べつくしてしまいましたし。いつそのことメガロメセンブリア元老院の書庫に侵入して歴史の資料を全部盗んでしまいませんか？ 出来ないことはないですし・・・」

「流石にそれはやめる！」

詠春に怒鳴られました。何故私の考えが分かったのでしょうか？

「後半から声に出ていたぞ」

「なんと!？」

バカな・・・この私が、そんな事を？

声に出すなどと、そんなことを私がするなんて・・・

「ほ、本当ですか？」

「ああ、正直に言っただけかなり不気味だったぞ」

「ど、どの辺りから声に出ていましたか？」

「メガロメセンブリアからだな」

そこからですか・・・

ううむ、しかしですね。

「あれを長時間見るよりは・・・」

「気持ちは分かるがそれでもやめろ。大体、バレたら大事になるだろう。我慢しろ」

「あれを・・・ですか？」

そう言っつて後ろを見る。

そこにはナギとアリカさんがいて・・・

「アリカ・・・」

「ナギ・・・」

見つめ合いながら、互いの名を呟きあっているんですよ。

一瞥するだけで桃色の空間が二人の周囲に確認できますよ。周囲20m以内に誰もいませんし、一番近いアルでさえ22mくらい離れています。

そしてまた周囲を気にせずキスをして・・・あ、アルが顔を顰めました。

「・・・あれを、さらに我慢しろと？　あなたはそう言っつのですか？　詠春」

「・・・すまん、私が悪かった」

最初は祝福しましたよ？　互いの想いが通じ合っつて、世界がとても輝いて見えたでしょうから。

それから二週間もまあ、耐える事は出来ました。初々しい恋人のようっつで、見ていて楽しかったです。ジャックとアルもからかっつていましたから・・・。

ですが、これで三ヶ月。三ヶ月ですよ？ あの雰囲気を出しながら三ヶ月ですよ！？

食事の時も、移動するときも、果ては眠るときまであの桃色空間を出しているのですよ！！

しかも桃色空間の範囲が狭まるどころか逆に拡大しているんですよ、現在進行形で！！

これ何の拷問ですか！ もう無理です！！ 耐えることなどもう出来ません！！！！

・・・誰に対していつているのでしょうか、私は。

「だいたい、ストレスなどは大丈夫なのでしょう？ もう三ヶ月も彼女は隠れ家を出ていませんし」

そう。処刑の時から三ヶ月、彼女は隠れ家を出ていません。公には処刑されたことになっていますが、街に出て生きているのがバレたら大事になりますから。

彼女もそこは納得してくれたのですが・・・

「ナギがな・・・」

「いくらなんでも変わり過ぎでしょう、あれは・・・」

街に買い出しに出かけようとすると、まるで今生の別れかのように抱きしめ会つのですから。

そして帰ってきたら帰ってきたでまた抱き合って・・・

どこの新婚夫婦ですか、まったく・・・新婚でしたね、そう

言えば。
というか、あなたのキャラではないでしょうナギ。変わり過ぎて気持ち悪いくらいですよ？

「落ち着くまで、耐えるしかないのでしょうか・・・」

「落ち着くまでに年単位の時間が必要な気がするが・・・」

ああ、今までとは違う方面でのストレスが・・・
甘い。まき散らす空気が甘過ぎて吐き気が・・・うぶ。

「スバル、お腹減った」

「ああ、アスナちゃん。もうそんな時間ですか？」

「ん」

「そういえば今日は昴が当番だったな」

そうですね。と言っても料理をするのは基本的に私と詠春の二人だけ。ガトウもたまに作りますがあまり作りません。アルは手伝おうともしませんし、ナギとジャックは完全にサバイバル料理しかできません。

アスナちゃんとアリカさんは王族だったので料理スキルは当然ゼロ。さらにアリカさんは味に極めて煩いと来ます。

そうなると自然とメンバーの中でも料理スキルの高い私か詠春が料

理当番になるわけで。

へたな物を出したら文句が飛んでくるわけで・・・あれ？　なんで目から水が出るのでしょうか？

「ど、どうした昴？　いきなり涙を浮かべて」

「いえ、少し、この世の不条理を感じていました・・・」

塩や胡椒、ハーブと言った調味料は高いんですよ？　最初のうちは、前の世界とこの世界の物価の違いに飛び上るほど驚きましたよ。前の世界では500円で買っていたものが、こちらでは日本円で2000円近くかかるんですから。

そうなると消費を抑えるために、必然的にあまり調味料を使わないで済む料理を作ることになるわけです。

魚の塩焼きに、焼肉に・・・ああ、鍋も作ったことがありましたね。ん？　鍋？　・・・あ。

「つかぬことを聞きますが詠春。あなたは日本の出身ですよね？」

「ああ、日本の京都出身だ。それがどうかしたか？」

「それはつまり、この世界には転移で来たということですよね？」

「ああ、ゲートポートというものがあってな。それを使ってナギ達と一緒にこっちに来た」

よし、ならばすることは一つだけ。

「五日後に旧世界に行きましょう」

「いきなりどうしてそうなった!？」

「以前、ジャックが襲いかかってきた時があったでしょう？ 鍋をつついていたときに」

「確かにあったが、それがどうして旧世界に戻ることに繋がるんだ?」

鈍いですね。というか忘れていたのでしょうか？
ありそうですね。戦争が終わるまで濃い日々の連続でしたから。

「あの時に言ったでしょう。戦争が終わったら、アスナちゃんを連れてどこかに鍋を食べに行こうと」

「そう言えば、そんなことも言っていたな」

「鍋は日本の料理。そして日本は旧世界にあります。魔法世界ではアリカさんは出歩けません、旧世界でならほとんどの人間がアリカさんの事を知らないと言っていいでしょう。周りを気にせずに出歩くことができ、ストレス発散にもなり、さらにいろいろな物を食べることもできます」

「そうだとしても移動はどうする？ ゲートポートでは幻術などは効果がないぞ？ 入出の手続きも時間がかかる」

「私の力をお忘れですか？ 顔や肌の色、声、背格好は私がなんとかします。手続きの方はガトウに頼みましょう」

「俺か？ 真言で移動はできないのか？」

「出来ないことはないでしょうが、向こうの金銭を持っているのですか？ 生憎ですが、私は一銭も持っていませんよ」

「む・・・」

「私も手持ちはさほどないな・・・」

私は死んでから此方に来ましたしね。手続きの方はそっちの方面も視野に入れてのことです。

「という訳で頼みましたよ、ガトウ」

「そこで丸投げするか・・・」

仕方ないでしょう。私達にはそう言った伝手はないのですから。伝手が豊富にあるあなたが適任です。

「さて、そうと決まったら食事にしましょうか。アスナちゃん達は

何がいいですか？」

「なんでもいい」

「それが一番困るのですけどね……」

「あ、じゃあ僕焼きそばが食べたいです」

「なっ、ずるいぞタカミチ！ だったら僕はオムレツで……」

「何種類も作るのは無理ですから、一種類だけにしてくださいねー」

そう言うのとどれがいいかを言い合うクルト少年とタカミチ少年。

ガトウと詠春はそれを微笑ましげに見守り、アスナちゃんは興味深そうに観察。

アルとジャックは歩いてきて、ナギとアリカさんは相変わらず桃色空間を展開しています。

平和ですねえ。

「まあ、旧世界に戻るのには賛成だがな」

「おや、どうしたのです詠春？ 顔が何やら緩んでいるようですが」

「日本に戻れるのなら、婚約者に会いに行けるからな」

なんですと！？

驚愕のあまり、背景に電撃が走り、顔が劇画チックになった気がし

ます。

「・・・なんだ、その反応は？」

「婚約者、いたのですか？」

「どつという意味だ、おい・・・」

いえ、他意はありませんよ？ ただ、意外に思っただけです。

くく五日後くく

そんなこんなでやって来ましたが、旧世界は日本の京都。
まずは詠春が婚約者に顔を見せに行くそうです。

ゲートポートで止められるかどうか心配でしたが、なんとというか、
拍子抜けでした。

警備の人間はほとんどいませんし、私達が「紅き翼」だと知ったら
握手やサインを求めてくる人が多かったです。こんなこと言うのも
なんですが、仕事してください。

なんでも、警備が少ないのは療養のためだとか。

あれですかね？ 処刑の日に、隕石を降らせたのはやり過ぎましたかね？

聞けば元老院のメンバーにもトラウマになった人がいるらしいです。そこはまあ、いいのですけどね。元老院は嫌いですから。

まあ、そこは今は置いておきましょう。

現在、私達は関西呪術協会という組織の総本山に向かっています。なんでも、詠春の婚約者がそこにいるらしく、詠春が連絡したところ歓迎してくれるとか。

西洋魔法使いが二人いるのですが、大丈夫なんですかね？

で、大通りを歩いて向かっているのですが・・・

バキヤアツ！

「へブツ！！」

「てめえ、何アリカに色目使ってたんだコラ・・・」

「こ、このガキ・・・！！」

アリカさんがチンピラにナンパされました。まあ、十人中十人が振り向くような美人さんですからね。ナンパされてもおかしくはないのですが、そうなる当然、ナギが攻撃的になるわけです。現に殴ってしまいましたしね・・・

「てめえ、俺達が誰だか知ってやってんだろっな！！」

「知るかポケ！！　アリカに手え出すつもりなら俺を倒してからに
しやがれ！！」

「なめてんじゃねえぞガキ！！　おつお前ら！　やっちまえ！！」

『応！！』

「上等！　かかってこいやあ！！」

そして始まる大乱闘。まあ、すぐに終わるでしょうね。

~~~~一分後~~~~

「けっ、雑魚共が」

『・・・・・・・・』

終わりましたね。それでは

「急いで逃げますよ」

「あん？　なんでだよ？」

「いつ警察が来るとも知れませんが。速いうちに離脱しますよ」



「ぶつ飛ばしやいいじゃねえか」

「余計に悪くしてどうするんですか!」

さっさと行きますよ!

「オイ昂! 一人で先に行こうとするな! 道筋分かってるのか!」  
「?」

・・・そうでした。

~~~~~

途中いろいろあって、ようやく関西呪術協会総本山の入口にやって来ました。

警察ですか? 来る前に逃げましたよ。捕まって時間を潰したくはなかったですし。

で、現在私達は千本鳥居という場所を進んでいます。詠春に聞きました。

実際に千本はないでしょうけど、かなりの数の鳥居があります。どれくらい昔からあるのか、調べてみたいですね。

「なー詠春。まだつかねーのか?」

「お前はさつきから何回同じことを聞いている。もう少しだから我慢しろ」

「そーはいつでもよ、アリカが疲れちまうだろ」

「ナギよ、私はまだ大丈夫じゃぞ？　そう心配するでない」

「・・・疲れたらすぐ言えよ」

「うむ」

「・・・どうしましょう。この二人を今すぐ置いていきたい私がいま
す。」

周りを見れば、アルとジャックは顔を顰め、ガトウは呆れ、クルト少年とタカミチ少年は顔を赤らめ、アスナちゃんはただじっと見ています。

まだですか！　まだつかないのですか詠春！　早くついてください、具体的にはこの二人が桃色空間を展開する前に！！

そう切実に思い、歩くこと約十分、開けた場所に出ました。しかも桜の花びらが舞い散っています。綺麗ですね、季節外れですけど。

そして視界に入るのは平安時代を彷彿とさせる寝殿造りの日本家屋。眼に見える範囲だけでもかなり広いです。築何年か気になりますね。
・
・

そう思っていると家から出てくる姿が一人。なにか、急いでいるよ

うな感じがします。

「詠春さん！」

「近衛殿！」

名を呼ばれた詠春が答えます。なるほど、彼女が詠春の婚約者ですか。

こちらもまた美人さんですね。

カリスマで皆を引っ張っていくアリカさんとはまた別の魅力が感じられます。

強いて表すなら、大和撫子という表現がぴったりとあてはまるでしょうか。

花にたとえると、アリカさんを薔薇とするなら、彼女は桜でしょうか？

詠春に向かって走ってきています。

・・・おや？ なにか、彼女の纏っている空気が変わったような？

「近衛どのぶろおっ!？」

「今までなにをしていたんですか!！」

・・・今の、鳩尾に掌底を打ち込みましたね。しかも気を纏った一撃を。

それで詠春は吹っ飛ばされ、地面をゴロゴロと転がって行きます。

あ、木にぶつかって止まりました。

おお、よろめきながらも立ち上がりました。生まれたての小鹿のように震えています。

「お父様のいる麻帆良に行ってからほとんど音沙汰なしで、風の噂で戦争に参戦していると聞いて・・・」

「こ、近衛殿」

「心配したんですよ・・・」

「近衛殿・・・」

そう言って涙声で抱きつく近衛さん。どうやら心配でたまらなかったようです。

「どうか詠春、あなた何をやってるんですか。婚約者を心配させるなんて、なっていますよ。」

「せめて連絡の一つでもしておきなさい。」

「って、なにか桜色の空間が広がっているような気が・・・？」

「あなたもですか！ あなたものですか詠春！！」

「くっ、どうしましょう。いくらなんでも数年間離れていた恋人達の逢瀬を邪魔したくはありません。しかしこのままではまた胸やけが・・・」

「なんじゃ、良い雰囲気じゃな」

「俺達と同じくらいか？」

「な、何を言っている。バカ者・・・」

そこ！ 何をしているのですか！！ 頼みますから張り合わないでください！！ 桃色の空間を作り出さないでください頼みますから！！！！ む、胸やけが、吐き気がああ！！

「あの、詠春さん。此方の方々が？」

「はい、共に戦争を戦い抜いた仲間達です」

近衛さんがこちらに気付き、詠春に紹介を求めてきました。ありがとうございます、近衛さん。あなたのおかげで、あの桃色空間から逃げることができます。それでは、自己紹介をしますかね。

「お初にお目にかかります。緋乃宮 昴と申します」

「初めまして、アルビレオ・イマと言います。どうぞお見知りおきを」

「ジャック・ラカンだ。ラカンでいいぜ」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと言います。どうぞよろしく」

「えと、タカハタ・T・タカミチです！」

「クルト・ゲーデルです」

「アスナ」

「ナギ・スプリングフィールド」

「アリカという。よろしくたのむ」

アスナちゃん、アリカさん、せめてフルネームで名乗りましょうよ。名前の長いガトウやタカミチ少年もしているんですから・・・

「昴さん、アルビレオさん、ラカンさん、ガトウさん、タカミチ君、クルト君、アスナちゃん、ナギさん、アリカさんですね。覚えました」

そついうと居住まいを正して・・・きれいな姿勢ですね。

「ようこそおいでくださいました。関西呪術協会は、あなた方を歓迎します。ごゆるりとなさってください」

そう言いました。

本当に大丈夫なのでしょうか？ 心配です。

~~~~~

時間が過ぎて、現在は夜。

舞い散る桜の花びらを、月明かりが照らす幻想的な空間で現在、私達は鍋をつついています。

え？　なんでわざわざ外で食べているのかって？それはですね、ナギが

『堅苦しい礼儀作法で食う料理より、大勢で気楽に食える鍋にしよ  
うぜ。外の花もきれいだしよ』

と言いだしたんですよ。

何故京都に来てまで自分達で作った鍋を食べなければならないのかと問いましたが、以前の鍋に参加していなかったメンバーのほとんどが興味を示し、結果として外で鍋をすることになりました。  
で、現在・・・

「ほう、これが鍋とやらか。煮込み料理のようじゃが、何か手順と  
言うものはあるのか？」

「うまいもんから入れてきやいいんだよ。ほら肉入れるぞー」

「だあつ！　貴様またかナギ！　以前にも言っただろつが、まずは  
野菜を入れてだな・・・」

「そんなちまちまやってんじゃないよ。一気に入れりゃいいだろが、ホレ」

「ば、バカ、ラカン貴様！ そんな一気に入れたら火が通らないだろうが！！」

「ふふ、鍋將軍再びですね、詠春」

「あの、それを言うなら鍋奉行では？」

「ほう、なかなかうまいもんだな。素材のうまみが引き出されているというか・・・」

「は、箸が使いにくいです・・・」

「スバル、あれ取って」

「はいはい、これですか？」

「ありがとうございます」

「熱いですから、気をつけてくださいね」

「ん」

なんと表現するべきでしょうか？ 言葉が見つかりません。まあ、皆楽しそうに食べていますからいいでしょう。大勢で楽しめるのも鍋の魅力の一つです。そう考えると、ナギの提案もなかなか良いものですね。



しかし、ガトウが鍋をつつく姿はやけに様になっていきますね。なぜでしょうか？

・・・日本酒も似合いそうですね。試してみましようか・・・

「ガトウ、ちょっとこの酒を飲んでみてください」

「ん？ これか？」

「はい」

そう言ってお猪口に酒を注いで渡します。

それを彼は一気にあおって・・・なんでしょう、様になり過ぎです。あれでしょうか。年齢による渋さがその原因でしょうか？  
しかし・・・

「うまいが結構強い酒だな」

「全部が全部、強いという訳ではありませんけどね」

日本酒も合いますけど、なにか物足りない感じがしますね。

酒場でウィスキーでも飲んでの方がより様になりそうな・・・

カット。何を考えているのですか私。

それよりも今は鍋でしょう。

それにしても、月も、桜も綺麗ですねえ。

「綺麗ですねえ……」

「アリカの方が綺麗に決まってるだろが！」

「近衛殿の方が綺麗だろう！」

少しは情緒というものを考えてください……そして伴侶自慢をしないでください。

「こうして酒を飲むのも、なかなか趣があるもんだな」

「そうですね」

ガトウが酒を飲みながら言った言葉にアルが返します。  
何時の間に酒を飲んでいたんでしょうか？  
ナギ達を見れば、鍋の肉の取り合いをしています。元気ですね、本当に。

「……つにゆ」

「おや、眠くなりましたか？」

「ん……」

「無理に起きる必要はありませんよ？ 私は何処にも行きませ

ん。眠いのなら、眠ったほうがいいですよ」

「ん……」

そう言うとアスナちゃんが寝転がります。すぐに寝息が聞こえてきました。

「平和ですね」

そう言ってナギ達を見ます。

見ればもう、鍋というか宴会のような感じになっています。あれでは音でアスナちゃんが起きかねませんね。

「『我らを包むは夜の静寂』」

遮音の真言で静かにし、周りの景色を楽しみます。  
本当に、平和です。

「願わくば、この平穏が永久に続かんことを……」

12話：鍋・・・鍋？（後書き）

関西呪術協会と近衛さんについては独自設定です。  
ふふ、批判がこわいなあ・・・

京都弁が分からないので標準語になりました。  
最後の方もグダグダになってしまいましたし。

それではまた次回に。

真言による魂の浸食状況、現在28%

### 13話：両面宿儺

Side: 昴

時間は既に深夜一時。食事がもはや宴会と化して、既に三時間が経過しました。

アスナちゃん、クルト少年、タカミチ少年は満腹になり、夜も遅くなったので既に夢の中。

風邪をひくといけないので、真言を使って毛布と枕を創り出し三人にかけましたが、何故か三人とも私の周りで眠っています。おかげで動こうにも動けません。

何故私の周りで眠っているのでしょうか？

ナギ達の方よりも静かだからでしょうか？

あちらはもう完全に酒盛りと化していますし。何を言っているのかは分かりませんが。

とりあえず私だけ遮音の真言を解除し、ナギ達の方を見ると

「ガツハハハ！！ オラ飲め！ 飲め詠春！！」

「ぶはっ！ き、貴様何をするラカン！！ とうか何本空にしてるんだお前は！！」

「なんととうか、ツマミが欲しいな。何かないか？」

「鍋が残っていますよ。それを食べたらいいのでは？」

「ほれアリカ。口開ける。アーンて」

「な、何故そんなことをせねばならん!? 自分で食べられる!」

「なんでって、俺が食べさせたいから」

「なっ……!」

「あ、なんなら口移してもいいか?」

「や、やめぬか! 恥ずかしいじゃろっが!」

「じゃ口開ける。ほれ、アーン」

「うぐ……あ、アーン……」

「あ、次は俺にもやってくれな」

「なっ!」

「……カッ。」

今視界に入った情報をすべて記憶から除外。同時に耳から入ってきた情報もすべて除外。

これで私は何も見ていませんし何も聞いていません。

あの二人のしていた行動も見ていません。

二人を中心に広がる桃色の空間なんて見ていません。

ダダ甘トクなんて聞いていません。ええ、見ていませんし聞いていませんとも。

というか、あの二人は三時間前からあの様子だったような気が……

？

え？ まさか、ずっとああして食べさせあっていたのですか？

うぐお！ む、胸やけが！ 吐き気がああ！！

カット！ 全力で今の思考をカット！！ 二度と思いださないように嚴重に記憶に封印を！！

何故ですか！ 何故あそこまで甘さを持続させることができるのですか！！

理解できません！ というより理解したくありません！！

どうしましょう。このままではストレスで胃に穴が開くような気がします。というか絶対に開きます。

いっそのこと、眠りの真言で強制的に全員眠らせましょうか・・・？

あ、意外といいかもしれません。静かに月や夜桜を楽しめますし。よし、それでは早速眠らせましょう。

しかし、真言を使おうとしたその時でした。

『グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

凄まじい音量の叫びが、辺り一面を震わせました。

「っ！ いったい何事じゃ！？」

「ぐああああ！！ うるせー！！」

「おわっ！？ 瓶が割れた！？」

「鼓膜が破れるかと思っただぞ……」

「何か、向こうが光っているようですね。あそこが原因でしょうか？」

アルの言う方向を見ると、なるほど。確かに光っているようですね。あちらにいますでしょうか、先程の叫びの大元が。

「あの方向は、確か湖がありましたかね？」

「今の咆哮は……まさか」

「おや？ 何か詠春が妙ですね。」

「何か知っているのですか？」

「ああ、だが今はあそこに向かおう」

「急ぐんならさっさと行こうぜ。まだ飲み足りねえんだよ」

あなたはいったいどれだけ飲むつもりですか、ジャック。既に十本近く瓶を空にしているでしょうに、まだ飲み足りないのですか。



しかし、私はどうしましょうか。行ってみたい気持ちはありますが、服をアスナちゃんに掴まれているんですね。割と強く掴んでいるので、手を外したら起こしてしまいかねません。せつかく穏やかな顔で眠っているのに、起こしてしまうのは気が引けます。

仕方ありませんね。後で何が居たのかを聞かせてもらいましょうか。

「あなた達だけで行ってください。私が行ったら、アスナちゃんを起こしてしまいかねません」

「いいのか昂？」

「はい。それに急いだ方がいいのでしょうか？ 焦っているのが丸わかりですよ、詠春」

「む・・・」

「戦力としては、あなたとナギ、ジャックが居れば十分でしょう。後で何が居たのか聞かせてくださいね」

「分かった。行くぞ二人とも」

「「応！」」

そう言つて三人は湖の方に向かいました。

今思えば、あの叫び声はナギ達の桃色空間を破壊してくれましたね。筋違いかもしれませんが、感謝しておきましょうか。

ありがとうございます、見知らぬ咆哮の方。

「それにしても、よく寝るのじゃな。先程の叫びでも起きないとは・・・」

「ああ、遮音の真言を使っていたから。私には聞こえましたが、この子たちには先の咆哮は聞こえていませんよ」

「便利なものじゃな」

アリカさんの疑問にそう答える。

オスティア崩落を防いだあの時から、私の力は次第に強くなっています。

10年後くらいには、単語だけでイメージ通りの現象を引き起こすことすら可能になるかもしれません。

ですが、最近ごく偶にですが、体に軽い痛みを感じることがあります。気にする必要もないくらいのも、意識を向けなければ気付かないほど軽い痛みですが、『完全なる世界』との決戦以前にはこんなことはありませんでした。

痛みが出始めたのは、造物主に腹部を撃ち抜かれ、真言を完全に受け入れた後からです。

まるで、真言が私の体を蝕んでいるようにすら感じますが、それは考えすぎでしょうか？

・・・まあ、いいでしょう。情報が全くないと言っていい今、深く考えてもわかりませんし。今を楽しむとしますかね。

S i d e o u t

S i d e : 詠春

私達は現在、空を飛んで湖へと向かっている。

先の咆哮の原因を探るためだ。

おおよその見当は付いているが、それでも確認は必要だろう。  
しかし・・・

「さっさと戻ってまた飲むぞ。アリカを待たせたくねえ」

こいつは一体何者だ。私の知るナギは無駄に自信のあるお調子者だ  
ったはず・・・？

何がどうしてこんな男になったのだ？

恋愛ことで人が変わるといふ事は聞いたことがあるが、いくらなん  
でもこれは変わり過ぎだろう。

事あるごとにアリカ様と、見ているだけで胸やけがする空間を作り  
上げるようになってしまったしな・・・

やめろ、それ以上考えるな私。

これから戦いがあるだろうというのに気分を悪くしてどうする。  
ふとラカンを見ると、なんとというか、形容し難い表情をしていた。

~~~~~

全速力で飛んで、十分ほど経っただろうか。ようやく湖に到着した。湖を見ると、そこに居たのは顔が二つに、腕と脚が四本ずつあり、それぞれの腕に剣と弓を持つ光る巨人だった。

「やはりか！　しかしなぜ・・・」

「オイ詠春、あれが何か知ってんのか？」

「ああ。両面宿儺だ」

「リヨウメンスクナ？　なんだそりゃ」

「日本に伝わる妖怪の一体で、飛驒に現れたと言われる鬼神だ」

「連合の鬼神兵みてーなもんか？」

「霊格では宿儺の方が上だ。同じように考えていたら死ぬぞ」

そう二人に注意する。

しかし何故だ？　宿儺はその当時の術者が、数百人の仲間の犠牲を以てようやく封印し、地脈にくくりつけたはず。

地脈を利用した封印は、地脈から供給される力で並の術者では封印を解くことなど出来ないはずだが・・・

だが運がいい。封印から解き放たれたことには驚いたが、目覚めたばかりの今なら、当時ほどの力は振るえないはず。

どうやって封印から解かれたのかは、倒してから調べればよいことだ。

「だが、幸いなことにアレは目覚めたばかりのようだ。全力を振るう事は出来ないだろう。倒せるうちに倒すぞ」

「弱いモン虐めみて でつまんねーな。やるんなら全力の相手とやりたいぜ」

「バカ者！ 妖怪とは言え、アレは神の一柱にも数えられるほどのものだぞ！！ 全力のアレと戦うなど、自ら死に行くようなものだ！！」

「グダグダうつせーよ。要はアレをぶちのめせばいいんだろっが！！」

そう言つて飛びかかつて行くナギ。

あのバカが！ 真正面から行く奴があるか！！

「『魔法の射手・連弾光の300矢』！！ さらに行くぜ！！』
雷の斧『！！』」

虚空瞬動で宿儺に一気に近づいた瞬間、ナギが最も多く使用する連携で攻撃する。
だが

『グオオオオオオガアアアアアアアアアアア！！！』

流星は神と呼ばれるほどのものか。目覚めたばかりで力は本来の半分以下だろうが、ナギのバカ魔力をもって放たれた魔法に耐えた。そして、高速で剣を振りおろしてきた。

ゴオウツ！！

「うおっ、あぶねっ！！！」

「おいおい、マジかよ。耐えやがったぜアイツ。鬼神兵なら今ので終わってたぜ？」

「だから言っただろうが。同じように思っていたら死ぬと。時間をかけたらさらに倒しにくくなるぞ」

振るわれる剣と、放たれる矢を避けながら注意する。

「だったら今度は本気で行くぜ！！ ラカン！！！」

「おうよ！！ 『来たれ！ 千の顔を持つ英雄』！！！」

ラカンがアーティファクトを呼び出す。それと同時に私は飛び出し

「神鳴流決戦奥義！ 真・雷光剣！！」

神鳴流の決戦奥義を放つ。雷鳴剣よりも威力の高いそれは、広範囲を殲滅する。

だが

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！』

咆哮とともに放たれた砲撃によって威力の大部分を殺がれてしまった。

だが、居るのは私だけではないのだぞ？

「斬艦剣！！ オオラアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

雷光剣で麻痺し、僅かにだが動きが鈍くなった宿儺にラカンが斬りかかり、その手足を切り落とす。

だが、全てを切り落とすことはできず、足が三本、腕が一本残った。

『ギガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！』

手足を切り落とされた痛みか、それとも人間ごときに手足を切り落とされた怒りか。

凄まじい叫びをあげながら、残った腕で私達に剣を振るう。

「ギャーギャーうつせーんだよ！！　これで消えやがれ！！　『千の雷』……！！」

ナギが全力で、自身の得意とする広域殲滅魔法を放つ。それは度重なる攻撃を受け、手足を切り落とされ弱まったスクナを、叫ぶことすら許さずに打ち倒した。

~~~~~

宿儺を倒し、何故封印が解かれたのかを調べた。

どうやら何者かによって解かれたらしい。人の手が入った痕跡があった。

このまま放置しては、あまり時間をかけずに宿儺が復活してしまうだろう。

簡易だが、封印を施しておいた。強力な物は、近衛殿達にかけてもらおう。

「しかし、いったい誰が……」

「倒したんだし、後でもいいだろ？　戻って飲もーぜ」

「お前らは……」



とはいえ、ここで悩んでも何もならんか。  
そう考え、私達は皆のもとへ戻った。

そう言えば、あのあたりの地形が多少、変わってしまったな。昂に頼んで直してもらおうか。

S i d e o u t

S i d e : 昂

30分もかからずに詠春たちは戻って来ました。

凄まじい叫び声や雷鳴がなったので、一度目の咆哮の後で広域に遮音の真言を使いました。

おそらくですが、一般人に影響はあまりないでしょう。

そして、詠春に何が居たかを聞いていますが・・・

「は？ 両面宿儺ですか？」

「ああ」

いえ、ちょっと待ってください。

両面宿儺は飛驒の神の石柱でしょう。現在で言ったら岐阜のあたりの存在ですよ？

なんでその両面宿儺が京都の湖に封印されているのですか。

おかしいでしょう。

「なんで飛驒の神が京都に封印されているのですか」

「そこまでは分らん。封印されたのは千六百年前だからな」

「いや、そこは疑問に思いましたよ・・・」

分祀されたものでしょうか？

しかし聞くところによるとどうも両面宿禰の本体のようすし・・・  
わざわざ移動させた？

なんのために？ そもそも本当に移動させたのでしょうか？

霊地としての格でしょうか？ しかし、飛驒にも相応の場所はある  
はずです。

封印できる場所が限られていた？ ありそうですね。

聞けば地脈を利用した封印を施していたようすし。

この京都の地脈の力は、他の地域に比べても格段に高いと言えます  
し。

その地脈の力を使って封印していた？

・・・分かりませぬね。考えれば考えるほど疑問が出てきます。

一旦置いておきましょう。情報がなさすぎる。

「昂ー！！ お前もこっちに来て飲めー！！」

「あなたは周りが見えないのですかジャック。私が動いたらアスナ  
ちゃん達が起きてしまうでしょうが」

「ノリがわりーぞー!!!」

というか、あなたはまた飲んでいるのですか。

何本瓶を空にすれば気が済むのですか、まったく。

「ああ、そうだ。昂、両面宿儺との戦いで地形が変わってしまったんだ。直してくれるか？」

「どんな戦いをしたのですか・・・明日でもいいですか？ 私は今、動けませんし」

「ああ。だが出来るだけ早くに頼む」

「わかりました」

それでは、私もそろそろ寝ますかね。

#### 14話：流れ行く者たち（前書き）

すみません！

一度投稿したのですが、どうにも気に入らずに削除して書き直しました。

無理矢理感がすごいです、それでも良ければ読んでやってください。

少し追加しました。

## 14話：流れ行く者たち

Side: 昴

関西呪術協会での食事会一（と言うより、アレは最早宴会でしたね・  
・・）から二年が経ちました。

現在、私はアスナちゃん、アル、ガトウ、タカミチ君と一緒に港に  
います。

海が綺麗ですね。

ちなみにナギとアリカさんは街中をデートしています。

クルト君は詠春に神鳴流の稽古をつけてもらい、ジャックはぶらぶ  
らと歩いているでしょう。

流石に、真昼間から酒を飲むといったことはしないと幸いです。

「アスナちゃん、ちょっといいかな？」

「なに？ 何か用？ タカミチ」

「いや、咸卦法のコツを教えてくださいませんか。何回やっても  
うまくいかないんだ」

「簡単だよ、自分を無にするの」

「いや、それがなかなか難しくてさ」

「難しくなんかない」

おや？ どうやらアスナちゃんが咸卦法の実演をするみたいです。  
タカミチ君のお手本になりますかね？

ちなみに私はできません。いえ、正確に言えば咸卦法自体は使える  
のですが、まるで役に立たないのです。何故かというと、魔力が一  
般人の中でも極端に少ないため、効果時間が極めて短いのです。

以前試して成功はしたのですが、3秒で効果が切れました。

その時の、皆の微妙な視線が痛かったです。いつそ笑えと思いまし  
たよ、本気で。

「右手・・・左手・・・ハイ」

「うおっ！？ すごいなあ・・・なんでそんな鮮やかに・・・」

「無になるなんて簡単。だって、私には元々、何も無いもの。大事  
なものも、感情も、何一つ」

む？ 何やら聞き捨てならないことを聞きましたね。

「・・・アスナちゃん、駄目だよ？ そんなこと言っちゃ」

「？ どうして？」

「少なくとも、今の君にはナギさんや師匠、それに僕だっているだ  
ろっっ。」

「……………」

「そうですよ、アスナちゃん。そんな悲しい事は言わないでください」

「スバル？」

「タカミチ君の言ったように、今は私達が居ます。感情も何もないなどと、言わないでください」

そう言っ頭をなでる。

「あなたは長い間、感情と成長を抑えられていたのでしょうか？ だったらそれは、感情がないのではなく、表現の仕方が分からないだけです」

そう言うと、よくわからないという顔で首をかしげます。

小動物みたいで可愛らしいですね。表情はあまり動いていませんが。

「ゆっくりとでもいいですから、成長させていきましょう。そうすれば、今まで見てきたものも、また違った風に見えてくるはずですよ。この何気ない日々も、輝いて見えるかもしれませんよ？」

「……………」

僅かにですが、確かに頷いてくれました。

「でもタカミチの師匠のタバコはイヤ」

「はは、それは見逃して欲しいかな？」

「言われてますよ、ガトウ。」

まあ、確かにタバコは体に悪いですからね。最低でも、アスナちゃん側では吸わないように言っておきましょうか？

「・・・そう言えばタカミチ君。先程、私の名前が出てこなかったようですが・・・何故でしょうか？」

「え？ いや、その」

「まさか忘れていた・・・とは言いませんよね？」

「わ、忘れてはいませんよ？ ただ、出てこなかっただけです！」

「人はそれを忘れていたというのです。お説教ですかね、久しぶりに」

「そ、それだけは勘弁してください！ あの時の三時間説教でもうごりごりですー！」



いいえ許しません。今この場に居ないナギが出てきて、一緒にいる私が出てこないなどと、いくら私でも少しは怒りますよ？

「それぐらいにしてやってくれ、昴。タカミチにも悪気はなかったんだろっ?。」

向こうでタバコを吸っていたガトウが戻って来ました。アルも一緒にいますね。

「師匠、助かりました」

「昴の説教はきついからな。それに、お前に燃え尽きられたら困る」

「ナギとラカンも燃え尽きていましたしね、一度」

ああ、あの時の説教ですか。

失礼ですね、まるで私が常に燃え尽きるまで説教しているようではありませんか。あの時は二人が食事中に暴れて、人に迷惑をかけて謝罪の一つもなしに逃げようとしたからですよ？

今回は二時間くらいで済ませようと思っていましたよ。

「それでも二時間はするのか・・・」

「忘れていたと素直に言えばもっと短くしたのですがね、誤魔化そうとしましたから」

「まあ、そこは置いておこう。それにしてもすごいな、アスナちゃん。昴もそうだが、一発で咸卦法を成功させるとは」

「これは将来が楽しみですね。優秀な従者になりそうです」

「はは、嬢ちゃん。俺と契約するかい？」

何やら魔法使いの従者にするような会話ですね。流石にガトウは冗談で言っているようですが。

というかガトウ、私のは成功とは言えないでしょうに。成功しても持続時間が3秒ではまるで役に立たないでしょう。

「そう怒るなって昴。効果時間こそ短すぎたが、一発で成功させる奴はほとんどいないんだぞ？ 最初はどんなバグだと思ったさ。それより、お前はどう思ってる？」

「私としては、魔法から離れて生きて欲しいのですけどね。今まで苦しめてきたと言ってもいい魔法に、関わってほしくありません」

たとえ叶わぬ願いだとしても、そう思わずにはいられません。

「それは難しいでしょうね。アスナちゃん的能力は極めて稀少です。知られてしまえば、その力を求める輩に追われる生活が待っているでしょう」

「知らねなければいいんだが、それも難しいな。少なくとも、魔法世界じゃ平和に暮らすことはできないと考えていいだろう」

そうなんですよ。地域によっては紛争がありますし、連合や帝国ではほぼ確実に捕まえて道具にしようとするでしょう。ヘラス帝国はまだましかもしれませんが、メガロメセンブリア元老院は絶対にしようとするはずです。アリアドネは・・・どうでしょうか？他の二つに比べたら遙かにいいでしょうけど。

「どうしましうかね。旧世界にも魔法使いの支部的な組織はあるでしょうし、常に一緒にいるという事はできませんし」

「ある程度妥協した方がいいと思いますよ？ 外見年齢では、まだ小学生のようなものですから。昼間に連れて歩いていては職務質問されかねませんし」

「そうだな。流石に犯罪者扱いは嫌だろう？」

「当たり前です」

流石に犯罪者扱いは勘弁です。

しかし本当にどうしましうか。旅をし続けるわけにはいきませんし、かといって一ヶ所に留まれば狙われやすくなる。

アルの言うように、妥協するしかありませんかね？ 私も犯罪者扱いされるのは嫌ですし。

~~~~~

「そう言えば昴。お前仮契約はしてるのか？」

「なんですか藪から棒に」

「いや、気になってな」

「一応、ナギと契約は結んでいます。アーティファクトは基本、使っていないんですが」

しているとと言っても、キスで契約したわけではありません。魔法陣の上に互いの血を垂らして契約しました。私もナギも、同性とキスする趣味はありませんので。

「なんでだ？ 使った方が戦術の幅が広がるだろ。お前は後衛タイプだから支援型のアーティファクトか？」

支援型、なんでしょうか？

「私のアーティファクトは、形から言えば矛ですね。直接的な物理破壊能力は持っていませんけど」

「武器型、か。こつ言つのもなんだが、似合わないな。能力はどうなんだ？」

いいですよ。どうせ私に武器は似合いませんよ。

「能力は、早い話が『在り方の書き換え』でしょうか」

「在り方の書き換え？　なんだそりゃ」

まあ、分かりませんよね。最初は私も分かりませんでしたし。

「見てもらった方が早いですかね。『この場には誰も近づかず、誰も気づかない』」

認識阻害と人払いをして、カードを取り出しアーティファクトを呼び出します。

「『来たれ』」

出てきたものは古ぼけた槍というか、矛というか、そんなものでした。

「それがお前のアーティファクトか？　随分古ぼけてるな」

「はい。名は『天沼矛』。旧世界は日本の神話にある、島を作り上げた武器です。レプリカですから、これには島を作るほどの力はあ

りませんけどね」

「というか、レプリカにそんな力があってたまりますか。」

「それは在り方の書き換えじゃなくて創造だろ？」

「いつ言っことです」

「そう言って矛を石に当てて、イメージする。」

するとそこに石はなく、青く輝く宝石があった。

「なっ!?!」

「これが在り方の書き換えです。私がイメージした物に、触れたものを構成している情報を根本から書き換える。水だろっが金属だろっが、なんでも変えてしまっつのです」

「真言を使った方が早いし強力なので使っつていませんがね。」

「そう言っつて変換した宝石を元の石に戻し、カードに戻す。」

「刃があるんなら、普通に武器として使えろっと思っつが・・・」

「どっついうわけか、手に当てても薄皮一枚切れなっつのです。動物の肉でも同じで、1mmも斬れませんでした。書き換えはできるのっで」

すけどね」

刺すことはできても、抜いたら何もなかったように元通りでしたし。ほんと、どつという事なんでしょうか？

~~~~~

港で話してから三年。

私達は皆、それぞれ世界中に散り、各々の思うように行動しています。事実上の解散ですね。

ナギはアリカさんを連れて故郷のイギリスに戻り、ジャックは魔法世界のどこかに隠居していきました。まあ、お祭りごとになったら出てくるんでしょうけど。

そうそう、この三年でナギとアリカさんが式を挙げました。大々的にするわけにはいかないので、紅き翼メンバーだけの慎ましやかな式でしたが、二人ともとても嬉しそうでした。

ですが、そう簡単に行かないのが私達です。

祝福もしましたが、「紅き翼」全員で、今までの甘い空間の恨みを込めて盛大にからかってやりました。

いつもなら私と詠春はストッパーとして動くのですが、今回ばかりは話は別です。

その結果、二人とも今までしていた行動を公開され、顔どころか全身を羞恥で真っ赤にしていました。

もちろん大笑いしましたよ。まあ、その後すぐに後悔したのですけどね。

めげませんね、あの二人。開き直って今まで以上に甘ったるい桃色というか薔薇色の空間を作り上げました。

結果、私を含めた大人はその甘さで全滅。タカミチ君とクルト君も引きつった笑顔をし、無事なのはアスナちゃんだけという状況になりました。

それから少し経って、最初に詠春が「紅き翼」を離れました。

なんでも、関西呪術協会を継ぐのだから。それと同時に近衛さんと結婚するらしいです。

アレでなかなかヘタレですから、尻にしかれマンにならないといけないのですが……。

もしなっていたらどうでしょうか。からかってやりましょうか？

そう言えば、あそこはやけに巫女が多かったですね。

彼は一途というのは分かっていますが、鼻の下を伸ばしませんかね？伸ばしたら近衛さんに殴られそうです。

あれでなかなか苛烈ですからね、彼女。

突っ込みというか、詠春を叩いたりする時の攻撃全てに若干なれど気がこもっていますからね。

……もしあの二人の間に娘が生まれたら、外見と行動ともに、まず間違いなく母親に似るだろうと思うのは何故でしょうか？

原作の記憶が関係しているのだとは思いますが、それに関しての記憶は既にゼロと言っていいでしょう。完全に思いだせませんから。

別にかまいませんがね。記憶がない方が、この世界を楽しむことができます。



まあ、それは置いておきましょう。

クルト君は私達が行ってきた紛争地域の救助活動に不満を持っていたようで、紅き翼を離れ政治の道に行きました。

「あなた達のやり方では、世界を変えることはできません。僕は僕のやり方で世界を変えます」

そう言っただけでメガロメセンブリアに行きました。そんなに地道な活動が嫌だったのでしょうか？

アルは、気が付いたら居ませんでした。せめて一言言って欲しいものです。

ガトウとタカミチ君は修行を兼ねて魔法世界、旧世界問わず回っています。

私とアスナちゃんも魔法世界、旧世界を問わず回っています。ガトウ達とは別行動ですけどね。

様々な場所を回って、アスナちゃんの感情も随分と成長しました。今では普通に喜怒哀楽を出してくれます。ですが、少しも我儘を言わないのが気にかかります。迷惑をかけては駄目とも思っているのでしょうか？

まあ、今はそれがありがたいですけどね。なんせ追われていますし。ちなみに、今は真夜中です。私はアスナちゃんを抱きかかえて森の中を走っています。

どこの人間でしょうか？ 時々聞こえてくる会話の内容からすると、私達を生け捕りにするつもりなのでしょうが・・・  
捕まってもやるわけにはいきませんがね。洗脳等を利用して利用する気がいいです。

「それにしても、しつこいですね！」

「スバル、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。傷ありませんし、アスナちゃんは軽いですから」

しかし、ずっと逃げ続けるのにも限界があります。時たま「魔法の射手」が飛んでくるので、このままでは街にも入れませんし・・・  
仕方ありませんね。やりたくはないですが、沈めますか。こういう思考に行きつくあたり、私も随分ストレスがたまっていますね。

「『来たれ』」

天沼矛を呼び出し、地面に突き刺す。そしてイメージを流し込み在り方を書き換え、私達の後方20mを、全ての属性が混じり合った混沌の底なし沼にします。これで、一歩でも踏み込んだら魔法も気も、全て使えなくなります。入ったものを引き摺り込むイメージ付きです。

つい最近になって、偶然この力を発見しました。こういう時には便

利です。真言では混沌を作り出せませんが、これなら狭い範囲とはいえ、混沌を作り出せます。

アーティファクトを戻したらリセットされますけど、沈んだものはそのまま地面の中に残ります。

ですが、あくまで効果があるのは変換した部分のみ。空を飛ばれたりしたら意味がないので真言を使います。

「人は地を駆ける事しかできない」さらに追加です。『必ずここを通る』」

これで飛行は使えません。たとえ飛んでいたとしても、強制的に地面に降るされ、必ず混沌に足を踏み入れます。さて、離脱しますか。

アーティファクトを戻したら混沌が消えるので、片手でアーティファクトを、もう片方の手でアスナちゃんを抱きかかえて走ります。暫くして、追手であろう人間の声が聞こえました。

『なんだこれ！ 脚がとられて動けねえ！！』

『底なし沼！？ なんでこんな森の中にあるんだよ！！』

『くそっ！ こんなもの、吹っ飛ばして・・・な、なんで魔法が使えねえんだよ！？』

『ひっ、引き摺りこまれる！！ 誰か、助け・・・！』

どうやら四人だったようですね。吹っ飛ばすと言ったあたり、一人はそこそこの使い手だったようですが、無駄です。

2分ほど待つて、千里眼を発動。梟の眼を追加して完全に沈んだ事を確認し、アーティファクトを戻します。

同時に混沌はなくなり、そこに見えるのはもともとあった地面だけです。念のために固めておきましょうか。

「『地は硬化し、何人も破壊することはできない』」

これでいいでしょう。さて、何処へ行きましょうか。  
アスナちゃんを降ろし、そんな事を考えていると

「・・・スバル、私強くなりたい。護られてばかりでいたくない」

アスナちゃんがそんなことを言いました。

S i d e o u t

S i d e : アスナ

「何故か、聞いてもいいですか？」

堅い顔と声で、スバルがそう聞いてくる。

疑問に思うのは当然だと思う。スバルは今まで、私を戦いから遠ざけるようにしてきたから。自分だけが戦って、私を傷つけないようにしていたから。

「スバルだけに戦ってほしくない。狙われてるのは私。追ってくる人が居るのも、私が居るから」

「ただ、もう嫌だ。私のせいで狙われて、追われているのに、護ってもらっただけなんて嫌だ。」

「強くなりたい。スバルに護ってもらっただけなんてヤダ。負担を掛けてばかりなんてヤダ」

「アスナちゃん・・・」

「せめて、自分の身くらい守れるようになりたい。そしたら、スバルの負担も少しは軽くなるでしょ？」

だから

「私に、戦い方を教えてください」

そう言って、スバルの返事を待つ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

目を逸らさずに、じつとスバルの眼を見る。

スバルもまた、私の眼を見ている。何かを確認するように、見極めるように。

見つめあって5分ほど経っただろうか、スバルが溜息を吐いた。

「初めて言う我儘が、よりもよって戦い方の指導ですか・・・」

心底呆れたというようにスバルが言う。迷惑だった？

「迷惑だなんて思っていないせん。ですが、欲を言えばもう少し女の子らしい我儘を言って欲しかったですね」

苦笑しながら私を抱きしめてくる。あつたかいし、安心できるから私はこれが好き。

「私としては、あなたに戦うための力を持って欲しくありません。ですが、それは意志の押し付けになるのでしょうかね……」

抱きしめる腕に僅かに力がこもる。

「目を見れば分かります。私が何を言っても、決意は変わらないのでしょう?」

「ん……」

「なら、教えましょう。私の知る戦い方を、身を守るための術を。ですが、よく理解してください。身を守るためとはいえ、力を振るう事は相手を傷つける事だと」

「ん」

「まずは体力をつける事から始めましょう。幼い時から筋力をつけると、体の成長が阻害されるかもしれませんから。戦い方は、その後です」

「わかった」

「ですが、私の戦い方はあなたには合わないかもしれません。なので、回避や体捌きの基礎を教えます。学びながら、京都に向かいましょう」

「なんで?」

「あなたはおそらく最前衛の剣士タイプでしょう。私では剣を教えることはできません。詠春に習いに行きましょつ」



14話：流れ行く者たち（後書き）

後々少し追加するかもしれません。

ふふ、批判が怖いなあ…

## 15話：京都再び（前書き）

お久しゅう。

インフルエンザでダウンしており、投稿が遅れてしまいました。

無理矢理な感じですが、よければ読んでやってください。

## 15話：京都再び

Side：昴

こんにちは、昴です。この挨拶も久しぶりですね。

アスナちゃんに戦い方を教えると約束して三週間が過ぎました。

初めのうちは体力作りからやっていたのですが、あまり意味はありませんでした。

まあ、旅で歩き続けていましたし、そこらの子供よりは体力があるのでしょうかね……

早くも技術を教える段階にまで来ています。で、体捌きや回避の手法などを教えました。

というか、それしか教えられないのですけどね……教えたのは基礎ですけど。

私の戦い方は教えられるようなものではありませんから。

しかし、教えた二十日後には既に体捌きを自分のモノにしています。

天才とか、そんなレベルじゃなかったです。どんだけですか。

アレですか、この子もナギやジャックと同じようにバグとかそういうものだったのでしょうか。

そう言えば、咸卦法を一度で成功させていましたね。空恐ろしい学習能力です。体捌きに関しては私も習得していましたが、それは前の世界で、さらに10年の月日を費やしてようやくでした。

それをたった二十日で……ふふ、自信がなくなりそうです。

ああでも、ナギ達よりはマシでしょうか？ 彼等は見えずくに覚えますし……まあ、どっちにしても自信をなくしそうですけど。

まあ、そこは今は置いておきましょう。

現在、アスナちゃんが魔法を使えるかどうかを調べています。アリカさんも使っていましたし。アリカさんの処刑の二年前に、ノワールに飛び乗ってきたことから前衛タイプだと思うのですが、ナギのような例もありますからね。それに、高位の術者には前衛も後衛も関係ないらしいですし。

どうやって調べているかですか？ いつの間にか私の荷物の中に入っていた魔法書と簡易の杖を使つてです。一体誰が入れたのでしょうか？ しかも一緒に女の子が着る水着も出てきましたし。これを見た時には混乱しました。何故こんなものが私の荷物の中に入っているのかと。

しかもこれを見たアスナちゃんに酷く冷たい目で見られました。しかも能面のような顔で、です。流石に背筋に寒気が走りました。二時間の弁明の結果、私のものではないと信じてくれましたが、これを入れた輩を殴ると、強く心に刻みました。

その際に、何故かアルの顔が脳裏に浮かびました。まさか、アルがこれを・・・？  
とりあえず、次に会ったら殴りますか。いつ会えるかは分かりませんが。

「プラ・クテ・ビギナル『火よ灯れ』！ ……でない」

「でませんねえ」

先程からアスナちゃんが火を灯そうとしていますが、一向に火どこ

るか光すら出る気配がありません。魔力は動いているようなのですが、収束ではなく逆に魔力を霧散させているように感じます。完全魔法無効化能力が原因でしょうか？ というより、それしか考えられませんね。タカミチ君のように、生まれつき詠唱ができない体質ではないようですから。

「アスナちゃん、とりあえず今は諦めましょう。見る限り、どうも魔力が霧散しているようです。もしかしたら、無効化能力が阻害しているのかもしれませんが。その制御を優先した方がいいかと」

「・・・うん、そうする」

「それに、もうすぐ京都です。詠春に連絡はしていますから、着いたら呪術協会総本山に向かいましょう」

「ん」

現在、私達は京都に向かっています。詠春に神鳴流を習うためです。習うのはアスナちゃんですけどね。私では剣を教える事は事実上不可能ですから。アーティファクトも長物ですし、そもそも私の戦い方は私以外には無理があります。

約束した後に、アスナちゃんの望みで仮契約しました。魔法陣の構成を覚えていたのです。可能でした。本当はしたくなかったのですけどね、魔力量の問題もありましたし。結局押し切られて契約しましたけど。

え？ キスしたのかって？ していませんよ。婦女子の唇は自分と

将来を約束した人にだけ許すものです。三十分間その事について話したら、アスナちゃんは納得してくれました。渋々といった様子でしたが、これだけは譲れません。ナギと同じように、魔法陣に血を垂らして契約しました。

その時出てきた仮契約カードに描かれていたアーティファクトの形状が剣でした。

しかも、大人の身の丈ほどもある片刃の大剣です。

これでは教えることなどたかが知れてしまうので急遽、詠春に連絡しました。

アスナちゃんに神鳴流を教えて欲しい、と。

最初は渋っていたのですが、仲間の頼みと、クルト君に教えていたことを出したら了承してくれました。まあ、交換条件で娘さんの面倒をみる手伝いなどをするようになりましたけど。

それにしても、娘さんですか。おそらくですが、容姿は母親に似ているのでしょうかね。

どのような性格でしょうか？ 詠春に似て、気真面目でしょうか？ それとも近衛さんと同じで、おっとりとしつつもどこか苛烈な性格でしょうか？ 会うのが楽しみです。

できれば、アスナちゃんの友人になってもらいたいですね。

追手から逃げ続けたせいで、友達と呼べる人が居ませんから・・・

そんなことを考えつつ、歩みを進める。もうすぐ京都です。

~~~~~

『よつこそいらっしやいました』

「・・・・・・・・」

現在、関西呪術協会総本山の入口にいます。以前来た時と違って、巫女さん達がお迎えしてくれましたが・・・多すぎでしょう。詠春、あなた何を思って巫女さんをここまで多くしているのですか。華はありますけど、威厳とかそういうものが微塵も感じられませんよ。

「先に連絡していた緋乃宮と申します。近衛詠春様はおられますか？」

「長に御用の方ですか。長は奥の間でお待ちになられておいでです。こちらへ・・・」

巫女の一人が私達を詠春のいる部屋まで案内してくれます。アスナちゃんは寢殿造りの構造が珍しいのか、キョロキョロと見えています。以前来た時には部屋に上がりませんでしたからね。色々なことに興味を持つのはいいことです。

暫く廊下を歩いて、奥の間に着きました。

「失礼いたします。長、緋乃宮様をお連れしました」

「入りなさい」

「はい」

案内してくれた巫女が襖を開けてくれました。

「案内御苦労。下がっていいですよ」

奥に座っていた詠春がそう言うのと、一礼をしてから襖を閉じました。気配と足音が遠ざかっていきます。

広い部屋の中、詠春と向かい合います。ちなみに彼は胡坐で、私は正座で座っています。5時間は正座でも耐えられます。

「堅苦しい挨拶は抜きにしよう。久しぶりだな、昴」

いきなりそんな事を言い出しました。

「はい。久しぶりですね、詠春。ですが、西の長がいきなりそれはないのでは？」

「かつての仲間に遠慮するか？」

「立場というものがあるでしょうに」

随分と余裕が生まれていますね。まあ、仕方ありませんかね？ 私を含めて、紅き翼に居た時はナギ達のストツパーでしたから。ストツパーにならなくてよくなったら余裕が生まれても不思議ではありませんか。

「まあ、いいじゃないか。友との交友を深めようとしても」

「何年か滞在するのですから、その間にも出来るでしょうに」

そう言つて苦笑する。

こうして談笑しているのもいいですけど、それでは話が進みません。本題を切り出しますか。

「アスナちゃんに、神鳴流を教えてくださいませんか」

「もう少し談笑してもいいだろう。望むのなら教えるが、昴も接近戦はできるだろう？ 何故わざわざ神鳴流を？」

「回避の仕方こそ教えましたですが、私の戦い方は確実にアスナちゃんには合いません。おそらくですが、アスナちゃんは斬り込んで行く剣士、最前衛型でしょう。私はどちらかと言えば魔法使い、後衛型を主として戦いますから」

「私と斬り合える時点で並の魔法使いではないだろう。真言を使え

ば文字通り全身凶器のうえに前衛・中衛・後衛どのポジションでも戦えるだろう」

「だからアスナちゃんには合わないのです。最悪殺してしまいます」

「・・・ああ、そう言えばそうだったな。気も魔力も使わない腕の一振りですら岩山を切り裂いていたし。あれほど真言が恐ろしいと思っただことはない」

「『我が一撃は万物を切り裂く』ですね。アレは触れたもの全てを文字通り切り裂きますから加減からは程遠いですし、ジャックはそもそも戦い方がアレです。それにアスナちゃんのアーティファクトは剣ですから、剣の腕は仲間内でも最強だったあなたしか適役が居なかったのです。アスナちゃんの力の事もありません」

「完全魔法無効化か」

「はい。あれは魔法どころか気すら無効化します。それにアスナちゃんのアーティファクトは『ハマノツルギ』です。退魔の剣でもある神鳴流とは、これ以上ない程に相性がいい。修めれば、並の魔法使いでは歯牙にもかけなくなるでしょう」

「だから神鳴流を、か。アスナちゃんはそれでいいのか？」

詠春がアスナちゃんに聞く。

「うん。もう決めたの。守られるだけじゃイヤ、戦う力が欲しい。だから、私に神鳴流を教えてください」

アスナちゃんがしっかりと詠春の目を見て頼みます。
詠春も、じつと眼を見ています。

・・・今更ですが、これは倫理的に非常に問題のある光景では？
見た目小学生の少女と二十代後半から三十代前半の男性が見つめ合
っているという、一部の人が見たら盛大に勘違いしそうな気がする
のですが。

そう言えば、私もアスナちゃんが見つめ合ったんですね。しかも
夜の森の中で。状況的に考えたら私の方がより危険な事になるので
は！？ 今更ながらに背筋に悪寒が！？

落ち着きなさい私！ そう言った感情は私にはありません！！ 怒
りや悲しみといった感情はありますが、恋愛系統の感情はないので
す！！ というより、そんな趣味ありません！！ 私にそんな趣
味は微塵もありません！ 私の趣味は遺跡を散策したり、調査する
ことです！！あと音楽！！

だいたい、最近は感情の揺れがなくなってきたのですからその
ような事を考えたり感じたりすることはないはずなのです。

「・・・分かりました。では、二日後から始めましょう。旅の疲れ
もあるでしょうから、今日と明日はゆっくりと休んでください」

「はい！」

おや？ 何やら話が終わったようです。丁度いいです。

「詠春」

「ん？ どうかしたか？ 昴」

「この辺りに滝はありますか？ なるべく大きな」

「奥の方にはあるが・・・どうした？」

「いえ、少し、滝に打たれたくなりました」

「？ なんでだ？」

「気にしないでください」

忘れたい事があるんです。
そう言っつて部屋を出ようとする。

「スバル、私も・・・ふきゅー！」

「アスナちゃん！？ どうしましたか！？？」

アスナちゃんが立とうとして突然こけました。どうしたのでしょうか？

「足が・・・痺れた・・・」

「あー・・・」

そう言えば、アスナちゃんは正座、初めてでしたっけ。それで30分近く座っていたから足が痺れてしまった、と。初めての人にはきついですからね。あれ？ 正座初めてでしたっけ？ 初めて会った時も正座だったような・・・？

「スバル・・・抱っこ・・・」

「少し時間をおいたら治まりますから、我慢してください」

「うー・・・」

治まるまでは何処にも行きませんかから、涙目で見ないでください。

~~~~~30分後~~~~~

アスナちゃんの足の痺れが治まって、現在私は滝に向かっています。目的は勿論、雑念などをなくすため、というよりも先の会話の時に思い至った思考を抹消する為です。ちなみにアスナちゃんは詠春について行きました。というか、詠春が連れて行きました。

なんでも、紹介したい人が居るとかどうとか。娘さんに紹介するつ

もりでしょうか？

まあ、いいです。今の私にはそんなことは。それよりも滝！ 滝です！！

滝に打たれて先の思考を記憶から抹消せねば！！

そう思つて山道を歩いていきます。詠春の言葉ではこの方向で合っているはずですが、一向に着きません。同じ場所を歩いている気すらします。

「もしかして、迷いましたかね？」

だとしたら道に戻らねば。そう思い来た道に戻ろうとするが

「・・・道は何処でしょうか？」

S i d e o u t

S i d e : 詠春

昴が滝に向かう途中で道に迷っている事など露知らず、私はアスナ姫を連れて娘を探して歩いていた。

聞けばこの数年間、追われていて一ヶ所に留まる事がほとんどなかったらしい。そのために友達と呼べる者が一人もいないとか。流石にそれはかわいそうなので娘に紹介する事にした。あの子も友達が

増えて喜ぶだろう。今のところ、あの子も友人は一人しかいないからな。二人ともきつと喜んでくれるだろう。

「いつもはこのあたりで遊んでいるんだが・・・」

辺りを見渡しても見つからない。何処に行ったのだろうか？

地面を見る。足跡は子供の物が二人分あるが、別の場所に向かって伸びている。足跡の状態を見るに、どうやら3時間前までここで遊んでいたようだ。

「この方向は・・・川か」

大戦中、ゼクト殿と昴に習ったものだがこれがなかなか役に立つ。

あの時は森の中で狩りをするときぐらいにしか私達は使わなかったが、必ずと言っていい程動物に遭遇できた。おかげで食材が切れた時、食糧難になる事があまりなかったな。

昴が言うには、熟練すると追っている相手の状態もある程度分かるらしい。そしてあいつは普通に分かっていたようだ・・・

そう言えばゼクト殿が何処で習得したのかを聞いていたな。なんでもゼクト殿よりも精度が良かったらしい。その事に驚いたが、その答えにあいつは確か

『フィールドワークをしていたら自然と身に着きましたけど、何かおかしいですか？』

心底不思議そうにこう言ったんだよな。

「普通無理だろ」

「なにが？」

「ああ、なんでもないですよ」

どうやら声に出ていたらしい。だが仕方ないとも思う。

あの時に再認識したんだよな。方向性こそ違えども、コイツもまたバグだと。あの時はアルも啞然としていたしな。趣味を通して自然に習得するにしても習熟度がおかしいだろ。

しかもあいつはアスファルトの上の微かな足跡でも相手がどのような状態か分かるらしい。探偵とか、そう言った職業に向いているんじゃないかと常々思う。

さて、思考がそれた。とりあえず二人を探さねば。

「どうやら二人とも川の方に行っているようです。一緒に行きましようか？」

「うん」

しかし、何やら嫌な予感がするな。まさか、溺れたりしてないだらうな？



S i d e o u t

S i d e : 昴

「確か、音はこっちからしていましたね」

こんにちは、道に迷ってしまった昴です。現在、水の音がした場所に向かっています。

最初は自分の足跡を見つけて戻ればいいと思って探していたのですが一向に見つからず、完全に迷ってしまいました。どうやら捜し歩いたせいで余計に足跡から離れてしまったようです。私、馬鹿なんでしょうか？

最終手段として真言の転移で総本山に戻ろうかとも思いましたが、水の流れる音が聞こえたのでそこに向かっています。とりあえず、川ならそこを下れば人里には降りる事が出来るはずです。

「しかし、私はここまで間抜けでしたっけ？」

追われる毎日でしたから、平和ボケするような環境ではなかったはずですが……

まあ、いいです。とりあえず今は川ですね。

しかし、今が春でよかったです。これが冬山だったら、遭難して普通に凍死ですからね。冬だったら川も凍って音も聞こえないですし。

「っと、ようやく川に出ましたね」

意外に長い下り坂でした。

そう思いながら川を見る。割と川幅も深さもある、少し流れの速い川ですね。水も綺麗で、魚を釣ることもできそうです。釣竿を持ってきた方が良かったですかね？

うずりと、私の釣り人魂が反応します。海釣りも良いですけど、川釣りもなかなか楽しめますからね。

っと、待ちなさい私。私は滝に向かっていたはずですが。この川を上れば滝に着く可能性があります。ならば、釣りなどせずに滝に向かうべきでしょう。

しかし、釣りをしたいと思うのも事実。竿も餌もありませんが、そこは真言やアーティファクトを使えばどうにもなります。・・・そういうえば、私は何故滝に向かっていたんですって？ 向かう理由を思い出せない滝に向かうよりも、釣りをした方が楽しめるのでは？

そう思ってしまったらあとは早かったです。天沼矛を呼び出し、地面に落ちた木の枝や葉、石を竿と糸と釣り針に変換し、河原の石を裏返して虫を捕り餌にします。そして天沼矛を戻し、いざ川に糸を垂らすとしたその時。

子供が二人、川上から流れて行きました。

「・・・え？」

糸を垂らそうとした態勢のまま体が止まる。そして即座に状況を把握しようと思いを回転させる。

今何が流れて行った？ 子供が二人。

何処を？ 目の前の川を。

どこから？ 上流から。

流されていった方を見る。二人とも手足をばたつかせていますが、泳いだ事がないのでしょうか？岸に近寄りません。しかもどうやら溺れているようです。

呑気に観察している場合じゃありません！ 助けなければ死んでしまいます！

その思考に至ると同時に竿を投げ捨て走ります。しかし、流れが少しとはいえ急なのでなかなか追いつけません。足場もあまりよくありませんし。

「時は緩やかに流れる」

なので真言を使います。時間の流れを遅くし、二人が流される速度を落とします。水流を逆転させてもよかったです。下流にいる人に迷惑がかけられますし、二人を溺れさせる可能性が高かったのでやめました。

流れを遅くした川の中に入り、二人を抱きあげます。抱き上げると同時に二人とも私の服を掴んできます。溺れていたのですからしょうがないですよ。

岸に上がり、時間の流れを戻します。

「『流れは戻る』」

声と同時に川の流れがもとの速さに戻ります。

「ゲホツケホ」

「コホツ・・・ゲホツ」

「大丈夫ですか？」

尋ねますが、咳き込んで答えられないようです。苦しかったのでしょう。二人とも涙ぐんでいます。

髪の長さを見て二人とも女の子だと分かります。一人は肩まで伸ばして、どこか柔らかな雰囲気を持ち、もう一人は額を半分だして頭の横で束ねています。サイドポニーというやつでしょうか？  
こちらは若干釣り目です。

しかし、髪を降ろしている子はどこか近衛さんに似ている気がします。雰囲気も彼女に似ていますし、詠春と近衛さんの娘さんでしょうか？ だとするともう一人の子はこの子の友人でしょうか？ 外見的にも雰囲気的にもあの二人には似ていませんし。真面目そうに見えるのは詠春そっくりですけど。

しかしこのままではいけないね。風邪をひいてしまいます。

どうでしょうか。ここで火をおこして暖をとらせましょうか？  
それとも本山の詠春か近衛さんの所に転移した方がいいでしょうか？  
・・・転移するなら詠春の所ですね。いきなり出たら驚かれる  
でしょうけど、近衛さんの所に出ていらぬ誤解を持たれるよりはま  
しです。

「『空間を越え道は繋がり、友のもとへと導かん』」

空間を歪めて詠春のいる場所に繋がります。  
そして歪みを通り、詠春の前に現れます。

「昴？ どうしたって、木乃香！ 刹那君も！」

「ああ、やはり娘さんでしたか。助けて正解でしたね」

「助けた？ 何かあったのか！？」

「二人とも、川で溺れていました。上流から流されてきましたよ」

「なんだと！？」

「すぐに火の側で暖をとった方がいいでしょう。服も変えて、水気を切った方がいいです。風邪をひいてしまいます」

「わかった。助けてくれて感謝する！」

そう言うと二人を私から受け取り家の中に連れて行く詠春。大声で火や服、薬の準備を命令しています。

そう言えば、何故上流から娘さん達が流れてきたのでしょうか？

私は確か上流の滝に向かっていたはずですが・・・迷って下流に出てしまったのでしょうか？ だとしたら迷いすぎでしょうか。向かっていた方向がまるで逆ではないですか。

16話：午前・手合わせ（前書き）

無理矢理感がありますが、よければ読んでやってください。

## 16話：午前・手合わせ

Side：昴

おはようございます、昴です。

現在、私は昨日の河原に来ています。理由は昨日作り上げた竿の回収と、そこそこの大きさの石を集めるためです。正確には銀細工の材料にするための石を集めているのですけどね。

私の趣味の一つに、小物作りというものがありまして。最近は一つも作れなかつたので久しぶりに何かを作ろうかと思い、手ごろな石を探しています。

え？ 銀がないって？ フフ、私のアーティファクトの力を忘れてもらっては困ります。集めた石は全て銀粘土や金粘土に在り方を書き換えています。そのため結構な量の粘土ができました。

混沌以外なら書き換えてもアーティファクトを戻してリセットされることはありませんし。

・・・アーティファクトの能力の無駄使いですよ、これ。ですが、一切使わずにお蔵入りするよりはましでしょう。日常的な物にも有効活用できますし。食器類の強度を上げたり、壊れた物を直したり、  
・  
使っているところを見つかったら銃刀法違反では済まされませんけどね。

金塊や銀塊、宝石を作って売った方が利益になるかもしれませんが、別に金儲けのためにやっている訳ではありませんし、あくまで趣味の一環です。生活費に困った場合は売るかもしれませんが。



「これぐらいの量でいいですかね。少し、作り過ぎた気もしますけど」

だいたい5kgから10kgほど作っただろうか。

アスナちゃんに神鳴流を教えてくれる詠春への礼と、アスナちゃんへのプレゼントですから気合いを入れて作らねば。詠春は銀細工よりも刀剣類の方が喜ぶと思うのは気のせいだと思いたい。

「しかし、何を作りましょうか？」

アスナちゃんの場合は髪飾りかペンダントといったアクセサリ系でいいでしょう。女の子ですし、着飾りたい時もあるでしょうし。

問題は詠春です。銀は金属の中でも比較的柔らかいので刀剣類というか武器・防具系はまず却下。むしろ「自分はいらなから木乃香達に作ってくれ」とか言いだしそうです。最近親バカみたいですがだとすると、幼い彼女達に武具を渡すわけにはいかないのです。必然的に日常で使うものに限られる。

「しかし、ウエスペルティアの魔法使いたちは気に入りませんね。よりもよって成長を停滞させるなんて・・・」

アスナちゃんを助け出して既に5年以上経ちましたが、彼女の外見年齢は助け出した時の小学1年位からまるで変わっていません。アールが言うには成長を停滞させる魔法や薬が使われており、その効果

が切れるまで成長しないとのこと。しかもその効果は十年近く続くとか。

本当に、気に入りません。

「ああ、落ち着きなさい私。荒れても何もありません」

それよりも今は何をやるかです。何がいいでしょうか？

アスナちゃんと同じようにアクセサリーでいいでしょうか？ それとも双六とか、遊び道具の方がいいでしょうか？ お菓子を作るといふ選択もありますね。林檎や苺のタルトでも作りましょうか？  
悩みますね。

「まあ、そこは聞いてから作ってもいいでしょう」

作り上げた銀粘土を箱に入れ、抱えてから転移する。そして目の前には夕凧を持った詠春が……何故夕凧を持っているのです？

「ようやく戻ってきたか、探したぞ？」

「詠春、こんな朝早くにどうしたのですか？ まだ4時ですよ？  
それに探していたとは？」

「何、アスナ姫に神鳴流を教えるのはいいが、最近あまり体を動かしていないかったからな。勘を取り戻すついでに、久しぶりに手合わせしようと思ってお前を探してた」

「手合わせなら他の方とでも出来るでしょう。何故私のですか」

「私と本気でやりあえるのが本山に居ないんだよ。それに同じ流派だとしても訓練の色が濃くなってな。お前とだったら遠慮する事もないだろうし、早く勘を取り戻せそうだ」

「勘を取り戻すだけなら訓練で十分でしょう。それに私は後衛タイプですから、斬り合いなんてほとんどできませんよ」

「真言を使えば大丈夫だろう。仲間の頼みと思って付き合ってくれ」

何を言っても無駄そうですね。詠春ってこんなキャラでしたっけ？

まあいいでしょう。神鳴流を教えてくれるのもありますが、その間本山に泊めてくれるのですから断ることなど出来ません。するつもりもありませんけどね。

「分かりました。ですが、そう長い間はできないでしょう？」

「勘を取り戻すだけだからな。本気でやり合えば、30分かそこらで戻るだろう。もしかしたらそれ以上かかるかも知れんが」

「出来れば7時までには済ませたいですね」

「なんでだ？」

「アスナちゃんですよ。起きた時に傍に居ないと不安になるそうです。彼女はだいたい7時半ぐらいに起きますから、それまでに終わ

らせましよう」

「なんとというか、まるで親だな」

「そうでしょうか？ 自分ではよくわかりません」

「完全に親が子供を見守る眼だったぞ？ 慈愛に満ちているというか、なんとというか・・・」

どんな目ですか、それは。そしてそれはあなたも同じでしょう詠春。

「その言葉、そっくりそのまま返しますよ。それよりも、何処でやるのですか？」

「本山周辺の山や湖でいいだろう。結構派手になるかもしれないな」

「雷鳴剣や雷光剣でも使う気ですかあなたは。どれだけ派手にやるつもりですか」

「結果として派手になるかもしれないと言ってるんだが・・・まあいい。行こう」

「そうですね。こうして話している間にも時間が減っていくのですし」

虚空瞬動で移動する詠春に、空を駆けてついていきます。勿論真言を使っています。

~~~~~

到着した湖で、水の上に立ち詠春と対峙します。

彼は夕凧を既に鞘から抜き、私は天沼矛を持っています。さて、どのように戦いますか・・・

「準備はいいか？」

おっと、考え事をしていたら詠春が声を掛けてきました。戦闘準備はできていますが、少し待ってください。

「待ってください。一応遮音や認識障害の結界を張っておきましょう。来る人はいないと思いますが、万一気付かれたりしたら後々面倒ですから」

「それもそうだな」

「では、『誰もここには近寄らず、誰も決して気付かない』」

遮音と認識障害の真言を使います。ついでにこれも使っておきますか。

「『壊れた物は自動で修復する』」

これでわざわざ修復しなくてよくなります。

「今のは？」

「自動修復です。後で直す手間も省けるでしょう？ 今回の服の損傷や怪我は治りませんけど」

「そうか。本当に便利だな」

「死者蘇生はできませんけどね。物質を復元するなら可能です。では、始めましょうか」

「ああ」

そう言うと同時に瞬動を使って詠春が夕凧で斬りかかってくる。

同時に私も後ろに向かって飛びますが、流石は紅き翼でも最速と言つてよかつた男。すぐに距離を詰められ連続で斬りつけてきます。

ですが、そう簡単に斬られる訳にはいきません。詠春の目や手の動きを見て、余裕を持って避け続けます。回避が無理だと判断した物は天沼矛で受け流す。

移動しながら暫く攻防を続けます。

振るわれる夕凧を避け、受け流しつつこちらは蹴りを入れたり、矛を繰り出す。当然のようにそれらは防がれ、流されますがかまいま

せん。まだ準備運動の段階ですから。

20〜30分ほど経ったでしょうか。湖の中央付近で再び向かい合います。

互いに息を乱さず、汗一つ掻いていません。むしろ、ようやく体が温まったというところです。

「そろそろいいか」

「ええ。体も温まりましたしね。ここからは、技も術もありです」

「死なないように加減はするが、当たり所には気をつけるよ？」

「その言葉、そっくりそのまま返しますよ。というか、殺すつもりですか」

そう言って互いに気を高めます。

数年前に気付きましたが、私はどうやら魔力よりも気の方が多いいみたいです。まあ、多いと言っても詠春やジャックよりも少なく、あくまで一般人に比べたら多いといったレベルです。

・・・比べる相手が間違っていると思うのは私の気のせいでしょうか？

互いに武器を構え、睨みあう。

眼を逸らさず、相手を見る。一瞬でも意識を逸らせばそれで終わる。精神を研ぎ澄ませる。空気の振動にすら反応できるように、ただ集中する。

静寂。何も聞こえず、ただ風が互いの頬を撫でて行く。
瞬きすらせず、ここに二人以外の人間が居たら、人の色彩を持った
彫像だと思っただろう。

風が吹き髪を揺らし、水面に波紋を作り上げる。

どこかで、雫が落ちる音がした。

同時に私は横に飛び、詠春の斬空閃を回避する。

詠春が瞬動を連続して使い、追いかけてくるのが分かる。

「『風は上空より吹き付け、水面において刃となり切り刻む』」

自分のすぐ後ろに下降気流を発生させ、詠春を水面に叩きつける。
その一瞬後に発生する無数の風刃。だが流石というべきか、風刃が
発生する僅か一瞬の間に効果範囲から脱出したらしい。風の刃は水
面を刻むだけに終わった。

「連撃、斬空閃！！」

同時に飛んでくる無数の斬空閃。それらを回避しながら詠春を見る。
斬空閃を放ちながら瞬動と虚空瞬動を組み合わせる三次元機動をし
て近づいてきます。

避けにくいうえに攻撃を当てにくいですね。ならば・・・

斬空閃を避けながら矛を湖に叩きつけ、飛沫を散らします。
同時にイメージを流し込み、飛沫の全てを弾丸に書き換えます。

「『フォイエール発射』！」

弾丸となった飛沫に真言を使い、僅かに時間差をつけて詠春に撃ち出す。

「神鳴流に飛び道具は効かんど、昂！！！」

そう言いながら弾丸を迎撃していく詠春。滅茶苦茶ですね、本当にですが、飛び道具が通用しないのは百も承知。弾丸をさらに放ちながら距離をとります。

「『風は吹き、刃となり切り刻む』さらに追加です。『水は柱となり天へと昇り、飛沫は弾丸となり打ち払う』」

直後に発生する無数の水柱。風の刃により切り裂かれるも即座に復元し、それによって発生した飛沫が真言によって弾丸となり詠春に襲いかかる。

「百花繚乱！！！」

しかしそれすら防ぐ詠春。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！」

剣を振るうと同時に花卉が舞うが、弾丸により微塵と消える。しかしその弾丸も剣閃によってもとの飛沫に戻り、刀身を濡らしながら湖に戻っていく。さらに立ち上る水柱に剣閃が直撃、一瞬だが襲い来る弾丸ごと消し飛ばす。

その一瞬で詠春は離脱し、刀身に電気を帯電させ最大の一撃を放つ。

「真・雷光剣！！」

広範囲を殲滅する一撃で立ち上っていた水柱と弾丸は全て吹き飛ばす。しかしそれだけに止まらず、残りの雷撃が獲物を求め暴れまわり湖のいたる所を爆発させる。

飛沫が巻き起こり、私の視界を遮ります。さらに雷撃が残っているため止まっていたら危険です。

そう思い瞬動で移動しますが、それがいけなかった。

「そこかっ！！」

私を見つけた詠春は斬空閃を放ちながら近づいてくる。爆発によって発生した飛沫をさらに弾丸にして打ち出しますが、それを全て回避して私に斬りかかってくる。叩きつけられる夕凧を矛で防ぐ。

「あれを防ぎきって、さらに一撃で消し飛ばしますか！ あなた本当に人間ですか!？」

S i d e o u t

S i d e : 詠春

「失礼なことをぬかすな！ それに、それはお前も同じだろうが!」

流石に死ぬかと思ったぞ、あの弾丸の雨は！ 防いでも防いでも、材料が水飛沫だから途切れる事がない。まさに無間弾雨。お前は私を殺す気か!!

「あなたもそうでしょうが!! なんですか、あの雷光剣は！ 回避が遅れていたなら黒焦げでしたよ!!」

「お前があんなとんでもないものを作り出すからだろうが!!」

罅迫り合いながら言い合う。
だがまだ手合わせの最中だ。もう手合わせのレベルじゃないかもし
れんが、このままでは終われん。まだ決定打を互いに貰ってないか
らな。

「紅蓮拳！」

「なっ！？ つぐ！！」

炎のような気を纏った拳で昴を殴り飛ばす。昴はすぐに態勢を整え
距離を取るうとするが、そう簡単にさせると思っか！！

「斬鉄閃！」

「っ！ 『決して斬れず、折れず、砕けぬ』！！」

アーティファクトを強化して破壊できないようにしたか！ だがダ
メージは通る！！
振りおろした夕風は防がれたが、衝撃は防ぎきれなかったのだろう。
昴は湖に叩きつけられた。
だがそれだけで終わらせはしない！

「斬岩剣！！」

さらに追撃を叩き込み、昴を水中に叩きこむ。同時に骨を折る感觸が伝わってくる。

これで真言は使えまい。後は出てきたところで首筋に夕凧を添えれば私の勝ちだ。

そう思つた直後、私を氷の棘が襲つた。

「なっ!?!? ぐおっ!?!」

足を掠め、そこから血が流れる。

急なことで回避しきれなかつたか。そう思いながらも避け続ける。前後左右そして真下。様々な場所から氷の棘が発生し襲いかかる。さらにその棘から火炎弾や氷弾、矢が連続して放たれる。

さらにそれらが着弾した所から水柱や火柱が発生し、逃げ道を塞いでいく。

何故!?!? 真言は水中では使えないはず!?!

そう思うがふと昴のアーティファクトの力が何だつたかを思い出す。在り方の書き換えか!?!

「貴方は私を溺死させる気ですか!?!」

「!?!?」

背後から昴の声がした。馬鹿な!?! いつの間に!?!

「教えません！　そして、お返しです！！　『衝撃は倍加する』！」

「がつー！！」

振り向こうとするが背中に衝撃が走り、水面に叩きつけられた。痛みに顔を顰めるが、瞬動で昴から離れ体勢を整える。

「『我が刃は全てを切り裂く』！」

「つー！！」

その言葉を聞いて即座に横に飛び、離れる。同時に私が居た場所を通過していく「何か」。

見れば昴のいる場所から湖岸まで湖が割れていた。昴を見ると、右手を振りおろした形で居た。

どうやら手刀を刃と見立てて放つたらしい。

だが振りおろした隙を見逃す私ではない。

瞬動を連続して使い距離を詰める。昴も体勢を立て直す、遅い！

「雷鳴剣ー！！」

「『全ては凍りつく』！」

その言葉で発生した雷撃は夕凧の刀身ごと凍りつき、威力をほとんど殺されてしまった。だがそのまま振りおろし、昴を防御の上から吹き飛ばす。そして碎ける刀身の氷。吹き飛ばす昴を追い、水面に叩き落して首筋に夕凧を突き付ける。

「私の勝ちだ」

「いえ、そうでもないですよ・・・アタタ」

「何？」

尋ねようとする、背中に何か鋭いものが当たる。首を捻って見てみると、氷の槍が発生していた。同時に足にも違和感を感じたので見てみたら、いつの間にか水面ごと凍りついていた。しかも上に浸食してきているように感じる。

「い、何時の間に・・・」

「先程、『全ては凍てつく』と言ったでしょう？ その時にです。移動してましたから、止まった時に発動したのでしょう。水面も凍っているでしょう？」

「だが氷の槍はどうしてだ？ そんな真言は使っていなかったらう」

「天沼矛ですよ。水面に叩き落された時に水に触れたので、あなた

が夕凧を突き付ける一瞬前に水の在り方を槍に書き換えました」

「引き分け、か・・・」

「負傷の度合いから見たら私の負けですけどね。利き腕も折れていますし」

~~~~~

現在、私と昴は火にあたって暖をとっている。ちなみに火は昴が起したものだ。

「勘は取り戻せましたか？」

「ああ。おかげで大戦期の状態にまで戻せた。礼を言う」

「気にしないでください。それよりも、服や傷を治した方がいいでしょう」

「む」

確かにそうだ。なんせ水浸しで、さらに衝撃を受けて服はボロボロ。傷は目立ったものはないが私は足に裂傷と凍傷。それに肋骨に少し罅がいつている。

昴は服もボロボロだし体中に浅いが切り傷があり、何箇所か罅がいつて、左腕が折れていると言ったところか。



もしこのまま戻って見つかったら・・・お、恐ろしい！ 確実に説教が待っている！

持ってきておいた治療の呪符を使い治療する。ふと昴を見ると、もう傷一つ見られなかった。

「本当に便利だよな、真言は」

「最初のうちは何度も死にかけましたけどね。主に自爆じみたことで」

「そ、そうか。後で服を直してくれないか？ 体の傷は呪符で何とかなっても、服はどうしようもないからな」

「既に傷は治っているのでしょうか？ だったら今直しますよ。『服は復元し、水気は飛ぶ』」

そう昴が口にするとボロボロだった服が新品のようになった。さらに水気もなくなった。

「これでいいでしょう。では、戻りましょうか」

「時間は大丈夫か？」

「はい。今は6時50分ですから、まだ余裕はあります。まあ、早く戻るなら戻りましょうか。『空間は歪み、我が望む場所に繋がる』」

昴がそう言つと目の前の空間が歪む。どうやら本山とここを直接繋げたいらしい。

不思議なものだ。西洋魔法も陰陽術も使うためには魔力や気が必要で、使つたらどれだけ意識して抑えても必ず魔力や気が動く。規模の大きな術なら詠唱の時点でかなり動いたため、予測も立てやすく回避しやすい。

だが昴の力、『真言』にはそう言つた物が動く気配が一切ない。どうという原理かは分からないが、魔力などを一切介さずに言葉の通りの現象を引き起こす事が出来るように感じる。

「なあ、昴。前にも聞いたが、私にも真言を使う事は出来ないだろうか？」

「難しいでしょうが、使う事は可能でしょう。もっとも、言葉の意味を理解し、在り方を知り、自分の意味に気付く事が出来れば、ですけど」

「？ 前に聞いた時は使えないと言つてなかったか？」

「そうでしたね。ですが、造物主に殺されかけてからそうは思えなくなつたのです」

「何故だ？」

「夢の中、でしょうか。そこで言葉の意味などを刻みこまれました。同時に、真言とはどのようなモノであるのかという知識も。おかげ

で精神が壊れて死ぬかと思いましたがね。なんせ私の魂そのものに刻みこまれるのですから」

「待て！ 今さらりとんでもないこと言わなかったか！？」

魂に刻みこむ！？ そんな事したらほぼ確実に死ぬか、廃人になるぞ！？

「よく生きていられたな・・・」

「今でも不思議です。まあ、そのおかげで本当の意味で真言を使えるようになったのですがね」

「本当の意味で？」

「どういう事だ？ まるで、それまでは使いこなせていなかったような言い方だな。」

「ある意味、使いこなせていなかったのですよ。あの時まで私が使っていた真言は、飲み物に例えて言えば何十倍にも薄めていたようなものです。まあ、先程の手合わせの時に使ったものもそうですけど」

「あれで弱めたものだというのか！？」

自然現象そのものが敵になったようなあれが、力を弱めた物だとい  
うのか!?

「造物主が言うには『全ての魔法の原点にして究極』らしいですか  
ら。実際にはそんなものではないのですけどね」

「どう言う事だ?」

「魔法はある意味擬似的な真言なのですよ。言葉に魔力を込め連ね、  
力ある意味を持たせ発動するのが魔法です。真言と違う点は、言葉  
に魔力を込めるといっただけです」

「? 意味がわからん。もう少し分かりやすく説明してくれるか?」

「早い話が、言葉に魔力を込めて力と意味を持たせ現象を引き起こ  
すのが魔法。初めから力ある言葉を以て現象を引き起こすのが私の  
使う真言です」

そう言っつて昂は歪みに入っつて行つた。

・・・全然分からん。

これでもナギ達より学はある方だが、全然分からん。アルかゼクト  
殿だつたら分かつたかもしれないが・・・

そんな事を思っていると、歪みが消えそうになった。思考を中断し、  
慌てて入って本山に転移する。また別の機会に聞けばいいか。

16話：午前・手合わせ（後書き）

真言については独自解釈です。それにしても戦闘描写が難しい。

少し追加しました。

17話・午前2・顔合わせ（前書き）

ようやくできたあ！！

ずいぶんと間が開きましたが、ようやくできました！

文章になかなかできず、書いては消して、消しては書いてを繰り返してようやく更新できました。

でもまだ午後とかあるんだよね。

ああ、難しい・・・

## 17話：午前2・顔合わせ

Side：昴

「アスナちゃんは・・・髪飾りでいいでしょう。どのような形にしましょうか？」

詠春との手合わせが終わり、本山に先に戻ってきた私はあてがわれた部屋で銀粘土と金粘土を弄っています。アスナちゃんへのプレゼントのような物を作るためです。

とはいっても、出来てあと15分くらいですけどね。手合わせに時間をかけすぎました。

ちなみにアスナちゃんはまだ寝ています。

「日常でつけていてあまり違和感のない形がいいですよね。だとすると武器系統の形は却下。花や果物と言った植物系か、それとも星を象ったものの方がいいでしょうか・・・ああ、自然現象を象ったものも良いですね」

風とか水とか、色々とありますね。

悩みますね。過度な装飾が彼女は嫌いみたいですし、ゴテゴテした形ではなくシンプルな形の方がいいでしょう。私も派手なのはあまり好きではありませんし。

どのような形にしましょうか・・・。

そう言えば、ナギとアリカさんは元気でしょうか？ 別れてから既

に数年経っていますから気になりますね。健康もそうですけど、料理の腕も。

アリカさんの料理の腕は多少なりとも上達したでしょうか？ 一応レシピは可能な限り渡していますけど・・・最初に彼女が作ったものを試食した時は、視界が暗転したかと思っただらいつの間にか綺麗な花畑に居ましたからね。しかも讚美歌のような物まで聞こえましたし、頭上から背中に翼の生えた頭に輪のある方々が降りてきましたからね。危なかったです。

王族でしたから料理スキルは最低レベルだろうと思っていましたけど、まさかマイナスレベルだとは思いませんでした。

・・・何故でしょうか？ 元気がどうか以前に、ナギの命の心配をしてしまうのは？ あの後、出来る限り指導し料理の腕を鍛えたので私みたいになる可能性はあまりないと・・・思いたいですね。断言できません。事あることとんでもないものを料理に加えようとしていましたしね。何をどうしたら夏野菜のカレーに砂糖とラズベリーを一瓶丸ごと入れるような事になるのですか。

そう言えば、アスナちゃんも王族でしたっけ。だとしたら料理の腕も初期のアリカさんと同レベルかそれ以下の可能性が？ それはいけません。アスナちゃんも女の子ですから、成長したら結婚というものを考えるでしょう。一人暮らしをしても、料理スキルは高い方がいいですし。

まあ、今はいいですね。神鳴流の修行もありますし、あまり負担をかけるのも成長に悪影響がです。彼女が望んだら、少しずつ教えて行きましょう。

つと、思考がずれましたね。髪飾りの形を決めないと。



そう思った瞬間、脳裏に鈴というか、ベルというか、そう言った形の物を髪につけた、十代半ばまで成長したアスナちゃんであるう少女の姿が浮かび上がりました。そして、彼女は楽しそうに何かの建物に向かって駆けて行きます。

何故アスナちゃんと思ったかですか？ 髪の色と、成長していましたが顔の輪郭、目の色でそう判断しました。

・・・これ、なんの記憶でしたっけ？ いえ、私の記憶というのは分かるのですが、私こんな記憶ありましたっけ？ はて、何かとても大切な、私の根本的な事を忘れてしまっているような・・・？

「うにゅ・・・」

「おや、目が覚めましたか？」

「ん・・・おはよう、スバル」

「はい、おはようございます」

何を忘れていたのか確かめるために記憶を遡ろうとしたら、アスナちゃんが起きたようです。見ると布団から上半身を起こして目をこすっています。ああ、駄目ですよ目を擦っては。目に傷がついてしまいます。

「駄目ですよ、目を擦っては。水と手拭がありますから、こっちに来てください」

「んー・・・」

まだ眠いのでしょうか、寝ぼけ眼でこちらに來ます。ああ、寝癖もついていますね。髪があちらこちらに撥ねています。櫛も必要ですね。

「少し冷たいかもしれませんが、目を閉じてじっとしててくださいね。冷たさで目も覚めるでしょうから」

「んー」

水に浸した手拭を絞り、アスナちゃんの顔を拭く。冷たいのが嫌なのか若干顔を顰めています。我慢してください。

ああ、水は綺麗な物なのでご安心を。銀粘土に使った水など、使いませんよ。まあ、実際にはどのような形にするか悩んでほとんど弄っていないのですがね。手も綺麗にしましたし。

・・・誰に対して言っているのでしょうか、私は。

「はい、顔はもういいでしょう。眼を開けても大丈夫ですよ」

そう言うとアスナちゃんは目を開ける。そして現れる蒼と碧の虹彩異色。その双眸には光が宿り、大戦の時に見たガラス玉のような虚ろな目はなく、全てを諦めたような印象は微塵にも感じられません。この輝きを持ったまま成長して欲しいものです。

「どうしたの？」

「ああ、いえ、少し考え事をしていました」

沈黙を疑問に思ったのか、アスナちゃんが問うてくる。

「さ、次は髪ですよ。寝癖を直しますから、背を向けてください」

「ん」

そう返事をして背を向けたアスナちゃんの髪を僅かに湿らせ、手に持った櫛で梳いていく。髪は女性の命とも言いますし、傷めたりしないよう優しく梳きます。アスナちゃんはくすぐったいのか、僅かに身を振ります。我慢してください、すぐに終わりますから。

「はい、終わりましたよ」

「ありがとうございます」

「いえいえ」

女の子なのですから、身だしなみはきちんとしませんとね。まあ、それは男性もですが。

しかし、結局アスナちゃんが起きるまでに髪飾りの形は決まりませんでしたね。出来れば決めなかったのですが。そう言えば、先程脳裏に鈴が浮かびましたね。それにしましょうか？

髪に鈴をつけて駆ける少女の姿を、目を閉じてイメージする。

風に揺らされ、また走る振動によってそれは涼やかな音を奏で、少女を飾る。

・・・意外にいいかもしれませんね。これにしましょうか？ とりあえず候補に入れておきましょう。

「そうと決まれば、忘れないようにメモしておきますか」

「？」

私の言葉に疑問を持ったのか、アスナちゃんが首を傾げます。可愛らしいですね。思わず頭を撫でてしまいそうです。

「ん・・・」

そう思っていたら、アスナちゃんの髪の毛の感触が私の手にしました。どうやら無意識に頭を撫でていたようです。相変わらず触り心地の良い髪ですね。

しかし、何故無意識に頭を撫でてしまったのでしょうか？ 私にそのような癖はなかったはずなのですが・・・まあ、いいでしょう。

「んー」

頭から手を離そうとしたら、何故か手に擦りつけてきました。貴方は猫ですか？ それに、せっかく梳いた髪が乱れて傷んでしまいましたよ？

「アスナちゃん。髪を結びますから、頭を手に擦りつけるのはやめてください。髪も傷んでしまいますし」

「ヤ」

「……一言で、というか一文字で断りますか」

というか、断らないでください。髪を下ろしている姿も可愛らしいですけど、いつも結っていますから違和感があるんですよ。

「髪を結んだらまた撫でてあげますから……」

「むー」

苦笑しながらそう言うと、渋々ながらも言う事を聞いてくれました。顔がとても不満気です。なんでそんな顔をするのですか。

髪を傷めないようにリボンでツインテールに結っていく。ちなみに

このリボン、私の手作りです。アーティファクトと真言を使って作り上げた裁縫道具と材料で作りました。破壊不能の裁縫道具と材料です。当然、それを使って作られたリボンも破壊することはできません。おかげで作るのに苦労しました。針を通そうとしても布地に針が刺さらないのですから。料理道具も同じようにして作っています。鍋なども決して焦げません。

「はい、結び終わりましたよ」

そう言うとすぐに頭を手に擦りつけてくる。アスナちゃん、こんな性格でしたっけ？ なんとというか、猫みたいになりましたね。

「昴、朝食の用意が出来たぞ」

暫くアスナちゃんを撫でていると、詠春が朝食に呼びに来ました。

「少し待ってください。アスナちゃん、そう言うことですから食事に行きましょう。あまり待たせるのも失礼ですし」

「うん」

あてがわれた部屋から出て、待っていた詠春の後をついていく。正直に言っただけ、詠春が呼びに来てくれたのはとてもありがたいです。この屋敷、広すぎて何処に何があるか分からないんですよ。下手

をすると迷ってしまいかねません。

「しかし、意外ですね。詠春自らが私達を呼びに来るとは……」

「気心の知れた間柄だからな。知らない人間相手に緊張する必要もないだろう?」

「組織の長としてどうなんですか、それは」

もっとうこう、威厳というものがあるでしょうに。

「いや、実は呼びに行けと近衛殿に言われてな……」

「ああ、やはり尻に敷かれていましたか。というか詠春。既に娘さんもいるのでしょうか? いつまでも名字で呼ばない方がいいですよ? 夫婦なので、名前で呼んであげませんか?」

「分かってはいるんだがな。なんというか、こう、恥ずかしいというか……」

「結婚して娘まで作って名前を呼ぶのが恥ずかしいって、いつの時代の純情少年ですか貴方は」

「べ、別にいいだろう! 恥ずかしいものは恥ずかしいんだ……  
そう言うお前は結婚するような相手は居るのか?」

話題を逸らそうとしていますね。まあいいでしょう。別に恥ずかしくなんてありませんし。

「居ませんよ。アスナちゃんに色々な風景を見せてあげたかったので、今までずっと世界中を回っていましたから」

「遺跡ばかりじゃないだろうな」

「そんなわけではないでしょう。まあ、いくつかは行きましたけど」

ピラミッドや万里の長城、パルテノン神殿ぐらいですかね、有名どころは。他にはエンゼルフォールに屋久島に、青の洞窟とグレートバリアリーフにも行きましたね。そう言えば、オーストラリアでジュゴンに会えました。滅多に会えないのに、アスナちゃんと一緒に泳いでいました。というか、ジュゴンと遊んでいましたから驚きました。

ちなみに私はその時、イルカに追いかけていました。他にも人は居たのに、何故か私だけ追いかけられました。しかも追いつかれて噛まれました。甘噛みでしたけど、十匹以上に噛まれました。まあ、鮫じゃなかっただけマシですかね。

「世界中を回っていましたから、出会いなんてありませんよ。それに、私を好きになる人はいないでしょうし、私も恋愛感情を持つ事はないでしょう」

「何故そう思う？　今はそう思っていて、未来にどうなるかはわ



からんだろっ」

「勘です」

「は？」

「ですから、勘です。確かに未来にどうなるかは分かりませんが、真言を使って未来を詠むつもりありません。ただそれでも、現状では私が恋愛感情を抱く事はあり得ないというだけです」

「ねえスバル。それって・・・」

「アスナちゃんが原因か、という問いは意味を為しませんよ。これは私の心の問題ですから、アスナちゃんが思い悩む事はありません。それに、私は今とても充実していますから」

ですから、そんなに暗い顔をしないでください。

S i d e o u t

S i d e : 詠春

妙な感じがする。ただ漠然とそう思った。

アスナ姫の感情の成長具合に驚きもしたが、そこは昴が世界中を連れて回っていたうちにここまで成長したのだろうと思ひ、納得する事にした。

だが、昴に若干だが違和感を感じた。

今はもう感じないから、おそらく錯覚か何かだろうとは思うが、それにしたって妙な違和感だった。

振りかえり、二人を見る。

二人は手を繋いでついてきていた。そして昴は優しげな笑みを浮かべてアスナ姫を見ている。その目はどう見ても親が子供に向ける目だった。そしてアルの様に胡散臭くはない。

ちなみに私も木乃香に対してそういう目向けらしい。近衛殿がそう言っていた。

「？　どうかしましたか？」

昴が訪ねてくる。どうやら見ていたのを疑問に思ったらしい。

「いや何、まるで親子の様だと思ってな」

「親子ですか？」

「ああ。お前がアスナ姫に向ける眼差し、完全に親が子供に向ける目だったぞ」

「そうなのですか？　自分の顔は見えませんかから、よくわかりませ  
ん」

そう言いながら繋いでいない方の手で自分の顔を触る昴。触っても

分からないと思うんだがな。ふとアスナ姫の方を見てみると、若干だが頬を赤く染め、恥ずかしげに俯いていた。だがチラチラと昂を見ている。反応から察するに、昂を若干なりとも親の様に思っているのだろう。

しかし、昂は子供や動物に好かれやすい体質か何かなのだろうか？大戦中も戦争孤児にやけに懐かれていたし、犬や猫、竜にも好かれていたようだ。現在も頭に雀が乗っている。気付いていないんだろうか？

「スバル、頭」

「私の頭がどうかしましたかって、おお？ いつの間に！」

アスナ姫が教えて頭に雀が乗っている事に気付いたらしい。というか、気付いてなかったんだな。普通気付くだろうに……

「私の頭は木の枝や巣じゃないですよ！ 何故いつも留まりに来るのですか！」

そう言って雀を追い払う昂。しかし離れたそばから別の雀がやってきて頭にとまろうとする。さらには鳩や栗鼠まで森からやってきて昂に群がりはじめ。

「ちよ、やめ……ええい、離れなさい！」

群がられながら昴はそう言う。しかしそれでも動物達は昴に群がって行く。これでは動けんな。というか、人に群がる動物は愛らしいというがここまで群がられると愛らしいというよりむしろ恐ろしいような気がしないでもない。なにしろ鳥だけで20羽はいるからな。

「ああ、もう！ 『森へ帰りなさい』！！」

そう言った途端、昴に群がっていた動物達が山に向かって行き出した。

「お前な、真言を使わなくてもよかつたろうに」

「だったら貴方も同じ目に会ってみますか？」

「いや、遠慮する。しかし毛まみれになったな。このまま朝食に向かう訳にはいかんな・・・」

「心配には及びません。アスナちゃん、少し手を離してもらってもいいですか？」

昴がそう言うと、アスナ姫は若干渋っていたが素直に手を離した。変われば変わるものだな。あの無感動だった姫がここまで感情を表に出すようになるとは・・・

「『清らかなる水は流れとなり、我が身の不浄を洗い流さん』」

そう昴が言つと空中に水球が発生し、まるで生き物のように昴の体を包み込んだ。10秒ほど経つてそれは消えたが、昴の体の汚れや動物の毛は全て無くなっていた。まあ、若干濡れていたが。

「『風は熱を孕み、撫でしものを乾かさん』」

言い終えると同時に熱風が吹く。どうやらこれで服や顔、髪を乾かすつもりらしい。

風が治まると、昴の服は湿り気を失くしていた。

「洗濯機いらすだな」

「実際、何度もこれで洗つて乾かしています。電気代も干す場所もいらないので、結構重宝していますよ。それよりも朝食に急ぎましよう。待たせ過ぎるのもいけませんから」

「そうだな。というか、遅れる原因になつたお前が言つか」

「正確に言えば動物が原因ですけどね」

~~~~~

「すみません、遅れてしまいました」

「遅いですよ。ご飯が冷めてしまいます」

「お父様、遅いえ」

「はは、すまないね。動物に足止めされてね」

とりあえず、動物に足止めされたのは確かだ。足止めされたのは主に昴で、私達はそれに巻き込まれたようなものだが。

「まあ、とにかく食事にしよう。昴達も、そこに座ってくれ」

「ここですか？」

「ああ」

「？ お父様、その人たちは誰なん？」

木乃香がそう問ってくる。

「私の友人と、彼の娘のような人だよ。」

彼女の实年齢はともかく、昴が娘の様に思っているのは間違いない

だろう。

そう思った瞬間、凄まじい殺気を感じた。な、なんだこの殺気は！
？ 大戦の時にもこれほどの殺気は感じた事がないぞ！？

ゆっくりと、背後を見る。そこには慈母の様な微笑みを浮かべながら、しかしその目には刃のような冷たさと鋭さを宿した近衛殿が居た。

近衛殿の口が僅かに動く。読唇術を習得しているので何を言っているのかはすぐに分かり、習得していた事を後悔した。

【後で、お話があります。逃げないでくださいね？】

どす黒い殺気を私に対してのみ放ってきている。正直、生きた心地がしない。

気を、気を逸らさねば！ というか、何故私は殺気を向けられているのだ！？

「ほ、ほら木乃香。ご挨拶しなさい」

「はい。近衛木乃香です、はじめまして」

「ああ、これはどうもご丁寧に。初めまして、私は緋乃宮昴と申します。」

「アスナです。初めまして」

挨拶はすぐに終わった。というか昴、お前は初めましてじゃないだ

ろつ。

「さ、互いの自己紹介も終わりましたし、食事にしましょう」

近衛殿、頼みますから殺気を収めてください。生きた心地がしません。

S i d e o u t

S i d e : アスナ

『いただきます』

皆がそう言つて食事を始める。最初のうちは何故そんな事を言うのか分からなかった。気になったからスバルに聞いたら、食材になった動物や植物、それらを育んだ人や自然、さらに料理した人に対する感謝の意を示しているらしい。

生き物は皆別の命を奪つて生きているから、それを忘れず、奪つた命に感謝しているとか。

前を見る。置いてあるのはご飯と焼き魚、あとお汁。スバルが言うには『日本の朝食の定番料理』らしい。旅先でも何度か店で食べた事があるが、スバルが作ったものの方が美味しかった。これはどうだろうか？

隣のスバルを見てみると

「ああ、これぞ和食。素材の良さをうまく引き出し、それぞれの風味を引き立てている。このご飯の炊き具合、味噌汁の風味、鮭の焼き加減に塩加減、全てが絶品です。実に美味しいです。旅先で食べってきたものに比べればまさに天と地ほど・・・」

・・・なにか、おかしくなっていた。思わず動きが停止する。こんなスバルは初めて見た。

「昴、一体どうした？　なんというか、お前らしくないぞ？」

「うん、今のスバル、とても変」

「変なおじさんやな」

「お、おじ・・・？」

あ、なにか刺さったみたい。

「そうですね・・・おじさんですか。私まだ二十代後半なんですけど・・・ああ、子供から見たら二十代後半も三十代もそんなに変わりませんか・・・」

「こ、木乃香！　ハッキリ言ったら駄目だろう！」

詠春もそう思ってたんだ。でも、それを言ったら詠春もおじさんだよね。

・・・そういえば、さっきとても失礼なことを考えられた気がしたんだよね。

「まあ、今はいいでしょう。落ちこんでいたらご飯が冷めてしまいますし、作った人に対してそれは失礼です」

あ、立ち直った。

「なあアスナちゃん」

詠春の娘・・・確か木乃香だった・・・が急に話しかけてきた。どうしたんだろう？

「なに？」

「今まで世界中まわったたんやろ？　どんな所に行ったんか後で教えて〜？」

「別にいいけど」

「ほんま？　ありがとな。せや、せつちゃんも呼ば」

「？ 誰？」

「うちの友達。ええ子だよ。きっとアスナちゃんとも仲良くなれる」

「そう」

なんだろう。胸のあたりが暖かくなった気がする。どんな子だろう？
ふとスバル達の方に意識を向けてみると

「ああ、詠春。今夜は私に料理を作らせてもらえませんか？」

「お前が作らなくても良いだろう。客人みたいなものだからな」

「だからこそです。迎えられて何も返さないなど、私の礼儀に反します」

「別にいいんだが・・・」

「あら、私は食べてみたいです。貴方が昔何を食べていたのか興味がありますし」

「近衛殿・・・はあ、わかった。なら、今夜の食事は任せたぞ、昴」

「はい、任せてください。何を作りましょうかね。食材も買いに行かなければ・・・」

そんな声が聞こえた。どうもスバルが夕飯を作るらしい。

「アスナちゃん、どないしたん？」

「え？」

「なんや、子猫みたいな感じやったえ？」

「猫・・・」

スバルがご飯を作ると聞いて反応してしまったらしい。こつこつ言っの
をなんて言うんだっけ。

確か・・・餌付け？

17話・午前2・顔合わせ(後書き)

京都弁がよくわからない・・・。

真言による魂の浸食率：現在37%

18話：午後・夕飯とデザート

Side：昴

朝食が終わり、詠春が近衛さんに捕まりどこかへ引き摺られて行って二時間が経過しました。おそらく女性に対して考えてはいけない事でも考えてしまったのでしょうか。年齢の事か、それとも体重の事は分かりませんが。

アスナちゃんは詠春の娘さんの木乃香ちゃんにどこかに連れて行かれました。食事の時の会話から察するに、「せっちゃん」という子を探しに行ったようです。どんな子か分かりませんが、アスナちゃんの友人になつてもらえると私としてはとても嬉しいです。旅をしてばかりで友達ができませんでしたから・・・

「さて、それでは髪飾りの作成と、夕飯のレシピを決めましょうか」
結局、髪飾りの形は脳裏を過ぎった鈴の形に落ち着きました。水や風をイメージした形も考えたのですが、どうもしっくりこなかったのですよね。何故でしょうか？

「まあ、いいでしょう。先にレシピを決めますか」

何がいいでしょうかね。世界中を回り、その国固有の料理もいくつか習得しましたからかなりレパートリーに富んでいるのですよね。

和食はほぼ全て出来ますし、中華も材料さえ揃ってれば出来ます。洋食もできますし、カレーは本場インドの様にスパイスから作りません。

流石にスパイスから作るカレーはやめた方がいいでしょうね。とはいえルーを使って作ったカレーは私の料理人としての矜持に反します。あれを使えば作るのは簡単ですけど、その分味も固定されます。とすると中華か洋食、和食が基本になりますね。和食は食べ慣れていられるでしょうし、中華は手間や材料がかかり過ぎますから今回は洋食でいきますか。本山ではあまり食べないようですし。

ああ、久しぶりにあれを作ってもいいですね。アリカさんやテオドラ皇女も絶賛し、ナギやジャックが互いのそれを奪ってまで食べようとした私の特性デザート。奪い合いの過程で周囲の風景や地形を変えながらぶつかり合ったので以後ナギとアリカさんの結婚式まで一切作らなかつたら、二人とも他のメンバーに総攻撃されていますね。何気にゼクトも攻撃していましたし。

あれを作るとすると、魔法球に入る必要がありますね。市場にある物ではあれを作るのに必要な材料がありませんし。先に夕飯の材料を揃えて、下拵えをしてから入りますか。とりあえず、メインは肉か魚ですね。魚のムニエルをメインにして、野菜のサラダとコンソメスープ、自家製のパンといったところでしょうか？ アスナちゃんな以外に作るのは久しぶりですから、現在私が持ち得る技術の全てを駆使して、最高の物を作りましょう。

幸い、調味料やスパイス等は大量にありますしお金も宝石を換金した物がまだかなり残っています。買うとしたら魚に野菜、コンソメスープ用の肉と卵ですかね。デザートは魔法球に入って採ってくればいいですし。ああ、あとパンを焼くための小麦粉と酵母も

いりましたね。買いに行くのはこれぐらいですかね。とりあえず、詠春に言ってから街に買いに行きますか。商店街の場所も聞いておきませんと。

S i d e o u t

S i d e : アスナ

「せつちゃん。せつちゃんどこやー?」

木乃香と一緒に「せつちゃん」という人を探しているが、まだ見つからない。
何処に居るんだろう?」

「せつちゃんどこにおるんやろ?」

「どこで合ってるの?」

「いつもはこの木のへんで会うんやけど・・・」

木乃香はそう言うけど、居ない。もしかしたら一度来て、別の所に行ったのかもしれない。
そう思って地面を見る。

「どうしたん？ 急に地面見て」

「足跡がないか見てるの。もしかしたら、一度来てるかもしれないし」

そう言つて足跡を探すけど、私と木乃香の物以外見つからない。うつすらと残っているものは足の大きさが全然違うから除外する。
・・・ない。

「どう？」

「まだ来てないみたい」

「そうなん・・・」

若干声のトーンが落ちた。

どうしよう。慰めるとか、そういう事をした事がないからどういっていいのか分からない。
スバルだったらどうするだろう？

「ん・・・？」

視線を感じた。

今まで様々な感情を込めた目で見られたから自然と視線には敏感になるし、どんな感情で見ているのかはだいたい分かる。この視線に

込められているのは興味と恐怖、それと心配。私に対しては興味と恐怖を、木乃香に対しては心配と恐怖を込めた視線を向けている。誰だろう？ 見られる事には慣れてはいるけど、観察とかそういう目で見られるのは大嫌い。

この視線を向けてくる人が居るのは・・・左。

視線の主が居ると思う方向に顔を向ける。

そこに居たのは、木乃香と同じ年くらいの女の子。私が顔を向けると同時に建物の影に身を隠したけど、頭の横で結んでる髪の毛が見えてるから意味がない。あの髪形、なんて言ったかな？

まあ、いいや。とりあえずあの子かどうか木乃香に聞こう。

「木乃香、探してたのはあの子？」

「え？ どこにおるん？」

「あっち。あの建物の影。髪の毛が見えてるでしょ？」

近づきながら木乃香にそう教える。

隠れてた子が慌てて髪の毛を引っ込めるけど、遅い。

「あー！ せつちゃん見つけたえ」

「あつ、お、お嬢様。引っ張らんといてー」

「お嬢様で言わんとってー」

隠れてた子が木乃香に引き摺られながらやってきた。
どうやら逃げる事は出来なかったらしい。驚いた、木乃香より運動
神経とかありそうなのに。

「このちゃん、この子は？」

「新しい友達のアスナちゃんや。せつちゃんもきつと仲良くなれる」

「初めまして、アスナです」

「あ、初めまして。桜咲刹那です」

互いに挨拶をする。初対面の人に挨拶はとても大切な事。スバルに
そこところは口を酸っぱくして言われた。

「ほな、挨拶も済んだしうちの部屋に行こ」

「なんで？」

「なんでって、世界中回った時の話聞かせてくれるんやろ？ 外で
話すよりも、家の中で話した方がええやろ？」

それもそうだと思う。別に外で話してもいいけど、かなり長くなる
だろうし、立って話すよりも座って話した方がいいだろうし。

「わかった。じゃあ部屋に案内して」

「うん。せつちゃんも来てな」

「えっ？ あの、うちはべつに・・・」

「せつちゃんはどんなところ行ったんか聞きたくないん？」

「う・・・聞きたい」

「ほな来てな」

「うん・・・」

どうやら刹那は木乃香の頼み事は断れないらしい。世界にどんな場所があるのかを聞きたいという思いも多分にあったんだろうけど。

けど・・・

（友達・・・）

そう木乃香に言われた途端、胸の奥が暖かくなった気がした。どうしてそんな気がしたのか分からないけどこの気分は嫌じゃない。

（木乃香達となら、楽しく過ごせそう）

何故か、そう思った。

S i d e o u t

S i d e : 昴

こんにちは、本山を降りて街に買い出しに出た昴です。
早速でなんですが、現在とても困っています。

(迷いました・・・！)

はい、もの見事に道に迷ってしまいました。いえ、商店街に出て
食材を買ったまでは良かったんです。ですが、その後で色々見て
回ったのがいけませんでした。興味深い古書や歴史書を置いている
店がいくつもあったのです。そういった店を転々と回っていたら、
いつの間にか見知らぬ場所に・・・

(いけませんね。この癖は本当に治さなくては・・・)

とりあえず、転移で本山に戻りましょう。必要な材料は全て買いま
したし。ああ、買ったものは全て腰に付けたポーチに入れています。
これは魔法世界の遺跡で魔法球と一緒に偶然発見した物で、どれほ

ど大量の物でも大型の物でも収納できるという便利なものです。重さもまるではありませんし。取り出す時は望んだものが出てきますし、かなり重宝しています。これと同じような物を何かで見たような気がしますが、なんでしたっけ？

ちなみに現在入っている物は、調味料とスパイスが全種類と先程買った食材、魔法世界の遺跡で見つけた魔法球、私特性の調理器具と裁縫道具、龍笛・黒竜、仮契約カード、日本通貨約七百万、方位磁石、地図、絶対に目の覚める目覚まし時計、私とアスナちゃんのレポート、遺跡や古代文明に関するレポート百二十部、アリカさんに渡したレシピのオリジナルと新しく作った料理のレシピ。あと寶石が三百点ほどですかね。

ちなみに、私の特性デザートのレシピは誰にも渡していません。アリカさんやテオドラ皇女、アル、詠春に教えて欲しいと頼まれましたが断固拒否しました。あれは私の持つレシピでも特別なものですから、やすやすとレシピを渡すわけにはいきません。

つと、思考が逸れました。本山に戻って夕飯の下拵えをしなければ。そろそろ昼食の時間ですし、デザートの材料も採りに行かなければ。
・
・

「『誰も我に気付かぬ』」

認識障害で誰にも気付かれないようにします。
その後

「『空間は歪み、望む場所へ繋がる道となる』」

目の前に空間の歪みを作り、本山に繋がます。
しかし・・・

「私、ここまで迷いやすくなかったはずなのですが・・・」

何故ここまで迷いやすくなってしまったのでしょうか？
そう思いながら歪みを通り本山へ戻る。

~~~~~

本山へ戻ってきて三時間が経過しました。既に昼食も夕飯の下拵えも終えて、私は現在魔法球の中に居ます。

「毎度思いますが、ダイオラ魔法球ってダイオマ魔法球って間違えそうになるのですよね」

ダイオオマっていう名前に聞こえませんか？ 最初にこの魔法球の説明をゼクトやアルにされた時、普通に「誰ですか？」って質問してしまいましたし。あの時は、顔から火が出るくらいに恥ずかしかったです。他のメンバー全員に爆笑されましたよ。

ですがね、仕方ないでしょう!? あの時の私には魔法の知識なんてほとんどなかったのですから!! 知らない物を一度や二度間違えただけであそこまで笑う事はないでしょう!?

待て、落ち着きなさい私。ここで昔の事に怒っても意味はありません。それにここに来たのはかつての恥ずかしい思い出を思い出すためではなく、デザートの材料を採りに行くためです。

現在私が居るのはこの魔法球の中にある浮遊島、空中都市セフィロティア。まあ、都市とは言ってもこの管理を任せている精霊以外、誰も住んでいませんがね。ちなみに彼ら、元からこの魔法球内に居ました。

初めてこの魔法球に入った時、いきなり襲いかかって来たので丁寧な「お話」したら怯えられました。その後色々説明したら、何故か彼等の主に認められました。何故でしょうか? まあ、いいでしょう。現在はノワールとも仲良くやれているようですし。

この魔法球、セフィロティア以外にそれぞれセフィラの名を冠した11のエリアがあります。

第1エリア・王冠ケテルの海、第2エリア・知恵コクマイの塔、第3エリア・理解ヒナリの聖堂、第4エリア・慈悲ケセドの庭園、第5エリア・峻厳ゲブラーの修練場、第6エリア・美ティファレトの湖、第7エリア・勝利ネツァクの峡谷、第8エリア・栄光ホドの大広間、第9エリア・基礎イェンドの学舎、第10エリア・王国マルクトの門、第11エリア・知識ダアトの大書庫があります。ちなみにネツァクの峡谷にノワールは居を構えています。魔法世界から旧世界に来る時に離れてくれなかったので、この魔法球に入ってもらいました。

歩いてマルクトの門に向かいます。この魔法球内での移動は全てマルクトの門から行います。ですが、これが結構遠いのです。セフィロティアと橋で繋がっているのですが、この橋の長さが約3km



ほどあります。これを作った人は何故こんなに長い橋を作ったのでしょうか？

~~~~~

暫く歩いて、ようやく門に到着しました。色の違う10の門があり、白い門がケテル、灰色の門がコクマー、黒い門がビナー、青い門がケセド、赤い門がゲブラー、黄色の門がティファレト、緑の門がネツアク、橙色の門がホド、紫の門がイエソドにそれぞれ通じています。今回は青の門を通り、第4エリア・ケセドの庭園に向かいます。この庭園はさらに四つのエリアに分けられ、それぞれ「春の庭園」、「夏の庭園」、「秋の庭園」、「冬の庭園」に分けられます。それぞれの季節に分けられ、その季節でしか採れない野菜や果物が常に実っている森がある庭園なのでデザートに使う果物の調達にはもってこいの場所です。「冬の庭園」では現実では採れない果物が採れますしね。ちなみにここには癒しの湖もあり、大抵の傷・病はここで癒す事が出来ます。

青い門に触れ、扉を開き通ります。門を通ったそこには癒しの湖があり、そこから四つの川が流れそれぞれの森へ続いています。

「さて、それでは材料を採りに行きますか」

冬以外の全ての森を回らなければなりませんから、少々時間がかかります。まあ、現実世界とは時間の流れが違うのであまり急ぐことありませんけど。いっそこちらで作るというのも一つの手ですね。

こちらの時間で三日経つても、外の時間では一時間しか経過しませんし。ああ、こちらの時間経過で中に入っている人間が外の時間より早く年をとる事はありません。真言でそういう風にしましたから。

「果物が大量にいるのが困りものですが・・・」

様々な野菜・果物で試しましたが、苺をベースにして作った方が一番味が良かったんですよね。次点が白桃、次いで林檎でした。しかし、作るのに大量の苺とその他の果物を必要とするのが唯一の欠点です。一人分でも二パックいりますし・・・美味しいと言ってくれるのは料理人としてとても嬉しいのですが、もっと少ない量で同じ味を出せるように研究しなければ。レシピは絶対に渡しませんけどね。

「ティファレトの水も汲みますか」

あの水はそのまま飲んでも美味しいですし、料理に使う事で美容効果を付与できます。さらに食材の栄養を何倍にも高めてくれるので健康にもいい水です。

そのまま飲んだら、何故か髪が艶やかになりましたけど。「美」の名を与えられているからでしょうか？

まあ、それは別の機会に考えましょうか。いまは材料を探りに行かねば。

~~~~~

「できませんでした・・・」

現在、私はセフィローティアの厨房にいます。魔法球に入ってしまった  
えば一日以上経たなければ出られない事をすっかり忘れていました。  
そのためデザートを昨日から作っています。持ち得る技術の全てを  
全力で使った結果、今までにない最高の出来になりました。しかし・  
・

「作り過ぎてしまいましたね」

はい、材料がかなり手に入ったので調子に乗って作り過ぎてしま  
いました。どうしましょうか、これ。夕飯後のデザートの他に、この  
魔法球を管理している精霊達に上げてもいいつつか余ってしまいます。

「とりあえず、保存しておきましょうか。『時の流れより切り離さ  
れん』」

これで傷む事はないでしょう。さらにポーチに入れておきます。  
さて、外に戻りましょうか。夕飯を作らねばなりません。下拵え  
は終わっていますから後は結構楽です。

~~~~~

そして夕飯。詠春達のいる場所に料理を持っていきます。

「お待たせしました。私の自信作です」

「言うほど待ってないがな。楽しみだ」

「どのような料理でしょうか？」

「洋食です。コンソメスープと野菜サラダ、窯で焼いたパンと魚のムニエルですね。食後にはデザートもあるので楽しみにしてください」

「デザート？」

「はい、アスナちゃんも好きなあれですよ」

「！」

「アスナちゃん、どないしたん？」

「目が恐いです、アスナちゃん」

昼食には一緒に居た刹那さんも居ます。彼女の分の夕食とデザートも当然用意してあります。しかし、刹那さんが言ったようにアスナちゃんの目が恐いです。まるで獲物を狙う猛禽類の様な目で私を見

てきます。

「昴、まさかデザートは・・・」

「ふふ、察しがいいですね詠春。あの時よりもさらに美味しくなったアレ、と言えはいいでしょうか」

「やはりか!」

「早く食べたいからと言って夕食を掻き込むように食べたなら許しませんよ」

「そんなことはせん!」

「ならいいです」

料理人としてはちゃんと味わって食べて欲しいですからね。

「あの、デザートってどんなものなんですか?」

近衛さんが聞いてきます。まあ、気になりますよね。

「そうですね。後で出しますが、どんな物かは言ってもいいですよ。ゼリーです」

「ゼリー？」

「はい、ゼリーです。私の現在持ち得る全ての技術と経験、材料で作り上げた今までで最高のゼリーです」

「どんなものなんですか？」

「それは食べてからの楽しみです」

それでは食べましょうか。

『いただきます』

Side out

Side: 詠春

夕飯はかなり早く食べ終わった。昴め、あの時よりも腕を上げたな。料理を口に運ぶ手が止まらなかったぞ。近衛殿はどうやって作ったのか後でレシピを聞きに行くつもりらしい。まあ、これらは普通の料理だから昴も教えてくれるだろう。同じ味を出せるとは思えないが。木乃香と刹那君も美味しいと言いながら全て残さずに食べきった。どうやら子供達の食事は大人の物より少なめにして出されていたらしい。

現在、昴はデザートを取りに行っている。

「詠春さん、あの人の作るデザートはどういったものなんですか？」

近衛殿がそう聞いてくる。それは先程昴にした質問と同じものだった。

「そうですね。先程昴も言ったように、ゼリーです。ですが、既存のゼリーのどれよりも上にあると言っていいでしょう。あの味はまさに絶品です」

「そうなのですか？」

「はい。濃厚でありながらまるでしつこくない味もそうですが、匂いも、舌触りも、色も上にあると言っていいものです」

「色、ですか？」

「あの色は、最高級の宝石を見ているようでした。濃い、ピジョンブラッドの様な赤色ですが向こう側がハッキリと透けて見えるのです。どうやればあの色が出せるのか・・・」

「レシピは聞いたんですか？」

「聞きましたが、一切教えてくれませんでした。『特別なレシピですから、教える事はできません』と言われましたよ」

そう、あのレシピを覚えてくれるよう何度も頼んだが頑なに昴は拒んだ。とても大切なレシピだからこそ、相応しいと思った人へのみ教えると言っていたな。つまり私は相応しくなかったわけだ。何故だ。

「名前はなんというのですか？」

「確か・・・」

名前を思い出し、口にしようとしたところで苺の匂いがした。同時に口の動きが止まる。

「お待たせしました。デザートですよ」

そう言ってゼリーを乗せているだろう盆を手に昴が戻ってきた。苺の匂いで、木乃香達の目も盆に向く。昴はそれぞれの前に一つずつゼリーを置いていく。置いたたびにフルフルと揺れるゼリーは、それだけで爽やかな苺の匂いを発していた。色は深紅。だが先程説明したように向こう側がハッキリと透けて見える。本当に、どうやればこの色が出せるのだろうか？

「私の最高の一品、『緋の雫』です。どうぞ御賞味あれ」

そう、『緋の雫』。それがこのゼリーの名前だ。どんなに新しい料

理を作っても決して名前を付けない昴が、ただ一つだけ付けている料理の名前。濃くも透き通る赤は最高級のルビーのように見えるが、見ようによっては揺らめく炎を連想させる。

「これは、本当に料理なんですか？」

近衛殿がそう口にする。そう思っても仕方がないだろう。私達「紅き翼」も、初めて見た時は宝石じゃないのかと思ったほどだ。アリカ様も「これは宝石ではないのか？」と言っていたし。

「きれいな色やねえ。苺のええ匂いもするし」

「おいしそう・・・」

木乃香と刹那君もスプーンを手にしているが、マジマジと『緋の雫』を見ている。なんとなく、目が輝いているように見える。

「いただきます」

アスナ姫がそう言い、スプーンで一口分すくい、口に入れた。すくうと同時に、ゼリーはフルフルと揺れさらに苺の匂いを撒き散らす。

「……」

口に入れた瞬間、アスナ姫が震えた。さらに目を閉じて味の余韻に浸ろうとする。子供のとるリアクションではないが、あの時よりも美味くなったと言っていたな。

「いただきます」

私もそう言い、一口分口に運ぶ。そして口に入れた瞬間、私は陽の光が降り注ぎ、果物が実り色とりどりの花が咲き誇る庭園に居た。

「はっ!?!」

待て、ここは本山の一室だ。陽の光が降り注ぐ果物が実る庭園は何処にもない。ならば、あの風景は一体？ 見れば昴はクスクスと笑いながら私達を見ていた。

「どうですか？ あの時よりも美味しくなっていたでしょう?」

「む・・・」

確かに、あの時よりも遥かに美味くなっていた。最初に食べた時も、ナギとアリカ様の結婚式に食べた時も庭園に居るような錯覚は起こらなかったからな。

「昴さん」

「？ なんですか？」

近衛殿が何かを決意した目で言う。

「このゼリーのレシピ、教えてください」

「駄目です」

そして一言で断られた。

「何故ですか？」

「詠春から聞いているでしょう？ これのレシピは、私にとって特別な物なのです。私が教えてもいいと思った人にこそ、『緋の雫』のレシピは教えます」

「私は相応しくないとということですか？」

「相応しいかそうでないかではありません。教えてもいいと思えたら、貴女にこのレシピを渡します」

「そうですか・・・」

そう言われ、近衛殿が引き下がる。どうも、昴は現状では誰にもレシビを渡すつもりはないようだ。

「それよりも、食べたほうがいいですよ？ 今回のこれには美容効果もありますから」

「！！ それは本当ですか！？」

「はい」

昴がそう言うと、近衛殿は残りのゼリーを食べ始めた。だが一口食べるたびに動きが止まる。食べきるにはそれなりに時間がかかるだろうな。

見れば木乃香と刹那君は互いに食べさせあっている。微笑ましい事だ。

19話：風のベル（前書き）

今回はサイド変更はありません。

19話：風のベル

詠春達に「緋の雫」を振舞ってから早くも五ヶ月が経ちました。

あれからアスナちゃんは刹那ちゃんと一緒に神鳴流の修行を始めました。時には木乃香ちゃんと一緒に川で遊んだり、三人揃って私の所に来たりしますけどね。来る時は大抵、私が子供達の為にお菓子を作り終えた時です。いつもちよいどいいタイミングで来るので少々驚いています。狙って来ているように感じるのは私の気のせいでしょうか？

近衛さんはあの後から「緋の雫」の再現に力を入れていきます。どうやら食べ終えた時に材料の何種類かを特定したらしく、試作品を作ってはそれに別の果物を入れて確かめるといった事を続けているようです。これには素直に驚きました。

私があれば作るのに使った材料は二桁に上りますが、それを分からないように調理しているのです。それを一度食べただけで、数種類だけとは言え特定するとは・・・どれだけ味覚が鋭いのでしょうか？ 完全再現はできないと思いますが、どうでしょうか？

近衛さんオリジナルの「雫」を作ってもらいましょうか？ あの色を出せるのは正しく私だけですし、あの色を出す事が出来るからこそ「緋の雫」になるのです。レシピもなしに再現しようものなら、「緋色」から離れた色になりますし。

まあ、それは今は置いておきましょう。

現在、私は魔法球内のネツアクの峡谷に居ます。ここには鉱石や寶石の鉱脈があり、私の持つ宝石はここで採掘しているものです。偶に飛竜が襲いかかって来ますから注意が必要ですけどね。今回ここに来たのは、この奥にある「結晶」を取りに行くためです。私が

作っている、アスナちゃんに贈るための髪飾り。それに、私の笛のように少し手を加えようかと思ひまして。

常に私が一緒に居る訳にもいきませんし、強くなるとは言っても彼女はまだ小さいです。防御手段は一つでも多い方がいいでしょう。

「本当は何の力もない物を渡したかったのですがね・・・ああもう、今更何を後悔しているのですか私は」

未だに彼女に戦いから離れて生きて欲しいと思っている部分があります。彼女自身が強く望んだから詠春に連絡して神鳴流を教えるもらっているというのに、これではアスナちゃんにもそうですが詠春に失礼です。ですが、どうしてもどこかでそう思ってしまう。これが子を思う親の気持ちと言うものでしょうか？

「考えていても仕方ありませんね。今はとにかく進みますか」

グルウ

「おや？」

歩き出そうとしたら、聞き覚えのある唸り声が聞こえました。後ろを向いてみると、そこには大戦前から共に居るパートナーの姿がありました。

「ノワール、久しぶりですね！ 元気になっていましたか？」

グオウ

「そうですか、それは良かったです」

グルル・・・

「ああ、最近意外と忙しくて、なかなか来れないのですよ」

グオルル・・・

「アスナちゃんですか？ 剣の修業をしていますよ。詠春は覚えていますか？ 彼に教えてもらっています」

グルウル

「いや、覚えておいてあげましょうよ。いくら周りのメンバーに比べて影が薄いからって、一緒に戦った仲間の一人なのですから」

「えっくしー!!」

「どうしたの？」

「風邪ですか？」

「いや、風邪はひいていない筈なんだが・・・えっきしー!!」

「花粉症ですか？ この真夏に珍しいですね・・・」

「誰かが噂をしているのかもかもしれません」

「お父様、大丈夫なん？」

「ああ、心配ないよ木乃香」

グウオウ

「今日はここの奥にある結晶を取りに来ました。私の笛と同じような物を作るうかと思ひまして」

グルウ

「奥まで乗せて行ってくれるのですか？ ありがとうございます」

グウ

どうやら目的地まで乗せて行ってくれるようです。あそこまで行くには切り立った崖を登ったり、狭い洞窟を通ったりしなければならぬので助かります。

すぐにノワールの背に乗り、峡谷の奥に飛んでもらいます。気のせいでしょうか、以前よりも飛翔速度が速くなっている気がします。

ああ、ちなみにアスナちゃんに贈る髪飾りはまだできていません。鈴の形にすると決めたのはいいのですが、デザインがなかなか決ま

らず。イメージを描いては消して、消しては描いてを五ヶ月間繰り返し返して昨日ようやく決まりました。既に銀粘土と金粘土の造形も終わり、後はこれから取りに行く結晶を鈴に溶かし込み、焼いて、磨くだけです。

取りに行く結晶は風の属性を秘めた物です。彼女の性格で風の属性は似合わないかもしれませんが、風のように自由にあって欲しいという私の願いを込めて作ろうと思います。

それに、そう遠くない未来で彼女は風に何かをされるような気がするので、その防衛手段としてもあります。

流石に私の笛のようにイメージを現象化する事はできないようにしますが、こと風に対しては絶対の干渉能力を持つ鈴にするつもりです。

完全魔法無効化能力があるので必要ないかもしれませんが・・・

「完全魔法無効化能力では、純粹物理攻撃は防げませんからね」

魔法で発生した物による物理攻撃ならともかく、拳や脚、剣戟、銃弾と言った純粹な物理攻撃は無効化能力では防げませんから。咸卦法で能力を底上げすれば多少痛いぐらいで済むかもしれませんが、女の子なのですし、あまり傷ついて欲しくありません。

こう思う私は過保護でしょうか？

・・・そう言えば、最近アスナちゃんは木乃香ちゃんや刹那ちゃんと一緒に居る事が多いですね。二人にも何か作った方がいいでしょうか？ 作るとしたら何がいいでしょうかね？

流石にアスナちゃんと同じように魔法楽器はやめた方がいいでしょ

う。それに詠春が駄目だしするでしょうし。彼は木乃香ちゃんに魔法に関して欲しくないようですし、それで魔法楽器を渡そうものならなんて文句を言われるか……

二人には普通のアクセサリーでいいでしょう。問題は形をどうするかですが……

グオウ

「ん……ああ、着いたのですか？」

グウ

思考の海に沈んでいる間に、いつの間にか目的地に続く道に着いていたらしい。考え事をするとな時間の経過が分からなくなりますね。

「ありがとうございます。少し、待っていてもらえますか？」

グオウ

そう言っつてノワールの背から降りる。

そして人一人がようやく通る事が出来るだろう道を進みます。ここから先は、何故かノワール達のような幻想種は進めませんから。十分ほど歩いて、ようやく目的地に到着しました。同時に目眩がし、膝をつきかける。

「相変わらず、魔力が濃いですね。あまり長く居たら酔ってしまいそうです」

およそ自然界では存在しないような濃度の魔力に中てられ、前に来た時は吐きかけましたからね。ナギやアルは平気そうでしたが、こんな時は一般人よりも魔力の少ない自分が恨めしい。頭が既にぐらくらします。

「早く取って、戻りますか。また吐きそうになるのは嫌ですし」

まだ若干目眩はしますが、歩けないほどではありません。あの時よりも耐性が付いたという事でしょうか？ まだ魔力酔いしそうですけど・・・まあ、何度か来れば自然と耐性もつくでしょう。

そんな事を思いながら道を進み、着いた場所はさらにいくつかの道に分かれた開けた空間。そのうちの一つの道に入りさらに奥を目指す。入ると同時に風が吹きはじめが、他の道に比べたらまだいい方でしょう。まあ、この道も場所によっては吹き飛ばされる可能性があるがあるので注意は必要ですが。

「目にも注意しませんとね。ジャックみたいになりたくありませんし」

以前この道を進んだ時、吹いていた風に飛ばされた小石がジャック

の目に直撃しましたからね。それでジャックは「目があゝ、目があゝ」とどこかで聞いたような事を言っていましたね。誰が言ったのでしたっけ？ 何故か懐かしさを感じましたけど・・・
まあ、真言で風の影響を受けないようにしますか。

「『風による影響を受けない』」

これで吹き飛ばされることはないでしょう。

ビシッ

「！ ぐああああ！ 目が、目があああ！..」

小石が両目に直撃しました。

馬鹿な！ 風による影響は受けないは・・・

「あ・・・」

そうでした。受けないのは『風による影響』だけであって、『風によって引き起こされた現象の影響』は対象外でした。つまり、風に飛ばされた石や木の枝といった物は防げない。私とした事が、なんて初歩的なミスを・・・

「つく、迂闊でした。まさかこんな初歩的なミスをおかすとは」

滲んだ涙を拭いながらぼやく。

おかげでジャックと同じ事を言ってしまった。幸いなのは誰にも見られていない事でしょうか。もしアルに見られていたら、盛大にからかわれたでしょうし。

「『風に引き起こされた現象の影響を受けない』」

これで大丈夫でしょう。ああ、目が痛い・・・

~~~~~

暫く歩いてようやく目的の結晶がある場所に着きました。それなりの広さの円形の空間で、その中央にはぼんやりとした薄緑色の光を放つ、透き通った薄緑の結晶柱が立っていました。さらに天井にある穴から陽の日からが差し込み結晶柱を照らし、どこか神秘的な雰囲気なたたえています。

その周りには円を描くように同じ光を放つ結晶がいくつも存在し、神秘的な雰囲気さをさらに引き立てています。

ここが今回の私の目的地、風の結晶洞です。神秘的な空間で、時間の流れを忘れてしまいそうになりますがそう長くは居られません。あまり長くいると、充滿している魔力と属性に中てられてしまいますから。

「なるべく透き通った、綺麗な結晶がいいですね」

この結晶、魔力が一つの属性に染まり結晶化した物で、私は「マナクリスタル」と呼んでいます。

自然界ではほぼ絶対にできないであろうこの結晶は、純粋なものであればあるほど透き通り、その属性に見合った色に染まり、凄まじい魔力を内包します。

最高純度のものであれば、小指の先ほどに小さい物ですらナギの数倍から十数倍の魔力を内に秘めます。魔法使いから見ればとても欲しい物でしょう。

ですがこの結晶、そのまま持つていても意味はまったくと言っていい程ありません。何故かというと、この結晶の魔力を引き出す事が出来ないからです。もし引き出せたとしても、引き出した魔力は既に属性に染まっているのでその属性の魔法しか使えません。その属性の魔法なら効果を何倍にも高めてくれますが、魔法使いの得意な属性でない場合、互いに反発しあい一切使えません。

私はこれを道具に溶かし込み、その属性の加護等を受ける事が出来ないかを試しました。いくつも道具を使い実験し、失敗した道具が369個に及んだところでようやく成功しました。

「ああ、これがいいですね。色合いといい透明度といい、とてもいいです」

手に取るのは小さいながらもとても透き通った結晶。手に取ると同

時に凄まじい魔力と風の属性を肌を感じる。

今回溶かし込む物は、アスナちゃんに贈る鈴の髪飾り。リボンは今使っている物を使えばいいですし、風の属性を持った物なら風の障壁で銃弾などを逸らしてくれるでしょう。

「では、戻りますか。これ以上はつらいですし」

頭が痛くなり、足が若干ふらつきます。

まずいですね。何故かここでは真言の転移も出来ませんし、急いで戻った方がよさそうです。

~~~~~

「つく、頭が・・・」

グルウ

「ああ、大丈夫ですよ。少し、魔力に酔っただけですから・・・」

とはいえ、少しつらいですが・・・少々長く居すぎましたかね？

目眩もしますし・・・気持ち悪いです。ですが、行ったのが風の属性でよかった。これが火や氷の属性だったら・・・

「やめましょう。考えるだけで恐ろしいですし」

とはいえ、材料は揃いました。あとは焼くだけの鈴も持ってきていますし、セフィローティアで溶かし込んで焼きましょう。

「ノワール、峡谷の入り口・・・マルクトの門に向かってください。流石に暫く歩けません・・・」

グウ

そう言うと私を心配してか、ノワールは速度を落として真直ぐ飛んでくれます。流れる風が頬を撫でて、気持ちいいです。

この魔法球の中では、真言の転移すらできませんからね。どうも転移というか、空間を歪める事自体に制限が掛けられているみたいですね。そのために、一つのエリア内の移動ならともかく、エリア間移動はマルクトの門を通らなければなりません。

暫く飛んでもらっていると、水晶でできた巨大な門が見えました。所々にレモン色・オリーブ色・小豆色・黒の4色が彩色されている奇妙な門です。これが第10エリア・マルクトの門に繋がる門です。門の前に立つと、巨大な門が勝手に開きます。

「ノワール、今日はありがとうございました」

グウ

「はい、次に来る時はアスナちゃんも連れてきます。あの子もあな

たに会いたがっていましたから。そうそう、彼女に友達が出来たんですよ。それも二人も」

グウ？

「はい、友達です。いい子たちですよ。機会があるなら、あなたに会わせたいですね」

グルル

「すみません、今は無理なんです。詠春が、魔法やそれに関わる物を娘さんに知って欲しくないみたいで……」

グウ……

「ああ、そんなに落ち込まないください」

暫く談笑して、体を回復させます。さて、それでは行きますか。

「それではノワール。また今度会いましょう」

グオウ

そう言うとノワールは自分の住んでいる場所に飛んでいきます。そして私は門を通り、セフィローティアに戻ります。

「さて、それでは始めますか」

腰のポーチから造形の済んだ鈴を取り出し、机の上に置きます。

「『風よ宿れ。宿りし風は主を守りし音色となりて、永久に世界にその音を奏でん』」

とってきた「風のマナクリスタル」を取り出し鈴の上にかざし、真言を使います。するとクリスタルは薄緑の光の粒子となって、机に置いてある鈴に吸い込まれていきます。

「『火よ起きろ。其はただあつて燃えるもの。紅蓮となりて燃え盛れ』」

全ての粒子が鈴に取り込まれるのを確認し、竈に火を入れます。本来なら竈の火ではなく、焚き火程度の火力でいいのですが、マナクリスタルを溶かしこんだものはその程度の火力では影響を一切受けません。なら焼いてからクリスタルを溶かし込めばいいのでは？と思うのですが、それだと魔力が宿りにくくなってしまいます。以前一度試したのですが、魔力がほとんど宿っていませんでした。

竈の火が安定した所を見計らって、鈴を中に入れます。同時に火が凄まじい勢いで燃え上がり、室内の温度が一気に上昇します。これから鈴に完全に宿るまで、寝ずに経過を見守らねばなりません。取り出すタイミングを間違えれば、ここが吹き飛んでしまいますから。

火の中に鈴を入れて、既に十五時間が経過しました。凄まじい熱で汗が止まらず、たびたび外に水分補給に行きましたが、まだ出来ません。やはり最高純度のクリスタルだと完全に宿るのに時間がかかりますね。完全に宿ったら、その物体の周りに属性の光が出るのでそれを見逃さないために常に火を見ていなければなりません。おかげで目がチカチカします。火を見ながらそう思っていた時でした。

「ん・・・」

鈴の周りに、薄緑の光が出始めました。ようやくです。後はあの光が完全に円を結べば取り出す事が出来ます。ですが、これがとても難しいのです。一瞬でもタイミングをずらせば、それで全てがやり直しですから。

目を凝らす。光が円を結ぶのを見逃さないように、タイミングを間違えないように・・・
今！

「はあっ！」

そう声を出しながら取り出し、水の中に沈める。熱した金属と冷たい水が接して音が出るが、気にしません。暫く水につけてから取り

出します。

鈴は黒ずんでいました。銀と金で作られているため、おそらく銀の部分に反応して酸化したのでしょう。指で触れると、ほんの僅かだが温かい。このくらいなら大丈夫でしょう。そう思いながら磨くための道具を取り出します。

布に液体をつけ、鈴を磨いていく。少し磨くと、銀の輝きが出てきました。同時にかなりの魔力を感じます。そのまま磨いていき、四つの鈴を全て磨き終えました。それぞれ金が二つと銀が二つ。磨き終えたそれら一つ一つからかなりの魔力を感じます。このままではすぐに魔法楽器だとばれてしまうでしょう。

「『包み込むそれは全てを隠す。真実も、偽りも関係なく』」

なので真言を使い、魔力を感知できなくします。これで魔法楽器とはそうそうばれる事はないでしょう。後は実験ですね。成功した事は分かっていますが、きちんと風が起こるかどうか、確かめなければ。

竈の火を消して水分補給をした後、暫く歩いて大庭園に着きました。今の時間帯は夜。辺りには誰もいません。丁度いいです。

鈴の一つを手に取り、鳴らします。

チリ　　ン

とても涼やかな音が鳴りました。ですが、何も起きません。

今度はイメージして鈴を鳴らします。自分に向けて撃ち出される、無数の銃弾を出来る限り鮮明にイメージし、再び鈴を鳴らす。

チリ　ン

再び涼やかな音が鳴る。が、

ゴウオツ

今度は自分の周りに、風が護るように吹き荒れました。成功です。今までで会心の出来です。

思わず口元に笑みが浮かぶ。

ですがまだです。これは物理攻撃を防ぐだけ。アスナちゃんは魔法攻撃は自動で防げますが、それは彼女が「自分に対して脅威」だと認識した物のみ。武装解除は脅威と認識されず、防げない可能性もあります。ですので

「『武装解除に対して、カウンターとして自動発動し防ぎなさい。ただし、普段は発動しないように』」

そう真言で命令する。すると鈴は光り、勝手に鳴った。

チリ　ン

これで本当に完成です。

疲れました。そう思いながら来た道を戻り、部屋に入る。水を浴びて汗を流した後、ベットに入ってすぐに私は意識を手放しました。

後日、アスナちゃんに鈴をプレゼントしたらとても喜ばれました。
木乃香ちゃんと刹那ちゃんにもねだられました。今ないので別の
物を作つてくると言つて我慢してもらいました。
さて、何を作りましょうか・・・

19話：風のベル（後書き）

なんか、主人公よりアスナの方がチートになっていってってる気がする
今日この頃です。

それと、もう1話か2話作ったら学園編になる予定です。

20話：変異（前書き）

今回、なんか変です。

20話：変異

Side：詠春

．．． 〉 〉 〉 ？ 〉 〉 ．．． 〉 〉

「ん．．．何だ？」

暗い、まだ深夜と呼べる時間帯に、微かにそれは聞こえてきた。龍が鳴くような音で、どこか懐かしい、しかし哀しげなイメージを聞くものに抱かせるその曲調。

「これは．．．笛の音か？ 一体誰が．．．」

聞き覚えのない曲調が気になり、部屋から出る。ちなみに近衛殿達とは別の部屋だ。

〉 〉 ．．． 〉 〉 〉 ？ 〉 〉 ．．．

部屋から出て庭を見るが、誰も居ない。だが音は何処からともなく聞こえてくる。僅かに風が吹いているので、おそらくそれに乗って聞こえてきたのだろう。

だが．．．

「僅かにだが、魔力を感じるな．．．」

聞こえてくる音色に、ほんの僅かにだが魔力を感じる。感じる魔力の量は僅かだが、この曲を奏でているだろう人間が居る場所はどうかわからない。
もしかしたら、鬼などを召喚して本山に攻め込んでくる気かもしれない。

「流石にそんな馬鹿な事はないかもしれんが・・・」

本山には結界がある。それも、並大抵の術者では破れないような強固な結界が。この結界がある限り、本山を落すのは不可能とは言わないが、極めて難しいだろう。

「だが、万一と言う事もある。一応、見てくるか・・・」

部屋に戻り、愛刀である夕凧を持って外に出る。仮にも組織の長が単身で出るなど、あってはならない事だろうが他の人間は皆眠っている。流石に木乃香達をこの時間に起すのは忍びない。
それに・・・

「敵意があるような曲調ではないように感じるしな」

むしろ、何かを誘っているようにも感じる。何らかの存在に聞かせ

「行くか」

この曲を奏でていている者に聞けば、この感情の理由も分かるかもしれない。そう思い、私は再び走りだした。

Side out

Side：刹那

夢を見ている。

何故夢と分かるかというところ、今見ているものは過去の映像だから。

私が長に拾われる前、まだ父様と母様が生きて、烏族の里に居た時の記憶の映像。

白い羽と白い髪、赤い目を持って生まれた私は忌子として周りの大人たちに蔑まれ、同年代の子供たちからは石などを投げられ虐められていた。混血だったというのも虐められる原因だったのだと思う。

優しくかった父様と母様。

虐められて、泣きながら家に帰った私をいつも慰めてくれた。時には厳しかったけど、泣いていた時はいつも慰めてくれた。

なぜ私を生んだのか。そう問い詰めた時もあったが、父様も母様も私を抱きしめて「互いに愛したからこそ、お前が生まれた」と答えた。そして、私の事をとても愛しているとも。

でも二人が死んで、私は里を追われた。何も持たされず、里から追い出された。

数日間山の中を彷徨って、倒れた。運よく長に見つけられて助かったけど、長に見つけられなかったら、私は生きていなかったと思う。だけど、追い出されていい事もあった。里の外には私を虐める人はいなかったし、長の娘であるこのちゃんが私の友達になってくれたから寂しくなくなった。

初めての友達。とても大切な、私の最初の友達。アスナちゃんに出会った時は、また捨てられるんじゃないかと不安になったけど、アスナちゃんも友達になってくれた。

父様、母様。刹那は今幸せです。ですが、一つだけ言いたい事があります。

このちゃんには長達が、アスナちゃんには昴さんが居るのに、私だけ親が居ません。

「父様・・・母様・・・」

涙が流れる。

なぜ、私を遺して死んでしまったのですか？　なぜ、私を置いて逝ってしまったのですか？　なぜ・・・

S i d e o u t

S i d e : 詠春

現在、私は川の上流に向かっている。上流から音が聞こえてくるからだ。

〜？〜？〜？〜？…

途切れ途切れだった曲が繋がって聞こえてくる。まだハッキリと繋がっていないが、どういう曲かは分かるほどだ。

〜？〜？…

やはりどこか懐かしさと哀しさを聞く者に抱かせる曲調だ。だがこんな曲は旧世界でも、魔法世界でも聞いた事がない。アリカ様やテオドラ第三皇女はどうか知らないが、少なくとも私は知らない。

（誰だ？ 誰がこの曲を奏でている？）

聞いた事がないのに懐かしさと哀しさを抱かせるこの曲。しかもこの曲を奏でている者が居る場所に近づけば近づくほど、強烈な哀しさと懐かしさが胸の内から湧き上がる。
何故だ？ 今までこんな感情は音楽では抱かなかったのに、何故この曲を聞くとこれほどに心が揺れる？

何故、涙が流れそうになる？

〜？〜？…

「っ！ っっは…・・・滝？」

途切れることなくハッキリと繋がって聞こえる場所に着いたが、そこは以前、昴に教えた滝だった。

「まさか、昴か？」

こんな時間、この場所で一体何を？ いや、さっきから音が聞こえているのだからここで笛を吹いているんだろうが、一体なぜ？ それに、何故滝の音がしているのにこうハッキリと笛の音が聞こえる？

「聞けば分かるか。おそらく真言だろうが・・・」

そう考えながら滝に向かって歩を進める。少々魔力が濃いが、耐えられない程ではない。昴だったらすぐに膝をつきそうになるだろうが・・・あいつほど魔力がない人間も珍しいな、そう言えば。

以前アルに聞いたことだが、どうも一般人の十分の一以下の魔力しかないらしい。タカミチ君のように、詠唱ができない体質でもないのに魔法が使えないぐらいだから余程少ないのだろうとは思っていたが、まさかそこまでとはな。気は一般人よりもやや多いぐらいだが、何故魔力だけそこまで低いのか・・・

「まあ、能力的に見たら丁度いいのかもしれないな」

真言なんて言う出鱈目な能力を持って、さらに魔力や気がナギヤラカンと同レベルだったらそれこそバグだ。真言だけでも十分バグと

言うか、チートだが。

言葉そのものがあいつの武器の様なものだから、戦っている時はかなり注意しなければならん。一瞬でも気を抜けば瞬殺されてしまうからな、いつかの馬鹿二人のように。

幸い、あいつは滅多なことでは真言を使わないし、使うとしても家事に使うぐらいだと言っていた。

・・・便利だとは思うが、能力の無駄遣いだと思うのは私だけではないはずだ。まあ、戦争で人に対して使うより、余程いいだろう。

あいつ自身も、真言で人を傷つける事をあまり好しとしないから、アスナ姫に危害を加えなければ人に対して使う事はないだろう。

そんな事を思いつつ、歩を進める。いつの間にか曲は止まっている。終わったのだろうか？

滝に着き周囲を見ると、滝壺の近くの岩に昴は腰かけて月を見ていた。手には愛用の笛、黒竜を持っている。

「昴、こんな夜更けにどうした？」

声をかける。すると昴は、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

「っ！！」

同時に背筋に走る凄まじい悪寒。このままここに居たら、殺られる。直感に従いその場から飛びのく。

何も起こらないが、悪寒は消えず、むしろさらに強くなる。

(誰だ、コイツは!?)

姿こそ昴のそれだが、あいつは陽だまりの様な温かさや傍にいる奴に感じさせる奴だ。こんな身の毛もよだつ様な悪寒を抱かせる奴では断じてない。

それに、昴の瞳の色はルビーのような「紅」で、温かみもある。目の前に居るコイツのような、全てを焼き尽くす様な「紅蓮」では、ガラス玉のような虚ろな目ではない。

「貴様、何者だ!！」

冷や汗を流しながら夕凧を構え、何者かを問う。

「.....」

目の前の「何か」は何も答えず、ただ私をじっと見ている。虚ろなガラス玉のような目で、しかも無表情で見てくるので酷く不快だが、動かない。いや、動けない。長年鍛えた剣士としての直感が警告している。

動けば死ぬ。

ただじっと見る。私も、昴の姿をした「何か」も、互いをただ見る。

~~~~~

互いに見続けて十分ほど経っただろうか、それともまだ十秒と経っていないだろうか。分からないが、精神的につらくなってきた。

呼吸が乱れ、体が震え始めた。まずい、殺られる。そう思った時だった。

「詠春？ 一体どうしたのです？ そんなところで夕凧を構えて・・・」

「!?!? 昴!?!?」

右から昴の声がした。思わずその方向を見てしまい、慌てて目の前に再び顔を向ける。  
が・・・

「居ない・・・?」

昴の姿をした「何か」は消え失せていた。それこそ、まるで初めからそこには存在していなかったかのように。あの身の毛もよだつ悪寒も消え失せていた。

「幻覚か？ いやしかし・・・」

「どうしたのですか？　こちらを向いたかと思えば急に滝の方を向いて。変ですよ？」

「変って、お前な・・・いや、いい。それよりも昴。あそこに誰がいなかったか？」

右からやってきた昴に、滝壺の側の岩を指さしながら尋ねる。こっちの昴はいつものように、柔らかな雰囲気を出している。

「あそこって、滝の近くのあの岩ですか？」

「ああ」

「居ませんでしたけど、どうかしたのですか？」

「あそこにお前が居た」

訪ねてきた昴にそう答える。正確にはお前の姿をした「何か」だが。

「私が？　それはないでしょう。私は今ここに帰って来たのですよ？」

「戻ってきた？　どういう事だ？」

「この滝の上に、静かない場所があります。月もよく見えます

し、私のお気に入りの場所です。先程までそこで笛を吹いていました」

「色々聞きたい事はあるが、何故こんな夜更けにこんな場所で笛を吹いていたんだ？」

「最近、どうにも寝付けなくて。ここで笛を吹いて心を落ち着かせていたのです。本山の中で吹いたら他の人を起こしてしまう可能性があります。ここなら本山からもそれなりに距離がありますし、睡眠を妨げる事もないでしょうから。そう言えば、詠春は何故ここに？」

心底不思議そうに昴は尋ねてくる。この男は・・・

「微かにだが、笛の音が聞こえてきたからな。音に魔力も僅かながらこもっていたし、侵入者が何かかと思っただけ。見に来た」

「見に来たって、あなた一人ですか？ いくらなんでも軽率すぎるでしょう」

「その原因が何を言うか」

「む・・・」

昴が黙る。そもそも昴が外に出なければここに来る必要性もなかったのだ。

まったく、無駄に死ぬかと思っただぞ・・・

「それよりも、なんで笛の音が魔力を宿していたんだ？」

「ああ、それはですね。私の笛はノワールの角や鱗を使って作られているでしょう？ それに宿っていたノワール自身の魔力が音に乗って流れ出たのでしょうか。この笛はイメージを現象化させることができますし、ノワールを呼び出すこともできますから」

「ノワールの召喚は分かるが、イメージの現象化？ 真言みたいなものか？」

「そうですね。まあ、それは私か、私が認めた人間じゃないと出来ませんし、そもそも吹けませんけどね。ちなみにイメージの現象化は私が手を加えて出来るようにしました」

楽しそうに昴は言う。やれやれだ。

「まあ、いい。もう二時を過ぎているだろうから、本山に戻るぞ。料理の仕方をアスナ姫や木乃香達に教えるんだろう？ 寝ぼけて、包丁で指を切る事になりかねんぞ」

「それは恐いですね。私の包丁は切れ味が凄いですから、洒落になりません」

だったら早く戻って寝ろ。まったく。

それにしても、アレは一体何だったんだ？ 見た目こそ昴だったが、

アレは全くの別物だ。そもそも人間ですらないと思う。人間でないなら幽霊か妖怪かとも思えるが、アレにはそんな気配すらなかった。むしろ……

「やめだ。考えたところで分からん」

頭を振り、考えをなくす。そうだ、アレは昴ではない。そう思い、記憶から抹消した。

S i d e o u t

S i d e : 昴

先に本山に戻って行った詠春の後を追いつ、私も本山に向かいます。しかし、笛を吹きはじめて二時間以上経っているとは。いつもより興が乗ったからでしょうか？

(まあ、いいでしょう。心も落ち着きましたし、きっと良く眠る事が出来ます)

今日の午前からアスナちゃん達に料理を教えないといけませんから、寝ぼけるわけにはいきません。絶対に起きる事が出来る目覚ましも使いましょうか？ 出来れば使いたくありませんけど、アレを使えば絶対に起きる事が出来ますし。

作った後で後悔しましたけどね。そう言えばクルト君に一つあげま

したっけ。彼、大丈夫でしょうか？ いろんな意味で。

そんな事を考えていると、後ろに気配を感じました。いきなり気配が出てきたので気になって振り向いてみると、そこには虚ろな眼をした私が立っていました。

「っ!!」

思わず硬直します。ですが、しょうがないですよ？ 後ろを向いたら暗闇の中にドッペルゲンガーが居たのですから。しかも無表情ですから、恐さ倍増です。凄まじい悪寒もします。

そう言えば、ドッペルゲンガーに会ったら本物は死ぬって都市伝説がありましたね。

え？ だとしたら私はここで死ぬのでしょうか？

「.....」

しかしドッペルは私を見ると、音もなく川の方に歩いて行きました。そして、足が川に入るかといったところで、唐突に消え失せました。

「え？」

突然の事に茫然となります。気付けばあの悪寒も消え、気配も完全になくなっていました。



彼が消えた空間をただじつと見てみると、下の方で何か光りました。警戒しながら近づいて見てみます。

「指輪……？」

それは指輪でした。黒ずんだ金属の輪に、暗緑色の石が付いています。光ったのは、月光がこの石に反射したからでしょう。

警戒したまま手に取ります。魔力や気の類は一切感じません。むしろ、どこか懐かしさを感じさせます。何故でしょう？  
しげしげと見た後、思いつく。

「詠春にお祓いでも頼みますか」

彼もお祓いぐらい出来るでしょう。

この指輪、どうも銀を使っているみたいですし、錆をつけたままと  
いうのはもったいない気がします。お祓いしてもらったら磨きま  
しょう。

そう考えながらポーチに入れる。しかし……何だったのでしょうか？  
あのドッペルは。

本山に戻った後、目覚ましをセットし、出来れば目覚ましよりも早くに起きればいいなと思いながら眠りました。  
が、

『ぶるあ ああああああああああああ！！！！！ 貴様いつまで寝ていやがるううううう！！！！ さっさと起きやがれえええええええええええ！！！！』

「うわあああああああああああああ！！！！」

無理でした。

## 20話：変異（後書き）

この目覚ましは叫ぶ前に遮音結界を発動します。そのため、対象になつた人間以外には聞こえませんが、起こされた人間の叫びも周囲には聞こえませんが。

ちなみにもう二種類ほどあり、一つはクルトが持っています。

21話：百人一首（前書き）

今回短いです。

## 21話：百人一首

Side：詠春

初めましてだな。関西呪術協会の長、青山改め近衛詠春だ。

このように挨拶するのは初めてだが、意外に恥ずかしいものだな。

昴は結構やっていたみたいだが、恥ずかしくはなかったのだろうか？

・・・何？ 前話で最初に出てきただろう？ 一体何の事だ？

まあいい、今はそれは置いておこう。そんなこと、今起きている事に比べれば些事に過ぎん。

それよりも、どうやって現状を治めるかが問題だ。

「はあっ！！」

パンっ！

「くっ、そこでしたか」

「私が見つける方が早かったようですね。詠春、次を」

「負けません。絶対に負けられません！！ 詠春さん！！」

「あ、ああ・・・」

既にこの場で二人以外に動いている者はいない。周りに居るものは皆、ガタガタと震えながら二人の戦いを見ている。二人の気迫に怯

えて動こうにも動けないのだ。何せ、空気が歪むほどの気迫を放っているからな……  
擬音で表せば『ゴゴゴ……』と表現した方がいいか？

「『ひさ……』」

「はいっ！！」

パァンっ！！

「なっ、そこですか！？」

「ふふ、今度は私の方が早かったみたいですね。このまま引き離して差上げます」

「くっ、その余裕に足元を掬われないよう気をつけるのですね。詠春！！」

「ま、待て。二人とも少し落ち着いてだな……」

『いいからさっさと詠みなさい！！！！』

「は、はいっ！！」

二人に怒鳴られ、手に持つ札に書かれた文を詠む。この二人、最初の二文字か三文字で動くから最後まで詠めない。だが全て当たっているから何も言えない。そして恐ろしい。  
情けないと言っつな。今の二人、とてつもなく恐ろしいのだから。

「お、お父様・・・お母様恐いえ・・・」

「スバルが・・・スバルが恐いよう・・・」

「お、長様あ・・・」

「だ、大丈夫。大丈夫だから・・・」

子供達もかつてない程に怯え、涙目でカタカタ震えながら私の背に隠れている。それはそうだろう。普段は二人とも優しいが霧困気を出して、傍に居るものに安心感を与えるような人だからな。動物も自ら二人に寄って行くし。

それが今や、互いに抜き身の刃の様な霧困気を出している。ああなれば誰だって怯える。というか、タカミチ君やクルト君なら逃げていると思う。

そして、私もこの場から逃げられるのなら逃げ出したい。だが、詠み手になっているため逃げ出せない。何故詠み手を引き受けた、私・

「『は・・・』」

「はあっ！！！」

パンっ！！

「なっ・・・」

私が一文字目を口に出すと同時に、昴が床に置かれた札の一枚を目にも留まらない早さで弾き飛ばす。そして、それは詠もうとしていた札に書かれた上の句と繋がった下の句であった。つまり・・・合っている。

なんで合ってるんだよ・・・まだ一文字目だぞ？ 真言使ったわけでもないのに、先読みでも出来るのかお前は・・・

「そんな、まだ一文字目で・・・」

「ふっ、言ったでしょう？ その余裕に足元を掬われないように、と・・・」

「っく、次です!! 詠春さん!!!!」

「は、はい・・・」

どうして・・・どうしてこうなった？

子供達が遊ぶ為の『百人一首』で、どうしてこうなった!?! 誰か、答えられるなら誰か答えてくれ!!

S i d e o u t

事の原因は約三時間前、朝七時に遡る。



朝食を終えて大人はのんびりとし、子供は何をして遊ぶかを探して屋敷中を回っている時だった。

「んー、何かないかなー？」

「あるものはほとんどしちゃったしね。毬に、鬼ごっこ、だるまさんが転んだ」

「かくれんぼと色鬼、コマ回しとカルタもですえ」

どうやら、屋敷にある遊び道具を使ったものと遊び道具を使わない遊びは思いつく限りほとんどしてしまっているらしい。

「川遊びはお父様達がおらんとさせてもらえへんし」

「魚釣りもね」

「他に何かありましたっけ？」

とある一室の中で、何かないかとゴソゴソ探しながら刹那が言う。ちなみに木乃香とアスナも同じ部屋の、別の場所を探している。具体的には押し入れや箆笥、机の中を、である。

「あれ？ なんやろ、この箱？」

「何？ 何かあったん？」

「これ」

暫く探し続けて、刹那が黒い箱を見つけた。

「箱？ 何が入ってるの？」

「わからへん。見つけたばっかやし」

「開けてみる？」

「せやね。何が入っとるんやろ」

子供は好奇心が旺盛である。中に何が入っているか分からないなら、開けて中を見てみようと思ったのだろう。誰も止めずに箱を開けた。

「？ なんやろ、これ」

「カルタみたいやけど・・・」

開けた箱の中に入っていたのは、紙でできた札であった。

刹那がそう呟く。札それぞれに文字が書いてあるのでカルタの一種だと思ったのだろう。箱から取り出し、数を数える。

総数、二百枚。それぞれ百枚に文字が、もう百枚には絵と文字が書

かれている。

アスナが一枚手に取り、読もうとするが・・・

「読めない・・・」

ミミズがのたくった様な文字で、アスナに読む事は出来なかったようだ。それは木乃香達も同じらしく、読む事を早々に諦めた。

「お父様達の所に持ってこ。なんて書いてあるか分かるかも」

「ん、スバル達なら読めるかも」

だが何が書いてあるのか気にはなったのか、親に読んでもらう事にしたようだ。

取り出した札を箱に収め、大人達のいる所に持っていく。

~~~~~

大人組みはのんびりと過ごしていた。

「さて、昼の献立も決まりましたし、何をしましょうか」

「将棋でもするか？ 食材はあるし、しばらく暇だろう」

「将棋ですか？ 貴方、負けてばかりではありませんか」

「そうですね。どうしてそんなに弱いのですか？」

「二人が強すぎるんだ！ 何だ、あの駒を打つ速さは！！ 一秒程しか経ってないじゃないか！！」

「何を言っているのです、あれくらい普通でしょう」

「そうですね、詠春さん。あれくらい普通です」

「二人がそういう事で異常だというのはよくわかった・・・」

詠春が疲れた様な口調で言う。どうやら今まで、将棋を含めた盤上遊戯で昴と妻に勝てた事がないらしい。

「お父様～お母様～」

「長様、昴さん」

「スバル」

ただ何をするでもなく、三人ともぼうつとしていたら総本山の三人娘が、黒い箱を持ってやってきた。

「木乃香、刹那君も。どうしたんだい？」

「アスナちゃん。廊下を走っては駄目だと言ったでしょう」

詠春が娘達に問いかけ、昴がアスナに注意する。

「う……ごめんなさい」

「はい。で、どうしました？」

「これ……」

アスナが手に持っていた黒い箱を昴に差し出す。

「？ 何ですか、これ？」

「部屋で見つけたんです。何が入っているか分からなくて、見てみたらカルタみたいのがたくさん入ってて……」

「字が書いてあるけど、読めへんの。これ何なん？」

そう言われ、受け取った箱を昴が開ける。

「ああ、百人一首ですか。懐かしいですね」

「？ 百人一首？ 何それ？」

「詩とカルタを一つにしたもので、歌かるたとも言われているな。これも立派な一つのカルタだよ」

アスナの問いに詠春が答える。

「懐かしいですね。随分夢中になりましたっけ」

「そうですねえ。私は夢中になり過ぎて、手首を痛めた事がありますよ」

「あら、昴さんですか？」

「『も』？ という事は、貴女もですか？」

「はい。父としていて、強く弾いた時に・・・」

「ああ、分かります。私は正月の時に傷めて・・・」

何やらしみじみと語りはじめた。これは長い話になりそうだ。

「ねえ、スバル。これって楽しいの？」

「え？ ええ、詩の勉強にもなりますし、反射神経と観察眼も鍛える事が出来ます。大勢でやったらとても楽しいですよ」

「お母様、そうなん？」

「ええ。一対一もいいですけど、これの醍醐味はやはり大勢でやってこそですね」

アスナと木乃香の問いに、昴と木乃香の母が答える。

「そうなの？」

「はい。何処にどれがあるか、いかにそれを早く見つけ己が手に収めるか・・・将棋やチェスの様な戦略性こそないものの、単純な早さと観察力が勝負の勝敗を分ける遊びです」

「昴、お前な。決闘じゃないんだから勝負とか言うなよ」

「ですから、遊びと言ったでしょう？」

「どうやって遊ぶんですか？」

「そうね、見てもらった方が早いかしら？ 昴さん、一手お相手してください。詠春さんは詠み手をお願いできますか？」

「私ですか？ いいですよ、一手お相手しましょう」

「わかりました、では・・・」

そして冒頭へと戻る。

あれから三十分が経ち、互いの札はそれぞれ四十八枚。そして床に残された札は僅かに四枚。僅かな遅れと観察力で互いの勝敗が決まる枚数だ。ちなみにこれまで二人とも、ただの一度のお手つきもない。

だが、流石に疲れてきたのだろう。二人とも、僅かではあるが息を乱している。しかし二人とも札から目を離さない。次に何が詠まれるか、それに対応する札はどこにあるか、探している。まるで獲物を探す獣のようだ。

互いの間の空気が冷たく研ぎ澄まされ、周囲への威圧感が増す。それにより、周囲の人間の震えはさらに激しくなり、中には気絶するものまで出てくる始末。さらに子供達の涙は決壊寸前だ。余程に恐ろしいらしい。

詠春は思う。

百人一首って、こんな遊びだったか？ と。

「さあ、詠春！！」

「次の詩を！！！」

「ふ、二人とも。疲れтарう？ 少し、休んたら……」

「何を言っているのです。ここからが面白いのではありませんか！」

「ええ。一つ間違えば自分の敗北が決定する、一瞬の気も抜けないところですよ。それで休むなんて、出来ません！」

二人とも、普段の落ち着きは何処へ行ったのか。かなりハイテンションだ。

『さあ！ 早く次の詩を！！』

「……………」

詠春は諦めた。

決着は互いに五十枚で引き分け。戦いの後、二人は互いの健闘を讃え合ったと言う。

そして、その後暫く、子供達どころか総本山中の人間に怯えられたとか

21話・百人一首（後書き）

ちなみに、私も何度か手首を痛めました。（実話）

22話：麻帆良学園都市（前書き）

変なところもあるかと思いますが、見逃してくれると幸いです。

教師から喫茶店に変えました。

22話：麻帆良学園都市

一人の男が満点の星空の下、焚き火の側で月を見ていた。じつと……………

『……………お師匠様？ どうしたのですか？』

後ろから聞こえた眠たげな声に、彼は振り向く。見ると十三歳ぐらいの年齢の少女が、目を擦りながら毛布からモゾモゾと出てきていた。

プラチナブロンドの髪に、藍玉と翡翠の虹彩異色。顔は整っており、もう五年ほどすれば誰もが振り返るほど美しく成長するだろう。とても可愛らしい少女だ。

『なんでもないよ。ただ、月を見ていただけだ』

『月、ですか……………？』

『ああ。今夜は月がとても綺麗だから……………それよりも、目を擦ってはいけない。目に傷ができてしまう』

『すみません。眠かったもので……………』

『眠たいのなら、眠っていた方がいい。あまり夜遅くまで起きていると、体調が崩れる。それに、この夜はとても寒い。風邪をひいてしまうぞ？』

男はそう彼女に言う。口調から察するに、心配しているようだ。

『なら、お師匠様も眠るべきです。お師匠様はいつも寝てないじゃないですか。私起きていますから、お師匠様は寝てください』

『私は眠らなくても大丈夫だ。旅で慣れているし、必要な休息は常に取っているから。それに、女の子がそう言うものではない。第一、

君はすぐに寝てしまっただろう?』

少女の言葉に、男が言い返す。実際、彼はまるで眠たそうにしている。

『むー』

少女は頬を膨らませて男を睨みつける。だが、恐くはない。むしろ可愛らしく思える。

『そう睨んでも、駄目なものは駄目だ。恐くないし、逆に可愛らしただけだぞ?』
『っ!?!』

男がそう言うと、少女は顔を朱に染める。そういうところも含めて、可愛らしいというのだがね。少女に聞こえないように、男はそう呟く。

『な、あう……』

『私から見た事実を言っているまでだがね?』

男がそう言う。

そう、本当に可愛らしい。今でさえとても可愛らしいのだ、成長したら間違いなく求婚してくる連中が大勢出てくるだろう。

『つくち!?!』

『体が冷えたようだな。ほら、もう毛布に戻って眠りなさい。風邪をひいてしまう』

男がそう言うが、彼女は毛布へ戻ろうとしない。何故か、赤い顔の

まま男をチラチラと見ている。何故だろうか？

『ハア……来なさい。そのまま居るのは寒いだろう』

『！はいっ！』

溜息を吐きつつ男がそう言うと、彼女はトテトテと寄っていく。そして男のすぐ傍に来たところで、彼女を外套で包み込んだ。

『わぶっ』

『いつまで経っても甘えん坊だな、君は』

『いいんです。私がこうするのはお師匠様だけですから』

若干呆れた口調で男は言うが、満足げな顔で彼女は答え、彼にもたれかかる。

少女の将来が心配になってくる。主に嫁の貰い手について。

『まったく、それでは好きな男が出来た時に苦労するぞ？ 早々に

治す事を提案するが』

『ヤです』

『…………一言で却下するんじゃない』

男がそう言うが、少女はそれを一言で却下する。

その返答に、男は疲れた様な口調で注意した。

『それよりもお師匠様。お話ししてください』

『話し、か。まあいいだろう。何がいい？』

『お師匠様の仲間達についてを』

『また彼等の話しか、君も飽きないな。既に聞いた数は百を超えているだろうに』

『面白いですから。特に自信過剰な少年と筋肉たるまの傭兵の話し

が

『ああ、彼等か。聞き過ぎて彼等のようにならない事を祈るぞ、

』

そう言いながら男は少女の頭を撫でる。

指に嵌めた銀の指輪と、それに付いている赤紫の石が月明かりにキラリと反射した。

Side: 昴

「……………今のは？」

頭を押さえつつ、身を起こす。どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

だとすると、あれは……………

「夢、ですか？ しかし、一体……………」

何の夢でしょうか？ 誰かの記憶の様な気もしますが……………

「少なくとも、私の記憶ではありませんね」

私の記憶にあのような風景はありませんし、あの少女に出会ったこともありません。

それに、私の口調ではありませんでしたし。いつの時代でしょうか？

いえ、それ以前に私に記憶を見る能力なんてなかったはずですが？
霊とか、そう言うものなら以前から視えていましたか…

「まあ、気にしても仕方ありませんか」

どのくらい寝ていたのでしょうか？ そう思いながら席を見る。私の隣の席でアスナちゃんが、向かい合った席で木乃香ちゃんと刹那ちゃんがぐっすりと眠っています。はしゃぎ疲れたのでしょうかね。可愛らしいものです。

微笑みながら懐から時計を取り出し、蓋を開けて文字盤を見る。時計の針は一時間と進んでいなかった。

時計の蓋を閉じて懐に戻しながら考える。

あれが誰かの記憶だったとして、一体誰の記憶でしょうか？ それにあの少女。名前は聞こえませんでした。私もよく知る誰かを彷彿とさせます。

いえ、彼女も気にはなりますがそれよりも気になるのが……

「あの少女の話しかけていた『お師匠様』ですね」

少女の顔は見る事が出来たのに、何故か『お師匠様』とやらの顔を見る事は出来ませんでした。彼自身に霞がかかったようにぼんやりとしていたのです。

声から察するに若い男のようですが、その声もどこかで聞いた様な声でした。

誰でしょうか？ 右手の指に嵌めた指輪を見ながら考える。この指輪、ドツペルゲンガーが落としたあの指輪です。あの後詠春にお被いしてもらい、その後で磨きました。銀に緑の結晶が付いた綺麗な指輪です。今は石の色が変わっていますけど。

「それにしても、自信過剰な少年と筋肉だるまの傭兵ですか」

夢の中の少女が口にした単語を思い出す。誰とは言いませんが、どこかの馬鹿二人を思い起こさせますね。

まあ、一人は既に少年ではなく、親になっていそうな年齢ですが、共通している点を見つけて、思わず笑みが浮かびます。

しかし、何故夢を見たのでしょうか？ 私は今まで、一度たりとも夢を見た事はないのですが……

夢は意識していない願望ともいいますが、だとすればあれが私の願望になるのでしょうか？ 星空の下で月を見る事が？

「流石にそれはないでしょうね。京都でも月はよく見ていましたし」

それよりも、これから向かう場所について考える。詠春の所でアスナちゃんに神鳴流を教えてもらい、数年が経ちました。アスナちゃん達は小学5年くらいの年齢になり現在、私を含めた四人は関東の『麻帆良学園』と言う場所に向かっています。

正確には『麻帆良学園都市』というらしく、広大な敷地に小学、中学、高校、大学があり、さらにその周囲に様々な店や居住区があり、さらに森なども敷地内にあるとか。

……どれだけ広いんでしょうか？ と言うか、森まであるって……もう学園都市なんて言わずに普通に都市でいいでしょう、それだけ広大なら。なんでしょうか、学園という部分にこだわりでもあるのでしょうか？

まあいいです。それよりも……

「何故詠春は木乃香ちゃんをわざわざ関東の学校に行かせるのでしょうか？ 学校なら京都にある所でもいいでしょうに……」

と言うより、京都の学校に行かせた方がいいと私は思います。いえ、それが詠春達の決めた事なら文句を言うのは筋違いと言うものです。

しかしどうも彼の考えが読めません。何故関西呪術協会の領域から、呪術協会の跡取り娘をわざわざ関東に送るのでしょう？ 近衛さんの父が居るらしいですが、聞くところによると麻帆良学園は西洋魔法使いの領域、しかもメガロメセンブリアの下部組織と聞きます。

私としてはあまりメガロメセンブリアの関係する組織に行きたくないのですが……アリカさんの処刑の時に隕石落して邪魔しましたし、アスナちゃんの事もありますし。もしアスナちゃんの事が元老院に知れたら、あの老害共の事です。なんとしても確保しようと動くでしょう。

麻帆良は独立自治権を持っているらしいですが、それでも下部組織上の命令に逆らう事は出来ないでしょう。

……そう言えば、クルト君はどうなったでしょうか？ 「紅き翼」を離れて政治の道に行った事は覚えていますが、その後はどうなったのか分かりません。別れる前に「絶対に起きられる目覚まし時計 ver.2」をあげたのが最後ですし。ちなみに私のあれは ver.1 1です。

……思考が逸れました。最近多いですね、思考が逸れるのが。何故でしょう？

まあ、いいです。どんな事があっても、この子たちは護って見せます。アスナちゃんと刹那さんは戦えるから大丈夫と言いますが、まだ小学生。戦いよりも友達を大勢作って遊んで欲しい。私の嫌いな意志の押し付けになるかもしれないですが、これは譲れません。少なくとも、今の彼女達の年齢では絶対。

『次は麻帆良学園中央駅です。お降りの方は 』

どうやら着いたようですね。続きは近衛さんの父、ここの学園長に会って話をしてから考えますか。

「アスナちゃん、木乃香ちゃん、刹那さん、起きてください。着きましたよ」

「ん〜、あと5分……」

「うにゅ……もうお腹いっぱい〜」

「うう……羊が、羊があ……逃げてくまさん……」

アスナちゃん、そんな遅刻する時の常套文句を言わないでください。木乃香ちゃん、どんな夢を見ていたのか容易に想像できますね。というか、貴女腹ペコキャラではないでしょう。刹那さん、羊がどうしたのですか。一体どんな夢を見ているのですか。

……そう言えば、ここは女子中エリアでしたっけ。そして学園長は近衛さんのお父上でしたよね。何故学園長室を女子中エリアに、それも中心部に作ったのでしょうか？
……まさか、趣味ではありませんよね？

S i d e o u t

S i d e : タカミチ

現在、僕は麻帆良学園中央駅の前に居る。学園長に言われて、関西から来る人を迎えるためだ。学園長の話だと詠春さんの娘さん、つまり学園長の孫娘とその友人が二人、そしてその三人の保護者が来

るらしい。

個人的に、保護者の人に興味がある。学園長の話だと僕の知り合いらしいけど、誰だろうか？ 師匠の勧めでここに来て、教師をしつつ色々な場所をNGOとして回っているが知り合いはそれなりに居る。だが誰が来るか分からない。流石に詠春さんじゃないだろうけど…

「っと、そろそろ時間だな……」

腕時計を見て時間を確かめる。確か、この時間の電車に乗ってくるらしいけど……

「ふわー、おつきい場所やねー。ほんまに学校なんやろか？」

「このちゃん、あんまり見とったらおいてかれるえ」

「刹那、スバルはそんなことしない」

「アスナちゃん、そう言いながら一人で先に行こうとしないでください。迷子になってしまいますよ？」

「昴さんが言っても、説得力無いと思います……」

「グッ！？ せ、刹那さん、古傷を抉るのはどうかと私は思いますよ……？」

聞き覚えのある声が聞こえた。この声は……！

「昴さん！」

思わず大声を上げる。周りの人の目がこっちを向くが、構っていない。

懐かしい、何年ぶりに会うだろうか？ そう思いながら近寄って行く。

昴さんも僕の方を見て…

「失礼、どこかでお会いしましたか？」

そう言った。……………え？

「ああ、もしかして迎えの方ですか？」

「あ、はい。学園長に言われて昴さん達を迎えに」

「ご苦勞様です、それでは行きましようか。案内をお願いできますか？ 何分、ここに来るのは初めてなものでして……………」

「え、いや、あの……………」

「？ どうかしましたか？ 私の顔に何か付いてます？」

「あ、あの…僕が誰か、覚えてます？」

そう問うと昴さんは首を傾げて暫く考えるそぶりを見せて

「すみません、記憶にありません」

申し訳なさそうにそう言った。

ちよつ、いくら何年も会ってないからってそれは酷いんじゃないですか、昴さん！？

「僕です！ タカミチです！ ガトウ師匠に色々習ってた…」

そう言うと昴さんは怪訝そうな顔をしてこう言った。

「タカミチ君ですか？ 冗談でしょう、彼はまだ二十代後半の筈です。貴方は見た感じ三十代半ばか後半に入るか入らないかではありませんか。年齢が合いません」

「ダイオラマ魔法球に入って修行していたからです！ 師匠に勧め

られてここに来て、魔法球を持っている人に頼んでそこで修行したんです！」

「……タカミチ君なら、私がした説教の内容も覚えていますよね？」

昴さんがそう言ってくる。そして、説教の単語で脳裏に蘇るかつての三時間説教。

思い出すと同時に、冷や汗が吹き出した。

「え？ 本当にタカミチ君だったのですか！？」

「だ、だからそうだと聞いたでしょう！？ 信じてなかったんですか！？」

「いえ、ずいぶん老けていたのでお兄さんか誰かかと……」

「僕には兄弟姉妹は居ないって知ってるでしょう！」

「なら何故そこまで老けているのですか？」

「さつき言ったでしょう！？ ダイオラマ魔法球ですよ！ あれは時間の流れが違いますから、その分早く老けるんです！ 昴さんも持ってるでしょう！？」

息を乱しながらそう言う。そしてある事に気づく。

「昴さん、一つ聞きたいんですが」

「なんででしょうか？」

「なんで外見が変わってないんですか？」

そう、老けていないのだ。

「紅き翼」が解散した時の姿のまま、皺一つ、白髪一本すら見つからない。

若干目の色が変わっている気がするが注意して見なければ分からない。いぐらいであり、それ以外はまるで変わっていない。

「分かりません。そういう体質ではないでしょうか？」

昴さんはそう言った。

「タカミチ？」

「あ、アスナちゃん、久しぶりだね」

昴さんの後ろで周りをキョロキョロと見ていた女の子の一人が話しかけてきた。昴さんもそうだったが、本当に久しぶりだ。何年ぶりに会うだろう。こちらは背丈も成長している。

「後ろの二人は友達かい？」

「うん。木乃香と刹那。それよりタカミチ」

「なんだい？」

「老けたね、ガトウおじさんみたい」

「!!!」

あ、今何か刺さった。心に何か突き刺さった。昴さんに言われても何ともなかったのに、アスナちゃんに言われたら何か突き刺さった。なんでだろう？ ていうか、そんなに老けてる？

「タカミチ君、あまり待たせるのもなんですし、そろそろ学園長の所に向かいましょう」

「あ、はい。そうですね、それでは付いて来てください」

学園長の所に案内するため、先に立って歩く。駅から出て、階段を上って暫くして、昴さんが聞いてきた。

「時にタカミチ君、尋ねたいことがあるのですが」

「何でしょうか？」

「何故学園長室が女子中エリアに？」

「……………」

そう言えば、なんでだろう？

S i d e o u t

S i d e : 昴

タカミチ君に連れられて、西洋建築の街並みを歩く。もう学校じゃなくて街ですよ、ここ。アスナちゃん達も珍しいのかキョロキョロと周りを見ながらタカミチ君についていきます。迷子にならないか心配です。

しかし、この学園は何か変ですね。学園内に入った瞬間、妙な感じがしました。どのように妙なのかと言われると説明しにくいのですが……なんでしょう？ 自分の何かを抑えられるようなこの感覚は。あまり気分のいいものではありません。

それに学園都市の中央にあるであろうあの樹。世界中を回って来ましたが、あのような大きな樹は今まで見た事ありません。バオバブの樹より大きいのではないのでしょうか？樹からそれなりに離れた場所に居ますが、その大きさが分かります。何せ、周りの建物よりも高いのですから。何やら魔力も感じますし、まるで北欧神話に出てくる世界樹のようです。

「昴さん、どうかしましたか？」

タカミチ君が声をかけてきました。

「いえ、あの樹が気になったもので」

「ああ、世界樹ですか。驚きますよね、僕もここに初めて来たときは驚きましたよ。あんなに大きな樹があるんだなって」

本当に世界樹と言っらしいです。まあ、あれだけ大きければその名前も納得できると言いますか。」

「ちなみに、世界樹と言うのはこの学園内での通称です。本当の名前は別にありますよ」

どうやら通称らしいです。

そういう事は最初に言ってくださいタカミチ君。

「では、本当の名前はなんというのですか？」

「神木・蟠桃と言っらしいですよ。僕も学園長に聞きました」

「蟠桃ですか？ それはまた、大層な名前ですね……」

確か、崑崙山にあると言われる桃の木の名前でしたよね？ 三千年に一度のみ、食べた者に不老長寿を与える実を結ぶという。仙桃ともいわれ、その実の全てをかの孫悟空に食べられたとか。

流石に本物ではないでしょうけど、この木は桃の木だったのですか？ だとしたら、どんな実か興味がありますね。料理の材料に使ってみたいです。

ああでも、三千年に一度でしたか、実を結ぶのは。実をつけるのがいつか分からないのでは駄目ですね。諦めますか。どのような味が興味があつたのですか……

「昴さん、学園長室はこつちですよ？ そつちは世界樹前広場です」

「え？ って、あら？」

いつの間にかタカミチ君達から離れていました。どうも足が勝手に木の方に向かっていたみたいです。あ、危なかった。タカミチ君の注意がなければまた道に迷っていたところでした。

「昴さん、またですか？」

「昴さんは興味を引いた所にふらふらと行ってまうからなあ」

「お祭りの時もそうだったしね。気が付いたら居なくなってる」

「アスナちゃん、祭りで迷ったのは貴女の方でしょう。私が祭りで迷った事にしないでください」

道に迷う事26回。ようやく京都の街は迷わずに歩けるようになりました。

流石にこっちに来てすぐに道に迷う事は避けたいです。

「もうすぐですから、離れないでくださいね？」

タカミチ君、その幼い子供を見る様な眼はやめてください。無性に攻撃したくなってきました。

~~~~~

建物の中に入り暫く歩いて、重厚な門の前に着きました。上に学園長室と書かれたプレートが付いています。どうやらここが学園長室らしいです。

「学園長、タカミチです。京都からのお客様をお連れしました」

『どござ』

扉越しでくぐもった声が聞こえました。

タカミチ君に続いて部屋に入ります。どんな方でしょうか？  
そしてまず目に入ったものは……およそ人間にはあり得ない様な頭部を持った老人でした。

……………え？

思わず硬直する。なんですか、あの後頭部は？　なんであんなに長いのですか？　そういう骨格なのでしょうか？　いえ、近衛さんは普通の頭部でしたし、だとするとあれは病気か何かでしょうか？　それとも古代文明の何らかのしきたりでわざわざ骨をああして伸ばしたのでしょうか？　それとも中国の仙人でしょうか？　まさか生まれた時からあの頭だったわけではありませんよね？　ああ駄目です、疑問が尽きません。というか何を考えているのでしょうか私は？

「ようこそ参られた。儂はこの麻帆良学園で学園長をしておる近衛近右衛門じゃ」

人間とは思えない頭部を持った老人が自己紹介をしてくる。それと同時に驚愕による硬直から立ち直る。自己紹介されて返さないなど、礼儀に反します。

「初めまして、緋乃宮 昴と申します。このたびは子供達の保護者として参りました」

あり得ない様な頭部は一時意識の外に締め出し、挨拶をする。

「じいちゃん、久しぶりやー」

木乃香ちゃんが学園長に走り寄ります。あの、まだ挨拶の途中なのですが…

「ふおおお、これこれ。今は話をしておるから…タカミチ君、木乃香達を別の部屋に案内してくれんかの？」

「分かりました。木乃香ちゃん、学園長は昴さんと話があるから、別の部屋に行つてようか。アスナちゃん達も」

「ぶー」

そう言つてタカミチ君がアスナちゃん達を部屋の外に連れて行きました。さて、話があると彼は言いましたが、アスナちゃん達を連れて出たとすると魔法関係の話でしょうか？

「改めて、初めましてじゃな。僕は近衛 近右衛門。麻帆良学園学園長にして、関東魔法協会の理事も務めておる。タカミチ君からお主の事は聞いておるよ。「紅き翼」の一人にして『真言使い』緋乃宮 昴殿」

「紅き翼」のメンバーだった人間以外が知るはずのない二つ名を出され、警戒する。いつでも動けるように、体を適度に緊張させる。

「そう警戒せずともよい。僕と彼以外、この学園で知る者はおらんよ」

「……一般的に知れ渡っている私の二つ名は『黒竜騎』の筈ですが、「紅き翼」のメンバーのみが知るその名を知っているとは。彼はそこまで話しているのですか」

「まあ、彼も話してくれたが。この二つ名を最初に僕に教えてくれたのは別の人間じゃよ」

「別の人間？ タカミチ君以外に「紅き翼」のメンバーと会つていたのですか？」

「うむ、ナギにの。彼が教えてくれたわい」

「ああ…」

なんとなく読めました。あれの事です、何かの拍子に口にしてみましたのでしよう。学園長の雰囲気から察するに、どうも歳の離れた友人というかそんな関係だったのでしょうか。

しかし、ナギがそこまで気を許していたのですか。

「お主は京都でも会ったのではないかね？」

「ええ、京都にある隠れ家で会いました。何かを調べているようでしたが」

何を調べていたのでしょうか？ 暫くしたら出て行きましたし。おそらく魔法世界の何かを調べていたのでしょうか……

「ナギに会ったのはいつですか？」

「最後に会ったのは十年近く前になるかのお。エヴァンジェリンを連れて来て貰ってからは会つたらん。最近では行方不明で、一説には死んだとも言われておるし」

「それは私も聞いています。ですが、あれが早々死ぬわけがない。生きていますよ」

ナギが死んだという情報は私も耳にしました。ですが、私にはそれが嘘だと分かります。彼との仮契約カードはまだ生きていますから。

「しかし、エヴァンジェリンですか。かの「闇の福音」を連れてくるとは、どんな手を使ったんだか……」

「倒したとは考えんのかね？」

「あれは「千の呪文の男」と呼ばれています。実際には片手で数えられるほどしか魔法を覚えていなかったのですよ。大方、落とし穴か何かを使って嫌がる様な事をして捕まえたのでしょうか」

覚えている魔法の数こそ極めて少なく、戦闘で研ぎ澄まされたものとはいえあれは基本的にバ力です。戦うのが面倒とかそういう理由で罠に嵌めて捕まえたのでしょうか。その場面が容易に想像できません。

「まあ、そこは置いておきましょう。詠春に頼まれて保護者としてこちらに来ましたが、どうやら別の意図があるようですね。彼にも、貴方にも」

「話が早い。君には教師をしてもらいたい」  
「は……？」

待ちなさい。教師？ 私が？

「冗談を。喫茶店か何かならともかく、教師など出来ませんよ。第一、教員免許も持っていませんし」

「そこをなんとかできんかのお？ なにせ人出が足りんのじゃ。必要な人材は一般人の教師ではなく、俗に言う魔法先生じゃから」

「それは魔法使いでしょう？ 私は魔法は使えませんから、それにあてはまらないと思いますが」

私の力はいくまで真言です。魔法ではありません。それに、魔力量の問題で魔法は使えませんしね。気は使えますけど。

「気を使う先生もあるぞ」

「心を読まないでください！ それに私の力は真言です。魔法ではありません」

「似たようなもんじゃろ」

それを言われると反論できません。私から見たら魔法は疑似真言です。

「そう言わんと…」

「いえ、ですから…」

~~~~~

二時間にわたる問答の結果、アスナちゃん達は小学5年に編入し、私は喫茶店を経営することで落ち着きました。ただし、場合によっては学園広域指導員として動くことも頼まれましたけどね。

ちなみに住む場所は学園都市の一角にある二階建ての一軒家です。学校からもそう遠く離れている訳ではなく、森や川にも近いそれなりにいい場所です。

そして結局、その家まで行くのに道に迷いました。

22話：麻帆良学園都市（後書き）

もしかしたら変えるかもしれません。

23話：子供先生、来日

2002年7月 イギリス某所

イギリスはウエールズの山奥のとある場所。そこに一つの学校があった。

学校の名は「メルディアナ魔法学校」。その名の通り、魔法と呼ばれる技術を学ぶ学校である。

今、その学校のホールで卒業式が行われていた。

『卒業証書授与。この7年間、よく頑張ってきた。が、修行の本番はこれからだ。気を抜くでないぞ』

校長であるう老人がそう言い、卒業生達の名を呼ぶ。

『ネギ・スプリングフィールド君』

「ハイ！」

ネギと呼ばれた赤毛の少年が元気一杯に声を出し、しかし緊張からかきこちない動きで卒業証書をもらいに行く。

『よく頑張った。修業先でも頑張るように』

「ハイ！」

そう言い、卒業証書をもらい、戻って行った。そして次の卒業生の名が呼ばれていく。

卒業式が終わり、学校の通路で少年達が話し合っていた。正確には少年が一人、少女が一人、女性が一人だが。

「ネギ、修業先は何処だった？ 私はロンドンで占い師だったけど」

「何処だったの？ ネギ」

「ちよつと待つて、今浮かび上がるところだから」

そう言い、ネギは手渡された紙を見る。先程まで白紙だったそれには、光で造られた文字が浮かび上がっていた。

「えつと、『A teacher in Japan』。日本で先生をすること」

『ええー！？』

ネギがそう読み上げると、側にいた二人が驚きの声を上げた。

「校長先生！ 先生つて、どういふことですか！？」

金髪の女性が校長と呼ばれた老人に問いかける。

「ほう、先生か……また大変な修行じゃのう」

「何かの間違いではないのですか？ まだ10歳なのに、先生なんて無理です」

「そうよ！ ネギつたら、ただでさえボケなのに……」

金髪の女性に続いて赤毛の少女もそう言う。10歳という年齢で教師という修行では仕方ないかもしれないが、ネギは散々な言われようだ。

「しかし、そう卒業証書に書いてあるなら決まったことじゃ。「立派な魔法使い」になるためには、頑張つて修行してくるしかないのう」

「ああっ」

「お、お姉ちゃん」

校長がそう言うと、女性が気を失ったように倒れた。余程に心配らしい。

「まあ、安心せい。修業先の学園長はワシの友人じゃからの。頑張るなさい」

「……ハイ！ 分かりました！」

ネギはとても元気にそう答えた。

Side: 昴

麻帆良学園都市にやって来て早くも三年が過ぎました。喫茶店も、開店当初はあまり人は来ませんでした。今は繁盛しています。ただ、時々勤務時間に学園長が来るのが気になりますけど。一体何やってるんですか。仕事してください。

ちなみに現在の時刻は午前5時半。私は店で掃除をしています。料理の仕込みは常に前日に行っているので、少し手を入れたらすぐに料理として出せます。それに開店時間は午前8時ですから、まだ十分掃除できます。

「しかし、あの時はどうしようかと思いましたね」

アスナちゃん達が中学に入ってすぐ、なんと彼女のクラスのほぼ全員が私の喫茶店に押し寄せてきましたからね（どういう訳か3人と同じクラスでした）。閉店時間まであと1時間という時でしたので幸いにもお客はいませんでした。事前通告もなくいきなりやってきたので驚きました。

しかもその中に幽霊らしき少女も居たのでさらに驚きました。どうも他の人には（一部を除いて）見えていないようでしたが。

とりあえず料理を出した後、他の人に気付かれないように話しかけてみましたが、話しかけた途端に号泣されました。名前は相坂さんと言い、どうやら60年間以上誰にも気付かれなかつたらしく、とても寂しかったらしいです。私としては60年も幽霊でいられた事に驚きましたがね。大抵は悪霊に変化して除霊されて消滅するか、成仏して輪廻の輪に戻るかです。しかし、本人（本霊？）曰く地縛霊らしいですが、学校周辺をある程度とはいえ出歩けている時点で地縛霊ではないと思うのは私だけでしょうか？

まあ、あまりにも可哀想なので実体化できるようにしてあげました。他の皆が食べているのに、一人だけ食べられないというのもどうかと思いましたが。その時の相坂さんの喜び様と言ったら、バケツ2杯分は泣いたんじゃないでしょうか？ というか、幽霊って涙流せたんですね。私、そこに吃驚です。

ああ、実体化は他の人に見えないように厨房の奥でやりましたから特に混乱は起こりませんでした。流石にアスナちゃんと刹那さんには何をしたのか聞かれましたけどね。最近ではアスナちゃん達と同じように学校が休みの日に店を手伝ってくれています。

ちなみに、彼女達は現在学生寮に住んでいます。小学を卒業するま

では一緒に住んでいたのですが、全寮制らしいので。ですから現在、私は独り暮らしです。まあ、それでも結構頻繁にご飯を食べに来ますけどね、時には御学友も連れて。

いや、元気ですねえ。いささか元気すぎる気もしますが、若いうちはやはりそうでなくては。

ちなみに、元気すぎるのは御学友です。

「そう言えば、今日誰かの迎えをするとアスナちゃん達が言っていましたね。誰の迎えをするのでしょうか？」

二日前に夕飯を食べに来たアスナちゃん達が言っていました。なんでも学園長に直接頼まれたとか。

『新しく来る先生のお迎えみたいですよ？』

「そうですか、新しく先生が来るのですか。情報ありがとうございます。それと、お早うございます、相坂さん」

『はい、お早うございます』

いつの間にか幽霊状態の相坂さんが店の中に居ました。かなり存在感が薄いらしく、最初の頃こそ驚きましたが、頻繁に店に来るのでもう慣れました。今ではある意味、常連さんです。

「しかし、それだとまたあの時みたいに来るかもしれませんね。流石に今回来るとしたら事前通告ぐらいあると思いますけど……」

心配です。店に来るとしたらアスナちゃん達が連絡してくれると思いますが、あのクラスは基本的にノリで動いているようなもの。連絡が来る前、あるいは来ると同時に店に来るかもしれませんが。不安です、実に不安です。

一応、最低限の準備だけでもしておきましょうか。準備のあるとな

しとでは随分違いますし。

「まあ、それは後でもいいでしょう。時間はまだ十分ありますし」
掃除を終え、相坂さんにお茶とご飯、味噌汁と鮭の塩焼きを出す。
お手伝いしてもらっていますからね、お茶と朝食ぐらい出さねば。
喫茶店なのに和食なのかという疑問はナシでお願いします。割とな
んでも出せる喫茶店を売りにしていますから。

「さ、どうぞ召し上がれ」

『いただきます』

そう言つて実体化して食べ始める相坂さん。いつも美味しそうに食
べてくれるので、料理人としては嬉しい限りです。

「しかし、何か忘れている様な気がするんですよ……」

「？ 何かつて、何をですか？」

呟いた言葉に相坂さんが反応し、口の中の物を呑み込んでから聞き
返してくる。行儀がいいですね。そういう方は好きですよ。

「それが思い出せないのです。大切な事の様な、そこまで大切な事
でもない様な……とにかく、何かが頭に引つ掛かると言うか」

「思い出せないなら、そんなに大切な事じゃないんじゃないですか
？」

「……………そうかもしれませんね」

奥歯に何かがつまつた様なこの感じは若干不快ですが、思い出す事
が出来ないのなら、そこまで重要な事ではないでしょうし、とりあ
えず置いておきますか。

そんな事を考えながら自分で飲むためのコーヒーを淹れる。ちなみに、売り物のコーヒーではありませんよ。

「御馳走様でした。今日も美味しかったです」

「御粗末様でした。そう言ってもらえると、料理人冥利に尽きますね」

そう言って食器を片づける。

最近完全に主夫と化している気がしますが、気にしません。以前から主夫だった様な気もしますが、それも気にしません。

「さて、そろそろ学校に戻った方がいい時間ではありませんか？」

「え、もうそんな時間なんですか？」

「まあ、十分間に合う時間ではありませんけどね。ここは割と学校にも近いですから」

とはいえ、あまり遅くに出たら遅刻寸前の生徒達と競争する事になりますけどね。

「それじゃあ、学校が終わったらまた来ますね」

「はい。あ、これお弁当です。アスナちゃん達にも渡してあげてください」

「あ、ありがとうございます！ それじゃあまた」

「はい、それではまた」

お弁当を渡すと、相坂さんは店の扉を開けて出て行く。もう普通に人間ですよ、今の彼女。最近は実体化している事の方が多いみたいです。

「元気ですねえ……」

しかし疑問です。何故幽霊の時は足がなくて、実体化すると足があるのでしょうか？ 謎です。
気にしたら負けの様な気がしますが、気になります。って、この時点で負けていますね、私。何に負けているのかは自分でも分かりませんが。

「しかし、この季節に先生ですか……」

気になりますね。麻帆良は大きな学校ですから、秋や冬に先生が来る事自体はそれほどおかしい事ではありませんけど、何かが気になります。その「何か」が分かりませんけど……

「私が考えても仕方ありませんか」

今の私はただの喫茶店の店主で、アスナちゃんの保護者です。教師ではありません。

「さて、最低限の準備も一応終わりましたし、店を開けますか」

そろそろ時間ですし、喫茶「ホタルブクロ」、開店です。

あ、ちなみにこの名前はアスナちゃん達に付けてもらいました。

私は「彼岸花」を最初に付けたんですけど、何故か皆に却下されました。何故でしょうか？

S i d e o u t

S i d e : アスナ

不覚だわ、予定なら三十分前にはもう寮を出てたはずなのに、まさか寝過ごすなんて……！

「ていうか、なんで新任教師の迎えを私達がしなきゃなんないのかしら」

引き受けておいて今更だけど、なんか納得いかないわ。よく分かんないけど、普通こういうのって先生が迎えるもんじゃないの？

「まあ、ええやん。じいちゃんの友人の頼みみたいやし、他の先生は用事があるみたいやし」

「だからって、なんで学園長の孫娘のアンタに頼むかな」

「だいたい、学園長の友人ならそいつもジジイなんじゃないの？ 口には出さないけど。」

「じいちゃんの友人なら来る人もジジイなんじゃないんかー、って思つとるやろ？」

「なんで考えてることが分かるのよ!？」

「なんとなくなー。付き合いも長いし」

確かに幼いころから一緒に居るけど、それでも分かるのはどういう行動をとるかぐらいだと思う。スバルも刹那もそうだし。なに、木乃香ってば読心スキルでも持つてるの？

「まあ、それはええとして、今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ」

「運命の？ なにそれ」

「ここ、好きな人の名前を10回言ってワンて鳴くと効果ありやて」

「なに、そのあからさまに嘘って分かる占いは？」

どう考えても効果ないでしょ、それ。まだタロットカードの方が信じられるわよ。

「あー、タロットかあ。昴さんの占いは良く当たるもんなあ」

「偶にしかしない上に最近ほとんどしてないみたいだね。そして普通に考えを読まないで」

ていうか、なんでそこでスバルが出てくるのよ？

「三ヶ月くらい前にタロット占いの仕方教えてもらったんや。カードの意味とかも」

「いつの間に……」

「だから、三ヶ月前やて」

って、今はそんなことはどうでもいいわ。急がないと遅刻する！

「急ぐわよ木乃香！ 今まで無遅刻無欠席なんだから、遅れるわけにはいかないわ！」

「別に皆勤賞狙つとるわけでもないのに、どうしたん？」

確かに狙ってはいいけど、今まで遅刻一つせずに出てたんだからなんか嫌なのよ。何かに負けたみたいで！

そう思いながら走る速度を上げる。気とかは使ってないわよ。

「にしてもアスナは早いなー。私はコレやのに」

「まあ、毎日走ったりしてるからね。体力にはそれなりに自信はあるけど」

スバルや刹那ともたまに手合わせとかしてるからね。時には二人が

かりでスバルに挑むけど、最終的に動けなくされて終わるわね。

「なんや、まだやっと思ったん？」

「うん。せめて一撃でも当てようって思ってるんだけど、全然当たらないのよね」

攻撃全部を受け流されるは、威力を増して返されるはで全然だめね。ていうか、回避とか上手過ぎるのよ。

どうやって当てようかしら？ 前にやった至近距離での格闘戦は投げられて刹那とぶつかった後に動きを止められて終わったし、刹那との波状攻撃は各個撃破されて終わったし…

「そう言えば木乃香。スバルにタロット教えてもらったのよね？ 当たるの？」

「それがあんまり当たらんのだ」

笑いながら木乃香がそう言う。でもそれは仕方ないとも思う。タロットはカードの意味の解釈の仕方であるで違う意味になったりするから。

「ん？」

「どしたん？」

「いや、なんか気配が…」

そんなことを考えながら走っていると、すぐ横に誰かの気配がした。普段なら気にも留めないんだけど、見知った誰かの気配に似ていたから思わず顔を向ける。

そこには、ナギに似た赤毛の子供がいて

「あの、あなた失恋の相が出てますよ？」
「は？」

そんな、とんでもなく失礼な言葉を口に出した。

Side out

Side：木乃香

「ねえ、ボク？ いきなり何を言ってるのかな？」

「アイタタタ！？ お、下ろしてくださいー！！」

アスナがニツコリと笑いながら、見た目小学生の男の子の頭を片手で掴んで持ち上げる。気のせいか、掴んできるところからギリギリと音がしてる気がする。というか、片手で掴んで持ち上げるって、どんな握力と腕力しとるんやろ？

「アスナ、昴さんに知られたら怒られるえ。少し落ち着こ」

「木乃香、私は落ち着いてるわよ？ ええ、これ以上ない程に」

絶対嘘や、こめかみに血管浮いとるし、手も震えとるし。でも怒鳴らんだけまだましかなー。

「で、どういう事かしら？ まさか適当に言ったわけじゃないわよね？」

「いえ、占いの話が出てたみたいなので、つい。ただ、ホントにドギツイ失恋の相が出てイタタタ！！」

「アスナ、相手は子供やる？ 本気にしたらあかんで」

「木乃香、私が冗談でもそういうのは嫌いっての知ってるでしょ？」

「まあ、それはそうやけど」

流石になあ、初対面でいきなり「失恋の相が出てる」はないやろ。昴さんがおっいたらお説教やで？ それも二時間コース。

「ぼつや、こんな所に何しに来たん？ ここは学園都市の女子校工リア、初等部は前の駅やよ？」

どう見ても小学生やし、多分降りる駅を間違えたんやろ。

「そうよ、だから早く戻りなさい。私達も時間ないんだから」「フギユツ」

そう言つてアスナが手を離すと、当たり前やけど子供は落ちた。アスナ、もうちょい優しく下ろしてもよかったんやない？

「む、そりゃそうかもしれないけどさ」

「まあ、気持ちは分からんでもないけど」

まだ子供なんやし、あんまりひどいことしたらあかんやろ？ そう思つた時やった。

「おーい、アスナちゃん、木乃香ちゃん。どうしたんだい、そんなところまで？」

「タカミ…高畑先生」

校舎から高畑先生が歩いてきた。アスナ、なんで言いなおしたん？

Side out

S i d e : タカミチ

「お早うございます、高畑先生」

「ん、お早う。で、どうしたんだい？ 雰囲気少し怖いけど」

「このガキがちょっと…」

そう言われて子供の方を見る。

「久しぶり、タカミチ！」

「ああ、久しぶりだねネギ君」

「知り合いなんですか？」

「前にイギリスに行ったときにちょっとね」

最後に会ったのはいつだったかな。確か……滝を割って見せた時だったかな？

まあ、それはともかくとして

「ようこそ麻帆良学園へ、歓迎しますよ『ネギ先生』」

「え？ 先生？」

木乃香ちゃんがそう聞き返してくる。アスナちゃんも「は？」っていう顔だ。

「そつだよ、木乃香ちゃん。さ、ネギ君」

「あ、うん」

そう言うと、ネギ君は咳払いを一つして

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・

スプリングフィールドです」

そう自己紹介した。

Side out

Side:アスナ

「ちょっと待つてください高畑先生！ このガキが先生ってどうい
うことですか!？」

「いや、彼は頭はいいんだ。安心してくれ」

そう言う事を聞きたいんじゃないわよ！

「それと、今日から僕に変わって君達A組の担任になってくれるら
しい」

「ちょ、こんな失礼な奴が!？」

「失礼って、何かあったのかい？」

何かあったじゃないわよ！

「いきなり「失恋の相が出てる」って言うてきたんですよ!？」

「いや、本当ですよ？」

「アンタは少し黙ってなさい!！」

そう怒鳴って黙らせる。

「だいたい、子供だからってなんでも言うていい訳じゃないでしょ
! 怒るわよ!？」

「アスナ、もう怒ってるやろ」

うっさいわよ木乃香！ まだ言い足りないのよ！
そう思った時だった。

「ハ、ハ…」

「？ 何よ？」

何か言いたいことでもって、これ、魔力？ なんで高まって…

「ハクシヨンッ！」

チリンッ

「へ？ って、風!？」

ゴウオッ

「わっぷ」

「きゃあっ！」

「うわっ!？」

「なんやー？」

鈴が鳴ったかと思ったら、いきなり風が吹いた。なんなの一体!？

「アスナちゃん、その鈴…」

「え、これ？ スバルに貰ったものだけど…」

「昴さんが…まあいい。とりあえず、学園長室に行こうか」

そうタカミチに言われ、ついて行くことにした。

それにしても、この鈴なんなのかしら？ スバルが作ってくれたものだから害はないだろうけど。

Side out

Side: 学園長

『学園長、高畑です』

「開いておるよ」

そう言うとタカミチ君と木乃香、アスナちゃんと一人の少年が入ってくる。ふむ、彼がネギ君か。なるほど、確かにナギによく似ておる。

「学園長先生、一体どういうことですか？ こんなチビが先生だなんて」

「まあまあ、アスナちゃんや。少し落ち着きなさい」

そう言うと口を噤む。不機嫌さがにじみ出ているが、まあ、そこは仕方ないだろう。

そして手元の資料を見る。ふむ…

「なるほどの、修行のために日本で学校の先生をすることになったと。また大変な課題をもちうたのお」

「は、はい。よろしく願います」

ふむ、目は綺麗じゃの。まあ、まだ10歳なら当然か。

「しかし、まずは教育実習ということになるかの。今日から三月ま

「でじゃ」

「はあ」

「じゃが、この修行は大変じゃぞ？ 駄目なら故郷へ帰らねばならん。そうなたら二度とチャンスはないが、その覚悟はあるのじやな？」

「はい！ やります。やらせてください！」

ふむ、いい返事じゃ。

「よかるう、では今日から早速やつてもらおうかの。しずな君」

『はい』

声をかけると、扉を開けて一人の女性が入ってきた。そしてネギ君は彼女の胸に顔を埋める結果となった。ううむ、うらやま…ゲフン。失礼、なんでもない。

「む」

「あら、ごめんなさい」

「指導教員のしずな先生じゃ。分からないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「あ、ハイ」

さて、あとは住む場所じゃがどうしようかの。職員寮は空いておらんし、空いていたとしてもまだ数えて10歳。独り暮らしには少々早い。タカミチ君と同じ部屋に泊ってもらう手もあるが、タカミチ君は出張で海外に行くことも多い。どうするか…

「む？」「む」

目に入ったのはアスナちゃんとわしの孫の木乃香の二人。確かこの二人は同じ部屋のルームメイトじゃったの。

ふむ、他の先生に頼むという手もあるが、少しでも気心の知れた相手の部屋に泊ってもらった方が無駄に緊張させずに済むかの。今もかなり緊張しておるようじゃし。

「木乃香、アスナちゃん。暫くネギ君を部屋に泊めてもらえんかの？ まだ住むとこ決まっとらんじゃよ」

「なっ、そんな！ 何ですか!？」

「職員寮が空いておらんじゃよ。頼めんかの？」

「うちはえーよ？ この子かわえーし」

「ちよっ、木乃香!」

「アスナちゃんや、まだ子供なんじゃし、仲良くしてやってくれんかの？」

そう言うが、アスナちゃんはやけに不機嫌になって、そのまま部屋から出ていった。何があつたんじゃろ？

タカミチ君、何か知つとる？

「えーと、どうもネギ君がアスナちゃんに失恋の相が出てると言っ
たみたいで」

「そ、それは……」

ネギ君、流石にそれはいかんぞい。昴君に知られてないのが唯一の救いじゃな。

……大丈夫じゃろうか？

Side out

S i d e : 昴

ジリリリリン

「おや？ 珍しいですね、誰からでしょうか？」

店に電話が来るとは珍しい。一体誰からでしょうか？

「五月蠅い電話だな。さつさと出る、緋乃宮 昴。茶が不味くなる」

「言われなくても出ますけど、何故そんなに偉そうなんですか？

エヴァンジェリン」

まあ、別にいいですけど。

「はい、喫茶「ホタルブクロ」です。何か御用でしょうか？」

『昴さんですか？ 刹那です』

「おや、珍しいですね。刹那さんが電話をかけてくるとは。どうかしましたか？」

『いえ、ウチのクラスに新任の先生が来て、その歓迎会の場所にそちらを使わせてもらおうという話になったので、その連絡を』

ああ、本当にやって来るのですか。最低限とはいえ、準備しておいて正解でしたね。

「分かりました。連絡ありがとうございます」

『いえ。あ、お弁当ありがとうございました。美味しかったです』

「お口に合ったなら何よりです。それでは、お待ちしておりますよ」

『はい。それではまた後ほど』

そう言って電話が切れた。さて、本格的に準備しますかね。

「大方、新しく来た先生の歓迎会か？」

「ええ、ですから今日はもう閉店です。準備もしなければなりませんし」

「そうか。まあそれはいい。まだ思い出さんのか？」

「ですから、前にも言ったでしょう？ 名前こそ知っていましたが、貴女と会ったのは二年前が初めてです。出会った記憶もないのに、思い出すも何もないでしょう？」

「いいや、そんな筈はない！ 私とお前は600年前に一度出会っている！ あの時のことを私が忘れるものか！」

「そう言われましてもね……」

実際に私が生まれたのは44年前です。計算が合わないとか、そういうものではないんですよ。

「まあ、考えていても仕方ありません。私が本当に忘れているのなら、そのうち思い出すでしょう」

「今すぐ思い出せ！」

「ですから、無理ですって」

頼みますから、襟を掴んで首を揺らさないでください。

茶々丸さん、見てないであなたのマスターを止めてください。

「いえ、マスターが楽しそうなので」

「楽しくないわ！」

そう言っただけで茶々丸さんに怒鳴るエヴァンジェリン。しかし、随分と印象が変わりましたね。二年前に出会ったころは鎖に繋がれた魔獣という印象でしたが、今では魔獣というよりむしろ

「猫でしょうか？」

「何がだ？」

「現在の貴女の印象が、です」

そう言うとさらに激しく首を揺らし始めるエヴァンジェリン。
やめてくださいって、目が、目があゝ……

「あー、その、なんだ？ すまん……」

「謝るくらいなら初めからしないでください。目が回ります」

というか、現在進行形で世界が回ってます。ちなみに、地球の自転のことではありませんので、あしからず。

「ああ、これでは準備が出来ませんね。仕方ありません、『元に戻る』」

狂った平衡感覚を直す。これでいいでしょう。

「まったく、レディがはしたないですよ？」

「お前が猫とか言うからだろうが！」

ですから、掴みかかろうとしないでください。準備ができません。まあ、それでも半分以上は既に出来ているんですがね。

「あまり邪魔をすると、食べさせませんよ？」

「ぬぐ、貴様……」

食べたいんだったら首を揺らさないでください、まったく。

じっと睨みつけてきますが、殺気もないそれでは怖くありませんよ？

「睨んでも可愛いだけで、怖くありませんよ？」

「!？」

あ、顔が赤くなりました。こういうの、言われ慣れてないんでしょうか？

「っと、ポテト完成です」

歓迎会ですから、あまり格式張らず、気楽に食べられる物の方がいいでしょう。まあ、スープとかもありますけど。

今出来ている物はおにぎり、フライドポテト、コーンスープ、鶏の唐揚げ、フルーツサンド、マカロニサラダ、ピザ、ティラミスと言ったところです。少々作り過ぎた気がしますが、おそらく8割は無くなるでしょう。意外に食べる子たちが多いクラスですからね。

「って、エヴァンジェリン。何つまみ食いしているのですか」

「別にいいだろう。これだけあるんだから少しぐらい」

「駄目です。食べるならアスナちゃん達が来てからに……」

『昴さん、今店空いてますか!？』

「…来ましたね」

アスナちゃんのクラスの子達です。息を切らせているあたり、全力疾走でここまで来たのでしょうか。余裕そうな子達も何人かいるようですが。

「刹那さんから連絡は来ていますよ。新任の先生の歓迎会をするのでしょう?」

「はい。それで……」

「料理は出来ていますよ。騒ぎたいなら存分に騒ぐといいでしょう。ただし、近所迷惑にならないように」

『はい！』

そう言っただけの準備を進めていく彼女達。元気ですねえ。

それから暫く経ってアスナちゃんと一人の少年が来ました。相坂さんに聞いたところ、どうやら彼が新しい先生のようです。思わずいつの間にか来ていた学園長に聞きましたよ。労働基準法はどうした。と。そして帰ってきた答えは「魔法使いとしての修行」でした。魔法使いに旧世界の一般常識はないのでしょうか？

ちなみに話題の少年は歓迎会を楽しんでいました。

24話・日常（前書き）

グダグダな感じがしますが、よければ読んでやってください。

24話：日常

Side：アスナ

ネギが教育実習生として私達のクラスの担任になって3週目の日曜
日、まだ日も昇っていない時間に目が覚めた。日も昇っていないと
言っても、冬だからそれは仕方ないと思うけど。

(今何時かしら……)

そう思い目覚まし時計を探す。ちなみに普通の目覚まし時計だ。前
に一度だけスバルの作った「絶対に起きる事が出来る目覚まし時計」
を貸してもらったけど、使った直後後悔した。何よあの叫び声、あ
んなの聞いて寝ていられるわけないじゃない。

(何でスバルはあんなの作ったのかしら?)

多分、確実に起きるためだと思うけど。あれは絶対に「起きられる」
じゃなくて、絶対に「起こされる」目覚ましに改名した方がいいと
思う。割と本気で。

(そう言えば、クルトも一つ持ってるんだっけ)

「紅き翼」を離れる際に、スバルから腕輪と一緒に目覚まし貰って
たわね。バージョン2か3か忘れたけど。大丈夫かな？ ノイロー
ゼとか、そういうのになってなければいいけど……心配だわ。

(まあ、いつか。それよりも目覚ましは……)

身を起こして目覚ましを探そうとするが、自分の横に不自然な膨らみができていることに気付いた。ハア……またか。溜息を吐きながら布団を剥ぐ。そこには、出会って早々私に「失恋の相が出ている」と言っただけの失礼なガキ　　ネギが居た。

「何でいつも私の布団に潜るかな、コイツ」

歓迎会の次の日の朝から今日まで、コイツは頻繁に私の布団に潜り込んでいる。ネギに聞いたところ、私が故郷のお姉さんに似ていてさらにそのお姉さんといつも一緒に寝ていたから潜り込んでしまらしい。まだ10歳だから誰かと一緒に寝るのは分からなくもないけど、寝てる間に潜り込まれるこっちはたまったもんじゃない。最初の時は思わず悲鳴をあげてしまったほどだ。いいんちよなら抱きしめて一緒に寝るんだろうけどね。

歓迎会の後でタカミチに聞いたことだけど、ネギはナギと姉様の実の子供らしい。外見で予想はついてたけど、本当に姉様の子供だったのね。外見は完全にナギだけだ。

タカミチと学園長の話だと、どうもコイツはイギリスの魔法学校を飛び級で、しかも首席で卒業したらしい。

（信じられないけどね。事あるごとに魔法とか使っし）

くしゃみで起こる武装解除に、頼んでもいない惚れ薬。当たり前のように杖に乗って飛んだりしてるし、魔法隠す気ないでしょ、コイツというか、くしゃみで起こる武装解除って何よ？ 魔力制御とか全然出来てないじゃない。魔法使いは一般人に魔法を知られないようにするのが常識でしょ。頭痛くなってくるわ。向こうの教師は何を教えたのよ。というか、惚れ薬なんて、好きな相手もいないのに誰に使えばいいのよ。

「むにゃ…お姉ちゃん……」

「って、誰がお姉ちゃんよ。　コラ、起きなさい！」

そう言っつてネギを揺すり起こす。

「えう…？」

「えう？　じゃないわよ！　何でいつも私のベッドに潜り込んでるのよ！　予備の布団貸してあげてるでしょ！？」

「え…あ、アスナさん！？　す、すみません！　僕また寝惚けて、つい…」

「つい、じゃないわよ！」

寝惚けて階段を上がったの！？　夢遊病者かあんたは！！

「んー。アスナ、どうしたん？」

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

「ええよー。いつもこれくらいに起きとるし」

そう言っつて木乃香が起きる。

「朝ごはん、目玉焼きとスクランブルエッグどっちがええ？」

「あ、ごめん木乃香。私今日はスバルのところで食べるから」

「わかったえ。じゃあネギ君、どっちがええ？」

「あ、じゃあ目玉焼きで……」

まだ朝は早いけど、スバルのことだから店は開けてるでしょ。

「じゃ、行ってくるね」

「あ、アスナー。今度料理教えてって昴さんに言っついてー」

「わかったー」

そうやって私は部屋を出た。

Side out

Side:ネギ

アスナさんが部屋から出ていった。スバルさんって、誰だろう？

「ネギくん。ごはんできたえー」

「あ、ありがとうございます」

そうやって一緒にご飯を食べる。そうだ、木乃香さんに聞いてみよう。

「あの、木乃香さん」

「ん？ 何？」

「アスナさんが言ってた、スバルさんって誰ですか？」

「昴さん？ アスナの保護者で、うちの料理の先生の一人や。ネギ君も会つとるよ」

「え？ 僕もですか？」

そう言われて思い出そうとするけど、誰か分からない。ホントに会ってるのかな？

「会つとるよ。ネギ君来た時の歓迎会で、喫茶店行ったやろ？」

「はい」

「昴さんな、その店主なんよ。高畑先生の他にもう一人、男の人

がおったやろ？ その人が昴さんや」

「そうなんですか！？」

「うん。歓迎会の時に出た料理も、全部昴さんが作ったんよ」

ビックリした。あんなに美味しい料理を作った人が男の人なんだから。前に一度タカミチが作ってくれた物よりもずっと美味しかった。

「優しい人やえ。分からんことがあつたら色々教えてくれるし」

「そうですか…」

どんな人だろう？ 今度行ってみようかな……

Side out

Side：昴

「暇ですなえ……」

お早うございます、昴です。現在、暇を持て余しています。この時間帯だと、あまりお客が来ないんですね。店を開けてすぐの時間帯ですから仕方ありませんけど。料理の準備はとうの昔に終わっていますし、掃除も既に終わりました。相坂さんに朝食も出しましたし、本でも読んで暇を潰しますか。そう思い、店の本棚から『考古学・メソポタミア文明編』を取ろうとしますが

チリンチリーン

店の扉に付けたベルが涼やかな音を立てて来客を告げる。読もうと思った途端にお客ですか。いえ、いいんですけどね。

「いらっしゃいませ」

「お早うございます、昴さん」

「おや、タカミチ君ですか。あなたが来るのは久しぶりですね。お早うございます」

「高畑先生、お早うございます」

「ああ、お早う。相坂さん」

朝食を食べていた相坂さんと互いに挨拶する。

「だいたい5ヶ月ぶりでしょうか？ 最近魔法世界によく行っていませんからね。」

「本国がうるさくて……」

「ああ、それでは仕方ありませんね。ガトウは元気にしていましたか？」

「はい。今も向こうで色々調べて、世界中を飛び回っていますよ」

「それはまた、元気ですねえ……」

「もう歳でしょうに……」

「まあ、元気なのはいいことです。それで、御注文は？」

「それじゃあ、カツサンドを」

「カツサンドですね、少々お待ちを」

そう言って、前日に仕込んでおいた肉を溶いた卵に漬けパン粉を塗り、油で揚げる。衣がこんがりきつね色に変わったところで油から揚げて、それに特製のソースを塗って千切りにしたキャベツと一緒にパンにはさみ三角形になるように切って、完成です。

「はい、どうぞ」

「それじゃあ、頂きます」

そう言ってタカミチ君はカツサンドに齧り付く。今も昔も、美味しそうに食べてくれますねえ。

そう思っていると、またお客が来ました。

チリンチリーン

「いらっしやいませ」

「モーニングセットお願いしまーす」

「モーニングセットですね、少々お待ちを」

厨房に入ってパンと半熟ハムエッグ、フルーツサラダとヨーグルト、コーヒーを用意する。それを持って厨房から出ると、二人ほど増えています。いつの間にか朝食を食べ終わっていた相坂さんが注文を取っています。歯は磨いたのでしょうか？

「いらっしやいませ、何がよろしいでしょうか？」

「あ、モーニングセット二つお願いします」

「モーニングセットを二つですね、少々お待ちください。昴さん、モーニングセット二つお願いします。これは私が運んでおきますから」

「ではお願いします。私は注文されたものを作りますから。それから相坂さん、歯は磨きましたか？」

「はい、食べ終わってすぐに」

「それならいいです」

そう言って私は再び厨房に入る。忙しくなりますね。

チリンチリーン

「いらつしゃいませー。あ、アスナさん、お早うございます。」

「あ、さよちゃんお早う。私フルーツサンドとダーズリンお願い。食べたなら私も手伝うから」

「はい。昴さん、フルーツサンドとダーズリン一つずつお願いしまーす」

「分かりました」

出来上がったモーニングセットをカウンターに置き、相坂さんが持つて行くのを確認して今度はフルーツサンドを作りはじめる。パンを切り、苺とキウイ等の果物を水で軽く洗い、ヘタと皮をむき実を切る。さらに生クリームを作ってフルーツと一緒にパンにはさむ。フルーツサンドは冷たい方が美味しいので、真言で冷やします。それにダーズリンを淹れて、ハイ完成です。

「相坂さん、お願いします」

「はい。お待たせしましたー」

カウンターに置くと、すぐに相坂さんがアスナちゃんのところを持って行ってくれます。学校が休みの日にはいつも手伝ってくれますから、接客にも慣れていきます。料理の腕も、木乃香さん程とは言いませんが最近かなり上達しています。この分だと、そのうち厨房を任せてもいいかもしれませぬね。

ちなみに彼女、地縛霊じゃなくなったみたいですが。かと言って浮遊霊かと言われればそうでもないみたいですが。刹那さんや龍宮さん、エヴァンジェリンが言うには学園に縛られていたらしいですが頻繁に実体化して動いていたためでしょうか、縛りがほとんどないも同じ状態になっているそうです。

どうしてか気になったのでエヴァンジェリンに調べてもらったところ、霊格が上がって精霊種に変質しているとか。人間霊が精霊種になることは魔法で変化しなければ最短でも100年以上かかるらしいですが、麻帆良というかなりの霊地に60年以上存在していたおかげかかなりの魔力を宿し、もう少し年を経て力をつければ精霊になれると言ったところで止まっていたらしいです。その状態でいた時に私が真言で実体化できるようにしたため力が増し、精霊として確立してしまったとか。普段は人間と同じように生活していますけど。

（そういえば、以前学園長が来た時かなり驚いていましたね。相坂さんではなく学園長が）

相坂さんが実体化できるようになって暫くして、学園長が店に来ました。その時に相坂さんが接客して、学園長は目を見開いて硬直していましたからね。その後、硬直が解けたかと思っいたらいきなり涙ぐみ始めましたし。相坂さんに聞いても記憶にないらしいですし、何だったんでしょうか？

ちなみにエヴァンジェリンには調べさせた対価として、氷のマナクリスタルを使い作り上げたペンダントを要求されました。ペンダントトップに銀で雪の結晶を象ったものをあしらい、その中央にマナクリスタルを嵌め込んだ綺麗なペンダントです。久しぶりに銀細工を作れて私も楽しかったです。情報と物の価値が釣り合っていない気がするの私の気のせいでしょうか？

S i d e o u t

S i d e . . . さよ

チリンチリン

「いらつしゃいませー」

「カルボナーラとミックスジュース下さい」

「カルボナーラとミックスジュースですね、少々お待ちください。」

昴さん、カルボナーラとミックスジュース入りましたー」

「分かりました。少々お待ちを」

こんにちは、相坂さよです。少し前まで地縛霊やっていました。実体化できるようになった今は、（覚えてないけど）二度目の中学生活と喫茶店のお手伝いをしています。

何で二度目かっていうと、死ぬ前にこの学校に通っていたらしいからです。地縛霊になる前のことは全然覚えてませんけど。

死んでから60余年、友達もいなくて、さらに存在感の薄さからお祓い師や霊能者にも気付かれなくてとても寂しかったです。誰にも気づかれなくて、クラスの皆が卒業しても私だけ卒業できなくて、さらに学校付近から動くこともできなくて。寂しさで潰れそうな心を必死に奮い立たせて今まで生きてきました。幽霊ですけど。

ですけど去年、新しいクラスの生徒と一緒に、皆の間で美味しいって評判のお店に行つてからそれも終わりました。誰にも見えないし、食べる事も出来ないだろうけどせめて雰囲気だけは、と思つてついて行ったら、そのお店の人　　昴さんが話しかけてくれました。

『独りでそんな風にしていて、寂しくありませんか？』

そう声をかけられて、思わず泣いてしまいました。死んでから60余年、久しぶりに人とお話しできたんですから。

その後暫く話をして、昴さんについて来るように言われ、厨房に行きました。何だろうと思つて聞いてみると、「60年ぶりに食事をしたくありませんか？」と聞かれました。幽霊なのに物を食べる事ができるのか疑問に思いましたが、聞いてみたら実体化して食べてもらつと言われました。

60年ぶりに人と話して、さらに物を食べる事が出来ると言われて私は実体化させてくださいと頼みました。優しそうな人でしたし、この人のことは信じられると思つたから。

そう言つた直後、昴さんが何かを言つたと思つたら私は床に座り込んでいました。そして、自分の足で立つて、傍に有つた物に触つて久しぶりの自分の体の感覚に泣きました。昴さんに心配されましたけど、嬉しかったんです。他の人達と話せることが、物を食べられることが、嬉しかったです。

チリンチリーン

「さよちゃん、お願い！ お待たせしました、マルガリータお持ちしましたー！」

「はい！ いらつしやいませー」

アスナさんに言われて、新しく来た人に接客する。

今は昴さんのおかげで物にも触れて、クラスの皆と友達になれて毎日を楽しく過ごしています。

24話：日常（後書き）

アスナが心配した、クルトの現状です。それではどうぞ

その頃のクルト

『お「ガチャン！」ち、チクシヨオー……！！！！』

「ああ、もう！ 毎度毎度五月蠅いですねえ！！」

「紅き翼」を離れる前に昴さんに貰った目覚まし時計を、いつそ壊れると言わんばかりに魔力を込めて殴りつける。普通の目覚ましならこれで容易く壊れるのですが、一体どうやって作ったのか、傷一つ付くことはありません。

確実に目が覚めるのはいいんですが、こつも五月蠅いと困ります。どういつ訳か、私以外に目覚ましの声は聞こえないようですが。最初の頃はノイローゼになるかと思いましたが、本気で。

一体何を思って昴さんはこれを私に？ まさか、嫌がらせでは……

（いえ、昴さんに限ってそれはありませんね）

まず、嫌がらせをする様な人ではありませんし。単純に、確実に目が覚めるようにと親切してくれたのでしょう。

ですが、今はその親切が憎いです。何でよりもよってこれなんですか昴さん。腕輪だけの方がよかったですよ。

「昴さんが来たら、文句の一つでも言いましょう」

そう心に決めた。

25話：稽古（前書き）

三人称に挑戦してみました。
読みにくかったらすいません。

今回、短いです。

25話：稽古

ギャリインッ

朝靄の中、金属がぶつかり合う音が響く。

音の発生源は矛と長刀。それぞれ矛を男が、身の丈ほどもある長刀を頭の横で髪を結った少女が振るい、互いに切り結び火花を散らす。

「はっ！」

長刀を振るうサイドポニーの少女　　桜咲刹那が矛を構えた男に斬りかかる。

身の丈ほどの長刀を振るいながらも、刀を振るった勢いを利用し次の斬撃に繋げ、連続で斬りかかる。その勢いは正しく疾風怒濤、並の剣士なら数合の内に斬り伏せられているだろう。

だが男　　緋乃宮昂はその斬撃を紙一重で回避し、あるいは矛で受け流しながら刹那の攻撃の合間に有る僅かな隙に対し矛で斬りつけ、あるいは突きをいれる。

「くっ」

攻撃を中断し、回避する刹那。

逃がさないとばかりに昂は追撃の姿勢を見せるが、何を思ったか後方に飛び退る。その直後、上空から新たな少女　　こちらはツインテールで、それぞれ金と銀の鈴をつけている　　が降って来て、これまた身の丈ほどの幅広の大剣を叩きつけ石畳に斬痕を刻む。

「チイツ、外したか」

舌打ちしつつ追撃のために鼻を追おうとする少女　　緋乃宮アスナだが、突如大剣を盾にするように構える。直後、何かが剣に当たる音と共に衝撃が連続して奔り、僅かにだが後方に飛ばされる。衝撃の強さに顔を顰めつつ何が飛んできたのかをアスナは確認する。

飛んでくるそれは小石だった。しかし、銃弾の様な速度を持って飛んでくるそれは、剣に当たると同時に強い衝撃を発生させ、少しずつではあるがアスナの体にダメージを与えていく。

「アスナさん!!!」

「私は大丈夫だから、行って刹那!!!」

刹那は飛んでくる小石を回避し、あるいは叩き落しながら心配してアスナに声をかけるが、声をかけた刹那にアスナはそう言う。刹那は僅かに迷ったようだが気を身に纏い身体能力を引き上げ、石を避けながら鼻に斬りかかって行く。小石の衝撃が来なくなったのを見てアスナも咸卦法を発動し、能力を底上げし自身も鼻に接近する。

「はあっ!!」

「でえいつ!!」

上段から気で強化された野太刀が振り下ろされ、さらに咸卦法で強化された大剣が横薙ぎに振るわれる。気や魔力、咸卦法で能力を底上げていても、直撃すれば容易く命を奪うであろうそれらの間合いと軌跡を鼻は見極め、最低限の動きで回避し、攻撃を繰り返す。

ガキッ!

だがそれは耳障りな音を立てて長刀に止められる。2秒程鏖迫り合

いをし、二人同時に飛び退く。途端に先程まで昴が居た場所を刃が通過し、石畳を切り裂く。

「斬岩剣ですか、声に出さなくても技は出せるのですね」

そう呟きつつ、技後硬直で動けないアスナに攻撃を加えようとする昴だが、刹那に斬りつけられ邪魔される。

「斬空閃！」

バックステップで距離をとったところで追撃の斬空閃が放たれるが、刃が振るわれた軌跡からどこを剣閃が通過するかを予測し、危なげなく回避する。それを予測していた二人が斬りかかるが、矛を振るい強風と衝撃を発生させ、昴は二人を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた二人は空中で体勢を立て直し危なげなく着地し、昴に再び斬りかかるようにする。

だが地面を蹴ろうとした直後、津波のような勢いを持って無数の棘が二人に襲いかかった。

~~~~~

(さて、どう対処します?)

そう思いながら、昴は油断なく二人に対して発生させた棘の群を見据える。それは一見すると、地獄に有ると言われる針の山の様だ。自身が引き起こしておいて何だが、やり過ぎたか?と心のどこかで思い、二人は大丈夫かと心配する。

だが、その心配は杞憂に終わったようだ。その言が聞こえると同時に棘の向こうから何かが発生し、全ての棘が消滅し多少傷ついている刹那とアスナが姿を現す。それを見て安堵の溜息を二人に気付かれないように吐き、今起こった現象について考えるが先程聞こえた声を思い出し納得する。

(そう言えば、あれがありましたっけ)

そう思い、昴はアスナの持つ大剣を見る。

アスナのアーティファクト、ハマノツルギは魔法や気、アーティファクトにより引き起こされる現象を否定・無効化し、さらに召喚されたモノを一撃で送り還す能力を持つ。その無効化能力で天沼矛の「書き換え」が否定され、初期化されたのだろう。

厄介な能力だ。

「魔法使い相手に、これほど嫌な能力はありませんね」

私、魔法使えませんがね。

そう呟きつつ、瞬動で距離を詰めてきた二人の攻撃を回避する。振るわれる刃を避けながら隙を探し攻撃しようとするが、刹那の隙をアスナが、アスナの間を刹那がそれぞれカバーし合い昴に反撃の機会を与えない。

本当に厄介です。

そう心の中で呟いた。

~~~~~

さっきのは危なかった。

昴に剣を振るいながら、そうアスナは心で呟く。先程自分達に襲いかかってきた棘の群は飛び出す直前に後ろに飛ぶことで何とか回避し、迎撃したがあと一歩前に出ていたらきつと百舌鳥の早贄の様に串刺しになっていただろう。昴のことだから実際に刺さる様にはしていないだろうが、そう考えると肝が冷えた。

(それに、攻撃が一つも当たらない)

今でこそ刹那との連続攻撃で反撃の暇を与えていないが、それでも最低限の動きで避け、あるいは手に持つ矛で受け流して傷一つ付いていない。自分達は昴の攻撃を受けて多少なりとも傷ついているのだ。

(これで「紅き翼」中、近接最弱って絶対嘘よね)

そう考え、以前昴がそう言ったことを思い出す。

受け流すことは別にするとしても、私は真言を使わなければ近接戦闘ではガトウはおるかアルにすら及びません。

聞いた当初こそ「そうなのか」と思っていたが、稽古の度に傷一つなく自分達を沈める昴に疑問を持った。本当に最弱なのかと。

(まあ、今はどうでもいいわ)

そう思い、咸卦の気をさらに強くする。自分が制御できる限界域ま

で濃度を濃くし、身体能力をさらに強化する。

(今日こそは！)

一撃当てる。

そう強く思い、アスナは攻撃の速度を上げた。

~~~~~

攻めきれない。

刹那はそう感じていた。

アスナと二人がかりで攻撃しながら、昴は全て受け流し、必要最低の動きで回避する。

一つも攻撃が当たらないため、まるで舞い散る花卉を攻撃しているようにも感じる。それくらい回避する動きが自然なのだ。

(何度も思っただが、回避が巧過ぎる)

攻めの力こそ呪術協会の長である詠春よりも下だが、こと回避に至っては「紅き翼」でも上位に入ると刹那はタカミチより聞き、また自身もアスナとの稽古でそれは重々理解していた。

他にも魔法先生・生徒の噂として幾つか耳にしたこともある。

曰く、千の「魔法の射手」を掠ることなく回避した。

曰く、攻撃が当たったと思っただら外れている。

曰く、あの人、人間じゃなくてはぐれ　タルなんじゃないの？　な  
ど。

最後の噂は置いておくとして、他の噂からはどれだけ回避が巧いのが伝わってくる。  
現に今まで、アスナと共に一度も攻撃を当てる事が出来ていないのだから。

（だが、言いかえればそれだけ防御が薄いという事！）

おそらく、一撃でも当てれば倒せる。そう考え身に纏う気を高め、身体能力をさらに引き上げる。攻撃しながら横目で見ると、アスナも咸卦の気を濃くしていた。考える事は同じという事か。

（今日こそ、勝たせてもらいます！）

心意気を新たにし、夕凧を振るう。

~~~~~

三人が稽古を始めて、既に二時間が経過した。アスナと刹那は傷だらけで、既に動く気力もないのだらう。石畳に片膝を着いて乱れた呼吸を整えつつ昴を見ている。

対する昴は埃などで汚れてこそいるが傷はなく、呼吸を乱してすらない。

「今日はここまでですね。お疲れ様です」

そう昴が言い、稽古は終わった。それと同時に二人は石畳に仰向けに倒れる。

「ハアツ…ハツ…あゝ、悔しい！ また一撃も当てられなかった！

「昂さん…ゼツ…ゲホツ、回避が巧すぎです。ハア…何でそんなに……」

息を整え、所々咳き込みながら刹那が昂に聞く。何をどうしたらあそこまで回避し続ける事が出来るのか気になるのだろう。アーツィファクトをカードに戻しながら昂が聞く。

「何故そんなに回避し続ける事が出来るのか、ですか？ 参考にはなりませんよ」

「それでも…ハア…気になります。ですから、教えてください」

「スバル…私も気になるから、教えて」

そう頼まれ、昂は暫く考える。どうしようか迷っているのだろう。10秒程考えて、昂は口を開いた。

「すみません。教える事はできません」

「何故ですか？」

刹那が問う。攻めと守りの違いこそあれ、参考にできればと思っているのだろう。どのような方法であそこまでの回避能力を得たのか、聞けば実行しそうな雰囲気を出している。

「あなた達を死なせたくないからです。私はアレで何度も地獄を見ましたから」

「地獄ですか？」

「ええ、地獄です」

昂はかつての地獄の日々を思い返す。恐ろしい勢いを持って飛来する先の尖った丸太、多方向から襲いかかる百を超える魔法の射手、

目に見えない速度で打ち出される拳圧に多属性の中級攻撃魔法。そして剣圧。極めつけは連続で襲い来る極大の気を纏った、砲撃かと言わんばかりの拳圧に電撃系最強の広域殲滅魔法「千の雷」……………

「スバル！？ ちょ、大丈夫！？ 凄い震えてるけど……………」

「昴さん、戻ってきてください！」

「はっ！？」

どうやら意識が飛んでいたらしい。アスナと刹那が心配そうに顔を覗き込んでいた。背筋が冷たいところから、どうも冷や汗も掻いていたらしい。

「だ、大丈夫ですよ？ ええ、大丈夫」

「ホント？ 顔色も悪いけど……………」

「大丈夫です！ 心配無用です！」

強い勢いでそう言い、それ以上の詮索をさせない昴。やや不満そうな様子を見せながら、二人は引き下がった。

（この二人には、絶対にあんな地獄を経験させたくないですね）

蒼い顔をしつつ、昴はそう思った。

~~~~~

昴の持つ魔法球の中に有るセフィローティア、その第5エリアである「峻巖の修練場」から出て居住区に向かっている時に、ふと昴は思ったことを二人に聞いた。



「そう言えば二人とも、テストは大丈夫なのですか？ 確か、そろそろあると思いますけど」

「んー、私は大丈夫だけど、刹那は？」

「私も大丈夫です。分からないところはお嬢様と昴さんに教えてもらっていますから」

昴の問いに、二人はそう答えた。二人とも、木乃香程とは言われないがそれなりの点数を取っているので焦っている様子はない。ふとアスナが、思い出したように言う。

「そう言えば、今回の期末で最下位脱出できないと大変なことになるってネギが言ってたわね」

「確かに言っていましたね。具体的にどう大変なのかは言いませんでしたが……」

その時に噂として「最下位のクラスは小学生からやり直し」というモノが流れたのだが、どうせ学園長の流したものだろうと二人は本気にしていなかった。

「大丈夫ならいいのですが、それでも油断はしないようにしてください」

「わかってる。心配しないで」

「帰ったらすぐに勉強ですからね」

そう言いながら全員、魔法球から出ていった。

## 26話：テスト

「そうか、ネギ君はなかなか良くやっとなるか」

「はい。生徒とも打ち解けていますし、授業内容も頑張っています。少々至らないところもありますが、許容範囲でしょう。とても10歳とは思えませんわ」

麻帆良学園女子中等部にある学園長室で、不自然なほどに後頭部の長い老人と一人の女性教員が話し合っていた。話題が上がっているのは、この冬に教育実習生として女子中等部2・Aに配属された少年、ネギ・スプリングフィールドについてだ。

「この分なら、指導教員の私としても一応、合格点を出してもよろしいかと……」

机を挟み老人の前に立つ女性教員　源しずながそう言う。ネギの赴任当初から彼の授業を見てきて、総合的かつ客観的に判断しての答えだろう。

「そうか、それは結構。では4月から正式な教員として採用できるかのお」

席に座り対面する老人　麻帆良学園学園長である近衛近右衛門が目を細め、髭を扱きながら満足げにそう言う。好々爺然とした雰囲気は、どこか孫を見守る祖父を連想させる。

「ただし、もう一つ……」

「は？」

「彼にはもう一つ、課題をクリアしてもらおうかの。才有る『立派

な魔法使い』候補として……」

フオフオフと、どこか仙人の様に笑いながら学園長はそう言った。この会話はアスナ達が昴と稽古をしていた日の午前にあったことである。

~~~~~

「何ですって！？ 2 - Aが最下位を脱出しないとネギ先生がクビ！？」

2 - Aのクラスメイトの中で最もネギを愛していると言ってもいい金髪の少女、委員長こと雪広あやかの叫びが教室中に響く。

「どうしてそんな大事な事を言わなかったんですの、桜子さん！」「だ、だって先生に口止めされてたからー。そんなに強く揺らさないでー！」

あやかに肩を掴まれて強く揺さぶられた少女 椎名桜子が悲鳴を上げるが、周りの生徒はただ見ているだけで助けようとしなない。助けようとしたら自分も巻き込まれると本能的に分かっているからだろう。薄情なクラスメイトである。

（木乃香とネギが居ないのは気になるけど、何処行ったのかしら？）

その喧噪の中でアスナはそう思った。

昨日、刹那と共に昴との稽古を終え寮の自室に帰宅した後、汗を流しに浴場に行き、その時に今回の期末テストの事が話題に上った。

その時に木乃香の口から「今回の期末で最下位を取ったクラスは解散」という言葉が出て浴場に居たメンバーを驚かせた。（尤も、アスナは若干呆れていたが）

木乃香が言うには自分達がいつまでも最下位なので祖父である学園長が怒り、今回最下位ならクラスは解散。さらに、特に成績の悪かった生徒は留年どころか小学生からやり直すことになるかと早乙女ハルナが言った。

これを聞いて2 - Aの成績不良者達　通称バカレンジャーは自分達が再び小学生として学校に登校している風景でも想像したのか、嘆きの声をあげた。余程に自分達の成績に自信がないのだろう。普段真面目に勉強しないからこうなるとアスナは呆れていた。

が、その時に綾瀬夕映が言った一言で雰囲気は一変した。曰く、図書館島の深部に読むだけで頭が良くなる魔法の本がある。それを聞いてバカレンジャーは驚いていた。（バカブルーこと長瀬楓は、夕映の飲んでいた「抹茶コーラ」なるドリンクに驚いていたようだが）

図書館島は学園設立と同時により建設され、有名・無名に関わらず数々の本が存在する。戦火を逃れるべく世界中から様々な貴重本が多く収められ、その蔵書量は軽く万を超えとも言われている。その中には今は失われたと言われる物も存在するとか。だが、そのあまりの多さに（何故か）地下に増改築を重ね、さらに盗掘を防ぐために罫も設置され既に迷宮の様になっているとか。これを聞いた時、アスナは思った。何処のゲームのダンジョンよ、と。

出来のいい参考書の類だろうと夕映本人は言い、友人達も都市伝説だろうと言っていたが、溺れる者は藁をも掴むという。その本を手に入れるために図書館島に行こうという話しが持ちあがった。

だがこれにアスナと刹那は待ったをかけた。読むだけで頭が良くなる本という眉唾ものの噂を信じて探しに行つて、残り少ない時間を無駄にする気か。そんなものに頼るよりも、悪あがきでも勉強した方がいいと二人は言った。

図書館島の罾はどういったものか二人は知らないが、聞くところによれば死に至りこそしないものの、危険な罾もあると聞く。そのような危険な場所に友人を行かせることは避けたい二人は、正論を並びたてて行くことを防ごうとした。

結果として諦めて勉強するという事になり、二人は安堵して部屋に戻り眠りについた。しかし、こういう時の友人達の行動力を二人は甘く見ていた。それぞれの部屋で二人が眠っている時に、部屋を出た友人たちに気付かなかつたのである。昴との稽古で疲れていたために深い眠りについていたのが仇となつたのだらう、朝起きた時は既に友人のベッドはもぬけの殻だった。(ついでに言えば、ネギも居なくなっていた)

(まさか、図書館島に行つたんじゃ……)

「とにかく！ テストまでちゃんと勉強して最下位を脱出しませんと、先生がクビになってしまいます！ 普段真面目にやっていない方々も、ちゃんとしてもらいますわ！」

「げ」

「仕方ないかあ……」

心配になり、アスナは携帯を取り出し木乃香に電話をかけようとする。しかしその時、二人の生徒が教室に駆けこんできた。それも、アスナと刹那にとって最悪の情報を持つて。

「大変だよー！ ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に！！」

「え……？」

駆けこんできた二人の生徒
にクラスの生徒は凍りついた。

宮崎のどかと早乙女ハルナの言葉

その情報にアスナと刹那は焦った。駆けこんできた二人の様子から、おそらく夜の内に図書館島に行ったのだろうと考え、探しに行こうとしたが教室を出ると同時に新田先生と遭遇。事情を話し、図書館島に行こうとするが教室に戻されることになる。その際、新田先生は職員を集めて緊急会議を言った。

(どうする、刹那?)

(学園長か、昴さんに頼むしかないかと……。それよりもお嬢様が、このちゃんが……)

(それしかないか。だけど、学園長には新田先生が言うだろうからいいとしても、スバルは仕事とかあるし、教師じゃないし……)

「このちゃん!」

「少しは落ち着けー!」

木乃香も行方不明と知り今にも飛び出して行こうとする刹那に対し、アスナはハリセンで突っ込んだ。その際、周りにどうやって出したか、何処から出したかと聞かれたが手品と言って押し通した。

~~~~~

「ではこれ、分かる人ー」

光が射し、滝が流れ辺りに音を響かせる。湖からは本棚が乱立し、無数の巨大な木が天井を支えるように生えている。

図書館島地底図書室。そこで一人の子供と、数人の女子が勉強をしていた。

少年の名はネギ・スプリングフィールド。イギリスより魔法使いの修行として、教育実習生として赴任してきた、まだ10歳の見習い魔法使いである。ネギは黒板に書いた問題の答えを数人の少女に聞いた。

「ハイ」

「ハイ」

「では、佐々木さん」

「35です」

「正解です」

それに答える少女達は通称バカレンジャーと呼ばれる成績不良者達。一人ほど成績優良者が居るが、まあそれは今はいいだろう。彼女達は二日前の夜遅くに図書館島に忍び込み、魔法の本なる物を手しようとして手に入れられず、罠に嵌ってここに落とされ現在、地底図書館で勉強していた。

「不思議だよなー。こんな地下なのに都合よく全教科のテキストあったり、トイレにキッチン食材付きで……」

「いたれりつくせリアルね」

「本に囲まれてあったかくて、まるで楽園やなー」

「一生ここにいてもいいです」

心配している者が居るとは露知らず、少女達はある者は物を食べながら、ある者は横になり本を読みながら呑気にそう言った。心配している者達が見たら、迷わず殴っているだろう光景だ。

「ワタシ達も休憩にするアルか」

古菲の言葉で休憩することにしたようだ。勉強をやめて休みに行く。

そんな中、佐々木まき絵がタオルを持ってどこかに行こうとする。

「どこ行くアルか？」

「ちよつとね」

「あ、わかた。いいね、付き合うアルよ」

気付いた古菲が話しかけるが、笑顔ではぐらかす。しかしそれだけで分かったのか、楓と共にまき絵について行く。

二日程風呂に入っていなかったため、匂いが気になったのだろう。

水辺に着くと、三人は服を脱いで水浴びを始めた。それを水中から見ている者が居ると気付かずに。

~~~~~

「（ずっと水に浸かってたはずの本が全く痛んでない。それに、この無秩序な本の並び……）誰がこんなもの作ったんだろ？」

水に浸かった本棚から幾つか本を抜き出し、状態を調べながらネギは考えていた。

ふと自分の右手首を見ると、黒い線が目に入った。自分に出された課題、「2-Aの最下位脱出」をクリアするため頭が3日間良くなる代わりにその後1ヶ月ほどパーになると言うところでもない魔法を自分の生徒に使うとした時アスナに止められ、自分のことだけを考えた行為だと反省し施した封印の証である。これが消えない限り、ネギは魔法を使えない。

「あと1本か、明日の朝になれば魔法で外に出られるぞ」

どうやら脱出の方法は自分の魔法で行うつもりのようなのだ。しかし分かっていのだろうか？ 魔法を使えば自分が魔法使いだとばれて

しまつ事を。

(絶対に先生になる)

「キヤ　　ッ！」

そう思つた瞬間、悲鳴が響いた。何事かと思い、ネギは悲鳴の下場所に駆けて行く。そこには、自分達を落した石像　　ゴーレムの片割れが居た。その手には生徒の一人で、ここに一緒に落ちた佐々木まき絵を掴んでいる。

「ネギ君助けて　　！」

『フオフオフオ』

まき絵が悲鳴を上げ、ゴーレムが特徴的な笑い声をあげる。どこぞの妖怪学園長と同じ笑い方だが、ネギはそれに気づくことなくゴーレムに向かい合う。

「僕の生徒をいじめたな！　許さないぞ！」

そう言つて生徒に気付かれないように杖を持ち詠唱を行う。

「（光の精霊11柱、集い来りて敵を射て！）くらえ、魔法の矢！」
『フオ！？』

そう言つて魔法を放とうとするが、何も起こらない。そこで思い出す。まだあと1本、封印の印が残っていることを。

生徒は何のことが分からずに首を傾げているが、ゴーレムはどこか安心した様な雰囲気を出して言った。

『もう観念するのじゃな。ここからは出られんぞ、迷宮を歩いて帰

ると3日はかかるしのう』

「ええっ！ 3日!？」

「それじゃテストに間に合わないアル！」

そう言つて今更ながらに焦りはじめるバカレンジャー。それをネギは励まそうとする。

「諦めないでください！ 僕の魔法の杖で行けば一瞬……ハッ!？」

「まほーのつえ？」

「な、なんでもありません！ 忘れてください!！」

焦りに焦つて訂正するネギ。毎度のことながら、魔法の秘匿意識がとても薄いように感じる。

ゴーレムから離れつつ、どうまき絵を救出して脱出するかを考えながら衣服を集める木乃香達。その中で、バカブラックこと綾瀬夕映がゴーレムの首に何かを見つけた。

「みんな、ゴーレムの首の所を見るです！」

そう言われて全員が見る。そこには1冊の本があった。

「あれは、メル……魔法の本!？」

「メルキセテクの書です！ ゴーレムと一緒に落ち来たんでしょ」

その言葉にネギが答える。しかしおかしな事だ、台座に鎮座していたはずの本が落ちてきているのだから。何かしらの意図を感じる。しかしそれを考えずに夕映が言う。

「本を頂きます！ まき絵さん、クーフエさん、楓さん！」

「了解、バカリリーダー！」

かけられた声に応え、ゴーレムに襲いかかる二人。まず古菲がゴーレムの足を殴り、姿勢を崩す。普通なら拳を砕く様な勢いで撃ちこまれたそれは、ゴーレムの足に罅を入れた。さらに跳躍し、まき絵を掴んでいる手に蹴りを入れ、ゴーレムの手から解放する。

「よ」

手から解放されたまき絵を楓が救出する。抱えやすいのか、俗に言うお姫様だっこでまき絵を抱えている。

「やつ！」

『あつ……』

楓に抱えられたまき絵がどこから取り出したのか、新体操で使うリボンを振るいゴーレムの首から本を奪い取る。

『ま、待つのじゃ〜！』

「そう言われて待つ奴は居ないでござるよ」

そう言いつつ逃げるバカレンジャー達。木乃香から服を渡され、それを着ながら逃げると言う器用な事をやっている。

「目的の本も手に入りましたし、ズラかりましょう！ あのゴーレムの慌てよう、きつとどこかに地上への近道があるです！」

『出口はないと言つとるじゃろーが！ 諦めて捕まるのじゃー！』

「やだプー」

「見つけた！ 滝の裏側に非常階段」

「それですー！」

『ま、待つのじゃ〜！ アイタツ』

逃げながら出口を探し、非常階段を滝の裏側に見つける。そこを通ろうとするが、扉が開かない。何故かと見てみると、扉に問題が書いてあった。

「問1：英語問題 readの過去分詞の発音は何か？」です」

「なにそれ！？ そんなこといきなり言われても分かんないよー！」

思わずまき絵が悲鳴を上げる。しかしバカイエローこと古菲がメルキセデクの書を持ち答えた。

「ワタシこれわかるアルよ！ 答えは「red」アルね！」

その答えを言うと同時に扉が開く。通路に飛び込み、出口を目指すバカレンジャー+2。

「この本のおかげかな！？」

「持つてるだけで頭が良くなたアル！」

走りながらそう言う。そしてつきあたりの部屋についた。

「出口って何これ！？ 螺旋階段！？」

「天井が見えませんねー」

「これ上まで登るん？」

果てが見えない階段を上り、出口を目指す。少ししてゴーレムが壁を壊して入ってきた。

「キヤーツ！ 壁壊して入ってきたー！」

「しつこいアルねー。無理矢理追手くるアル」

『な、ならぬならぬ！ 本を返すのじゃー！』

壁を削りながら階段を上ってくるゴーレムに、皆はアツカンベーをしながら逃げる。しかし、再び問題の書かれた壁が皆の進行を阻む。

「今度は数学問題!？」

「誰か、分かる人いる!？」

「あやー来たえー」

「ぼ、僕がやりましょうか!？」

ネギがそう言うが、本を持った楓が答えた。

「X=46。かな」

そう言う問題の書かれた壁は引っ込んだ。

「おおっ!？ 長瀬さんまで!」

「うそ…バカレンジャーなのに……」

成績の悪さを知るため、思わずそうこぼすネギ。仮にも教師が言うてはいけない言葉であるが、幸いというか不幸と言うか、誰にも聞こえていなかった。

その後も次々と問題を解いて行き、上へと昇って行く。途中綾瀬夕映が木の根に躓き足をくじいたが楓に抱えられ共に上って行く。既にゴーレムは2周近く下だ。

「あ、携帯の電波が入りました！ 地上は近いです！ 助けを呼ぶので頑張つて!！」

「や、やっど…?」

「みなさん、見てください!」

ネギの指さす場所を見る。そこにはエレベーターがあった。

「地上への直通エレベーターですよー!」

「これで地上に帰れるの!？」

「皆急いで乗ってー!」

そう言っただけエレベーターに乗り、地上を目指そうとする。しかし重量オーバーという音がし、動かない。

服などを脱ぎ捨て少しでも軽くしようとするが、エレベーターが動く気配は一向に見られない。

そして、とうとうゴーレムが皆に追いついた。

『フオフオフオ、追いつめたぞよー。本を返すのじゃー』

「キヤーツ!」

追いつめられ悲鳴を上げる。このままでは捕まってしまうだろう。万事休すだ。しかし、何を思ったかネギがエレベーターから飛び出した。

「ネギ君!？」

「僕が降ります! 皆さんは先に行って明日の期末を受けてください!」

そう言っただけ立ちはだかるネギ。しかし、楓に服の襟を掴まれて引き戻された。

「な、何を!？」

「こういうのは、何かを手放さなければ動かないで!」

「何かって」

「これやね」

そう言つて木乃香が手にしたのは奪取した「メルキセデクの書」。それを見て、楓の言葉を聞いてすぐに何をするかに思い至つた。

「まさか!」

「そのまさかやね。えいつ」

ぼいっと、毬でも投げるかのようにエレベーターの外に本を放り出す木乃香。エレベーターの外に本が出ると同時に動きだし、扉が閉まる。

「なんとかなつたねー」

「散々だたアルな」

「今は日曜の夕方ですか……」

エレベーターの中でそう言いつつ、地上へと昇つて行く。暫く経つてエレベーターが止まり、扉が開いた。そして最初に見た者は……
…米神に血管を浮かび上がらせ仁王立ちしているアスナと、木乃香に飛びかかるうとしている刹那だった。

「あ、アスナさん……」

「ど、どうしてここに……?」

「ちよつとね、学校をほっぽって本を探しに行った見習い教師とルームメイト達を迎えにね……」

そう言つてネギ達を笑顔で睨みつける。普段とはかけ離れたその雰囲気、武に覚えのある楓と古菲の二人さえも動けない。

まさに蛇に睨まれた蛙。背後に浮かび上がる不動明王は幻覚だと思いたい。

「このちゃん！！ 心配したんやえー！！」

「せつちゃん、落ち着きやー」

いつの間にか木乃香は抱きついてきた刹那を抱きしめ落ち着かせている。しかしアスナに睨まれ顔が引き攣っていた。

「で、何か弁明はある？ まあ何を言ってもアンタ達が新田先生に説教されるのは確定事項だから」

米神に血管を浮かべ、とてもいい笑顔を見せながら死刑宣告を言い放つアスナ。そして真っ青になるバカレンジャー+2。

その日は疲れもあるだろうと寮に戻り、図書館にいたメンバーは徹夜で勉強することになる。

翌日、遅刻してきたメンバーは別室でテストを行った。

結果は学園長が点を付けていた物を合わせて学年トップになりネギの教員正式採用が決まったが、新田先生の説教により、本人達に喜びは微塵もなかったとか。

そして、学園長も何故かかなり憔悴した様子で学園長室に戻ったと言う。その際に「動けなくしての説教はやめてくれい……」と虚ろな目で呟いていたことが先生達に疑問に思われた。

事情を知るタカミチだけは顔を引き攣らせていたが、それは誰にも知られることはなかった。

主人公設定2（前書き）

新しい主人公設定です。

主人公設定2

名前：緋乃宮 昴
ひのみや すばる

性別：男

髪：黒 眼：紅

年齢：44（肉体年齢は22）

身長：175cm

趣味：料理、小物作り、遺跡巡り、龍笛

好きな物・こと

静かな場所、自然が多い場所、音楽（基本的にクラシック）、野菜・
果物全般

古い物（古書や遺跡の遺物など）、歴史（公的な物から民間伝承ま
で含む）

嫌いな物・こと

騒がしいところ（賑やかな物は除く）、自然破壊、争い
自分の主張・意志を他人に押し付ける人、正義という概念

性格

温和で冷静。丁寧な言葉遣いで話す。

混乱することは基本的にないが、突発的に起こることには弱い。
一度混乱すると落ち着くまで時間がかかる。

他人の意志などを肯定も否定もせず、ただ受け入れる。

（自分が嫌う事柄に関してはその限りではない）
礼節を重んじ、それを蔑ろにする人には説教する。
英雄と呼ばれることを嫌う。

能力：真言

言葉とした事が全て現実のものとなる能力。

魔法のように詠唱して発動するものではなく、本人が言葉に力を込めて発動するために回避や防御が非常に困難（というよりまず不可能）。

完全に受け入れ適合したことで時間の加速・遅延・停止、空間の歪曲等を出来るようになったが、相変わらず死者蘇生や時間跳躍は不可能。

武器：龍笛・黒竜

パートナーである黒竜、ノワールの鱗と角を使い作り上げられた昂専用の漆黒の龍笛。

黒竜の素材でできているため、物理・魔法防御力が意外に高い。

昂自信が手を加えており、イメージを乗せて奏することでイメージ通りの現象を引き起こす。

通常の楽器としても使用可能。

基本的に昂以外が奏することは不可能。

謎の指環

京都で入手した指環。手に入れた当初は錆びていたが、磨いたことで銀の輝きを取り戻した。

アレキサンドライトがついた指輪で、詠春に御被いしてもらった。

その後指に嵌めたが御被いだけでは足りなかったのか、外れなくなった。（何故か指のサイズはピッタリ）

この時から、偶にだが妙な夢を見るようになる。

仮契約カード

主：NAGIUS SPRINGFIELD (ナギ・スプリングフィールド)

従者：SUBARU HINOMIYA

称号：Verus Verbum (真なる言葉)

番号：CMXCIX (999)

色調：Argentum et Vermis (銀と紅)

方位：septentrio (北)

徳性：temperantia (節制)

星辰性：polaris (北極星)

アーティファクト

アメノヌボコ
天沼矛

矛の形をしたアーティファクト。矛の形をしてこそいるが、物理的破壊能力は皆無。

物質に触れることで、その物質を構成している情報（在り方）を根本から書き換える。

つまり、石を水や空気にしたリ、植物を鋼や泥にしたリと出来る。

しかし、所有者が『触れている』と認識できなければ情報（在り方）の書き換えはできない。

逆に言えば、所有者が『触れている』と認識できればあらゆるものを書き換える事が出来る。

また、在り方を書き換えた物は例外を除いて元に戻ることはない。

例外：混沌への書き換え、再度の書き換え、ハマノツルギ

27話：桜通り（前書き）

三人称って、難しや……

呪いの部分を少し追加しました。

27話：桜通り

夜、物音一つしない静寂の中、夜天に浮かぶ満月が舞い散る桜の花弁を照らす。

幻想的なその風景の中で、動く影があった。

「ハアツ……ハア……」

月明かりに照らし出され、影はその姿を闇に浮かび上がらせる。

現れたのは少女だった。名を佐々木まき絵。麻帆良学園女子中等部
2 A在籍の……いや、既に3 Aと言った方が正しいか。に在籍し、新体操部に所属する生徒である。

浴場へ向かっていたのか、手には入浴セットを持っている。

彼女は走っていた。僅かにだが目に涙を浮かべ、追ってくる者が居ないかしきりに後ろを見ながら。まるで何かから逃げるかのように。しかし、彼女の予想しなかった右手から新たな影が現れた。

「キヤアツ！」

気配もなく視界に入ってきたそれに驚き、倒れて桜の木に背中を打ち付ける。痛みで僅かに呻くが、自分に近づく影に気付き逃れようとする。しかし背に有る桜の木によって後退することはできず、震える。恐怖のためか、まき絵は助けを呼ぶことも、悲鳴を上げることもできない。

「あ……や……」

影はそれを見ても何も言わず、静かに彼女に近づく。

暗闇で、その表情は読むことはできない。
まき絵と影の距離がなくなり、月明かりに照らされた二つの影が重
なった。

「いやああ〜ん！」

静寂の中、どこか気の抜ける悲鳴が響いた。

「いよいよ新学期、私達も中3ねー」

「せやなー。これからも1年よろしゅうな、ネギ君」

「はいっ」

大勢の学生が乗り、込み合っている電車の中でアスナ達がそう言っ
た。新たな始まりを感じているのだろう、その目は明るく輝いてい
る。

「よし、がんばら……ふぎゅー!？」

「きゃあー!」

そう気合を入れたネギだが、電車の揺れで体が流されアスナと木乃
香の胸に突っ込んでしまった。色々と台無しだ。

「もー、ネギ君てばエッチやなー」

「教師失格よねー……」

「えうつ!?!? そ、そんな……」

頬を朱に染めて二人はそう言う。心なしかアスナの視線が冷たく感
じる。

「そう言えばネギ君、もうパートナー探しはせんでええの？」

「え、パートナーですか？」

顔を赤くしているネギに木乃香がそう聞いた。先日、イギリスの魔法学校からネギ宛に来た手紙にその事が書いてあったのだ。

この時に出たパートナーとは魔法使いとその従者的なものと思われるが、それを読んでいる途中色々あり、恋人を探しに来ているという噂となり3 Aの生徒全員に知られることとなった。その際にネギが小国の王子だと言う噂も流れたが、実際に亡国の王子であることは本人も知らず、生徒の中では一部を除いて誰も知らない。なお、その際に木乃香のお見合い騒動等もあつたがそれは割愛しておく。

「やだなー、パートナーなんてまだ早いですって木乃香さん。暫くは先生一筋でがんば……は……ハ……」

「ゲツ、待ちなさいネギ！ こんな狭い所でクシャミなんてするんじゃ……」

「ハクシヨンツ！」

チリンツ

ゴオツ！

ネギのくしゃみで引き起こされた不完全な武装解除の風と、アスナの魔法楽器であるアクセサリー、「風のベル」により引き起こされた風が電車の中に吹き荒ぶ。衣服こそ誰も脱がされなかったが、突如発生した風により女生徒のスカートが捲れ、下着を見られる。

「ネギ……アンタねえ……」

「わ、ワザとじゃないんですよ!?!」
「また変な風やったな」

怒るアスナと言い訳しつつ謝るネギ。そんな二人を見つつ木乃香はそう言った。どうやら自然に発生した風だと思っただけらしい。

『次は麻帆良学園中央です。お降りの方は……』
「あ、着くえ二人とも」

そう木乃香が言っただけで開く扉。

「よっし、走るよー」
「ネギ君遅れんな」
「ま、待ってくださいー!」

そう言っただけで二人は改札口に駆けだした。しかし、忠告空しくネギは遅れてしまった。

穏やかな風が吹く午前、学校のチャイムが響き渡る。

「3年!」
「A組!」
『ネギ先生!』

少し前まで2 Aと呼ばれ、今日をもって3 Aとなったクラスの生徒達が盛大に声を上げる。

「え……と。改めまして、3年A組担任になりましたネギ・スプリン

グフィールドです。これから来年の3月までの1年間、よろしくお願いたします」

そう言つて挨拶する、正式に教師となつたネギ・スプリングフィールド。ほとんどの生徒がそれに対し、元気に返事をする。それなりに慕われているようだ。

(こつして見ると、まだ話したことない生徒さんがたくさんいるなあ……この1年で全員と仲良く出来るかな……)

そう思いながら名簿を見る。その中で二人ほど教室にいないことに気付いた。

(あれ？ まき絵さんとエヴァンジェリンさんが居ない。遅刻かな……?)

不思議に思い、ネギはあやかに何か聞いていないかを聞こうとする。しかしその時、教室の扉が開きしずな先生が入ってきた。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3 Aの皆もすぐに準備してください」

「ここですか？ 分かりました」

そう言つて返すネギ。その思考からは、既に先程の疑問は消え失せていた。

「じゃあ皆さん、身体測定ですので今すぐ脱いで準備してください」

「じゃあアンタは出てなさい！」

そう言つてアスナに叩き出されるネギ。その後、あやかとアスナの言い争いが始まるがネギはその後に聞こえた言葉に赤面した。

『ネギ先生のエッチ〜!』

「ま、間違えましたー!」

ネギは逃げ出した。

喫茶ホタルブクロ。

数年前にできた喫茶店だがシックな雰囲気、さらに安くて美味しいと学生・教師他様々な人達に人気の喫茶店である。デートスポットにも選ばれる事がある店であり、学園祭中には超包子と並んで客が大勢来る店でもある。

尤も、店主である緋乃宮昴はその期間を「ステュクスをクロールで渡りそうになるくらい忙しい期間」と言っているが。

その店で現在、優雅に紅茶を飲む金髪の少女が居た。いつもはもつと人が居るのだが、何故かその少女しか店には居ない。

「ん、美味しい」

紅茶を飲みそう評価する少女。白磁の肌に、日に照らされ輝く金の髪が良く映える。人形の様に整ったその風貌は、どこかの城の姫君にも見える。

「この茶菓子もいい、紅茶によく合う。茶と言い菓子と言い、腕をさらに上げたか? 昴」

「自分ではよく分かりませんが、貴女がそう思うのならそうかもしれませんね」

少女の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

麻帆良学園女子中等部に在籍しているが、その正体は600年の時を生きた真祖の吸血鬼。

「千の呪文の男」ナギ・スプリングフィールドに「登校地獄」なるアホな呪いを掛けられこの学園に封印された、魔法使い達からは「闇の福音」等と呼ばれ忌み嫌われ恐れられている最強の悪の魔法使いである。

「それにしても、いいのですか？ 今日新学期最初の日でしょう」

「風邪で休んでいると言うように茶々丸には言っておいた。呪いが解けているのに、ぼーやのつまらん授業などに出ていられるか。ここで茶でも飲んでいた方が私にとってはまだ有意義だ」

「仮病を使ってまで休みますか……」

そうやってカップを傾げるエヴァ。その反応に昴は気付かれないように溜息をつく。

アスナ達が中学に進学した時、クラスの全員が店に来たことがあった。その時にさよを実体化させたのだが、エヴァンジェリンはさよの事が見えていたらしく何をしたのかを問い詰められた。

その際に真言のことがばれたのだが、エヴァンジェリンに掛けられた登校地獄の呪いを解くことを条件に真言のことをばらさないように契約した。

聞けばナギに呪いを掛けられ本人が3年後に呪いを解くと言っておきながらいつまでたっても解きに来ず、そのため何度も中学生を繰り返し、拳句の果てには死亡したと噂が流された。

それを聞いた昴は顔を引き攣らせ友人の行為を謝罪し、真言で呪い

を解呪したのだがその際に「今度会ったらお説教ですね」とどす黒い気配を漂わせながら呟いていたために、それを見ていたアスナ達に引かれたのは余談である。

「まあ、ぼーやには近いうちにちょっかいをかけるがな」
「何をするのです?」

エヴァの言葉に疑問を持った昴が聞く。

「ジジイから話があつてな、ぼーやと戦うことになった。大方、封印で弱体化した私を倒させ自信をつけさせようと言う魂胆だろうが……笑わせる」

「ナギの血縁の血を使った呪いの解呪ですか。既に呪いは解けているのですから、断つてもよかつたのでは?」

「それを知っているのはお前と緋乃宮アスナの二人だけだろう。それに、ジジイ達に吠え面をかかせてやろうと思つてな。そのための仕込みも既にしてある」

「最近生徒達の間で噂になつている桜通りの吸血鬼ですか? まさか血を吸つたのではありませんよね?」

「血は吸つちやいないさ、クリスタルのおかげでそんな事をする必要はないからな。まあ、魔力が封印されているのは気に入らんがな。魔法薬を使つて少し生徒に幻術を掛けただけだ。怪物に襲われる幻をな」

紅茶を飲みながらエヴァはそう言う。昴はコーヒーを淹れながらそれに返す。

「できる限りそういう事はしないで欲しいものです。トラウマにでもなつたらどうするつもりですか」

「私の知ったことか。殺しはしないが、私もぼーやがどれ程できる

か興味がある。流石にお前やあの男程とは思っていないが。最初は手を抜きに抜いて戦うさ」

「私をナギ達の様なバグと一緒にしないでください。これでも打たれ弱いんですから」

「真言という能力で見ればお前も十分バグだ」

そう言つてクククと笑うエヴァ。実に楽しそうだ。

「しかし凄まじいものだな、この魔力は。あまりの量と質に怖気すら感じる」

そう言つて首に下げているペンダントを持ちあげる。ペンダントトップに飾り付けられた蒼白い結晶が、光を反射しキラリと光る。雪の形をしたペンダントのためか、色も相まってそれは氷を連想させる。

それを出した途端、店内の気温が数度下がった気がした。

「純粋な氷の魔力が結晶化した、最高純度の氷のマナクリスタルです。氷属性以外の魔法にはそれから引き出した魔力は使えませんけどね。それよりも、私は貴女がそれから魔力を引き出せたことに驚きですよ。並の魔法使いでは引き出すことすらできないと言つのに

……」

昴がそう言つと、エヴァは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「フン、私をそこらの雑魚と一緒にするな」

「それはすみません。お詫びと言つては何ですが、もう一杯いかがです?」

「なら貰おうか」

空になったカップに新しく紅茶を注ぐ。
琥珀色の液体が湯気を立て、仄かに匂いを漂わせながら白磁の器に満ちていった。

教室に向かう廊下を歩きながら、ネギは悩んでいた。

教室からアスナに叩き出された後、彼は扉の前で身体測定が終わるのを待っていた。その時に和泉亜子から佐々木まき絵が校通りで発見され、保健室に運び込まれたことを知らされた。

心配になり様子を見に行ったが、彼女は穏やかな寝息を立てて眠っていた。クラスの皆は甘酒を飲んで眠ったのではないかなどと言っていたが、ネギだけは違うと読んだ。

（ほんの少しだけど、確かに感じた…魔力の残り香…僕とは違う、魔法の力を……）

ネギは考える。何故一般人の筈の彼女から魔力の残り香を感じたのか。

（図書館島以外で、魔法の力を感じたことはない。もしかして、僕の他に魔法使いが居る？）

「ネギ、ネギってば」

思考の海に沈み、彼は自分を呼ぶ声にすら気付かない。

「ネギってば！」

「え、あ…アスナさん」

「どうしたのよ、急に黙ったりして……」

急に黙ったネギを気にしてか、アスナが声を掛ける。

「ああ、すみません。まき絵さんは心配ありません。おそらく、唯の貧血かと……それと、僕は今日帰りが遅くなりますので夕食はいいりませんから……」

「そうなの？」

「ええの？ ご飯」

確認のために木乃香が改めてネギに聞く。

「ハイ」

「急にそんなこと言うなんて、怪しいわね。何か隠してんじゃないの？」

「な、何も隠してません！ ホントですよ！」

慌てた様子でそう言い、誤魔化すネギ。それをアスナは不審そうな目で見ている。木乃香は何か分かっていないようだ。

「まだ仕事がありますから、それじゃ！」

「あ、ちよつとネギ！」

そう言って逃げ出すネギ。彼は一直線に教室に向かう。その途中で新田先生に注意されたが、すぐに謝り教室に入る。

「どうしたんやろなー、ネギ君」

「嘘が下手ね……」

「？ 何が？」

「何でもないわ、それよりも教室に行きましょう。まだ授業あるし」

木乃香の質問をそうはぐらかし、アスナは教室に歩いて行った。

夜空に月が浮かび、月光が風によって舞い散った桜の花弁を幻想的に浮かび上がらせる。辺りは暗いが、街灯のおかげで道が見えないほどではない。その桜通りを歩き、寮を目指す一人の少女が居た。

「か、風強いですねー……ちょっと急ごうかなー」

少女の名は宮崎のどか。アスナ達と同じく3 Aに在籍する生徒で、図書館探検部なるものに所属している一人であり、ネギに恋する乙女である。

先程まで一緒に居た友人達と別れ、彼女は一人帰路についていた。

「こわくない……こわくないです……こわくないかも」

クラスで噂になっている桜通りを、そんな事を言いながら歩いて行くのどか。友人達はデマだろうと言っていたが、噂を思い出すと同時に不気味な雰囲気を感じ始める。体を強張らせながら進んで行くと、上から声がかかった。

「27番、宮崎のどか」

「え？」

思わず声の聞こえた方を見る。

街灯の上に黒い小さな人影が立っていた。周囲の闇に溶ける様な黒装束に全身を覆っているために分かりにくい、髪の高さと声の質、背丈から、その人影が少女であることが分かる。

「悪いが、奴を誘き寄せるための犠牲になってもらうよ」

「ひっ……キヤアアアッ！」

そう言つて少女はのどかに襲いかかった。彼女は恐怖に悲鳴を上げ気絶する。

「待てーっ！ 僕の生徒に何をするんですかー！！」

しかし、彼女が傷付けられる事はなかった。ネギが魔法の詠唱をしながら杖に跨り高速で突っ込んできたのだ。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！
ウンデキム・スピリトゥス・アエリヂョリタ
ルム・ファクティイニミグム・カブテント 風の精霊11人、縛鎖
サキタ・マキカ
アエール・カブトウラエ となりて敵を捕まえろ！ 魔法の射手・戒めの風矢！！」

詠唱を完了させ、ネギは風属性、捕縛の効果を持つ魔法の射手を放つ。放たれたそれらはかなりの速度を持って少女に襲いかかる。

「もう気付いたか、存外に早いな……氷楯」
レフレクショ-

しかし少女も魔法薬を投げ氷属性の盾を発動する。その際に、黒衣の隙間から蒼白い煌きが一瞬漏れたが、二人ともそれに気付くことはなかった。そして発動した氷の盾は、小揺るぎもせず放たれた魔法の射手を全て弾き返す。

「！！ 僕の呪文を全部はね返した！？」

その光景に驚くネギ。当然だろう、ネギの魔力は父であるサウザンドマスターに迫るほどだ。その魔力をもって放たれた魔法は高い威力を誇る。それが全て、傷一つ付けることなくはね返されたのだから、驚くなという方が無理だろう。

「ほお、なかなかの魔力じゃないか。驚いたぞ、10歳とは思えない。流石は奴の息子と言ったところか？」

余裕を声で表しそう評価する少女。その声音はどこか楽しそうだ。

「誰ですか、あなたは！ 僕と同じ魔法使いなのに、何でこんなことを……！」

衝撃で発生した煙で姿を見る事はできないが、居るであろう少女に敵意を剥き出しにしてそう叫ぶネギ。守るためであろうか、気絶しているのどかを抱えている。

強い風が吹き、煙を流していく。そして、それは少女の三角帽も飛ばしていった。

月明かりに照らし出され、少女の顔が闇夜に浮かぶ。

「な、あなたは……うちのクラスのエヴァンジェリンさん！？ どうして……それに奴の息子って」

「新学期に入ったことだ、改めて歓迎の挨拶と行こうかネギ先生。そして先程の問いの答えだが、簡単な事だ。この世には、いい魔法使いと悪い魔法使いが居るってことだよ」

そう言つてエヴァンジェリンはネギに向け魔法薬を投げ、呪文を放つた。再び蒼白い輝きが服から漏れるが、またしても気付かない。

フリーゲランス・エクサルマティオー
「氷結 武装解除」

「うわっ」

放たれた魔法を、手を前にかざしてネギは防ぐ。しかし防ぎきれなかったのか、自分の上着の半分とのかの制服の全てが凍りつき、甲高い音を立てて砕け散った。

「抵抗したか、やはりな……しかし、威力が上がっている気がするな」

威力に疑問を感じたのか、そう呟くエヴァンジェリン。しかしその呟きは誰にも聞こえる事はなかった。

「宮崎さん、だいじょうわっ!？」

気絶しているのどかの安全を確認するためネギは抱きかかえている彼女を見るが、その姿に赤面し驚きの声を漏らす。先程の武装解除の魔法で彼女の服は上着も下着も合わせて、全てが凍りつき砕け散った。

つまり何が言いたいかというと……今の彼女は全裸である。その肢体の全てを、余すことなくネギに晒している。

春とはいえ夜は寒い時もある。これでは風邪をひいてしまうだろう。

「あっつ、え、わ…あわわっ……」

予想外のことに慌てるネギ。仮にも紳士を名乗っているのだから、自分の服を掛けて彼女の体を隠すぐらいしろと言いたくなる光景だ。尤も、ネギの上着も半分以上砕けているので効果があるかどうかは分からないが。

「何や今の音っ!？」

「ネギ、何がってアంత、それ……!？」

「あっつ!？ あの、これはその……」

先程の音が気になったのか、アスナと木乃香がネギの後方から走ってき、その光景を目の当たりにする。一糸纏うことなく横たわるク

ラスメイトの少女と、それを抱きかかえる担任教師。教師が10歳の少年という事を加えて見ても、あからさまに犯罪の匂いがする。間違いなく警察沙汰になるだろう。まあ、教師が10歳という時点でまずおかしいのだが。

「ね、ネギ君が吸血鬼やつたんか〜!？」

「っていうか、何してんのよアンタはー!!!」

「ち、違います! 誤解です〜!!!」

先程までのシリアスな空気が微塵に砕けて消え去った。別の方向でシリアスな問題になりそうだが。

「フフツ……………」

「ま、待てっ!」

その混乱に乗じて、エヴァンジェリンは去って行った。しかし正義感の強いネギはそれを許さない。去って行った人影にアスナが気付く。

「今の…………?」

「アスナさん、木乃香さん! 宮崎さんを頼みます! 僕はこれから犯人を追いますので先に帰っててください! それじゃ」

「え、ネギく…………つて早っ!??」

「ちよ、ネギー!??」

のどかを二人に預けると、ネギは凄まじいスピードでエヴァンジェリンを追って行った。その速度は、間違っても10歳の少年が生身で出す様なものではない。

「世のため人のために働くのが魔法使いの仕事なのに…………いい魔法

使いと悪い魔法使いが居るなんて、そんなのウソだ」

追いながらネギは呟く。魔法使いは正しくあるべきと思っているの
だろう。その正しくがどのような物かは本人以外分らないが。
暫く走っていると、前方にエヴァンジェリンの姿が見えた。

「いたっ！ 待ちなさい！！」

走りながらエヴァンジェリンに止まるように声を掛ける。エヴァン
ジェリンは肩越しに後ろを見、追い付かれた事を知った。

「速い。そう言えばーやは風の属性を得意としていたな」

そう言つてエヴァンジェリンは橋の策を蹴り空中に飛び出す。普通
なら落下するが、彼女はマントを広げ空を飛ぶ。

「杖も箒もなしに空を！？」

ネギはそれに驚くが、自分も杖に跨り空を飛ぶ。

「待ちなさい！ どうしてこんなことするんですか！？ 先生と
しても許しませんよ！！」

「ククツ、奴の事が知りたいんだらう？ 私を捕まえたら奴の話し
を教えてやるよ」

「……本当ですね？」

そう問うネギに、口の端を釣り上げることで答えるエヴァンジェリ
ン。それを見ると同時にネギは行動に移った。

「ラス・テル マ・スキル マギステル、エウオカーティオ・ウアルキョニヤホル本ーリア・グニディ風精召喚！ 剣を執る戦
アリア

友!！」

詠唱し、風の精霊を使って自分の分身を8体作りあげる。

「分身? いや、サモン・エレメント精霊召喚か」

アケ・カピアント
「捕まえて!！」

ネギの号令と共に飛び出す精霊達。それぞれ武器を構え、エヴァンジェリンに襲いかかる。しかしエヴァンジェリンが投げた魔法薬で半数が撃墜された。

しかしネギは先程から抱いていた疑問を考え、確信する。

(やっぱり、この人は何故か魔力が全然弱い。勝てる!)

しっかりとエヴァンジェリンを見据えながら自分も飛ぶ。最後の1体が撃墜されたがその瞬間に魔法を放つ。

「これで終わりです! フランス・エクサルマティオー風花 武装解除!」

「っ! チイツ!」

エヴァンジェリンは舌打ちするもそれを防ぐことができず、衣服を剥かれ下着姿になる。纏っていたマントは蝙蝠に変化した。飛行用のマントを失い落下するが、屋根の上に危なげなく着地する。胸元に蒼白い結晶を飾られた雪のペンダントが揺れる。

「やるじゃないか、先生」

「これで僕の勝ちですね。約束通り、話してもらいますよ。何でこんなことをしたのかも、父さんの事も」

「お前の父、すなわちサウザンドマスターの事が…フフ……」

エヴァンジェリンがそう言うと同時にネギは顔を強張らせる。何故その事を知っているのかといった顔だ。

「と、とにかく！ 魔力もマントも、触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！」

「これで勝ったつもりなのか？」

ネギの言葉に、エヴァンジェリンは呆れた様子で話しかける。直後、その後ろの屋根から誰かが降りてきた。新たな人物の登場にネギは警戒する。

エヴァンジェリンが告げる。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

そう言われ、ネギは詠唱を始める。そして、いざ放とうとしたところでデコピンをされて発動を妨害された。額をさすりながらデコピンした人物を見ると、自分の生徒の一人がそこに居た。

「アタタ……え！？ 君はうちのクラスの」

「紹介しよう。私のパートナー、出席番号10番、ミニステル“魔法使いの従者”マキ絡繰茶々丸だ」

「なっ…ええ〜！？ 茶々丸さんが、あなたのパートナー！？」

紹介された茶々丸はお辞儀をするが、その紹介にネギは驚いていた。自分のクラスに魔法使いが居たこともそうだが、何より二人が主従だと言う事に驚いていた。

「そうだ。パートナーの居ない貴様では、私には勝てんぞ」

「なっ…パートナーくらい居なくなっただって！」

そう言つてネギは再び詠唱を始める。しかしそれは茶々丸に妨害され、発動できない。それを見ながらエヴァンジェリンが言う。

「今や恋人探しの口実となつているが、元々「魔法使いの従者」とは戦いのための道具、私達魔法使いの詠唱時間を稼ぐための剣であり盾だ。分かりやすく言えば護衛だな。つまり、パートナーの居ないお前では私達に勝つ見込みは万に一つもないという事さ」
「そ、そんな!？」

その言葉にネギの顔は蒼褪める。当然だろう、詠唱できなければ魔法使いなど唯の人なのだから。詠唱補助の魔法具等もあるが、ネギはそれを持っていない。完全に手詰まりである。

「茶々丸」

「申し訳ありませんネギ先生。マスターの命令ですので」

「え、あぐっ!」

エヴァンジェリンがそう言つと、茶々丸はネギを捕まえ持ちあげる。ネギは暴れるが、拘束から逃れる事が出来ない。

「情けないものだ。サウザンドマスターなら、この程度笑つて切り抜けたものだが」

「ど、どうして父さんの事を知つて……」

「15年前少しあつてな、その際に奴に呪いをかけられた。おかげでそれから15年、魔力も封じられずつと学生生活だよ」

まあ、今はその呪いも解けているがな。誰にも聞こえないようにエヴァンジェリンは小声でそう呟く。しかしネギは聞こえなかったのか、驚いた表情を見せた。

「そんな…父さんがそんなこと」

英雄と呼ばれた父がそのような事をしているのに驚いたのだろう。その様子を呆れた感じで見ながらエヴァンジェリンは考える。

(さて、どうするか…呪いは既に解けているから血はいらんし、かと言ってこのまま帰るとジジイに疑問に思われるかもしれん)

暴れるネギを見ながら考える。学園長の狙いはネギを強くすることで、これは間違いではないだろう。だが恐怖を知りもせずになんか強くなることはあり得ない。恐怖を知らずに強い奴が居るとすれば、そいつは単に壊れているか命知らずな馬鹿なだけだろう。なら、それなりの恐怖を植え付けてそれを乗り越えさせればいい。

(必要ないが、血を吸うか。少しでも吸えば恐怖を覚えるだろう)

血を吸う程度の恐怖に負けるなら、所詮はそこまでの人間だったという事だ。

そう考え、エヴァンジェリンは鋭い犬歯を剥き出しネギに噛みつくうとする。少しずつ近づくと距離に、ネギの顔が恐怖に歪みより強く暴れ出す。しかし茶々丸に抑えられているためにその抵抗は意味を為さない。

そして、あと1cmでネギの首に歯が触れると言った時だった。

「コラ ツー!! この変質者共 !!」
「ん？」

声のした方を振り向く。するとそこには、高速で接近する誰かの足の裏が

「うちの居候に何してんのよ　　っ！！」

「あ」

「はぶうッ！」

強烈なとび蹴りでエヴァンジェリンと茶々丸は屋根の端まで飛ばされる。しかしすぐに起きあがり、自分達に攻撃してきた人間を見る。そして驚愕。

「なっ、貴様。緋乃宮アスナ！？」

「ってあれ、エヴァちゃん！？　何、どういう事！？」

互いに驚き、どういう事が確認しようとする。しかし丁度いいとばかりにエヴァンジェリン達は撤退し始める。

「今日はこれぐらいにしておこう。せいぜい頑張るんだなぼーや」

「それではアスナさん、また明日」

「あ、ちよっと！　待ちなさいよー！」

アスナは止めるが、二人は屋根から飛び降りた。

「ここ8階なんだけど、大丈夫なのかしら…？」

エヴァンジェリンの事を知るアスナが呟く。しかしネギの方を見ると、泣きはじめるネギをあやし始めた。

28話・淫猥来襲（前書き）

今回名前しか出てこない昂。

このまま行ったら主人公なのに忘れ去られる可能性も？

とりあえず、読んでもらえたら幸いです。

28話：淫猥来襲

「いい加減起きなさいよネギ！ もう8時よ!? アンター一応先生
なんだから、遅刻したら駄目でしょ!」

女子寮の一室で、アスナの声が響く。

桜通りの吸血鬼事件の翌日、ネギはアスナと木乃香の部屋で糞虫の
様に布団に包まっていた。

「……………何か、風邪引いたみたいで……………ゴホッ、ゴホ……………」

「ネギ君、だいじょぶ?」

布団に包まり、咳をするネギ。それを木乃香が心配し声を掛ける。

「アンタね……………演技が下手!」

「あうっ!?!」

しかしそれを演技と見たアスナが問答無用で布団を引き剥がす。

「昨日怖い目にあっただのは分かるけどね、仮にも教師がそんな理由
で仕事を休んじゃダメでしょうが! さっさと着替えて準備しなさい!
!」

「あうっ! やめてください離してください!」

「じゃあさっさと着替えなさい!」

そう言われ、のろのろとした動きで起きて着替え始めるネギ。しか
しあまりに遅かったためにアスナに寝衣を剥ぎ取られる。結果とし
て7分ほどで着替えは終わり、アスナはネギを抱えて学校に向かう。
逃がさないためだ。

「お、降りしてください〜！ エヴァンジェリンさん達が居たらどうするんですか〜!!」

「真昼間から学校で襲ってくるわけないでしょ。それに、多分だけどまた居ないだろうし」

「そ、それでも降りして〜!!」

「却下！ 降りしたらアンタ逃げるでしょうが！」

ネギの頼みを即答で却下するアスナ。周りから生温かい目で見られるが、気にしないようにしているようだ。

クラスメイト達が挨拶してくるが、運ばれているネギについては何も言っていない。何かの遊びとと思っているようだ。

そして教室に着く。

「ま、まだ心の準備が……!!」

「できるのを待ってたらいつまで経っても入らないでしょうが！諦めて入りなさい！」

そう言つてアスナはネギを教室に引つ張り込む。入ると生徒達が挨拶してきた。

「あ、ネギ君、アスナー。おはよ」

「おはよーって、どうしたのネギ君？」

佐々木まき絵と明石裕奈がネギの様子を疑問に思ったのか聞いて来る。

「昨日ちよつとね。それよりも、まきちゃんもつ平気なの？」

「すっかりね」

「何も覚えてないらしい」

アスナの問いにそう答え、額に手を当てて熱を計っていた大河内アキラがその補足をする。

アスナ達がそんなやり取りをしてる間、ネギは怯えた様子で教室内を見回していた。先程まで逃げようともがいていたが、アスナに手を掴まれたままなので諦めたようだ。少しでも手を緩めればその瞬間に逃げ出しそうだが。

「あ、エヴァンジェリンさん居ない……」

主の居ない席を見て安堵の溜息を吐く。余程に会う事が怖かったらしい。

しかし、話しかける者が居た。

「マスターは学校には来ています。すなわち、サボタージュです」「うわあっ!?!? ち、茶々丸さん!?!?」

気配もなく話しかけられ、ネギはとても驚いたようだ。しかし茶々丸は気にせずにネギに聞く。

「お呼びしますか?」

「いえ、とんでもないです! いいです!」

必死に呼ばなくてもいいと言うネギ。かなりの恐怖を刻まれたようだ。

「そうですね、それでは」

そう言ってネギから離れ、自分の席に着く茶々丸。それを見て、ネギは再び溜息を吐く。

アスナがそれを見て呆れたように言う。

「アンタね、警戒しすぎ」

「で、でも……」

「でもストもないわよ。今だけでも気持ち切り替えて、授業の準備しなさい。今のあなたの状態じゃ、授業にならないわよ」

そう言うアスナは自分の席に向かう。ネギはそれを黙って見ていた。

~~~~~

授業中、ネギはボーっとしていた。生徒が教科書の文を読んでいるが、それを聞いて居ながら教卓に体を預けているあたり、集中していないことが窺える。

（やっぱり魔法使いにパートナーは必要なんだ……でも、そんな簡単に見つかる訳ないし……）

「ふう……」

溜息を吐きつつ、熱にうかされた様なポーツとした眼差しでネギはクラスの生徒達を見つめる。

それに気付いた生徒達が、微笑みを浮かべながら見つめ返す。

（この人達の中に、僕の運命的なパートナーが居たらなあ……）

生徒達を見ながらネギはそんなことを考えていた。

「あの、センサー。読み終わりましたけど……」

「えっ？ あ、はい。ご苦労様です和泉さん」



文を読み終えても何ら反応の無かったネギに和泉亜子が言う。ネギはそれに返事をするが、心配になったのか、それとも単純に疑問に思ったのか、亜子は聞く。

「どうしたんですか？ さっきからボーっとして…」

「いえ、別に何でも……」

ネギはそう言うが、何を思ったか、自分が悩んでいることに繋がる事を言う。

「あの、つかぬ事をお伺いしますが……」

「はい？」

「和泉さんは、その…10歳の年下の男の子がパートナーって、嫌いですよね？」

「なっ!?!」

「え!?!」

ネギの言葉に亜子は驚き、聞かれなかったあやかも反応する。

「せ、センセそんな、ややわ急に。ウチ困ります、まだ中3になっただばっかやし。で、でもその、今は特にえと、その…そう言う特定の男子は居ないって言うか、その…フラれましたし……」

予想外の問いに混乱しているのだろう、頻繁にどもりながら亜子はネギに言う。最後の言葉の辺りで雰囲気は暗くなった気がした。

「そうですか……宮崎さんはどうですか？」

「へうっ!?!? え、あのー、そのー……わ、私はーそのー……あのー……あっっっ……」

亜子の言葉に気の抜けた様な返事を返しながら、ネギは今度はのどかに聞く。亜子よりももりながら、顔をかなり朱に染めて答えようとす。まるで林檎のように顔が赤くなっている。

(のどか、チャンス！ チャンスよー！)

(言うです！ 「私はOKです」と！)

何やら念の様な物が2つ程のどかに向けられた気がしたが、気のせいだろう。生徒達の視線がのどかに集中する。

「わ、わわ…私はあの、オオ…オケツ」

「ハイネギ先生！ 私は超！ OKですわ！！」

しかしのどかが勇気を振り絞って口に出そうとした瞬間、あやかが目を輝かせながら声を大にしてそう言った。  
心なしか、その勢いに若干ネギが引いているように見える。

「ネギセンセ！ 私と……！！」

「ハイハイ、ちよつとゴメンね。いいんちよ」

「ちよ、朝倉さん！？」

あやかが凄い勢いで立候補するが、それを朝倉和美が抑えた。

「ネギ先生、ここで耳より情報ね。例外もあるけどウチのクラスは特に能天気なのばつだからね、大体5分の4くらいの奴らは彼氏居ないと思うよ。私の調べだよ」

「そ、そうなんですか……」

「そ。だから、恋人が欲しいんなら20人以上の優しいお姉さん達からよりどりみどりだね」

「えう！？ いえあの、別にそういつつもりでは…」

朝倉の言葉に、ネギは顔を赤く染めて恋人探しという点を否定する。しかし、慌てながら言っているために説得力はゼロだ。それと同時にチャイムが鳴り、授業の終了を告げた。

「あはは、すみません。授業と関係ない質問しちゃって……何でもないので忘れてください。それじゃ、今日はこの辺で……」

そう言って教室を出ようとするネギだが、ふらふらと歩いて扉にぶつかってしまふ。それに言い訳しながらとてつもなく暗い雰囲気を出しながら彼は出ていった。

「朝倉、からかうんじゃないわよ」

「いや、慌てるのが面白くてさ。それよりどうしたのさ、ネギ君。随分暗かったけど」

注意するアスナにそう返す朝倉。クラスの皆がそれに同意し、疑問の声を上げる。

「ホント、どうしたんだろ？」

「あんな元気ないネギ君、初めて見るしねー」

「アスナさん、あなたネギ先生と同室でしょう？ 何かご存知じゃなくて？」

あやかがアスナに聞く。

「あー、昨日何かあったみたいなんだけどね、私も何があったかは知らないわ」

そう言つてアスナは質問を回避する。実際には大体の事を知っているのだが、裏に関わる事のために教える事をやめたのだ。

「本当ですか？」

「ホントだつて。同じ部屋だからって何でも話し合う程仲がいい訳じゃないし」

あやかの言葉にアスナはそう返してその話題を終わらせた。

燦々と輝く太陽の光を、雲が遮り影を作る穏やかな昼下がり。

女子中等部の校舎屋上の一角で、少女が一人微睡んでいた。エヴァンジェリンだ。

真祖の吸血鬼である彼女は日光に当たつても平気だが、それでも直接当たるのは嫌なのだろう。日陰のある場所で壁に背を預けてうとうととしていた。

風が優しく吹き、彼女の月光のような印象を持たせる金の髪を撫で、揺らす。その風に乗って桜の花弁がどこから飛んできて、その髪を飾る。

「ん……」

閉じていた瞼が開かれ、サファイアの様な蒼い瞳が露わになる。まだ若干眠たそうな目をしているが、何かを感知したのか虚空を見つめる。

「結界を越えて学園都市に入った者が居るが……何だ？ やけに小さい感じがするが……」

呪いが解けても、何故か残された学園結界とのリンクで都市への侵入者を察知するエヴァ。彼女は非常に面倒くさそうに溜息を吐きながら立ち上がる。

「面倒だが調べるか……まったく、呪いが解けた事を気付かれ難くするためとはいえ何で私が……」

ぶつぶつと文句を言いながら屋上の扉を開けて校舎内に入り、一階から外を目指す。

( ついでだから早退するか。そのついでにまた昴の喫茶店に行つて…… )

また茶でも飲むか。

そう思いながらエヴァは学校の外を目指し歩き出した。

564

「心配しすぎだって、エヴァちゃんもいきなり取って食う事はしない筈よ」

「そんなこと言われてもー」

夕方、学生寮の自室に向かいながらアスナはネギにそう言った。しかしネギは目の幅の涙を流しながらそう返す。

「アスナさんはあの人たちの恐ろしさがわかってないですよー」

「実際に襲われた訳じゃないからそりゃ分からないわよ。それよりも、みんな心配してたわよ？」

「え……?」

「いつもと比べて明らかに暗かったからね、アンタ。アレで気付く

なつて言う方が無理よ」

足を止めるネギと、そう言いながらも歩みを止めず、自分の部屋に向かうアスナ。二人とも後ろで様子を窺う2つの影に気付いていないようだ。

「怖がるなつて言うのは無理だろうけどさ、せめて学校にその雰囲気を持ってこない方がいいわよ？ 何が原因でアンタの秘密が皆にばれるか分かったもんじゃないんだから」

「アスナさん……」

そうアスナに言われ、追い付こうと歩き出すネギだが途端、目の前が真っ暗になった。

「!?!」

思わず暴れるネギ。しかしがっちりと捕まえられ、拘束を振り払う事が出来ない。

彼はそのまま、どこかに連れ去られていった。

「だから、バレない様にそう言った話は……って、あれ？ ネギ？」

急に姿を消したネギを、アスナはキョロキョロと周りを見回して探した。

~~~~~

「わああ~~~~!?!」

そう叫びながら、ネギは水に放り込まれた。

「ぶはつ。何!?!」

頭を振って水気を飛ばし、目を開けて周りを見るネギ。辺りに漂う湯気からここがどこかをすぐに知った。

「ここは…お風呂?」

「ネギ先生、ようこそー」

背後から掛けられた声に振り向くネギ。そこには、水着を来た3 Aの皆が居た。

「わああっ!?!? こ、これは一体何ですか!?!」

「エへへ、ネギ君元気ないみたいだったからね。こうして皆でネギ君を元気づける会を開いてみたよー」

「え…?」

驚いたネギに、椎名桜子が答えた。周りを見ると、皆笑顔だ。恥ずかしがっている者も居るが。

「みなさん、こんな僕のために……」

感動して涙を浮かべるネギ。そこに甘酒を持ってあやかが近づいてくる。

「愛するネギ先生のためとあれば、このくらいは当然ですね。ささ、甘酒など……」

「いいんちよさん……」

感動で見つめるネギに甘酒を進める委員長ことあやか。彼女の心は

今、かなり幸せだろう。
しかし、彼女はそれを自分から破壊した。

「ふふ……ところでネギ先生、パートナーの件ですが」
「はい？」

「頭脳明晰・容姿端麗・財力豊富な私などが適任かと」
「え……？」

自分からパートナーに相応しいと売り込んでいくあやか。しかしそんな事を目の前で言われ、さらに一時発生した「ネギ王子説」の事もあり、クラスの他のメンバーが黙っているなど当然ないわけ。

「あーっ！ いいんちょ抜け駆けするいー！！」
「へぶっ！」

見た目小学生なクラスの双子の片割れであり、姉の方でもある鳴滝風香に蹴り飛ばされるあやか。それが契機となり、皆がネギに殺到した。

「ネギ君、頭洗ってあげるねー」
「私背中洗ったげるー」
「じゃ、私は前を……」
「え、ちょ……な、なんですか！？」

あまりの迫力で迫ってくるクラスの皆に若干怯え、後ずさるネギ。しかし、周りを囲まれている状況で逃げ道など当然なく……

「それー、やつちやえー」
「わ、あわああ　っ！！！」

あつさりと捕まりもみくちやにされるネギ。体を触る女子全員が皆かなりの美少女なので、もしここに一人でも男が居れば血の涙を流しながら呪詛の言葉を吐いたことだろう。弄られているネギ本人からしたら堪ったものではないだろうが。

「そつち捕まえてー」

「わ、わわあ」

「優しくしたるから、動いたらアカンでー」

「やつ、やめ…やめー！！」

必死でもかくも全方向から取り押さえられているので動くことすらままならないネギ。洗っている女子達は絶対に楽しんでやっているのだろう。声がとても楽しそうに弾んでいる。

それを見ながら刹那は一人、頬を引き攣らせながら呟いた。

「えっと、これって大丈夫なんでしょうか？」

「いや、流石にヤバいだろ。なんかもう、元気づける会っつーより完全に逆セクハラだし…」

「あ、あわわ……あわわわ……」

その言葉に眼鏡を掛けた少女　長谷川千雨が、顔を赤くしつつそう返す。刹那と同じようにその頬は引き攣っていた。

宮崎のどかは顔を真っ赤にしながら、綾瀬夕映は呆れた感じでネギが洗われる様子を見ていた。

「ネギー、何処居るのー？　居たら返事しなさい」

アスナは走っていた。突然姿を消したネギを探すために、寮のあち

らこちらを探し回っていた。

「ネギー！　　ったくもう、どこ行ったのかしら……」

そう言いながら建物の角を曲がる。するとそこで、エヴァンジェリオンと茶々丸に出会った。

「ん？　　緋乃宮アスナか。どうした？　　そんなに急いだ風で」

「あ、エヴァちゃんに茶々丸さん。丁度よかった、ネギ知らない？　　さっきまで一緒に居ただけ、気付いたら居なくなってたのよ」

そうアスナは聞くが、帰ってきた返事は芳しくないものだった。

「エヴァちゃんはやめると何度も言っているだろう。知らんぞ？

私達は先程まで昴の所で茶を飲んでいたからな」

「あ、やっぱり……じゃなくて、そっか。ったく、どこ行ったんだか」

「それだけか？　　ならもう行くぞ」

そう言って帰ろうとするエヴァンジェリン達。だが、アスナはそれを引き止めた。

「あ、ちよつと待って。1つ聞きたいんだけど」

「何だ？　　下らん要件なら聞かんぞ」

「ネギだけど、何で襲ったの？　　もう呪いも解けてるんだし、血縁の血を狙う必要はないと思うんだけど」

率直に聞くアスナ。呪いが解けている事を知るが故に気になったのだろう。それにエヴァはこう返した。

「ああ、それか。なんてことはない、ジジイの思惑だよ」

「へ？ ジジイって、もしかしなくても学園長？」

「他に誰が居る。私の呪いが解けているのを知るのはお前と昴の2人だけだからな。サウザンドマスターの血縁であるぼーやの血を使えば解呪できるかもしれないと言っただけだよ。大方、弱体化している私をぼーやに倒させることで、「立派な魔法使い」候補として自信と力をつけさせるつもりだったんだろうさ」

「それで、さらに英雄の名前と血に箔が付いて、それを育てた学園の魔法関係者も評価されるってわけね。スバルはどう言っただの？」

顔を若干曇めつつアスナは問う。

「あいつは基本、傍観者の立ち位置でいる気らしい。関係者がそれとなく補助を頼んで来ても断ると言っていたよ。「この問題は彼と貴女の問題でしょう？ ならば、それに手出し口出しをするのはいらぬお節介という物でしょう」と言っただけ」

「あはは、スバルらしいわね。でも、本人が来たらアドバイスぐらいはするかもね」

「アドバイスした所で、今のぼーやの様子ではどうにかなると思えんがな」

そう言っただけでエヴァンジェリンと茶々丸は去って行った。アスナは手を振りつつそれを見送る。

二人の後ろ姿が見えなくなったところで、彼女は再びネギ探しに戻ろうとした。しかし、足を踏み出そうとしたその時、どこからか悲鳴が聞こえた。

「悲鳴？ にしては何か妙な感じのする悲鳴だったわね」

ネギ探しを一時中断し、アスナは悲鳴が聞こえた方向に走りはじめ

る。向かっている時にどこからその悲鳴が聞こえてきたのかを理解した。浴場からだ。

「またウチのクラスが騒いでるのかしら？　いくら広いって言うてももうちよつと落ち着いて入りなさいよね」

まあ、無理だろうけどさ。

そう思いながらアスナは浴場に向かった。

「ね、ネズミが出たー！？」

「いや違う、イタチだよ！」

「どっちだって同じようなもんでしょー！？」

浴場は現在、中に居る生徒が大騒ぎしていた。ネギを弄りまわしていたところ、何とネズミ若しくはイタチが現れたらしい。しかも着ている水着を脱がす様で、ほとんどの生徒が逃げている。

「イタチって水着を脱がす動物なのー！？」

「そんな訳ないでしょうってコツチ来たー！」

「エロネズミー！」

その様子を片手で目を隠しながら顔を赤面させ、ネギは見ていた。そして彼は考える。

これは一体どういう事かと。

浴場に居た生徒の過半数が脱がされた時、アスナが来た。

「アンタ達、お風呂は騒ぐ場所じゃないってネギ！？　アンタ何でここに…ってどうしたのよ！？」

「あ、アスナさん!？」

アスナとネギがそんなやり取りをしていると、新たに現れた生徒に狙いを変えたのか、イタチはアスナに向かって行く。

「何!？」

「アスナさん、気をつけてください! そのイタチ、服を脱がします!!！」

「ハアツ!？」

自分に向かってきた何かを疑問に思ったアスナに、刹那がそう警告する。そして、アスナとイタチの距離が2mから3mになった時、イタチはアスナに飛びかかった。

このままでは、アスナも脱がされるだろう。その場に居た全員がそう思った。しかし、アスナは飛びかかってきたそれを、加速をつけた足で思い切り蹴り飛ばした。

「フンツ!!！」

「ベロツ!？」

ゴツという風切り音と共に吹き飛んでいくイタチという名のボール。しかしイタチもどのような根性か、自分を蹴り飛ばした足から履いていた靴下を脱がしていった。そして、ベシヤリと壁に叩きつけられ落下するが受け身を取ってどこかに逃げていった。

「な、何だったのよ今は……」

「アスナさん、御見事でした」

脱がされた靴下を回収しながら言うアスナに、刹那が賛辞の言葉を掛ける。他の皆もアスナに対し、拍手を送っている。

そのクラスメイト達をアスナは見、そして怒鳴る。

「アンタ達も素っ裸で何やってんのよ！ ネギまで連れ込んでー！
！」

「あ、アスナさん、これは誤解で……」

「元気づける会やってたんだよー」

大騒ぎになったが、皆が落ち着いたのでその場は治まった。

~~~~~

「ハア……またドタバタした1日だったわね、今日も」

心休まる日がないわ。

アスナがそう愚痴をこぼす。

「でも、皆さんのおかげで少し元気が出ましたよ」

「アンタはね。私は疲れたわ……」

ハア……と溜息を吐きながらアスナが言う。溜息を吐くと幸せが逃げると言うが、ネギが来てからアスナが吐いた溜息はどれ程だろうか？ かなり疲れている印象を抱かせる。

そんな事を話している時だった。

景気悪そうな顔してどうしたよ大将？ 俺っちの助けが必要かい？

そんな声がネギに聞こえた。アスナには聞こえていないようだから、おそらく念話の類だろう。声の主を探してネギが呼ぶ。

「だ、誰ですか!？」

「下だよ、下」

「下?」

そう言われ、ネギは自分の足元を見る。そこには、多少汚れているが白い毛並みのイタチが居た。痛みを堪えるように僅かに震えているが。

「あ」

「久しぶりさ      アニキ。俺っちだ、アルベール・カモミールだよ」

そのイタチはそう名乗った。

「あーっ! カモ君!」

「恩を返しに来たぜ、アニキ」

「ちょっと、それさっきの変態イタチじゃない!」

アスナが叫ぶ。

それにイタチはこう返した。

「姉さん、いい蹴りっぷりだったぜ、おかげで体中が痛えの何の……」

また一步、日常から遠ざかった。アスナはそう思った。

29話：仮契約・・・未遂（前書き）

無理矢理感がありますが、読んでもらえたら幸いです。



29話：仮契約・・・未遂

カモは語る。自分とネギの出会いと、その後の付き合いを。ウサギなどを捕るための罠にかかってしまった自分を助け、傷を癒し逃がしてくれたその優しさを。

「　　と言うのが俺っちとアニキの出会いなんですさー。その後も色々アニキにはお世話に……」

「懐かしいねー。カモ君大きくなったね」

「っていつか、オコジヨなのに漢ってなによ……」

ひどく疲れた様子で、深い溜息を吐きながらアスナは言う。おそろく彼女は、今まで築き上げてきた一般人としての日常が、まるでロンドン橋の如くガラガラと音を立てながら崩れていくのを感じているのだろう。

(今なら千雨ちゃんとしても仲良くなれる気がするわ……)

学園の認識障害結界が効かない一人のクラスメイトの姿を思考に浮かべ、今度お茶でもおごろうかしら？と、そうアスナは遠くを見ながら考える。

「ところでアニキ、ちっとも進んでないみたいじゃないですか」

「え？ 進んでないって、何が？」

白オコジヨ　　カモの言葉に、心底不思議そうにネギが聞く。それを聞き、小さな手をブンブンと勢いよく振りながら強い口調でカモは言う。

「何って、パートナー選びっすよ。パートナー選び！ 良いパートナー探さないと、立派な魔法使いになるにも格好がつかないんでしょー！？」

「うっ…そ、それは……」

そう言われて呻くネギ。

「じ、実は…これから探そうと思ってたんだけど、これがなかなか……」

「そうすか。でも俺っちが来たからにはもう大丈夫です。アニキの姉さんに頼まれて助っ人に来たんすよ、俺っちは」

タバコを吸いながらカモは言う。即座に「禁煙よ」とアスナに奪い取られ消火されたが、その言葉を聞きネギは喜びの声を上げる。

「本当！？」

「さっきこの風呂場で調べてきたんすけど、これがいい素材だから……」

ネギにそう言うカモ。何故か、ひどく犯罪的な匂いがするのは気のせいだろうか？ 見れば、アスナは眉を寄せて眉間に皺を作っている。

「……何でそんな事わかんのか？ て言うか、やっぱりさっきのはアンタだったのね。この淫獣」

「お、俺っちにはそう言う能力があるんすよ。ですから蹴るのはご勘弁を……って言うか、淫獣ってなんすか！？」

「女の子の服脱がすような獣を他にどう言えってのよ淫獣」

睨みつけながら言うアスナに、カモは若干震えながらそう答える。

アスナの視線は既に絶対零度と言ってもいいほど冷たいものになっている。

そこでカモが何かに気付く。

「ん？ 姉さん、もしかして誰かと契約してるっすか？」

「え？」

「っ！？」

予想外の問いに、アスナは思わず息を呑む。しかしすぐに落ち着き、言葉を返す。

「してないわよ？」

「そうなんすか？ 確かに姉さんから契約の力を感じたんすけど……」

「だから、知らないって言ってるでしょ！ って言うか、何でそんなの感じるのよ！」

そう言うカモに、アスナは強い口調で否定を返し黙らせる。

すると、声に反応してか木乃香が出てきた。二度風呂に入っていたのか、湯気を立てる体をタオルを巻いて隠している。

「どうしたんアスナ？ なんや騒がしいけど、誰か来とるんかー？」

「わー！？」

体にタオルを巻いただけの恰好で出てきた木乃香にネギは目を見開いて驚いた。

「木乃香、別に誰も居ないわよ」

「そうなん？ やけにおつきい声出しとったから、誰か来とるんかと思ったんやけど……ん？」

そう言うとカモに気付いたのか、机の上を見る。カモはすぐに抱き上げられた。

「なんやこれ〜、可愛え〜！ このオコジヨ、ネギ君のペットなん〜？」

「え？ あ、その…」

ネギは何かを言おうとするが、その前に木乃香は部屋の外に連れ出そうとした。タオル姿のまま。

「ちよつ、待ちなさい木乃香！ その格好で部屋の外に出るんじゃないわよ！」

「あ、それもそうやね。ちよつとまっとなつて〜」

そう言つて服を取り出し着変える木乃香。それから目を逸らしながら、ネギは小声でカモに喋らないよう注意する。

少しして木乃香が着替え終わり、カモは再び抱き上げられ部屋の外に連れ出された。

「皆これ見てや〜」

「何これ？ フェレット？」

「さっきのはコイツやったんか〜」

木乃香の声にすぐさま集まる3 Aのクラスメイト達。

「ネギ君のペットやて」

「触らして〜」

「や〜ん、カワイ〜」

キヤイキヤイとはしゃぐ少女達。その様子を見ながらネギが聞く。

「あの、僕、これ飼ってもいいんですか？」

「いーんじゃない？ この寮ペットOKだったはずだし」

「ウチ許可取って来たげるな」

そう言つて木乃香は寮の管理人の所に走つて行く。それを見てネギは喜びの声を上げる。

「や、やった！ ありがとうございます！」

「ちよつと！ 私は反対よ！ 抜け毛とか掃除が大変なんだから」

「まーまー、いいじゃんアスナ。可愛いんだしさ」

アスナは反対するが、全面的にネギが世話をすることと、躰をしつかりすることで飼うことになった。最後までアスナは飼うことに難色を示していたが。

「これでパートナー探しも楽になるかも。お姉ちゃんにお礼メール書かなきゃ」

「!？」

そう言つたネギに、カモは反応する。そして、捲し立てるように早口でネギに言つた。

「あ、アニキ！ いいです、そんなの別に書かんでも!!」

「え？ なんでさ？」

とても不思議そうにネギが問い返す。アスナも、不機嫌そうな顔のままにカモを見る。

カモは口ごもりながらも言う。

「え、えーと……じ、実は今居た娘達の中に居たんすよ。これは！と言っパートナー候補が」

「うそっ！？」

カモの言葉にネギは驚く。その様子を見ながらカモは続ける。

「この人ツス！俺っちのセンサーももうビンビンッスー！！」

「センサーって何よ。って言うか、いちいち言葉がスケベなのよ、この淫獣」

そう言っ自分の尾の毛を逆立たせながら名簿の少女を示す。アスナが突っ込むがそれは無視された。示された少女は 宮崎のどか。

「本屋ちゃんじゃない」

「なんスか、「すぐくカワイイ」とか書いて。アニキもまんざらでもないんじゃない？」

「ちがつ！そ、そんな事ないよ！」

ニヤけながら言うカモに必死で反論するネギ。顔を赤くしながら否定しているので、むしろ肯定しているようにも見える。

「と、とにかく暫く考えさせてーっ！！」

「あ、逃げた」

「アニキ、お早めにー」

ネギは逃げ出した。

（なんて言うか、呑気なもんね。エヴァちゃんも殺すつもりじゃないって言うても、狙われてるって言うのに）

呆れながらアスナはネギが閉め忘れていったドアを閉める。そして、郵便受けを見る。手紙が一通入っていた。

「手紙？ 誰からかしら」

そう言いながら手紙を取り出し、差出人と宛先を見る。英語で書いてあるが、読めない事はない。

「イギリスからネギにエアメール？ 差出人は……ネギのお姉さん？」

「！？」

「ん？」

アスナの言葉に過剰に反応するカモ。疑問に思ったアスナは問いかける。

「どうしたのよ、そんな反応して」

「え？ いや、その…あ、姐さん！」

「誰が姐さんよ、誰が。何よ」

「その手紙、俺っちが届けておきますよ！ 今すぐにでも！」

やや焦った様子でそう言うカモ。アスナは怪しみ、返す。

「別に届けに行かなくても、ここで待ってればそのうち戻ってくるでしょ。ここに居候してるんだし」

「い、いや…アニキの姉さんからの手紙なら少しでも早く渡した方がいいかと思うんで。それじゃ！」

「あ、ちよつと！？」

そう言つてカモは手紙を啜えて走つて行つた。ドアが閉まっているので出る事はできないだろうと思われたが、間がいいのか悪いのか、丁度木乃香が帰つてきた。

「ただいまー。オコジヨ飼つてもええてー、つてあれ？ ネギ君とオコジヨは？」

「お帰り。ネギは考え事したいとかで出てつたわよ。オコジヨはアソタがドア開けると同時に出てつたわ。多分ネギのそこに向かつたんだと思う」

「ネギ君どこ？ なんで？」

「手紙が来たのよ、ネギのお姉さんから。それ届けに行つたんじゃないかしら？」

「そうなん？ 頭ええんやなー」

アスナの言葉にそう返す木乃香。それを見てアスナはやや苦笑する。

「ま、明日も早いし、今日はもう寝ましょ。ネギも部屋の鍵は持つてるでしょうし」

「せやね。けどウチは戻ってくるまで起きとくよ。おやすみー」

そう言いながらアスナは眠りについた。

その意識からは、既に手紙の事は綺麗さっぱりと無くなっていた。

手紙を口に啜え、カモは寮に設置してある自動販売機の側に来ていた。

運がいいのか、生徒は皆自分達の部屋に戻っているようで誰にも見つかる事はなかった。



しかしそれでも、キヨロキヨロと辺りを見回し誰も居ないか確認する。二度二度見回すと、誰も居ないと確信したのか自販機の側に有る二つの箱の一方に近寄る。

『燃えるごみ』と書かれたその箱に近づくと、何を思ったか啞えていた手紙をクシャクシャと丸めて、あるうことかゴミ箱に投げ入れた。

「やばいな……早いとこ行動おこさなや」

全ては己の無罪放免のために。

そうして部屋に戻ろうとすると、ネギが戻ってきた。

「あれ？ カモ君どうしたの？」

「アニキの帰りを待ってたんでさあ！」

「そうなの？ ありがとう」

そう言いながら、ネギとカモは部屋に戻って行った。

翌日。宮崎のどかは大量の本を抱えながら下駄箱に向かっていた。借り出していた本を図書館島に戻すためだ。

「図書館島、いっぱい本があるのはいいんですけど、遠くて困りますー」

そう言いながら到着した昇降口で靴を履き替えるために本を置き、自分の下駄箱を開ける。

すると、開けた下駄箱から何かが落ちた。

「あれ？　なんででしょうかー？」

疑問に思い拾い上げる。

それは、自分が好意を寄せる子供先生からの手紙だった。封筒に書いてある文字はとても汚く、どうにか読める程度であったが。

手紙を拾い上げたのどかは焦った様子で周りを見回す。

そして、誰も居ない事を確認するとそつと手紙を開き、何が書かれているかを確認する。

手紙には放課後に寮の裏で待っている事と、自分のパートナーになつて欲しい事が書かれてあった。

「！　せ、先生からのラブレター……？」

これを見たのどかは、顔を赤面させた。字の汚さと筆跡から、ネギ本人が書いたものではないとすぐに分かりそうなものだが、自分が好意を持つ人間からの手紙と言う事がのどかの思考を舞いあがらせる。これが委員長だったなら、喜びのあまり狂喜乱舞しているだろう。

「ど、どうしよー」

下駄箱で、顔を赤く染めながらのどかは拳動不審に動く。

その様子を、小さな影が物陰からほくそ笑みつつ見ていた。

「はあ、今日も無事に授業をこなせたなー。エヴァンジェリンさんまた居なかったし、よかった」

カモを飼う事になった翌日、再び授業をサボったエヴァのおかげと言っては何だが、ネギは何事もなくその日の授業を終えた。

「ああでも、先生としてはサボりを認めるわけには……でも怖いし……」

襲われたことによる恐怖と教師としての義務感の間でネギは揺れる。エヴァンジェリンと会いたくはないが授業には出て欲しいと言ったところか。矛盾である。

そんな事を考えていると、自分と呼ぶ声がする。

「アニキー！」

「え？ って、カモ君！？ 何で学校に……それに駄目だよ、大声出したら。気付かれちゃうよ」

「すみませんってそれよりもアニキ！ 例の宮崎さんが……」

学校に来た事と大声で喋った事をネギに注意され、それに対し謝りながらカモは宮崎のどかに何が起こったかを言う。

「宮崎さんが不良にからあげにされてる！？」

「アニキ、かつあげっス。かつあげ」

間違った知識にカモが注意する。唐揚げにされていたら既に死んでいる。

「何でそんな事わかったの！？」

「えーと、オコジヨの能力だよ。特殊能力」

実際には自分がネギの名を騙り呼び出したのだが、ばれるとネギは

行かないだろう。そう言つて誤魔化すかも。

「と、とにかく行くよカモ君！」

「そーこなくっちゃ！」

何の躊躇もなく杖に乗り飛翔するネギとカモ。

どうでもいいが、この一人と一匹に魔法の秘匿意識は本当にあるのだろうか？ 強運というべきか、それとも凶運と言うべきか。周りには誰一人としていなかったが。

もし誰かが見上げればすぐに見つかつてしまふ様な澄みきつた青空を杖に乗りネギは飛ぶ。目指す場所は女子寮裏。

暫く飛んで、上空からネギはのどかを見つける。気付かれないように少し離れた場所に音を立てずに降り立ち、声を掛ける。

「宮崎さん！ 大丈夫ですか!？」

「あ、先生……」

頬を朱に染めながらネギの方を向くのどか。服装が制服から彼女の可愛らしさを引き立てる物に変わっているが、ネギは気付かない。

「不良のからあげはどこですか!？」

「からあげ？ 定食ですかー？」

「え？ あの、襲われてたんじゃ？」

「？ いえ、待ってただけですけど……」

話がかみ合わない。どうやら認識の齟齬があるようだ。しかしそれを置いて、のどかが話しかける。

「あの、それで先生。私なんかがその…ば、パートナーでいいんで

しょうか？」  
「え……？」

いきなりのパートナー発言に一瞬ではあるが放心するネギ。しかしすぐに気を取り直すと彼はカモに小声で問いかける。

（ちょっとカモ君！　　どういう事さ、宮崎さんが不良にからあげされてるんじゃないの!?）

（すまねえアニキ、手っ取り早くパートナー契約結んでもらうために一芝居打たせてもらいましたぜ。あと、からあげじゃなくてからあげっス）

（だ、騙したね!?　　アーニヤにも騙された事ないのに!）

「へっくし!」

ロンドンの街角で、炎の様に紅い髪をした少女がくしゃみをする。その少女の横と一緒に歩いていた年配の女性が心配そうな声を掛ける。

「おや、風邪かい？　　気をつけないと駄目だよ、アーニヤちゃん」

「大丈夫です。きつと誰かが噂でもしてるんだと思います」

「そうかい？　　でも気をつけないと駄目だよ」

大丈夫だと言うアーニヤ　　本名アンナ・ユーリエウナ・ココロ  
ウアに、なおも心配そうに言う女性。その様子は、親が子を心配している様にも見える。

「大丈夫ですって、それより今日の夕飯は何でしたっけ？」

「今日の夕飯はね……」

そう言っただけで今晩の献立の話になる。  
アーニヤの周りは今日も平和である。

（あ、後押しだよ後押し！ ころでもしないと、いつまで経っても契約しないだろ！？）

（う、それは……）

小声で言い合う少年と小動物。傍から見たら微笑ましい光景だろうが、場合によっては生温かい目で見られるだろう光景でもある。そんな事を知ってか知らずか、のどかが話しかける。

「あの、おとといの吸血鬼騒ぎの時にまた助けていただいたそう……」

「え……」

「何だか、先生に迷惑かけてばかりですいません……」

「いえ、そんな事ないですよ」

互いに顔を赤くしながらそう言う。

「だ、だからお返しに……先生の役にたてる事なら何でも……」  
……が、頑張りますから、何でも言ったださいね」

顔を林檎の様に真っ赤に染めながら微笑むのどか。普通の男ならこれだけで落ちているだろう。それほどに可愛らしかった。

（俺っちの読みは間違ってたな）

(え…カモ君？ どういう事？)

小声でそう言ったカモに、同じく小声で疑問を返すネギ。カモはそれに、互いに信じあいたわり合う関係が重要と言い、のどかの好感度が現時点でクラス随一であると言つ。委員長すら抜いていると言つのだから、これには素直に驚きだ。そしてカモは行動に移る。

バクティオー  
「契約！！」

そう言つと同時に地面が輝き、魔法陣が浮かび上がる。

「なつ、カモ君！ 何これ！？」

思わず声を大にして確認するネギ。幸いにもどかは気付いていないようだ。

「これがパートナーとの「仮契約」を結ぶための魔法陣つす」  
「仮契約！？」

カモは説明する。魔法使いと契約し、従者となつた者は契約した相手を守ることになる。その代わりに魔法使いから魔力を送られ、自身の能力が全体的に向上するとも。

「でもアニキの様な子供じゃ本契約はまだ出来ないし、従者を選ぶのはかなり迷うものっす。そこで出てくるのがこの仮契約システム！ 何人とも結べる、言わばお試し期間！！」

セールスマンの様にネギに説明するカモ。その説明に納得したのか、ネギは感嘆の溜息を吐く。

「そうなんだ……知らなかった」

「分かったっスか？　じゃあ早速仮契約を！　仮契約なら何人とも結べるし、こう軽い気持ちでブチューツと」

「う、うん……って、ブチューツ！？　キスするって事！？」

そう言っただけで促すカモに、キスをするという事で驚くネギ。

「一番簡単な方法さ。他にもあるけど、やり方がめんどいんすよ」

「だ、駄目だよ！　宮崎さんだってこんな、騙したみたいな格好で

……」

驚くネギにそう説明するカモ。それにネギは反論する。

しかし、キスと聞いてのどかが反応した。

「私も初めてですけどー……ネギ先生がそう言うなら、いいですよ

……？」

「え？」

「それにー、私も何だか、胸がドキドキしてー……」

そう言っただけで目を瞑るのどか。それを見てネギの顔も林檎の様に赤く染まる。そして彼は慌てふためきながら、心の準備ができていないとカモに言う。

しかしカモは反論する。パートナーが欲しくないのかと。

そうこうしていると、のどかがネギがキスしやすいように膝をかかめる。それを見て、ネギはさらに顔を赤くする。既に林檎やトマトと同等か、それ以上に赤い。

それでも戸惑っていると、のどかの手がネギの頬に添えられる。



「あ……」

近づく二人の距離。既にカモの騒ぎも二人の耳には入らない。そこだけ隔絶された空間になっていた。

1cm、2cm……少しずつ縮まる距離。そして、あと1cmで二人の唇が触れ合うと言ったところで、それは起きた。

「行け、アニキ！ ほら、ブチューツと！！ これで俺っちも晴れて無罪放免……」

「そう、それがアンタの狙いなわけね。淫獣」

「え？ ぶぎゅっ！！」

突如聞こえた声と共に踏みつぶされるカモ。それと同時にネギとどか、二人を包んでいた魔法陣の光もなくなり、二人は弾かれた。

「あ、アスナさん！？ その、これは……ヒイツ！？」

必死にいい訳をしようとするネギ。しかしアスナの顔を見ると同時に短く悲鳴を上げ、気絶しているのかの介抱に向かう。

「淫獣……アンタね、子供をたぶらかして何させようとしてたのかしら？ それに、軽い気持ちでキス……？ アンタ、女の子の唇を一体なんだと思ってるのかしら？」

絶対零度の視線と声音でカモに問いたただすアスナ。その背には静かに燃え盛る気炎と共に、やはり不動明王が浮かび上がっている。心なしが、その不動明王の顔もいつもより遙かに厳しい気がする。

「それと、見たわよ？ ゴミ箱に捨ててあった、クシャクシャにされたネギのお姉さんからの手紙。アンタ、ネギに届けに行ったんじ

「やなかつたっけ？」

「ゲツ！！」

「下着泥棒2000枚ね。お姉さんの頼みで来たって言うのは嘘だつたってわけね」

「え…か、カモ君！ どういう事！？」

「あ、アニキ！ これには訳が、俺っちは無実の罪で……」

感情の色が一切見えないアスナの目と言葉に怯えながらのどかを介抱していたネギが驚き、カモに聞く。

カモはそれに必死で弁明する。

「無実の？ それって……」

「俺っちには病弱な妹がいます……」

カモは語る。貧乏で満足な家にも住めず、せめて妹には温かな寢床を作ってやろうと思いついて毎晩毎晩女性の下着を拝借していた事。そしてそれを数週間続けて、捕まった事を。

「ムシヨ暮らしじゃ仕送りも出来やしねえ。そこで覚悟を決めて脱獄して、唯一頼れるネギのアニキの居る日本に貨物船に揺られて来たって訳でさあ……」

「立派な下着ドロね。で？ こんな事した理由は何かしら？」

「手柄を立てれば、アニキに使い魔として雇ってもらえるかと思つて」

マジステル・マジ候補生の使い魔ともなりやあ追手も手出しは出来ねえって寸法でさ。

そう言つてタバコをふかすカモ。しかし、踏みつぶされているのでいまいち格好がつかない。

「で、覚悟して脱獄して来たってんなら、また入れられる覚悟も当然してたわけよね」

「う…それは……」

アスナの言葉に呻くカモ。そんなカモに、アスナは言い放つ。

「じゃあさよならね。明日と言わず、今日にでも縄で縛って檻に入れて向こうに送り返しましょうか」

「ま、待ってくださいアスナさん！」

そう言つてカモを捕まえて連れて行くこととするアスナに、ネギが声を掛ける。

アスナが振り向く。

「何よ？ 私これからする事が出来ただけど？」

「あ、あの…カモ君をペットとして雇わせて下さい！」

「あ、アニキ……」

「はあ？ そんなの許す訳ないでしょ」

アスナに頼みこむネギ。それにカモは感動するが、アスナは冷たくあしらう。まあ当然であろう。誰も好きこのんで下着を盗む様な動物と一緒に居たくはないだろうから。

「お願いします！ 躰もしますし、面倒は全部僕が見ますから、だから……だからお願いします!!」

必死に頼み込むネギ。このままだと、そのうち土下座までしてきそうな勢いだ。そんな事がもし他のクラスメイトに見られたら、世間的にもよろしくない。

数分後、アスナは折れた。

「ハア……分かったわよ」

「あ、ありがとうござ「ただし!!」……」

「学校には連れて行かない事、そいつが起こした騒動の責任全てをアスタが負う事、私と木乃香に頼らない事。これら全てを守るんなら、檻に入れて飼うぐらいなら認めるわ」

ネギの声を遮りアスタが言う。しかし、それでも嬉しいのかネギは何度もアスタに礼を言う。それを無視して、アスタはのどかを抱き上げ寮へと戻って行った。

カモを、縄できつく縛りあげて。

「……て言う事なんだけど、用意できる?」

『できない事はありますが、本当によかったのですか? そのオコジヨを飼う事を了承して』

のどかを部屋に送り届けた後、アスタは昴に電話をしていた。カモを入れる檻を、昴に作ってもらったために。

「私だつて本当は嫌よ。だけど、そうでもしなきゃ土下座してくるような勢いだつたのよ」

『それはまた、何と言いますか……』

昴が苦笑する。何故イギリス人のネギが土下座を知っているのかと言ふ事を考えたのだろう。

アスタが文句を言う。

「笑い事じゃないわよ。そんなことされたら世間体とか最悪よ。い

いんちよ達に知られたら、何言われるか分かったもんじゃないわ」  
『それもそうですね。分かりました、では二日後に取りに来てくだ  
さい。それまでには作っておきましょう』  
「分かった。それじゃね、スバル」  
『はい、それではまた』

ピ、と言う音と共に通話を終える。そして、彼女はおもむろにカ  
ードを取り出す。いつも手放さずに持っている、昴との仮契約カード  
だ。まだ幼い彼女が、身の丈を超える大剣と共に写っている。

「……………」

それをじっと見つめ、抱きしめた。

29話：仮契約・・・未遂（後書き）

真言による魂の浸食率：54%

### 30話：契約拒否と襲撃、そして迷い人

『お師匠様、お師匠様！』

『ん……？』

震えるソプラノの声で呼ばれ、黒い外套を纏った男が振り向く。視線の先には、プラチナブロンドの髪の少女が居た。白い服を朱に染めながら何かを腕に抱えて、今にも泣きそうな顔をして男の元に駆けてくる。

『服が赤く染まっているが、どうかしたかね？ 怪我をしている様には見えないが……』

赤く染まった少女の服に少々驚いたようだが、怪我をしたわけではないと知った男があやす様な口調で少女に問う。

『お師匠様、この子を助けてあげてください！ 怪我をしてるんです！』

『この子？』

そう言つて少女が抱えている物を見る。

それは小さな動物だった。栗鼠のようで、しかしどこか狐の様な印象を与えるそれは、今や血に塗れ、見る影もなくなってしまう。だが元は美しい金の毛並みをしていたのだろう。

体に有る大きな傷のせいであろうか。少女の腕の中で目を閉じピクリとも動かないが、微かな呼吸がまだ生きていることを伝える。

『これは酷いな。自然に出来る傷ではないぞ』

『お師匠様、この子、助かりますか？ 治りますか？』

目に涙を浮かべながら、少女は震える声で男に聞く。  
余程心配なのだろう、今にも泣き出しそうだ。

『私のところに連れてきたという事は、この栗鼠はまだ生きているのだろうか?』

『はい。でも、腕の中で動かなくなつて、だんだん冷たくなつて…』

『泣くことはない。コイツはまだ生きている。かなり弱っているが、すぐに治療してやれば大丈夫だ』

『ホントですか!?!』

『普通の治療ではすぐに死んでしまつがね。だが、それなら普通ではない治療をすればいい』

そう言つて男は瀕死の動物に触れる。

手が血で汚れるが、男は気にした様を見せずに言葉を紡ぐ。

『あらゆる傷と痛みを忘れ、安らぎの中で全ては癒える。たとえ死の淵に有つたとしても、命の光は煌く』

そう言つと共に栗鼠の体から光が溢れる。

それはすぐに治まつたが、少女の腕の中には血も消え、傷一つない美しい毛並みの栗鼠が穏やかな呼吸をして眠っていた。

『これで大丈夫だ。暫くは眠っているだろうが、死ぬことはない』

『ありがとうございますお師匠様! よかつた…よかつたよう…』

緊張が解けたのだろう。

少女は涙を流しながら男に礼を言い、栗鼠を抱きしめうずくまる。



『しかし、キツネの様なリスか。また珍しい動物を見つけたものだな。だが、どうするのだね？ 人の匂いが付いてしまえば、そいつの仲間達はそいつを避けるようになるだろう。自然の中では生き難くなってしまう』

『だったら私が育てます。この子と、ずっと一緒に居ます！』

男の言葉に、少女がそう返す。しかし、男はそれに注意する。

『生き物を飼うという事は、そんなに簡単な事ではない。よく考えて決めた方がいい』

『それでも、一緒に居ます！ じゃないとこの子、ずっと一人ぼっちです……』

そう言って栗鼠を抱きしめながら男を見る。

『……はあ、言っても無駄か』

『じゃあ……』

『まあ、いいだろう。君が全ての世話をするのなら、だがね』

呆れた様な口調で男はそう言った。

『します！』

『なら、コイツは今日から旅の道連れだな。名前もつけてやった方がいいだろう』

『何がいいでしょうか？』

『それは君が決めることだ。尤も、そいつの目が覚めてからの方がいいだろうがね』

そういった男に、少女は首を傾げながら問いかける。

『なぜですか？』

『君に馴れてからの方がいいだろう？ まあ、君のことだからそれ  
つもすぐに馴れるだろうがね』

君はやけに動物に懐かれるからな。

そう男が言った。

麻帆良学園都市の一角、二階建ての一軒家の一室で昴は目を覚まし  
た。

「……………久しぶりに見ましたね、夢。久しぶりでしょうか？ しかも  
あの時の続きの様ですし」

そう言いつつ、自分の布団から身を起こす。既に冬は終わり、温か  
な日差しが射す季節になったがそれでも夜は寒い。布団から身を起  
こしたことで感じる寒さで意識を覚醒させながら時計を手に取り、  
時間を確認する。

現在の時刻、3時20分。春先とはいえまだ薄暗く、大多数の人間  
がまだ寝ている時間だ。たとえ起きた人が居るとしても、もう一度  
眠るだろう。

「いつもより40分程早いですがまあ、いいでしょう」

しかし気にした風もなくさっさと布団から出ると洗面所に向かい、顔を洗う。冷たい水で顔を洗い残っていた眠気を完全に飛ばし、服を着替えに自室に戻る。

服を取り出すべく箆笥を開けると、黒一色が目に映った。きつちりと折り畳まれ、スッキリとしたイメージを持たせる衣服の中からズボンと上着を一着ずつ取り出すとすぐに着変える。さらに別の段から靴下　これも黒だ　を取り出し、履く。

全身黒一色になった昴は一通りの家事をこなし、4時半になったことを確認し家に鍵をかけて出る。店に向かう途中で警官や新聞配達員、ランニング中の人に出会い挨拶するが、黒一色の姿に苦笑いされ挨拶を返される。それに気にした風もなく昴は店に向かう。毎度のことだから、もう慣れてしまっているのだろう。

~~~~~

店に着くとすぐに掃除を始め、店内を綺麗にする。まず床を掃き埃を集め塵取りで回収し、その後でテーブルを布巾で拭いて行く。暫くすると、扉が開き誰かが入ってきた。

「お早うございます、昴さん」

「はい。お早うございます、相坂さん」

互いに挨拶を交わし、やってきた少女　相坂さよも掃除を手伝い始める。元々あまり汚れていなかったために掃除自体はすぐに済んだ。そして昴は店の厨房に引込み、朝食の準備を始める。とはいえ、前日に準備してあるのでそれほど時間はかからないだろう。

程なくして朝食が完成した。出されたものは白米となめこの味噌汁、

シシヤモを焼いたもので、それぞれが食欲をそそる匂いを出している。

「頂きます」

そう言ってさよは出された物を食べ始める。口に入れるとそれぞれの旨味が溢れ、さらに箸を進ませる。ゆっくりと、味を噛みしめるように、しかし掻き込む様にはなく行儀よく食べる。美味しさで思わずさよの顔が綻ぶ。それを昴は微笑んで見ていた。

「？　どうかしましたか？　そんな、微笑ましいって顔して」

「いえ、美味しそうに食べてくれますから、少々顔が緩んでしまいました」

さよの疑問に、微笑みを浮かべつつ昴がそう答える。自分の作った料理を美味しそうに食べてくれることが嬉しいらしい。

「御馳走様でした」

「はい、御粗末様でした」

食事を終え、一息つく。昴が食器を洗い、さよが食後のお茶を飲みまったりしていると再びベルが鳴り、人の到来を告げる。

「まだ開店時間ではありませんよって珍しいですね、エヴァンジェリン。貴女がこの時間に起きているとは」

「偶々目が覚めたただけ。茶を出せ昴」

「お早うございます昴さん、相坂さん」

エヴァンジェリンの後から入ってきた茶々丸が挨拶する。

「来た途端にそれですか、貴女は。まあいいですけど……茶々丸さん、お早うございます」

「お早うございますエヴァンジェリンさん、茶々丸さん」

挨拶を返す二人。それを見つつエヴァンジェリンは何故かさよの隣のカウンター席に座り、その隣に茶々丸が座る。

エヴァンジェリン専用の茶器と茶葉を棚から取り出し、お茶の準備をする昴。専用の茶器などがあるため、どれ程の頻度でこの店に来ているかが窺える。昴が聞く。

「朝食はもう済ませましたか？ まだなら何か作りますが」

「なら、フルーツサンド」

「分かりました、少し待ってくださいね」

そう言って会話が終わる。昴は注文された物を作り厨房に引っ込んだ。

「……………」

「……………」

会話もなく、唯静かに時間が流れる。さよと茶々丸も、この静かな時間を楽しんでいるかのように目を閉じている。

そうして数分の時間が過ぎ、昴がフルーツサンドと紅茶を持って出てきた。エヴァンジェリンの前にそれぞれ置かれ、昴がティーポットを傾ける。

銀のティーポットから湯気を立てながら、琥珀色の液体が白いティーカップに注がれる。同時に店内に満ちる紅茶の香り。その香りを楽しみながら、エヴァンジェリンは紅茶を口に含む。

「ん、美味しい」

「そうですね、それはなによりです」

微笑みながら言う昴。それを見ながら、エヴァはフルーツサンドを食べ始めた。苺やキウイ等の酸味とクリームの甘さが互いを引き立て合う。

コチコチと音を立てて、柱時計が時を刻む。現在の時刻、6時40分。

特に何事もなく、穏やかに時間が過ぎて行った。

午前8時。

アスナは怒りながら学校への道を走っていた。その理由は、現在自分のやや後方を走ってくるネギの肩の上に居る白いオコジヨカモが原因である。

昴に頼んだ檻ができるまで二日かかるため、それまで外に出して飼うことになったのだが今朝、早速カモは問題を起こした。

「まったく、朝から気分最悪だわ！ 下着を巢にして寝るオコジヨなんて……！！」

「まーまー、きつと布の感じが好きなんやろ」

「だったらネギのそれでも良いと思わない！？ 何で私達の下着なのよ」

「柔らかさとかやない？ 女物やないといまいちとか」

アスナが言うように、カモは早速アスナと木乃香の下着を盗み、それに包まって寝ていたのだ。当然それを見たアスナは激怒した。これが普通の動物だったならアスナもそこまで怒る事はなかったかもしれないが、カモは人間と同じ様な思考回路と理性を持っている。そのような、動物の姿をした人間とも言える生物に自分と親友の下

着が寝床として使われたのだ、怒るのも無理はないと言える。文句を言うアスナと、それを抑える木乃香。

後にアスナは語る。あの時、木乃香が居なかったら迷うことなく斬り捨てていたわ、と。

（あんまりしゃべっちゃダメだよ、カモ君）

（えー、何でだよアニキー）

誰にも聞こえないようにカモに注意するネギ。カモは文句を言うが、直後アスナに氷点下の眼差しで睨まれ彫像のように動かなくなる。何故カモがネギの肩に乗って学校に来ているのかと言うと、檻もなしに部屋に居られて下着などを荒らされたら堪らないとアスナが言ったからである。そのため、檻が手渡される明日までは例外としてネギと一緒に居る事を認めたのである。

下駄箱に着いたネギは靴を履き替え、キョロキョロと周りを見渡す。その様子は、どこかプレーリードッグを彷彿とさせる。不思議に思ったカモが聞く。

「アニキ、そんなキョロキョロしてどうしたんだよ？ 何か探しているのかい？」

「いや、ちよっとね……」

そう言って再び辺りを見回すネギ。相も変わらずエヴァンジェリンが怖いようである。まるで天敵が居ないかを探す小動物だ。

「何落ちこんでんだよ、相談なら乗るぜ？」

「ん……実は、ウチのクラスに問題児が居てね……」

そう言ってカモに話そうとした時だった。自分の後ろから声がかか

る。

「お早う、ネギ先生。今日もまったりサボらせてもらうよ。先生が担任になってから色々とお楽しかったからな」

「え、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん！」

「おはよ、二人とも」

「お早うございますアスナさん」

(！？ コイツは……)

声を掛けられ杖を手に持ち構えるネギと、普通に挨拶を返すアスナ。その挨拶に茶々丸も返事を返す。エヴァンジェリンと茶々丸を見てカモは何か気付く。

「くっ」

「やめておけ、校内では大人しくしておいた方がお互いのためだと思うぞ？ 大体、勝ち目はあるのか？」

薄い笑みを浮かべながら挑発するエヴァンジェリン。今居る場所は昇降口で、自分たち以外にも生徒達が居る。この場所で戦えば、間違いなく全員にネギが魔法使いだとばれる。すぐにそれに思い至ったネギは呻く。

「ああ、タカミチや学園長に助けを求めようと思うなよ？ また生徒を襲われたくないだろう」

「うぐっ……うわあぁぁぁん！」

泣きながらネギは走り去って行った。肩から振り落とされたカモは必死になってネギを追う。時々生徒達に踏み潰されそうになりながら、その下着を覗き見て。

「エヴァちゃん、あんまり虐めちゃダメよ。潰れちゃうかもしれないわよ?」

「この程度で潰れるのなら所詮その程度だったと言っただけの事だ。それとエヴァちゃん言うな」

アスナの言葉にそう返すエヴァンジェリン。彼女は力モを見ながら咳く。

「ふん、なるほどな。あのオコジョが学園に侵入してきたモノか」「分かるの?」

「当然だ。それに、つい最近までほーやはオコジョなんて連れていなかったし、以前感知した侵入者の大きさとも大体合致する。魔法使いが唯の動物を連れて歩く事は基本的にあまりないし、あのオコジョからは多少だが魔力が感じ取れた。オコジョ妖精だろう」

エヴァンジェリンがそう言ってアスナを見ると、彼女は苦々しげな顔をして当たりだと言った。なぜそのような顔をしているのかをエヴァンジェリンは聞く。するとアスナはこう答えた。

女子の下着で巣を作る変態オコジョ、淫獣だと。

「ならばさっさと処分してしまえば良いだろう」

「一応約束を守れば檻に入れて飼うのは認めるって言っちゃったからね、私の方から破るのはちょっと……」

エヴァンジェリンの言葉にそう返すアスナ。その他にも少し話してエヴァンジェリンは茶々丸を連れて教室に向かう。尤も、荷物を置いたらまた屋上かどこかに行くのだろうが。

それを見送り、アスナはネギを探しに行った。幸いにも階段の所ですぐに見つかった。

「あの、アスナさん！ 僕と仮契約してください！！」

そして、開口一番に彼はそう言い放った。

アスナの空気が凍りつく。気のせいか、周囲の気温も数度下がった気がした。

「淫獣、アンター一体何を吹き込んだ……？」

「グエエ……あ、姐さん、ギブ！ ギブウウ……っ、潰れちまう！」

カモを掴み、徐々に力を拳に入れて行くアスナ。その目は恐ろしいほどに冷たく、声も今までにないほどに平坦だ。

「あ、姐さんとアニキが仮契約して、あいつらの片方をボコっちまえば良いって言っただけツスよ。姐さんの体術はスゲーから、前衛として申し分ねえと思ったんで……に、握りしめないで下せえ姐さん！ ホントに潰れちまう！！」

「うっさい、いっそ潰れなさい。そしたら私の心労も少しは減ると思うから」

手の中で体をくねらせ不気味に暴れるカモに、無表情で言い放つ。そして彼女はネギに言う。

「絶対にイヤよ。なんでそんな事しないといけないのよ」

「そ、そんな……お願いしますアスナさん、1回だけで良いですから！」

「1回だけでもキスするんでしょ！？ 絶対にイヤよ！！」

涙目で頼むネギだが、それを見てもアスナは頑なに拒否する。そんなやり取りをしながらでも彼女は手に力を入れるのを忘れない。

「大体ね、何で私をパートナーにするのが前提で話が進んでるのよ！ エヴァちゃんとはアンタの問題でしょ！？」

「あうう……でも……」

「でも、じゃない！」

「ひっ」

大声で怒鳴りつけるアスナ。ネギはその剣幕に怯え、泣きそうになる。

怯えたネギを見ながら、アスナに握りしめられたカモが苦しげに言う。意外と根性のあるオコジヨである。

「も、もしかして姐さん、中3にもなつて初キッスを済ませてないとか？」

「それが何よ。言つとくけど恥ずかしくも何ともないからね」

「あ、あら？ 意外な反応……ギブ！ ギブツス姐さん！」

挑発目的で言ったのだろうが、それがどうしたと言う様な反応で返され何も言えなくなるカモ。さらに強く握りしめられ暴れ出すが、それを睨みつける様な目で見ながらアスナは言う。
カモの骨が軋みを上げる。

「そもそも、何で私がアンタと仮契約とか言うのをしなくちゃいけないのよ。私はそう言うのに関わるつもりはこれっぽっちもないからね」

「で、でも、魔法の事を知ってるのはアスナさんだけですし……」

「魔法の事を知ってるから何？ たったそれだけの理由でアンタと契約して、私にクラスメイトを襲わせようっていつの？」

「そ、それは……」

アスナに冷たくそう言われ、言葉に詰まるネギ。

「け、けどよ姐さん。アニキは命を狙われてるんですぜ？ 今回だけでも力を貸しちゃくれませんか？ 向こうにや茶々丸ってやつも居るし、2対1じゃ分が悪過ぎでさ」

「私が手を貸したところでどうこうなるもんじゃないでしょ。この話はもう終わり。いくら言われても、私はアンタと仮契約って言うのを結ぶつもりは一切ないから」

そうやってアスナは最後に力一杯握りしめ、泡を吹いて気絶した力モをネギに放って教室に歩いて行く。

ハッキリと拒否され、ネギは涙目で立ち尽くした。

放課後、エヴァンジェリンは茶道部の部室でもある茶室で、茶々丸の点てたお茶を飲んでいた。

抹茶独特の苦みが舌を刺激するが、十数年もお茶を飲み続けた彼女からすれば馴れた物。顔を苦みで顰めることもなく、むしろその苦みを楽しみながらお茶を飲む。

「結構なお手前で……」

部員の一人が茶々丸にそう言い、彼女もそれに無言で礼を返す。

暫くして部活動と言う名のお茶の時間を終えたエヴァンジェリンは、茶々丸を連れて日本庭園を思わせる茶室に続く道を歩いていた。風が吹き、笹の葉を揺らしてサワサワと音を立てる。静かな空気を彼女が楽しみながら歩いていると、後ろから声がかかった。

「おーいエヴァ」

「何か用かタカミチ。仕事ならしているぞ」

「学園長が呼びだ、一人で来いとさ」

タカミチにそう言われ、エヴァンジェリンは茶々丸に人通りのある場所を通るように言い、溜息を吐きながらとても面倒臭そうに歩き出す。

「何話してたんだよ？」

「貴様には関係ない」

タカミチの言葉に短くそう返すエヴァンジェリン。それを姿が見えなくなるまで見送り、茶々丸は二人とは別の方向に歩きはじめた。途中、店に寄って何かを購入して桜の咲き誇る川沿いの道を進む。それをコソコソと草叢や柱の影に隠れて追う影が二つ。

ネギとカモだ。彼等は何かを小声で話しながら茶々丸の後を追う。

（茶々丸って奴が一人になった！ チャンスだぜアニキ、不意打ちで一気にボコっちまおう！！）

（だ、ダメだよ。まだ人目につくかもしれないし、もう少し…）

アスナにハッキリと断られた彼等は、どうやら不意打ちで各個撃破を狙っているようだ。主導している方を見るに、カモが唆したのだろう。

暫くついて行くと、急に茶々丸が止まった。何かと草叢から顔を出して見るネギ。茶々丸が見ている方を見ると、小さな女の子が泣いていた。多少距離があるので何を言っているのかは分からないが、茶々丸が近づいて上を見る。つられて見ると、桜の枝に風船が引っ掛かっていた。どうやら風船が取れなくなってしまっただけで泣いていたらしい。

暫し風船を見て、茶々丸は背中と足の噴射口から火を噴き出して飛び、枝に引っ掛かった風船を取って降りてきた。

「……………え？ 飛んだ？」

呆然とするネギ。疑問が口を出る。

「そ、そう言えば茶々丸さんってどんな人なんだろ？」

「いや、ロボだろ？ すげーな、ロボが学校に通ってるなんてよ。流石日本」

「え！？ ロボって、茶々丸さん人間じゃないの！？」

「いや、見りゃわかんだろ！？ 間接然り頭のゼンマイ然り…………」

「じ、実は僕機械とか苦手で…………」

「そう言う問題じゃねえだろ！？」

漫才のような掛け合いをしながら茶々丸を追うネギとカモ。今度は息を切らせながら階段を上っていた御老人を背負って上って行き、礼を言われている。聞こえる会話の内容から、いつも茶々丸のお世話になっている老人の様だ。

次に茶々丸が通ったのはドブ川の側だった。いつの間にか二人の少年が茶々丸についてきている。かなり懐かれているらしい。

ふと川に掛かっている橋に目を向ける茶々丸。人が何人かおり、川を中心を見ている。少し近づくと声が聞こえた。

「子猫がドブ川の真ん中を流されてるぞー！」

「大変、どうしましょう」

「警察に連絡を…ああでも間に合うか！？」

その声を聞いて川の中央を向く茶々丸。段ボール箱に入れられた子猫が、ゆっくりと流されて行った居た。心細そうに子猫は鳴く。

「こ、子猫が！ 助けなきゃ！」

「アニキ！ 今尾行してんだから見つかったらダメッスよ！！」

助けに行こうと草叢を飛び出そうとするネギだが、カモに止められる。

すると誰もが動かない中、茶々丸がドブ川に躊躇なく入って行った。服が濡れて、自分が汚れる事など関係ないとばかりに一直線に子猫の元に向かう。すぐに子猫の入った段ボール箱までたどり着き、彼女はそれを持って岸に戻る。拍手と歓声が彼女にかけられる。

「い、良い人だ……」

「いや、油断させる罠かもしれないねえよアニキ！」

感動するネギにそう言っただけ緊張感を忘れないようにさせるカモ。そうこう話している間に茶々丸は道を進んで行く。それを見て慌てて追う一人と一匹。

先程助けた子猫を頭に乘せて、茶々丸は教会の鐘が鳴り響く桜並木を進む。暫く歩いて彼女が立ち止ったのは、少し大きな広場だった。彼女はその場にしゃがんで荷物を袋から取り出す。取り出した物は動物の餌を入れる皿と、猫の餌の缶詰だった。

無言でそれらを開けてさらに入れて行く茶々丸。すると、周りから猫が何匹も出てきて彼女に近寄って行く。

皿に餌を入れ終えた茶々丸が合図すると、集まっていた猫達は用意された餌を食べ始めた。それを静かに見守る茶々丸。その顔は無表情だが、どこか微笑んでいる様にも見えた。

ネギは感動した。

「良い人だ……」

「ちよ、アニキ！ アニキは命を狙われたんでしょ！？ しっかり

してくださいよ！」

感動で涙ぐむネギに力モはそう言い、当初の目的を思い出させる。

「人目のない今がチャンスッス！　ここは心を鬼にして一丁ボカー
つとー！」

「う、うん……」

躊躇しながらも茶々丸に聞こえない様に詠唱を始め、遅延呪文で発動を待機させる。教会の鐘が再び鳴り、茶々丸が荷物を片づけ始めたところでネギは出てきた。

「こんにちは、ネギ先生。油断しましたが、それでもお相手はします」

「あの、茶々丸さん。僕を狙うのはやめていただけませんか？」

頭のゼンマイを外して構える茶々丸にネギはそう言うが、彼女は頭を僅かに下げて拒否した。

「申し訳ありません。私にとって、マスターの命令は絶対ですので」
「うう、仕方ないですか……」

そう言って、いつでも遅延呪文を解除し発動できるようにしてネギも構える。空気が緊張感を孕み、それに怯えたかのように猫達が走り去って行く。

暫く対峙し、両者が動こうとしたその時だった。

「ああ、やっと人が居ました」

突然、声が聞こえた。何かと思いネギは周囲を見回すと、男が一人

歩いて来ていた。

黒い服と髪、紅い瞳を持つ男性が、自分達の所に歩いて来る。全身黒一色のために怪しいと思ったネギは杖を手に警戒するが、茶々丸は知り合いに話しかけるように声を掛けた。

「昴さん、どうしたのですか？」

「おや、茶々丸さん。いえ、今日は午後3時から店を閉めて、満開の桜を楽しもうと歩いていたのですが……お恥ずかしい事ながら、いつの間にやら見知らぬ道に入ってしまったようです」

道に迷ってしまいました。

頭を掻きながら恥ずかしそうにそう言う昴。ちなみに現在の時刻は午後6時半であるため、およそ3時間半の間、この男は桜を見ながらさまよい歩いていたことになる。

「それで、できれば店への道を教えてもらえると助かるのですが…

…」

「それではこの道を……」

そう言っただけで店への道を昴に説明しはじめる茶々丸。既にネギの事など気にしていないようだ。

そして昴は礼を言い、説明された道を歩いて行った。

最初の交差点で、説明された道とは真逆の道に行きそうになったため、茶々丸がついて行ったのは余談である。

ちなみにネギは、突然のことに茫然としてしまい、結果として茶々丸を倒す事は出来ずに終わった。

店への道歩く途中、茶々丸は昴に気になったことを聞いた。

「昴さん、何故あの場に出てきたんですか？」

「何故、とは？」

「昴さんなら、真言の転移で戻れたはずです。何故ですか？」

昴の目を見て茶々丸は聞く。昴はそれを聞いて僅かに固まった。疑問に思った茶々丸が聞く。

「どうしました？」

「あ、あはは……忘れてました」

「は？」

「いえ、その……もの見事に忘れてました」

歳ですかね？

恥ずかしげに笑いながらそう言う昴。

何とも言えない微妙な空気が、二人を中心に広がった。

31話：決闘、封印破壊（前書き）

お待たせしました。ようやく31話書き終わりました。

4日から5日で更新しようと思ってたのに、全然纏まらずに気付いたら1週間。

にも関わらず、グダグダで変な内容ですが、読んでもらえたら幸いです。

今回、題名からも分かるように一気にエヴァ編ラストにまで飛びます。

それでもよろしければ、どうぞ。

31話：決闘、封印破壊

ネギがカモに唆されて茶々丸を襲撃し、凶らずも昴がそれを失敗させてから数日が経った。

襲撃の翌日の土曜に、カモの調べた情報を見てネギが一度逃げ出したがその時に何かあったのか、日曜の昼には元気になって戻ってきた。

そして何を思ったか、彼は翌日エヴァンジェリンに果たし状を持って行った。しかし彼女は何と風邪を引いてダウンしており、そんな事をする余裕はなかった（昴が解いたのはあくまで登校地獄の呪いのみ）。

そして、高温に魘された彼女を看病していたネギが彼女の寝言でサウザンドマスターの名を聞き、己の父がどう言った存在だったのかを知りたいと思い夢見の術を使用し、彼女の夢に侵入した。そして彼は想像からかけ離れた父の姿を見たのだが、それは割愛しておく。

そしてその翌日の火曜である現在

「あのぼーやはどうにかならんのか、まったく」

「何ですか、藪から棒に」

相も変わらずネギの授業をサボったエヴァンジェリンは、いつもと同じように昴の喫茶店でお茶を飲んでいて。溜息を吐きながらそう言う昴は、既にエヴァンジェリンに注意する事を諦めたらしい。

「昨日私を看病している時に、私の夢を覗き見たんだよ。それも私がここに封印された時の夢を」

「ああ、だからそんなに不機嫌そうなのですか」

不機嫌を前面に出しながら言った彼女に、昴は納得の表情を浮かべて頷く。確かに自分の夢を覗き見られて好印象を持つ人間など居ないだろう。エヴァンジェリンは吸血鬼だが。

「しかし、いくらまだ10歳とは言えやって良い事と悪い事の区別くらいつきそうな物ですが……」

「そこら辺の一般常識は教えていないんだろうさ」

「学校としてどうなんですか、それ」

エヴァンジェリンの言葉に、思わず昴は呆れの声を漏らす。

「まあ、その鬱憤も今日で晴らすかな」

「と言うと、仕掛けるのですか」

「ああ、私の魔力を抑える学園結界が電気を使っている事は既に調べているからな。満月でないのは残念だが、結界が無くなる今日を置いて他にない」

いい加減、ジジイの思惑に付き合うのもうんざりしてきたしな。

そう言っただけで彼女は出された紅茶を飲む。仄かに桜の香りがし、彼女の鼻腔をくすぐる。

「しかし、大丈夫ですか？」

「何がだ？」

「いえ、何か作偽的な物を感じまして」

窯にパンを入れて焼きながら昴はそう言う。ちなみに今入れて焼いているのはアンパン、ジャムパン、マーボーパンの三種類だ。それぞれ匂いがつくかもしれないが、そこは真言でつかないようにし

て焼いている。

「ジジイが何かしてくるかもしれないと言っのか？」

「可能性としてはあるでしょう。学園長を含め、魔法先生達は少年の「成長」に期待しているようですから」

私としてはどうでもいいのですけどね。

そう言っただけは自分のコーヒーを淹れ始めた。

「どうでもいい、か。英雄であり、立派な魔法使いと言われているお前がそう言っただけ他の連中が知ったらどう思っかな」

「別にどう思われてもかまいませんよ、その意志を押し付けてこない限りは。あと、私を英雄とか、そう言う風に言わないでください。私はしがない喫茶店の店主ですよ」

コーヒーを淹れつつ、焼きあがったパンを取り出しながら昴は続ける。

「それに、私は魔法は使えませんから、立派な「魔法使い」には当て嵌まりませんしね」

「ある意味、どの魔法使いよりも魔法使いらしいお前がそれを言っても説得力はないぞ。真言と言う万能能力を持っているくせに」

そう言っただけエヴァンジェリンは再び紅茶に口をつける。

「あらゆることを現実にすると言っても、そこまで万能ではありませんよ。声を封じられたらお終いですし、時間を超えたり死者を蘇らせたりはできませんし」

「出来ないことと言っただけそれぐらいだろう。それに、封じられないように常に自分にそう言っただけ真言を使っているだろう」

「まあ、それはいいでしょう？ それよりも、どうやって少年を呼び出すのですか？」

「茶々丸に言って呼び出すようにしてある。昨日果たし状も持って来たからな、丁度いい」

昴の質問に、エヴァンジェリンはニヤリと笑いながらそう答える。

「戦ってやるさ。ぼーやの望みどおり、1対1でな」

冷たい笑みを浮かべて、エヴァンジェリンはそう言った。

「ところで、さっきから焼いているそのパンは何だ？」

「マーボーパンですけど、食べますか？ 辛いですけど」

「誰が食うか！！」

「では新作の苺のティラミスはどうです？」

「……それは食べる」

現在は平和である。

「あの、こないだはすいませんでしたアスナさん。あんな事頼んで……」

寮への道を帰る途中、いきなり謝ってきたネギにアスナは面喰らった。

「な、何よいきなり謝ってきて」

「いえ、アスナさんの感情を考えずに自分の都合を押し付けようとした事が恥ずかしくなって……」

そう言って謝り、顔を上げるネギ。その目には、何らかの決意が見て取れた。

「でももう大丈夫です。また何かあっても、今度はアスナさんや他の皆には絶対に迷惑をかけませんから、安心してください」

ネギは自信満々にそう言った。何かをふっきったと言う様な顔つきである。

「……そう、本当に迷惑かけなければ良いんだけどね。あの淫獣みたいに迷惑かけなければ」

「あ、あはは……」

ネギの言葉にそっけなくそう返したアスナは道を進み始める。その様子を見て、ネギは僅かに顔を引き攣らせて笑った。

そしてアスナについて行き、売店の前を通った時にふと立ち止まった。

「？ どうしたのよネギ、急に立ち止まって」

「いえ、アレは何をしてるのかな、と」

そう言ってネギが指さしたのは、売店に群がる生徒たちであった。

側にある旗には「停電セール」と書かれ、多くの生徒達がこぞって蝋燭やカンパン、懐中電灯を買い求めている。その中には3 Aのクラスメイトの姿もあった。

「ああ、あれね。今日停電があるからね、その準備よ」

「停電ですか？」

「そ、年2回の学園のメンテナンスで8時から12時まで停電する

「のよ。職員会議で聞いてなかった？」

「そう言えば、そんな事を聞いた気が……」

そう言つて朝の職員会議を思い出そうとするネギ。少しして思い出
し、納得する。

「天気も悪くなってきたし、怖いよねー」

「そお？ 楽しいと思うけどなー、ドキドキして」

「真つ暗な学校で遊びたいねー」

「エレベーターも街灯も消えて、生徒は原則外出禁止になるんだっ
てさ」

そう言いながら生徒達は買った物を持つて寮の自室に戻りはじめる。
そんな中、木乃香がアスナに聞いてきた。

「アスナの方もローソクとか買つとこーか？」

「別にいいわよ？ 暗くてもあんまり困らないし」

「そーなん？」

そう言つて二人は寮に戻ろうとする。すると、学校の方からしずな
がやってきた。

「ネギ先生、寮の方の見回りお願いしますねー」

「あ、分かりました。じゃあ僕、見回りに行つてきますので」

「はいなー」

「一応頑張んなさいよ」

そう言つてネギはアスナ達と別れた。

「放送部より連絡です。メンテナンスのため、これより学園内は停電となります。学園生徒の方は極力外出を控えるようにしてください」

午後8時、その放送が流れた直後に麻帆良学園の中から電気を使った明かりが全て消え失せた。

そして、それはエヴァンジェリンの魔力を封印していた結界機能の消失も意味する。

「封印結界への電力供給停止を確認、予備システムへハッキング開始………成功しました。順調です。これでマスターの魔力は戻りません」

そう呟き、茶々丸は見回りをしているであろうネギの元に向かう。自分の目の待つ場所を伝えるために。

「真つ暗な寮ってなかなか怖いもんだねー」

停電による暗闇の中、手に懐中電灯を持ってネギは一人そう呟いた。ちなみにカモは現在、寮の部屋で檻に閉じ込められているために彼の肩の上には居ない。今頃彼は、性懲りもなく檻から出ようと躍起になっているのだろう。昴特製の檻の為に自力で出る事はまず叶わないが。

闇と言う物は、人の恐怖心を掻き立てる。そのため、まだ10歳の

少年なら怯えていても不思議ではないのだが、彼にそんな様子は見られない。暗闇に慣れているのだろうか？
暫く見回っていると、彼の前に茶々丸が現れた。

「ちゃ、茶々丸さん！？ ダメですよ外出したら！！」

「ネギ先生、マスターがお待ちです。10分後、大浴場で先生に1対1の決闘を申し込むと。それでは」

彼女はそう言ってどこかに飛んでいった。

それを茫然と見送りながら、ネギは一体どこに隠していたのか大量の魔法具が入った袋を出してその中に入った物を装備していく。いつかこうなると予測していたのだろうか、用意周到である。

そして彼は指定された場所に向かって走り出した。彼女に勝ち、更生させて自分の授業に出てもらうために。

「……………始まったようですね」

ぶつかり合う二つの巨大な魔力を感じながら、閉じていた目を開き、真紅の瞳を晒しながら鼻は一人佇みそう呟いた。

彼が現在いる場所は麻帆良学園外縁部の一角にあるそれなりに広い道。その手には、懐中電灯ではなく何故かカンテラを持っている。

暗闇の中、カンテラの明かりでぼんやりと浮かぶ人影……………なかなか不気味である。

毎度同じく黒い服を着ているので、闇に溶け込み何処に居るか分からない。さらに紅い目がカンテラに照らされぼんやりと光っている様にも見えるので余計に不気味さに拍車をかける。

気の弱い人間が遭遇したら腰を抜かしているであろう。最悪、失禁するかもしれない不気味さだ。

「しかし、毎年毎年よくもまあ懲りずに来るものですね。世界樹や、木乃香ちゃんがいるから仕方ないかもしれませんが」

若干呆れを含んだ声で彼はそう言い、麻帆良の外に向かう方向を見る。

ネギとエヴァンジェリンの様な巨大な力の「波動」とは別の、それなりに大きな「ナニカ」の波動が自分の居る場所に向かって大量に進んできているのを感じたためだ。

停電によって一時的に消えた学園結界は、エヴァンジェリンの魔力を封印している他に幾つかの機能を持っている。

一般人に対する、異常を異常と思わせない認識阻害、外部からの侵入者の感知、そして鬼や妖怪、魔族と言った異形からの都市の防衛等。

本来ならそれらの侵入を阻む結界はしかし、この停電の時にはその力を失う。そしてその時を狙って、麻帆良に敵意を持った人間が仕掛けてくるのだ。まあ、結界が健在な時にも偵察などの意味合いを持って仕掛けてくる人間も居るが。

再び昴は目を閉じ、自分の意識を麻帆良と言う土地に重ねて広げていく。感じる波動から、ネギとエヴァンジェリンはガラスを盛大に破壊して大浴場を飛び出し、空中戦を繰り広げながら麻帆良大橋に向かっているようだ。力の感覚では、ネギはエヴァンジェリンから逃げているようにも感じる。

思わず頬が引き攣るが、学園都市全体を把握するためにさらに意識を広げる。どうやら他の場所でも自分の所に向かって存在と同じ存在が現れ、所によっては既に戦闘に入っているようだ。

何故昴が魔法先生でもないのにこの場に居るのかと言うと、数年前

にこの学園都市に来たおり、教師になる事を断る代わりに夜の警備員の一人として出る事を学園長と約束したからだ。流石に毎日出ている訳ではないが、年2回の停電の日には必ず出ている。

もう100mで鬼達と対面すると言ったところで昴は自分に意識を戻し、目を開ける。

「ここから先は通行止めですよ」

鬼達との距離が残り50mになったところで昴はそう言い、一步前に出る。

その声を聞いて、律儀にも鬼達は進行を止めた。

「これはまた、今日は大勢で来ましたねえ……」

ざっと見て、大小合わせて20体程か。後方にも波動を感じるため、まだ居るらしい。意識を僅かに広げると、少し離れた場所に人間の波動がした。その周囲にさらに鬼達と同じ様な力が現れているのを感じる。どうやらこの波動の持ち主が召喚術師らしい。

鬼達が構える。

「私としては、このまま何もせずに戻っていたきたいのですが…

…」

「兄さん、そりゃ無理ってもんや。わしらも呼び出されたからには仕事せなあかんしな」

「まあ、そうですね。今まで来た貴方達の仲間も同じでしたし」

昴の言葉に鬼の一体がそう返し、他の鬼達も肯定するように頷く。

「やはり、戦うしかありませんか」

「兄さん一人でわしらを相手する気か？ そりゃ無茶やで、見たと

ころアンタは後衛じゃる。死ぬのが落ちやで」

「まあ、普通に考えればそうですね。ですが、生憎と私は普通ではありませんので。『風が吹きます』」

イメージを纏めて真言を発動し、昴は豪風を発生させる。それによつて鬼の何体かが後方に吹き飛ばされた。

「な、何や、この風は!？」

「魔法か!?　だが魔力や気のうねりは感じなかったぞ!？」

「す、進めねえ……」

突如発生した風で鬼達は進めなくなり、後方に吹き飛ばされる。

「じゃが、唯風を吹かすだけじゃわしらは倒せんぞ！」

「それはそうですね、ですからこうします。『風は全てを切り裂く刃となる』」

鋭い刃のイメージを込めて真言を紡ぐ。

直後、鬼の首が飛び、その飛んだ首と残った胴体をさらに風が切り刻んで吹き飛ばした。そして切り刻まれ、吹き飛ばされたそれは煙の様に消えていった。どうやら召喚される前に居た場所に戻ったらしい。突然起こったことに他の鬼の動きが止まり、さらにそんな彼等の腕を、脚を、首を吹きつける風が切り落としていく。

「なっ……ぐおっ!」

「技名を付けるとしたら、裂空刃と言ったところでしょうか。ぼーっとしていたら、切り刻まれるだけですよ?　まあ、向かい風で進む事は出来ないでしょうから、切り刻まれるか後退するかのか2択しか貴方達にはないのですけどね」

対象となった物を切り刻む豪風の中に居ながら、世間話でもするよ
うな感じで昴はそう言った。

ニライス・カースス
「氷爆！！！」

「あうっ！」

強烈な冷気が炸裂し、吹きつけた場所を氷漬けにする。ネギはそれを何とか防ぐが、完全には防ぎきれなかったようだ。証拠として、髪の一部が凍っている。

「ハハハ、どうしたばーや、逃げるだけか？ まあ、呪文を唱える隙もないだろうがな！ リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

体の所々を僅かに凍らせながら橋に向かって逃げるネギを、エヴァンジェリンは詠唱しながら追う。彼女の詠唱に応えて掲げた手に氷の魔力が集まり、さらに首から下げている雪のペンダントが寒々しい蒼白い煌きを放つ。

クリュスタリザティオー・テルストリス
「こおる大地！！！」

「うわああっ！」

彼女は手に籠めた魔力を橋に叩きつけて鋭く巨大な氷柱を発生させ、ネギはこれを回避しきれずに落下し橋を滑る。ネギの体に擦り傷や切り傷ができる。

「ふん、なるほどな。この橋は学園都市の端だ。私は呪いによって学園の外には出られんから、ピンチになれば学園外に逃げればいいと言う訳か。以外にせこい作戦じゃないか、先生？」

「ぐっ、っ……」

そう言いながらエヴァンジェリンは橋に降り立ち、薄く笑みを浮かべながら倒れているネギに近づいて行く。

うつ伏せに倒れながら、ネギは近づいて来る彼女を見据えていた。その目には、まだ諦めの色はない。

「これで決着だ、ぼーや」

それに気付いているのかいないのか、エヴァンジェリンは余裕の表情を浮かべて一歩、また一歩と近づいて行く。

そして、あと数歩でネギとの距離がゼロになると言ったところでそれは発動した。さらに一歩を踏み出した彼女の真下に魔法陣が発生、そこから魔力でできた縄の様な物が出てきてエヴァンジェリンの体を縛りつけた。

「やった！ 引っ掛かりましたねエヴァンジェリンさん！」

「これは……捕縛結界か。いつの間に仕掛けていたのやら……」

「もう動けませんよエヴァンジェリンさん！ これで僕の勝ちです！ 観念して、悪い事はもうやめてくださいね！」

杖を持ち、顔に笑みを浮かべて自信たっぷりに彼はそう宣言する。しかし何を思ったか、エヴァンジェリンは大声で笑い始める。

「フッフッフ……アッハハハハハ！！」

「な、何が可笑しいんですか！ ご存知かもしれませんが、この結界にハマればそう簡単には抜け出せないですよ！」

「そうだな、確かに本来ならばここで私の負けだろう。私を畏にかけた事、そこは素直に感心したよ。だがな……」

そう言つて彼女は目を瞑つて集中する。すると、彼女の首にあるペンダントが光を灯し、蒼白い輝きが彼女の体を包んでいく。凄まじい魔力が彼女のペンダントから感じられた。その魔力に影響を受けてか、それとも彼女の氷の属性に中てられてか、彼女を中心とした半径2mが凍りついていき、さらに何かが凍っていくような音までする。

「な、何ですかこの魔力は……」

「15年の苦汁をなめたこの私が、この類の畏に何の対処もしていないと本気で思っていたのか？ 『砕ける』」

エヴァンジェリンがそう言った瞬間、彼女の体を包んでいた輝きが爆ぜた。そして同時に、彼女を縛りつけていた捕縛結界も完全に凍りつき、甲高い音を立てて砕け散った。

「な……えっ!? な、何で……」

「このペンダントはな、ある人間に、とある事への対価として貰ったものでな。幾つかある力のうちの一つを使っただけさ。結界・封印機能の破壊を、な」

「そ、そんな……」

エヴァンジェリンの言葉にネギの顔が青ざめる。それを見ながら彼女はこのペンダントの作成を昂に対価として出した時の事を思い出していた。

~~~~~

『ペンダントの作成をするのはいいのですが、何か希望はありますか?』

『希望? なんだそれは』

『いえ、形や、ペンダントにつける能力は何がいいかな、と思って聞いたのですが』

『何だ、希望すればつけてくれるのか？』

『能力にもよりますけどね。死者蘇生や時間跳躍は無理ですが、それ以外なら最大で2つまでつける事が出来ます』

『ふむ、なら結界破壊と……』

『その2つでいいのですか？』

『ああ』

~~~~~

(結果は分かっていたが、こつも見事に破壊できるとはな。この分なら、学園結界に連動している私の魔力を封印している機能も壊せそうだ)

そんな事を思いながら、彼女はネギを見る。恐怖のためか、顔を青くしてプルプルと震えている。まるで小動物の様だ。

涙目でエヴァンジェリンを見ているが、詠唱する気配はない。どうやら戦意が折れたらしい。

それを見て彼女は言った。

「この程度で折れるか……つまらん、こんな小僧がサウザンドマスターの息子とはな。あの男ならこの程度の事、笑って乗り越えたものだが」

「え……」

サウザンドマスターの名を出すと、彼は目を見開いて彼女を見た。

「こんな情けないばーやが息子では、あの男もたかが知れるな。畏かけられたとはいえ、そんなあいつに負けた私が情けなくなる」

「と、父さんの悪口を言わないでください！」

ナギを馬鹿にしたような口調でエヴァンジェリンがそう言うと、気に触ったのかネギは吠えた。父の事をかなり尊敬しているようだ。怒りに呼応してか、彼の体から濃密な魔力が立ち上る。

「反論するなら私を倒してそれを証明するのだな。かかってくるがいいばーや、今度は私も、本気で行かせてもらおうとしよう！」

そう言っただけでも、濃密な魔力を体から立ち上らせた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ 風の精霊17人、集い来りて……」

「リック・ラク ラ・ラック ライラック！ 氷の精霊17柱！ 行けっ！ 魔法の射手・氷の17矢！！」

二人とも同時に詠唱を始めるが、やはり年季の差か、エヴァンジェリンの方が早く詠唱を済ませ魔法の射手を放つ。放たれた氷の矢は、かなりの速度を持ってネギに襲いかかる。

「さ、魔法の射手、連弾・雷の17矢！！」

僅かに遅れて詠唱を完成させたネギは雷の属性の魔法の射手を放つ。その数、エヴァンジェリンの矢と同じ17本。それらもまたかなりの速度で放たれた氷の矢に向かうが、その勢いを減ずることこそできたものの相殺することはできず、逆に突き破られてしまった。

「あ、うわうっ！？」

慌てて回避するネギ。ギリギリで回避が間にあったようだが、体や

服に掠ったのだらう。所々に僅かに血が滲んでいる。

何故エヴァンジェリンの魔法の射手が相殺されずにネギに向かったか、その秘密は彼女の首に下げられたペンダントにある。彼女のペンダントは現在、新・旧世界を合わせてもたった5つしか存在しない、最高純度のマナクリスタルを用いて昴に作り上げられた物だ（と言っても、マナクリスタルを所持しているのも、それを加工できるのも現状では昴と彼に渡された者以外に居ないのだが）。

そして彼女の持つマナクリスタルは氷の属性を宿す。マナクリスタルはそれぞれ属性に対応した魔法の威力・効果を増幅する効果を持っている。彼女の放った氷属性の魔法の射手はマナクリスタルのブーイストを受けていた、故に彼女の放った魔法の矢はネギの放った雷の矢を突き破る事になったのだ。

「雷も使えるか、だが詠唱に時間がかかり過ぎだ！ リク・ラク

ラ・ラック ライラック、闇の精霊29柱！」
ウンデトリギンピリトウス・オブスクーリー

「（29!?!）くつ、ラス・テル マ・スキル マギステル、光の
ウンデトリギンピリトウス・ルーキス

精霊29柱！」

サキタ・マギカ

「魔法の射手、連弾・闇の29矢！」

サキタ・マギカ

「魔法の射手、連弾・光の29矢！」

セリエス

エヴァンジェリンが空中で闇の、ネギが橋の上で光の魔法の矢をそれぞれ放つ。エヴァンジェリンの闇の魔法の矢は、今度はブーイストを受ける事が出来ずにぶつかると同時に相殺し合い、花火の様に弾けて消えた。

「つく！」

「ハハ、よく着いて来れたな！」

楽しみに笑うエヴァンジェリンを、何かを決意した目で見るネギ。
大浴場での戦いからここまで、休みなく、さらにペース配分も考え
ずに魔法を使ってきたために彼の魔力は底をつきかけていた。そし
て彼は、この攻撃で決めるために現在、自分の使える魔法の中で最
高威力の物を選択した。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！
来れ雷精 風の精！！！」
ウエニアント・スピート・ウエニアント・フルグリエンテイス
ウエニアント・スピート・ウエニアント・フルグリエンテイス
「リック・ラク ラ・ラック ライラック！
来れ氷精 闇の精！！！」

しかしエヴァンジェリンも同種の魔法の詠唱を始める。どうやら撃
ち合う気らしい。その詠唱を聞き、ネギは酷く驚いたが詠唱を止め
る事はしない。

「クム・フルグリエンテイス・フルグリエンテイス雷を纏いて 吹き荒べ 南洋の嵐！！」
「クム・オブスクラティオレゾト・テンベスネウネーリス闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪！！」

詠唱が進むと共に高まった魔力は、それぞれネギが雷を、エヴァン
ジェリンが氷を魔力に纏わせる。そして詠唱は同時に完了した。

「来るがいいばーや！！」

エヴァンジェリンが吠え、ネギと同時に魔法を解き放つ。

「ヨウイス・テンベスタイス・フルグリエンテイス雷の暴風！！！！」
「ニウイス・テンベスタイス・オブスクラリス闇の吹雪！！！！」

雷を纏った白い暴風が、氷雪を含んだ黒い暴風がぶつかり合う。そ
れらは丁度二人の間でせめぎ合っていたが、徐々に、しかし確実に
にネギの方に押し込まれていった。

(打ち負ける……このままじゃ……！)

そう思い、ネギは残り僅かな魔力を振り絞る。しかしそれでどうにかなる訳でもなく、やはり徐々に押し込まれていった。

「(でもまだ……まだだ……もう、逃げない!) あああああっ!!」
「何だと!？」

全てを出し切ると言うようにネギは咆哮した。途端、勢いを増すネギの「雷の暴風」。それは中間に押し戻すどころか、エヴァンジェリンの方に僅かにだが押し込まれていく。

「ああああああっ!!」

彼女も叫び、自分の魔力を高める。撃ち合わされた二つの嵐は再び二人の中間に戻り、徐々にその勢いを失くしていき、遂には消滅した。

ネギも、エヴァンジェリンも肩で息をしている。予想以上に疲れたらしい。しかし、既にネギの魔力は空。少なくとも今日はもう魔法は何も使えないだろう。彼は既に膝もついている。

対するエヴァは息を乱してこそいるが魔力は僅かにだが残っており、マナクリスタルのペンダントもある。一応だが、戦闘続行は可能だ。

この場に人が居たら、誰もがエヴァンジェリンの勝利を認めるだろう。そして彼女も、最後の仕上げをするためネギの側に降り立とうとする。

その時だった。

「!?!? なっ……」

橋の照明が灯り、彼女達の姿を闇夜に浮かび上がらせる。見れば市街地の方も電気が点きはじめていた。停電が復旧したようだが、予定よりも三分ほど早い。そして、停電の復旧は学園結界の復活をも意味する。つまり

「バチィツ!!」

「きゃんっ!!」

エヴァンジェリンの魔力封印も復活する。これが橋の上でなったのならまだいいだろう。しかし彼女は橋からやや離れた空中に浮かんでいた。当然、下に足場などあるはずもない。

魔力を封印された彼女は水面に一直線に落下していった。そして彼女はカナヅチであるため、泳ぐ事は出来ない。不死の吸血鬼の為、死ぬ事はないだろうがそれよりも辛い苦しみを味わうことになるだろう。

「え、エヴァンジェリンさん!？」

ネギが身を乗り出すが、既に魔力が空の彼では杖に乗って飛ぶこともできない。

泣きそうな目で落下していく彼女を見ていた。

「っの、舐めるなああああああ!!!」

咆哮するエヴァ。それと同時に彼女のペンダントが輝き、彼女の体と学園の空に複雑怪奇な、しかしどこか流麗な文様を浮かび上がらせる。彼女のペンダントには結界や封印を破壊する力が宿っている。おそらく、この文様は彼女の魔力を抑える封印なのだろう。

蒼白い輝きが彼女の体を包み、封印を氷結させていく。そして、彼女の体に浮かび上がった文様全てが凍りついた事を落下しながら確

認した彼女は叫んだ。

「『砕ける』おおおおっ！！」

直後、封印はガラスが割れるような音を立てて砕け散り、空に浮かび上がっていた文様も消滅した。

再び戻る彼女の魔力。残りはさほどないが、飛行には十分な量だった。そして彼女は橋へと降り立ち、ネギに言った。

「残念だったなばーや。この勝負、私の勝ちだ」

そう言って彼女はネギの首筋に手刀を落とし、彼を気絶させた。

32話：決闘の後（前書き）

無理矢理感がありますが、読んでもらえたら幸いです。

32話：決闘の後

AM0時。

停電も復旧し、学園結界も復活した。

結界の消失を狙って仕掛けてきた勢力も、召喚された鬼や魔獣達は殲滅され、それらを召喚した術者は全員とは言わないが捕縛された。どうやら複数人居たようで、何人かは結界が復活する前に逃げ出したようである。

「闇の福音」エヴァンジェリンと「英雄の子」ネギの決闘は、エヴァンジェリンの勝利で幕を下ろした。そして勝者となった彼女は、15年もの間自身を縛りつけ魔力を抑制していた結界の封印機能を破壊。戻ってくる魔力に心地良さと解放感を感じながら彼女は佇み、己が完全に自由になった事を、声には出さないが喜んでいた。その足元にはネギが倒れている。どうやら気絶しているらしく、起き上がる気配は見られない。

「マスター、御無事ですか？」

照明に照らされ輝く金の髪を夜風に遊ばせつつ目を閉じて、ようやく取り戻した自由を噛み締めていると自分を心配する従者の声が聞こえた。閉じていた目を開き、蒼玉の瞳を声がした方向に向ける。

「ああ、ダメージらしいダメージも受けていない。ぼーやも存外に粘ったが、私の勝ちだ」

そう言ってエヴァンジェリンは夜空を見上げ、再度目を閉じる。そして数分して再び目を開け、茶々丸に言った。

「帰るぞ、やるべき事は既にやったからな」

「ネギ先生はどうなさりますか？」

「放っておけ。どうせ正義バカ共か昴が連れて戻るだろうからな」

「分かりました。ですが、一応昴さんに連絡をしておきます」

その必要はありませんよ。

そう言つて茶々丸が携帯を取り出し連絡しようとするが、聞こえた声にボタンを押す手を止める。声の聞こえた方向に向くと、何も無い空間から滲み出る様に昴が現れた。魔力の動きを感じなかったことから、真言によつて空間を繋げて来たらしい。

「言つた傍から気配もなく出てくるな。幽霊か貴様は」

「酷い言われようですね。ナギ達に比べれば遥かに影が薄いのは認めますけれど、幽霊かと言われたのは生まれてこのかた初めてですよ」

エヴァンジェリンの言葉に、昴は苦笑しながらそう返す。そして彼はエヴァンジェリンの足元に倒れているネギを見た。

「どうやら少年は敗れたようですね。まあ、経験の有無から言つて当然でしょうか」

「存外に粘つたがな。思つた以上に魔力も使つたし、手加減していったとは言え最後の魔法はその状態での全力だ。それよりも、気付く事はないのか？」

「何にです？」

昴がそう言つと、エヴァンジェリンは何故か米神に血管を浮かび上がらせた。妙な威圧感がある場に立ち込める。何故血管を浮かび上がらせたのか不思議に思つた昴が、首を傾げながらも意識を集中し

エヴァンジェリンの事を探ってみると、彼女を縛っていた鎖の様な物の反応が無くなっていて、事に気付いた。
ポン、と手をつき一言。

「ああ、封印が解けたのですか。おめでとございます」
「気付くのが遅いわ！　そして何だ、その反応は！！」

そうやって掴みかかってくるエヴァンジェリンを受け流しながら、昴は倒れているネギに近寄り、呼吸を確認して抱き上げた。

「さ、それでは戻りましょうか。ここに居ても、何もすることはありませんし、少年も風邪を引いてしまいますし」

「だったら先に私達を送れ。魔力が回復するまでまだ少しかかる」

「既に転移できるぐらいは回復しているでしょうに」
「面倒だ。だから送れ」

エヴァンジェリンのその言葉に昴は顔を僅かにだが引き攣らせる。しかし、自分も結局それで転移するので何度使っても同じかと思いつく溜息を吐きながら空間の歪みを作り上げる。つくづく溜息を吐く事が多い男である。溜息を吐くと幸せが逃げると言っが、ネギが来てからの数ヶ月で一体どれほどの溜息を吐いただろうか？

「貴女の家に行く歪みです。通ったら消えますので」

「分かった、ではな」

「昴さん、お疲れ様でした」

「茶々丸さんも、お疲れ様です」

そうやってエヴァンジェリンと茶々丸は歪みに入って行った。その姿が見えなくなると同時に歪みも消える。

それを見届けた後、昴は自分も転移するために歪みを作り、それを

通ろうとしたところでネギが杖を持っていないことに気付き、拾い上げる。

「ナギの杖ですか。まったく、あのバカは一体今何処に居るのでしようかね……」

どこか懐かしげにそう呟き、昴は歪みを通って魔法先生達の所に行き、気絶しているネギと彼の杖を預けて自分の家に帰って行った。

翌日、学園長は校舎内にある自室で頭を悩ませていた。

「ですから、今すぐにも闇の福音の魔力を再び封印するべきです……」

「そうは言ってもお……」
「何を悩んでいるのですか学園長！ このまま放っておけば、何をしでかすか分かりません！！ 生徒達に何かあってからでは遅いのですよ!?!?」

悩む学園長対して、机を挟んで立っている色黒の男性教諭　ガンドルフィーニ先生は強い口調で進言する。学園長に用があって来たのだから。その後ろには、彼と思いを同じくする人間が数名程居た。

エヴァンジェリンの魔力封印が破壊されたと知ってすぐに、彼等はすぐに新しい封印を作り、彼女の魔力を再び封印するように進言した。その考えは、生徒を守る教師と言う立場から来るものもあるだろうが、やはり正義を志す「立派な魔法使い」としての思考もあるのだろう。

「それに、ネギ君を彼女とぶつけたなどと、正気ですか！？ 最悪の場合、ネギ君が死んでいたかも知れないですよ！？」

「じゃが、結果的には良い方向へと向かった。それに、エヴァンジェリンも殺す様なことはせんかったし、ネギ君も彼女に勝てる様に強くなるとも言っておったし」

「結果論に過ぎません！！ いくら今までにそう言った例がなかったとは言え、ネギ君は彼女を封じたサウザンドマスターの息子です！ 登校地獄の呪いを解くために死ぬまで血を吸われたかも知れないですよ！！」

あの戦いの後、昴から魔法先生達に預けられたネギは一時間後に起きると同時にエヴァンジェリンに言われた言葉を思い出し、自分が敗北した事に思い至った。その事でネギは再び落ち込んだのだが、極々短時間とは言え彼女の魔法と拮抗した事を思い出し、父に追いつくためにもっと強くなると意気込んだ。

しかし余程にネギの事が心配だったのだろう。ガンドルフィーニはそう言った。

その直後だった。

「あんなぼーやの血なんぞいらんわ。とうの昔に吸う必要など無くなっているからな」

「失礼します、学園長先生」

茶々丸に扉を開けさせ、尊大な態度で入ってきたエヴァンジェリン

はそう言い放った。見せつける様に首から下げた雪のペンダントが彼女の胸元で揺れ、それに付けられた結晶が光を反射して蒼白く煌く。
室内の気温が数度下がった気がした。

「エヴァンジェリン、それは……」

「貴様、何の用があつてここへ来た！」

エヴァンジェリンの言葉に疑問を抱いた学園長が聞こうとするが、それは突如現れたエヴァンジェリンを警戒して臨戦態勢をとった魔法先生達の声で遮られた。

そんな彼らを、エヴァンジェリンはつまらない物を見るような目で見て一言。

「貴様等の戯けた話し合いを冷やかしにな。大方、私の魔力を再び封印すべきと言っていたのだろうが……無意味な事だ」

「どういう事だ！」

「今の私に封印など、何の役にも立たんと言つ事だ。試してみるか？ かけた直後にその封印を砕いてやるう」

そう言つて彼女は僅かにだが魔力を放ち魔法先生達を挑発する。

しかし今まで彼女の魔力を封じていたのはかなりの電力を使用して張られた結界であり、その結界があつたからこそ今まで彼女を抑えて居られたとも言えるだろう。

言い換えれば、そのような特殊な結界を使わなければ彼女の絶大と言つても過言ではない魔力を封印する事は出来ないと言つ事だ。

加えて今の彼女は完全に封印から解放された、真の意味での最強状態。気付かれないように封印を施し弱体化していた昨日までならいざ知らず、今の彼女を抑えるなど事実上不可能と言つていい。結界や封印の行使に特化した魔法使いが全力で封印して、数秒持てば

いい方だろう。

さらに600年と言う長い年月を生きている彼女は、魔法や武術に限らず、様々な分野に精通している（本人曰く、不老不死の為治癒魔法は不得手らしいが）。経験はそれだけで武器になる。吸血鬼として討伐対象にされ、生き伸びてきたその戦闘経験は計り知れない物がある。

さらに言えば、今この場には居ないがチャチャゼロと言う、悪口を言い合いながらも最も信を置いている彼女の初代従者も復活しているのだ。対抗できる者など、それこそ彼女と同クラスの規格外くらいだろう。少なくとも、今この場に居る人間では勝てるはずもないそれに思い至り、彼等は呻きながらも厳しい視線でエヴァンジェリオンを睨みつける。

「エヴァンジェリン、先の言葉はどういう意味じゃ？ ネギ君の血を吸う必要はないと言っておったが…」

「言葉通りの意味だ。気付かないか、それともとうとうポケたか？ 既に私を縛りつけていた呪いは解けていると言っているんだよ」「馬鹿な！ サウザンドマスターの呪いを解いたと言うのか！？」

魔力を引つ込めたエヴァンジェリンの言葉に、集まっていた教師の一人が叫ぶ。鬱陶しそうにエヴァンジェリンを見ると、その教師は途端に黙り込んでしまったが。

呪い自体は昂が、彼女が再度中学1年になった時に真言で以て解除しているのだがそれを知っているのはアスナ、さよ、茶々丸の3人だけである。まあ、もしかしたら学園長は気付いているかもしれないが。学園長が問う。

「……どうやって解いたか、聞かせてもらえんかの？」

「断る、貴様等に言う理由などない。それに、今回ここに来たのは

別の理由があるからだ」

「なんじゃ、その別の理由とは？」

「今回の修学旅行、私も参加するからな。クラスでの集計は既に終わっていたから直接言いに来た」

エヴァンジェリンがそう言うと、室内にまだ居た魔法先生達が一斉に文句を言い始めた。しかし彼女はそれを一睨みで黙らせる。

何故文句を言うのだろうか？ 何度も繰り返しているとは言え彼女は一応中学生だ。修学旅行に参加するのはおかしい事ではない筈である。

「今まで行けなかったからな、文句は言わせん。そして聞かん」

「む、むう……」

「用件はそれだけだ。行くぞ茶々丸」

一方的にそう言って彼女は学園長室から出て行くこととし、入口で立ち止まった。

「ああ、いらんちよつかいはかけてくるなよ？ 私の方から手を出すつもりはないが、手を出されれば反撃はする。尤も、15年ぶりに戻った魔力だから、加減できるか分からんがな」

ニヤリと薄く笑みを浮かべ、蒼い瞳に冷たい輝きを宿しながら彼女はそう言い、部屋を出て行った。彼女が出た後、茶々丸もまた一礼して出て行った。礼儀正しい生徒である。

緋乃宮昴は悩んでいた。

「むー……………」

「……………ねえ、さよちゃん。スバルどうしたの？ さっきからずっとあんな感じだけど」

「多分、新作の料理で悩んでるんだと思います。魔法球から籠を持って出てきてからずっとああして唸ってますし」

厨房で唸る昴を、店の手伝いで来ていたさよとアスナが見ていた。今はお客は一人もおらず、さらに今二人は休憩時間なので、二人はお茶やコーヒーを淹れてもらって飲んでいる。

そんな二人に見られていると気付いているのかいないのか、昴は手を顎に添えて何かを考えているようだった。

「新作って、ついこないだ苺のティラミス出したばかりじゃない。また新しいの思いついたの？」

「みたいですが。ただ、材料が……………」

「何？ 何かマズイ物なの？」

「……………冬の庭園で採れた物らしくて」

「あー……………そりゃ悩むわよね」

昴が悩んでいる理由を聞き、納得の声をアスナは出す。

昴の持つ魔法球にあるエリアの一つ、主に食材の採取と傷の治療に利用されるケセドは、さらに4つのエリアに分けられる。

そこはそれぞれ春・夏・秋・冬の名を持つ庭園と治癒の力を持つ湖で構成されており、季節毎の野菜・果物が常に実る楽園の様な場所なのだが、現実には有る物が採取できるのは春夏秋の庭園のみ。冬の庭園では、現実には存在するはずのない植物などが採取できる。ど

うやら今回採取したらしい植物もその一種の様だ。それらを使った料理は他の物に比べても美味しいのだが、現実になり材料を使っているため何を使っているかと聞かれたら返答に詰まる。確かにそんな物を出すのは悩まれるだろう。

「んー……………」

未だ悩み続ける昴を見ながら、二人はそれぞれの飲み物を飲み始める。

ちなみに、さよは実体化できるようになったその日に昴によって、魔法や魔法使いなどの存在を知らされており、魔法球の中に果物の採取に行ったこともある。

「そう言えば、ネギ先生はどうなったんですか？ エヴァンジェリンさんと戦ったらしいですけど」

「ああ、負けたみたいよ。当然って言えば当然なんだろうけど」

どこか心配そうに聞くさよに、アスナはそう言った。何故その場に居なかった彼女が勝敗の結果を知っているかと言うと、単純に朝ネギに会ってその雰囲気から察したのだ。

チリンチリーン

そうして談笑していると、扉に付けられたベルが鳴り来客を告げる。入ってきた人数は3人だった。

一人は長い金の髪を風に揺らし、シンプルな黒の衣装を着た少女。やや後方に緑の髪と、特徴的な耳飾り？を付けた少女を一人引き連れている。その胸元には、冷たく輝く雪のペンダントが揺れている。エヴァンジェリンとその従者、茶々丸だ。

茶々丸は無表情なので分からないが、普段は余裕の笑みを浮かべているエヴァンジェリンの顔は若干だか顰められている。嫌な事でもあったのだろうか？

残る一人は、これも特徴的な赤毛の少年。その身長に見合わぬ長大な杖を背に負い、肩には白いイタチを乗せている。

ネギと、その使い魔のカモだ。どうやらアスナが居なかったので檻から出していらしい。

いつも笑みを浮かべているその顔は硬く、どこか腰が引けているようにも感じる。

食事等をする場所に盲導犬等の身的障害者補助動物以外を連れてくるなど言いたい。

「いらつしゃいま……おや、珍しい組み合わせですね」

ベルの音を聞きつけたのか、厨房から出てきた昴がそう言った。途端にエヴァンジェリンは顰めていた顔をさらに顰める。

「ここに来る途中で偶然会っただっけだ。さつさと茶を出せ昴」

「相も変わらず人使いが荒いですね。何か他には？」

そう言った日常の会話をする二人を、ネギとカモは若干驚いた顔で見ている。まあ、600年生きる吸血鬼とまるで友人の様に目の前で会話されれば、それを知らない人間なら驚くだろう。

「あの、エヴァンジェリンさん」

「気安く挨拶を交わす仲になった覚えはないぞ」

何かを聞こうとしたネギに、間髪いれずに彼女はそう言う。これではまともな会話など出来ないだろう。そう思ったアスナが（からか

う目的もあつたのだろうが、若干ニヤケながら、出されたお茶を飲んでいたエヴァンジェリンに言う。

「エヴァちゃん、ネギのお父さんの事好きだったんだってねー」

「ぶふうあっ！！」

「！！　ぐあああああっ！！」

突然言われたことにエヴァンジェリンは飲んでいた茶を吹きだした。そしてその吹きだしたお茶は、不幸にも正面に居た昴の目に直撃した。

そしてエヴァンジェリンは咽た。

「ゲホツ……き、貴様何故それを！？」

「ネギが前に言ってたわよ」

「あ、アスナさ……」

「貴様！　やはりか！　やはり私の夢を見ていたんだな貴様ーっ！！」

アスナが知っていた理由は、どうもネギが話したかららしい。顔を赤くして叫びながらネギに掴みかかるエヴァンジェリン。しかしそれを茶々丸とさよが止めた。

「マスター、先に昴さんに謝った方がいいかと」

「アスナさんもですよ。エヴァさんがお茶を吹き出した原因は、アスナさんが言った一言何ですから」

そう言われて謝る二人。その二人に昴は「次からはやめてくださいね」と、お茶で濡れた顔を拭きながらそう言って注意了。若干涙が目元に浮かんでいたのは気のせいと思いたい。

「あの！ 父さんの事、教えてください！！」
「断る」

声を大にしてそう言ったネギに、エヴァンジェリンは即答した。それはもう、いっそ清々しいくらいに即答ぶりだった。擬音で言ったら「ドーン！」と言う感じだろうか？ それにしてはやけにあっさり断ったが。

「な、何ですか！？ 教えてください！」

「何故私が貴様の望みに応える必要がある。私には貴様の望みに応える義務も義理もない。第一、人の夢を覗き見るような輩に話す事など、あると思うのか？」

冷たくそう言い放つエヴァンジェリン。

しかしネギは諦めず、彼女の知っているサウザンドマスターナギの情報を聞き出そうとする。

そして20分程それが続き、遂にエヴァンジェリンが怒鳴った。キレたとも言つ。

「ああもう喧しい、そんなに知りたければ京都にでも行け！！そこに奴が一時居住んでた隠れ家があるはずだ！！ これ以上話しかけるな鬱陶しい！！」

そう言つて彼女はネギに背を向けて、お茶を飲み始めた。醸し出す雰囲気から、完全にネギに話しかけられる事を拒否している。

「京都！？ あの有名な……えーと、日本のどの辺でしたっけ？」

「京都、ね……」

どの辺りに京都があるか考えるネギ。そして彼は、アスナの声を聞

き彼女の方を見る。彼女はどこか懐かしい物を見る目で窓から空を見上げていた。

疑問に思ったネギは聞く。

「どうかしましたか？」

「何でもないわ。それより丁度良かったじゃない」

「ハイ」

「え？」

アスナと茶々丸の言葉に疑問の声を上げるネギ。そして彼は、今年の3 A の修学旅行先は京都・奈良である事を知る。

それに喜びの声をあげ、率先して京都を選択したであろう委員長ことあやかに感謝した。

かなりハイテンションで次の週が来ないかを待つネギ。クラスのメンバーと一緒にってはしゃいでいる。そんな彼を、しずな先生が呼びに来た。

「ネギ先生、学園長がお呼びですよ」

「あ、はい」

ネギは学園長室に向かった。

「修学旅行の京都行きは中止！？」

学園長室に大声が響く。その声を出したのは勿論、我等が子供先生ことネギである。実際には中止が確定したわけではなく、あくまで

可能性があると言っただけなのだがそれでもネギには十分すぎる程シヨックだったのだろう。目に見えて気が抜けている。

「うむ、京都がダメだった場合はハワイになるんじゃないが………これ、話はちゃんと聞かんか」

強い風が吹けばすぐにでも何処かに飛ばされてしまいそうな感じに気力の抜けたネギを学園長は注意する。注意された彼はふらふらと動いて壁に手をついた。

か細い声で「きょうと………」と言いながら、どん底に落ちた様な暗い雰囲気を放っているため正直に言っ引く。

「まだ中止とは決まっとらん。じゃが、先方がかなり嫌がっておっ
てのう」

「先方？ 京都の市役所とかですか？」

「いや、違うからの」

突っ込みを入れる学園長。ただ修学旅行に行くだけで市役所等が嫌がる事はあまりない。

学園長は続ける。

「関西呪術協会、それが先方の名じゃな」

「関西呪術協会？」

「実はワシ、関東魔法協会の理事もやつとるんじゃないが、魔法協会と呪術協会は昔から仲が悪くてのう………今年は一人魔法先生がおると言ったら急に修学旅行での京都入りに難色を示してきおったんじゃ」

「え、じゃあ僕のせいですか！？」

驚くネギ。誰もそんな事は言っていないのだが、どうやら魔法を使う先生は自分だけだと思っっているようだ。目の前の学園長は魔法使

いなのだが、それを忘れているのだろうか？

「ワシとしてはもーケンカはやめて西と仲良くしたいんじや。そのための特使として、君には西に行つて貰いたい」

そう言つて学園長は自分の机から一通の封筒を取り出す。その封印には麻帆良学園の紋章が付けられていた。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。が、道中向こうからの妨害があるやもしれん。彼等も魔法使いである以上、一般人に迷惑が及ぶような事はせんじやろうが……どうじやな？ なかなか大変な仕事になると思うが」

そう言つてネギの顔を見る。

彼は少しだけ考えて、元気よく返事をした。

「分かりました、任せてください学園長」

そう言つて彼は学園長から親書を受け取つた。

そして学園長室から出ようとしたネギだが、それを学園長が呼びとめる。

「そうそう、京都と言えば孫の木乃香の生家があるんじやが……」

「はい？」

「魔法の事はバレたらんじやろな？ わしは良いんじやが、あれの親の方針での、なるべくバレン様に頼むぞい」

「わ、分かりました」

そう言つて今度こそネギは部屋から出て行つた。

それを見送つた後、学園長は携帯電話を取り出しボタンを押して電

話を掛ける。4秒程待つて相手が出た。

『はい、喫茶ホタルブクロです』

「昴君かの？ ワシじゃ」

『確かに私は昴ですが、生憎と私の知り合いに「ワシじゃ」と言う名前の方はおりませんので。それでは』

「ふお！？ 待て待てワシじゃ、近右衛門じゃ！ 切るうとするでない！」

そう言うて通話を切ろうとする昴を慌てて止める。

『学園長ですか、普通に名前を言うて下さいといつも言っているでしよう』

「他の先生達はこれで通じるんじゃがお……」

『そう言うて金銭を振り込ませようとする輩がいましたからね。そう言う電話はすぐに切るようにしています。それより何か用事ですか？』

「聞きたい事と、頼みたい事があっての。まず聞きたい事なんじゃが、エヴァンジェリンの呪いを解除したのは君じゃろ？」

単刀直入にそう言う学園長。その声には、何がしかの確信が感じられた。

昴が答える。

『単刀直入に聞きますね。まあ、確かに解除したのは私ですが』

「やけにあっさり認めるのじゃな。まあ、理由は聞かんで置くとしよう」

『いいのですか？』

「大体察せるからもう。それよりも頼みたい事なんじゃが……修学旅行でネギ君のサポートとして行ってってくれんかのお？」

『自分の旅行で行くならともかく、修学旅行に関係のない私がついて行けるわけないでしょう。仕事もありますし』

学園長の頼みに、昴はそう言って断った。その声は何処か呆れ気味だ。

『それに、仮に行ったとして何をどうサポートしろと言うのです？』
『修学旅行の行き先は京都での、彼に親書を持たせておる。嬪殿にそれを渡すまでサポートして欲しいのじゃ』

『……呪術協会は、皆がとは言いませんが西洋魔法使いを嫌っています。そのテリトリーに子供とは言え魔法使いを送り込むなど………
…正気ですか？』

「ネギ君にも言ったが、ワシはもういがみ合うのは嫌なんじゃ。頼めんか？」

疲れた様な口調で学園長はそう言う。

それを聞いて昴は黙り込むが、5分後に口を開いた。

『……初日の昼はどうあがいても無理です。行くとしたらその日の夜遅くか、二日目からになります。それでも良いですか？』

「出来れば初日の昼からが良かったんじゃが、そこは仕方ないの。

頼む」

『分かりました。それでは』

「うむ、すまんの」

そう言って通話は切られた。

33話・修学旅行・初日（前書き）

無理矢理ですが、読んで貰えたら幸いです。

33話：修学旅行・初日

修学旅行当日、ネギは朝早くから起きて目覚まし時計が鳴るのを待っていた。遠足に行く前日の小学生の様に、興奮して眠れなかったのだろう。微笑ましいものである。

そして彼は、目覚ましが発すると同時に飛び起き、目覚ましを叩いて止め、服を着替え、準備していた荷物を身に付けた。

「アスナさん、木乃香さん、おはようございます！ 今日から修学旅行ですよ、ちゃんと起きてくださいね！」

「ネギ君はりきってはるなー」

「朝からテンション高過ぎでしょ。子供か……って、子供だったわねそう言えば」

朝からテンション右肩上がりのネギに起こされ、やや眠たげにそう言うアスナ。木乃香はアスナよりも早起きに慣れているため、起きてすぐにネギ用のおむすびを作り、台所に入ってしまった。

彼女はすぐにおむすびが入っているであろう袋を持って出てきた。

「はい、おむすび。朝ごはん用やから」

「あ、ありがとうございます！」

「ほんとテンション高いわね。大丈夫なの？」

「大丈夫です！」

寝不足を心配してか、アスナがそう聞く。しかしネギは有り余る元気を見せつけるかのように大声で言った。それを聞いて若干アスナが引く。

「そ、そう。でも、しおりとか持った？ 保険証と着替えもちゃん

と持つてる？」

「大丈夫です！ 一昨日から全部入れてあります！」

教員として早めに行かなければならないネギにアスナは忘れ物がな
いか聞く。まるで保護者である。それに返答しながら、ネギはまる
で子犬の様にはしゃいでいた。

そして、全ての準備が終わって彼は駅に向かう。そんな彼の服の中
から、カモがひよっこりと顔を出し注意する。いつの間にやら、檻
から出されていたようだ。

「アニキ、油断すんなよ。関西呪術協会の長への親書つてのもある
んだし」

「うん、父さんの住んでいた家つて言うのも探したいしね」

会話がかみ合っていないが、いつもの事なので置いておこう。ネギ
はそのテンションのまま電車に乗り、目的地の駅に向かった。

そして駅についた彼を出迎えたのは、同じく教師として早めに来て
いた新田先生を筆頭とした教師陣数名と、時間を待ち切れずに早く
に来た数名の3 Aの生徒達。
そして

「フフフフ……ハハハハハ！ 外だ！ 15年ぶりの外だ、
旅行だ！」

「60年ぶりです……60年ぶりに学園の外に……う、うっう……」
「マスター、さよさんも落ち着いてください」

高笑いしている、ネギ以上にハイテンションな吸血鬼と、泣き声こ
そ出さないが号泣している元幽霊であった（元幽霊と言っても、そ
の事を知っているのはほんの数人だけだが）。その傍に居る茶々丸
がネギを見つけ、僅かにお辞儀をしてくる。傍らにある荷物は、思

った以上に大荷物だ。その中からくぐもった笑い声が聞こえるのは気のせいと思いたい。

そんな彼女達を、一般人が生温かい目で優しげに見ていた。他の生徒達は「自分は知り合いではありません」的な感じで目を逸らし、少々離れた場所に立っている。

思わずネギの動きが止まる。まあ、それは仕方ないだろう。呪いによって学園外に出られない筈の彼女がここに居るのだから。実際には既に呪いは解けているため、出るも入るも自由なのだが、彼がそれを知るはずもなく。

混乱する彼に新田先生が話しかけてきた。

「お早うございますネギ先生」

「あ、新田先生お早うございます。あの……」

「どうかしましたかな？ ……ああ、マクダウエル達ですか。私が来た時には既にあの状態でしたから、余程に楽しみだったのでしょう。とは言え、流石に迷惑になりますな。失礼」

どうやら彼女達は先生達よりも早く駅に来ていたらしい。

挨拶を交わすと、新田先生が未だ高笑いを続けているエヴァンジェリンに近づいて行った。茶々丸がそれに気付き、エヴァンジェリンに注意するがテンションが振り切れているのだろう。気付かない。そして彼女は新田先生に注意された。

そして、暫くして他の生徒達と一緒にアスナと木乃香がやって来た。その手には修学旅行用の荷物の他に、箱の様な物が4つ程袋に入れて下げられている。弁当か何かだろうが、ふわりと良い匂いが漂ってくる。

「何か、エヴァちゃん随分テンション高いわね」

注意されてなお高笑いをやめないエヴァンジェリンを見てアスナはそう言う。

まあ、それは仕方がないだろう。ナギの掛けた呪いのせいで15年もの間学園から出る事は叶わなかったのだから。

「アスナさん、それ何ですか？」

「コレ？ 私と木乃香、刹那、さよちゃんのお弁当。軽い物だけだね」

「ネギ君ご飯ちゃんと食べれた？」

「あ、はい。おにぎりありがとうございます」

ネギの問いにアスナはそう答えた。ちなみにこの弁当、昴が朝早くに起きて（普段から4時には絶対に起きているが）作った弁当であるが、アスナはそれを言わない。以前それでおかず争奪戦が起こったからだ。

そんな事を思い出しながら彼女は、未だ涙ぐんでいるさよに近づいて行く。

「さよちゃん」

「うう……あれ？ アスナさん。どうかしましたか？」

「コレ、さよちゃんに渡してくれってスバルに頼まれたの」

そう言っアスナはポケットから一つのブローチを取り出す。十字架と翼を組み合わせたデザインで、十字架に付けられた黒かと思い込むほど濃い紫の結晶を、翼で十字架ごと抱き包むように作られ、不思議な雰囲気を感じているように感じる。ちなみに十字架は金、翼は銀製だ。

それを手渡されたさよが聞く。

「何ですか、これ？」

「さよちゃん専用のブローチ。スバルが言うには、さよちゃんの行動を手助けしてくれるらしいわよ？ 他にも何かありそうだけど」

魔法関係者として知られないよう、ネギ達に聞こえないようにアスナは小声でさよにそう言う。

ほぼ毎日と言っていいほど実体化しているため忘れられがちだが、彼女は本来霊体　しかも地縛霊である。

精霊種となり、縛りが無くなった現在は自由に動けるようになったとは言え、それは麻帆良と言う限られた土地の中でのみ。学園の外でも学園内と同じ様に動けるかは分からない。

最悪の場合、別の場所に縛られ再び動けなくなるか、除霊されてしまふ可能性もある。それに思い至り、危惧した昴は、その可能性を出来る限り低くするために、彼女の力と存在感を高める闇の属性を持ったマナクリスタルを使いこのブローチを作り上げた。

が、その体に触る事が出来るとは言え、先にも示したように彼女は霊体である。

霊体は魔力や気と言った物の影響を物質よりも受けやすい。その結果として近い未来、彼女は闇の上位精霊になってしまうのだがそれは今は置いておこう。

なお、何故闇の属性かと言うと彼女の適正が関係していたのであって、決して性格が暗かったとか存在感が薄いからと言う理由ではない。断じてない。

「あ、ありがとうございます！」

「お礼ならスバルにね。私は渡したただけだし」

アスナに礼を言って、渡されたブローチを早速身につけるさよ。身

につけた瞬間、彼女の存在感が増した気がした。
そしてアスナはネギにひつついていたカモを見つけ、もしもの時用に携帯していた檻（折り畳み式）に放り込んでネギに返した。こ丁寧に鍵までかけて。

そうこうしている間に生徒が揃い、京都に向かう時間となった。それぞれの班ごとに点呼を取り、全員が居る事を確認してからホームに向かい、そこに来た新幹線に乗り込み東京に向かう。そこで乗り換えて京都に向かうのだ。

そして乗り換えた新幹線内で生徒達は雑談をしたり、持ちこんだカードゲームで遊んだりしている。

「唐揚げ貰いつ！」

「ちよつ、何すんのよ！」

「良いじゃん、まだあるんだし。それに、それ昴さんの作ったやつでしょ？ いつも食べてるんだから寄こせー！」

「自分の弁当あるでしょうが！ コラ、返せー！！ って言うか、何であんたら全員私の弁当だけ狙ってんのよー！！」

「卵焼き貰うアルよー」

「クーフエ、アンタもかーっ！！」

どうやら結局、弁当争奪戦は始まったらしい。昴の料理は結構人気のようにだ。しかし、何故か木乃香や刹那、さよの弁当は狙われずにアスナの弁当だけが取られていく。内容物は同じなのに、何故であるのか？

「あれ？ セつちゃんどこ行くん？」

「ちよつとお手洗いに……すぐ戻って来ますから」

一緒に弁当を食べていた刹那がそう言って席を立ち、トイレに向か

う。

そして、彼女が席を立って暫くしてアスナは何かを感じ取った。変に思い、しかも周りがうるさかったので顔を上げるアスナ。そして目に入って来た光景に気が抜けた様な声を出す。

「……………カエル？」

何でカエルが……と思いつながら周りを見るアスナ。見ればそこかしこでカエルが跳びはねていた。

一匹捕まえて見てみると、本物ではなく、呪符で作りだした式神であることにすぐに気がついた。

溜息を吐きつつ躊躇なくそれを握り潰すアスナ。すると、煙と音を立ててそれは紙に戻った。

ちなみに他の生徒達は、突然のカエルの大量発生によりほとんどが混乱していたためアスナの事を見ていなかった。

全部で107匹のカエルが捕獲されて暫くして刹那がお手洗いから戻って来た。が、何か変な感じがした。

「どうしたの刹那、何かあった？」

「ネギ先生が、式神に親書を奪われまして……いえ、奪い返したんですけどね。ビックリしましたよ、トイレから出たら飛んでくる式神が居たんですから」

「親書？ 何それ」

アスナが聞くと、刹那は木乃香に聞こえないように小声で説明を始めた。と言っても、話す事など西と東の和平のための物としか言えないのだが。

しかしそれを聞いたアスナは呆れていた。和平を求めているのなら、もっと名の知れた、それなりに実績があり、西と接点がある人間に

持たせて送るべきだ。名は知れているかもしれないが実績のない子供先生に、しかも旅行とは言え学業の一環でもある修学旅行中に持つて行かせるなど、普通はしない。

「ねえ、あの学園長馬鹿なの？　いくらなんでも見通しとか甘過ぎでしょ」

「私に言われても……」

思わずそうこぼしたアスナに、刹那は苦笑しながらそう返した。もうすぐ京都である。

京都に着いた生徒達は、団体行動で一日目の目的地である清水寺に向かった。澄んだ青空の下、その舞台から京の街を一望できる。

「京都おーっ！！」

「ここが噂の飛び降りるアレ！？」

「誰か、飛び降りれっ！」

「では拙者が……」

「おやめなさい！！」

元からかなり元気で騒がしいと評判の3　Aだが、修学旅行と言う三年に一度のイベントの為だろうか、いつも以上に元気で騒がしい。その傍らで綾瀬夕映が清水寺に関する情報を話しながら、いつもと同じように紙パックのジュースを飲みつつ何処か恍惚とした表情で欄干に頬をすりつけている。正直に言ってしまうえば異様な光景である。

「マスター、如何ですか？」

「ああ、実に良い」

そんな生徒達の事は完全に無視して風景を堪能している主従が一組。エヴァンジェリンと茶々丸だ。

麻帆良に封印されて15年、初めてとも言える修学旅行に彼女は表情には出していないが内心かなりテンションが上がっていた。今まで行けなかったのだからしょうがないかもしれないが。

「だが修学旅行だけでは時間がまるで足りん……茶々丸」

「分かりました。春夏秋冬、それぞれの季節で旅館と料亭に予約を入れておきます」

そう言つて茶々丸は有名な老舗旅館と料亭に電話を入れ、予約した。どうやらそれぞれの季節の連休に来るつもりらしい。

そんなエヴァンジェリン達と風景を見ながらアスナは歩いていると、何やら騒がしい場所に出た。何事かと思ひ生徒の一人に聞いてみると、恋占いの石に向かう道の途中に落とし穴があり、そこに二人の生徒　あやかとまき絵が落ちたらしい。さらにその中にはまたカエルが居たようだ。

「カエルつて、新幹線のと同一犯かしら？　でも、何考えてるのかしら……？」

カエルに何か思い入れでもあるのかしら？　そんな事を思いながらアスナは音羽の滝に向かう。既にほかの生徒達（エヴァンジェリン達は除く）は先に進んでいたらしく、少し早足で向かう。

「……で、何よこの状況」

「どうも滝の水に酒が混入されていたみたいです。それに気付かず

水を飲んだ委員長達が「靈験あらたかな味」と言って飲み進めて、この有様に……」

音羽の滝に到着したアスナがまず目にした物は、滝の下で顔を赤くして眠りこけているクラスメイト達と、それを起こそうとしているネギだった。中には鼻提灯を出して寝ている者も居り、風情も何もない。

他の観光客や生徒が何事かと思つて見ている。

何故こんな状況になったのか刹那に聞いたアスナは、再び深い溜息を吐く。

「一体何がしたいのかしら？ 過激派は……て言うか、コレ過激派つて言つていいの？」

「え、と……親書を渡すことへの妨害、だと思えますけど……」

「たんなる嫌がらせじゃない、コレ。営業妨害にもなるし」

一体過激派は何をしたいのか。真剣に悩みながら、溜息を吐きつつ酔いつぶれた者達の介抱に向かうアスナと刹那。その様子を妙に思ったのか、新田先生と瀬流彦先生も来た。

「ん……？ 何か、お酒くさくないですか？」

「あ、あああのあの、これはえと……」

「何か、滝の水にお酒が混ぜられてたみたいです。それを知らずに飲んだいいんちよ達がこうなつて」

「何ですと？」

いい訳をしようとしたネギの言葉を遮り、アスナは事情を説明する。それを聞いた新田先生は盛大に顔を顰め、すぐにそれを確かめると酔いつぶれた生徒達をバスに運ぶように指示し、教師陣を集めて今後の方針について話し合った。それを見ながらあやか達を運びつつ、

アスナは再度溜息を吐く。

「私、今日で何回溜息吐いたかしら……？」

そして今日、今までで最も深いだろう溜息を吐いた。

その様子を、さよが苦笑しながら見ていた。

教師陣の話し合いの結果、修学旅行の中止は無くなったが全てのクラスに注意することになった。そして注意した後、すぐに自分達が泊る予定のホテル嵐山に向かった。幸い、その後は特に何も起こる事はなく嵐山に到着した。

そして暫く時間が経った現在、ネギは露天風呂に入っていた。

「風が気持ちいいねー」

「風に吹かれながら温泉に入って月を見て酒を飲んで……風流だねえ。これで桜咲刹那の件が無けりゃなあ」

露天風呂で一人（と一匹）風を感じながら癒されながら、ネギはカモと話していた。何故かカモは檻から出て、その手にお猪口を持って酒を飲んでいる。何処から持って来たのだから。と言うか、オコジヨが風流だと言うと酷く違和感がある。

「あいつ、いつも木刀みたいなもの持ってるし、魔法使いのアニキじや呪文唱える前に負けちまうよ」

「魔法使いに剣士は天敵だよ」

ダレながら泣きごとを言うネギ。すると物音がし、誰かが入って来

た。

「んお？」

「誰か来た。新田先生達かな？」

そう言つてネギとカモは入口の方を見る。そこには、先程から話題に挙げていた刹那が居た。当然のことながら、全裸である。

思わず隠れるネギとカモ。尤も、カモは彼女の肌や控え目な胸を覗き見ようとしているが。イヤらしい小動物である。

（ななな、何で！？ 入口は別なのに中は同じなのー！？）

（混浴つてんだよアニキ。ここは良い旅館だねえ……）

そう言いながらカモは気配を消して刹那を見る。その台詞は実にオヤジ臭い。完全に気配を消しているあたり、どれほど同じ様な事をしてきたのが窺える。もしここに昂が居れば、間違いなく説教の対象になっていただろう。ここには居ないから意味はないが。

カモにつられてネギも簡易の杖を持って覗き見る。

月明かりに照らされ、彼女の白い肌が美しく浮かび上がっている。

（はわぁー……背はちっちゃいけど綺麗な人だねー。肌が真白だ）

（あーいうのを大和撫子つてんだぜアニキ）

思わず見とれてしまうネギ。カモも、その脳裏に焼き付けようと言わんばかりに乗り出す。それでも気配を完全に断っている辺り、いっそ関心すらしてしまう。憧れたりは間違つてもしないが。

見られているとは露知らず、刹那はまずお湯を掛けて体を温め、湯には入らずにそのまま体を洗い始める。熱のためか、白い肌が薄らと桜色に染まる。

(……じゃなくて！ 何で！？ 今僕入ってるのに！？ て言うか、覗いちゃった！？)

(見とれてる場合じゃねえよ！ ズラかるぜアニキ！ パートナーもなしの接近戦じゃ勝ち目なんてねえ！)

そう言つて浴場から出ようとするネギと力モ。覗きは立派な犯罪である。

すると刹那が呟いた。

「ふう……困つたな。魔法使いのネギ先生なら何とかしてくれるかと思つたんだが……あの調子だと、当てにはならないかな」

(え？ な、何で僕が魔法使いだつてことを？ ま、まさか……本当にスパイ？)

そう考え、杖を持つ手に力がこもる。しかし同時に、僅かながらに殺気も漏れたのか、刹那に気付かれた。彼女は殺気を感じた瞬間、照明を破壊し側に置いていた野太刀を手に取り構える。器物破損である。そして、水の側に置いて錆びないのだろうか？ と言うか、前提として何故風呂場に刃物を持って入る？

「何者！？」

そう言いながら刹那は、気配を感じた場所に向かって斬岩剣を抜刀術で放つ。その太刀筋は容易く岩を切り裂き、ついでにネギのアホ毛を切り飛ばした。何度も言うようだが、器物破損である(ネギの髪は除く)。そして殺人未遂である。

しかしネギも、それに驚きながらもすぐに対応し、早口で詠唱を終えて武装解除の魔法を発動。彼女の野太刀を弾き飛ばす。

が、彼女はひるむことなく突っ込んで来、ネギの首と急所を掴んだ。

「何者だ、答えねばひねり潰すぞ？ …… って、あれ？ ネギ先生？」

据わった目でそう言い、彼女はネギの急所を握っている左手に力を込める。しかしネギを捕まえて余裕ができたのか、彼女は少し気を抜き自分が捕まえている者の正体に気付く。

そして彼女はすぐにその手を離れた。ちなみに顔は赤く染まっている。

「す、すみませんネギ先生！ こ、これはその、仕事上相手の急所を狙うのはセオリーと言うか、その……」

「て、テメエ桜咲刹那！ やっぱり関西呪術協会のスパイだったんだな！？」

「なっ！？ 違う、誤解です！」

「とぼけんじゃねえや！ ネタは上がってたんだ、とつとと白状しやがれ！」

顔を青くして震えるネギを置いて、カモは刹那に詰め寄る。しかし彼女はそれを否定し、剣を鞘に納めて言った。

「私は敵じゃない！ 一応先生の味方です！」

「え……？」

それは一体どういう事か。すぐに聞こうとしたネギだが、それは脱衣場から聞こえてきた悲鳴によって遮られた。つくづく遮られることの多い少年である。

「今の悲鳴は！？」

「お嬢様！？」

木乃香の悲鳴を聞いた二人はすぐさま走りだし、脱衣場へと向かう。途中、カモが振り落とされて岩の一つにぶつかり、沈んで行ったがそんなものは当然の如く無視された（ネギは何やら慌てていたが）。そして二人は脱衣場で、何故か大量に存在する人形の様な造形の猿と、その猿に下着を脱がされそうになっているアスナと木乃香を見た。尤も、アスナは時折拳や蹴りで猿を吹っ飛ばしていたが。

「……………猿？」

「せつちゃんにネギ君！？ あくん見んといて〜」

「えうつ！？ い、一体これは……………！？」

思わぬ事態に一時停止する刹那とネギ。そして、止まっている間に木乃香の下着が全て脱がされた。

脱がした下着を、猿達はトロフィーを掲げるかのように持ちあげる。

ぶちっ

そして刹那から、何かが切れる音がした。

「この猿共があー！！ このちゃんに何をしているーっ！！」

キレた刹那が、ギシヤアと牙をむきながら夕凧に気を纏わせて猿達に切りかかろうとする。その様子は、「塵の一粒すらこの世には残さん！！」と言わんばかりであった。

その迫力には、アスナすら引いた。

「だ、ダメですよ！ おサル切っちゃ可哀想ですよ〜！！」

「なっ！？ は、離してください！ コイツらは切っても紙に戻るだけで……………！」

そんな刹那を、ネギは猿が可哀想だからと言う理由で止めた。その際にどさくさにまぎれて彼女の胸に手が触れたが、誰もそれに気付く事はなかった。それだけ刹那もキレていたと言う事だろう。アスナは刹那の気迫に引いていたようだが。

そんな事をやっている間に木乃香が猿達に連れて行かれそうになり、それを見たアスナが追うが、それよりも早くネギを振りほどいた刹那が追い付き、剣を見舞う。

「神鳴流奥義……百烈桜華斬！」

無数の斬撃がほぼ同時に放たれ、木乃香を運んでいた猿達を真っ二つにした。切られた猿達は元の姿である紙に戻り、地面に落ちる。そして彼女は木乃香を抱きとめ、無事を確認する。

「このちゃん！ 無事！？ 怪我ない！？」

「だ、大丈夫やえ。ちよつとびっくりしたけど……」

刹那が木乃香に怪我などが無いか聞く。が、すごい勢いで聞いて来るために木乃香も若干だが引いているようだ。

そんな二人をしり目に、アスナは周囲を警戒する。まだ術者が近くに居るかもしれないからだ。

「っ！ そこっ！」

そしてアスナは、木の一つに対して気で強化した石を高速で投げ付けた。が、手ごたえはなく、逃げられたことに顔を顰める。暫くの間、アスナと刹那はその木の方向を睨みつけていた。

34話・擾われる西の姫（前書き）

今回、今までで一番長いです。

34話：攫われる西の姫

温泉での騒動を終え、アスナは刹那と一緒に旅館の入口等に呪符を張って回り、式神返しの結界を作っていた（木乃香は先に部屋に帰った）。

ネギとカモには刹那を手伝ってくると言って別れている。ちなみにカモは再び檻に叩き込まれている。

「楽観的過ぎるかもしれないけどさ、嫌がらせに対してこの結界は仰々しすぎるんじゃないの？ 式神返しと侵入者感知って……侵入者感知は瀬流彦先生も張ってるんだし、必要ないと思うんだけど」「ですが、念には念を入れておくにこした事はありません。いつ過激派がこのちゃんを狙って来るか分かりませんから」

「まあ、そうなんだけどさ。本気で来られたらそれはそれで困るし。でも、どうしても私には過激派って思えないのよね……やること為す事、嫌がらせの域を出ないし」

そんな会話をしながらまた一枚、刹那は脚立に乗って呪符を張って行く。背が低いため、脚立に乗っても背伸びをしなければ張れないのは妙に微笑ましさを感じさせる。何故アスナに頼まないのだろうか？

確かにアスナの考えは楽観視が過ぎるだろう。仮にもここは関東の魔法使いにとっては敵地であり、向こうのホームグラウンドだ。嫌がらせを隠れ蓑に、何をしてくるか分からない。

まあ、その嫌がらせが蛙だったり落とし穴だったり、観光名所の水に酒を混ぜたりするのではそう思っても無理はないのかもしれないが。

と言いか、魔法先生は一人だけではなかったか？ アレであろうか

？ ネギは数えずに、瀬流彦を引率の魔法先生だと学園長は関西呪術協会に言ったのだらうか？

「先の浴場での式神もあるでしょう。あれは確実にこのちゃんを狙っていました。まだ術者が近くに居る可能性もあります。いえ、まず間違いなく居ると見て良いでしょう」

「そう言えばそうよね。木乃香さつき攫われかけたんだし……ゴメン、気が抜けてた。もしかしたら、こういう風に気を抜かせるのが狙いだっただかもしれないわね」

先の騒動を思い出し、アスナはすぐに謝罪する。先程風呂場が出てきた猿もどき達は、どう考えても木乃香を狙っていた。下着も集中的に脱がそうとしていたし、脱がした後は数匹で彼女を何処かに運んで行こうとしていたし。

……何故下着を脱がそうとしていたのか、そこは疑問であるが。

「あ、居た。何やってるんですかアスナさん、刹那さん」

そうこうしているとネギが力モの入った檻を持ってやって来た。その檻の中では力モがぐったりとしている。どうやら湯中りし、さらにアスナに叩き込まれた事が効いているようだ。すぐに復活しそうではあるが。

「式神返しの結界です。まだお嬢様を狙って来るかも知れないので」「私はさつきも言ったでしょ？ 刹那の手伝いよ」

そう言っ二人は呪符を張る作業に戻ろうとする。しかし、札を張って結界を作ると言う事に興味を持ったのか、それとも刹那が術を使える事に驚いたのか、ネギが聞く。

「刹那さんは日本の魔法を使えるんですか？」

「まあ、剣の補助程度には……」

「なるほど、ちょっとした魔法剣士ってことだな」

カモが納得したように頷く。いつ復活したのであるだろうか？

それを見ながら、呪符の束を整えながら刹那が言う。

「敵の嫌がらせがかなりエスカレートしてきました。それなりの対策を講じなければ、お嬢様にも被害が及びかねません。しかし……」

「しかし……何ですか？」

「ネギ先生は優秀な魔法使いだと聞いていたので上手く対処してくれるかと思っていたのですが、意外に不甲斐なかつたので敵も調子に乗ったみたいです」

「す、すいません。まだ、未熟なもので……」

冷めた目でジト……とネギを見、溜息を吐きながら刹那がそう言う。ネギは恥ずかしさかそれとも別の理由からか、顔を赤くして縮こまった。

「んじゃ、やっぱアンタは……」

「味方です。浴場でもそう言ったでしょう？」

「す、すまねえ剣士の姐さん！俺とした事が、目一杯疑っちゃった！」

「ごめんなさい刹那さん。僕も協力しますから、襲って来る敵について教えてもらえませんか？」

謝りながらネギがそう言う。その目と表情を見るに、どうやら本気で協力しようと思っっているようだ。

それを見て刹那は少し迷ったようだが、一応魔法使いなのだから敵の事は知っておいた方がいいと思ったのだろう。話し出した。ちな

みにアスナはネギが来てすぐに自販機に飲み物を買に行つたためこの場には現在居ない。

「……おそらく、私達の敵は関西呪術協会の過激派に属する一部勢力。陰陽道の呪符使いと、それが使役する式神です」

「陰陽道？」

聞き慣れない言葉にネギが聞き返す。それを予測していたのか、刹那は説明し始める。

「古くから日本に伝わる日本独自の魔法です。正確に言えば、大元は大陸から入つて来たものらしいですが、長くなるのでそれは置いておきましょう。呪符使いのほとんどがこの陰陽道を基本としていますが、呪文を唱えている間は無防備になります。この弱点はネギ先生達西洋魔法使いと同じですね」

そうやって刹那は一度言葉を切つてネギを見る。流石は天才と云うべきか、見た感じではそれなりに理解しているようだ。しきりに頷いている。

刹那が説明を続ける。

「魔法使いが従者を従えその身を守らせると同じで、陰陽術師は善鬼・護鬼と言つ式神を護衛として使役しているのが普通です。まあ、強力な術者となると自分も出てきて戦つた事もありますけど」

「ぜ、ぜんきにござ君ですか……強そうですね……」

「さらに関西呪術協会は、私も修めている京都神鳴流と深い関係にあります。元々、神鳴流とは京の都を護り、魔を討つために組織されたもので掛け値なしの戦闘能力を持っています。呪符使いの護衛として付く事もあり、そうやってしまえば非常に手強いと言わざる

を得ません。まあ今の時代、そんな事は滅多にありませんけど」

「お、オイオイマジかよ！ それってかなりヤベーんじゃないか！？」

説明を聞いたカモが大声を出す。しかし幸いにも他の生徒や教師はこの場におらず、また近づいて来る気配もない。

「それじゃ、やっぱり神鳴流っていうのは敵じゃないですか!？」

「そうですね。しかも私はお嬢様を護るためとは言え西を離れて東に付いた、彼らにしてみればれっきとした裏切り者。ですがそれでも良いのです。お嬢様を……このちゃんを護れば私はそれで」

「全然良くないでしょ」

聞こえた声に通路の方を向くと、アスナが両手に飲み物を持って戻って来た。その顔は何処か不機嫌で、気のせいではなければ刹那を睨んでいるように感じる。

「アスナさん」

「アンタが裏切り者なら私もそうでしょ。私だって京都に居て、神鳴流を習ってたんだから」

「そうなんですか!？」

「そうよ。ついでに言えば木乃香と刹那は幼馴染の親友。小さい頃には私も京都に住んでたから、その時にね」

アスナの言葉にネギが驚きの声を上げる。それはそうだろう、一般人だと思っていた人が実は昔から裏に関わりのある人間だったのだから。

その事を聞いてカモが目を光らせる。大方、また従者に……とても考えているのだろう。懲りない小動物である。

「ですが、アスナさんはあの人と一緒に長の客人として居たのでしよう？ そんな人を裏切り者扱いは……」

「それでもよ。それに、同じ流派を習っているのにアンタは裏切り者扱いされて、私は客人だったから何も言われなくて言うのは凄く嫌なの」

「アスナさん……」

「親友でしょ、私達。それに、アンタがそんな事言うとお、おと……おとう、さんも……その、悲しむだろうし……」

そう言っただけをトマトの様に真っ赤に染めてそっぽを向くアスナ。どうやら「お父さん」と言うのがとても恥ずかしかつたらしい。ちなみに彼女が言う「お父さん」は言わずもがな、昂である。滅多に言われない言葉の為、おそらく現在、盛大にくしゃみでもしている事だろう。

ちなみに今回アスナが昂の事をそう言ったのは、ネギとカモに関係者であることを知られなくなつたからである。尤も、奈良でばれることになるので意味はあまりないのだがそれを今の彼女が知るはずもない。

「えつくし!!」

「珍しいのう、君がそんな盛大にくしゃみをするとは。風邪でも引いたかの？」

「いえ、熱はありませんし、自慢ではありませんが私は風邪を引いた事ありません。おそらく誰かが噂でもしているのではないのでしょうか？ えくしつ!!」

「魔法世界に有ると言う君のファンクラブか？ うらやましいのう、さぞやモテるんじゃないかな」

「やめてください、私はあの人たちに追われた事を思い出したくないんです。何で気配を完全に消しているのに私の居場所を察知できるんですか。おまけに魔獣顔負けのスピードで追ってきて……真言でようやく逃げ切れるなんて、おかしいでしょう色々。」

「魔法で脚力を強化しとったんじゃないの？ 身体強化すればそれぐらいは可能じゃと思うが」

「いえ、その時に魔法の感じはしませんでした。ですからアレは私にとって、ケルベラスに次ぐトラウマです」

「そ、そこまでのか？」

「そこまです。考えても見てください、猛スピードで追いかけてくる人の大軍を……ああ、思い出しただけで背筋に寒気が……」

「じゃあ決まりですね！ 3 A 防衛隊結成ですよ！ 関西呪術協会からクラスの皆を守りましょう！！ アスナさんと桜咲さんが居れば百人力ですよ！！」

「何よ、その恥ずかしいネーミングは」

空気をぶち壊され、さらに戦隊物の様でそうでない恥ずかしい名前物を結成されてアスナは文句を言う。しかしそれはスルーされた。

「敵はまた来るかもしれませんから、僕外に見回りに行つてきます！」

「ちょっとネギ、あまり動いたら……」

「いえ、良いです。私達は部屋の守りに付きましよう」

アスナは飛び出して行くこととするネギを止めようとするが、刹那に止められた。

しかし出て行く前にネギがアスナに言う。

「アスナさん、魔法に関わってたなら言ってくださいよ。そしたらもっと気楽に相談出来たのに……」

「何でアಂತアに相談されなきゃなんないのよ。それに、私は平穩に生きたかったの。せつかくのんびり生きてられたのに、まったく……」

「……」
「姐さん、やっぱアニキと仮契……」

「絶対にイヤって言ったでしょ、いい加減にしないと踏み潰すわよ……」

文句を言ってくるネギに対してアスナは文句を文句で返す。そしてカモが再び仮契約を迫ってくるが、全てを言い終える前に速攻で拒否した。本当に懲りないオコジヨである。

そしてアスナと刹那は部屋に戻り、それを見送って旅館の外に向かって走り出すネギだが、入口で従業員と思しき女性とぶつかってしまった。押していた台車からタオルやシャツが床に散らばる。

「す、すいません！ 余所見して……」

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんお客様！」

すぐに散乱した物を拾い集め、折り畳んで台車に入れる。入れ終わって再び謝った後、ネギはカモの入った檻を持って外に出て行った。

「……ふふ、入れてくれておーきにな、坊や。おかげで結界を破る必要が無くなったわ」

ぶつかった従業員が、出て行ったネギを見ながらそう呟いた。その目には、何かを企んでいる様な妖しい輝きがあった。

「ほな、お仕事はじめましょか」

そう言っただけで彼女は台車を押しながら旅館の中に入って行った。

午後11時、3 A・6班の一人、元地縛霊の現精霊種である相坂さよは唐突に眠りから覚めた。

ちなみに現在、6班が割り当てられた部屋には彼女とザジしか居ない。

同室の刹那は教師の目を盗みながら見回りをし、エヴァンジェリンはチャチャゼロと一緒に露天風呂で月を見ながら茶々丸に用意させた酒を飲んでのんびりとしている。わざわざ人払いの結界まで張って、ご丁寧な事だ。そしてザジは寝ているのか起きているのか分からないが、布団が規則正しく動いていることから見るにおそらく寝ているのだろう。

「何だろ、この感じ……ざわめいてる……？」

旅館を包む静寂と暗闇の中に何かを感じたのか、体を布団から起こし、虚空を見ながらさよはそう呟く。その赤い目は、暗闇を通してここではない何処かを見ているようにも見える。

「おかしいな、何でそんな風に感じるんだろ？」

そう疑問に思いながら、さよは再び眠ろうとする。しかし目がさえってしまったのか、一向に眠気は訪れない。

気分を落ち着かせるために窓辺に行き、彼女は月を見る。眠れない

ときに、昴がいつもそうしている事を知っているため自分にも効果があるかと思っただろう。

少し見ていると、視界の隅で何かが動いた気がした。気になった彼女はそちらに視線を向ける。そして視界に入ってきたのは……

「…………お猿？」

やけに頭が大きい、猿の着ぐるみだった。遠目からでも着ぐるみと分かるそれが旅館から出て、何処かに走って行く。それを見ていたさよだが、ふと妙な事に気付いた。

「あれ？ 誰か抱きかかえてる？」

そう呟くさよだが、彼女は猿が誰を抱きかかえているかは見えていない。そもそも猿を背中の方から見たのだ。前面を見えるはずがない。

ならば何故それに気付いたか、それは彼女の渡されたブローチが関係している。

彼女が渡されたのは、極めて純度の高い闇属性のマナクリスタルを使ったブローチである。特殊能力こそ付けられていないが、純度100%と言ってもいい闇の魔力は肉体と言う器を持たない彼女の霊体に直に影響を与え、その在り方を少しずつ、しかし確実に闇の精霊へと彼女を変質させていた。

その影響は既に出ているらしく、完全ではないとは言え闇を通じた感知は自然と習得しつつあるようだ。

「こんな夜中に着ぐるみ着て逃げるような事一般人がする筈ないし、多分、魔法に關係する事だよね……アスナさん達に連絡しておこう」

そう言っただけで彼女は部屋を出てアスナの居る5班の部屋に向かう。し

かし、そこでネギではなくアスナ達の名が出てくると言う事はネギはあまり信用されていないと言う事だろうか？

「アスナさん、ちょっと話が……何してるんです？ 刹那さんも」「さよちゃん。いや、さつきから木乃香がトイレから出てこなくてね。いくらなんでも長いから……」

「こ、木乃香さ……私にも、我慢の限界と言うモノが……ううう……」
『入つとりますえ』

部屋にあるトイレの前で、アスナと刹那、そして夕映が立ち往生していた。話を聞くに、どうやら木乃香が出てくるのを待っているらしい。

トイレ自体に用があるのは夕映だけの様だが。

「どうかしたんですか？」

「えと、ついさつき猿の着ぐるみが誰かを抱えて旅館の外に出て行つたんですけど」

「なんですって!?! まさか……!」

さよの言った猿と言う言葉に驚き、目を見開くアスナと刹那。二人は顔を見合わせた後、夕映を押しつけてトイレのドアを蹴り破つた。そして目に入るのは、木乃香ではなく便器に張られた一枚の呪符。ドアを開けた途端、その札が返事をする。

『入つとりますえ』

「やられた！ さつきから同じ返事ばかりでおかしいと思ってたけど、まさかもう忍び込んでたなんて……!」

「そんな事は後です！ さよさん、猿はどこに向かいましたか!？」

「えっと、あっちに向かつて飛んで行つたんですけど……多分、ネ

ギ先生も居る方向です」

そう言つて窓の外の一方向を指さすさよ。それを見て、アスナと刹那は礼を言つて窓から飛び出して行つた。

ちなみに夕映には見られていない。扉を蹴り破つた後、彼女はすぐにトイレに入ったからだ。

それを茫然と見送る。しかしここに居ても何もできないと判断し、彼女は部屋に戻つて行つた。そして部屋で待つていたのは、何故かぐつたりとして布団に横になつてゐるエヴァンジェリンと、彼女に団扇で風を送つてゐる茶々丸、不気味に笑いながら酒を飲むチャチャゼロ、相変わらず寝てゐるらしいザジだつた。

「あの、エヴァンジェリンさんどうしたんですか？　ぐつたりとしてますけど」

「マスターは温泉でのぼせてしまいました。おそらくですが、酒類を多量に摂取した事も影響しているかと思われます」

「久シブリノ外ダカラツテ、ダラシネーヨナ。ビン一本デダウンスルナンテヨ」

そう言われて、さよは思わず生温かい目でエヴァンジェリンを見てしまつた。幸いにもエヴァンジェリンには気付かれなかつたが。

そして彼女は一口程水を飲み、自分の布団に入つて眠りに付いた。

旅館から少し離れた橋のふもと、カモは檻の中で悩んでいた。

あまりにもうんうん唸つてゐるので、何故そこまで悩んでいるのか氣になつたネギが聞く。

「カモ君、どうしたの？ さつきからずっと唸ってるけど」

「いや、アスナの姐さんの名前で何か忘れてるような気がしてよ。どっかで聞いたことある気がすんだよな……」

「どっかつて、どこでさ？」

「それがわかんねーんだよなー。確か、結構有名だった気がするんだけど……」

檻の中で器用に胡坐を組んで座って唸るカモ。オコジヨが胡坐で座って唸ると言うのも、何と云うか妙な光景である。

そんな事は気にせず唸るカモを見ていると、持っていた携帯が鳴った。

「誰だろつて、アスナさんから？ もしもし？」

「ネギ、そつちに猿行かなかった！？ 木乃香がそいつに攫われたのよ……！」

「ええっ!?!」

「ん？ アニキ、アレは!?!」

アスナの言葉に驚き、カモに言われて振り向くネギ。その目の前に、月を背景に猿の着ぐるみが降って来た。手には木乃香を抱えている。

「おサル!?!」

「つーか、でかつ!?!」

「あら、さつきはおーきにな、カワイイ魔法使いさん。ほなさいなら」

巨大な猿の着ぐるみに（人が入っているので大きいのは当然だが）に驚き、ネギの動きが止まる。

それを見つつ、猿の着ぐるみを着た何者かは木乃香を抱えて飛び去

る。

慌ててネギが練習用の杖で魔法を放ち止めようとするが、いつの間にか発生していた猿の式神に邪魔されて詠唱できない。しかし猿が飛び去って行った直後、アスナ達が来た。

「ネギ！ 猿は！？」

「あぶぶ、すみません、逃げられました！」

「すぐに追います！ 方向は！？」

「あつちだ！」

檻の中の力モが猿が逃げて行った方向を示す。それを見て走りだす三人だが、流石に檻が邪魔だと思ったのか、力モを出してネギの頭に乗せて走る速度を上げる。

暫く全力で走り、少し前を行く猿に追いついた。

「居たっ！ 待ちなさい！！」

「もう追い付いて来はったんか……しつこい人は嫌われますえ」

そう言つて木乃香を抱えた猿は駅に逃げ込む。聞こえた声から察するにどうやら女性の様だ。

ネギ達は当然その後を追い駅に入るが、ふと妙な事に気付く。

「なあ、何かおかしくねえか？ 駅だつてのに誰も居ねえぞ？」

「終電間際だからって、確かにおかしいわね。刹那、これって……」

「人払いの呪符でしょうね、柱の幾つかに張ってあります。これでは一般人は近づく事はできません」

「完全に営業妨害じゃない。一般人に迷惑かけてんじゃないわよ！」

愚痴りながらも猿を追い、発射寸前だった電車に全員乗り込む。運がいいのか悪いのか、人の気配は感じられない。

前の車両に逃げて行く猿を追い詰めようとするが、大猿の近くに居た小猿が呪符を投げつけてきた。

そしてその札から発生する大量の水。それはすぐに車両内に満ち、アスナ達を溺れさせる。これでは水の抵抗もあって剣を振るのにもかなり影響が出るだろう。魔法の詠唱など、当然ながらできるはずもない。

碌に呼吸もできなかつた為に溺死するのも時間の問題かと思われたが、刹那が気を最大まで高めて水中で斬空閃を放つ。水の影響で一振りするのにかなりの力を用いたが、放たれた斬空閃は水中を進み車両連結部の扉を破壊、隣の車両に逃げていた猿を逆流した水に巻き込んだ。

「ゲホツ…み、見たかデカザル女。嫌がらせはやめて、大人しくこのちゃんを返せ……」

「ハア、ハア……な、なかなかやりますな。しかしお嬢様は返しませへんえ。お嬢様は本来関西に居るべきなんやから……」

そう言つて猿女は木乃香を抱えて再び走りだす。着ぐるみはかなり重いのだが、それを着たまま走り続けるとは、意外に体力のある女である。

その言葉に驚くネギとカモだが、アスナと刹那はそれに構わずに再び逃げ出した猿女を追う。

「刹那さん、一体どういう事なんですか!? あの人の、木乃香さんをお嬢様って言つてましたけど」

「それに、何で木乃香姉さんを誘拐しようとしてるんだ!? 嫌がらせにしちゃおかしすぎるだろ!？」

走りながらネギとカモがどういう事を聞く。それに対し、刹那たちも走りながら説明する。

「以前から呪術協会の中にこのちゃんを麻帆良学園へやってしまった事を良く思わない輩が居たんです。おそらくですが、奴らはこのちゃんの力を利用して呪術協会を牛耳ろうとしているのでは……」

「はぁ!？」

「な、何ですかそれ!？」

「まさか修学旅行中にこんな事しかすなんて、甘すぎたわ。どこから木乃香が修学旅行で京都に戻るって情報が漏れたんだか……」

愚痴るアスナだがそれでも足は止めず、むしろさらに加速する。それに合わせて刹那とネギも速度を上げ、改札口を通って階段に出る。そこでは、猿の着ぐるみを脱いだ女性が待ち構えていた。その女性を見たネギが驚く。

「あ、さっきの……て言うか新幹線の!」

「よーここまで追って来れましたな。せやけど、それもここまでや。三枚目のお札ちゃん、行かせてもらいますえ」

「させるかっ!」

呪符を発動される前に倒そうとする刹那だが、僅かに行動が遅かった。半分も距離を縮められずに呪符は発動し、巨大な炎を五方向に発生させる。

「うあっ!」

「刹那!」

「三枚符術・京都大文字焼き。並の術者ではその炎を越える事はおろか近づくと事さえ出来まへんえ。ほな、さいなら」

危うく炎に突っ込みかけた刹那を、アスナが浴衣を掴んで引き戻す。それを見て、女性はそう言って木乃香を抱えて階段を上って行こう

とする。しかし、それを遮るものが居た。ネギだ。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ 吹フレットけ、一ウニス・ウエンテ陣の風！ 風フラ
ンス花・風塵乱舞！！」
サルタティオ・フルウエレア

後方で詠唱をしていたネギは、強力な風を発生させて炎を消し飛ばす。風は炎の勢いを強める効果があるが、強すぎる風は逆に炎を消す事もある。それを利用したのだろう。ともあれ、これで道を遮る炎の障害はなくなった。

「ウチの炎が消された！？」

「逃がしませんよ！ 木乃香さんは僕の生徒で、大切な友達です！」

ネギのその言葉と共にアスナと刹那は木乃香を抱えた女性に飛びかかって行く。そして、アスナは拳を、刹那は剣を振りおろそうとし、突如現れた熊の着ぐるみと動き出した猿の着ぐるみにそれは止められた。

「クマ！？ って言うか増えた！？」

「さっき言った呪符使いの善鬼・護鬼です！ どうやらこの女はそれなりに強い術者の様です！」

「ホホホ、ウチの猿鬼と熊鬼はなかなか強力ですえ。一生そいつらの相手でもしていなはれ」

驚くネギにそう説明する刹那。それを見ながら女性は木乃香を肩に担いで逃げようとする。

しかしそこでアスナが動いた。

「っの、ぶざけんじゃないわよ！ 来アテアットれ！！」

「アスナさん!？」

浴衣の懐からカードを取り出し、前に掲げるアスナ。それを見て刹那は焦り、止めようとするが遅い。

アスナの声と共にカードは輝き、片刃の巨大な剣へとその姿を変えた。

「アレは仮契約カード!? やっぱ姐さん誰かと契約してたのか!？」

カモの声が聞こえるがそんな事は気にしてられない。アスナは気を身に纏って体を強化し、その剣を一気に振り下ろした。

それを猿は白刃取りしようとするが、そもそも手の長さが足りないため意味を為さない。呆気なくその身は二つに切り裂かれ、呪符に戻る。

「いいんですか？」

「自分の平穩より親友よ! 刹那!！」

「お願いします! 私はこのちゃんを!！」

そう言つて刹那は呪符使いの女性に向かい、アスナは剣を振り上げ熊に襲いかかる。それに怯えたか、熊の式神は懸命に避ける。それでも逃げ出さないのは流石と言うか、哀れと言うか……。

「避けてんじやないわよー!！」

『く、くまーっ!——!』

気のせいではなければ、熊の目元に光るものが見えた気がした。しかしアスナはそれを一切気にせず斬りかかる。外見は可愛いクマのぬいぐるみの為、幼い子供が見たら涙ながらに止めようとするだろう。

しかしそれでもアスナは斬りかかる。まるで溜めに溜めたストレスを叩きつけ、発散するかのよう。

「このちゃんを返せーっ!!」

それを背後に感じつつ刹那は呪符使いに飛びかかる。しかしそれは、呪符使いの後ろから飛びかかって来た何かに阻まれた。

「くっ……」

「きゃああああ……」

着地に失敗したのか、ゴロゴロと転がって行く白いナニカ。声から察するに、どうも少女の様だ。起きあがった彼女は白い帽子とフリルの付いた、曰くゴスロリと区分される服を着ていた。それが影響してか、何処かの令嬢の様にも見えない事もない。しかし、その手に握られているのは二振りの小太刀。刹那は焦る。

「この太刀筋…まさか、神鳴流か!？」

「あいたたた。遅刻してしてもすみません」

かなりのんびりとした口調である。予想外の口調だったのか、それとも服装が予想外だったのか。刹那は呆気にとられる。

「どうも〜神鳴流です〜。おはつに〜」

「お、お前が神鳴流剣士……?」

「はい〜月詠います〜。見たとこ神鳴流の先輩さんみたいですけど、護衛に雇われたからには本気で行かせてもらいますわ〜」

「こんなのが神鳴流とは…時代も変わったな……と言っか、気が抜ける口調だな……」

「ぶ、甘く見ると怪我しますえ。ほなよろしゅう、月詠はん」

「では、一つお手柔らかに」

何と言うか、宮崎のどかを彷彿とさせる喋り方である。そんな事を思っている刹那に、月詠と呼ばれた剣士は気の抜けるような掛け声と共に斬りかかる。

だがしかし、思った以上に小回りが利き連続で振るわれる小太刀に刹那は防戦一方になる。

「ざーんがーんけーん」

「くっ！」

「刹那！？ こんの、逃げてんじやないわよ、くまーっ！！」

『く、くまーっ！？ くまーっ！！』

月詠に足止めされてる刹那はともかく、アスナは逃げ続ける熊を斬るために追う。小猿が邪魔しようとするが、それらは近づいた瞬間に蹴られ、あるいは斬られてすぐに呪符に戻る。

熊は滝の様な涙を流しながらアスナの剣を避け続ける。いとあはれ。

「……と、とりあえず足止めOKやな。熊鬼、そのまま引きつけといてな」

『く、くまーっ！？』

主にすら見捨てられた熊鬼。涙の勢いがさらに増すが、それでもアスナの剣を避け続けるのは流石である。さっさと斬られて戻った方が楽になると思うのだが。

そして小猿に木乃香を運ばせながら逃げようとする呪符使いだが、忘れるなかれ。ここにはもう一人居ると言う事を。

「マ・スキル マギステル！
ウンデキム・スピリトゥス・アエリアル・エンケルム・ファク
テイニミクム・カブテント 風の精霊11人！ 縛鎖となり
て敵を捕まえる！！」

「え？ つて、しまった！ ガキを忘れてたー！？」
「もう遅いです！ 魔法の射手・戒めの風矢！！」
サキタ・マギカ
アエール・カプトウーラエ

存在を忘れられていたネギだが、それを気にせず詠唱していた。そして放たれる風の矢。それらは呪符使いに向かい、捕まえようと襲いかかる。

「ひいつ、お助けー！！」

「あつ！？ ま、曲がれ！！」

しかしその矢は呪符使いに当たる事はなかった。木乃香を盾に術者がその背に隠れたため、ネギは咄嗟に方向を変えてあらぬ方向に矢を飛ばしたのだ。

「……あら？」

「ひ、卑怯ですよ！ 木乃香さんを離してください！！」

「はーん、成る程。読めましたえ。甘ちゃんやなあ、人質が多少怪我するぐらい気にせず打ち抜けばえーのに」

ネギの言葉に嘲笑う呪符使い。確かにそうだろう、人質は生きてさえいれば利用できるのだから。

と言うか、ネギもネギである。捕縛のみを目的としたもので傷が付くと思っっているのだろうか？

「まったく、この娘は役に立ちますなあ！ この調子でこの後も利用させてもらおうわ！」

「こ、木乃香さんをどうするつもりなんですか！？」

「せやなー、まずは呪薬と呪符で口を利けへんよにして、うちの言うコト聞く操り人形にするのがえーかもな」

その言葉にネギは頭に血が上るのを感じた。しかし、ここにはそれ以上に怒り狂う人間があと二人残っている。

突如膨れ上がる二つの殺気。一つは刹那から、もう一つはアスナからそれぞれ放たれている。その殺気に中てられてか、熊と月詠は動きを止めている。

何故か、月詠は顔を朱に染めて体をモジモジとさせているが、気にしないでおこう。

「貴様……今何と言った……？」

「木乃香に何をするって……？」

あまりの殺気にネギは怯えているが、それでも呪符使いを睨みつけているのは流石と言えようか。それとも自分に向けられていないと知っているため気に余裕があるからだろうか。

その殺気に呪符使いも若干怯えているようだが、すぐに平静を取り戻すと言った。

「そ、そない殺気を出しても無駄や！ お嬢様はウチの手の中にあるんやからな！ 傷付けられなくなかったら動くんやないで！！」

しかしその殺気のせいか、呪符使いの意識はアスナと刹那の二人にのみ向いていた。それに気付いたカモガ、念話でネギに指示を出す。

(アニキ、チャンスだ。今アイツの意識はアスナと刹那の姐さんに向いてる。気付かれないよう詠唱して、武装解除で武器も防具もぶっ飛ばしちまえ。合図は俺っちが出す)

(わかった。ラス・テル マ・スキル……)

(……今だ！！)

ネギが動いた。

「フランス風花・エクサルマティオー武装解除!!!」

「なっ……!!?」

その言葉と共に呪符使いに向かう突風。それは彼女と木乃香の服を全て花弁に変えて吹き飛ばし、武器も防具も無くした。

それを合図にしてか、アスナは熊を、刹那は月詠を一撃で倒して刹那は木乃香へと向かう。

そしてアスナは瞬動で距離を一気に詰め、剣の腹で呪符使いを思い切り殴り飛ばした。

「がつ!!」

壁に叩きつけられる呪符使い。腹部を抑えつつなんとか起きあがるが、目の前に三人が立つ。その顔は、皆が皆怒りを浮かび上がらせていた。

「くっ…おぼえてなはれーっ!!」

一体何処に隠していたのか、彼女は呪符を使い額に「2」の数字が書かれた猿を呼び出し、それに乗って逃げて行った。ちなみに月詠も尻尾に捕まって一緒に逃げた。

それを睨みながら皆は木乃香の容体を確認する。先程、呪薬や呪符で…等と言っていたので何かされていないかを調べるためだ。

結果は何もなく、単純に気絶して眠っただけであった。

それを確認して、目覚めた木乃香と一緒に旅館に戻る。

明日は何もなければいいが、と、そう願いながら。

35話・二日目・奈良に来る言葉

修学旅行二日目の朝、昨夜11時と言うそれなりに遅い時間に寝たにもかかわらずさよの目覚めは良好だった。

「ん〜……良い朝です」

温かな朝の陽射しをその身に受けつつ、布団から起きて伸びをする。その動きに反応してか、スリープモードに入っていたらしい茶々丸が起きて（と言っていいかは分からないが）挨拶する。

「お早うございます相坂さん」

「お早うございます茶々丸さん、良い朝ですね」

「はい」

互いに挨拶を交わし、茶々丸はエヴァンジェリンを起こしにかかる。顔を顰めて唸っていないあたり、どうやら二日酔いは避けられたようだ。それを見ながらさよもザジを起こそうと彼女の布団に目を向ける。

「……………」

「……………お、お早うございます、ザジさん」

「……………（コクリ）」

しかし、彼女は起きていた。既に着替えており、さよ達をじっと見つめている。そしてじっと見つめられていたさよは多少頬を引き攣らせながらも挨拶する。

それに対し、彼女は沈黙と頷きで返した。何故かその頭には小鳥が留まっている。

思わずそれに目が行くさよだが、あまり見ても失礼と思ったのか目を逸らし、浴衣を脱いで制服に着替え、アスナに渡されたブローチを付ける。銀の翼に抱かれた黒紫のクリスタルが、陽光を受けてキラリと輝く。

「む……」

「マスター、起きられましたか？」

「むう……今何時だ？」

「午前6時です。あと1時間ほどで朝食の時間になります」

茶々丸に時刻を聞いたエヴァンジェリンは、寝惚け眼を擦りながら布団から出て着替え始める。その金の髪は所々が寝癖で撥ねており、茶々丸に櫛で直されている。その様子は、まるで親子の様な光景であった。実年齢は遙かにエヴァンジェリンの方が上だが、それは黙っておこう。

さよが微笑ましげに（しかし気付かれないように）その様子を見てみると、部屋の扉が開いた気配がした。扉の方に顔を向けると、刹那がそこに立っていた。

「お早うございます刹那さん。昨日はどうでしたか？」

「お早うございます。何とかお嬢様は奪還できました、情報ありがとうございます」

「私は怪しいお猿が居た事を言っただけですよ？」

そう言っただけさよはエヴァンジェリン達の方を見る。既に髪は整えられ、服も着替えており朝食に向かう準備は万全のようだ。まだ若干、エヴァンジェリンは眠そうな目をしているが。ちなみに茶々丸は既に着替えている。

「準備も終わったみたいですし、行きましようか。何処で食べるん

でしたっけ？」

「一階の大広間らしいです。アスナさん達5班ももうすぐ出てくると思いますから、一緒に行きましょう」

刹那とさよはそう言って廊下に出て待つ。5分後、隣の部屋からアスナ達が出てきた。

だが、出てきたアスナを見てさよは短く悲鳴を上げる。

「ひいっ!？」

5班の他の班員は、若干怯えて見える点を除けばいつも通りだが、アスナだけは何故か据わった目の下に濃い隈を作り、とてつもなく不機嫌そうな気配をこれ以上ないほどに発していた。いつもなら陽に照らされて美しい橙色に輝く髪も、心なしか傷んでいるように感じる。一目で寝不足だと分かる。

幼い子供が居たら、まず逃げるか泣き出すであろうその姿に、刹那たちの背筋が凍る。

「あ、アスナさん、何でそんなに不機嫌そう何ですか!？」

「昨日戻ってからネギと淫獣の追及がうるさくてね……言う事はな
いって言って部屋に戻っても念話で聞いて来るし、切ってもすぐに別の回線で繋いで聞いて来るから完全に寝不足よ……本当に潰そうかしらあの淫獣。て言うか、潰す」

据わった目で若干俯き、口元に笑みを浮かべながらそう言うアスナに冷や汗を掻く刹那とさよ。前髪に隠れた彼女の目が光って見えるのは気のせいだと思いたい。底冷えする様な殺気を放っているのも気のせいだと思いたい。気付けば手にはじっとりと汗を掻いており、他のメンバーは怯えてかいつの間にか居なくなっていた。エヴァンジェリンは別に気にせず朝食に向かい、茶々丸はそんな彼女に従

つて行っただけであろうが。
自分達を見捨てて逃げたクラスメイトに、思わず恨みの念を送るさ
よと刹那。

「と、とりあえず、まず顔を洗いましょうアスナさん！ そんな顔
で行ったら他の皆も怯えちゃいます！」

「それに、顔を洗ったらスッキリしますよ？ 眠気も飛ぶと思いま
すし！ と言うかお願いします、顔を洗って来てください！ 凄く
怖いですー！」

「そうね……そうするわ」

そう言つてアスナはふらふらと洗面台に向かう。すぐに水の出る音
が聞こえ、彼女が顔を洗いだした事が分かる。

そして、2分ほどして彼女は出てきた。まだ若干不機嫌さは残つて
いるが、先程よりもスッキリとした顔である。殺気も収め、ついで
に髪も整えてきたようだ。

「お待たせ、それじゃ行こっか」

「はい」

「アスナさん、食事の場でさっきみたいな雰囲気は出さないでくだ
さいね」

アスナに注意しながら、一階の大広間に向かう。賑やかな声が聞こ
えることから、既に自分達以外の生徒は揃っているようだ。すぐに
自分達の班の席に着き、号令がかかるのを待つ。

そして、皆が揃った事を確認して号令がかかり、朝食を食べ始める。

「……………（ピキ、ピキッ）」

（あ、アスナさん落ち着いてください！ 箸に罫が入ってます！！）
（落ち着いてるわ。ええ、私はこれ以上ないほどに落ち着いてるわ

よ、刹那)

(どこが落ち着いてるんですか!? 折れます! 箸が折れるって言うか砕けます!!)

その中で、アスナはネギの物言いたげな視線を感じ、波立つ心を必死になって抑えつける。しかし無意識に力を手に籠めていたのか、アスナの持つ箸から壊滅的な悲鳴が聞こえる。

刹那とさよがアスナにのみ聞こえるように小声で注意するが、手に籠る力は抜けず、むしろさらに籠って行く。

「ね、ねえアスナ。さっきから何か不機嫌っぽいけど、どしたの?」

「どうもしてないわ、私はいたって平静よ?」

「いや、だってアンタの箸……」

「気のせいよ。だからあまり聞いてくんじゃないわよ、パル」

「ハ、ハイ……」

アスナが(額に青筋を浮かべた)笑顔でそう言うと、同じ班のメンバーが若干顔を青くして視線を逸らす。おそらく今のアスナの背後には気炎と共に不動明王か仁王像が立っている事であろう。もしかしたらそれらに追加して四天王像も見えているかもしれない。

ふと周りを見れば、アスナの放つ雰囲気恐怖にかいつもより静かに、しかし早くに朝食を食べていた。どうやらさっさと逃げたいらしい。

しかし離れた席に居るせい、ネギはその雰囲気気付かない。気付かないままアスナに物言いたげな視線を投げかけ、それがさらにアスナの心を波立たせる。おそらく彼女の心の中では現在、暴風波浪・津波警報が発令されている事だろう。

そんな空気の中で食事を終え、アスナ達は真つ先に大広間から出て財布やカメラなど、軽い荷物を取りに部屋に戻る。今日は奈良で班

別行動の日である。

なお、部屋に戻る前にロビーでネギを巡る喧騒が起こり、宮崎のどかの勇気を出した言葉で5班と一緒に回る事になったのだが、この事を後で知ったアスナは殊更に不機嫌な雰囲気を出したと言う。

そして暫くバスに揺られて、奈良公園に着いた。それなりに多くの人が居るが、広い空間だから静かに感じられる。

そこかしこに鹿が居り、観光客から屋台で買った鹿煎餅を与えられて食べている。もしかもしかと食べる姿はそれなりに愛嬌があり、見ているだけでも荒んだ心を和ませる。

しかし、天はアスナに味方してはくれないようだ。

「わあ、スゴイや。見てくださいアスナさん、とっても可愛らしいですよってわあー!？」

「……………私に心休まる時間は無いって、そう言いたいのかしらねあのガキは…………」

「お、落ち着いてくださいアスナさん！ 鹿が凄い勢いで逃げて行ってます!!」

鹿の大軍に囲まれて悲鳴を上げるネギを、何故かカモの檻を渡されたアスナが恐ろしいほど冷たい目で見ると、虚ろな目で微妙に笑いながら見るその顔は、この上ないほど恐ろしい。さらに溜まりに溜まったストレスで極めて不機嫌になっているため、恐ろしさは今までは桁外れだ。

見れば彼女の周りには鹿どころか鳥一羽すらも見当たらない。どうやら本能的に恐怖を感じたらしく、逃げて行ったようだ。このままでは営業妨害になるため（既になっているが）何とか怒りを抑えてネギを救出した。

ちなみに刹那とさよはエヴァンジェリンと茶々丸、ザジが別行動をしているためアスナと木乃香の居る5班と一緒に行動している。

「……今のところ、昨日のサルのお姉さんは来ませんね」

ネギは昨日の猿女の事を話す。

今日も来るのではないかと心配しているようだ。

「まだ朝ですし、人も多いので今日は大丈夫だと思います。ですが念の為、各班に式神を放っておきました。何かあればすぐに分かります。このちゃんは私が守りますから、お二人は修学旅行を楽しんで……」

「おバカ」

刹那の言葉に、アスナは刹那の頭を軽くはたく。はたかれた当人の刹那は、目を白黒させながらアスナを見る。

彼女は呆れた様子で、溜息を吐きながら言った。

「何でも一人でやろうとしてんじゃないわよ。少しは周りを頼りなさい」

「で、ですが……」

「せっかくの修学旅行、楽しまなきゃ損でしょ。護衛は私も手伝うから、アンタも木乃香と楽しみなさい」

微笑みながらアスナはそう言う。その微笑みは、とても大人びて見えた。

見ればネギも、コクコクと頷いている。しかし昨日の昨晚から気になっていた事を思い出したのか、ネギが聞く。

「そう言えば、アスナさん。昨日の事で聞きたい事があるんですけど」

「昨日も話さないって言ったはずだけど？ 私にだってプライベート」

トはあるんだし、何で秘密にしたい事を言わなきゃなんないのよ」「で、でも……」

「でも、じゃない！ いい加減しつこいのよ！ 私が誰と契約してようがアンタには関係ないでしょ！」

「アスナさん！？ どこへ……」

「お茶屋！」

怒鳴るようにそう言って、班から離れてお茶屋に向かう。それを見て慌てた刹那が追う。

突然の事に、ネギは茫然とそれを見送った。

やや離れた場所ですれを見ていた木乃香が近寄って来て言う。

「ネギ君、あんまりしつこく聞いたらあかんえ」

「木乃香さん、でも……」

「それでもあかんよ、誰だって知られたくない事はあるんやから。」

ネギ君が今したんはアスナのプライベートを蔑ろにしとる」

「え……」

「後で謝った方がええよ。アスナも優しいんやし、きっと許してくれる」

そう言つて木乃香はネギから離れて、さよと一緒にアスナと刹那が行った方向に向かう。自分達もお茶が飲みたくなったのか、それともアスナにネギの事を許してあげるように言いに行ったのか。どちらか分からないが、ネギは一人になった。

「あ、あああのー、ネギ先生……」

「あ、宮崎さん」

急に一人になって途方に暮れたネギだが、後方から走って来たのどかを見つけて安心したような顔をする。迷子になる可能性でも考え

ていたのだろうか？

「あ、あのー。よろしければ一緒に公園を回りませんか？」

「あ…そ、そうですね。それじゃあ、一緒に回りましょうか」

そしてネギはのどかに誘われて、二人で奈良公園を回りはじめた。まず向かうのは有名な大仏殿である。

アスナは刹那と一緒にお茶屋を目指していた。ネギから離れて少しは頭が冷えるかと思われたが、現在も彼女は苛ついていた。理由は手に下げる檻の中の獣のせいである。

「なー姐さん、誰と契約してんのか俺っちだけにでも教えてくれねーか？ 誰にも言わねーからよ」

「……………潰すわよ？」

「すんませんっしたー！！」

カモの言葉に、ハイライトの消えた目で、薄く笑みを浮かべつつそう返すアスナ。どうやら殺気も漏れていたようで、木に留まっていた鳥が一斉に飛び立った。

「け、けどよ。やっぱ気になるんだよ、誰と契約してんのかって」「言つつもりはないって言ったはずだけど？ 余程死にたいらしいわね」

「ギヤーツ！！ 待って姐さん、檻ごと蹴らないで！ 死んじまう！」

「死ね」

「即答！？」

周りに人が居ない事を確認し、さらに京都に居た頃に詠春から貰った呪符を使って人払いと遮音、認識障害の結界を簡易にだが作ったアスナは檻を地面に置き、岩に挟んで蹴りはじめる。

カモの悲鳴を聞いても無表情で、かつ残像すらできる速度で蹴り続けるその姿はとても恐ろしい。傍から見たら（普通に見てもそうだが）完全に動物虐待である。余程にストレスが溜まっていたようだ。

「あ、アスナさん落ち着いてください！ ストレスが溜まっているのは分かりますけど、流石に殺すのはまずいです！」

「大丈夫よ、ネギには遠いところに旅立つたって言うておくから」

「そう言う問題じゃねーよ！ だ、誰か助けてー！！」

流石にまずいと判断したのか、刹那が羽交い絞めにして止めるが構わずアスナは蹴り続ける。徐々に変形していく檻の中でカモは叫ぶが、人払いと遮音の結界が張ってあるため誰も近づけず、そもそも気付かない。頼みの綱のネギも、現在は大仏殿に居るため来るにはそれなりに時間がかかるだろう。そしてアスナは完全にカモを殺す気の様だ。

「へ、ヘルプー！！」

「ああ、ホントにうるさいわね。刹那、離して。コイツ潰せないから」

「流石にそれはまずいですって！ お願いですから落ち着いてくださいー！」

刹那に抑えられながらもなお檻を蹴り続けるアスナ。羽交い絞めにされて動き辛くなったせいも、檻に当たらず空を切るものも出てきたが、しかし代りに一撃の威力が上がっているようで、蹴りの風圧が地面に落ちていた木の葉や小石を飛ばす。

さらに靴下に隠れているために分かりにくいだが、どうも血が出始めているようだ。蹴った場所に赤い斑点が付いている。このままいけば、彼女の足がスプラッタなことになってしまっただろう。その時だった。

「ストップです」

「え……」

後ろから聞こえた声に、アスナは蹴るのをやめて刹那と一緒に声のした方向を向く。少し距離を置いた後ろに、いつも通りの黒い服を着た昴がいつの間にか立っていた。

「スバル……？」

「公園に着いて早々、妙な気配を感じたので来てみれば、わざわざこんな結界を張って何をしているのです。駄目ですよ、アスナちゃん」

「どうしてここに……って言うか、店は！？」

「私が今日ここに来た理由は、学園長に少年のサポートを頼まれたからです。おかげで喫茶店を数日ほど休みにすることになりましたよ。諸事情有って初日からは来れなかったのですが、つい20分程前にここに着きました。そんなことより、足が血塗れではありませんか」

アスナの足の状態と血の匂いに若干顔を顰めながら昴は二人に近づく。見れば彼女の靴下は血で赤黒く染まっており、ぐっしりと濡れている。刹那は離れて、カモの檻を拾い上げた。どうやら死んではいないようだ、中で気絶しているようだ。

「え……っつー！」

「その状態では、痛いのは当然です。気付いていなかったのですか

？ 『柔らかな風は愛おしむ様に貴女を撫で、刻まれた傷と痛みを優しく癒すでしょう』」

昴がそう言うと、まるでアスナを包むかのように微風が吹き始める。すぐに風は吹きやんだが、その時には彼女の傷はなくなっていた。

「靴下も血で濡れていますね。『血は水へとなりただ其を濡らす。されど優しき火により乾きを得る。色はその本来を取り戻す』」

続けて言った言葉によりアスナの足に火が発生する。その火はどうやら傷付けるものではないらしく、濡れていた靴下を包み込むとそれは乾き、さらに血の色も無くなり元の色へと戻った。

「はい、治療完了です」

「あ、ありがとう……」

「一体どうしたのです？ あそこまで貴女が怒っていたのは初めて見ますけど」

奈良に来て早々、あの様な光景を見た昴はアスナに聞く。

今まで何度か彼女が怒ったところを見た事はあるが、あそこまで怒りを露わにしたのは初めてだったようだ。それに驚きつつも疑問に思ったのだろう。

「昨日の事で、ネギ先生がしつこくアスナさんに聞いていたらしいです」

「ちょ、刹那！」

「アスナさん、気持ちには分からないではありませんが、ここは説明して協力を仰ぐべきです」

話すのをやめさせようとするアスナだが、刹那は説明して協力を仰

ぐべきと説く。

それに対してアスナも反論しようとするが、効率などを考えれば確かに協力を仰いだ方が良かったため結局彼女はおれた。

そして刹那は説明しようとするが、昴によって止められた。

「つい先ほど来たばかりですので昨晚何があったか分かりませんが、立ち話もなんです。すぐそこにお茶屋もありますし、お茶でも飲みながら聞きましょうか。あなたもそれでいいですか？ 気絶したふりをしているオコジヨ妖精君」

「ゲツ……き、気付いてたんで？」

「ええ、私の眼を欺くなら、もう20年ほど技を磨くことですね」

いつもと同じ微笑みを浮かべながらそう言う。いつの間にか起きていたのだろうか？ それを聞いてアスナが再びカモに攻撃を加えようとするが、それは今度は昴に止められ、結界を解除して近くにあるお茶屋に三人と一匹は向かった。

着いたお茶屋でアスナと刹那はみたらし団子を、昴は抹茶を注文して席に着き、昨晚あった事を説明し始めた。ちなみにカモの檻は直され、彼にも饅頭が与えられた。

暫くして、刹那の説明が終わった。

「……成る程、過激派に所属するだろう呪符使いに攫われた木乃香ちゃんを助けるためにハマノツルギを使い、その結果として仮契約している事が知られてしまった。そして少年とアルベル君がしつこく聞いてきたために少年には怒鳴り、アルベル君にはあの様な行動をとったと」

「ゴメン、スバル」

「何を謝るのです？ あの子を助けるためにその力が必要だったのでしょうか？ そして貴女はそれを使う事を選択した。その選択を悔いているのですか？」

昴の問いにアスナは考える。しかしすぐに頭を振ってそれを否定した。

「うっん、後悔はしてない。それで木乃香を助けられたんだもの」「なら、それでいいではありませんか。結果良ければ全て良しとは言いませんが、それはこれから注意していけばいいでしょう。あまり気楽に考えるのも駄目ですけどね」

そして昴はお茶を口に含んだ。独特の苦みとほんの僅かにある甘みが精神を落ち着かせる。そして一言。

「選んだ選択を悔いるなどは言いませんが、あまり思い詰め過ぎないことです。後悔先に立たず、とも言いますしね」

そうやって昴はまた一口、お茶を口に含んだ。どうでもいいが、その姿がやけに様になっているのは何故だろうか？

それを見ながら、アスナも団子に手を付ける。気付けば6本あった団子は、残り2本になっていた。刹那を見ると彼女はさつと顔を逸らす、口がもぐもぐと動いているので意味がない。

呆れた目でそれを見ながらアスナも団子を食べた。団子の柔らかさとタレの甘さが絡み合い、実に美味い。いつの間にか、荒れていた心が落ち着いているのを実感した。

そうしていると、饅頭を食べていたカモが口を開く。

「さっきの治療と今の話を聞く限り、アンタもこっち側の人間なのかい、喫茶店の兄ちゃん」

「まあ、そうなりますね。しかし、兄ちゃんと言う歳ではありませんね。魔法と関わって、もう20年になるでしょうから」

「へ？ 20年って、アンタ今何歳だよ！？」

「これでも44ですよ。知り合いからはそうは見えないとよく言われますけどね。ちなみに言うと、魔法薬などは一切使っていませんから」

昴がそう言うと、カモは口をあんぐりと開ける。まあ、外見年齢は未だに二十代なのだからそうなるのも仕方ないのだろうか？

それを見て刹那は苦笑し、アスナは気にせず団子を食べていた。ちなみに団子も饅頭も昴の奢りである。

「それで、昴さん」

「そうですね、嫌がらせだけならともかく、誘拐となると流石に見過ごせませんね」

「では……」

「ええ。私も協力させて頂きましょう」

そうやって昴は再びお茶を飲んだ。そして、思い出したようにカモを見て言った。

「っと、そう言えば、アスナちゃんにやけにしつこく魔法関係の事を聞いたみたいですね。人のプライベートをしつこく聞くとは、なっていますよ。これはお説教が必要ですかね？」

微笑みながら、しかしやけにどす黒い空気を発しながら昴がカモを見て言う。心なしか、彼の纏う空気が冷たくなった気がした。気が付けばアスナと刹那はいつの間にか離れた席に移動していた。

「え？ いや、あの…お説教って……」

「選択肢をあげましょう。厳しいコースか、真白に燃え尽きる程厳しいコース。それか神すらも燃え尽きる程厳しいコース。どれがい

いのですか？」

「何そのコース！？ どれも厳しいのばっかじゃねーかよー!!」

かつて、ナギとラカンに出した選択肢を今再び提示する昴。その相手がオコジヨと言うのも妙にシユールな光景だ。

昴が放つどす黒い雰囲気にカモは怯え、逃げようとするが檻に入れられているため逃げられない。

「あの、出来れば優しい方がいいかなー、なんて……」

「ちなみに、選択肢にない物を提示すれば強制的に3つ目の神すら燃え尽きるコースになりますので。ですから神すら燃え尽きるコースですね、燃え尽きる覚悟は十分ですか？」

「ゲエツ!？」

「あーっ！ 昴さんやー」

ニツコリと笑いながら絶望の選択肢を提示する昴。ナギとラカンすら真白に燃え尽きた説教だ、カモが聞いたら燃え尽きてさらに毛が全て抜け落ちてしまうだろう。ちなみに言っておくと、20年という歳月でナギ達にした説教よりもさらに厳しくなっている。

そして、いざ説教と言ったところで木乃香達が来た。何故かネギと一緒に居たはずののかも一緒に居る。

「おや、木乃香ちゃんと相坂さんと…確か、宮崎さんでしたか？」

「こんにちは、良い天気ですね」

「昴さん、こんにちは。ブローチありがとうございます!」

「こ、こんにちは……」

木乃香とさよは普通に挨拶するが、のどかはどもりながら昴に挨拶する。引っ込み思案でやや男嫌いの気がある彼女だ。穏やかな気性とは言え、昴の事も苦手なのだろう。尤も、今回はそれとは別の要

因もあるようだが。

「どうしたの本屋ちゃん。何か、涙の痕が見えるけど」

「えうつ！？ えつと、そのー……」

いつの間にか戻ってきていたアスナに指摘されてのどかは顔を赤くして言葉に詰まる。彼女はチラチラと昴を見、それに気付いた昴はカモの檻と飲みかけの抹茶を持って彼女の声が聞こえない席に移動した。カモが何やら騒いだ気がするが、そこは気にしてはいけない。

「それで、どうしたの本屋ちゃん」

「あ、えつと……」

昴が離れた事を確認して、アスナはのどかに問いかけた。そしてのどかはどもりながらもネギに告白しようとした事を話し始めた。

「ふーん、ネギに告白をねー……」

「しようとしたんですけどー、私、トロいから失敗してしまっ……」

目に涙を浮かべながらそう言う。どうやら告白しようとして悉く失敗に終わった事が堪えているようだ。

「しかし、ネギ先生はどう見ても子供では？ 色々と頼りないですし……」

「せつちゃん、そう言うのは言ったらあかんえ」

「す、すいません」

刹那が話の腰を折るような事を言うが、それは木乃香に窘められた。それに苦笑しつつも、アスナは先を促す。

「確かに普段は子供っぽくてカワイイんですけど、時々私達よりも年上なんじゃないかなーって思うくらい頼りがいのある大人びた顔をするんですー」

「……そうかしら？」

「確かにカワイイとは思いますが、どうなんやろ？」

「私にはよく分かりません」

話の腰を折り返る三人。しかしとても小声で話しているため、どこには聞こえなかった。彼女は続けて言う。

「本当は遠くから眺めてるだけで良いんです。それだけで勇気を貰えますから。でも、今日は自分の気持ちを伝えてみようと思って……」

「？　どうかした？」

「いえ、ありがとうございますアスナさん、木乃香さん、相坂さん。桜咲さんも、恐い人だと思ってましたけど、そんな事ないんですね」

「……え？」

のどかの言葉に刹那が固まった。しかしのどかはそれに気付かず、四人に話を聞いてくれた礼を言ってネギの場所に走って行く。その顔は、何処か晴れ晴れとした表情であった。

「あやや、せつちゃん、大丈夫ー？」

「……私、そんなに怖いでしょうか？」

「え、えつと……」

「普段結構ピリピリした雰囲気出してるからじゃない？」

「はっつー！」

刹那の問いにさよは言葉を濁すが、アスナはハッキリと言い放った。グサリと、何か刹那の心に刺さった音がした気がした。その後、公園内を歩いていたらのどかが告白した瞬間に偶然遭遇。アスナと刹那を感じさせたのだが直後にのどかは逃走。さらにネギが熱を出して倒れると言う結果となり、班のメンバー達を慌てさせ、昴はそれを見て「若いって良いですねー」と言っていた。ちなみにカモはいつの間にか説教されていたようで、真白に燃え尽きて檻の中で倒れ伏していた。

36話：キス戦争

ホテル嵐山のロビーで、ネギは大口を開けてボーっとしていた。顔を赤くして大口を開け虚空を見て、心ここに在らずと言う表現が酷く似合う状態である。何故ネギがこうなったかと言うと、奈良公園での宮崎のどかの勇気を振り絞った告白が原因である。

いかにネギが天才と呼ばれ、教師と言う職に着いても所詮は10歳。好意を向けられた事が有るとしても、それは可愛い物を愛でる様なそれであって、のどかの様に恋愛感情を前面に出したものはなかったのだろう（実際には幼馴染のアーニヤに恋愛方面の好意を向けられているのだがネギは現在それを知らない）。そう言う意味では、彼は生れて初めての告白を受けた事になる。

しかし親書や木乃香、過激派の事などで彼は割と一杯一杯であった。そして告白が止めとなり、その結果として現在、彼は頭を抱えて床を転げ回っている。しかし掃除は行き届いているようで、彼のスーツに埃が付く事はなかった。

「ネギ先生、どうかされましたか？」

「奈良公園で何かあったの？」

その様子を物陰から見ていた雪広あやかと佐々木まき絵が尋ねる。まあ、何も無い場所で頭を抱えてゴロゴロと転がられればおかしいと思っただけに聞きの来るのは当然だろう。

「えあつ！？ いいいいえ、あの、別に誰も僕に告つたりしてませんよ！？」

しかし色々な事があって混乱気味のネギは何があったのかを言ってしまうた。当然、それに反応しないメンバーは居ないわけで。

「告った!? だ、誰がですか!?!」

「えうつ?!? え、いえ、そのあの、告ったじゃなくてコココックリ産のコックローチをコックリさんのコックさんが……………」

告白について追及されたネギはさらに混乱し、訳の分からない事を息継ぎなしで喋りはじめる。それだけ混乱していると言う事だろう。ちなみにどうでもいいことだが、コックローチとは台所等によく出てくる、約3億年前より存在している嫌な感じに黒光りするやけに生命力の強い、生きている化石の事である。さらにどうでもいいことだが、国によっては食用や漢方薬に使用されている種もあり、養殖されている種もあるとか。

「し、しずな先生達と打ち合わせがあるので僕はこれでー!」

「ちょ、ネギくん!?!」

「誰が告ったんですのー!?!」

まき絵とあやかの声を聞きながら、ネギは今までにないスピードでその場から逃げ出した。

「……………そうですか、初日から随分と苦労したようですね」

「おかげで胃に穴が開くかと思っただわよ」

「ふふ、お疲れ様です」

「笑い事じゃないわよ、もう」

ホテル嵐山にある休憩所の一つで、昴とアスナはお茶を飲みつつ談笑していた。アスナにとつての心労の大元でもあるネギとカモがこの場に居ないため、心に余裕も出来たのだろう。文句を言いながら

も、その口調は穏やかだ。

「でも驚きだわ、スバルもここに泊るって言うんだから。別の旅館に泊まるかと思ってたのに」

「学園長に聞いたところ、京都に行く生徒達はここに宿泊すると言っていましたからね。駄目もとで電話したら、運よく空いている部屋が取れたんです。まあ、本館からは離れていますけどね」

「ホントに運が良いわね。…真言とか使っていないわよね？」
「使ってませんよ、失礼な」

アスナの言葉に、苦笑しながら昴は返す。だがその返答はアスナも分かっていたようで、「冗談よ」と言って手に持っていたお茶を飲む。それを聞いて、昴はまた苦笑した。

「…で、それ、美味しいの？」

「いえ、何と言いますか……すごく、微妙な味です。これは失敗でしたね」

「だったら何でそれ選んだのよ」

「どんな味なのか、好奇心に勝てなくて。買ったからには全部飲みますけどね」

そう言っただけは紙パックの飲料を飲む。それに書いてある名前は「微炭酸ラストエリクサー」。何とも微妙な名前の飲料である。当然のことながら、妙な名前をしているだけの唯の飲み物なので、飲んでも某幻想の名を持つゲームの様に体力が完全回復したり、状態異常が治ったりすることはない。

「どんな味なの？」

「一言で言えば、微妙な味です。柑橘系の炭酸飲料に、薄めた葡萄系のジュース……この風味はマスカットでしょうか？ それを混ぜ

た様な味、と言ったら良いでしょうか？ とにかく微妙です。御世辞にも美味しいとは言えませんが、かと言って不味いと言う様な味でもない……何とも微妙な味です。これ、飲む人居るのでしょうか？ と言うか、まず紙パックに微炭酸とは言え炭酸飲料を入れると言うのが……」

何とも言えない微妙な表情をしてそれを飲みながら昴は言う。パツクから聞こえる音からすると、既に半分以上飲み終えているようだ。それをアスナは呆れた目で見ながら自分のお茶を飲む。アイスのストレートティーだ。

ちなみにその後、偶然通りかかった綾瀬夕映にその光景を見られて麻帆良に帰ってから暫くの間、昴は彼女に奇妙奇天烈ジュースを大量に勧められるのだがこれは余談である。

「……おや？」

「どうかしたの？」

「いえ、今何か魔力が動いたような……」

「え？」

暫く談笑をしていると、昴がそんな事を言った。どうやら魔力の動きを感知したらしい。

それを聞いてアスナは過激派がまた来たのかと警戒するが、そう言った悪意は感じないと言われて警戒を解くも怪訝に思った。

「何で魔力が動いたのか気になるわね。何処で動いたか分かる？」

「場所は浴場でしょうか？ 今の魔力の動き方だと、おそらく感情の爆発で何か起こったのでしょうかね。その様な感じでした。確か今は教師の入浴時間の筈ですが」

「……何か、凄い嫌な予感がするんだけど。」

昴の言葉によってアスナの脳裏に浮かぶのは、自分と木乃香の部屋に居候する赤毛の少年魔法使い。あの少年は魔力の制御が甘く、くしゃみをしただけで不完全ながらも武装解除の魔法を発生させる程魔力の制御が不安定なのだ。感情の爆発で何が起こるか分かった物ではない。

微妙ドリンクを飲んで昴に少し見てくると告げ浴場に向かうと、すぐ近くの休憩所でネギが頂垂れていた。その眼もとは、僅かに涙が浮かんでいる。

傍には刹那も立っており、呆れた表情でネギを見ていた。

「どうしたのよ、そんなところで頂垂れて」

「あ、アスナさん……」

「どうも、誰かに魔法がバレたらしいです」

暗い雰囲気で頂垂れるネギに疑問を抱いたか、アスナが問うと3Aの一人に魔法がバレたと刹那が言った。すぐに誰にバレたのかを聞くが、出てきた名前に驚き、そして頭を抱えた。

「朝倉に魔法がバレた!? ちょっと、冗談でしょ!？」

「ホントです。お風呂で飛んじやって……その前にも飛んできるとカメラに撮られてみたいで……し、仕方なかったんです……人助けとか、ネコ助けとか……」

「カメラに撮られてたのは、合成かかって言っただけを切れば良かったじゃない。て言うか、何で浴場で飛ぶのよ!? そんなにポンポンと魔法使ってたらそりゃバレるわよ! しかもよりにもよってあの朝倉にバレるなんて……」

「朝倉さんにバレる=世界にバレる、と言っただけですからね……」

「……」
「そ、そんな!？」

アスナと刹那の言葉にネギは涙目になる。麻帆良のパパラッチの異名をとる彼女の情報収集・分析能力は並ではない。一晩もすれば誰にでも分かるように編集されて、学園中に知れ渡る事になるだろう。さらに噂拡散機とも呼ばれる早乙女ハルナにその情報が行けば、悪夢である。最悪、本当に世界にバレかねない。

「オコジヨになって強制送還確定ね」

「そんな！？ お願いです、一緒に弁護してくださいー！！」

「何でアンタのそれに付き合わなきゃなんないのよ！ って言うか、私達を巻き込むな！」

涙ながらに頼みこむネギに文句を言いながらアスナは縋り付いてきた彼を引き剥がそうと力を込める。しかし魔法で強化しているのかなかその手は外れない。どうにか剥がそうと四苦八苦ししながらネギと言いつつ合っていると、話しに上っていた朝倉和美本人が現れた。その肩には、いつの間に檻の外に出ていたのか、カモが乗っている。

「おーい、ネギ先生ー」

「ここに居たか兄貴ー」

それを見てネギは驚くがカモが彼女の事を味方だと言った事で落ち着いた。だが同時に疑問も湧き上がってくる。それを聞いてみたところ、何でもカモの熱意にほだされて仲間になったとか。

魔法の事も口外しないと、今まで集めたと言う証拠の写真等も返されてネギは喜んだ

それを見て刹那も気付かれないよう安堵の溜息を洩らす、アスナは訝しんだ。

「アンタ達さ、何か企んでないわよね？」

「別に何も企んでないさね。私はカモっちの熱意にほだされて協力

することにしたんだし」

「その淫獣の熱意つてのが怪しいのよ。今まで何度もくだらない事企んでたからね」

そう言つてジト目でカモを見るアスナだが、特に反応を示さなかったので考えすぎかと思い、刹那を連れて去つて行つた。実際には、カモは盛大に冷や汗を掻いていたのだが、アスナ達はそれに気付く事はなかった。

それから暫くして

「コラア3 A！ いい加減にしなさい！！」

就寝時間になつても騒ぎ続ける3 Aの生徒達に新田先生の雷が落ちた。修学旅行でハイテンションになるのは分かるが、時間と周囲への迷惑と言う物を考えてもらいたいものだ。昴以外に一般客が泊っているかは不明だが。

「昨日は珍しく静かだと思つてみれば！ いくら担任のネギ先生が優しいからと言つて、学園広域生活指導員のワシが居る限り好き勝手はさせんぞ！ これより朝まで班部屋からの退出禁止！ 見つけたらロビーで正座だ、分かつたな！」

「え〜っ！？ ロビーで正座あ！？」

「横暴だあ！ せつかくの旅行なのに！！」

「喧しい！ 少しは周囲への迷惑を考えんか！」

新田先生の宣告に文句を言う生徒たちだが、さらに怒られて沈黙する。それを確認してから新田先生は階段を下りて行った。その姿が見えなくなると正座させられていた生徒達は姿勢を崩し、部屋に戻ろうとする。しかし、そこに朝倉が現れた。

「くつくつく…怒られてやんの」

「朝倉さん！？ 一体何処へ行つてましたの！？」

「まあまあ、ちよいと皆に提案があつてさ。このまま夜が終わるのももつたないでしょ、いっちょ3 Aでゲームして、派手に遊ばない？」

「ゲーム？」

そう言われて皆は顔に疑問を浮かべるが、内容を説明された途端に再び騒ぎだした。

『ネギ君とキス！！？』

「こらこら、大声出したらまた新田が来るぞ」

そう言ってから朝倉はルールを説明し、その場に居たメンバーの大半（と言うかほとんど）の賛成を得て、11時からゲームを始めると言つて何処かに去つて行った。去つて行く際に誰かと話していたようだが、それに気付いた物は誰も居なかつた。

所変わつてネギの部屋。

彼は何やら不穏な気配を感じていた。

（な、何だろ……何だかここに居ちゃいけない様な……）

部屋に居ながら身の危険を感じたネギだが、まさか自分の生徒が自分を狙っているとは夢にも思わないようだ。背筋に寒気を感じながらじっとしていると、襖を開けてアスナと刹那が入って来た。

「周囲の見回り終わったわよ」

「特に異常はありませんでしたし、結界も強化しておきました。カモ君が変な魔法陣を書いているのは気になりましたが、放っておいても大丈夫でしょう」

「じゃあ次は僕がパトロール行つてきます。何だか、変な殺気みたいなを感じるので……あまりここに居ない方が良い気がしますし」

ネギがそう言うと、刹那もそれを肯定した。しかし教師が居なくなるのはまずいとアスナが注意する。

どうするかとネギが悩んでいると、刹那が紙の束を差し出した。

「ではこの身代わりの紙型をお貸ししましょう。これに日本語で名前を書けば、書いた人と同じ姿になってくれます。見回りに行くのなら、これに名前を書いて残して行けばいいでしょう」

「あ、ありがとうございます」

刹那に礼を言つて身代わりの紙型を受け取るネギ。その直後、やけに明るいしずな先生が部屋に入つて来、ネギの存在を確認すると見回りは自分達がやっておくから部屋に居るようにと言つて出て行った。やけに急いでいるように感じたが、気のせいだろうか？ それを確認した後、アスナと刹那も出て行った。

「……ん？ やけに騒がしいですね、何か有つたのでしょうか？」

温泉に入った後、部屋で新しいレシピを考えつつのんびりとくつろいで居た昴だが、僅かに耳に入って来た喧騒に首を傾げる。

「先程から妙な魔力も感じますし、それと関係があるのででしょうか？」

害意は感じませんが。

そう呟きながらも何だろうかと思になり、部屋の外に出て音のする方向　この方向はロビーか　に向かう。

そして着いたそこには、何故か隅で正座をしている二人と四方からロビーに入ってくる八人の生徒達、そしてその生徒達に囲まれるようにネギが居た………四人程。

「……………は？」

間抜けな声を出し、あり得ない光景に瞠目する昴。一度目を閉じて瞼を抑え、再び目を開けるが見える光景は変わらない。久しぶりに混乱し、思わず固まってしまう。

そのまま暫く呆然と見ていると、生徒の二人　確か名前は長瀬楓と古菲　が逃げるネギの一人を捕まえ、頬にキスをする。するとそのネギは爆発した。

「はあ!？」

突然爆発したネギにさらに驚愕を露わにする昴。それはそうだろう、普通人間は爆弾も何もなしに突然爆発したりしない。それを啞然として見ていると、爆風に飛ばされたのか人型の紙が飛んできた。

「これは、身変わりの符？　何故………って、名前が書いてあります

ね

飛んできた符を手に取り、それに書かれてある名前を見る。

書いてあった名前は、「みぎ」。「み」の字が、そう読んでいいの
か分からない形になっているが、おそらく「み」で合っているのだ
ろう……と思う。字形から見て。

おそらくひらがなで「ねぎ」と書くとうとして失敗した物なのだろう。
とすると今この場に残る他のネギも偽物と言う事になるのか？ そ
う考えると、頬が引き攣るのを感じる。良く見れば、片時も手を離
さないと言うナギの杖をどのネギも持っていない。

「しかし、だとすれば本物の少年は何処に……むっ！」
「チュー！」

不穏な気配を感じたので顔を上げると、偽ネギ(?)の1体が飛び
かかってきていた。それなりに跳躍力があるようで、このままいけ
ば顔面に膝が叩き込まれるだろう。勢いも有る。

「風牙」

しかし飛びかかって来たそれに、昴は幼いころより学んでいた家系
に伝わる武術の技をカウンター気味に叩き込んだ。それは偽ネギを
容易く吹き飛ばし、元の人型へと戻す。

その際に金髪ロングヘアの少女の叫びが聞こえた気がしたが気にし
ない事にした。今は何より事態を收拾させる事が先決と判断し、逃
げる偽ネギを捕まえるために追おうとするが煙を掻きわけて誰かが
現れた。

「ゲホツゴホツ……な、何だこの煙は!？」

「新田先生ですか？」

「む？ おお、緋乃宮さん、お久しぶりですな。休暇ですか？」
「そのような物です。ですが、この騒ぎは一体何ですか？」
「3 Aのいつもの騒ぎですよ。部屋を出たらロビーで正座させると言ったのに、まったく……他の宿泊客の迷惑にもなりますし、今はこの騒ぎを收拾しなければ。失礼」

そう言つて新田先生は逃げた偽ネギを追う生徒達を追おうとするが、走りだす前に鼻に声を掛けられて止まった。

「お手伝いしましょうか？ これでも一応ですが、広域指導員の一人に名を連ねていますし」

「ありがとうございます、その気持ちだけで結構ですよ。他の引率の先生達にも言つてありますので。それでは」

そう言つて新田先生は走り去つて行つた生徒達を追う。しかし時々何かが発する音が聞こえるのであまり時間を掛けずに戻ってくるだろう。今丁度3度目の爆発音がした。

それを聞き、部屋に戻ろうとするがその時に入口からネギが戻つて来た。ナギの杖を持っているため、今度は本物の様だ。そして、それに駆けよる少女が二人。背格好からしておそらくだが宮崎のどかと綾瀬夕映だと思われる。

その二人のうち、宮崎のどかが前に出るとネギは顔を赤らめ、しどろもどろになりながら何かを話す。しかし、どうも自分達が見られているとは思っていないようだ。

「あの、お友達から始めませんか？」

「はいっ」

何やら話し合い、ネギはそう言つた。その言葉から判断するにどうも昼の告白の返事の様だ。無難な返事を返し、のどかもそれでいい

と言うように顔を赤らめ微笑みながら返事を返す。

(若いって良いですね)

微笑ましげにそれを見ながら昴はそんな事を思っていた。実に爺臭い男である。

しかしそれで終わりとは行かなかった。傍に立っていた夕映がのどかの足を引っ掛け、部屋に戻ろうとしていたネギに倒れこませたのだ。

突然の事に二人は反応できず、のどかはネギに倒れ込む。ネギはのどかを何とか受け止めるが、流石に勢いは殺しきれなかったようで、あまりにも出来過ぎと言う様な感じで二人の唇が重なった。瞬間、発生する契約の繋がり。

(仮契約!? 馬鹿な、何故魔法陣もなしに……まさか、先程から感じているこの魔力は!?)

意識を集中し、即座に旅館とその周りを探る。すると、旅館の四方に仮契約の魔法陣が敷いてあった。この四つの魔法陣が基点となり、旅館全体を覆う巨大な仮契約の陣を作り上げたのだろう。

内心で舌打ちしつつネギを見るが、彼はのどかと一緒になって赤くなり慌てていた。どうやらこの仮契約の魔法陣の事には気付いていないらしい。主犯は別にいるようだ。

このままでは他の宿泊客がキスをしても仮契約が成立してしまう。その考えに思い至り、この陣を作った者に内心で文句を言いながら、昴は物陰に隠れて魔法陣を破壊するための真言を紡ぐ。

一般人を裏に関わらせる訳にはいかない。

「『四点を支える柱は崩れ、作られし輪は内に宿す力と共に消失す

る』」

そう言った直後、小さくだが何か壊れた音がした。念のために意識を飛ばして確認しても、陣は壊れていた。

ほっと一息吐き、昴は部屋に戻ろうとする。が、その前に、この陣を作ったであろう何者かに対して、お仕置きの意味を込めて真言を使う。

「『仮契約の魔法陣を張った者に、死ぬほどきつい、しかし死ぬない強烈な腹痛が発生します』」

そして昴は、新田先生の怒号と何かを心配するネギの声を聞きながら自分の泊っている部屋に戻った。

37話：三日目・呪術協会本山へくアスナ・ネギside

カモ・朝倉主催のドタバタ劇から一夜明け、修学旅行は三日目へと突入した。

そして現在、朝食を終えた3 Aの生徒達はのどかの周りに集まっていた。彼女の手には1枚のカードが存在している。

「へー、それが朝倉の言つてた豪華賞品？」

「みたいですよー」

「本屋の絵が書いてあるね」

「見せて見してー」

そう言つてせがむ生徒達。クラスメイトの一人が言つたように、のどかの手に有るカードには後ろに7冊、左右にそれぞれ1冊、正面に1冊の合計10冊の本に囲まれた彼女自身の絵が描かれていた。見る者が見れば、それがアーティファクトカードだと分かるだろう。

733

「かわえーなー。ウチも参加すれば良かった」

「木乃香さん、のどかが告白したばかりだと言つのに……占いグッズに目がないにも程がありますよ」

「う……そやった、のどかが告白したんやった」

「そ、そーゆー告白じゃ……」

木乃香と夕映の言葉に、のどかは顔を赤くしながら意味が違つと言う。が、クラスのほぼ全員が彼女がネギに抱いている感情の方向性を知っているのでその注意は意味を為さない。

「なかなかやりますわね、宮崎のどかさん！ 今日からあなたを正式に私の好敵手と認定致しますわ！」

「次は負けないよー」

昨晚のドタバタ騒ぎの唯一の優勝者であるのどこに對し、途中から手を組んだあやかとまき絵がそう宣言する。次回に同じ催しがあったら、まず絶対に参加してくるだろう。

その後、しずな先生から完全自由行動日だと言われ解散し、部屋に戻って行く生徒達。のどかもカードを片手に顔を赤らめ微笑みながら自室に向かっていると、温泉近くの休憩所に居るネギを見つけた。周りにはアスナ、刹那、朝倉とオコジヨが居る。

「どーすんのよ、こんな一杯カード作って！ アンタ責任とれるの、ネギ！？」

「ぼ、僕ですか！？」

「まあまあ、落ち着けて姐さん」

「そーそー、儲かったって事でいいじゃん」

5枚のスカカードと1枚の成立カードを手にネギに詰め寄るアスナ。しかし朝倉とカモが軽い口調でそう言い、アスナの神経を逆撫でする。

「アンタ達は黙ってなさい！ 特にその歩く猥褻物！！」

「歩く猥褻物！？ もう獣ですらねえの俺！？」

アスナの怒声にショックを受けるカモだが、今までの行動 下着に包まって眠ったり、風呂場で女子の裸体を覗き見たり、年頃の乙女におっさん臭い口調で下ネタを言ったり、女子の胸に潜り込んだり が行動の為、否定できない。

「大体、本屋ちゃん是一般人なんだからこっち側の事情には巻き込めないでしょ」

「イベントの景品として複製を渡したのもマズイかもしれませんが。そこからこちら側の関係者と勘違いされてしまうかもしれません。魔法使いと言う事もバラさない方が良いでしょうね」

「そ、そうですね。のどかさんには全て秘密にしておきます」

どうやらのどかには魔法に関する事は秘密にすることで話は纏まったようだが、アスナがかなり念を押している。会話はよく聞こえないが、のどかが物陰に隠れてそれを見ているとネギがアスナの方を見て言う。

「そう言えば、アスナさんもカード持ってましたよね。誰と契約してるんですか？」

「何？ アスナも持ってんの？」

ネギの言葉に反応して朝倉も聞き、そして見せる様に催促してきた。それに対してアスナは盛大に顔を顰めるが、ここで断っても別の時にしつこく聞いて来ると思ったのだろう。諦めを溜息で表してポケットから自分のカードを取り出し、自分の絵柄が描かれている方だけを見せる。

「ちっさ！ 姐さんこんな昔から関わってたのかよ!？」

「アンタこんな時から魔法に関わってたの？ で、誰と契約してるのさ？」

「何でそんな事まで言わなきゃなんないのよ。私が誰と契約してよいうがアンタ達には関係ないでしょうが」

見せたカードを手に取るうとしてきた朝倉の腕を避け、再度ポケットにしまう。

それにネギ達は若干不満そうな顔を見せるが、話す様子が見られないと分かると追求しなくなった。まあ、別の時に再び聞いて来るの

だろうが。物陰から見ていたのどこかも僅かに驚くが、気付かれないのは流石と言うか。

そんな光景を見ていた刹那が、朝倉に問いかける。

「そう言えば朝倉さん。昨晚急に腹痛に襲われたそうですけど、大丈夫ですか？」

「今は大丈夫だね、にしても驚いたよ。イベント中は何ともなかったのに、終わったら急に痛くなるんだから」

「俺っちにも来たぜ。朝倉の姉さんはそうでもなかったみたいだが、胃が捻じ切れるっつーか刺されるっつーか……あまりの痛さに死ぬかと思っただぜ……」

朝倉に来た痛みはどの程度か分からないが、カモに来た痛みはどのようなものか想像できる事を言った。

イベントが終わって急に来たと聞いてアスナと刹那は誰がやったのか予想がついたが、言わない事にした。教えれば、文句を言いに行くのは目に見えていたからである。

そして、アスナはネギに再度忠告し、カモ命令する。

「ともかく、絶対に本屋ちゃんにこっち側の事とか、カードの使い方とか教えちゃダメだからね！ 朝倉も、無暗矢鱈にこっちに顔突っ込むんじゃないわよ。記憶弄られたくないならね」

「何、そんなにヤバイの？」

アスナの言葉に朝倉はへらへらとした表情を消し、真面目な顔で問いかける。

彼女は決して馬鹿ではない。確かに知りたがりのきらいがあり、新聞のネタを求めてあちこちを走り回り、鬱陶しいと思われる程に聞き込みを重ねることもあるが、そのため彼女は情報の真偽を見抜く力に長けている。寧ろ、その情報収集・分析能力も相まってかなり

賢いと言えるだろう。

アスナもそれを知っているため、全てとは言わないがある程度の事を話し注意する。

「一般人には本来秘匿される物なのよ。記憶弄られるだけならまだましね、最悪の場合……まあ、これは本当に最悪の場合だけど、口封じに消されるか、精神を壊されるわね」

「は？ 待って、最悪消されるって!？」

「そう言う物なのよ。アンタは魔法を口外しないって言ったけど、もしバラしてみなさい。記憶消されるならまだいいけど、アンタ自身が新聞を賑わす事になるかもね。そこんとこ肝に銘じときなさいよ」

アスナがそう言うと、朝倉は顔を蒼くしてコクコクと頷いた。

そしてその場は解散したが、ネギがカモと二人だけで残り、カモに聞く。

「ねえカモ君、カードの使い方って？」

「ああ、額に当てて念話する他にもあるんだよ。コピーカードだったら従者だけのアーティファクトの召喚とかな」

「それってアスナさんがやってた？」

「おう。カードを持って「アデアット来れ」、「アベアット去れ」って言えば出来るんだよ。ま、アーティファクトカードに限定されるし、のどかの嬢ちゃんには教えねえんなら意味ねえがな」

「ふーん……」

そう言ってネギもカモを肩に乗せて部屋に戻って行った。

それを見送り、隠れていたのどかも部屋に戻る。が、途中でカモの言っていた事が気になった。

「……………あ、アデアット？」

先程までのネギ達のやり取りを思い出し、カードを片手に小声でボソリとのどかは呟く。

すると、光と共にカードは一冊の本に変化した。

表紙には「DIARIUM EJUS」と書かれている。この本の名前だろうか？

「カードが本に……………ふしぎー…」

好奇心に頬を染めながら彼女は仄かに発光する本を開く。しかし中には何も書かれておらず、白紙ページがあるだけであった。それを疑問に思いながらパラパラとページを捲っていくと、最後のページでボウツと文字と絵が浮かび上がって来た。

「？ 絵日記？ ……………！？」

浮かび上がって来たそれを見て、のどかの顔は真っ赤に染まる。

何故か？ 理由は簡単、浮かび上がった文字と絵は、昨晚あったキス騒動と現在ののどかの想いを示していたからだ。突然の事に思わず固まる。

顔を真っ赤に染めて固まっていると、親友の夕映が来た。

「どっしたのですのどか」

「あ、夕映」

「ぼさっとしていると、ハルナが暴れ出しますよ？」

「う、うん……………あれ？」

咄嗟に白紙のページを捲り、自分の心の言葉を隠す。が、今度は別の絵と文字が浮かび上がって来た。少し見ると、それが目の前の親

友の物だと分かった。思わず勢いよく本を閉じる。急にのどかがとった行動に疑問を覚えたか、夕映が聞いてきた。

「どうしましたか、急に……何ですか？ その本は。ラテン語の様ですが……あ、何故隠すのですか。本の事で隠し事など水臭い」
「あ、えーと……これはー……」

夕映の目からその本を隠すようにのどかは動く。彼女は浮かび上がって来た絵と文字から、自分の手に現れたこの本がどのようなものを直感的に理解した。

アーティファクト・ディアーリウム・エトユスいどのえにつき。使用者が名を呼んだ人間の表層意識を読み取り、絵や文字としてそれを記し出す、その強力さからマスターピースとも呼ばれる、極めて危険なアーティファクトの一つである。

尤も、彼女がその事を知るのもう少し先の事になるので今は置いておこう。

（ああああ、こ、この本はひょっとしてもまずい物なのではー！？）

僅か二度の使用でこの本の能力と危険性を若干であるが理解し始めたのどかは、混乱しつつもどうしようか考える。「去れ」と言えば本はカードに戻るのだが、それをしてしまえばどういったものか説明が必要になる。

尤も、彼女は現在絶賛混乱中であるためそれに思い至る事は無いのだろう。

「コラーツ、二人とも何ボサツとしてるの！ 早く用意しなさいよー！！！」

だが、そうこうしていると同じ班の早乙女ハルナ
通称パール
が突撃してきた。

「今日はネギ先生に着いてくんでしょ？　ホラ、早く私服に着替えて着替えて！」

「ハルナ、テンション高いよ〜」

「ぐっすり寝ていたあなたと違って私達は寝不足気味なのです」

突撃してきたハルナのおかげで夕映の意識は本から逸れた。その事にのどかは内心で感謝し、夕映は「自分達は寝不足だ」と文句を言う。寝不足なのは自分自身の責任であるため、その事で文句を言うのはお門違いと言う物であろう。まあ、無意味と知っていて冗談で言ったのかもしれないが。

そして他愛のない会話をしつつ、三人は部屋に戻って着替え、木乃香と一緒に旅館から出た。

ネギは5班と一緒に行動していた。

最初はアスナ、刹那と一緒に西の総本山に向かう予定だったが、どうも二人が他の班員に見つかってしまったらしく、なし崩し的に一緒に行動することになったのだ。二人にそこところは注意不足だったと謝られた。

ちなみに刹那は6班であるが、6班から離れている。そして、他の6班のメンバーはエヴァンジェリンに引き連れられて京都の神社仏閣を巡り歩いている。さよが言うにはシネマ村にも行くらしい。

ちなみに昴は宿を出た所をエヴァンジェリンに捕まり、ガイドとして引き摺られて行った。

「宿の近くも良い所なんですわー」

「はい。嵐山、嵯峨野は紅葉の名所も多いので、秋に来るのもいいですよ」

「紅葉狩りね。綺麗だったわよねー、またいつか来ようかしら？」

談笑しながら道を歩く。途中、ハルナ達に目的地を聞かれたがはぐらかし、聞こえないようにアスナ達と話し合い、騒がしい場所に行つて彼女等をまく事にした。

道を進んでいると丁度良くゲームセンターに着き、プリクラやゲームで遊ぶために店に入る。せっかくの修学旅行で、記念のプリクラはともかくゲームセンターでゲームをする事は無いだろうに。新幹線の中でやっていたカードゲームで遊ぶメンバーを見てアスナ達も苦笑する。

ちなみにどうでもいいことだが、昴はプリクラが何なのかを知らない。

暫くそこで遊び、途中ネギが帽子をかぶった少年に勝負を挑まれ、敗北した。頃合いを見てアスナが言った。

「丁度いいわね。刹那、ネギ」

「はい、お二人ともお気を付けて」

「え？ ……あ、分かりました」

刹那を残し、アスナとネギは皆に気付かれないようにゲームセンターを出る。そして二人は、呪術協会総本山のある社に向かって走り出した。

その後ろを、アーティファクトを出しっぱなしにしたのどかが着いてきていると気付かずに。

電車に乗り、暫く歩いて「？毘古社」と書かれた鳥居に着いた。途中、電車の中でカモがアスナに、「もしかしてネギに惚れているのか」と聞きかけて窓から外に放り出されかけたが、それは別にどうでもいいので置いておこう。ちなみに電車には自分達以外に客は居なかったため、何かを言われると言った事はなかった。巨大な鳥居の奥に、階段と無数の鳥居が静かに存在している。

「ここが関西呪術協会の本山……？」

「伏見神社つてのに似てるな」

「正確に言えばここは玄関みたいな所、この千本鳥居の奥にある屋敷がそう言われてるわ。何年ぶりかしら……」

ネギの言葉にそう補足しつつ、何処か懐かしげにアスナは呟く。

彼女も昔、ここ関西呪術協会に居て神鳴流を詠春より学んでいた。

小学5年に編入した時に麻帆良学園に行ったため、戻ってくるのはおよそ4年ぶりと言うところか？

そんな事を考えながらネギを伴い最初の大鳥居を潜ろうとするが、ふと何かを感じて振り返る。

何か、ぼんやりと光る物がフヨフヨと飛んで来ていた。

それをじっと見てみると光は二人と一匹の前にやって来て、ポンッと音を立てて小さな刹那へとその姿を変えた。

「お二人とも大丈夫ですか？」

「せ、刹那さん？ あれ？ 何でそんなに小さい……」

「連絡係の分身の様な物です。心配で見に来ました。ちびせつなどお呼びください」

「は、はあ……」

ぺこりとお辞儀して自己紹介したちびせつなに、気の抜けた返事をするネギ。と言うか、「ちび」せつなとは……見た目そのまんまである。

「式神を送ってくるって、もしかしてそっちで何かあったの？」

「いえ、今のところは何も。ただお二人が無事に本山へ着いているか心配になって……」

そう言ってちびせつなは、東からの使者とはいえ歓迎されるかは分からない事、二日前に木乃香を攫った連中に注意する事等を言っアスナの肩に乗る。

その事を聞いてネギは杖を構え、アスナはハマノツルギをハリセン形態で呼び出し、武装を整え警戒しながらも走り出し鳥居を進んで行く。

暫く走るが、何も出て来ない。それに疑問を覚えるアスナとちびせつなだが、ネギが言うには妙な魔力も何も感じないらしい。

何も出て来ず、変な魔力も感じないため警戒が薄れたか、ネギはややテンションを上げて走り出した。それにアスナとちびせつなが注意するが、既に聞こえない場所にまで行っているのか止まる気配がない。そんなネギに呆れながら、彼女達もネギを追って走り出した。

「にしても長え石段だよな、もう30分は走ってるぜ？」

「さ、流石に疲れてきました……」

「……おかしいわね」

「はい。先程から同じ場所を回っている様な……これはもしましや」

幾つもの鳥居を走り抜け、流石におかしく思ったのか全員の手が止

まる。子供だが、意外と体力のあるネギも息を切らしていた。そしてアスナとちびせつなはネギにその場を動かないようにと言って竹林の方に走りだす。二人の突然の行動にネギはポカンとし見送るが、少し経って後ろから物音が聞こえ、カモと一緒に振り返る。先程竹林に入って行ったアスナ達が、真逆の方から出て来ていた。

「え、ええっ!？ あれ、アスナさん達さっきこっちに行きましたよね!？」

「刹那、これってやっぱり……!」

「はい、間違いありません。これは無間方処の呪法です」

「無間方処?」

聞き慣れない単語に首を傾げるネギだが、ちびせつなに堂々巡り型の結界であり、自分達はそれによってこの千本鳥居の中に閉じ込められたと説明されて驚く。

何も感じなかったようだからそれかもしれないのかも知れないが、警戒を解いてしまったのはいけない。

「兄貴、空から脱出だ!」

「う、うん……って、うわぁっ!」

カモに言われてネギは空からの脱出を試みるが、ある程度まで昇ったところで地上に戻されてしまった。

「ど、どうしましょう!？」

「こう言った結界は、何処かに基点となる呪印か魔法陣が在る物なんです。幸い、無間方処は結界内部にそれを含んでいる結界なので、それを見つけて破壊すれば出る事は出来ますが……」

「半径500mで同じ景色の堂々巡りの中、それを探すのは正直に言って骨が折れるわよ。私は術の解析とかできないし……」

魔法具や呪符は別だが、完全魔法無効化能力の為にアスナは身体強化以外の術を使えない。そのためどういった物かと言う知識はあるが、攻撃や感知、探索と言った術も一切行使出来ないのだ。そして呪符なども現在、手元には一枚も無い。自分の体質に苛立ちを感じながら、ちびせつなに問う。

「刹那、そっちは大丈夫なの？」

「今のところは……ですが、敵が狙っていると分かった以上、お嬢様の側を離れる事は……」

「無理、ね」

険しい顔をしてアスナは考える。しかし何も思い浮かばず、落ち着いて考えられる場所を目指してネギを連れて走り出した。

宮崎のどかは入口の大鳥居の前に立っていた。

ゲームセンターからこそこそと気付かれないように出て行く二人を見つけ、ネギが（一応アスナも）どこに行くのか気になった彼女もまた、他のメンバーに気付かれないように外に出て二人の後を追ったのだ。

しかし、それなりに距離が開いていたのでここに来て見失ってしまった。

「ネギ先生とアスナさん、どこに行ったんだろー？」

周りを見ても、周囲には鳥居の他には民家しかないのでおそらくはこの奥に行ったのだろう。

すぐにそれに思い至り彼女も鳥居を潜ろうとするが、『立ち入り禁

止』の立て札が行く道を塞いでいた。

「あれー、立ち入り禁止……他を探さないと……」

立て札を見て彼女は踵を返し、他の道がないかを探しに行こうとする。しかし、何かが聞こえた気がして振り向いた。

「…ネギ先生？」

本を手を持ったまま彼女はネギの名を呼ぶ。すると本が仄かに光り、それに気付いたのどかはページを捲る。

開かれたページに出てきたのは、アスナとネギが走って何処かを目指している様子だった。ちなみに絵のネギは泣いている。どうでもいいことだが、やけにコミカルな絵だ。

「また絵が……これ、もしかして今のネギ先生の気持ち……？」

意図せぬ三度目の使用で本格的にこの本がどう言った物かを理解した彼女はネギ（とついでにアスナ）が現在助けを求めている事を知る。

それを知った彼女は居ても立っても居られなくなり、『立ち入り禁止』の立て札を無視して鳥居の道に入って行った。

走りながら二人を探す（主に探しているのはネギ）が、見つからない。心配で心が焦燥するが、ふと自分のアーティファクト（のどか自身はコレをそう呼ぶとまだ知らない）の能力を思い出し、ネギの名を呼ぶ。これで分かるのは相手の思考であって現在位置ではないのだが、それは置いておこう。

そして、新たにページに浮かび上がった絵に驚いた。

（な、何だかスゴイのが出て来てさらに大変な事にー！？）

鳥居の間の石畳に座りこんで彼女はページを読み進める。2ページほど進んだ所で、出てきた大きな蜘蛛はアスナのハリセンによって倒されたが、それからさらに読み進めた所で蜘蛛を使役していた少年にネギが殴り飛ばされた。

「ね、ネギ先生がーっ!？」

僅かに目に涙を浮かべながらも、期待と不安で（不謹慎だが）胸躍らせながら彼女はページを捲って行く。それを読みながら、彼女はこれが子供向けの冒険小説かライトノベルの様だと思っていた。文字と一緒に絵があるので、どちらかと言えばコミックに近いと思うのだが。

ネギを殴り飛ばした少年は、アスナのハリセンを避け、あるいは掻い潜りながらネギに迫り攻撃する。流石に少年もアスナにしばかれて無傷とは行かないようだが、確実にネギにダメージを与えて行っていた。

のどかはそれを、ハラハラしながら読み進める。

ちなみにこの時、彼女のすぐ後ろで移動しながらの攻防が繰り広げられていたのだが彼女はそれに一切気付かなかった。

どうやらのどかは本を読むことに集中すると周りが見えなくなるようだ。

暫くして彼女は立ちあがり、本を読みながら道を進み始めた。

襲撃してきた少年から逃げた（戦略的撤退とも言つ）アスナ達は、

参道から外れた場所に在る沢で一息入れ、作戦会議を行い、再び参道に出て襲撃してきた少年を待ち構えていた。

「兄貴、考え直せ！ その作戦危険すぎるぜ!？」

カモの忠告にネギは耳を傾けない。ただやって来るであろう少年を杖を構えて待っていた。

「……来るわよ」

「ラス・テル マ・スキル マギステル、エウオカーティオ・ウアルキアササホル本ノリア・グラディ風精召喚！ 剣を執る戦友！！アイリア 迎え討て!！」

アスナの言葉を聞くと同時に詠唱を始め、ネギは風精を召喚して襲撃者の少年に放つ。これで倒せるなら御の字だが、先程の戦闘からそんなに甘い相手ではないと知っているのですぐに別の魔法を詠唱し始め、再び放つ。

「サキタ・マギカ魔法の射手、セリエス連弾・雷の17矢!！」

エヴァンジェリンとの戦いの時にも使った雷属性の「魔法の射手」を少年に向けて撃ち出す。少し離れた鳥居の上に降り立った少年は防御の呪符で防いだようだがしかし、まだ終わらない。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！ウイナス・フルゴル・コンキテンス・ノクテム 闇夜切り裂く一条の光、イン・メアー・マヌー我が手に宿りて敵を喰らえ!！エンズ・イミミクム・エタットフルグラーティオー・アルヒカンス 白き雷!！」
「うがあああつ!？」

最後に放った「白き雷」が、鳥居の上に居た彼に直撃した。痺れたか、それとも衝撃で体勢が崩れたか、とにかく鳥居の上から少年が落ちる。

「へえ」

「さすが兄貴！ 遠距離からのフェイント含めた3連発！ 対戦士魔法戦闘の基本だぜ！？ これでアイツも……」

「いえ、まだです！」

カモがもう終わっただろうと勇んで言うが、それは俗に言う失敗フラグと言う物だ。

事実、ちびせつながそう言った直後、着弾地点に発生していた煙の中から所々焦げているがピンピンした少年が飛び出してきた。

「なかなかやるやないかチビ助！！ 今のはまともに喰らったらヤバかったわ、おかげでとっときの護符も全部オシヤカになってもうた！！ けどな、今ので決めれんかったんは失敗やな！ 俺の勝はぶおあつ！！」

かなりの勢いをつけて飛び出してきた彼だが、瞬動でいつの間にか目の前に来ていたアスナのハマノツルギ（ハリセンver）で顔面から思い切り殴り飛ばされ、鳥居の一つに激突する。だが意外とタフな様で、すぐに起きあがる。

「な、何すんやお姉ちゃん！ 俺の狙いはそのチビ助だけや！

邪魔すんな！」

「現在進行形で私達の邪魔してるのはアンタでしょ」

不意打ちのように顔面にスチール製のハリセンを叩き込まれて文句を言う少年だが、アスナに言い返される。

それに対して怒りを滲ませた少年は自分の影から犬の様な物を多数召喚しアスナに向かわせ、自らは瞬動でネギに急速接近した。

「ネギッ！」

アスナは襲いかかって来る召喚された黒い犬　　狗神　　を回避してネギに向かった少年を追おうとするが、狗神に邪魔されて進めない。仕方なく彼女は狗神の相手をする。
接近されたネギは瞬く間にボロボロにされて行く。

「護衛のパートナーが強いなら、一時的でも戦えんようにしたらええ！　西洋魔術師も、遠距離を凌いで呪文唱える間をやらんかったら怖くもなんともない！」

「ちよつと、私ネギのパートナーじゃないわよ！？」

「どおやチビ助、これで止めや！！！」

少年の言葉にアスナはそう言うが、スルーされた。

ボロボロになったネギに、少年は渾身の気を込めた一撃を見舞おうとする。

狗神を駆除し終えたアスナが止めようとするが、距離が離れているため間にあわない。

これで終わりかと誰もが思ったが、予想外の事が起きた。

「契約執行0・5秒間、ネギ・スプリングフィールド」

ネギがそう言った直後、彼の体に魔力が奔る。それを使って彼は少年の拳をいなし、思い切り殴り上げた。

宙を舞う少年の体。その下にネギは体を滑り込ませ、詠唱を始める。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル、ウーヌス・フルゴル・　コンキデンス・ノクテム
イン・メアー・マヌー　　・エンズ・イ・ミークム・　エヌツァテイオー・アルピカンス闇夜切り裂く一条の光、
我が手に宿りて敵を喰らえ。白き雷！！！」

降って来た少年の体に手を当て、彼は「白き雷」を直接彼の体に解

き放った。

奔る雷光と立ち込める煙。そこから転がり出る少年の体。気で防御したようで大きな外傷は見受けられないが、流石に全てを防ぐ事は出来なかったのだろう。

電撃による副作用で発生した痺れで、少年は地面に蹲っている。

「どうだ、これが西洋魔術師の力だ！」

満身創痍と言っている状態で、ネギは少年を見据えて言い放った。

「ひ、ひやひやさすぎだぜ兄貴。付け焼刃の「魔力パンチ」を当てるために決定的な反撃のチャンスを探うしかなかったとはいえ……」

「自分の魔力を自分に……しかし何て無茶な」

ネギが行った行動を分析する力もとちびせつな。しかしそれを注意する事は後にして脱出する事を先決した。

「ま、待てえっ！」

だが、そこで少年が動いた。

「…唯の人間に、ここまでやられたのは…初めてや。…さっきのは、訂正するで……ネギ・スプリングフィールド……」

今だ痺れの残る体に力を込めて、少年は立ち上がろうとする。

だが、どうもそれだけではないようだ。少年の体から異音が聞こえ、髪を含めた体毛の色が薄れて行く。

「だがまだや！ まだ、終わらへんで！！ こっからが本番や、ネ

ギー！！」

髪が伸び、尾が生え、足の関節が若干変化し、全体的に白くなった少年がそう宣言し、襲いかかる。咄嗟にアスナがネギを抱えてその場から離れるが、繰り出された拳は石畳を軽く粉碎し、小さいながらもクレーターを作り上げた。

「これ、獣化！？」

「外見的特徴から見て、おそらく狗族です！ 犬や狼と言った物の変化です！」

「狼男みてえなもんか！？ 滅茶苦茶だ、兄貴、相手することたねえ！ ほつといて脱出だ！！」

「ううん。契約執行10秒間、ネギ・スプリングフィールド」

「兄貴！」

カモの忠告を聞かず、ネギは再び自分に魔力を供給して身体強化する。

それを見てアスナ達は呆れると共に怒り、敵の少年は嬉しそうな笑みを浮かべる。

少年が高速で移動し、ネギの視界から消える。それを見てどこから攻撃して来るかネギは考えるが、行動に移る前に声がした。

「左ですネギ先生ー！！」

突然聞こえた声に突き動かされるようにネギは回避行動に移った。その直後、自分の居た場所を通過する白い軌跡と破壊される石畳。ネギは声に驚くがそれは少年も同じようで、声のした方向を二人揃って見る。

そこには、宮崎のどかが息を切らせながら立っていた。手には見慣れぬ本を持っている。

「な、のどかさん!？」

「本屋ちゃん!？ 何でここに!？」

突然現れたのどかに驚きを隠せないアスナ。それを見てのどかは何故自分がここに居るかを説明しようとするが、少年の行動を察知してネギに指示する。

「右です先生！ 上、右後ろ回し蹴りだそうですー!!」

のどかの指示道理に動き、少年の攻撃を悉く回避しカウンターを入れて行くネギ。しかし受けたダメージが大きいせいか、もうあまり動けないようだ。

「やべえ、兄貴のダメージが大きすぎる！ このまま戦り合うのは危険だぜ！」

「あの、カカカモさん。私、何が起きてるか大体理解してますー。ここから出ればいいんですよね？」

「お、おう。そうだけど……って、何で嬢ちゃん俺つちのことを!？」

カモが聞くが、のどかはそれを聞かずに息を吸い込み、声を大にして少年に問いかける。

「小太郎くん、ここから出るにはどうすればいいんですかー？」

「は？ アホかい姉ちゃん。んなこと言う訳が……はっ!？」

ネギに相對しつつのどかの問いにそう答える小太郎。しかし、彼ののどかの手に浮かぶ本を見て固まった。

「この広間から東へ6番目の鳥居の上と左右3箇所隠された印を壊せば良いそうです」

「ふおおおおお!?」

「ど、読心術!? まさか、その本……!!」

のどかの言葉に驚きを隠せない全員。皆が思わず固まってしまいが、意外な事にネギが最も早く硬直から立ち直り動き出す。

杖に乗り、その動きを察知した小太郎の攻撃を回避し彼は呪文を唱える。

「魔法の射手・光の3矢!!!」

のどかの示した場所へ光属性の魔法の射手を放つ。それは僅かな誤差もなく隠蔽された印を打ち抜き、無間方処の呪法に亀裂を与えた。

「のどかさん!」

「あ……」

碌に確認もせずネギは彼女の元へ飛び、抱き上げて亀裂の元へ向かう。それに並走してアスナとちびせつなが、四人と一匹を追って小太郎が走る。

獣化状態で走る小太郎の速度はかなりの物で、徐々にその距離を縮めて行くがいかにせん距離が開き過ぎていた。

追い付く事は出来ず、アスナの手により無間方処は破壊された。

「刹那!」

「はいっ!」

「ま、待てコラ!」

無間方処より脱出したアスナは、ちびせつなに指示して無間方処返

しの呪を使わせ小太郎を逆に閉じ込めた。
暫く待って出てくる気配がないと分かるとホッと息を吐き、道を進んで行った。

だがその途中、ちびせつなが紙型に戻ってしまった。

「な、何が!？」

「刹那の方に何かあったわね。式神を使う余裕が無くなった……」

「て、てえこたあ……奴等か!？」

「それ以外にないでしょ」

アスナの言葉に慌てるネギ達だが、アスナは慌てない。携帯を取り出し、電話する。

1、2分程何かを相手と話した後、彼女はポーチに携帯をしまった。

「だ、誰に電話したんですか？」

「私が一番信頼している人に。すぐに向かってくれそうよ」

そう言ったアスナの顔に、焦りは欠片も見えなかった。

38話：三日目・呪術協会本山へ／刹那side

刹那は木乃香を連れて走っていた。

つい先ほどまでアスナ、ネギと別れたゲームセンターで木乃香達と一緒に居たのだが、そこで僅かながらも確かな殺気を感じ、危険と判断して人通りの多い場所を選んで逃げているのだ。

「せ、せつちゃんどこ行くん？ 足速いよおー」

「あ、すみませんお嬢様」

木乃香の言葉に謝りつつも刹那は速度を落とさない。後ろの方で遅れながらも着いて来ている5班のメンバーが息を切らせながら何事かと問いかけてくるが、それはスルーした。

「っー！」

風切り音も無く後方や斜め上から飛来する物体を傷付くことなく受け止める。

飛んできた物は鉄製の、先の尖った細長い棒 飛針と呼ばれる

暗器 だった。

まだ日も高い時間帯、周囲に人が居る中でこの様な物騒な物を投げてくるとは、余程投擲に自信があるのか、それとも一般人の事など知らぬと言う思考を持った危険人物か。

どちらにしても、良い物ではない事は確かだが。

隣を走る木乃香に見られないように顔を顰めるが、走る速度は落とさない。ただ一般人が大勢居て、そうそう手出し出来ないだろう場所を指す。

暫く走っていると、他の場所に比べて人が多く出入りしている場所

に出た。看板には、大きく「シネマ村」と書かれている。

「あれ、ここってシネマ村じゃん。何よ、桜咲さんシネマ村に来たかったんだ？ それならそうと言ってくれれば良いのに……」

着いて来ていた5班メンバーの一人である早乙女ハルナがそう言うが、刹那は別の事を考えていてその言葉をほとんど聞いていない。

(シネマ村……ここならば……)

一般人も大勢居るため安易に襲撃は出来ないだろう。

そう考え、5班の二人を巻き込まないために彼女としては珍しく早口で提案する。

「すみません、私このちゃんと二人きりになりたいんで、ここで別れましょう!」

「へ？」

「お嬢様、失礼を!」

「ふえ？」

聞く者が聞いたら盛大に誤解しそうな事を言い、刹那は木乃香を抱き上げ 俗に言う、お姫様抱っこと言う物で 足に気を籠めて跳躍し、入口ではなく壁を飛び越えてシネマ村に入って行った。普通に不法侵入である。

「い、一体どういうことですか？ と言うか、金払って入れです……」
「んー、女の子同士で二人つきり……はっ!？ まさか……!？」

そして、ここに一人そう言う誤解をしてしまう者が居た。どうやら百合な想像をしたらしい。僅かに頬を染めつつ好奇の光をその目に

灯す。

そんなハルナを呆れた目で見つつ、もう一人の5班のメンバーである綾瀬夕映もシネマ村に入って行った。きちんと入口で入場料を払って。

シネマ村に入って行く標的達を、近くの電柱の上に降り立って見ている少女が居た。

「シネマ村……面白い所に逃げ込みましたな」

白いゴシッククロリータファツションに身を包み、手に小太刀を持ち佇む彼女の名は月詠。反西洋魔法使いである呪術協会過激派に属する、先日木乃香を攫った猿女に雇われている神鳴流剣士である。彼女は雇い主である千草に頼まれ、人気のない所に誘い込もうとしていたのだが逆に人気の有り過ぎる場所に逃げ込まれてしまった。普通なら苛立ちを見せるか、何がしかの負のリアクションを取るだろうその状態で、彼女は笑みを浮かべて頬を染めていた。

「刹那センパイかぁ……仕事でなくても、仕合いたいお人やわぁ……」

朱に染めた頬に手を当て、何処かうつとりとした目と口調でそう言う月詠。どうやら刹那は、あまり関わり合いになりたくない人間に目を付けられてしまったようだ。

ホウ……と熱い溜息を一つ吐き、彼女もまたシネマ村に入って行った。刹那と同じ様に、壁を飛び越えて。

大勢の客の中、刹那は木乃香が入って行った建物の外で僅かにだが気を緩めていた。

（これだけ人が居れば、少なくとも大つぴらに襲って来る事は出来ないだろう。ここで時間を稼いで、アスナさん達が戻るのを待つか……）

そう考えながら、刹那はアスナ達に連絡しようと念を込める。しかし連絡役のちびせつなどのリンクが先程の襲撃によって切れてしまつたらしく、繋がる事はなかった。

（やはり駄目か……しかしどうするか。先程ちびせつなを通して見た限りでは、アスナさんともかくネギ先生はかなり消耗しているようだし）

あのボロボロの状態では、来たとしてもかえって足手纏いになるだろう。

いつそ鼻に応援を頼もうかと刹那が考えていると、建物の方から木乃香の声がした。

「せつちゃんせつちゃん」

「はい？ 何で……」

「じゃーん」

声に呼ばれて振り返ると、そこには髪を結い上げ、美しい着物を着て「これぞ大和撫子」と言った姿の木乃香が立っていた。実に似合っている。

余りに似合っているので刹那も思わず見惚れたらしく、感嘆の溜息を漏らしていた。

「お、お嬢様、その格好は……?」

「知らんの? その更衣所で着物貸してくれるんえ。それよりもどう? 似合うとる?」

「ハッ、いや、その、もう…お、お綺麗、です…」

顔を赤くして刹那がそう言うと、木乃香は喜びの声を上げてクルクルと回った。それを眺めながら刹那は思う。何故自分はこんなに動揺しているのか、と。

そのすぐ後、刹那は木乃香に連れられて更衣所に入り、着替えたのだが何故か貸し出されたのは新撰組の衣装だった。

「あの、何故私は男物の扮装なのですか? 夕凧が死ぬほどそぐわない……」

「似合うとるで、せつちゃん」

貸し出された衣装の帯に夕凧を差しながら刹那は言う。腰に差すから似合わないのではなからうか?

そう思いながらも木乃香に連れられ、刹那は歩き出した。途中、甘食を食べたり、修学旅行生に写真を撮られたり、そのデータを貰ったりしたがそれは割愛しておこう。

意外に気も緩んでいるようで、自分達を見るクラスメイト達にも気付いていないようだ。

そうして食べ歩いたり土産屋に入ったりして木乃香と一緒に楽しんでいると、突然後方から馬車が走ってきて自分達の傍で止まった。そして降りて来た人物に、警戒を最大に引き上げて木乃香を背に身構える。

「どうも〜神鳴流……じゃなかったです。その東の洋館の貴婦人

にございます。そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお姫様を貰い受けに来ましたえ〜」

「な、何？ 何のつもりだ、こんな場所で」

「せつちゃん、これ劇や劇。お芝居や」

どうやら芝居として木乃香を連れ去ろうと言う魂胆らしい。

シネマ村では客を巻き込んだ劇が突発的に始まったりするらしいので、なかなか良い策である。刹那もそれに思い至った様で、衆人觀衆の中堂々と「守る」と発言し木乃香に抱きつかれ、劇だと思っている周囲の客を賑わせた。

「そーおすかー。ほな、仕方ありまへんなー」

すると月詠は突然、左の手袋をはずしました。心なしウキウキとしているように見えるのは気のせいであろうか？
そして外した手袋を、彼女は刹那に投げつけた。

「このかお嬢様を賭けて決闘を申し込ませて頂きますー。30分後、場所はシネマ村正門横の「日本橋」にて……。御迷惑とは思いますが、どうしても手合わせさせて頂きたいんですー。逃げたらあきまへんえー、先輩」

眼の黒白を反転させ、不気味に笑う月詠。殺気は出していないように感じるが、それとは別のおぞましさを見る者に感じさせる笑みだ。それを見た木乃香が恐怖に震える。

その様子を見ながら、月詠は馬車に乗り去って行った。去り際に、助けは呼んでも良いと言い残して。

本心としては向かいたくないであろう刹那だが、先の月詠を見て無視して逃げると言う事は諦めた。ここで逃げてしまえば、何の関係

もない一般人まで彼女は巻き込んでしまっただろう。

時間になり、指定された場所に向かう刹那だが、途中でシネマ村に来ていた他のクラスメイトが着いてきた。どうやら先程のやり取りを見られていたらしく、自分と木乃香が恋仲であり月詠は自分に恋慕した後輩と言う風に勘違いしているようだ。

違うと何度説明しても耳を貸さないクラスメイトに、刹那は内心怒鳴りたい思いだったが、それをしてしまえば今起こっている本当の事を説明しなければならなくなる。

何も知らない（朝倉除く）彼女達にそれを知らせる訳にもいかず、無理をするなど言っただけで刹那は諦めた。

（刹那さん刹那さん！）

「え…！？」

望まずも得た助太刀に溜息を漏らしながら指定場所に向かっていると、後ろから呼ばれた気がして振り返る。

ちびせつなと同じくらいの大きさのネギが現れた。頭にはカモが乗っている。

（ネギ先生！？ どうやってここに！？）

（ちびせつなの紙型を使って気の跡を辿りました。違う魔法体系ですから苦労しましたけど…）

慣れない魔法体系の術である式神をここまで使いこなすとは、未恐ろしい才である。

そして何があったのかカモが聞いて来、説明しようとしたところで月詠が来た。

「ふふふ、ぎよーさん連れて来てくれはって……楽しくなりそうで

すなー」

馬車で去った時の衣装のまま、橋の上に立つ月詠。既にその手には抜き身の小太刀を持っている。

「ほな、始めましょうか、先輩。お嬢様も先輩も、ウチのモノにしてみせますえ」

ノーマルな人が聞けば全力で遠慮したいだろう事を笑いながら言う月詠。見た目は朗らかに笑っているのに、いやに不気味さが引き立つ笑顔だ。

それを見て木乃香は怯えて刹那の背に隠れる。

「せ、せつちゃん…あの人、何か怖い…気を付けて……」

「……安心して下さいお嬢様。何かあると、私がお守り致します」

怯える子供を安心させる様な笑みを浮かべて、刹那は木乃香にそう言った。衣装も相まって、その姿はまさに姫に仕える騎士……いや、武士のそれである。

それを見て、木乃香も安心した様な表情を見せる。実に絵になる光景である。

すると、周囲からパチパチと拍手が聞こえてきた。見れば橋の周囲には人ばかりができ、自分達を見ていた。中にはカメラを持って写真を撮っている者も居る。

そしてその中には当然、着いてきたクラスメイト達も居る訳で……

「桜咲さんかつこいいわねー、あやか」

「ウチの部に来てくんないかなー、男役で」

「桜咲さん！ お二人の愛、感動いたしましたわ！！ お力をお貸しします！！」

「ちよ、だから違いますっていいんちよー！！」

盛大に勘違いしている者がここにも一人。本当に感動したらしく、何やら涙を滝のように流している。

そんな雪広あやかに、ガシツと手を掴まれて刹那は再び違うと言う。若干引いているように見えるのは気のせいではないのだろう。

完全にやる気になったあやかは自分達も相手をすると言いだし、月詠の加勢は無いのかと問う。それを聞いて驚いた刹那は月詠にあやか達が一般人である事を説明しようとするが、既に知っていたらしく、彼女のペット達が相手をすると言符を手にして言った。

「ほな、行きますえ〜。ひゃっきやこお〜」

彼女の手からばら撒かれた無数の呪符から、様々な妖怪が姿を現した。しかしその姿は皆が皆ぬいぐるみの様で、やけに可愛い。事実、周りに居る人達も口々にカワイイと言っている。

が、可愛い外見とは言え敵は敵。当然の事ながらそれらはあやか達に襲いかかり、何故か胸に飛び込んだり着物の裾を捲って下着を衆人に晒させたりする。

それを見てちびネギの頭に乗るカモが鼻息を荒くするが、そんな事は気にかけていられない。

「ネギ先生、お嬢様を連れて安全な所へ！」

「え？ で、でもこんな大きさじゃ…」

「見かけだけですが、先生を等身大にします。ですから早く！」

そう言って刹那は印を結び、ちびネギの外見のみを本体のネギと同じ大きさにした。

「わあ…僕は忍者の役ですか」

「へ？ ネギ君いつの間！？ びっくりしたー」

突然現れたネギに驚く木乃香。しかしあまり気にして居られないので、刹那に言われたとおりにネギは木乃香を連れて橋を離れて行く。直後、月詠が橋の欄干を蹴って刹那に斬りかかった。

月詠の二刀に、夕凧と貸衣装に付属していた模造刀を使った二刀流で応戦する刹那。当然その模造刀は剣劇の衝撃に耐えきれず、数合打ち合っただけで砕けてしまった。

「最近の神鳴流は妖怪を飼っているのか？」

「大丈夫ですよ。あの子達は無害ですから、ご安心を」

砕けた刀を投げ捨て夕凧を押し込む刹那の問いに、月詠は二刀で夕凧を止めながらそれに返す。

確かに一般人に傷を付けたりしていないため、無害と言えば無害なのだろう。やっている事はセクハラのような物なので、その点では有害だろうが。

「ウチはただ、刹那センパイと心行くまで剣を交えたいだけ……」

「っ、戦闘狂か。付き合わんぞー!!」

「あん、いけずう。そー言わんと」

そう言いながら、二人は剣を手にぶつかり合った。

周りの妖怪たちはあやかを筆頭とした3 Aのメンバーによって相

手をされていた。

中でもあやかの奮闘は凄まじく、既に数体の妖怪を打倒していた。途中からやけにペースが上がったことと、その際に「ネギ先生」と言っていた事から等身大になったちびネギを見つけたのだろう。今もまた、河童を一体倒した。

「さっすがいいんちよ！ やるうーっ！！」

「ホホホ、着ぐるみで私の相手をしようなどとは愚か！ 私とネギ先生の間には、どのような障害も無意味ですわ！！」

着ぐるみではなく、本物の妖怪と言っているのだが気付いていないならそれでいいのだろう。お嬢様らしく高笑いしながらそうあやかは宣言する。

が、直後に上から降って来た巨大な招き猫に潰されてしまった。暫くはジタバタともがいていたが、流石に重かったのだろう。すぐにパタリと動かなくなった。

「いいんちよがヤラれたーっ！？ 皆、弔い合戦だよーっ！！」

ハルナの言葉に、参加していたクラスメイト達は近くに居た妖怪に攻撃し始めた。

時に模造刀で、時に拳で、時にフライパンで妖怪を倒して行く生徒達。周りの観客も騒いでいるため、もはや完全に劇とかそう言う物になっている。

「いつも元気な……よくあきねーな。アホ共が」

その様子を、参加しなかった長谷川千雨は呆れながら見ていた。

ネギは木乃香を連れて、シネマ村の一角を走っていた。

「木乃香さん、大丈夫ですか？」

「うん」

ネギの問いにそう返す木乃香。走り辛い衣装と靴で、よくもまあここまで走れる物である。

側に着いてきた幽霊が居るが、カモに殴られ消え去った。弱い幽霊である。

(ちっ、しっこいぜコイツら！)

「うん」

走りながら安全であろう場所を探すネギ。彼は気付いているのだろうか？ 橋を離れて今まで通って来た道が、まるでそこを通れと言わんばかりに人の数が少なかったと言う事に。

「木乃香さん、ここに隠れましょう」

「おけ」

そう言つてネギは物陰に在る入口の様なものに入って行った。そこもまた人通りの少ない場所に在った入口である事から、どうやら誘導されている事に気付いていないのだろう。

内部に在った上り階段を駆け上がりながら、二人は隠れられそうな場所を目指す。

そして二人は、階段を駆け上がった先に在った部屋に入って行き、そこで露出度の高い和服を着た女性と、学生服を着た白髪の、人形のように無機質な目をした少年と遭遇した。

「ようこそ、木乃香お嬢様。月詠はんは上手く追いこんでくれはつたみたいやな……うん？」

先日本乃香を誘拐した猿女が、木乃香と一緒に居るネギを見て疑問の声を上げる。

「何でそっちの坊やがここに？ 小太郎が閉じ込めとるはずやのに……ふうん？ 成る程、あんた実体ちゃうな。ってことは、手も足も出ん役立たずや」

しかしすぐに猿女はここに居るネギの正体を見抜き、顔に深い笑みを浮かべて自身の式神を召喚する。実に嫌らしい笑顔だ。

側に居る少年も、顔を微塵にも変えずに自分の前鬼・護鬼であろう鬼と悪魔が合わさった様な化物を召喚した。

剣を払い、互いに離れるがすぐに再びぶつかり合う。

刹那が夕風の間合いと重量を活かして剣を振るうのに対し、月詠は小太刀二刀による小回りの良さと手数を活かして時にいなし、時に防ぎながら攻め立てる。

刹那の剣が力を前面に押し出した物だとしたら、月詠の剣は技を前面に出した物だと言えるだろう。力の刹那、技の月詠と言ったところか。

実力は拮抗……いや、余裕がある分刹那よりも月詠の方が上の様に見える。

(っ、きりがなし。早く片付けて、このちゃんの元に行かねば……)

苛立ちと焦りを顔に滲ませ、刹那はさらに剣を振るう。しかしそれ

を月詠は最善のタイミングで受け流し、お返しとばかりに数撃程刹那に見舞う。

刹那もそれを受け流し、あるいは迎撃するがこれでは一向に決着がつかない。月詠はそれでも良いのかもしれないが、刹那にとっては全然良くない。焦りで太刀筋が粗くなる。

そんな剣劇を続けていると、ふと周りがざわついている事に気付く。何かと思い、耳を傾けると城の上で劇があると言う。

まさかと思いい城の方を向くと、屋根の上にネギと木乃香が居た。傍には式神らしき存在が三体と、使役者であろう人間が二人居た。式神であろう一体の鬼は、その手に弓矢を構えている。

「このちゃん!?!」

「余所見はあきまへんえ」

「ぐつ、月詠!」

咄嗟に木乃香の元に飛び出して行こうとした刹那だが、月詠に斬りかかれその動きを止められる。苦々しげに月詠を睨みつける。

「聞いたるか、お嬢様の護衛の桜咲刹那! この鬼の矢が二人を狙つとるのが見えるやろ。お嬢様の身を案じるなら、手は出さんとき!」

月詠に抑えられている刹那を見下ろしながら猿女は言う。

その顔は勝者の余裕で満ちていた。

「さて……坊や、確かネギ言ったか? 一步でも動いたら射たせてもらいますえ。さ、大人しくお嬢様を渡してもらおか!」

勝ち誇った笑みを浮かべてネギにそう言う女性。

ネギはそれに悔しそうな表情を向けるが、事態はそれで好転したり

はしない。

「刹那さんに頼まれたのに……すいません、木乃香さん」

「大丈夫や、ネギ君」

「え？」

謝るネギに、木乃香はそう言う。何故そんな事を言うのかとネギは木乃香を見ると、彼女は柔らかな笑みを浮かべて言った。

「せつちゃんが何があっても守る言うたんや。必ず助けてくれる」

その笑顔に、ネギは思わず見惚れてしまう。

しかし直後、突風が吹いてバランスを崩した彼女を受け止めるために動いてしまう。

そう、動いてしまった。

直後、鬼の持つ弓から放たれる矢。

「へ…あーっ！？ 何で射つんやーっ！ お嬢様に死なねたら困るやろーっ！」

この鬼は悪くはない。ただ、風の吹くタイミングが悪かっただけである。

放たれた矢を見て襲撃犯の猿女は叫ぶが、時は戻らない。矢の勢いは凄まじく、かなりの速度を以てネギ達に迫る。

木乃香を庇おうとネギは矢に向かって走り、手をかざすが矢の勢いを殺す事は出来ず、掲げた手を吹き飛ばして木乃香に向かった。

「お嬢様……このちゃん!!」

月詠を何とか振り切った刹那は今までの中でも最大の速度で駆けるが、とられた時間が多すぎたせいであと一步と言う所で間に合わない。このままでは木乃香は矢に貫かれて死んでしまう。

木乃香は恐怖のためか、目を閉じることすらできないようだ。誰も木乃香の死を目の当たりにしようとした、その時だった。

彼女を包むかのように、突如竜巻が発生した。それは高速で迫る矢を触れた瞬間に砕き、その破片を天空へと吹き飛ばす。

突然発生した竜巻に一人を除いた誰もが驚き、硬直する。10秒程経つと竜巻の勢いは衰え、徐々に消えて行ったが一つ変わっている事があった。

人影が一つ増えているのだ。

木乃香の着物の様に華やかな模様も無く、ネギや襲撃者の様に落ちていた色合いでもない、ただ黒い人影が、白と黒の飾り布で飾られた2m程もある矛を片手に木乃香を守るように立っていた。

「昴、さん？」

「どうにか間に合ったようですね。エヴァンジェリンがなかなか離してくれず……いえ、何を言っても言い訳にしかありませんね。遅れてしまい、申し訳ありません」

突然現れた昴に、全員の動きが止まった。だが彼は一切気にせず底冷えする様な殺気を放ち、白い少年唯一人を見ている。威嚇の効果も有るのだろう、式神達も動かない。

最も早く立ち直った刹那が問う。

「どうして、ここに……？」

「その話は後で。今は木乃香ちゃん達を連れて逃げなさい。少年、貴方達もです」

刹那の問いに、昴は彼女と木乃香に背を向けたままそう返す。刹那はそれに問い返そうとするが、無言の圧力で問う事が出来ない。

（兄貴、姉さん！ 敵の数も多い、ここは一度落ち合おうぜ！）

（で、でもそれだとあの人が……）

カモの提案にネギは心配そうな顔で昴を見るが、刹那はその考えに賛成だった。本来の実力は知らないが、昴は自分達の誰よりも強い。その事を念話でネギ達に伝え、刹那は腰を抜かしている木乃香に向き直った。

「せ、せつちゃん？」

「今から御実家へ参りましょう。アスナさん達と合流します」

「で、でも昴さんが」

「あの人なら大丈夫です」

そう言つて刹那は木乃香を抱き上げ、ネギとカモと一緒にまずは更衣所に向かい、そこで荷物などを持ってから呪術協会本山の方へ向かつて行つた。

それを追おうとする猿女だが、昴が一際強烈な殺気を放ちその身を竦ませる。

そして、刹那達が完全に去つたのを見計らつて話しかけた。

「さて、どうします？ このまま戦つても良いですが、それだと衆人観衆に魔法等をバラす事になり、さらに彼等に被害を与える事になります。ここは双方引いた方が最善かと思いますが」

「な、何ふざけた事言つとるんや！ 見たとこ、アンタがああ坊や達の中で最強なんやろ。ここで倒しといた方が……」

「いえ、ここは彼の言つように引きましょう。千草さん」

昴の提案を却下しようとした猿女だが、それは全て言い切る前に白い少年に遮られた。

「な、何でやフェイトはん！ 相手はたった一人なんやで！ そりゃさっきの殺気でとんでもなく強い言うんは理解出来たけど、ここに居る三人でかかれば……」

「確かに三人でかかれれば倒せない事も無いでしょう。ですが、こちらもただでは済みません。最悪の場合、相打ちになりますよ」

千草と呼ばれた猿女の問いに、フェイトと呼ばれた白い少年が昴を見ながらそう返す。

千草はそれを聞いて驚き、視線を昴から離さずに考える。

西洋魔術師は嫌いなため、フェイトの言う事は正直に言っただけで聞きたくない。だが、彼は小さいながらも強力な助っ人としているのだ。その彼がここまで言うのだから、余程に強いのだろう。

それならなおの事倒しておきたいが、まだ目的も果たしていないのに相打ちになるのは勘弁である。

倒せても倒せなくても、どちらにしろ甚大な被害は免れないだろう。千草はそれに思い至ると舌打ちをして月詠と一緒に去って行き、彼女達が去って少ししてフェイトもその場を立ち去った。

「……これは、思った以上に拙いかもしれませんね」

そう言っただけで昴も、真言を使って一般人に気付かれないようにして刹那達が去った方向に向かった。

39話：対面、西の長

襲撃者達を突然現れた昴に任せ、シネマ村から離脱した刹那はアスナ達と合流するため、木乃香を抱えて呪術協会本山へと向かった。

しかし、途中までは何事もなく二人だけで向かっていたのだが、呪術協会の入り口とも言える千本鳥居に着いたと同時にどうやって位置を知ったのか、シネマ村で撒いた筈の5班メンバー+ に追いつかれてしまった。

ちなみに+ とは、朝方旅館を出る前に魔法の危険性について説明したはずの朝倉和美である。どうやってこの場所を知ったのか木乃香以外のメンバーに刹那が聞けば、朝倉が彼女の荷物にGPS携帯なる物を入れて、それを追って来たらしい。どうやらアスナの脅しが必要なかったようだ。

(何でこの人達はこうも無駄に行動力があるのか……)

おそらく説明した所で正直に戻ったりしないだろうメンバーに頭を悩ませながら、刹那は諦めの溜息を吐き、木乃香を連れてアスナ達が居るだろう場所を目指す。ちびせつなが消える直前にリンクを通して見た映像が確かなら、彼女達は沢に居るはずだ。

参道を暫く歩いていると、前方に複数の人影が立っているのが見えた。大きさと数から見て、アスナ達だろう。それを見た木乃香が大声で呼ぶ。

「おい、アースナー！」

その声を聞いた長い橙色の髪を二つに結っている人影がこちらを振

り向く。反応した事とチリンと鈴の音がした事から、アスナで間違いない様だ。

が、振り向いたアスナはこちらを見てその顔を強張らせる。当然だろう。来なくてもいい、と言つか来て欲しくないメンバーが来ていたのだから。

「ねえ刹那、これは一体どういう事？ 何で5班メンバーが勢揃いしているの？ 朝倉まで居るし……」

「そ、それがですね……」

頬を引き攣らせながら問うアスナに、刹那は朝倉から聞いた事を含めて説明する。

僅か5分ほどで説明は終わったが、それを聞いたアスナはとてつもなく深く重い溜息を吐いた。

「GPS携帯……そんな物一体いつ入れてたのかしら……」

「分かりません。気付いたのもここに追いつかれて、朝倉さんに説明されたからです」

申し訳なさそうに刹那はそう言う。確かに気付かなかったのは刹那だが、それだけ余裕がなかったと言う事だろう。その点で刹那を責める気はアスナには無い。早乙女ハルナと綾瀬夕映も、知らないからこそ気になって着いてきたのだろう。

だが問題は朝倉である。朝、旅館を出る前にこちら側の危険性を説明し、無暗に首を突っ込むなと言ったと言つのに早速これである。さぞかし頭が痛くなる思いであろう。

「朝倉、アンタねえ……」

「いやね、私もあの後結構考えたんだよ？ でもアンタ達も関わってる事を知って、自分だけ蚊帳の外なんてのは何か嫌なんだよね。」

「一応だけどネギ君に強力するとも言った身としては。それに……」

「それに……何よ」

「情報をどうにかする人間は必要でしょ。カモっちも居るけどさ、オコジヨだし」

朝倉がそう言うと、アスナはさらに顔を顰める。確かに情報を広げないようにするにはあのオコジヨだけでは心許無いにも程があり過ぎる。

寧ろ、あのオコジヨは事ある毎にネギと生徒を仮契約させようとするために「コイツ隠す気あるのか？」と問い詰めたくなる程である。そう考えると朝倉の提案は中々良い案に思われる。彼女の情報に関する能力は3 Aで随一だ。オコジヨと違ってバラさないように動いてくれるかもしれない。

「……分かったわよ。でも」

「大丈夫だって。私はバラすつもりはないから」

「それは良かった。ついでに私の事も他の方には秘密にして貰えると助かりますね」

「うえあっ!？」

突然背後から聞こえた声に、飛び上らんばかりに驚いた朝倉は奇妙な叫び声をあげた。それに驚いて前を歩いていた他のメンバーも振り向く。

いつから居たのだろうか、そこには傍から見れば変質者ともとれるどこまでも真黒い人影。昂が音も無く立っていた。暑くないのだろうか？

「昂さん!？ いつの間に……」

「つい今しがた追い付きました。それにしても、皆さん意外に足が早いのですね」

突然の昴の登場に驚いた刹那の問いに昴は和やかにそう返す。他のメンバー（アスナと刹那除く）が、シネマ村で起こった事について聞くが彼は「ちよつとした手品」と言っただけ。その際に木乃香やハルナにもう一度見せてくれとせがまれたが、「手品師は同じ舞台で二度同じ物は見せないものです」と言っただけで断った。

「昴さん、どうして突然あそこに現れたんですか？ あなたはたしか、エヴァンジェリンさんにガイドとして引き摺られて行った筈ですが」

本山へ続く参道を進みながら刹那が聞く。彼女は昴に連絡を入れていないので、まるでタイミングを計っていたかのように現れた昴が気になったのだろう。その目にはありありと疑問が浮かんでいる。

「アスナちゃんから電話が来たんです。自分達の方に襲撃者が来たから、刹那さんの方にも行っているだろう。でも自分達は足止めされ、さらに少年がボロボロだから向かえない」と。ですから私が行く事になったのですが、運悪くエヴァンジェリンにガイドしている時です。おかげでシネマ村に飛ぶのに随分と時間がかかってしまいました。結果的に間に合いませんが、すいません」

彼女の問いに、本当に申し訳なさそうに昴はそう返した。

それに対して刹那はアスナに無機質な目で見られて冷や汗を掻き、慌てて謝らなくてもいいと言った。ちなみに昴には気付かれていない。

そして一行は参道を進み、古めかしい大きな木造の門へ辿り着いた。それを見てネギとカモはまた何か出てくるのではと警戒するが、5班メンバーがキヤイキヤイと騒ぎながら門に向かったので焦る。

「ちよ、ちよつと待って下さい！　そこは敵の本拠地で…！」
「大丈夫ですよ、少年」

雰囲気のある門に向かって走り出したメンバーを止めようとしたネギだが、それは昴に止められた。疑問に思ったネギは何故かと昴に聞くが、彼は門を指さし「門を潜れば分かります」と言ってアスナと共に歩いて行った。

それをポカンとして見ていたネギだが、警戒心を残しつつも門を潜る。

『お帰りなさいませ、木乃香お嬢様ーッ』

門を潜った先には桜吹雪が舞い散り、大勢の巫女が待機していた。彼女等は木乃香の姿を認めると同時に一斉に礼をし、木乃香の一時の帰還と友人達の訪問を歓迎した。

「……え？　こ、これって一体……？」

「そう言えば、ネギ先生は知らないのでしたね。ここは関西呪術協会総本山であると同時に、お嬢様の御実家でもあるのです」

「つまり木乃香は、こっち側のお嬢様って事。ついでに言うなら、私も一時期ここで暮らしてたわよ」

「え、ええっ!？」

目に飛び込んできた光景に茫然とするネギだが、刹那とアスナの説明に驚く。

それを昴は微笑ましげに見ていたが、ふと微笑みを消して門の向こう側を見て目を細める。視線の先には木が生い茂るだけで他には何も見えない。

「緋乃宮様、どうかなさいましたか？」

じつと外を見ている昴に疑問を持ったのか、巫女の一人が近づいて聞いて来る。見ればアスナ達は既に奥へと案内されたようで、ここには昴と話しかけてきた巫女の二人しかいない。

「ああ、いえ、別に何も……」

「そうですか。では長の場所へ御案内致します。こちらへ……」

そう言つて巫女は昴を案内するように前を歩く。昴もそれに着いて行くが、再度立ち止り外を見る。が、今度はすぐに視線を戻して案内の後に着いて行った。

案内された場所は奥の広間で、先に案内されていたアスナ達は全員席に着いて待っていた。朝倉や早乙女は物珍しいのか、キョロキョロと室内を見回している。

昴も案内してくれた巫女に礼を言い席に着くと、前方の階段になっている場所から足音がした。誰かが下りてきているようだ。

「ようこそ、木乃香のクラスメイトの皆さん、担任のネギ先生。そして久しぶりですね、昴にアスナ君」

狩衣を身に纏い下りて来たのは短い黒髪の、眼鏡をかけた若干顔色の悪い男性だった。

彼の名は近衛詠春。かつての名は青山詠春と言い、魔法世界の存亡をかけた大戦において英雄のパーティーと呼ばれた「紅き翼」の一員であり、「サムライマスター」と謳われた最強の剣士であり、木乃香の父親である。

「お父様、久しぶりやー！」

「ははは、これこれ木乃香、まだ挨拶の途中だから…」

詠春が下りて来たと同時に木乃香は立ち上がり、彼に抱きつく。詠春は抱きついてきた木乃香にそう言っただけで諫めるが、久しぶりの娘との触れ合いが嬉しいのだろう。その顔は喜びで綻んでいる。

その詠春の顔色を見て朝倉や早乙女が何やら失礼な事を言っているが、気にしていないようなので置いておこう。

「あ、あの。長さん、これを。東の長、麻帆良学園学園長である近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

そう言っただけでネギは学園長より預かっていた親書を取り出し、詠春に手渡した。それを開いて内容を読み、詠春は苦笑する。何が書かれてあったのだろうか？

「確かに承りました。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労、ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

そして詠春は、今から山を降りると日が暮れると言いネギ達を引き止め、彼等の身代わりを立てて歓迎の宴を開いた。ネギ達は宴と言う事もある大騒ぎをし（と言っても騒いでいたのは主に朝倉と早乙女だが）、アスナと木乃香、刹那も、途中から参加した木乃香の母と共にゆっくりと寛いでいた。

だがそこから離れた席で昴は詠春と話していた。話の内容は当然、ここに至るまでの参道とシネマ村で出てきた襲撃者についてだ。

「……………そうですか。千草と呼ばれたあの女性は、天ヶ崎御夫婦の……………」

「ああ、一人娘だ。おそらく今回の行動も、20年前のあの戦が原因だろう。あの戦で、彼女の御両親は亡くなってしまったからな……」

「目的は東……麻帆良学園他、関東に居る西洋魔術師に対する復讐ですか」

詠春から彼女の素性を聞いた昴は、目を閉じて天井を仰ぐ。おそらくかつての大戦の事を思い出しているのだろう。身に纏う空気は何処か哀しげだ。

しかしすぐに目を開けて哀しげな空気を引っ込め他の襲撃者達の事に着いて話し、その後久しぶりの友人との会話に花を咲かせた。途中で木乃香の母が会話に入ってきて、料理談議になってしまったが。

呪術協会の中にある浴場。かなりの広さを持ち、露天風呂の様な構造をしたそこに、人影が二つあった。アスナと刹那である。

「ん~~~~っ、やっぱりお風呂は良いわね。サッパリするわ」

「今日は色々とありましたからね。疲れもすっかり洗い流してください」

「それはアンタもでしょ」

檜を使って作られた浴槽に満ちるお湯の中で体を伸ばしリラックスしているアスナは髪を下ろし、いつもよりも大人びて見える。刹那も体を伸ばしてこそいないが、アスナと同じ様にリラックスしているのだろう。いつもはある若干張り詰めた空気が感じられない。何故か髪は結ったままだが。

「あの、アスナさん。シネマ村の件ありがとうございます」

「私は昴に電話しただけよ。それだけで、他は何もしてないわ」

「それでもです。アスナさんが昴さんに知らせてくれていなかったら、このちゃんは……そう思うと」

そう言つて刹那は身を震わせる。おそらく、木乃香があゝの矢に貫かれる光景を想像したのだろう。顔色も若干悪くなっている。それを見て、アスナが刹那に声をかけようとした時だった。

「しかし、10歳で先生とはやはりスゴイ」

「いえ、そんな……」

男性の声が二人分聞こえてきた。声の質から察するに、詠春とネギの様だ。二人ともアスナ達が入っている事に気付いていないようである。どんどん近付いて来る。

当然、アスナ達は焦った。裏口から脱出しようにも、聞こえてくる声の大きさから考えてもうほとんど距離は無いようだ。このまま向かつて、裸を見られる可能性の方が高いだろう。

そしてネギが扉を開くその直前に、彼女達は浴場内の大きな岩の裏に隠れた。

「この度はウチの者達が迷惑をかけてしまい、申し訳ありません」

「いえ……」

「昔から東を快く思わない者は居たのですが、今回実際に動いたのが少人数でよかった。後の事は任せてください」

湯船に浸かりながら詠春がネギにそう言う。その後、襲撃犯である天ヶ崎千草や木乃香の事についてもネギに説明した。そして、ネギが説明を聞いた中で気になった事を聞く。

「あの、サウザンドマスターの事を御存じなんですか？」

「よく存じてますよ。何しろ私はサウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドとは腐れ縁の友人でしたから」

「え…？」

「ついでに言うと、妻と料理の事で花を咲かせていた昴もそうですよ」

「ええっ!？」

「あーっ!! 思い出した!!」

突然、一緒に湯船に入っていたカモが大声を上げた。それに驚き、詠春とネギはカモを見る。

「ど、どうしたのカモ君」

「何で今まで忘れてたんだよ俺！ 姐さんの「緋乃宮」って名字、どっかで聞いたことあると思ったらそうだよ！ サウザンドマスターのグループ、「紅き翼」にいた最強の地味術者、「黒竜の駆り手」緋乃宮昴と同じ名字なんだよ!!」

「ええっ!？」

オコジヨにまで地味扱いされる昴。それを聞いたアスナが飛び出して行くこうとするが刹那に取り押さえられて動けない。叫び出さないのは羞恥心があるからだろうか？

「っつーか姐さんの保護者が緋乃宮昴本人じゃねえかよ!! どこに居るかと思ったら麻帆良に居たのかよ!!」

大声でそう言うカモに、詠春はしまったかな?と思うがもう遅い。既にネギは詠春と昴がサウザンドマスターの関係者であると記憶してしまった。

そして詠春にサウザンドマスターの事を聞こうとするが、浴場の入

口から声が聞こえた。女性の声だ。

「ですから、あのシネマ村の一件はどう考えても物理的におかしいのです!!」

「だからCGだつて、ワイヤーアクション」

「私を木乃香さんと一緒にしないで下さい!」

聞こえた声は綾瀬夕映と朝倉和美の物だが、この調子だと他のメンバーも居るのだろう。

「おやおや、御婦人方が……御案内を間違えたかな? ネギ君、緊急事態です! 裏口から脱出しますよ!」

「えっ、長さん!?!」

そう言つて詠春は裏口に向かつて一直線に走りだした。ネギも慌てて追いかけるが、二人の向かう方向にはアスナと刹那が隠れている岩が運悪く存在している。当然、そこに隠れている二人も焦る訳であたふたしていると走つて来たネギ達とぶつかつてしまった。

そして倒れたアスナの上に覆いかぶさるように倒れるネギ。彼の手は、あるうことがアスナの胸を掴んでいた。

シャーコ………シャーコ………

途端、聞こえてくる刃物を研ぐような音。しかし周りには刃物はおろか砥石すらもない。突然聞こえてきた音と現在の状況にネギ達が固まっていると、浴場の扉が開いて木乃香達が入つて来た。

「朝倉さん、何か隠しているでしょう!」

「絡み上戸だねえ、ゆえっちは」

「私は酔つてませーん!!」

「ん…？」
「あ…」

入って来た木乃香達は、ネギ達の体勢を見て固まった。まあ、それは仕方ないだろう。刹那と詠春が側に居り、アスナをネギが押し倒している様な状況なのだから。しかも彼の手はアスナの胸に触っている。

当然、騒がないなど無い訳で。

「キヤーー！！」

「あわわ」

「お父様のエッチー！」

「おやおや」

「何で男女別じゃないんですかー！？」

「温泉じゃ無いんですから」

その喧噪は本山中に広まったとか。

40話：本山陥落

満開に咲き誇る夜桜と、舞い散る桜の花弁を月明かりが優しく照らし、美しくも何処か儂げな、幻想的な風景を作り出す。実に雅な景色である。この中で舞でも踊れば、さぞかし絵になる光景であろう。

「……………であるからして、女性の裸体を見る、もしくは触れる事は、その女性の伴侶になる者のみが……………聞いているのですか？ 詠春、少年」

そんな関西呪術協会総本山のとある一室で、詠春とネギ、ついでにカモは昴の前に正座して説教されていた。幻想的な景色の中で説教とは、風情もへったくれもない物である。ちなみに現在、詠春達は正座して丁度2時間目になる。

浴場で騒ぎが起こった直後、アスナの悲鳴を聞きつけた昴は浴場に辿り着くなりネギと詠春、逃げようとしていたカモを一瞬で捕獲し、空いていた部屋の一つに移動して捕獲した二人と一匹を動けなくして説教を始めた。

なお、真言を使った、残像すら残さない超高速移動をしたため女性陣に昴の姿は見られておらず、昴もまた女性陣の裸体を視界の隅にすら入れていない。ちなみに移動の際に発生する筈の風圧等は、これまた真言で抑えていた。器用と言うか何と言うか。

「き、聞いている。聞いているから、せめて足を崩させてくれ。流石にそろそろ、きつくなってきた……………」

正座に加えて、仲間内でも恐れられていた昴の説教を受けて精神的

にもきついのだろう。詠春がそう頼む。見ればネギも、プルプルと震えながら懇願する様な眼差しで昴を見ていた。ちなみに力毛は説教45分目で真白に燃え尽きた。口から魂の様な物が出ているがきつと気のせいだろう。

しかし昴はその懇願をニッコリ笑って両断する。

「駄目です」

「お、鬼か貴様!!」

たった一言でバツサリと切り捨てた昴に詠春はそう言うが、当の昴は動じることなく笑みを浮かべている。しかし、その背後には巨大な般若面が無数の蛇と共に浮かび上がっている。般若面の周りを蛇が囲っているのが、まるでギリシア神話で女神アテナに怪物にさらたと言うメドウーサの様だ。

どうやら激怒とまではいかなくとも、かなり怒っているらしい。

「私の義娘に手を出す輩は、たとえ戦友だろうとその息子だろうと、神であろうと許しはしません。入浴や着変えを覗くだけでも万死に値します」

「お前そんなキャラだったか!？」

戦友の変わりように思わず突っ込む詠春。一体何が昴をここまで変えたのか。

「しかしそうですね。余り長く正座をしていると足にもあまり良くないと言いますし……あと3時間は説教したい所ですが、少年はもう良いでしょう。まあ、再度同じ事をした場合、今回の比ではない説教をするので、その所は肝に銘じておくように。詠春も、私の説教は終わりです」

「た、助かりました……びゅっ!？」

そう言つて昴は『ネギだけ』真言の呪縛から解放した。自分を縛っていた何かから解放されたネギは安堵の溜息を吐いて足を正座から崩そうとしたが、奇妙な悲鳴を上げて前のめりに倒れた。どうやら足全体に痺れが広がっているため動けないらしい。そしてそれを見ながら、解放されていない詠春は昴に聞く。

「な、なあ昴。何故私は解放されていないんだ？ もう説教は終わつたんだらう？」

「ええ、終わりましたよ。「私の」説教は」

「だったら私も解放してくれても……」

「詠春、何か勘違いしているようですね。確かに「私の」説教は終わりました。「私の」説教は」

未だ正座から解放されていない詠春が昴に問いかけ、それに昴は『私の』と言う言葉をやけに強調して返す。

それに疑問を抱いた詠春だが、ふとある可能性が脳裏をよぎり、若干顔を蒼褪めさせた。気のせいでなければ僅かにだが震えている様にすら見える。

「ま、まさか……」

「気付きましたか？ ええ、私の説教は終わりました。ですが、まだ近衛さんのお説教が貴方には残っているのですよ？ 詠春。と言つ訳でして」

「覚悟はよろしいでしょうか？ 詠春さん？」

詠春が恐怖に慄いていると、彼の背後 昴から見れば丁度前

の襖が音もなく左右に開き、木乃香の母が部屋に入つて来た。

木乃香をそのまま成長させたような姿の彼女は柔らかな笑みをその顔に浮かべているが、凄まじい怒気を放っている事が背を向けてい

る詠春にもハツキリと感じ取れた。その怒気は詠春唯一人に向けられているが、あまりに凄まじいので横で倒れているネギと正座から解放されていない真白に燃え尽きた筈の力毛も冷や汗を掻いている。

「こ、ここ近衛殿……」

「詠春さん、裸なら私のそれを何度も見て、さらにそれ以上の事もしたでしょうに。年端もいかぬ娘さん、それも戦友の娘さんとその御友人の裸を見るなんて……いくら温厚な私でも怒りますよ？」

ニツコリと、とても柔らかな笑みを浮かべ、首を僅かに傾げて彼女はそう言う。彼女の容姿も相まって誰もが見惚れる様なその仕草だが、全身から迸る怒気が見惚れる余裕など欠片とて与えない。気のせいでなければ瘴気すら漏れ出しているように感じる。

その怒気にてられて、ネギ達の額から流れる冷汗は止まるところを知らず、さらにピンポイントで怒気を向けられている詠春に至っては顔面蒼白となってガタガタと震えている。

「さらに自分の事はともかくとして、御友人とは言え他人が秘密にしている事を許可無く口にするなんて……」

「い、いや、その……それは、不可抗力と言うか、何と言いますか……」

怒れる妻に必死で言い訳しようとする詠春だが、恐怖のためか口が動かない。ちなみに彼は妻だけ見ているので気付いていないが、ネギと力毛もガタガタと恐怖で震えている。下手をすればトラウマになっってしまうかもしれない。

「まあ、小さな子供も居ますし、ここでのお説教はこれぐらいにしておきましょうか。続きはまた別の部屋で……それでは、失礼しました。」

震えるネギ達を見て彼女は一瞬で怒気を引つ込め、蒼褪め震える詠春の襟首を掴んで何処かへと引き摺って行った。向かう先はおそらく自室だろう。詠春の冥福を祈る。

「あ、あの……」

「ん？」

詠春が引き摺られて行った方向を、笑みを浮かべながら暫く昴が見ていると、いつの間にか足の痺れが消えていたネギが何故か再び正座をして昴を見ていた。

その目は若干の怯えを含んでいるが、何故かキラキラしている。

「どうかしましたか？」

「えと、長さんから聞いたんですけど、昴さんもサウンドマスターの、父さんの仲間だったんですね？ 父の事、聞かせて貰えないでしょうか……？」

「そう言えば、詠春が口を滑らせたのでしたね。まったく……」

キラキラと期待に満ちた目で見るネギに対し、僅かに痛む頭に若干顔を顰めて昴は愚痴をこぼす。ある意味、身内がバラしてしまったので誤魔化す事も出来やしない。

昴は後で詠春に再度説教をする事を心に決めた。

「確かに私はかつて、君の父君であるサウンドマスター・ナギが率いる「紅き翼」に所属し、とある大戦を彼や詠春を含めた仲間と共に駆け抜けました。オコジヨ君が言った「黒竜の駆り手」と言う名も、その時に私に付けられた物です」

「じゃあ……！」

「申し訳ありませんが、私が知っているのは詠春と同じ程度かそれ

以下です。十数年前に出会って以降の彼の行方を私は知りません。そもそも、その時に会った事さえある種偶然に近い物でしたから」

昴はそう言ってネギを見る。表情には出していないが、憧れの父の行方を聞けず、彼は少なからず落胆したようだった。若干だが、雰囲気落ち込んでいるように感じる。

しかし彼は、今度はナギの行方ではなくどのような人物だったかを聞いてきた。少しでも彼の情報が欲しいらしい。

そんなネギを、昴は何処か奇妙に思っていた。

別にナギの事について聞こうとしたり、彼に憧れたりと言うネギの感情はおかしくない。そう言った感情を持った魔法使いの子供達は、アスナと一緒に世界中を回っていた時から良く見てきたからだ。ネギもそう言った一人で、父に憧れているだけなのだろう。

だが問題は、そう言った感情のほとんどがナギにのみ向けられていると言う事である。

男の子が父親に憧れると言う事は別に珍しい事ではない。それは、身近にいる最も強い男性が父親だからであり、それに追い付きたい、もしくは超えたいと言う想いが生まれるからだ。その感情自体は自然に生まれる物の為おかしいとは思わない。

だがネギはまだ数えで10歳。彼の誕生日がいつかは知らないが、二桁になったばかりである。普通の少年少女なら、まだまだ遊びたい盛りであると同時に親に、特に母親に甘えたい盛りの筈だ。事前情報としてネギの従姉が彼の母親代わりの様に接してきたとタカミチから聞いてはいたが、それでも実の母に関心の欠片も向かないと言うのは、奇妙を通り越して異常である。たとえそれが、一度として出会った事が無い母だとしても。

(歪んでいると言っか、異常ですね。アリカさんの事は秘密にする約束ですから彼女の事を知らないとは言え、こつもナギにのみ感情が向かっているとは……まるで、少年の関心がアリカさんには行かないように思考誘導されている様にすら感じます)

もし母親の事を聞かれた場合、昴はアリカがどういった性格の人物だったかだけでも言うつもりでいた。流石に名前や出身と言った直接的な物は伏せるが、それでも母がどのような人物だったかぐらいは、たとえ仲間は何を言われようと、僅かなりとも知っていて貰いたかったのである。

だがネギはナギの事のみを聞き、母親アリカの事は一切口にしなかった。流石におかしく思い、その事をネギに聞こうとしたその時だった。

「っ!!」

「? どうかしましたか?」

突然あらぬ方向を向いた昴に疑問を持ったネギが問いかけてくるが、彼の耳には届かない。僅かな間虚空を見ていた昴だったが、盛大に顔を顰めると同時に部屋の外へと走りだした。それを見たネギと力モが慌てて追う。

「あの、どうしたんですか? サウザンドマスターの話は……」

「申し訳ありませんが、それどころではありません。本山の守護結界が何者かに抜かれました!」

「え、ええっ!?!」

呪術協会総本山の守護結界は、宿讎の封印と同じ様にこの地に存在する龍脈 地脈とも言う を利用した結界であり、その守護の力は莫大な電力を使用している麻帆良学園の結界に匹敵する。

いや、あちらが定期的にメンテナンスを必要とし、一時的とはいえ

その機能を停止する事があるのに対し、こちらは僅かとは言え地球からエネルギーを汲み上げて結界の維持に使用しているため途切れる事が無い。純粋な防御能力だけで言えば、こちらの方が優れているとも言えるだろう。

その守護結界が破られた。それはすなわち、この総本山が丸裸になったも同然と言う事を意味する。

「で、でも一体誰が……？」

「あの猿女か！？」

ネギとカモが猿女・天ヶ崎千草が結界を破ったのか走りながら話し合っているが、それは違うと昴は思った。

天ヶ崎千草の能力は、確かにあの年齢では高い位置にある。實力だけで言えば、呪術師の中ではそれなりに強い位置に入ると言ってもいいだろう。あくまで呪術の腕だけで、それなりだが。

だが総本山の結界は、最強クラスに位置する存在でなければ到底破れない代物である。それを破られたと言う事は、破った者は間違いなく最強クラス。そして今日昴が会った襲撃者の中で、その位置に在るのは唯一人のみ。

（あの白髪の少年ですか……！！）

二刀流の女剣士も強いであろうが、それでも最強クラスには今一歩足りないと言った感じであった。もう少し経験を積めば彼女も最強クラスに到達するであろうが、それでも現在結界を抜くにはまだ足りない。

ネギ達を襲撃したと言う狗族の少年も、現在の實力はネギと同レベルかそれよりやや上と言ったところだろう。戦闘自体を見た訳ではないが、アスナに聞いた昴はそう判断していた。

思い返せばあの白い少年は、本気で放った物ではないとは言え、それでも強烈な昴の殺気を受けても冷や汗一つ掻かず、顔色一つ変えずに極めて冷静に対応していた。

おそらく、あの少年は最強クラスの中でもさらに別格、エヴァンジェリンやナギ、ラカンと言った最上位に位置する存在と同格なのだろう。一応昴もその位置に在るが、彼は自分が前述した3人の様に最上位の中でおお規格外の力を持つ存在と同レベルだとは思っていない。

実際には、（知る者こそ極めて少ないが）真言と言う能力の為に同じ様な存在と思われるのだが、彼はその事を知らない。

白髪の少年について考えを巡らせながら本山を駆け、詠春もしくはアスナと合流するために彼等を探す。途中、ネギの生徒達や本山所属の巫女達が石になっているのを発見しネギが取り乱したが、石化解呪は可能だと言って落ち着かせ再度走る。

そして、幾つ目かの角を曲がった所で刹那を発見した。石と化していない彼女を見てネギは安堵の溜息を吐くが、彼女の前には、既に石と化している詠春が居た。

「刹那さん！」

「昴さん、先生！ 長が…！」

ネギの声に反応して刹那は振り返り、二人の姿を確認して安堵するも詠春を指して悲鳴に近い声を上げる。

それを聞きながら昴は石化した詠春に近づき、彼の状態を確認する。石化しながら無理矢理に移動したのだろう、所々砕けているが、それは衣服だけで体は運よく破損していない。

これなら普通に解くだけで良さそうだと思い、昴は真言を紡いだ。

「『妙なる輝きを持って紡ごう。汝、石の眠りより醒めよ』」

石化した詠春に近づきそんな事を言った昴を見ていた二人と一匹は言い終わると同時に詠春から発生した輝きに目を瞑る。

その輝きはすぐに収まり、ネギ達は目を開くと目の前に、石化の解けた詠春が立っていた。

「長！」

「私は……確か石になった筈では……」

「石化は解除しました。何処か不具合でもありますか？」

石化が解けた直後でややぼんやりとしていた詠春だが、昴の言葉で意識をハッキリとさせ礼を言った。
それを聞きながら昴が問う。

「白髪の少年ですか？」

「ああ、近衛殿も石化されてしまった。私は何とかレジストしたのだが……不意を喰らってこの様だ。まったくもって、情けない」

本当に情けなさそうに詠春はそう言う。しかしすぐに気を取り直すと、昴達と共に木乃香を探して走り出す。

襲撃者メンバーに居た白髪の少年が来たのだ。狙いは間違いなく木乃香だろう。

気配を探りながら駆けていると、浴場の前を通りかかった所で何故かアスナの気配を感じた。どういう訳か、彼女の気配は動く様子を見せない。

緊急事態と言う事で無事かどうかを確認するため浴場に入ると、彼女は全裸でぐったりと倒れ伏していた。少し離れた場所には、何故

かハマノツルギが突き立っている。浴場には絶対的に必要無い筈の物だ。さらにどうという訳か、時々痙攣するように震えている。

「アスナちゃん！ アスナちゃん、大丈夫ですか！？」

その状態を見た昴はすぐに彼女に駆け寄り、服を掛けて抱き起こす。やや呼吸が荒いが、見た所体のどこにも異常はないようだ。

その事に昴がほっとしていると、アスナが薄らと目を開けた。

「う……ス、バル……？ 刹那……」

「アスナちゃん、何があつたのですか？ ハマノツルギまで出して……まさか、敵がここに居たのですか！？」

「ごめん……木乃香、攫われちゃった……白髪の……まだ、近くに居るかも」

息も絶え絶えにアスナがそう言った直後、背筋がゾツとするような気配を背後に感じた。それに反応した昴は突き動かされる様に、アスナを姫抱きで抱えて真横に飛び退る。

直後、一瞬前まで居た場所をヒュゴツと音を立てて拳が通過した。片膝をついた状態から無理矢理に動いたため体に負荷がかかるが、今の一撃を受けるよりはましであろう。喰らったら、骨の何本かは持って行かれたかもしれない。

突然現れた少年に詠春と刹那も身構える。尤も、詠春は無手であるが。

「へえ、今のを避けるんだ。完全に不意を突いたと思っただけ……」

「生憎と、感知能力と回避能力はそれなりに高いと自負していますので。流石に今のは少々肝が冷えました」

「ふうん。近衛詠春も石化したと思っただけ……君がやったの

？ 黒竜騎」

無機質な目でじっと見つめてそう問いかける白い少年　　フェイトに対し、昴はアスナを抱えたまま沈黙で返す。だが彼も返答は期待していないのだろう。ただ石化を解除したと言う事実を確認しただけに見える。

「まさか、君が…？　木乃香さんをどこにやったんですか…？？」
「……………」

昴と睨みあう（と言っていいのかわからないが）フェイトに、ネギが問いかける。その声を聞いて、皆がネギを見た。フェイトも、その無感動な目だけをネギに向ける。

視線だけを向けて沈黙で返すフェイトを睨みながら、ネギは言う。

「許さないぞ…………皆を石にして、木乃香さんを攫って、アスナさんにエッチな事して…………！」

アスナの部分で昴の纏う空気が急速に冷えた気がしたが、それに気付かず、次第に声を大きくしながらネギは言う。

「先生として、友達として、僕は…僕は許さないぞ！！」
「…………で、どうするつもりだい、ネギ・スプリングフィールド。僕を倒すかい？　やめた方がいい、今の君では到底無理だ」
「ま、待てっ！」

宙に浮きながら水を纏わりつかせ静かにそう言うフェイトにネギは走り寄るが、もう一步と言う所でフェイトはその場から消えてしまった。カモが調べたところ、水を利用したゲートで何処かに転移したらしい。周囲に気配を感じない事から少なくとも、近場に転移し

たと言う訳ではなさそうだ。

「詠春、少年と一緒に彼を追ってください。刹那さんもです」

「昂、お前は どうする気だ？」

「私は数人ほど石化を解いてから追います。今この場に居るメンバーで石化解除が出来るのは実質私だけですから」

そう言うと昂は抱えていたアスナを下ろし、ポーチからカードを取り出して天沼矛を呼び出した。昂も仮契約カードを持っていた事に驚いたネギとカモだが、詠春達は何をするつもりかと昂を見ていた。そして彼は、詠春に一言断りを入れてから浴場の岩に矛を突き刺した。途端、岩はその姿を一振りの野太刀に変えた。それを手に取り詠春に差し出す。

「これを。夕凧と同じ物として在り方を書き換えました」

「すまん、他の刀を取りに行く手間が省けた」

そうやって詠春は昂の手から野太刀を受け取った。ずっしりとした重みが手にかかるが、同時にとても手に馴染む。

そしてフェイトを追おうとしかけた所で、カモが突然声を上げた。疑問に思い、全員の動きが止まる。

「何よ淫獣」

「淫獣って…いや、今はんな事どうでもいいか。刹那の姉さん、ネギの兄貴の事…好きかい？」

「なっ、それ、何の関係が!？」

突然のカモの言葉に、刹那は顔を赤くして聞き返す。それを見てカモは顔をニヤつかせ、実にオヤジ臭い動作で刹那に言う。

「つまり、刹那の姉さんと兄貴がチュウするってことだよ」

この淫獣、一刻を争う緊急事態である今に一体何を言っているのか。ここまで来るともはや怒りを通り越して呆れしか感じなくなる。流石の昴もここまでとは思っていなかったのだろう、呆れている事が良く分かる。

「この非常時に何言ってるのよーっ!!」

「ぐへえっ!! あ、姐さんちがつ、仮契約だよ、仮契約!!」

「は？」

そう言ったカモに思わず呆気にとられ、アスナは叩きつけた手の力を緩める。その瞬間カモはアスナの手から逃れてそう思った理由を言う。

「刹那の姉さんは気が使えるだろ？ そこに兄貴の魔力を上乗せすれば、一気に倍のスーパーパワーU「無理ですね」Pって訳……え？」

カモがそう言っていると、説明を終える前に昴が不可能と断じた。彼が他人の会話に割り込んで中断させると言うのは非常に珍しい事である。

しかしカモは名案だと思っけて口にした事を即座に否定されて面白くないのか、そう言った理由を尋ねた。

「確かに気と魔力、相反するこの二つの力を融合させて身に纏い戦うと言った技術は存在します。名を咸卦法と言うのですが、これは究極技法と呼ばれ通常の身体強化を凌駕する身体強化・補助能力がつかます。ですが、それ専用の修行を受けた者でなければ二つの力が反発し合い、逆に術者にダメージを与える物でもあるのです。そ

の修業を受けていない刹那さんでは、咸卦の気を制御できずに体を傷付けるだけに終わり、さらに少年も魔力の無駄使いで終わります」

そうハッキリと言うと流石にカモも反論できないのか、押し黙る。昴とアスナは使えるが、昴は僅か3秒しか咸卦の気を維持できず、アスナは最初から使えるも同じようなものだったので参考にはならないだろう。

それが出来れば確かに強力な戦力になるだろうが、いくら才に溢れた者とは言え、ぶつつけ本番で出来るはずもない。ガトウと言う師に学んだタカミチも、咸卦法をマスターするまでに数年の時間を要したのだ。

一目見て習得したアスナは例外中の例外と言ってもいいだろう。

ともあれ話し合っているも無駄に時が過ぎるだけで、ひとまず仮契約云々は置いておいて二手に分かれ、詠春達はフェイトを追い本山を飛び出し、昴は石化解除の為に本山に残った。数人程解除したら追って来るだろう。

ちなみにアスナは服を着てから詠春達について行った。

本山から出て、転移の足跡を追って山中を詠春達が走っていると川に辿り着いた。辺りを見回すと、やや上流にある岩の上に露出の過ぎる服を着た眼鏡の女性と共にフェイトが居た。木乃香も、手足を縛られ口を塞がれた状態で猿の式神に抱かれている。

どうやら詠春達には気付いていない様で、そのまま背を向けて何処か　おそらく上流　に向かおうとする。

「待て!!! このちゃんを放せ!!!」

「……またあんたらか」

やって来たネギ達は何処か呆れた目を千草は向ける。が、その目に詠春の姿を認めると僅かに目を見開いた。

「なんや、長はんまで来はったんか……あの優男の姿が見えへんけど、逃げ出したんか？」

「千草君、もうやめなさい。こんな事をしても何もならないぞ！」

「それはどうでしょうなあ、あの場所にさえ行ければええんやし……ここでお嬢様の力の一端、その目に焼き付けたらええ」

詠春が説得しようとするがそれは無意味に終わり、彼女は呪符を一枚木乃香の首元に張り付けた。途端、呪符が発光し、千草の言葉と共に彼女を中心に曼荼羅の様な光の柱が発生した。

そしてその中から出てくる、角や翼、水かき等を持った多くの異形達。それらは召喚されると同時にネギ達を取り囲んだ。

「これは……！」

「やるー、このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな」「百体くらい、軽く居るよ……」

召喚された鬼達のあまりの多さに、ネギ達が冷や汗を掻く。詠春とアスナも、これ程召喚されるとは思っていなかったのか僅かに顔を強張らせた。ネギは百体と言ったが、実際にはそれ以上居るであろう。

並の術者ならこれ程の量を召喚すると枯渇してしまうだろうが、そこは極大の魔力を持つ木乃香。魔力容量ではナギすらも超える彼女の力を引き出し利用した千草にとっては消費と言つ消費ではないのだろう。しかし身の内に宿す魔力を無理矢理に引き出されたせいのか、式神に抱かれた木乃香は僅かに痙攣している。

「あんたらにはその鬼共と遊んでてもらおか。まあ、ガキだけは殺さんよーに言つとくから安心しい。ほな」
「なっ、待て!!!」

言外に大人　詠春には一切手加減しないと言い残して千草はフ
エイト達を連れて上流へと飛び去って行った。

41話：乱戦

木乃香の魔力を用いて大量の鬼や妖怪を召喚した千草は、フェイトと式神を従えて川の上流へと飛んで行った。

詠春達はそれを追おうとするも、大量に召喚された鬼達に囲まれて身動きできない。しかしこのままじっとしていても、鬼達はじわじわと距離を詰めて来ているので乱戦になるのは時間の問題だろう。

「兄貴、時間が欲しい。障壁を！」

「OK。ラス・テル・マ・スキル・マギステル。ウエルタートカスパー・テンゲエーリスヒス・プロキヤタム・アエリアーレムランス・パリエカステンティ・ウエルテンティス逆巻け春の嵐、我らに風の加護を。風花旋風風障壁！！！」

流石に作戦も何もなしに戦うのは愚かと考えたのだろう。カモがネギに頼み、風の障壁を自分達の周りに包み込むように発生させる。それによって、側に近寄って来ていた鬼等が何体か吹き飛ばされた。

「これは！？」

「風の障壁です！ 2・3分しか持ちませんが……」

「いえ、一先ずは十分でしょう。それよりも作戦をどうするかです」

「手短に済ませようぜ！ どうする、コイツはかなりまずい状況だ！！！」

無風状態の障壁内で四人と一匹は作戦を立て始める。術者であるネギの言葉では2・3分しかもたないらしいので、のんびりと話している時間は欠片もない。

「二手に分かれましょう。私がここに残り鬼達を引きつけますから、長達はこのちゃんを追ってください。今ならまだ、そう遠くには行っていない筈です」

「刹那君、いくら君でも一人では無茶だ！ 相手の数が多すぎる！」

敵陣真只中に唯一人残って戦うと言いだした刹那を詠春がいさめる。十数年の年月を経て衰えたとはいえ、未だ最強の一角に名を連ねている詠春ならともかく、その状態の詠春にすら届いていない刹那では残ったとしても倒されるのがおちである。

いかに神鳴流が退魔に秀でた流派とは言え、自殺行為だ。

「しかし長、昴さんが石化解除の為本山に残っている現在、この中で最強の長がここに残るのは得策ではありません。悔しいですが、あの白い少年には昴さんか長の二人しか現在対抗できません。そのお二人を外した状態で、あの少年とは……」

「無理にあの少年と戦う必要はありません。木乃香を取り戻せば、昴や本山に来る援軍と共に何とかかなります」

「それはそうかもしれませんが……」

詠春の言葉にそう反論する刹那。戦力的には確かにそうかもしれないが、彼女は自殺志願者か何かだろうか？

残るのは自分だと反論し合う二人だが、既に障壁の残り時間は1分30秒を切った。このままでは作戦も何も決まらずに乱戦に突入してしまう。それを見かねたアスナが言った。

「だったら私も残るわ。一人よりも二人の方が勝率も、生き残る確率も上がるでしょ？」

「アスナさん！？ しかし……」

「しかしも案山子もない！ アンタね、自殺願望でもあるの！？

いくら並の妖怪より強いからって限度があるわ！！ それにアンタが死んだら木乃香が悲しむでしょうが！」

アスナの言葉に、反論しようとした刹那が押し黙る。一応千草は、子供は殺さないように言っているのだが、そんな事は関係ないのだから。別の要因で死ぬ可能性もあるのだから。

「それに、私のアーティファクトの能力は知ってるでしょ？ 私も居た方が、絶対に早く終わるわ」

確かにそうであろう。彼女専用のアーティファクトである『ハマノツルギ』は、大剣形態でもハリセン形態でも、それが召喚されたモノならば如何なるモノでも一撃で送り返すと言う、召喚師や召喚されたモノにとつては理不尽極まる能力を有する。さらにこれに加え、魔法や気すらも無効化するのだ、反則もいいところである。魔物や妖怪退治にこれほどつてつけの武器もそう無いであろう。

「確かにその方がいいですね。それにアスナ君は刹那君と同じくらい強い。能力的にも文句はないと思いますが」

「……………分かりました。それで行きましょう」

アスナと詠春の言葉に暫し沈黙していた刹那だが、納得したようである。アスナが共に残る事を受け入れた。これで残って足止めする者はアスナと刹那の二人、木乃香奪還に向かう者は詠春とネギ、カモの二人と一匹となった。

これで本山に居る昴も合流すれば、さらに早く終わり、詠春達に追いつけるだろう。

「決まったかい！？ ならアレもやっところぜ、ズバツとブチユツとよおー！！」

「……………一応聞くけど、アレってまさか」

「決まってるだろ、キッスだよキス。仮契約！」

作戦が決まった途端に再びカモがそんな事を言いだした。余りの事にアスナは怒るところか呆れすら通り越してもはや何も言えないようだ。見れば詠春も若干だが眉をひそめている。

カモが言うには緊急事態で、手札は一枚でも多い方が良いかららしい。今回言っている事は珍しく正論なのだが、今まで散々騒ぎを引き起こしてきたのはカモであるため、どうしても素直に領けない。

何か別の事を考えているのではないかとどうしても勘ぐってしまう。具体的には仲介料稼ぎとか。

だが確かにこの状況で切れる手札が増えるのは好ましい。確実にアーティファクトカードが出ると言う訳ではないが、それでも出てくれたら戦術の幅も増える。たとえアーティファクトカードでなくとも、カードを介した念話や転移、魔力供給等の恩恵を受ける事が出来る。

刹那の場合、彼女のファーストキスの喪失と引き換えだが。

しかし何故キスなのか。以前アスナに聞いた話では、昴との契約はキスではなく、互いの血液を魔法陣に垂らして契約したと言うのではない。何故このオコジョはキスでの契約に拘るのか。

アスナと昴の事をばかしてその事について聞くと、カモはキスでの契約魔法陣しか張れないと言った。理由は、これが最も簡単な魔法陣だかららしい。

どうでもいいことだが、刹那は（アスナもそうだが）意外と純情乙女である。これは貞操観念に極めて煩い昴の影響も多分にあるが、彼女自身がキスは恋人もしくは婚約者となった相手にのみ……と言う考えを持っているからである（そしてそれはアスナも同じ）。その為、年端も行かぬ年下の少年が相手とはいえキスをするのはどうしても抵抗があるのだろう（これが雪広あやかなら喜んでキスするだろうが、刹那は彼女の様に年下趣味ではない）。まあ、やはり恥

ずかしさも多分にあるのだろうか。

だが今は連れ去られた木乃香を取り戻すために少しでも力が欲しい。その為には、恥ずかしさ等は不要であり邪魔である。

カモに急かされながらも数秒の葛藤の末、彼女はネギと仮契約する事を承諾した。

「これはこのちゃんを助ける為に必要な事であって、決して恋人とかそう言ったモノになる訳ではありません。ノーカウント、これはノーカウントです」

極めて小さな声で、自分に言い聞かせるようにぶつぶつとそう言っていたが置いておこう。その際にアスナが何か言おうとしたが、彼女自身が決めた事なので自重したようだ。

そして、カモによって敷かれた魔法陣の中に顔を真っ赤に染めて入り、同じく顔を赤くしたネギに腰を屈めてキスをする。直後、発生する光と出現する仮契約成立カード。そのカードには、白い翼を広げた彼女が描かれていた。その手には夕凧と、見覚えのない短刀を持っている。アーティファクトカードだ。それを手に取ったカモはすぐに複製を作成、オリジナルをネギに、コピーを刹那に手渡した。

「……すぐに追い付きます。それまで、このちゃんを頼みます！」

「……はい！」

その言葉を交わし、ネギは現状自分が使える最大の呪文である「雷の暴風」の詠唱を始めた。障壁の残り時間は既に30秒を切っているが、それだけあれば詠唱には十分である。

詠唱と共に高まる魔力に呼応するように、ネギ以外の三人も気を滾らせてすぐに行動できるように足腰に力を込める。

そして風の障壁に切れ目が発生し外が見えた瞬間、ネギは留めていた魔法を解き放った。

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!!!」

言葉と共に解き放たれた雷を纏った暴風は、その射線上に居た鬼達約2〜30体を薙ぎ払いながら突き進み空へと消えた。そして、それに動揺し動きの止まった妖怪達を尻目にネギは杖に乗って、詠春は瞬動と虚空瞬動を使い分けて千草達が飛んで行った方へと進んで行った。

「オヤビン! 二人逃がしちゃまっただ!!!」

「20体は喰われたか! まったく、西洋魔術師はわびさびってもんがなくてアカン」

飛んで行ったネギ達を見ながらそんな事を言う鬼達。鬼がわびさびと言うのも何と言うか、妙な光景である。

が、残っている気配に気付いた様で、先程ネギ達が居た場所に目を向けた。

「こっちは二人、向こうは今ので多少削れたとは言え少なくとも百以上。もしかしたら、二百か三百は居るかもね。まったく、女の子相手にけしかける数じゃないわよね」

「ですが、それほど強い相手ではないでしょう。せいぜいチンピラ百人に囲まれた程度に思えばいいかと」

鬼が目を向けたそこに居たのは、足止めをするために残ったアスナと刹那の二人であった。一般人が居ればへたり込むか気絶するかの集団の視線を一身に集めて、二人はそんな軽口を言い合っている。

「あはは、チンピラねえ。どう見てもそんな可愛らしい物には見えないんだけど……まあいいわ。さっさと終わらせて、ネギ達追っわよ！」

「ええ、では、鬼退治と行きましょう！」

「……ぬっふふ、コイツはまた、勇ましい嬢ちゃん達やなあ。これは楽しめそうや」

大剣と長刀を持って妖怪達に斬りかかる二人の戦乙女を、一際体が大きい鬼が獰猛な笑みをその顔に浮かべつつ迎えうった。

刹那達が二手に分かれて詠春とネギを先に進ませたその頃、千草達は先程居た川の上流にある湖に居た。

湖の中央にはしめ縄の掛けられた大岩が鎮座しており、そこに続くように岸から橋がかかっている。岩の手前には祭壇の様な場所もあり、そこに木乃香が寝かされていた。

何故か足袋以外の着物を脱がされ、全裸である。幸いにして薄布を体に掛けられているため、一応裸体は隠されているが。

「あつちに見える大岩にはな、危なすぎて、今や誰も召喚できひんゆー巨躯の大鬼が眠っとる。18年だか前に一度暴れた時には、今の長とサウザンドマスター等が封じたらしいけどな」

眼前に有る大岩を見据えながら、後ろに控えているフェイトに言い聞かせるように千草はそう言う。当のフェイトは相変わらず無機質な目で何を考えているか分からない。一見すると聞いていない様子も見えるが、今の千草にとっては別に気にする程の事でもないのだろう。気にせず彼女は続ける。

「けど、それもお嬢様の力があれば制御可能や。この召喚に成功すれば、応援部隊何ぞもの数やあらへん。東に巢食う西洋魔術師共もな」

「……………」

大鬼を召喚した後の事を考えているのだろう。笑みを顔に浮かべながら、恍惚とした声音で彼女はそう言う。その様子をフェイトは黙って見ていた。

すると夜風の中であられたか、眠っていた木乃香が目を覚ました。

「ん……………」

「御無礼をお許してくださいお嬢様。何も危険はないし、痛い事もありまへんから…………むしろ、逆に気持ちええんちゃうかな？」

目覚めた木乃香に優しくそう言いながら、千草は木乃香の髪を撫でる。しかしその顔には暗い笑みが浮かんでいた。

「ほな、始めますえ」

そして千草は呪文を唱えた。途端、木乃香の体から透き通った純白の、優しいイメージを見る者に与える光が立ち上った。

「高天の原に？留りまして、事始めたまひし？ろき・？ろみの命もちて」

静かに、しかし朗々と千草は詠唱を進めて行った。

飛ぶ。唯高速で空を駆ける。

ネギは今までにない程のスピードを出して空を進んでいた。魔力消費を出来る限り抑えて、しかしそれでも自動車を軽く超えるスピードを出して飛んでいた。すぐ隣には、虚空瞬動で空を駆ける詠春が並走している。衰えてなおこの速度について来るとは、流星は英雄と呼ばれた者と言ったところか。

現在、二人の眼前には細い、しかし確かな輝きを放つ純白の光の柱が天高く伸びている。

「兄貴、おっさん！ 感じるかこの魔力！！ 奴ら、何かおっ始めやがったぜ！？ 急がねえと！！」

「わかつてる。長さん！！」

「飛ばしてくれて構いませんよ、若い者にはまだ負けません」

隣を駆ける詠春にネギがそう聞くと、彼はさらに速度を上げてもいいと言った。それでも追い縋る自身があるのだろう。

「アケレレット
加速！！」

その言葉を聞いて、ネギはさらに飛行速度を上げた。障害物のない空中を駆けるその姿は、光を纏えば流星の様にも見えただろう。並の魔法使いでは並走する事も難しいだろう速度だ。

詠春は隣を普通に走っているが。
そして暫く飛んでいると、光の柱が立ち上っている場所が見えた。

「見えた！！ あそこだ！！」

その柱は湖の中央に有る巨大な岩の少し手前にある祭壇の様な場所から立ち上っていた。肌にしひしと感じる力の波動から、それが木乃香の魔力だと分かる。

「こ、この強力な魔力は……儀式召喚魔法だ！ アイツら、何かで
けえもんを呼び出す気だぜ!？」

「っ！ まさか!！」

カモの言った「儀式召喚」という言葉に反応し、詠春はさらに加速した。それを見て驚いたネギだが、彼もすぐに加速し詠春に追い続ける。そして隣に並んで、何故そこまで急ぐのかを聞いた。この急ぎ方は、木乃香が攫われたと言うだけでは説明できない。

「長さん、どうしたんですか!? あそこに何が……!？」

「あそこには、18年前に一度復活し、サウザンドマスターによって倒されたリョウメンスクナと言う鬼神が封印されているのです!

その力は、先程召喚された鬼達を遙かに超えます!！」

「な、なんだつてえ!？」

18年前に復活した時には、偶然居合わせた「紅き翼」のメンバー数人でかかってそれなりに苦戦して倒した事、その後強力な封印を掛けた事を、驚くカモとネギを見ずに空を駆けながら詠春は説明した。

「そ、それなりだったら大した事ねえんじゃ……!」

「18年前は「紅き翼」の中でも規格外と言つていい連中が居たからこそそこまで苦戦せずに倒す事が出来たのです。しかし並の術者では倒す事はおろか、傷一つ与えることなど出来ません!！」

詠春のその言葉にネギとカモが絶句する。

しかしすぐに気を取り直すと、そんなものを召喚させてたまるかと飛行速度をさらに上げる。小さくだが、既に肉眼で木乃香が見える距離だ。まだ間に合う。

が、事はそう簡単に運ばないようだ。あと僅か数百メートルと言っ

た所で、ネギの後方から黒い何かがある森の中から飛び出し、彼等に襲いかかって来た。

「狗神!？」

空を駆けて襲いかかって来たそれらを、詠春は野太刀でそれらを斬り伏せて迎撃し先に進むが、ネギは咄嗟に風の盾を使用してしまった。

その為飛行速度が低下し狗神と激突。杖から放り出されて彼は森へと落下する。

「ネギ君!」

「僕の事は放っておいて、行ってください長さん!! すぐに追いつきますから!!」

森へ落ちて行くネギを助けようとした詠春だが、ネギの言葉に僅かに逡巡した後、光の柱の元へと行くため再度空を駆ける。ネギは落下しながらそれを見送り、杖を呼び戻して風を発生させ無事着地した。

「よおネギ」

そして体勢を立て直した彼の前に現れた一つの影。それは草を踏み締めながら一歩一歩ネギに近づく。背丈と声の質から鑑みて、ネギと同年代の少年の様だ。

「嬉しいぜえ、まさかこんなに早く再戦の機会が巡って来るたあな

……」

「き、君は……!!」

現れたのは黒い髪に学生服を着た少年だった。外見だけなら年頃のやんちゃ坊主と言った風貌だが、その頭には普通の人間にはない、犬の様な耳が付いていた。時々ピクピク動いている事から、どうも飾りではなく本物らしい。

「長のおっさんは通してもうたが……ここは通行止めや、ネギ!!」
「こ、コタロー君!？」

コタローと呼ばれたその少年　　犬上小太郎はネギの前、湖の祭壇に続く道に立ち塞がった。

「　　御心、いちはやびたまふなれば、根の國・底の國より上り出でませと進る幣帛は　　」

大岩の前で、祭壇に手を翳しながら千草は詠唱を続ける。集中するためか、目を瞑っているが、岩より力を感じているのだろう、額には汗を掻いている。

ここには護衛のためか、フェイトが控えていた筈だが現在彼の姿は見えない。理由は、ネギよりも先にここへ来た詠春を迎え撃っているためだ。

「くっ、そこをどけ!!」
「聞けない相談だね」

詠春の野太刀と、フェイトの石礫がぶつかり合う。石礫は容易く切り裂かれ、砕かれたが目くらましの効果も有ったのだろう、一瞬だけ詠春はフェイトの姿を見失ってしまった。咄嗟にバックステップする。

直後、腹部に走る衝撃と痛み。後方に吹き飛ばされながら見てみれば、先程自分が居た地点にフェイトが居た。目くらましの後、瞬動で距離を詰めたのだろう。吹き飛ばす詠春を追って来る。しかし彼もさる者、地面に足が付くとすぐに体勢を立て直し、気で体をさらに強化して突撃する。

「斬岩剣!!」

気で強化した野太刀で、文字通り岩をも切り裂く一撃を放つ。歳のせいも全盛期よりも威力は若干落ちているが、それでも彼のそれは、普通の岩石なら大岩すら豆腐の様に切り裂く剣だ。流石にそんな一撃を貰いたくはないのだろう、フェイトは地面を蹴って振り下ろされたそれを回避し、再び石礫を飛ばしてくる。

既に二人のぶつかり合いは五十を軽く超えている。神聖な雰囲気も漂わせていた祭壇へと導く通路も、既に見る影もなくボロボロに傷付いている。

しかし彼等の体には、未だ互いに決定打と言っていい物は一つも入っていない。詠春が攻め、フェイトが防ぐと言ったループだ。これでは儀式が完成してしまう。

「邪魔をするな! あそこに封印されているモノが解放されればどうなるか……!!」

「千草さんはお姫様の力を使えば制御可能って言ってたけどね。それに一応雇い主だから護衛はしないと」

目を吊り上げてそう言う詠春に、フェイトは一切表情を変えずにそう返す。この少年の表情筋が動く事はあるのだろうか?

(鼻はまだか!?)

フエイトから視線こそ逸らさないものの、進む事が出来ずに詠春は焦る。

そんな詠春を気にも留めず、千草は詠唱を続ける。

「赤玉の御赤らびます、藤原朝臣、近衛木乃香の、茂しやくはえの如く萌え騰る生く魂・足る魂・？魂なり！！」

詠唱がそこまで終わると、まるで木乃香から立ち昇る光に呼応するかのように、大岩から巨大な光の柱が天を突く様に発生した。

月明かりを反射し、夜の闇に輝く川で二人の乙女がその手に大剣を、長刀を持って異形を相手に舞い踊る。その体には小さく浅いが幾つもの傷が付いていた。場所によっては血も流れている。百を軽く超え、二百から三百程も居た数多の妖怪達はその数を既に3分の1程度にまで減らしており、それでもなお彼女達に襲いかかっていた。

「刹那つ！！」

「はい！！」

多くの鬼に囲まれた二人は、その中央で背中合わせに剣を構え、二人同時に技を放つ。連携技だ。

『斬空閃・百花繚乱！！』

同じ技を、まったく同じタイミングで全方位に乱れ放つ。それぞれ

の剣から放たれた無数の剣閃は、二人に襲いかかろうとして突進してきた者、飛び上って空中に居た者を問答無用で切り捨てる。これでさらに20体程送り返した。しかし、二人の顔は晴れない。

「はっ、はっ……いくらか、防がれたみたいね」

「ぜえ、はあ……はい、どうも他の鬼に比べて、別格が居るみたいですよ」

そう言つて二人は周りを見る。見れば、先程の剣閃が直撃した鬼達は消えているが何体か残っている。おそらく、武器が何かで防いだか回避したのだろう。

残った鬼の中に居る鳥の頭をした剣士　　烏族が剣を肩に担ぎながら一歩前に出て言う。

「なかなか歯ごたえのある嬢ちゃん達よな。平安の昔と違い、気やら魔力を操れるようになった人間は思った以上にしぶとい……しかし、我等相手にいつまで持つかな？」

「たった二人で三百居たワシらをここまで減らしたんは確かに凄いが、いい加減体力も限界やる。思った以上に楽しめたが、ここらでそろそろ幕引きと行こうや」

烏族の剣士の言葉を、巨大な棍棒を持った鬼が引き継ぐ。その肩には、狐の面を付けた女が居た。感じる気配から、彼女もまた妖怪だと分かる。手には刃の付いたトンファーを持っている。

アスナ達が息を切らせながら妖怪達を見れば、彼等はじりじりと距離を詰めて来ていた。ある程度距離を詰めて、一斉に襲いかかろうと言う魂胆だろう。

少しでも体力を回復させようとそれをじっと見ていると、詠春達が向かった方向から光の柱が発生した。

「あの光の柱は!?!」

「ほ、コイツは見物やなあ」

突然発生した光の柱をアスナと刹那が驚きの目で、鬼達が興味深げな眼で見ていると、少し離れた所から声がした。

「どうやら、雇い主の千草はんの計画が上手くいっとるみたいですね。長はんとあのかわいい魔法使い君は間に合わへんかったんやるか? まあ、ウチには関係ありまへんけど」

「つ、月詠!?!」

「こんばんわ、センパイ。ほな、斬り合いましょか?」

鬼達の後方から、朗らかな笑顔を浮かべた月詠がそんな事を言いながら現れた。彼女は頬を赤く染め、潤んだ瞳で刹那唯一人を見ている。それを見て、刹那の背筋に寒気が走った。

「最悪ね、唯でさえ結構疲れてるのに増援つて……」

アスナが顔を引き攣らせながらそう言う。出来過ぎと言う様な増援の登場にもはや笑うしかない。それを見ながら烏族の剣士が言う。

「さてどうする? もう手詰まりか?」

顔が鳥の為に良く分からないが、声の質から考えてどうやら笑っているようだ。

彼を倒したとしてもまだ鬼が大量に居り、さらに月詠までいると言う現状。もし運よく全員倒せたとしても、確実に動けなくなってしまうだろう。最悪である。

小太郎の気を纏った攻撃を、ネギは己の拳に魔力を籠めて防御する。体全体に魔力を籠めないのは、魔力の消費を最低限に抑えるためである。

「どうしたあ、本気で来いやネギ!!」

「どいてよコタロー君!! 今君と戦ってる暇なんてないんだ!!」
「いやや、つれない事言うなやネギ」

ネギはほとんど攻撃せず、何とか話し合いで終わらせようとするが対する小太郎はにべもない。寧ろネギに本気を出せと言って来る始末である。

「兄貴、これ以上自分への契約執行は使うんじゃないやねえ。未完成だから体への負担がデケエから、いざって時に動けなくなっちまう。それにあの光の柱を見る! あと数分で儀式が終わっちまうぜ!?! 長のおっさんも白髪のカキに足止めされてるみてえだし、急がねえと……!!」

「わかつてる」

カモの言葉にそう返し、ネギはあるうことか、己の拳に籠めていた魔力を霧散させた。それに怪訝な眼差しを向ける小太郎だが、ネギはそれを無視して聞く。

「コタロー君、何であのお猿のお姉さんの味方をするの!?! あの人は僕の友達を攫って酷い事しようとしてるんだよ!?!」

「はっ! 千草の姉ちゃんが何しようが俺には関係あらへんわ! 俺はただ、イケ好かん西洋魔術師たちと戦いたくて手え貸しただけやからな! ……けど、その甲斐あったわ!!」

ネギの言葉にそう返し、小太郎は指を向けてとても嬉しそうに言う。

「お前に会えたんやからな、ネギ！！ 嬉しいでえ、同い年で俺と互角に張り合えたんはお前が初めてやったからな。さあ…戦おうや！！」

「戦いつて、そんなの意味無いよ！ 試合だったらこれが終わったら幾らでも…」

「ざけんなあつ！！」

ネギの言葉を途中で遮り、小太郎は手を勢いよく払い、吠えた。

「俺には分かるで。コトが終わったら、お前は本気で戦う様な奴やない。そんなんと戦っても、全然おもしろくないわ。……俺は本気のお前と戦いたいんや。今！ ここで！！ この場所で！！」

小太郎は声を大にしてそう言った。その目に狂的な輝きはなく、ただ純粹にネギと戦いたいと言う想いが伝わってくる。彼は続ける。

「ここを通るには、俺を倒すしかない。けど、俺は譲らへんで！！」
「くっ……」

小太郎の気迫に押されたか、ネギが顔を硬くする。時間的余裕のなさから、焦りは始めているようだ。それを敏感に察知した力毛が挑発に乗らない様ネギに言うが、聞こえているかどうかは分からない。

「来いやネギ！ 男やる！！ 全力で俺を倒せばまだ間に合うかもしれんで！？」

「っ！！ ……分かった」

「兄貴！？ 駄目だ、いけねえ！！ 唯でさえ時間がねえのに……」
「大丈夫だよ、一分で終わらせるから」

カモが止めようとするが、ネギは聞かずに己の手に再び魔力を籠め始める。いかに教師と言う職に着いているとは言え彼は年齢で言えばまだ子供。どれほど大人ぶって居ても、やはり根っこは子供のソレ。挑発を受け流せず、さらに良くも悪くも真直ぐな彼の性格が最悪の方向に出てしまった。

（あああ最悪だ。こんな所で兄貴の子供っぽさと頑固が悪い方向に出ちまった！ 長のおっさんも足止めされて、昴の兄さんも居ない現状で戦ったらどっちに転んでもこのか姉さんは……っ！か勝算は！？ 昼間あんだだけボコボコにされてさらに獣化も有るっのに勝ち目あるのかよ！？）

性格こそ碌でもないが、カモはこれでもかなり頭の回転は速い。さらにある程度とはいえ、ネギに助言できる程の知識も持ち合わせているのだ。

そのカモが頭をフル回転させ、昼間得た情報から叩き出したネギの勝率は 50%以下。おまけに時間も殆どないため、勝っても負けても、どちらにしても木乃香の救出には間に合わない。

絶望感漂う目でネギと小太郎がぶつかろうとしているのを見ていると、二人の間に巨大な何か回転しながら突き刺さった。

「何っ！？ ぐあっ！！」

突き立った何かは、見間違いでなければ十字手裏剣の様だ。とてつもなく大きい。突然目の前に巨大手裏剣が突き立った二人は驚き硬直する。しかしそれがこれを投げた者の狙いだっただろう。一瞬とは言え小太郎が硬直した直後、何者かが現れて小太郎を吹き飛

ばし、消えた。

吹き飛ばされた小太郎は桜の木に激突し咳き込む。

「がっ…ぶ、分身攻撃!? 何者や!?!」

痛む体を起こしながら小太郎は己を吹き飛ばした犯人を探す。つられてネギもあちこちを見渡すが、見つからない。だが、ふと頭上を見上げると、桜の木の枝に人影が立っていた。誰かを抱えているようだ。

そして月明かりに照らされて浮かび上がった姿に、ネギは驚愕を露わにした。

「な、長瀬さん! 夕映さん!?!」

「熱くなつて我を忘れ、大局を見誤るとは……精進が足りぬでござるよ。ネギ坊主」

普段と変わらぬ笑みを浮かべ、夕映を抱えた彼女 長瀬楓はそう言った。彼女は枝から降りると抱えていた夕映を地に降ろした。

「な、長瀬さん……何で、ここに……?」

「私が携帯電話で呼んだです、ネギ先生」

突然の乱入者に茫然としながら聞くネギに、地面に降ろされた夕映が答えた。どうやら彼女は本山での石化から逃れられたらしい。運がいいことである。

「さ、ここは拙者に任せ、行くでござる。急ぐのでござるわっ。」

「え…でも……」

「これこれ、混乱するでない。詳しい事は後でござるよ。……拙者の事なら心配いらぬ。今は考えるより、行動の時でござるよ。」

普段閉じている目を僅かに開いて、頭をコツンと叩きながらネギに言い聞かせる。しかし、それを聞いてもネギは踏ん切りがつかないようで、かなり迷っているようだった。

仕方がないので突き飛ばし、無理矢理進ませる。

「さあ、早く行け！」

「~~~~っ！ すいません長瀬さん!!」

「なっ、待てやネギ!! おわっ！」

そう言っつてネギは駆けだした。それを見た小太郎が当然の様に追い駆けるが、それは楓が投げた苦無によって阻まれた。足を止められた小太郎は楓を睨みつける。

「……おい、そのデカイ姉ちゃん。邪魔すんなや……俺は女を殴るのは趣味とちゃうんやで？」

「……コタローと言ったか、少年。ネギ坊主をライバルと認めるとは、なかなか良い目をしているでござるな」

怒気混じりの小太郎の言葉に、ゆっくりと進みながら楓はひょうひょうと返す。いつの間にか二人に分身しており、一人は夕映の側に付いていた。

「だが、今は主義を捨て本気を出すのが良いでござるよ。今はまだ、拙者の方がネギ坊主よりも強い」

「……」

「甲賀中忍、長瀬楓 参る」

そう言っつて彼女は十人以上に分身した。

その光景に小太郎は呆然とするが、すぐに口に笑みを浮かべて

「はっ……上等お!!」

自身もまた、狗神を召喚した。

余りに最悪の状況に刹那が覚悟を決めて、詠春以外知らない、自分の隠している力を解放しようとした時だった。

パスッ

そんな気の抜ける様な音がし、一人の烏族の頭を何かが撃ち抜いた。途端、頭を撃ち抜かれた烏族は叫び、煙を上げながら消えて行った。それに全員が驚くが、そんな鬼達をさらに別の何かが連続で襲う。

「あ、新手か!? ぐおっ!?!」

「これは……術を施された弾丸! 何奴!?!」

襲い来る弾丸を手に持つ棒で防ぎながら、大鬼は時代劇の様な口調で姿を見せない何者かに吠えた。するとその声に応えてか、上流に有る岩の上に弾丸を撃った犯人+ が現れた。

「らしくないな二人とも、苦戦している様じゃないか?」

「ひゃー、あのデカイの本物アルか? 強そうアルねー」

手に銃を持つ黒髪褐色肌の少女、龍宮真名と、同じく褐色肌だが金髪の拳法娘、古菲が現れた。本山に居なかった筈の二人の突然の登場に、アスナと刹那は目を見開いた。

「まだかい？」

「もう少しや、黙つとき！」

詠春とぶつかり合いながら問うフェイトに、千草は語気を荒げてそう返す。それにフェイトは無言で返し、再度詠春とぶつかる。流石に完全に無傷とは行かないようで、目立つ傷こそないものの、彼の服はボロボロだ。

しかし詠春も、歳による体力低下と平和な時代が続いたことによる鍛錬不足がたたり、既に息を切らせている。服もフェイトと同じくらいか、それ以上にボロボロである。

「くっ……」

詠春は歯軋りしながらフェイトを睨みつけた。木乃香達とそう距離が離れていないために、雷光剣等の高威力広範囲攻撃が出来ないのだ。

殺気を籠めて睨みつけるが、フェイトは堪えた風もなく、瞬動で接近し攻撃を仕掛ける。それを迎撃しながら詠春が内心で未だに出来ない鼻に文句を言っている、上空に妙な気配を感じた。

フェイトを弾き飛ばして距離を離し、上を見る。どうやらフェイトも感じ取っていた様で、同じ様に上を見た。

直後、フェイトの真横に昴が出現した。

「なっ……」

「アスナちゃんを裸にして、さらに何かしてくれたお礼と本山での一撃……当たっていませんが、纏めてお返ししますよ。『闇よ集え』」

「

突然の出現にフェイトも詠春も驚き、動きが止まる。そして、表情の一切を消した昴がそう言った直後、彼の掌の上に言葉通り黒い何か　闇が凄まじい勢いで集まり、野球ボール大の黒い球体を造り上げた。それはどういう訳か黒い電気を放っており、おぞましい程の力を感じさせた。良く見てみれば、まるで鼓動を打っている様に動いている。

そして彼はトン、とフェイトにその球体を押し当てて言った。

「死になさい、小僧。……『爆ぜなさい』」
「くっ！」

昴がそう言った直後、放電していた黒い球体は放電を止め、フェイトの体と昴の掌の間で漆黒の光を放ちながら爆裂し、発生した衝撃によって水を巻き上げ、祭壇へと続く橋の3分の1を破壊し、フェイトを吹き飛ばした。

42話：一方的な蹂躪

昴の真言により圧縮された、闇によって形成された黒球が黒い光を放ちながら爆裂し、発生した衝撃で水を、橋を、そしてそれをほぼ零距离で叩き込まれたフェイトを吹き飛ばした。その衝撃は凄まじく、離れていた筈の詠春を10m以上も後方に吹き飛ばしてしまった。

「ぬうおおおつ!?!」

衝撃で吹き飛ばされながらも詠春は空中で体勢を立て直し、吹き飛ばされずに残った橋に着地して衝撃が治まるのを待つ。見れば祭壇へと続く橋の3分の1以上が中間から根こそぎ吹き飛び、衝撃により巻き上げられた水が雨の様に降っている。

衝撃が治まると同時に昴を見るが、視界の端に小さな影が映った。何かと思いきやちらちらを見ると、杖に乗って高速飛行するネギが詠春の側にやって来た。

「長さん、大丈夫ですか!?!」

「今の黒い光と爆音は何だよ!?! 何か衝撃も来たしよ!?!」

「私は大丈夫ですよ、ネギ君。今の黒い光は昴の攻撃ですから」

杖から降り立ち、心配そうに聞いて来たネギにそう返す。それを聞いて、ネギは何処かほっとしたように顔を緩めたがすぐに引き締め、昴を見た。

彼は水の上に立って祭壇ではなく、別の方向を見ていた。その顔にいつもの笑みはなく、人形のような無表情さでじっと見ている。どうしたのかと聞かため、近寄ろうとしたが急に昴が動いた。

「『風は水を孕みて逆巻く。我が敵を内に閉じ込め、切り刻もう』」
突然そんな事を言った昴に、ネギと力モは疑問の表情を向ける。しかしその直後、かなり離れた場所に突然水柱が立ち上った。いきなり発生したそれにネギと力モが驚いているが、そんなもの見えてもいないのか、昴はさらに言葉を連ね、手を掲げる。

「『水よ、集え。我が意をその身に映し、形成せ』」

そう言うと同時に、降り注ぐ水と湖の水を合わせた膨大な量の水が、掲げた昴の手の上に渦を巻くように集まり、先程の闇の様に圧縮され、今度はその形を変えた。

細く、鋭く形成されたそれは、一言で言ってしまうえば槍であった。

この湖の綺麗な水の為何処までも透き通り、月光に照らされてその透明な内に神秘的かつ幻想的な光をたゆたわせた、まるで最高級の虹水晶で作られたかのように美しくそして流麗な、しかし巨大な水で形成された槍だった。石突きと穂先までの長さは、裕に昴の背丈の5倍はあるだろう。

そのあまりの美しさにネギ達が思わず見惚れていたが、昴はあろうことか、それを水柱に向かって勢いよく投げ飛ばした。それは大きさにそぐわぬ速度で飛翔し、水柱を貫きさらに爆散し、内に閉じ込められていた少年　　フェイトを再び湖に叩き落した。

どうやら彼は爆発する寸前のほんの一瞬でバックステップして僅かとは言え距離を取り、障壁に力を込めてさらに爆発の衝撃を利用して離れていたようだ。しかしそれでも零距离での一撃は完全に回避・防御出来なかったのだろう。今の攻撃のせいもあるだろうが、体全体が目に見えてポロポロである。

水柱と水の槍の激突・爆散によって散らされた双方の水は飛沫とな

り、月光を受けてキラキラと宝石の様に美しく煌き、湖へと戻って行くが昴の攻撃はまだ終わらない。

「『飛沫は弾雨となりて降り注ぐ』」

そしてフェイトが落下した場所に降り注ぐ、飛沫から変化した弾丸の雨。嵐の様な勢いを持って撃ち出されたソレは15秒程続き、撃ち終わってようやく昴はフェイトの方から目を外し

「まあ、これぐらいでいいでしょう。来世が有るなら、その時は気をつける事ですね」

そう言つて詠春達の方に歩いて来た。

音も無く水の上を歩いて来る昴をネギ達は呆然と見ていたが、すぐ傍に昴が来ると我に帰った。

「? どうかしましたか?」

「昴……お前……」

「い、今の猛攻は……流石に、なあ?」

呆れた様子の詠春と、先程の過剰攻撃に戦慄しているカモを見ながら、昴は首を傾げた。どうやら自分がやった攻撃をおかしいものとは思っていないらしい。これが義娘アスナを裸に剥かれた怒りから来る物なのか、それとも魔法使いの常識に捕われ始めているからなのかは定かではない。

……この男の性格等からして、おそらく、前者だろうと思うが。

「あの、昴さん!」

「? 何ですか、少年」

「いくらなんでもやり過ぎだと思えます!」

「……は？」

いきなりのネギの言葉に思わず昴は呆けたような言葉を漏らす。先程の攻撃を見て若干震えているが、それでも昴をキッと睨んでいる。僅かながらも怒気を感じる。

しかし、常に死が隣に有ると言ってもいい大戦を駆け抜け、良くも悪くもこれ以上の怒気や殺気に慣れてしまっている昴と詠春からしたらネギ程度の怒気など微風にも満たず、一切怯まない。昴はそんな怒気など気にもせず、「この少年は何を言っているのだ？」と言う目でネギを見ている。

その様子を見て何を思ったか、ネギはさらに昴に言い募る。

「やり過ぎです！ あんな、人が傷付くどころか死ぬ様な魔法……いくら敵って言っても、立派な魔法使いなら、もっと別のやり方が有った筈です！！」

「ああ……」

そう言うことですか。と、そう内心で納得した。どうやらこの少年は、あの様な殺傷能力が極めて高い攻撃などせず、捕縛魔法等を使って対応しろと言いたいのだろう。エヴァンジェリンとの戦闘で十分に殺傷能力のある魔法を撃ち合っておいて、今更何を言っているのか。昴は若干呆れを抱いた。

それに、どうもネギは、他の魔法使いと同じく“昴は魔法使いである”と勘違いしているようだ。彼の力の事を知っている者がこの世にほんの数人しか居らず、彼自身もそれを基本的に言わないために勘違いするのも仕方ないと思うが。

それに対して昴が何か言おうとしたが、カモが焦った様に言った。

「……って、今はそんな事は良いだろ！？ あの白髪のカキも倒した事だし、早いとここのかの姉さんを助け出そうぜ！！」

「っ！　そうでした、木乃香！」

カモの言葉に真っ先に反応し、瞬動で祭壇の元に向かったのは当然ながら詠春だった。すぐそこに娘が居たのにフェイトに足止めされていたのだ、急ぐのは仕方ないとも言える。それを見て昴も反論する事を止め、詠春を追って祭壇に向かった。ネギも一緒である。そしてすぐに祭壇に着いたのだがしかし、そこに木乃香は居なかった。

「なっ、このかの姉さんが居ねえ！？」

「そんな、確かにここに居た筈なのに！！」

祭壇の上から忽然と消えた木乃香を探して、ネギとカモは周りを見回す。しかし視界に入るのは水と大岩から立ち上る巨大な光の柱のみ。木乃香と、術者である筈の天ヶ崎千草の姿は見当たらない。直後、大岩が一際強く輝き、やや上方から声が聞こえた。

「まさかその優男があんな力を持つとっただとは思いませんでしたわ。けど、一足遅かったようですねあ……儀式はたった今、終わりましたえ」

その声を聞いて、弾かれるように全員が上を見る。そこには、腕を広げて宙に浮遊する千草と、彼女のすぐ前に浮く木乃香、そしてその背後には、大岩よりまるで生える様に出てきた、四本の腕を持つ巨大な光る異形が居た。

「そんな……こんなの……」

「っ！　デカツ！　ちょっと待てよ、いくらなんでもデカすぎるぜ！？」

「詠春、まさかこの鬼が……」

巨大な光る鬼の出現に、ネギとカモは目を見開き驚愕を露わにする。それを横目で見ながら、昴はこの鬼の正体を詠春に聞こうとし、それは別の人間が答えた。

「二面四手の巨躯の大鬼、『リヨウメンスクナノカミ』……千六百年前に討ち倒され封印された、飛驒の大鬼神や。ふふっ、喚び出しは成功やなあ」

昴の問いにそう答えた千草は、木乃香と共にスクナの肩の辺りに浮きながら恍惚とした表情で召喚した存在を見る。

「伝承では身の寸十八丈はあったと言うけど、コイツはそれ以上有りそうやな………思った以上にデカすぎてビビったわ」

そう言つて千草は視線をスクナから外し、ネギ達全員を見下ろしてくる。見下ろすその目が、全員の不快感を掻き立てる。

しかしスクナの放つ存在感に中てられたか、ネギ達は怯え、昴と詠春も僅かだが冷や汗を掻き、目を厳しくしている。

「ここ、こんなの相手にどうしろってんだよ!?　つて、兄貴!?!　何を……」

「完全に出ちやう前にやつつけるしかないよ!!　ラス・テル・マ・スキル・マジステル!!」

威圧感に中てられたカモが怯えと共にそう言うが、ネギがいきなり行動を起こした。確かにスクナはまだ体の半分　上半身しか封印されていた岩から出ていない。完全に出る前なら、まだ勝ち目はあると踏んだのだろう。詠唱をし、現在のネギの最大魔法をスクナに向かつて解き放った。

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ
「雷の暴風！！」

「なっ……………」

先程の鬼達からの脱出に使った物と違い、今度は自分の魔力を最大にまで籠めた、文字通り全力の一撃である。それは今まで以上の暴風を纏い、スクナに向かって直進するが忘れるなかれ。鬼と言われ、てこそいるが、スクナはその名に神の号を持つ存在である。

古の昔、今以上の力を持つ多くの陰陽師他呪術師達はその命を犠牲にしてようやく討ち倒し、しかし封印するしか方法がなかった、それほど格は高くないとは言え神に近い存在である。永き封印によってその力の大半を抑えられているとは言えど、その力は凄まじい。当然、それは防御や耐久力にも同じ事が言える。

突き進んだネギの「雷の暴風」は、スクナの体に直撃する寸前に、胸の前で弾け飛んだ。

「なっ……………」

「フフ、フフフフフ……………アハハハハ！　それが精一杯か！？　サウザンドマスターの息子が！！　まるで効かへんなあ！！」

放たれた魔法に籠められた魔力にこそ驚いていた千草だが、スクナにそれが届く前に弾かれたと見るや高笑いを始めた。その体には当然の事ながら傷一つ付いていない。

多少消費していたとは言え、ネギの魔力はサウザンドマスター・ナギに届く程だ。その魔力を最大にまで籠めた魔法を弾いたのだから、弱体化した状態とは言え、流石は神と言う事か。

コレと同じ状態の、いや、弱体化していたとは言え体全体が出ていたほぼ完全状態のスクナを、「雷の暴風」よりも上級の魔法である「千の雷」を使い、さらに最強の仲間が居たとは言え、18年前に打倒して見せた若き日のナギ達は人間と言うカテゴリーの中では余

程に規格外だったのだろう。ある意味、人間を超越していたのではなからうか？ そんな疑問さえ湧いて来る。

「木乃香お嬢様の力でコイツを完全に制御可能な今、コワイモンはもう何も有りまへんえ！ 明日到着するとか言う応援も蹴散らしたるわ！ この力が有れば、東に巢食う西洋魔術師共にも一泡吹かせてやれますわ！ アツハハハハハハ！！」

千草の高笑いが湖に響き渡る。自分の最大魔法を弾かれ、傷一つ付ける事が出来なかつたネギは魔力切れ寸前のためか、絶望からか、はたまたその両方からか膝を着いた。ナギから譲り受けた杖がその手の中から転げ落ち、カランと音を立てる。

そんなネギに目を向けず、詠春と昴は上半身のみが出ているスクナを睨みつける。千草の言うように木乃香の魔力で完全に制御下に置いているのだろう。スクナは祭壇を見ているだけでピクリとも動かない。

詠春の雷光剣や先程の物よりも強力な現象を引き起こす真言なら、連続で叩き込めば目覚めたばかりの今のスクナを倒す事は出来るだろう。しかし木乃香と千草がスクナの側に居る為、それをしてしまえばまず間違いなく巻き込んで殺してしまう。

昴の真言で木乃香のみをこちら側に取り戻すと言う手もあるが、それをした直後にスクナが制御下から外れて暴走、こちら一帯を破壊してそれに木乃香やネギが巻き込まれないとも限らない。

どうするかと思案していると、後方から声が聞こえた。

「ネギ！ 大丈夫って、スバル！？ いつの間ここにいて、何よあのデカイの！？」

「アレは……このちゃん！？」

森を抜けて祭壇の元まで駆けつけてきたアスナ達だが、大岩から出

ているスクナの巨体に驚愕を露わにする。そして刹那は、目敏くスクナの肩の辺りに木乃香の姿を見つけたようだ。ある意味流石である。

そんな二人を見ながら詠春が問いかけた。

「二人とも、あの鬼達を越えて来たのですか？」

「全部倒した訳じゃないわ。結構削った後は、応援で来てくれた龍宮さん達に任せてここに来たの。月詠も、刹那を追って来そうになったけど龍宮さんが抑えてくれてるわ。それよりスバルよ！ 何でここに居るのよ!？」

どうやら二人は、残りの鬼達と月詠の相手を龍宮と古菲の二人に任せようだ。月詠の不満そうな顔が目には浮かぶようである。

「つい先程、本山からここに転移で来まして。ですが、それはまた後で話しましょう。今はどうやって木乃香ちゃんを取り戻すかです。下手に手を出せばスクナが暴走してしまうかもしれないから」

アスナの問いに昴はそう答え、その話題を強制的に終わらせる。それにアスナはやや不服そうな顔をして僅かに頬を膨らませたが、すぐに気を取り直してスクナの方を見る。千草はまだ高笑いしており、アスナと刹那に気付いた様子は無い。

それを見て、刹那が何かを決意した風に言う。

「長、昴さん……少しだけ、あの大鬼の動きを封じておいて下さい。お嬢様は、私が救い出します」

「刹那君？ まさか……」

「ふむ、私としてはやぶさかではありませんが……何か手段でもあるのですか？」

刹那の言葉に昴はそう問い返すが、刹那は言葉を返さずじつとスクナの方を見ている。アスナ達もそんな刹那に疑問を持ったのか、どうしたのかと聞こうとするが、それは詠春に止められた。首を振っているあたり、彼は何かを知っているようだ。

「お嬢様は千草と共にあの太鬼の肩の所に居ます。私なら、あそこまで行けますから……」

「どうやって行くのよ？ まだ虚空瞬動とか使いこなせてないのに」

そう言うアスナに、刹那はまたも沈黙で返した。しかし今度は、暫し間が開いたが、スクナの方を向きながらも返してきた。

「昴さん、ネギ先生……私、二人にも、このちゃんとアスナさんにも秘密にした事があるんです。これを知っているのは、長だけです。……この姿を見られたら、もう、皆さんとお別れしなくてはなりません」

「え……」

「ちよつと、それ一体どういう事？」

いきなりの刹那の告白に驚くネギとアスナ。見れば昴も、声にこそ出していないがどういう事かと詠春を見ていた。しかし詠春は声を出さず、目を瞑って沈黙していた。

刹那は続ける。

「でも今なら……貴方達になら……」

そう言っただけで彼女はもう訳か背中を丸め、そして身の内から何かを解き放つように背筋を伸ばした。

瞬間、舞い散る純白の羽。彼女の周囲に舞い散ったそれは月の光を受けてさながら雪の様に淡く輝き、アスナ達の目を見張らせる。突

然舞った羽に昴も茫然としていたが、すぐに我に帰り刹那を見る。

彼女の背に在ったのは、白い、白鳥の様に何処までも白く優美な一對の翼だった。彼女の服を巻き上げて外気に晒されたソレはしかし、確かに彼女の背中から生えていて。しかし醜さと言う物は一切感じさせず、月の光に優しく照らされたソレは淡く輝き神秘的な美しさをもち、逆に見るもの全てを見惚れさせる様なその姿は、さながら月に愛された天使の様で。

その姿に思わず見惚れたアスナ達を見て、何を勘違いしたか刹那は自嘲する様な笑みを顔に浮かべて話した。

「……これが私の正体……奴らと同じ、化け物です……でも、誤解しないでください。私の、このちゃんを守りたいと言う気持ちは本物です！ 今まで秘密にしていたのは、この醜い姿を知られて、皆さんに嫌われるのが怖かっただけで……私っ、宮崎さんの様な勇気も持てない……そんな情けない女で「ふうーん」ひゃうっ!？」

まるで血を吐く様に、叫ぶ様に独白していた刹那の言葉は嬌声と共に止められた。何事かと思いい彼女が自身の翼を見てみれば、アスナがワシヤワシヤと羽毛を触り、時に抱きしめ、時に顔を埋めて匂いを嗅いでいた。

何かと思いい刹那が問う。

「あの……アスナさん？ どうしたんで……」

「……」
「え？」

一通り触って堪能したのか、アスナは翼から手を離した。そして彼女は何か手を上げ、自身を困惑の目で見ている刹那の背に向けて

勢いよく叩きつけた。

バツチイイイイン

「うきやうつ!？」

そのアスナの行動に可愛らしい悲鳴を上げ、刹那は手から夕凧を取り落とした。いきなり何をするのかと思いきや刹那が涙目でアスナを見るが、彼女は微笑みを浮かべていて、刹那に近付き、彼女を優しく抱き締めた。

「あ……」

「化け物なんて、何言ってるのよ。こんな綺麗な翼を持つてるのに……天使って言った方が、よっぽどしっくりくるわ」

「え……?」

アスナの突然の行動に刹那は驚き、僅かに身を固くするが、アスナはそれを気にせずにつづる。

「アンタね、何年も一緒に居て、一体私達の何を見てたのよ。私と木乃香が、そんな羽があるくらいで誰かを嫌いになる様な、心の狭い人間に見える? バカね……」

「アスナさん……」

「アンタの苦しみはアンタしか本当の意味では分からないものだから、「苦しかったのね」なんて知った様な事は言わない。でもね、これだけは断言できるわ。私も木乃香も、スバルも、それぐらいで嫌いになつたりする事は絶対ない」

「あ……」

優しく抱きしめてそう言ったアスナに驚き、目を見開く。抱き締め

られているためにその表情は分からないが、きつととても優しい顔をしているのだろう。次いで刹那は昴とネギを見るが、昴はいつものように穏やかな笑みを浮かべ二人を見守り、ネギは未だ刹那に見惚れているのか、頬を僅かに赤くして茫然としている。

ネギは知らないが、昴はそもそも魔法世界で亜人や獣人と言う存在を目にし、友人兼パートナーとして黒竜・ノワールがいるのだ。角や羽が有る程度で、恐れたりする訳がない。

「行きなさい、援護はしてあげるから。スバルもネギも、それでいいわよね!？」

「は、ハイッ!」

「成る程確かに、これなら救出に行くと言うのも頷けますね。分かりましたが、せめてあともう一人、大火力を持つ人が欲しいですね見たところ、少年は「雷の暴風」をあと一発撃てるかどうかと言った感じですし……」

救出役が刹那に決まり、詠春達がその援護に回ることで話は決まった。しかし現状は、ネギは魔力の問題から先程より威力が下回る「雷の暴風」を撃ててせいぜいあと一発、詠春に至っては体力がほぼ底をつき、雷鳴剣を撃てるかどうかと言ったところだ。昴はスクナの動きを封じる役に徹するつもりのもりようであり、アスナのハマノツルギは封印から呼び出されたスクナを返せるかどうか分からない。つまり、決定的に火力不足である。

ならば、私が全てを終わらせてやるう。

そんな現状に悩んでいると、どこからともなく声が聞こえた。全員の中の頭に響いたその声は、鈴を転がす様な澄んだ声音ではあったが、聞く者全てにどこまでも不遜な印象を抱かせる。そんな印象をこの場に居る皆に抱かせる者は、共通して知っている中でただ一人

だけ。

「こ、この声は……!?!」

「え、エヴァンジェリンさん!? でもどうして……」

「……………エヴァンジェリン、貴女、ずっと見ていましたね? 趣味が悪い……………」

念話で急に話しかけてきたエヴァンジェリンにネギ達は驚き、昴は溜息を吐いた。もし昴の言うようにずっと見ていたのだとしたら、本当に趣味が悪い。

「何、中々良い酒の肴にはなったぞ? 今回の助力はそれに対する褒美とでも思え」

クツクツと、そう笑いながら、彼女は昴の影からズルリと這い出る様に現れた。見た目が見目麗しい少女とは言え、その登場方法は少々不気味なモノが有る。暗い夜道でこんな登場をされたら、どれだけ肝が据わった人間でも悲鳴を上げて逃げ出すだろう。実に不気味である。

そして昴と話し合うエヴァンジェリンを、刹那は茫然と見ていた。しかしその視線に気付いたエヴァンジェリンが、実に悪い笑みを浮かべて言った。

「何だ桜咲刹那。近衛木乃香を助けに行くなら早くしろ、巻き込まれても私は知らんぞ」

「なっ! こ、このちゃん!」

そう言われ、刹那は翼を広げてまるで弾丸の様に空を飛ぶ。あの様子だと、おそらく20秒もしないうちに千草の元へと辿り着くだろう。そして昴も、真言を使ってスクナの動きを千草に気付かれな

よう一時的に封じ込めた。が、それを見ていたエヴァンジェリンが文句を言う。

「おい昴、貴様まさかそれで終わるつもりではないだろうな」

「どういふことですか？」

「あのデカブツの動きを止めるだけで終わるつもりかと聞いている」

そう言っただけで睨みつけてくるエヴァンジェリン。どうやら彼女は、昴が時間稼ぎだけで終わる事が気に入らないらしい。だが今回の昴の役目は刹那が木乃香を救出する為の時間を稼ぐ事。エヴァンジェリンの詠唱時間は、彼女の従者である茶々丸が稼いでくれるだろう。昴も手を貸すかもしれないが。

その事をエヴァンジェリンに言うと、彼女は昴をさらにきつく睨み言った。

「ふざけるなよ。先程の水の槍や水柱を見ていたが、貴様の本気はあんな物ではないだろう。あらゆる現象を引き起こすと言う貴様の力、その真を私に見せる」

「……………本気で言っているのですか？ それ」

エヴァンジェリンの言葉に、今までにない程冷たい声で昴は聞く。気のせいではなければ、彼の纏う空気も先程までの柔らかな物から硬く、冷たい物に変わっている。並の人間なら、怯えて逃げ出してしまふほどだ。

しかし彼女は並ではない。新旧両世界合わせ、多くの強者たちの中でなお最強の座に君臨する者の一人、「闇の福音」なのだ。怯えることなど無く、寧ろ昴を逆に睨みつける。

昴もじつと彼女を見るが、今回は彼に非があると見えよう。フェイトの様な最強クラスの敵も居たのだ。いくら出来る限り力を隠したいからと言って、それで木乃香を救い出せなかったり、甚大な被害

が出たりしたら意味がない。

「分かりました。ですが、何を見ても文句は言わないで下さいよ」
「それは物によるな」

何を言っても無駄と悟ったのだろう。諦めたように昴はそう言った。そして視線をスクナに戻せば、既に刹那は木乃香を救出し、いつの間にか来ていた茶々丸が結界弾を放ってスクナを拘束していた。

「マスター、この質量相手では十秒程度しか拘束できません。お急ぎを」

「それだけあれば十分だ。さあ昴、貴様もやれよ？ 本気で、だ」
「分かっていますよ。ですが、その前に……」
「拘束・強制転移・千草」

何を思ったか、昴はスクナの肩辺りに居た千草を強制的に詠春達の元へと転移させた。御丁寧に真言の拘束付きである。

それを見たエヴァンジェリンは疑問の眼差しを向けるが、巻き込まないためだと昴が言って視線を戻した。そして彼女は詠唱を始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 契約に従い我に従え、
氷の女王！ 来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが！！」

詠唱が始まると共に、彼女の体から膨大な魔力が湧き上がる。それは蒼白い輝きと共に全て氷の属性に染まり、発動対象であるスクナの周囲が音を立てて、かつ高速で凍りついて行く。

それを見て、昴に強制転移された千草は叫ぶ。

「な、何や！ 次から次へと何なんや！？ 何者やあんた！？」

「ふっ、私が誰か知りたいか女。ならば名乗ろう！ 我が名は吸血

鬼エヴァンジェリン！！「闇の福音」！！最強無敵の、悪の魔法使いだよ！！」

叫びながら放たれた千草の問いに、エヴァンジェリンは高笑いを上げながら名乗りを上げた。

「全てのものを、妙なる氷牢に閉じよ！！」「こおるせかい」！！」

エヴァンジェリンの詠唱が終わり、スクナは巨大な氷柱の中に完全に閉じ込められた。見ればスクナの周囲90〜100m程が完全に凍りついている。

「む？ 何やら前より効果範囲が広がっている気がするが……まあいいか。さあ、今度は貴様の番だぞ昂。その力、今ここで見せるがいい」

凍結した範囲を見て術者であるエヴァンジェリンが疑問の声を上げる。本来もう少し範囲は狭い筈だが、彼女の持つ氷のマナクリスタルによってかなりブーストされたようだ。しかし彼女はそれを些細な事と思っただのか、深く疑問に思わない事にしたようにし、彼女は昂に真言を使うように言う。どうやら彼女は昂の本気の真言を見たのが為に「おわるせかい」ではなく「こおるせかい」を選択したようだ。鬼である。

そして彼は、若干呆れた様な溜息を吐きながらもそれに応えた。

「『闇の内より生まれ出でし光は全てを齎す呼び水なり。始まりに吹きし風は其を含めし全てを薙ぎ、次いで生れし火は風を喰らいて轟々と燃え盛る』」

静かに、詠うように紡がれたそれは湖全体に響き渡り、直後、夜の

闇より尚暗い闇がスクナを氷柱ごと包み込んだ。そして閃光と共に爆発し、まず始めに風を生み出した。それは急速に吹き荒れ竜巻を生み、光爆によって砕けた氷柱をさらに細かく切り裂き砕き、次いで発生した炎はその竜巻によって消されず、逆にそれを喰らい尽くして勢いを強め、氷の欠片を一瞬で蒸散させる。

「『雷と共に降り注ぐ水はただひたすらに汝を撃ち据え、砕かれし大地は留めし全てを遙か底へと飲み込むだろう』」

昴の詠は未だ終わらず、巨大な雷と共に猛烈な勢いで雨が降り注いだ。それは岩や氷に当たると詠の通りにそれを粉碎し、次いで巨大な裂け目が湖に発生し、僅かに残っていた氷を残さず其処に引き摺り込んだ。

「『嗚呼されど其は終焉に非ず。時よ、緩やかに、されど確かに流れる汝よ。今一時だけその理を変えて、逆巻き全てを癒しておくれ。其を識る者は星より居らず、以て「万象統べる星源の創詠」を此処に紡がん』」

今までの自然現象の暴虐を全て消し去り、破壊された祭壇も、岩も、何もかもが元通りに戻ってようやく詠が終わった。しかし全てが元通りになった湖の中央には、氷漬けになった筈のスクナの姿は影も形も見当たらなかった。

43話・戦闘終了、そして帰還（前書き）

グダグダです。

43話：戦闘終了、そして帰還

歌が終わり、湖は静けさを取り戻した。先程の異常現象がまるで嘘だったかのように湖面は凪ぎ、草木は月光を浴びて淡く、幻想的な輝きを湛えて揺れていた。

先程の歌の一節の影響か、詠春とフェイトの戦いと昴の闇球のせいで半分以上が破壊されていた祭壇へと続く橋も、まるで作られたばかりの様に元通りに戻っていた。

そう、元通りになっていた。一つを除いて、全てが。

湖の中央、先程エヴァンジェリンの「こおるせかい」によって完全氷結されたスクナの姿は、その身を封じていた楔である大岩を除き、そこに存在していたと言う事が嘘であったかのように跡形も無く消え去っていた。氷結の名残である氷も、封印していたと言う証のしめ縄も、スクナの上半身が出ていた岩には残っていないかった。

静寂。ただそれだけが湖を包み込んでいた。

いつの間にか祭壇に続く橋の袂に移動していたらしい詠春達も、この世の終わりの如く荒れ狂った自然とその身を消し飛ばされたスクナに茫然としているらしく、声を出す気配すらない。見れば祭壇上空に浮かんでいたエヴァンジェリンも、いつもの余裕を浮かべた表情では泣く、やや強張った表情で祭壇に立つ昴を見ていた。あらゆる現象を引き起こすと聞いてはいたが、流石にあれほどの現象を引き起こすとは思っていなかったのかもしれない。傍に浮かぶ茶々丸も、僅かに目を見開いているように見える。

対する昴は、詠い終わった後もじっと祭壇に立ち、封印の大岩の方を向いていた。

詠い終わった余韻に浸っているのか、それとも何かを感じようとしているのか、詠春達から見れば背を向けているので分からないが、その目は閉じられている。

「な、なんや……今の……？」

震える声で、詠春に捕まっている千草がそう言った。それは小さな、呟くような声だったが、音も無く、静寂が支配している今の湖では普通に喋っている様にも聞こえた。側に居る詠春達にも良く聞こえた筈だが、しかし彼等は無言で祭壇に立つ昴を見ているだけだった。千草も縛られた状態で岩を、そして昴を交互に見るが、その目には怯えが　理解出来ない物に対する恐怖がありありと浮かんでいた。

（有り得へん……あんだだけの事引き起こしといて、気も魔力も一切使ってへんなんて……なんやねんそれ、有り得へんて……）

それなりにではあるが腕の立つ呪符使いである彼女は、先の現象がどう言った物かを僅かなりとも理解してしまったのだろう。たった今日の前で引き起こされた現象が、魔力も気も一切使っておらず、大気中のそれすら動いていない事を。

しかし、だからこそ彼女は理解出来ない。彼女の知る限り、術者と名のつく者はその全てが魔力、または気と言った特殊なエネルギーを消費し、術式を通して現実に超常の現象を　魔法や陰陽術と言った術を発動する存在である。それは術を使う者にとって、たとえそれが悪魔や天使と言った存在であろうとも変えようのない、覆す事が出来ない理と言ってもいい。

しかし祭壇で微動だにせず立っている男はそれを真つ向から否定する事をやってしまった。魔力も気も一切使わず、詠唱に似てこそい

るが何処かが決定的に違う歌を、世界全てに語りかける様に詠っただけで先程の自然の暴虐を引き起こした。さらに、これは気のせいかもしれないが、まるで自然そのものがあの男　　昂の詠に歓喜している様にも感じられた。昂と呼ばれたあの男に求められる事が、この上なく嬉しいと言つように感じられたのだ。

そんな有り得ない筈の事を目の前で見せつけられた千草は、怯えを主とした様々な感情を含んだ視線を昂に向けて固定した。視線を向けられた昂は、変わらずに背を向けて佇んでいるだけで動くこともしない。

「これが貴様の本気か、凄まじい物だな。話には聞いていたが、本当に魔力も何も使わず、自然現象そのものを引き起こして使役するとはな。流石の私も驚いたぞ」

ふわりと、浮いていたエヴァンジェリンが祭壇に、昂のすぐ近くに降り立ちそう言う。それに続いて茶々丸もブースターを噴かせながら降り立った。

しかしそれらの声、音を聞いても昂は一切反応せず、岩の方を向いていた。

「おい、黙ってないで何か返したらどうだ」

黙って目を閉じている昂にそう言う。だが、昂はやはり反応しなかった。

流石に若干苛ついたのか、口調を強くして再び問おうとするが視線を逸らして橋の方を向く。見ると、アスナを先頭に湖に居た全員が走って来ていた。

「エヴァちゃん、スバル一体どうしたの？ さっきから動かないけ

ど……」

「知らん。反応も一切返さんし……失礼な男だ」

「怪我、と言う事はないでしょうね。服には傷一つ有りませんし、血も流れてませんし」

アスナの言葉にエヴァンジェリンはそう返す。確かに、いつもならすぐに返事を返してくるのが昴だ。礼儀を重んじる彼にしては珍しいと言うより、おかしく感じる。

「スバル？ どうしたの？」

一切反応を示さず、微動すらない昴に心配になったのか、アスナが声をかける。すると、エヴァンジェリンの声には反応しなかった昴がピクリと動き、反応を示した。エヴァンジェリンの声には反応せず、アスナの声には反応するとは、失礼な男である。

それに対してエヴァンジェリンは文句を言おうとするが、振り向いた昴に違和感を感じ口を閉じた。それは声をかけたアスナも、それを見ていた詠春達も同じ様で、こちらを向いた昴を心配そうに見ている。

振り向いた昴は変わらずに目を閉じて佇んでいるが、現在身に纏っている雰囲気はいつものように優しげな、皆を見守るお父さんと言う様なものではない。酷く曖昧で、しかし何処か超然とした空気を発している。

そして彼は、閉じていた目を開いた。

「っ！？」

開かれた眼を見た全員が思わず息をのむ。それは普段の彼の紅い眼とは違い、夕暮れの太陽の様に朱く、煉獄の焰の様に赫く、最上級の紅玉の様に紅く、この世の全ての赤を凝縮し、結晶としたように

美しい　　しかし何処か、ガラス玉の様に虚ろな深紅だった。
いつもは温かな光を宿し、皆を見守るお父さんと言う様な雰囲気を出しているその目は現在、温かい光も冷たい光も宿さず、真実ガラス玉と言っていていい程に虚ろで、目の前に立つアスナ達を見つめている。

「ス……スバル……？」

「……………」

普段の昴とはかけ離れた、異常な雰囲気に怯えたアスナが声を震わせながら心配そうに問いかける。いつもなら微笑みを浮かべて「何ですか？」と聞いて来るだろう昴はしかし、何も返さず、虚ろな紅い目で自分の名を呼んだアスナを見た。

その目は不気味に輝きながらも何処までも虚ろで……………まるで、底の知れない闇を見ている気分になった。

「障壁突破・石の槍」

そんな昴からアスナが僅かに後ずさった直後、昴の背後から声が聞こえた。見れば昴の背後に、水の槍等をこれ以上ないと言うほどに撃ち込まれ、死んだと思っていたフェイトが傷一つない状態で現れていた。傷の無い原理は分からないが、どうやら水を使った転移で昴の背後に現れたらしい。

皆が驚きで動けない中、彼は昴に対して、障壁を貫通する効果を持たせた石の槍を放った。それは障壁などを展開していない昴の体を容易く貫き、百舌鳥の早贄の様に串刺しにした。

「スバル!？」

「昴さん!!」

「さっきはよくもやってくれたね、「黒竜騎」緋乃宮昴。これで一

応、借りは返させてもらっただよ」

抵抗らしい抵抗も一切せず腹部を貫かれた昴に対し、相変わらずの無表情と抑揚のない声でフェイトはそう言った。昴を貫いている槍はかなり太く、内臓や骨を確実に傷付けている。どう見ても致命傷である。このまま放っておけば、遠からず内に確実に死が訪れるであろう。

普通なら。

「『風は汝を切り刻むだろう』」

「何？」

槍に貫かれたまま、ぼんやりとした顔で昴は言葉を紡いだ。そして言葉通り風が吹き、それは彼の体を貫く槍と、術者であるフェイトをこれでもかと言うぐらいに切り刻んだが、どうもこのフェイトは水を使った分身だったらしい。刻まれている途中でパシヤリと弾けて消え失せた。

そして彼は、自分を貫く槍の残りを引き抜き、放り捨てた。途端、抑えが無くなった血管から血液が大量に吹き出した。それを見た木乃香達が悲鳴を上げる。

しかし昴はそれを見ながら、再度真言を紡いだ。

「『傷も、痛みも、苦しみも、全ては時の彼方に消え逝く』」

そう言った瞬間、昴の腹に開いた大穴が、そこから噴き出していた血液が、まるで最初から存在していなかったかのように忽然と消え失せた。

「なっ……」

成る程。君は召喚師か、それに類する術師かと思っていたけど、どうも違うみたいだね。

消えた傷にアスナと詠春、エヴァンジェリンを除いた全員が驚いていると、何処からともなくフェイトの声が聞こえた。

その声を聞き、アスナと刹那、詠春が身構える。エヴァンジェリンも、腕を組んでいるが隙が見当たらない所から警戒しているようだ。

流石に英雄二人と吸血鬼の真祖が相手では分が悪い。今回は引かせてもらおうとしよう。

その声が聞こえた後、フェイトの気配は完全に消え失せた。おそらく本体は転移で何処かに逃げたのだろう。

一先ずの危機が去り、安堵の溜息を詠春達が吐いていると急に昴が崩折れた。

「スバル!？」

突然の事に驚いたアスナがすぐに駆け寄り、倒れようとするその体を抱き留める。すぐに詠春達も駆け寄り、昴に声をかける。

「スバル、スバル!!」

「おい、大丈夫か!？」

「昴さん、しっかりしてください!!」

「……うつつ、頭に響きます……一体何ですか、大声で……?」

痛む頭に手を当てながら昴は顔を上げてそんな事を言った。その目の色は普段の明るい紅ではなく、先程と同じ様に何処までも深い深紅だが、さつきと違って虚ろではなく温かな光を宿している。……顔は頭痛で若干曇められているが。

「スバル、いつものスバルだね?」

「質問の意図が良く分かりませんが、私はいつも私ですけれど？」

「良かった……いつものスバルだよ……」

「お、おおう？ どうしたんですかアスナちゃん？」

抱きつき、服に顔を埋めて嗚咽を漏らすアスナに昴は困惑する。しかしすぐに彼女の髪に手を当てて、あやす様に撫で始めた。

「私に何が有ったかは知りませんが、大丈夫ですよ。ですから、泣きやんでください」

「うくつ、ふ、ううう……」

「むう、困りましたねえ。子供や女性の泣き声や泣き顔は苦手なのですが……」

服に顔を押し付けて泣くアスナに困った様な笑顔を向けながら、昴は彼女が泣きやむように髪を撫でてあやし続けた。

「昴、傷は大丈夫なのか？」

「傷？ 私怪我なんてしていませんが……そう言えば、頭がボーっとしますね……何故でしょう？」

「覚えていないのか？」

「何をです？」

詠春の言葉に、昴はアスナの頭を撫でながら心底不思議そうに首を傾げた。どうやら「万象統べる星源の創詠」を詠ってからフェイトに腹を貫かれるまで 虚ろな目でいた状態の記憶が欠落しているらしい。何故だろうか？

疑問に思いながらも詠春は、昴が詠い終わった後、虚ろな目で自分達を見た事とフェイトに腹部を穿たれた事を説明した。

「成る程、頭がボーっとするのは槍で貫かれて血が足りなくなっ

せいですか」

「だ、大丈夫なんですか？」

既に消えているが、先程嘔き出した血を見て顔を青くしているネギが心配そうに昴に聞き、木乃香も涙目で見ている。いつの間に合流していたのか、後ろには夕映達や小太郎が居る。

「ええ、一応大丈夫ですよ。血が足りないせいで若干寒くてふらふらしますが……まあ、それはどうとでもなりますし……っと」

「無理をして立とうとするな。倒れるぞ」

泣きやんだアスナを離して、大丈夫だとアピールする為に昴は立とうとするがふらつき、すぐに倒れそうになった。再びアスナが支えようとするが今度は詠春が支え、注意する。

「とにかく、もう終わったんだ。本山に戻るぞ。朝になったら応援部隊が封印などもしてくるだろう……スクナが完全消滅していないければ、だが」

「見えないかもしれませんが、核は残っている筈ですから完全消滅はしていないと思います。位はそれほど高くないとは言え、スクナも神の支柱ですから……自然に再生するには数百年の時が必要でしょうけど」

「あれを見たら完全消滅しているんじゃないかと思うのは無理からぬことだと思うが？」

「……あ、あはは」

「笑って誤魔化すな」

詠春の言葉に対して、彼の肩を借りながら立つ昴はそう言うが、エヴァンジェリンに突っ込まれた。塵一つ残さずに消えたのだ、完全に消滅してしまっていると思っても可笑しくは無いのだろう。昴は

思わず苦笑した。

そして彼等は、首謀者である千草と彼女に協力していた小太郎を連れて本山に帰還し、昂は割り当てられた部屋で死んだように眠りに着いた。

右手人差し指に嵌めた指輪が、ぼんやりと光っている事に気が付かずに。

43話・戦闘終了、そして帰還（後書き）

真言による魂の浸食率：76%

44話：隠れ家へ

青空の下、川の側で一人の少女が一振りの剣を手に佇んでいた。陽光に照らされ黄金に輝く白い剣とプラチナブロードの髪が美しいが、その目は固く閉じられている。何やら集中しているようだ。少し離れた場所では黒い服を纏った銀髪の男が腕を組み、その肩に栗鼠の様な小動物を乗せてその様子をじっと見守っている。釣りでもしていたのだろうか、傍には釣竿が立ち、その下に置いている籠には魚が数匹ほど入っている。

『むむむ……火よ、灯れ！（ボンッ！）わきゃうっ！？』
『やれやれ、火を灯さずに爆発を起こしてどうする。もう一度だ』
『うう……火よ、灯れっ！（キュボンッ！）うきゃあっ！？』
にゃああ、煙が目！ 痛いです！！』

爆発で発生した煙が目に入ったか、涙目で悲鳴を上げる少女に呆れた様な、しかし微笑ましげな口調で男の声がかけられる。

『ああもう。ほら、こつちを向きなさい、まったく……』
『難しいです、お師匠様あ……』
『イメージを纏めて、それに必要最低限の魔力を籠めて言を紡げばいいだけだろうに。三日前に同じ言で大樹程の太さの火柱を発生させたのに比べれば格段に良くなったが、それでも魔力を過剰に籠め過ぎだ。まったく、中位より上の魔法は並以上の精度や威力で発動するのに、何故それより下位の基礎魔法はここまで粗いのか。普通逆であるのに』
『えう……それは言わないで下さいよ……』

男の言葉に、煤で汚れた顔を拭われながら泣き言を言う少女。する

と男の肩に乗っていた栗鼠が、腕を伝って少女の肩に移り、彼女の頬を舐めた。

『うう、慰めてくれるんだね。ありがとう』

『キユウ』

『とりあえず、休憩にするか。既に始めてから随分と経っているし、集中も切れて来ている筈だ。疲れて腹も減ったろう』

『だ、大丈夫です！ まだやれ（キユウウウ）……あう……』

少女はまだ出来ると言おうとしたようだが、可愛らしくなった音が空腹を訴えてくる。顔を真っ赤に染めて師匠と呼ばれた銀髪の男の方を見ると、楽しげにクツクツと笑いながら食事の準備をしていた。それを見て、少女の顔が羞恥でさらに赤く染まる。

『わ、笑わないで下さい！』

『いや何、健康な証だ。恥ずかしがる事などあるまい？』

アイデルスカット
火よ灯れ』

顔を真っ赤に染めて少女は文句を言うが、まるで恐くなく寧ろ微笑まじさが先に立つ。それを見てさらに笑みを深くしながら、男は言を紡いで薪に火を起こし、その上に鍋を置いた。鍋には水が張っており、その中にトウモロコシ何かを砕いて入れているのだろう、甘い匂いが漂う。さらに釣った魚を串に刺し、塩を一つまみ振って火の回りに立てた。

『……お師匠様はずるいです。魔法は魔力を籠めて言葉を紡がなきや発動しないのに、お師匠様は言を紡ぐだけで思った事を何でも引き起こせて……』

『魔法は言に魔力を籠め、詠唱と言う引き金を以て世界に働きかけるが真言はその必要がない。世界の根源、理そのものと繋がっている様な物だからな。だが、どちらもきちん発動するには明確なイ

メージを纏める必要がある』

文句を言う少女に男は何処から取り出したのか、大きなパンを切り分けながら言う。少女は気にしていないようだが、本当に何処から取り出したのだろうか？

『魔法も真言も、イメージが纏まっていなければ単なる言葉の羅列に過ぎん。まあ、いかにイメージを纏めても魔力を籠め過ぎてそれを台無しにしてしまえば意味は無いがな』

『うぐつ……だ、だったら真言を教えてください！ イメージはちゃんと出来てるんですから』たわけ（パシンツ）『みゅっ！？』

『真言は世界の在り方、理を自分で理解せねば使えぬわ馬鹿弟子。それに、お前は身の内に宿る魔力を制御しきれていないだろう。そんなお前が魔法を放って真言を使おうなど、片腹痛いわ。まず効率の良い魔力の運用方法を身につける』

『うう〜……』

いつの間にか持っていたハリセンで軽く頭をはたかれ、少女は頭を押さえた。そして涙目で、恨めしげに男を見ると先程までパンを切り分けていたナイフは何処にも見えなかった。

『それに、ある意味でこれは魔法よりも遙かに危険で厄介な物だ』

『？ どうしてですか？』

『確かに詠唱も何もなしにイメージ通りの現象を引き起こせるこれは便利に見えるだろう。その気になれば、時間すら思う通りにできるからな。だが、真言とは、理そのものと繋がっている様な物だと先程言った事は覚えているな？』

『はい』

師の問いに、切り分けられたパンとカップに入れられたトウモロコ

シのスープを受け取りながら少女は答えた。それを聞いて頷きながら、男は続ける。

『世界の理と繋がっていると云う事は、森羅万象全てと繋がっているも同じ事。世界の力は絶大極まる。私を含めた真言の詠い手・紡ぎ手と呼ばれる者はそれを以て理に寄り添い、その力を引き出せる最も理に近き存在だが、それでも一個の命だ。世界と云う絶大な力の塊に、人と言う矮小な存在が耐えられると思うか？』

『……いえ』

『何を思つて真言を得たいと云うのかは分からんが、まだ若いお前がそんな力を得ようと思わないことだ。まあ、そんな気持ちを持っている限り、真言は使えぬがな。それに……』

『？』

『たとえ詠い手であろうと、余程に受け入れる事に特化した存在か世界の理に愛された者でない限り、使い過ぎれば世界』

何故か、その言葉に続く筈の言葉だけが聞こえなかった。

木乃香誘拐事件より一晩が過ぎ、疲労と貧血によって深い眠りに着いていた昴は午前6時に目を覚ました。

「ぐっ……っ」

目を覚まし、体を起こそうとしてしかしできず、横になったまま頭を押さえる。流石に一晚で失った血液は戻らなかったのだろう。さらに普段4時に起きている為、寝過ぎによる頭痛も来たようだ。…
…2時間ほど長く寝て頭痛と言つのもどうなのだろうか。

「久しぶりに夢を見た気がしましたが……何故でしょうか、よく思い出せません……む？」

頭痛で僅かに痛み、さらに貧血でぼんやりとする頭で夢の内容を思い出そうとしつつ、身を起こそうとするがふと自分の体がいつもより重く、動かし辛い事に気付く。

昨夜大量の血を失って貧血気味の為、体が重く感じるのだろうかと言うのは分かるが、それとは別の重さも有るのだ。何かこう、体に何かに乗っていると言うか、ひつついて動きを阻害していると言うか……。

疑問に思った彼は左手で布団を捲ってみて、そして……ビシリと音を立てて硬直した。

「ん……」

「……は？」

長い沈黙を経てようやく一言発した昴。

布団を捲って現れたのは、長く、夕焼けの様に明るい橙色の髪を持つ、昴が娘として溺愛している少女……アスナだった。昴にひつついて安心しきっているのか、その寝顔は穏やかで幼子の様にあどけなく、スヤスヤと寝息を立てて眠っている。

何故彼女が昴の布団に潜り込んで寝ているかと言うと、昨晚変質した雰囲気を持ち、さらにすぐに癒したとは言え腹部を巨大な石の槍

に貰かれた昴を心配したが故である。本山に帰還した当初こそ別の部屋で横になつていた彼女だが、心配の余りわざわざ起きて昴の部屋に行き、寝ている彼がちゃんと息をしている事を確認してから潜り込んだのだ。

(何故どうして何でアスナちゃんが私の布団に一体何時入り込んで寝る前は確か居なかつた筈で本山に戻つてそれぞれ別れて別の部屋に行った筈一夜の過ちいえそんな事は娘に手を出す訳がしかし同禽していると言う事はつまりまさかそんな有り得ない事は有り得ないとは言えしかしアスナちゃんは義理とは言え娘で手を出す等と言う事はすなわち……………!?)

しかし死んだように眠っていた為近付く気配を感じ取れず、朝目が覚めたら家族とは言え女性に布団に潜り込まれていた昴は絶賛混乱中である。混乱しすぎて、もはや何を考えているのか自分でもよく分からないほどだ。おそらく彼の脳内では現在、大根を持った変な存在が踊り狂っている事だろう。大混乱である。

「んう……………」

「なっ……………!?!」

きゅむ、と未だに眠っているアスナが昴に抱きついて来る。昔は彼女が寂しかったり何だりでいつの間にか潜り込んでいると言う事は割と頻繁に有つたのだが、それは彼女がまだ小さかつた頃の話。数年前に詠春を尋ねて本山に来てからは木乃香達と寝る事も有つた為その頻度は徐々に減つて行き、麻帆良学園に行く頃には昴の布団に潜り込む事は極めて稀になり、中学に進学してからは寮での生活も有つて一人で寝るようになっていた。

その彼女がどういふ訳か現在、昴の布団に潜り込んでいる。穏やか

な表情で目を閉じて寝息を立てている姿はまさに眠れる美少女と言
う表現が正しく当て嵌まり、何処か神聖な雰囲気を持っている様
にも感じられる。もしここに他に男が居れば、結果的に一緒に横にな
っている昴に凄まじい嫉妬の視線を送るかそのポジションを奪おう
とするだろう。

しかし、そんな男から見たら羨ましい事この上ない状況に在る昴が
思っている事は単純に「何故」の一言だった。

（まさか私は眠る部屋を間違えいえしかし気配を探ってもこの部屋
には私の他にはアスナちゃんしか居ませんし私の荷物も置いてあり
ますしって待つて待つて下さいアスナちゃんそんなに強く抱き着か
ないで下さい当たってます当たってますからこう言うのは将来共に
暮らす伴侶にのみするべきで仮にも父親である私にやるべきでは娘
はやらんいやしかしそれはやはりアスナちゃんの意志が大事になっ
てくる訳で私がそれを否定する事はしかしだからと言って……………）
何とか残っている冷静な部分でこうなつた原因を分析・把握し、ど
うにかしてこの状況を脱出しようとする。しかし、より強くアスナ
が抱き着き自分の体を押し付けてさらに頬を擦り寄せてくる為残っ
ていた冷静な部分もどんどん削られ混乱していく。

彼女の体は日々の稽古によって鍛えられ、引き締まった細身ではあ
るが決して筋肉質では無く、女性としての柔らかさを失っておらず、
寧ろ鍛えられる事で力モシカのように柔らかさの中にも強靭さを併せ
持つしなやかな筋肉と肢体を形成している。さらに出る所は出て引
つ込む所は引つ込んでいる理想的なモデル体型である。つまり何が
言いたいかと言うと……まあ、言わずともお分かりだろうが、抱き
着いている為に色々と昴の体に当たっているのである。

柔らかな感触が寝間着越しに肌に伝わり、女性特有の甘い匂いと石

酸か何かなのだろう、林檎の爽やかかつ甘酸っぱい香りが鼻腔を擦る。他にも種類はあるが、彼女は何故か林檎の香りのそれを愛用している。

並の男なら喜び興奮のあまり鼻血を流すか、襲いかかるか、緊張のあまり顔を赤くし硬直するかのその状況に在ってしかし、昴は混乱と貧血による倦怠感、そしてアスナの抱擁（と言う名の抱き着き）によって緊張による硬直とは別の理由で動けない。

（待て落ち着け冷静になりなさい私。夢かと思いましたが光の眩しさと体を感じる気温その他倦怠感等から考えてこれは現実の様です。いつそ夢ならどれだけ良いかと考えてしまいました。がそれは今は置いておきましょう。目覚めたらアスナちゃんが横で寝ていて心臓が止まるかと思うくらい驚きましたが………待ちなさい、これはひよつとしなくても大変危険な状態なのでは？）

未だにアスナの甘い香りや柔らかな感触を感じるが、強制的に意識から除外し何とか冷静さを取り戻した昴は即座に現状を分析し、その危険度を確認した。

現状：女性と同じ布団で寝ている（相手は中学生、義理とは言え娘であるが若干なれど衣服の乱れ有り）。

危険性：誰かにこの状態を見られ、勘違いされる（木乃香や刹那、近衛夫婦や呪術協会の良識者ならまだいいだろうが早乙女や朝倉の場合、まず間違いなく歪曲して捕えるだろう。朝倉は問題児達の中では比較的良識を弁えている為大丈夫かもしれないが、早乙女の場合間違いなく歪曲する。たとえせずつもそう言う漫画等のネタにする可能性大いに有り）。

何とかなるパターン：アスナはかなりのファザコンかつ甘えん坊であると認識される、若しくは自分がアスナに対してかなりの愛情を持っていると思われる（恋愛ではなく親愛）。

最悪のパターン：早乙女や朝倉によって「親子の禁断の関係」として3 A中に流布される（その場合、確実に学園都市中にその情報が広まる）。

結果：娘に手を出した父と言う汚名と犯罪者を見る様な眼差し＋警察のお世話になる可能性（大）。

「……………っ！！！」

最悪の可能性に思い至り、思わず冷や汗を流し身震いする昴。彼自身は早乙女達とはあまり話した事がない為、彼女等の性格がどのよくなものは知らないが、アスナや木乃香、刹那達から得た情報でそう言う人間だと考えていた。

そして彼は最悪の未来を回避するため、動き辛い体に鞭打ってアスナを起こそうとする。

「アスナちゃん、起きてくださいアスナちゃん。もう朝です、起きて旅館に戻らないとまずいでしょう？」

「んん……やあ……！」

「ちよっ、より強く抱き着くって何故ですか！？ それに何か幼児退行してませんかアスナちゃん！？」

しかしアスナは起きようとするどころか、逆により強く昴に抱き着く。何やら言葉が幼児退行している気がするがそれは置いておこう。絶対に離さないと言わんばかりにギョツと昴の服を掴み、抱き着くアスナを誰かが見に来る前に何とか起こそうとする。しかし声を掛けても少し強めに揺すっても彼女は起きようとせず、余計に強く抱き着いて離れようとしない。本当に寝ているのかこの少女は？

「子供に戻ってないで、起きてくださいアスナちゃん！ いえ、私にとっては娘ですけれど！」

「んん〜！」

「貴女本当に寝てるんですか!？」

思わず疑問を口にするが、それでもアスナは昴から離れようとしな
い。

ちなみにその後20分、声を掛けたり揺すったりを続けてようやく
アスナは起きたとか。幸いにして誰も見に来ず、聞こえてもいなか
ったみたいだがアスナが逃げる様に部屋を出る際、彼女の顔が羞恥
やその他の感情によって林檎以上に赤く染まっていたのは言うまで
も無い。

そしてアスナが部屋を出てから昴は着替え、いつもと同じ様な、ま
るで喪服の様に黒い服に身を包んだ。黒以外に持っていないのかこ
の男は。黒に何か拘りでもあるのだろうか? まあ、それは置いて
おくとして、着替えた昴は暫く時間を置いて、まだ若干ふらつく体
で部屋を出て詠春達が居るだろう場所に向かい、少し進んだ所でエ
ヴァンジェリン主従と話している近衛夫妻を見つけた。感じる気配
の残滓から、既にアスナ達は旅館へ戻ったようだ。……何故か、エ
ヴァンジェリンは残っているが。

「お早うございます詠春、近衛さん、エヴァンジェリン、茶々丸さ
ん」

「ああ、お早う…って昴! もう起きて大丈夫なのか!？」

「昨晚血を大量に流されたのでしょうか? もう少し横になっていた
方が……」

「いえ、大丈夫です。それに、ちょっともう眠れるとは思えないの
で……」

「? 何かあったのか?」

「いえ、何でも有りません。気にしないでください」

エヴァンジェリンの問いに、昴は顔を僅かに逸らしながらそう返した。普段の昴ならあまりしないその動きに疑問とほんの僅かな興味を持ったエヴァンジェリンは逸らした昴の顔を見る。その顔は、普段よりもやや赤く感じられた。

それを見た彼女は僅かだがイヤらしい感じの笑みを浮かべ、己が従者に命じた。

「ふん？ 茶々丸」

「（ピピッ）僅かですが体温と血圧の上昇、動悸の早まりを確認しました」

「ちよっ、触つてもいないのに何で分かるんです！？ 何ですかその機能!?!」

「昴、その反応では何かあったと言っている様な物だぞ？」

「はっ!?!」

普段冷静な昴らしくない失敗である。どうやら、まだ若干だが混乱しているようだ。

それを見てエヴァンジェリンはさらに笑みを深くし、ニヤニヤと昴を見る。実にイヤらしい笑顔である。

それを見て昴は咳払いして別の話題に変えようとする。しかしその顔は先程のアスナほどではないにしろ、分かりやすいくらいに赤くなっていた。

「んんっ！ そ、それよりも、天ヶ崎さん達はどうなったのですか？ 昨晩はすぐに寝てしまったので覚えていないのです」

「無理矢理切り替えたな、まあいいが。彼女と小太郎君は今、術封じの牢に入れられている。追って罰も伝えられる予定だ。まあ、小太郎君はまだ子供だから嚴重注意の上、暫く術を使えなくなるくらいで収まるだろうが……千草君は、どんなに軽くても最低数年は外に出る事は出来ないだろう」

「そうですか……」
「死者こそ出ていないとは言え、彼女は少々やり過ぎた。木乃香の力を使ったとは言え、スクナの封印を解くとは……ああ、封印は既に掛け直しているぞ」

それを聞いて、昴は何故か一瞬だけ顔を曇らせた。しかしすぐに戻し、詠春の話聞く。それに気付いた者は一人も居なかった。エヴアンジェリンも欄干に腰かけ、いつの間にか茶々丸に淹れさせていたお茶を飲んでまったりとしている。ちなみに使っている茶葉は前日昴がガイドとして引き摺られて行った時に買わされた最高級の物だ。買った、ではなく買わされた、である。

「まあ、それは良いでしょう」

「何がだ？」

「こちらの話です。天ヶ崎さん達の処遇は分かりました。あと一つ聞きたいのですが、アスナちゃん達は何処に？」

「ああ、彼女達なら旅館に戻ったぞ。どうも式神が暴走したみたいでな、まずい事になっているらしい」

「……具体的には、どのような？」

「分からん」

式神を用意したのは詠春自身だろうに、使えない男である。

「なーアスナー？ これで4度目やけど、なんでまだ顔が赤いん？ 風邪でも引いたん？」

「だ、大丈夫、いたって健康だから」

「朝からずっと赤いですからね……何かありましたか？」

「な、何も無い！ 何も無いわよ!?!」

本山から旅館に戻り、着替えたアスナ達は詠春との待ち合わせ場所に来ていた。昴としていた添い寝の為かその顔は未だに赤く、時折聞かれる理由を誤魔化しながら幼馴染3人で話をしながら詠春を待っていた。尤も、居るのは3人だけではなく、ネギとカモ、そして

「むむっ！ 匂う、匂うわ！ 甘酸っぱい「ラヴ臭」が!!！」

「何ですかそれは……！」

「ネギセンサー、大丈夫ですかー？」

「あ、はい、大丈夫です。のどかさんは？」

「私も大丈夫ですー！。気が付いたらいつの間にか終わってたのでー

……」

「にしても別荘かー。どんな場所か興味有るね」

昨晚石化されたその他大勢（一名ほど石化から逃れていたが）も一緒ではあるが。と言うか、「ラヴ臭」とは本当に一体何なのか、Gの触角を彷彿とさせる二本のアホ毛をみよんみよんと反応させている早乙女ハルナに小一時間問い詰めたい。と言うか、そんな得体の知れない物を感じ取るとは、本当に一般人なのだろうか？

「なーんか、アスナの方から匂う気がすんのよねー。あとのどかからも」

「ふえっ!？」

「そんな匂いする訳ないでしょ。鼻可笑しいんじゃないの？」

「まったく、アホですね……！」

和気藹々と話していると、詠春と昴、エヴァンジェリン、頭にチャチャゼ口に乗せた茶々丸が現れた。

「はは、賑やかですね。皆さん十分に休めましたか？」

「どもー、長さん」

「昨日はありがとうございませう」

昨晩色々有ったと言うのに元気いっぱいである。まあ、石化して居た面々は動けなかったのだから体力の消費も殆どないのだろう。

「あの、長さん。父さんの別荘は……」

「そうでしたね、こちらです」

ネギの言葉に詠春は着いて来てくださいと返し、歩き出した。それに従い、皆が後を追って歩き出す。

「あの、長さん。小太郎君は……」

「それほど重くはないでしょうが、それなりの処罰は有ると思います。天ヶ崎千草も……まあ、私達に任せてください」

ネギの問いに、詠春はそう答える。千草の部分で言葉を濁したのは、まだ年若いネギに綺麗でいて欲しいと思っっているからだろうか？

「それより、問題はあの白髪のカギか……」

「現在、調査中です。ですがあの外見、背こそ低いですが昔私達が戦ったある敵に瓜二つです。昴の証言から彼が「フェイト・アーウエルンクス」と名乗っている事と、一ヶ月前にイスタンプールの魔法協会から研修として日本へ派遣された事が分かっていますが……おそらく偽称でしょう」

「ふん」

詠春の言葉に、エヴァンジェリンは面白くなさそうに鼻を鳴らす。ネギも若干纏う空気が暗くなった気がした。

そして暫く歩いた所で、植物に覆われた、天文台付きの建物が目の前に現れた。

「ここです。10年の間に草木に覆われてしまいました。中は綺麗な物ですよ。きちんと掃除はしていましたから」

「ここが……」

「へー、何か別荘って言うより、ちょっとした隠れ家みたいだね」

外観を見た全員が思い思いの感想を言い、中に入っていく。心なしエヴァンジェリンの顔も赤くなっているようだ。

「うわー……本がたくさん……」

「好感度UPです」

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています」

「ここに、父さんが……」

皆が入ったそこにはソファとテーブル、幾つかの椅子と天井まで届く巨大な本棚が設置されていた。本棚には多くの本が収納されており、独特の匂いが客人を出迎えた。図書館探検部の面々が感嘆の声を上げ、梯子を使って本を取り読み始めた。

「オイオイ、良いのかアレ？ 一応魔法に関係有る本なんだろう？」

「素人目には何の本か分からないでしょう。ですが、一応注意しておきますか。余り手荒に扱わないで下さいねー？」

『はいー！』

詠春の言葉に、本を読んでいた面々が元気よく返事をする。それに笑みを浮かべながらネギを見ると、彼も幾つか本を手に取り読み耽っていた。エヴァンジェリンも、テーブルや置いてあるカップ等を手に取り部屋を歩き回っている。

「ここに来るのも、懐かしいですね……」

そう言つて昴も、本を一冊手に取り読み始める。ギリシア語で書かれた書物だが、かつて真言によつて言葉の意味や在り方を文字通り魂に刻み込まれたおかげで、世界中のほとんどの書物を問題なく読む事が出来る。

そして暫く椅子に座つて読んでいると、詠春から声がかかった。

「このか、刹那君こつちへ……アスナ君と昴も、本を読んでないで来てください」

「む、何ですか。今いい所なのですが……」

文句を言いながらも昴は本を閉じ、しまつてから詠春の元に向かう。既にそこにはネギを筆頭に木乃香、刹那、アスナ、エヴァンジェリン、茶々丸が居た。アスナを除いた全員が机に群がり、何かを見ているようだ。その様子をアスナは苦笑しながら見ている。

「この写真はサウザンドマスターの戦友達の写真です」

「戦友？」

「ええ、20年前の……黒い服を着ているのが私で、蒼い外套を纏つているのが昴です」

皆が見ていたのはかつて全員が揃つていた時に撮つた写真らしい。やんちゃ坊主と言つた表情のナギを中央に、右側にゼクト、詠春、ガトウが、左側にアルと昴が、後ろに剣を肩にかついだラカンが映っている。

「ふわー、お父様若いなー。ネギ君も、将来はこうなるのかなー？」

「可能性は有りますねって、ん？ あれ？」

和気藹々と写真を見ていたが、刹那が突然眼を擦りじつと写真を見る。

「どうしたんせつちゃん？」

「いえ、その……昂さんの姿が、今とまったく変わっていない様に見えるのですが……」

「え？ ……あ、ホンマや」

刹那の言葉に木乃香も再度写真を見、納得の声を上げる。そう、彼の姿は瞳の色以外、20年前とほとんど変わっていないのだ。

「20年前から変わらない姿………あんた本当に44歳か？ つーか、人間か？」

「失礼なオコジョ君ですね、自分の年齢と種族で嘘を吐く必要が何処に在りますか。人間ですよ」

「いやだってよお、長命種でもないのに20年以上姿が変わらないつても有り得ないだろ。ホントは魔法薬とか使ってんじゃねえのか？ 若しくは吸血種とか」

「使っていないと奈良公園でも言ったでしょうに。それに吸血種になった覚えは有りません。こう言う体質だと思って納得してください」

疑うカモにそう言って返す。実際には軽く千年を超える寿命を得ているのだが、それを知る者は誰も居ない。

「昂から聞いているでしょうが、私達はかつての大戦で、まだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。そして20年前に平和が戻った時、数々の活躍から彼は英雄、「サウザンドマスター」と呼ばれていました」

「実際には英雄と呼ばれる以前からそう名乗っていたのですがね。覚えている魔法は片手の指で数えられるぐらいに少なかったのに、よく恥かし気も無く声を大にして「最強の魔法使い・サウザンドマスター」と言えたものだと思えましたね。まあ、最強の名に関しては、実際にそれだけの力量が有ったので何も言えませんでした」

詠春の説明にそう補足してから、昴はオスティアで初めてナギ達と出会った時の事を思い出し、苦笑する。詠春も思い出したのか、見れば懐かしそうな顔で笑みを浮かべている。

昴の言葉に、ネギも苦笑いしている。おそらく、以前覗き見たエヴァンジェリンの夢の内容を思い出しているのだろう。

「今回の事件の主犯、天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。彼女の西洋魔術師に対する恨みと今回の犯行も、それが原因でしょう」

「でもよ、それって大戦が原因で死んだって事だろ？ 八つ当たりじゃねーか」

「たとえそうだとしても、恨む以外なかったのでしょう。外見年齢から推測するに、彼女が両親を失ったのは十代前半か、それ以前ですから」

おそらく、まだ親に甘えたい盛りの方に両親が死んでしまったのだろう。その悲しみは計りしれず、壊れそうになった心を戦争と言う実体のない物ではなく、それを引き起こした魔法使いと言う存在を憎み、恨む事で守ったのだろう。戦争に関係のない魔法使い達にはたまったものではないが。

「しかし、彼は10年前に突然姿を消す……その足取りや、どうなつたかを知る者は居ません。公式の記録では1993年に死亡……それ以上の事は、私にも。すいません」

「い、いえ……ありがとうございます」

詠春の言葉に、ネギは礼を言う。しかし望んだ情報を得られなかったためか、その表情と空気は若干、暗い。

「行方は分かりませんが、彼の生死なら私が証明できますよ」

「え……」

「それは本当か昴!!」

しかしその空気を、昴の一言が砕いた。それにネギは反応するが、何故かエヴァンジェリンが予想以上の反応を見せた。

「で、でも、昴さん知らないって……」

「行方は、です。私は彼が死んでいるとは一言も言っていないですよ。と言うかエヴァンジェリン、貴女、彼の生存は知りませんでしたっけ?」

「聞いていない! ええい、さつさとその証拠を見せろ!!」

そうエヴァンジェリンに急かされた昴は若干溜息を吐きながらポーチに手を入れ、ゴソゴソと動かし一枚のカードを取り出した。

「あ、それ……」

「仮契約カードか!」

「ええ、これはナギとの契約で作られた仮契約カードです。少年も持っているでしょう?」

「はい。でも、それと何の関係が?」

「話は最後まで聞きなさい。契約のカードは、主従の生死によってその絵柄等が変化します。従者が死んだ場合にどういう変化が起こるかは私は分かりませんが、契約主が死んだ場合、従者のカードは従者の名前と姿を残し、他の絵柄は全て消え失せます。アーティフ

アクトもです」

それを説明しながら、昴はカードをネギ達に見せる。天矛沼の黒と白の飾り布が、昴を包むように螺旋を描いている。

「絵柄の消えたカードを、俗に「死んだカード」と言います。ですが、これはまだ絵柄が有ります。つまり……」

「生きている……やっぱり父さんは生きているんですね!？」

「はい、それだけは保証できます」

「ふ、ふふ……ふははははっ、殺しても死なんような奴だとは思っていたが、そうか……」

昴から得られた情報に二人は喜びを露わにする。ネギにとっては父の、エヴァンジェリンにとっては想い人の生存が確かな形で確認されたのだ。その喜びはひとしおだろう。それを見ながら詠春と昴は何かを話し合い、ネギに何かを渡した。

その後、朝倉の号令で皆で写真を撮り、京都をエヴァンジェリンに連れられて土産等を買って回った。

そして翌日、新幹線に乗って麻帆良学園に帰還した。

45話：大人気ない氷、頭を痛める言葉（前書き）

グダグダです。

ああ、文才が欲しい………

45話：大人気ない氷、頭を痛める言葉

波乱に満ちた修学旅行を終えて無事帰還した翌日の日曜日、昼時であり、本来多くの客が居る筈の喫茶ホテルブクロは珍しく閑散としていた……と言っても、誰一人として居ないと言う訳ではないのだが。

「あ~~~~、暇だ。凄まじく暇だ」

カウンター席の一角、ある意味指定席と言えなくもなっている席で、現在のその席の主　　エヴァンジェリンがともダルそうな声を上げ、カウンターにのびていた。近くの席には彼女の従者である茶々丸が座っている。少し前まで姉であるチャチャゼロも居たが、彼女はつい先ほど厨房に入って行った。おそらく、置いてある研ぎ澄まされた包丁類を見ているのだろう。微かにだが、ケケケと言う不気味な笑い声が厨房の方から聞こえて来る。どういう訳か、微妙に反響している様に感じる。

ダレているエヴァンジェリンの側には空になった幾つかのガラス容器と、彼女専用の白磁のティーカップが置かれている。どうやら、つい先ほどまでお茶の時間を楽しんでいたようだ。

その彼女は現在、テーブルにのびて口に啜えたスプーンを上下に揺すっている。実に行儀が悪い。

「暇で暇で仕方がない。何か面白い物は無いのか昂」

「どこの王様ですか貴女は。いきなり言われてもある訳がないでしょう。と言うか、行儀が悪いですよ、エヴァンジェリン。つい先日まで修学旅行で楽しんだでしょうに」

口に啜えた銀色に輝くスプーンをゆらゆらと揺らしながらぼやくエヴァンジェリンに、コーヒーを飲みながら本を読んでいた昴が呆れた様な口調でそう返した。

「それはそれ、これはこれだ。……………あゝ、暇だ」

「そんなに暇でしたら、詠春に頼まれた事を片づけてはどうですか？」

「ああ、近衛木乃香に魔法や呪術を教える事か。それは貴様も頼まれているだろうが、何故私だけがせねばならん」

そう言ってエヴァンジェリンはテーブルにのびたまま昴を睨みつける。が、体勢と座高の関係から上目遣いに見る様になったその表情はまるで恐くなく、寧ろ拗ねた少女の様で可愛らしい。

彼女が言う様に、京都から帰る折、彼等は詠春から、木乃香が望むなら彼女に魔法の事等を教えて欲しいと頼まれたのだ。

「確かに私も頼まれてはいますが、教えられる事などたかが知れていると言いますか、ほとんどありませんよ。何せ一般人の中でも極端に低い魔力量らしいですから魔法は使えませんし。ゼクトやアルのお墨付きですよ」

「……………なあ、言つてて哀しくならないか？」

「もう、慣れていきますから」

そう言って笑いながら遠くを見る昴に、思わず憐みの眼差しを送ってしまふエヴァンジェリン。

そう、彼の魔力は一般人の中でも実質最低クラス、魔法使いとしては事実上最弱である。魔法球の中、セフィローティア第11エリア・知識の大書庫に大量の呪文書や強力な魔導書、喪われたとされる秘伝書その他様々な書物（危険極まりない呪いの書も有る）を持ってこそいるが、あくまで、持っているだけで習得などはしていない。

偶に暇潰しで歴史書を読んだりする程度だ。

彼自身は「魔法の射手」を1矢形成しただけで魔力が枯渇し、倒れる程なのだ。咸卦法の維持限界時間3秒は伊達ではない。

唯一の慰めは気を用いた身体強化や瞬動、多少学んだ呪術等を使う事が出来るぐらいであろうか。尤も、その量すら一般人より多少多い程度で戦友　詠春やラカン、ガトウにははてんで届かないと言つて良く、呪術は本職である呪術師や呪符使いには遠く及ばないのだが。結局彼は真言使いであつて魔法使いや呪術師にはなれないと言つことが。

「……………すまん」

「別にいいですよ、謝らなくても。変えようのない事実なのですから。」と言つより、何故謝るのです」

いたたまれなくなつて思わず謝るエヴァンジェリンに昂はそう返し、回避能力は誰よりも上だと言つ。事実、彼に攻撃を当てる事が出来たのは現在、造物主とフェイトのたった二人だけであり、当たつた攻撃も、気を抜いたりした瞬間を狙つての後方からの不意打ちだ。それ以外の攻撃は尽く回避し、あるいは受け流していたのだ。はぐれ　タルの渾名はこの事からも来ている。京都に居た時に詠春との手合わせでいくらか攻撃が当たっているが、あの時は詠春の腕を戻す為だったのであえて本気の回避はせず、武器の打ち合い等をしたのだ。本気で回避に移っていたら、一太刀すら絶対に当たらなかつたと断言できる。

そんな事を思い出しながら昂は空になつているティーカップに紅茶を注ぎ、エヴァンジェリンに出す。彼女は湯気を立てるソレを暫くじつと見ていたが、体を起こしてカップを手に取り、琥珀色のお茶を口に含んだ。芳醇な香りが熱と共に体内に満ち、精神を解き解すのを感じる。

「これを飲むと、茶菓子が欲しくなるな」

「でしたら持って来ましようか。確か厨房の方に「昴さん、焼き加減はこのくらいで良いでしょうか？」」

エヴァンジェリンの言葉に、昴が立つて茶菓子を取りに行こうとした直後、厨房から頭にチャチャゼロを乗せたさよが小さめのバスケットを持って出て来た。どうやらクッキーを焼いていたらしい。焼きたてのクッキーの香ばしくも甘い匂いが室内に充満する。

「どれどれ……ふむ、ほんの僅かに焦げている様ですが、このくらいは許容範囲でしょう。一つ貰っても？」

「あ、はい。どうぞ」

「では、失礼して」

さよに了解を貰った昴は、差し出されたバスケットの中から一つ取って口に入れ、味見する。咀嚼すると同時に小麦とバターの香りと、砂糖の甘みが口内に広がり、自然と頬が緩む。

「うん、美味しいですよ。このまま売り物にしても良いくらいです」

「本当ですか!？」

「ヨカッタジャーナール」

「ほう？ では私も貰おうか」

昴の言葉にエヴァンジェリンもバスケットに手を伸ばし、数個取って一つを口に放る。焼いてそんなに経っていない為か少々熱いが、サクツとした歯応えと共に優しい甘さと香ばしい香りが口内に広がる。確かに美味しい。

「ふむ、確かに中々……この茶にも合うな」

そう言つてエヴァンジェリンは紅茶を口に含み、頬を緩ませる。それを穏やかな目で見ながら昴は柵からティーカップを一つ取り出し、紅茶を注いでさよに手渡した。彼女はそれをきよとんとした眼で見ていたが、すぐに顔に笑みを浮かべて昴に礼を言い、席に着いてエヴァンジェリン達と一緒にお茶を楽しみ始めた。茶菓子は先程彼女が焼いたばかりのクッキーだ。

チリンチリーン

すると暫くして、来客を告げるベルの涼やかな音色が店内に鳴り渡った。

「いらつしゃいませ……おや、これは珍しい客人ですね少年が私の店に来るとは」

店にやって来たのはネギとカモのコンビだった。エヴァンジェリンが入り浸っている為か、滅多に店に来ないネギの来訪に珍しい物を見た様な表情を向け、彼の表情を見て怪訝な顔をする。

ネギはとても真剣な目をしていて。何かを決意したその眼差しは、かつてのナギやアリカを彷彿とさせる。その眼差しに懐かしさと振り返られた苦労の日々を思い出しつつ、ほんのちよつとの妙な予感を心に抱きながら尋ねた。

「どうかしましたか？ その様な目をして」

「あ、あの……昴さんとエヴァンジェリンさんをお願いしたい事があるんですが」

「む？ 私にも？」

ネギの言葉に、興味無いとばかりにクッキーを頬張っていたエヴァ

ンジエリンが反応し、彼の方を向く。気になったのか、さよや茶々丸、チャチャゼロもネギの方を見た。その視線を受けながら膝を着き、ネギは言った。

「あの、僕をお二人の弟子にしてください!!」

「「は?」」

「僕は力が欲しいんです! 大切なものを守る為の力が!」

ネギの行動と言葉に、思わず二人は呆気にとられた。その言葉に、周囲の面々も呆気にとられた様に目を開く。

「あの、いきなりそんな事を言われましても……それよりも、膝をつかないで下さい。今は一般のお客は居ませんが、変な噂が流れてもしたら困ります」

「と言うか、私と昴の弟子ってアホか貴様。既に解けているとは言え、サウザンドマスターにはアホな呪いで封印された恨みもある。

それに、別々の人間に同時に弟子入りしたいとは、馬鹿か貴様は?

昴はどうか知らんが私に弟子を取るつもりなど無い。第一、戦い方ならタカミチにでも習えば良からう」

ネギの行動に僅かな間フリーズしていた昴だが、すぐに我に帰りネギに膝を着くのをやめて椅子に座る事を勧める。確かに現在店に居るのは魔法関係者のみだが、店の窓から多少ではあるが中を見る事が出来るのだ。もし見られて変な噂が立って客足が遠のいたら最悪である。

エヴァンジェリンも、「何を言っているのだコイツは」と言う目で見ながらそう言った。極めて面倒臭そうなその仕草と口調から、本気で弟子を取るつもりが無い様である。

「それを承知で今日は来ました。タカミチに教えて貰うって言う選

扱肢も有りましたが、海外に行ったりして学園に居ない事も多いですし、何より京都での戦いを見て、魔法使いの戦い方を学ぶならお二人以外に居ないと思いました！」

しかしネギは片膝を着いたままエヴァンジェリンと昴を見てそう言った。その言葉にエヴァンジェリンがピクリと反応する。どうやら多少なりとも心動かす何かがあったようで、それが琴線に触れたようだ。それを見て昴が苦笑する。

「そう言う事でしたら、私ではなくエヴァンジェリンに頼んでください。私では少年の望みに応える事は出来ませんから」

「なっ、オイ貴様！ 押し付ける気か!？」

「押し付けるなどと人聞きの悪い。私では魔法の事等は教える事が出来ないのですから、仕方ないでしょう？ 少年は「魔法使いとしての戦い方」を学びたいらしいですし」

「教える事が出来なくとも私を推すな！ と言うか、魔導書の一冊くらい持っているだろうが！」

昴の言葉にエヴァンジェリンが反応し文句を言うが、彼はいつもと同じ様に笑みを浮かべながらそう返した。それに対してもエヴァンジェリンが吠える。

しかしその言葉にネギとカモが疑問を持ち、訊ねた。

「なあ、魔法の事を教える事が出来ないってどういうこと？ アント、紅き翼の魔法使いなんだろう？」

疑問を含んだカモの言葉に、ネギも頷きながら昴を見る。それを視界に収めつつ、何処か納得した様な感じで昴は頷いた。

「厳密に言えば、私は魔法使いと言うクラスに当て嵌まりません。

何せ魔法を使えませんから」

「「は？」」

昴の言った予想外の一言に目を丸くして呆気にとられるネギとカモ。深刻そうな空気を欠片も出さず、寧ろ世間話でもするかのように軽い感じで言ったその言葉は、ネギの様子を見ながら茶を飲んでいたエヴァンジェリン達をも驚かせた。

「え……………ま、魔法が使えないってどういうことですか!？」

驚きのあまりか、叫ぶ様にネギが問う。いつの間にかテーブルの上に居て、ちゃっかりクツキーを取って齧っていたカモも食べるのを忘れ、あんどりと口を開けている。

「言葉通りの意味ですよ？ 私の魔力は一般人以下ですから。魔法の射手を形成しただけで枯渴しますし」

「一般人以下って、ウソだろ!？ 京都ん時にとんでもねえ魔法使ってたじゃねーか!！」

冷めてしまったコーヒを飲み若干顔を顰めながら言った昴にカモがそう言う。どうやらカモも魔法だと勘違いしているようだ。千草は魔力も気も使っていない事に気付いたと言うのに、意外と感知能力が低い様である。

昴が真言の事を公表せず、まほネットにも情報が存在しないので、そもそも普通的手段では情報を得ることすら出来ないのでは仕方ないと言える仕方がないのかも知れないが。

「あれは魔法ではありませんよ。万象に望む事をイメージし、普通に詠っただけです」

「いやいやいやいや、普通の詠であんな事出来る訳ねーだろ!？」

あれが魔法じゃないなら何だっただよ！　ってか、技名みたいな
の言っただだろ！？」

「永き時の流れの中で人が喪ってしまった物……………そうですね、
一種の失伝技法とでも思ってください。ざっと二千五百年近く喪わ
れていましたから。ちなみにあれは技の名前ではありません。歌の
名前です」

「にっ……………！？」

二千五百年と言う年月に絶句するネギ達。それほどの年月が経って
いて、人が喪った物だと言うなら確かに失伝と言ってもいいだろう。
しかしそれならあの強力さにも納得がいく。全てがと言う訳ではな
いが、古代魔法や固有技法、失伝技術と言った物は強力な物や特殊
な物が多い。その分習得や扱いが難しいのだが、習得出来れば切り
札として非常に頼りになる物でもあるのだ。

「先に言っておきますが、これは人に教えられて使えるようになる
物ではありませんので、期待するだけ無駄ですよ。そう言う事も含
めて別の人に弟子入りした方が良いでしょう？　私に魔法は一切使え
ませんし、気を使った呪術は少年の魔法体系には合わないでしょう
し」

「そんな……………」

昴の言葉にネギが暗くなる。どうやら昴にも弟子入りして真言を学
び、習得しようと思っていたようだ。真言を得るには教えられるの
ではなく、自分で世界の在り方等を理解しなければならぬので習
得は極めて困難である。そもそも、いかに天才とは言え20年も生
きていない少年が習得しようと言うのが無理な話である。一度死に、
神によって魂に真言の理を埋め込まれ生き返った昴の場合は例外中
の例外なのだ。

「え、エヴァンジェリンさん」

「昴がダメなら私にか。不戯けるなよ貴様。先程も言ったが私に弟子を取るつもりはないぞ。立派な魔法使いを目指すんだったら、正義バカ共にも教えて貰え。私は知らん」

そう言つて彼女は再び紅茶を飲み始めた。

「そんな、お願いです！ 弟子にしてください！」

しかしネギは諦めが悪かった。エヴァンジェリンの言葉に、土下座せんばかりの勢いで頼み込む。もし一般の客に見られたら店の評判が悪くなる可能性が有る。やめて欲しいと昴は想うが、見た感じでは梃子でも動きそうにない。迷惑千番極まりない。

チリンチリーン

そんなネギを見て困っていると、来客を告げるベルが鳴った。それに慌てて昴が椅子に座るように言おうとするが、それよりも早く人が入って来た。さよのブローチに付けられた黒紫のクリスタルと、エヴァンジェリンのペンダントに付けられた蒼白いクリスタルが、何かを迎え入れるかのように、共鳴するように一瞬煌いた。

「アスナ、何か鈴が光ったんやけど」

「鈴つて、スバルに貰ったこれ？」

「はい。一瞬ですが、キラッと」

入って来たのはアスナと刹那、そして木乃香の三人だった。その三人はエヴァンジェリンの前に膝を着いているネギを見るとどうしたのかと首を傾げた。

「アンタ、何やってんのネギ？ お店の邪魔になるじゃない」

「今は一般の客は居ないみたいですが、確かにそうですね。床に膝を着くのではなく椅子に座った方が良いかと思いますが」

「どないしたんや？ ネギ君」

頭に疑問符を浮かべながらネギに問うアスナと木乃香。そして刹那に促されてようやく立ち、席の一つに座って何をしていたかの説明を始めた。

それを耳に入れながら、昴はカウンターから出てドアに向かった。このままでは一般客も入って来かねない事に今更ながらに思い至り、とりあえず一時的に店を閉める事にしたのだ。開店以来、初めての事に思わず溜息が洩れる。この数年で一体どれほど溜息を吐いただろうか？ そんな事を考えながら、ドアに掛けられたプレートを「OPEN」から「CLOSE」に変え店内に戻った。

「どうしたの、スバル？」

「一時的にですが、店を閉めました。これで一応、一般客は来ないでしょう」

アスナの問いに昴はそう答えて深い溜息を吐いた。

「昴さん、溜息を一つ吐いたら幸せが三十は逃げると言いますよ」

「ゴキブリではないのですから……まあ、それが真実でしたら私の幸せは今ままで随分と逃げていますよね。軽く三桁は溜息を吐いていますから」

「あ、あはは……」

刹那の言葉にそう返した昴に、紅茶を飲み終えたさよが苦笑した。

「弟子、ねえ……エヴァちゃんは取るつもりはないんでしょう？」

「そう言ったんだがな、聞きやしない。それとエヴァちゃん言つな」

「ネギ、相手が嫌がつてるのに無理にお願いしたら駄目でしょ」

「アスナさん、でも……」

「無視か、オイ……いい度胸だな、緋乃宮アスナ」

アスナにスルーされてエヴァンジェリンは頬を引き攣らせた。そのアスナはネギに注意するが、彼はかなり渋ってじっとエヴァンジェリンと昴を交互に見ている。未だ諦められないようだ。そしてそれが余程に鬱陶しかったのだろう、昴は苦笑しながらアスナ達の分の紅茶を淹れていたが、エヴァンジェリンが吠えた。

「あー、鬱陶しい！ ぼーや、そんなに弟子になりたいんだったら次の土曜に私か昴の家に来い！ そこで弟子にしてもいいか、私達が直々にテストしてくれるわー！」

「ホントですか!？」

「ちょっとエヴァンジェリン、私は……」

「黙ってる昴！ ぼーや、言った通りテストはしてやる。だが一度だけ、その日だけだ。クリアできなければ諦めて他の魔法使いに弟子入りするのだな！ それが条件だ！」

エヴァンジェリンの言葉にネギは喜びを顔に浮かべるが、続く言葉でその顔を引き締めた。学園最強の一人に弟子入り出来るチャンスである為、どうしてもクリアしたいと思っているのだろう。

「分かりました。どんな内容でもクリアして見せます！」

「言っただな？ 後悔するなよ」

ネギの言葉に、薄い笑みを浮かべるエヴァンジェリン。実に悪そうな顔である。

その笑顔に不穏なものを感じたか、木乃香が聞いた。

「エヴァちゃん、テストって何するん？」

「貴様もか、近衛木乃香。エヴァちゃんと呼ぶなと言つに……テストの内容は秘密と言いたいところだが、何、簡単だ。昴に一撃当てるか、力を使わせれば良い」

「なっ！」

「ええっ!？」

彼女の口から出た試験の内容に、アスナと刹那が驚きを露わにする。茶々丸とチャチャゼロ、さよも、それは無理だろう、と言つ顔でエヴァンジェリンを見ていた。木乃香はよく分かっていないらしく首を傾げており、昴はとてつもなく深い溜息を吐いていた。きっと幸せが三百は逃がっている事だろう。

「エヴァンジェリン……」

「文句は聞かんぞ昴。貴様も弟子入りを望まれているのだ、関係無いとは言わせんぞ。別々にやっても手間がかかるのだ、貴様も判断したらいい」

「どう考えても無理でしょう。ネギ先生、悪い事は言いません。他の人に弟子入りした方が……」

「やります!！」

エヴァンジェリンの出した試験に呆れた様子の刹那が、ネギに別の人間に弟子入りした方が良いと言おうとしたが、彼は元気よく「やる」と言った。その目には分かりやすいぐらいに闘志が燃えていた。魔法が使えないのなら、一撃当てるぐらい楽なものとの心の何処かで思っているのだろう。それがどれだけ困難極まりないか知りもせず

に。
そしてネギはカモを肩に乗せて店を出て行った。その背中が何処か嬉しそうに見えたのは気のせいだと思いたい。

遠ざかっていく後ろ姿を見ながら、昴はドアに掛けているプレート
を再び「OPEN」に戻した。次の土曜に有るだろう事に、頭を痛
めながら。

46話・喫茶店の一幕（前書き）

今回、短いです。

46話：喫茶店的一幕

ネギが昴とエヴァンジェリンに弟子入りを志願し、エヴァンジェリンに試験を言い渡されてから数日が経った。

あれから彼は自分でも出来る魔法の訓練をし、さらに大勢の屈強な武道家達をたつた一人で倒して見せた古菲に中国拳法を習い、体も鍛え始めた。

とは言つてもほんの数日で出来る事等たかが知れる物。魔法の訓練はさして効果を上げる事は無く、拳法の腕も、達人と言つて良い古菲の指導と組み手によつて並以上の速度で上昇したが、所詮は数日で得た付け焼刃の様な物。ネギは知らない事だが、只でさえ回避能力が並外れて高く、かつての大戦で千を超える「魔法の射手」の絨毯爆撃や百を超える精霊砲の一斉射をも掠る事無く回避しきり、さらにナギやラカンの攻撃すら捌ききつた昴に、そんなもので一撃を当てる事等万が一どこか億が一、それこそ奇跡でも起こらなければ出来はしないだろう。

ちなみに試験の日は土曜日から日曜日に変更になった。理由はネギが、朝早くからカンフーの修行をし、偶然出会った自分の生徒である佐々木まき絵と談笑している所を、偶々近くを散歩で通りかかったエヴァンジェリンに見られた事から始まる。

自分達に弟子入りを志願しておきながらカンフーの修行をしていたネギを見て不機嫌になった彼女は、「カンフーの修行をするのなら弟子入りの件は無かつた事にする」と言いその場を去ろうとした。コレに驚き、焦ったネギは何とか言い訳して彼女の帰還を防ごうとするがエヴァンジェリンは肩をすくめ、やれやれと溜息を吐きながら帰ろうとした。

が、そのやり取りを見ていたまき絵が、弟子にくらいしてやれと言つて来た。それに対してエヴァンジェリンは子供の遊びに付き合う

つもりはなく、さらに子供っぽい人間とも話すつもりはないと言った。それに聞いてまき絵は激昂し、ネギならエヴァンジェリンなどに教わらなくともすぐに達人になれると言ってしまった。彼女は達人とは何かを勘違いしているのだろう。

それに僅かに怒りを抱いたエヴァンジェリンは、大人気無くも茶々丸にネギを攻撃するように指示した。それに対し茶々丸は僅かに躊躇いを見せたが、主の命を受けて攻撃、ネギを壁に激突させた。余りに呆気なく終わったことで若干なれど拍子抜けしたのか、それとも予想通りの事だったのか、笑いながら従者二人を連れ、ネギにさらに一日の猶予を与えて彼女は帰って行った。ちなみに場所は変えていない。

そして、その事をまだ開店していない喫茶店で、コーヒー豆を手回し式のコーヒーミル（天沼矛で刃の材質を鑄鉄からオリハルコンに書き換えた、滅多に融ける事が無い物）でゴリゴリと砕きながらエヴァンジェリン本人から報告された昴は、あまりの事に頭を痛め、この数日で13度目となる深い溜息を吐いた。とりあえず、溜息を吐き過ぎである。

「エヴァンジェリン……貴女ね……」

「うぐっ、し、仕方ないだろう。あのガキが私の弟子にならずとも強くなれると言うから……」

「子供の、しかも一般人の言葉を真に受ける必要等無いでしょうに……子供ですか貴女は。ハア……」

再び溜息を吐く昴。自分とエヴァンジェリン用にコーヒーを淹れているその背中が、何故か結構煤けて見えた。きっとコーヒーの味も、彼が飲むものに限りとしてつもなく苦くなるだろう。煮詰まるとかそう言うのは関係なしに。

「ハア……」

「そんなに溜息を吐く事は無いだろう。確かに、今思えば大人気なかつたとは思うが……」

「溜息を吐きなくなる私の気持ちも察してください。貴女が少年に言い渡した試験の相手は私なのですよ？ その私の知らない所で色々と変えて…… ああ、久しぶりに胃に穴が開きそうです」

「開いたことあるのか、お前……」

奈落の底まで届く程ではないが、それでもかなり深い溜息を吐きながら言った言葉にエヴァンジェリンが突っ込む。

彼の胃に穴が開いた原因は主にナギとラカンが巻き起こす騒動と、それをさらに引つ掻き廻して楽しんでいたアルビレオ・イマである事は言うまでも無い。そして胃が痛んだり、穴が開くたびに胃薬を飲んだり、真言で癒したり、魔法球内に住んで居る精霊の石柱（木精の女性）によく癒して貰ったりしたのだ。癒して貰ったと言っても高い治癒効果のある薬草を貰ったり、精神を落ち着かせる術をかけて貰ったりしただけだが。その為かその精霊とは、男女の関係にこそなっていないがかなり親密になっていたりする。

それを見たり聞いたりすると、何故かアスナの機嫌が微妙に悪くなるのだが。

ちなみにどうでもいい事だが、詠春とは苦勞人仲間だった為に、どの薬が良く効くかと言う情報を共有していたりした。

それを思い出して、昴はかなり遠い目をした。何処となく虚ろに見えるのはきつと気の所為ではないのだろう。

「おい、どうしたそんな遠い目をして？」

「いえ、思えば今も昔も色々と周りに振り回されていると言うか、何と言いますか……」

そう言ってまた溜息を吐きながら、昴はポーチの中から巨大なカボ

チヤを一つ取り出した。何故かハロウィンに使うカボチャの顔の様な模様が付いている。

「おい、何だ、そのハロウィンに使う様なカボチャは？」

「パンプキンボムです」

「ちょっと待て！ ボムつて何だ、ボムつて!？」

「投げたら爆弾としても使えますからボムです。ちなみにカボチャのスープ等に使うと美味しいですよ？ 煮付けにしても良いですし」

「そんな物騒な物を料理に使うんじゃない!! と言うか、どっから持って来たそんな物!! どうなってるんだそのポーチは!？」

「安心してください。切ったり叩いたりしても爆ぜませんから。…」

「まあ、どんなに軽くても、投げてしまえば爆発するんですけどね」

「安心できる要素が欠片も無いわ!!」

「ちなみに、それなりに破壊力はありますので」

「オイ!!」

物騒極まる野菜(?)を取り出した昴に突っ込むエヴァンジェリン。そんな物を取り出してしまふ辺り、彼も結構疲れて、さらにストレスが溜まっているということか。

ちなみにこのカボチャ、彼が持つ魔法球の中、第4エリア・慈悲の庭園冬の森に出来る物の一つであり、何故か木になる野菜……野菜?である。木に実る物を野菜と言って良いのかは分からないが、カボチャの形をとっており、味も普通の物より濃く甘いがカボチャなのでとりあえず野菜としておこう。ついでに言えばカボチャだけでなく、イモやキャベツ、レタスさえも木に出来る。それら全てが普通の野菜とは違い、呪術に使う仮面の様な模様があったり、石像の様な形をしていたり、動物の様な形をしていたり、音が鳴ったり、家の形をしていたりと色々可笑しいのだが。春、夏、秋の庭園、森に出来る野菜は普通に畑に出来るのに、一体どうということだろうか? 謎である。

採取した当初は昴も「何故カボチャやレタスが木に……？」と疑問に思っていたが、市販の物よりも美味しいので最近では気にせず、そう言う物だと割り切って色々と採取していた。ちなみに時々、店の料理にこれらを使った物を出していたりする。気付かれた事は一度としてないが。

「まあ、これでも食べて落ち着いてくださいな」

そう言っただけは再びポーチに手を突っ込み、今度は二つ取り出した。どうでもいいが先程のカボチャを取り出す時と言い、どこぞのタヌキ型……失礼、ネコ型ロボとかなり似た動作であった。

取り出されたのは、瑞々しい葎の付いた赤い立方体と、透き通るように薄い紫と内部の赤が美しいコントラストを作り上げている球体であった。ふわり、と甘い匂いが鼻を刺激する。どうやら果物が、菓子のような物らしい。そして、これまた大きい。

「……………何だ、このやけにデカイ赤い立方体と紫の球体は？まさかコレも爆弾じゃないだろうな？」

ツツツン、と、出された二つの物体を指でつつきながらエヴァンジェリンが問う。それにより赤い立方体はコトンと転がり、新たな面をエヴァンジェリンに見せた。表面に在る黒い何か、まるでサイコロの目の様に見えない事も無い。紫の球体はコロコロと転がり、テーブルから落ちかけた。慌てて掴んで立方体の横に置く。

「爆弾ではありませんね、この二つは。サイコロイチゴとピーダマンベリーと言う果物です。美味しいですよ？」

「これがイチゴだと！？ スイカぐらいあるではないか！ デカ過ぎるわ！！ と言うか、何だピーダマンベリーって！？ ピー玉なのか！？」

「いえ、サクランボです」

「こんなデカさと色合いをしたサクランボが有るか!!」

吠えるエヴァンジェリン。しかし味には興味があるようで、鼻に突っ込みを入れながらも出された箱の様な形をしたイチゴとサクランボと言われた紫色の透明な球体をチラチラ見ている。

デカイ。二つとも、スイカと同じくらい、いや、見ようによってはそれ以上の大きさをしている。一体どういう育て方をすれば、と言うか、どういう種類ならこの様な大きさと形に育つのか。考えても分からないあたり、きつと永遠の謎なのだろう。

「食べないのならしませんが？」

「誰が食べないと言った」

「そうですね、でしたら切ったりせずそのままかぶりつけてください。その方が自然の味を楽しめますから。あ、お手拭きとか出しておきますね」

「せめて食べやすいように切って欲しい物だがな……」

やや呆れた様な口調でそう言った彼女は、まずビーダマンベリーと言われた、透明な薄紫の球体を手を持った。摘んだ、ではなく持った、である。何せスイカほどにデカイのだ、摘む事等出来ない。そして彼女は、両手で持ったその球体を顔に近づけ、カプツとかぶりついた。

「!」

そして僅かに目を見開く。

実の大きさと名前に反して薄く柔らかい皮を破って口の中に満ちたのは、爽やかな香気と程良い酸味を持った冷たい果汁。芳醇かつ爽やかな香りを放つ瑞々しい果肉は薄らと紫がかった透明で、弾力を

持っているが噛み切れない程ではなく、一噛みごとにとても甘く、しかし決してしつこくないさらりとした果汁を溢れさせ口内を潤す。目を瞑つてもぐもくと口を動かし、コクリと喉を鳴らして嚥下したそれは湧き出たばかりの水の様にあっさりとしており、彼女に爽やかさを感じさせながら胃に落ちて行った。

それを感じていた彼女は目を開き、再びカプツとかぶりついた。どうやら気に入ったらしい。果汁が口周りを汚すが、彼女はそれを側に座っていた茶々丸に拭かせながら食べ続けた。その様子は歳の離れた姉妹のようで、見ていた昴を和ませた。そして彼は出ていたイチゴをしまった。

ちなみに、大きな果実にかぶりつくエヴァンジェリンを茶々丸が録画していたりするのだが、それには二人とも気付く事はなかった。

チリンチリーン

「お早うござい……あーっ!!」

そんな穏やかな雰囲気店内に、ベルの音と共に聞き覚えのある声が響いた。何事かと思ひ扉の方を見ると、さよが目を見開いてエヴァンジェリンを見ていた。正確には、彼女が食べている果物を、だ

が。
「む?」

「ず、ずるいです! 丸ごと一人で食べてるなんて!!」

もぐもぐと果物を食べているエヴァンジェリンを見てそう言うさよ。どうやら彼女も冬の森で採れる果物は好きらしい。まあ、何度か昴に付いて魔法球に入り、普通の物より美味しい物を採取したり食べたりしているのである意味当然かもしれないが。

「昴さん、私にも下さい!!」

「と言われましても、ビーダマンベリーはこの一つしか入れてませんでしたが……サイコロイチゴでもいいですか？　すずぶどうも有りますが」

「サイコロイチゴをお願いします」

そう言うと昴はしまったサイコロイチゴを再び取り出し、さよに渡した。彼女は手渡されたそれに躊躇なくかぶりつき、もぐもぐと食べ始めた。

ちなみにこの少し後、アスナがやって来て慈悲の庭園の果実を食べていた二人を見てズルイと言い、昴にすずぶどうを貰いながら今度採取に連れて行くように言い、食べ終わってから全員が学校に向かった。尤も、昼時になってエヴァンジェリンがいつもの如くサボってお茶を飲みに来たが。

喫茶ホタルブクロは今日も平和である。

そして、約束の日になった。

47話：試験直前の一時（前書き）

今回、ネギの弟子入り試験を書くつもりでしたが書けませんでした。しかもグダグダです。

47話：試験直前の一時

日曜、午前零時。

街が宵闇に沈み、多くの人々が眠りに着く時間帯。アスナは家の縁側に腰掛け、月明かりに照らされた庭の草花を見ながらサンタリンゴ（昴の魔法球内で採れる果物の一種。靴下の様な形をしている。しかし、当然ながら履く事は出来ない）で作られた、リング果汁100%ジュースをグラスに注ぎ、クピクピと喉を鳴らしながら飲んでいた。爽やかな甘味と程良い酸味が絡み合い、さらさらと喉を流れ落ちて渴きを潤してくれる。

「ん」

グラスに注いだ澄んだ色合いのジュースを、目を細めながら実に幸せそうに飲む。それを見て、隣でいつもの様に茶を飲みながら月を見ていた昴が微笑みを浮かべながら言った。

「アスナちゃんはホントに林檎が好きなのですね」

「ん、美味しいもの」

昴の言葉に、ジュースを飲みながら短くそう返す。普段なら「行儀が悪い」と昴は注意するのだが、珍しい事にそれをせず、苦笑しながら、彼は夜空に浮かぶ月を再び見上げた。

薄雲に隠れて、朧月としてぼんやりと輝いている。燦然と空に輝く満月も、刃の様に鋭く輝く三日月も好きだが、昴はこの朧月と呼ばれる月が一番好きだった。なんでも、不確かながらも確かに存在しているのが良いのだとか。

彼は現在、月を見ながらネギの来訪か茶々丸からの電話を、アスナと談笑しながら待っていた。理由は勿論、ネギの弟子入り試験だ。

「それにしても遅いわね。もう12時になってるのに」
「エヴァンジェリンの所に行っているのかもしれないね。流石に道に迷う事は無いかと思いますが……と言いますかアスナちゃん。まだ12時になったばかりではありませんか、それで遅いと言つのは……」

ジリリリン、ジリリリン

12時になったばかりで遅いと言うアスナを昴がたしなめていると、居間に設置している黒電話が甲高い音を鳴り響かせた。深夜にそんな音を出しては近所迷惑になるだろうが、家の周りには音を漏らさない結界（学園長公認）を張ってあるので迷惑になる事は基本的に無い。

その音を聞いて昴は立って電話の元に向かい、それを取った。

「はい、緋乃宮です」

『こんばんは、昴さん』

「ああ、茶々丸さんですか。こんばんは。電話をしてきたという事は、少年はあなた達の家に来ているのでしょうか？」

『はい。ネギ先生の他にも数名ほど来ていますが……』

「他にも数名？ 少年とオコジヨ君以外に誰が来ているのです？」

『桜咲刹那さん、近衛木乃香さんと古菲さん、他に佐々木まき絵さん、明石裕奈さん、大河内アキラさん、和泉亜子さんが来ています』

「……刹那さんと木乃香ちゃんはまあ、分からなくもないですが、佐々木さん他五名は何故？」

『古菲さんは弟子でもあるネギ先生が何処までやれるかを見届ける為でしょう。佐々木さん達は、単に応援する為かと。佐々木さんはネギ先生と一緒に練習していたらしいですし』

「そうですね……ふむ」

電話越しに茶々丸に言われた事に昴は沈黙する。

エヴァンジェリンは「私か昴の家に来い」と言っていたが、戦うスペースは何処にもない為、おそらく魔法球内で試験をするのだろうが一般人が邪魔である。理由をつけてネギから離せば良いだろうが一緒にやって来たメンバーの中に、よりもよって変に行動力のある明石裕奈と古菲が居る。

彼女等の事だ、おそらくと言うか絶対にネギについて来る。たとえついて来なかったとしても家の中を歩き回って魔法球を見つけ出して近付き、入ってしまう可能性が極めて高い。まあ、古菲は京都の事で一応だが裏の事 陰陽術や魔法の事 を知っているの
で、ついて来るのは良いかもしれないが、明石裕奈は一般人である。彼女の父親の明石教授はこちら側の関係者だが、彼は「娘には出来るなら魔法に関わって欲しくない」と言っていた。それをぶち壊す訳にはいかない。

ストッパーになり得る可能性を持つ大河内アキラと和泉亜子も、こう言うっては何だがやはり3 Aである。裕奈や古菲が動いたら、きっと一緒になって行動するだろう。出来る事ならじつとしておいて貰いたい、それはきつと叶わぬ願いなのだろう。彼女達も意外と行動力が有るのだから。

(と言うか、何故少年は一般人を連れて来ているのでしょうか?)

そう思ったが、すぐに理由に思い至り考える事を止めた。

ネギの性格を鑑みるに、おそらくだが応援に来ると言われて断り切れなかったのだろう。いや、そもそも断ると言う考えすら浮かばなかったのかもしれない。想像してみると、まるでその場面に実際に遭遇したかのように容易くイメージ出来た。思わず苦笑が漏れる。

『どづかしましたか?』

「ああいえ、少し……少年について来ている人は他に居ませんよね？」

『はい。センサーでも確認しました』

「では、彼女達には眠って頂きましようか。悪いとは思いますが、一般人には知られたくありませんし……全員、家の中に居るのですか？」

『はい、皆様寛いでいらっしやいます。マスターも実に楽しそうに……』

『誰が楽しそうだこのポケロボ！！ さつさと昴をこっちに向かわせる！！ オイコラ何勝手に人の家の冷蔵庫漁ってるんだお前は！！ やめんか！！』
って、それは楽しみに取っておいた京都で買ったわらび餅！？ 貴様らあーっ！！』

電話越しにエヴァンジェリンの叫びが響き、その後は何処か楽しそうな声が2、3聞こえた。どうやらエヴァンジェリンは周りに振り回される事が多いらしい。

ちなみに彼女が言ったわらび餅は、昴からの情報で見つけ出した知る人ぞ知る店の一品である。俗に言う、隠れた名店と言う物だ。昔ながらの製法と厳選に厳選を重ねた材料で作っているそれは既製品よりも遥かに美味であり、一口で彼女を虜にした。それを大いに気に入った彼女は複数買って帰ったのだが、どうもそれを食べられていたらしい。楽しみに取っていたと言っていたから、それを食べられれば確かに叫びもするだろう。

「……………デザート、持って行きましようか？」

『お願いします』

「分かりました。それでは、また数分後に……つと、そう言えば、試験は何処でやるとエヴァンジェリンは言っていましたか？」

『マスター所有の魔法球でやると言っていました。それでは、また後ほど』

そう言って電話は切れた。切る際にまた叫び声が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

そして昴はアスナに説明し、冷蔵庫から新しく作っていた数種類のタルト（魔法球内の果物使用）の内の一つを取り出して形が崩れないよう慎重にポーチの中にしまい、一応自分の魔法球も入れてアスナと共に家を出て空間を繋ぎ、エヴァンジェリンの家に向かった。

目の前に出来た空間の歪みを通ってまず目に入ったのは、窓から明かりを放っているそれほど大きくない木造の家だった。少し離れているが、複数の楽しそうな声とエヴァンジェリンの咆哮が聞こえる。近所迷惑になるだろう声の大きさだが、周囲に家は一軒も無いので問題ないだろう。カーテン越しに、ドタバタとしているのが良く分かる。

（取り合えず、タルトは彼女等を眠らせてからエヴァンジェリンが茶々丸さんに渡した方が良さそうですね）

その様子を家の外から確認しつつ、昴はそう思った。起きている状態で渡しても良いのだが、それだと確実に全員で分ける事になるだろう。いつもなら別にそれでもいいのだが、今回は楽しみにしていた物を食べられたエヴァンジェリンに対する慰めの様な物なので、それはあまり良くないだろう。

もう一つぐらい持って来るべきだったか。昴はそう思い掛けるが、すぐに却下した。この時間帯に食べるのはあまり良くないと思ったからである。

（食べるとしても軽い物ですね。レタスサンドとか……）

そんな事を考えながら呼び鈴を鳴らす。中で随分と騒いでいる為聞

こえるか分からないが、茶々丸が居るのでおそらく大丈夫だろう。数秒程待っていると、茶々丸が出迎えてくれた。頭には、相変わらずと言うかチャチャゼロが乗っている。

「いらつしゃいませ、昴さん、アスナさん」

「試験は12時からなのに、遅れてしまつて申し訳ありません」

「いえ、それほど時間は経っていませんから。どうぞ上がってください」

「では、お邪魔しますよ……つと、その前に、魔法に関係ない一般人達には『眠つて頂きましょう』かね」

「オ、イキナリカ？」

茶々丸に促されて家にかかる前に、昴は気配を探つて魔法に関係ない一般人四人の位置を確認して、強制的に眠らせる真言を紡いだ。そして二人は彼女に連れられて一つの部屋に入った。そこにはこの家の主であるエヴァンジェリンと試験対象であるネギと彼の使い魔であるカモ、木乃香と刹那、古菲、その他運動部四人が居た。尤も、運動部の四人は昴の真言の影響でぐっすりと眠つてしまっているが、

「マスター、昴さん達をお連れしました」

「ふん、コイツらが急に寝たのはお前が眠らせたからか、昴」

「外で普通に試験をするなら別に眠らせる必要はなかったのですがね、魔法球を使うなら話は別です。貴女は別に魔法がバレても構わないかもしれませんが、私としてはやはり一般人には一般人として平穩に暮らして欲しいですから」

そう言つて昴は、自分が眠らせた四人に視線を向けた。急に眠つてしまつた四人を心配してか、木乃香が近寄り、起こそうとしている。

「みんな起きや、昴さん来たえ」

「……起きませんね。昴さんが皆さんを眠らせたんですか？」

先程のエヴァンジェリンとの会話を聞いていたのか、刹那がそう聞いて来る。それを昴は肯定した。

「ええ。少年の応援の為に来てくれたであろう彼女達には悪いですが、眠って頂きました。彼女達は魔法に一切関係ありませんからね。ちなみに起こそうとしても無駄ですよ、最低四時間は絶対に起きないようイメージして言葉を紡ぎましたから。ああ、安心して下さい。『寝違えたり、風邪を引いたりはしません』から」

「まあそんな事はどうでもいい、さっさと別荘に行くぞ。わざわざ埋もれていたのを引っ張り出してきたんだからな」

『別荘？』

エヴァンジェリンの言った「別荘」と言う言葉に、ネギと木乃香、古菲が疑問の声を上げる。何故運動部四人が眠っているのに古菲が起きているのかと言うと、京都での一件で魔法等の存在を一応とは言え知っている為、昴が眠りの対象から外したからである。

疑問の表情を浮かべる三人に「ついて来れば分かる」と言ってエヴァンジェリンは部屋を出て行った。付き従うように茶々丸が彼女に続き、次いでアスナと刹那がついて行った。

昴も部屋を出ようとしたが、ふと踵を返してソファで眠っている四人に近寄り、腰にいつも付けているポーチに手を入れ、そこから毛布を数枚取り出し全員に掛けた。真言で風邪等を引かない様にしたと言っても、やはり心配にはなるのだろう。そして、一応眠りを確認してから部屋を出た。

腰に付けた小さなポーチからその容量を超える程の毛布を取り出した昴にネギ達は驚いていたが、昴が出て行くと眠っている四人をチラ見ながらも慌てて彼を追った。そして廊下で待っていた茶々丸とアスナ、刹那と一緒にエヴァンジェリンが向かったであろう部

屋に向かった。

薄暗い道とぼんやりと浮かび上がる無数の人形達の居る若干ホラーじみた部屋を通り、着いたのは一つの球体が置かれた部屋だった。どういふ訳か、窓も電気も無いのに部屋の中央に安置された球体をスポットライトの様な光が浮かび上がらせていた。

大きなフラスコを横倒しにした様な球体の中に、塔の様な建物のミニチュアと水、砂、木が入っている。パツと見、大きめのボトルシップの様に見えなくもない。入っているのは塔の様な建物であつて、間違つても船ではないが。表面のガラス面には「EVANGELINE'S RESORT」と書かれ、これの所有者が誰かを知らしめている（ちなみに昴の魔法球には特に何も書かれていない）。

「どうやらエヴァンジェリンは既に魔法球に入っているようですね。私達も行きましょうか、待ちくたびれているかもしれませんし」

「昴さん、行かつて何処にや？」

部屋を見回し、魔法球の中を見ながらそう言った昴に木乃香が聞いた。それを聞いて、昴は「少し見ていてください」と言つてから魔法球の周りを歩き始めた。突然歩き始めた昴に茶々丸とアスナ、刹那を除いた全員が不思議そうな眼で見る。見た感じ、何かを探している様にも見える。

そして、昴がある位置に立つた途端、彼の姿が突如消え失せた。突然消えた昴に驚き、ネギ達は慌てるが、ふとアスナ達を見ると彼女達はまるで慌てていなかった。寧ろ、アスナに至っては微笑ましい物を見守る眼で見ている。

「アスナ、せつちゃんも、何でそんな平然としとるん？ 昴さんが消えたんやで？」

「落ち着いて。別にスバルは消えた訳じゃないわよ。あれの中に入

「ただけだから」

「あれの中って……あれアルか？」

アスナの言葉に、古菲は魔法球を指さして聞く。それにアスナは頷いて、先程昴が消えた場所に歩いて行った。そして昴が立っていた場所に差し掛かると同時に、彼女の姿も消え失せた。

それにやはり木乃香と古菲は驚き、周囲を見回すがネギはアスナの言葉から何らかの魔法具であると推測したようで、今度は自分からアスナが消えた場所に歩いて行った。そしてやはり消えるネギとカモ。

それに二人は再び驚くが、流石に二度も三度も見ると今度は好奇心が勝つたらしく、木乃香は刹那と、古菲は茶々丸と一緒に魔法球の側に行った。

途端、彼女達の目に映る風景が一変した。

48話：試験（前書き）

遅れてすみません、ようやく書き終わりました。
文が全然浮かばなくて……
さらにグダグダですみません。

48話：試験

「あ、やっと来た」

「え……アスナ？」

突然風景が変わり、床に大きな五芒星の陣が描かれた塔の上で茫然としていた木乃香達（と言っても、茫然としていたのは木乃香と古菲の二人だけだが）の前に、いつの間にか彼女達の前から忽然と消え失せたアスナが立っていた。

「アスナ、何処行つてたアルか？ って言うか、ここ何処アルか？ さっきまで部屋の中に居た筈アルが、いつの間にか外になつてるアルし」

「んー……さっきのミニチュアの中、って言つたら納得する？」

「ミニチュアって……ここさっきのフラスコみたいな物の中なん！？」

アスナの言葉に木乃香が驚きを露わにする。その様子に「刹那も最初はこんな反応してたわねー」と、そんな事を思い出しながら木乃香の隣に居る刹那を見た。が、彼女も昴の魔法球に初めて入った時を思い出していたようで、既に視線をあらぬ方向に逸らしていた。まあ、茶々丸とチャチャゼロには普通にバレていたが。

「そう、ここはさっきのミニチュアの中。もっと詳しく説明しても良いんだけど、それは後にしましょ。スバルはともかく、エヴァちゃんも待ちくたびれてるから」

「待ちくたびれてるって、ワタシ達が入ったのはほんの数分前アルよ？ それくらいで待ちくたびれるとは思えないアルが……」

「ここの中と外じゃ時間の流れが違うの。浦島太郎って話があった

わよね？ 浦島太郎が竜宮城に行ったら、故郷の時間は随分と経っていたって話。あれを逆にしたような時間の流れって思ってくれればいいと思うわ」

「浦島太郎を逆にしたような時間の流れ……どういう事なん？」

「つまり、この中では現実よりも時間の流れが早いって事。この中で一日が、現実での一時間……って事で良いのかしら、茶々丸さん？ スバルの物とは時間の流れが違うだろうから、分からないのよね」

「はい、その認識で良いと思われませう」

アスナの確認に、茶々丸が頭にチャチャゼロを乗せたまま頷く。それを聞いて木乃香達（刹那除く）は、魔法とはこんな物も作れるのか、と感心していた。

そんな様子の木乃香達に、茶々丸の頭の上からチャチャゼロが声をかけた。もう頭に乗っている必要はないだろうに、何故まだ頭に乗っているのだろうか、このキリングドールは。

……まあ、居心地が良いからと言われてしまえばそれまでなのだが。

「ソレヨリモヨ、ソロソロ行ツタ方ガイインジャーカ？ アンマオセートゴ主人ガ暴レ出スゼ？ モシカシタラ茶デモ飲ンデルカモシレネーガナ」

「むおっ！？ 人形が喋ったアル！？」

「シャベツチャワリーカヨ」

まさか人形が喋るとは思わなかったのだろう、古菲が大げさに驚いた。が、そんな彼女を気にせずにアスナはチャチャゼロの言葉に頷き、手摺の無い橋を渡って行く。

それに続いて茶々丸、刹那、木乃香、古菲が渡り、先程居た場所よりも広い円形の広場の様な場所に着いた。

そこにはエヴァンジェリンと昴、ネギが居り、エヴァンジェリンは

チャチャゼロが言った様に、紙コップに注いだ何かを飲んで待つていた。仄かに漂う香りから察するに、ハーブティーであろうか。もう一杯飲もうとしていた所の様で、側に置いてある黒地に紫陽花模様の水筒に手を伸ばした状態で彼女は茶々丸達の到着に気付いた（ちなみにこの水筒は昴の物である）。

「よやく来たな。では、ぼーやの試験を始めるとしようか。昴」
「やれやれ、こういうのは私ではなく貴女の従者がやった方が良いと思うのですがね、本当は……まあ、今更決まった事に文句を言っても仕方が無い事でしょうけど」

エヴァンジェリンの声に、昴が何やらぼやきながらも広場の中央付近に進み出た。ネギが弟子入りの為に彼の店を訪れてから既に一週間が経過しているが、やはりあまり気が進まないようだ。

それを見ながらアスナ達はエヴァンジェリンの近くに行き、ネギは昴から少し離れた場所に立った。

「では、これよりぼーやの弟子入り試験を始める。ここでの一日は外での一時間だから思う存分にやれ………とやりたい所だが、流石にそれではぼーやにとって都合が良過ぎるのでな。時間制限を設けさせてもらおう」

「時間制限………ですか？」

「そつだ。今から2時間以内に昴に一撃与えるか、真言を使わせれば合格にしてやる」

「？ あの、エヴァンジェリンさん。真言って何ですか？」

エヴァンジェリンの言葉に、ネギが疑問の声を上げた。

「うん？ 何だ、説明していなかったのか？」

「別にこの試験中に使うつもりも有りませんでしたし、説明しなく

ても良いと思っただけなから。説明してしつこく聞かれるのも嫌ですしね」

エヴァンジェリンの問いに、そう昴は返した。まあ、好き好んで自分の力の詳細を説明する者は居ないだろう。20年前の大戦期に、紅き翼のメンバーには説明したのだが。

昴が一週間前に説明した内容も、どう言った能力かではなく失伝かそうでないかだけなのだ。

「ふん、まあ別に構わんが……」

「あの、それで真言って言うのは何ですか？」

「ん、ああ。早い話がコイツの能力だ、詳しい事が知りたいなら試験の後にでも本人に聞け。教えてくれるかどうかは分からんがな」

「はあ……」

エヴァンジェリンがそう言うと、ネギは昴の方を見た。が、彼はネギから少し離れた場所に立ったまま首を横に振った。どうやら真言の詳細をあまり話したくはないらしい。

「そろそろ始めるか。双方、準備は良いな？」

「私はいつでも始められますよ」

「はい。昴さん、よろしくお願いします」

「こちらこそ。少年のこの一週間の努力の成果、見せて頂きましょうか。まあ、私の方から攻撃するかは分かりませんがね」

そんな二人を見ながらエヴァンジェリンは開始の為に声をかけた。それに対し、二人とも返事をし、ネギは簡易の杖を片手に持ち身構え、昴はそんなネギを静かに見ながら、構えもせずに佇んでいた。しかし、その顔にいつもの柔らかな微笑みは浮かんでいない。

「では、始めるがいい！」

「契約執行90秒間、ネギ・スプリングフィールド！」

エヴァンジェリンの宣言と共に、ネギは自分の体に魔力を供給した。同時に彼の体が光に包まれ、身体能力が底上げされ、それを見た木乃香と古菲が感嘆と驚きの混ざった声を上げた。初めて見る現象に、若干だが興奮しているのだろう。

木乃香の場合、初めてと言っていていいかは分からないが。

「やああああつ！！！」

そんな声を聞きながらネギは拳を構え、声を上げながら、相変わらず静かに佇み自分を見ている鼻に突撃した。その速度は、いくら魔力で身体能力を強化しているとは言え子供とは思えない程早い。いや、大人でもこの速度を出す事は、普通は出来ないだろう。

鍛えており、かつ気や魔力を使える者なら話は別かもしれないが。

「自分への魔力供給による身体能力の強化ね。見た感じ、我流みただけど……」

「なんつー強引な術式だ。多少は弄ってあるみたいだが、ほとんどばーや自身の膨大な魔力に物を言わせただけの術とも言えない代物ではないか。あんな物では逆に自分を傷付けるだけだぞ、魔力の消費も早いしな」

「少なくとも、終わった翌日は筋肉痛になるでしょうね」

アスナの言葉にエヴァンジェリンが感想を述べ、刹那がそれに頷いた。しかし誰も視線を逸らさず、ネギの試験を眺めていた。

試験開始から既に一時間半が経ち、ネギの自身に対する契約執行による身体強化回数が20を軽く超えた頃、木乃香がふと気になった事を漏らした。

「昴さん、初めの頃からずっと避けてばっかりやけど……どれくらい強いんやらか？」

「分からないアルね。歩き方や雰囲気からして只者ではない思うアルが……アスナは知ってるアルか？」

拳を構え、昴に高速で突っ込んで行くネギを見ながら古菲が聞く。今居るメンバーの中で、義理とは言え、親子と言つ最も昴に近い関係に在る彼女なら、彼がどれだけの力を持っているか知っているだろうと判断したのだろう。

アスナも、質問されると予想していたのかすんなり答えた。

「当たり前でしょ、十年以上一緒に居るんだから……強いわよ。直接的な攻撃はともかく、何でも有りなら、多分誰にも負けないと思う。それよりも……」

「それよりも？」

「スバルは攻撃よりも、回避の方が厄介なの。まあ、さつきからずっと避けてるのを見ていれば分かる事だろうけどね。今まで何度も私と刹那が稽古の時に挑んだんだけどね……当てる事はおるか、掠らせることすらできなかつたわ、一撃さえも」

「当たつたと思ったら実は外れていた、なんてざらでしたからね。いつも傷一つ付けられずに沈められていますし」

アスナの言葉に刹那が頷き、それに古菲が驚きを露わにする。麻帆良の武道四天王の一人にも数えられる古菲は、時たまアスナや同じ四天王に数えられる刹那とも手合わせをする事も有るので二人の強さは大体であるが知っていた。二人とも、並の武道家では手も足も

出ないほどに強いのだ（それでも本当の達人相手には負ける事もよくあるが）。

その二人が一緒に挑んで、当てるところか掠らせる事すら出来ずに沈められると言ったのだ。それだけで昴の回避能力（まあ、回避能力は先程から避け続けているのを見れば分かるだろうが）と実力の高さが窺える。

それを聞いて、皆が視線をネギ達の方に戻すと……昴は先程までと同じ様に、立っている場所からほとんど動かず、必要最低限の足捌きだけでネギの攻撃をひらりひらりと避けていた。

ネギも身体能力を強化し、普段よりもさらに早くなつた速度で昴に接近し、拳を、あるいは蹴りを繰り出しているがその全てがあと拳一つ分の距離を持って避けられている。その姿は、まるで風にそよぐ柳の様にも、木の葉の様にも見える。しかもその様子から、反撃する気はないようだ。

ちなみに、彼は気で身体強化していない。

古菲は格上が相手だと言うこの日の為に、ネギに中国拳法の真髄とも言えるカウンターを、全てとは言わない物の、幾つか仕込んでいた。一撃当てるだけならば、普通に責めても駄目だろうがカウンターなら可能性は有ると踏んだのだろう。

事実、格下が格上相手に勝利するには攻撃を凌ぎ続け、隙有らば致命の一撃を叩き込むと言うのが危険ではあるが最も可能性のある方法なのだ。

だが、それは相手が攻撃を繰り返している時、あるいは油断している時に行うのが効果的なのである。正直に言って、今回は相手と相性が悪過ぎた。昴が得意としているのは、攻撃でも防御でもなく、あくまでも回避なのだ。しかも20年前の戦争では、ほぼ全ての攻撃を回避した実績を持つ、見切りの達人でもあるのだ。本気でネギ

の攻撃を回避しようとはしていないだろうが（と言うか、本気で回避に専念したらまず絶対にネギの合格の可能性はなくなる）、それでもその回避能力は異常に高い。

ついでに言えば、昴の近接戦の型はカウンタータイプなのだ。やろうと思えば、最初の攻撃でネギは沈んでいただろう。

「やつ！ はああっ！！」

しかし、回避するだけで昴は一切攻撃しようとしなない。するとしても、距離を取る為かネギを投げ飛ばすくらいだ。その姿は、見ようによってはまるで遊んでいるようにすら見える。昴本人にそんな気は欠片どころか微塵もないのだろうが、どうしてもそう言う風に見えるてしまう。

ネギもそう思い始めたのだろう、一時間半前は決意に燃えていたその顔には、現在僅かにだが焦りの他に、怒りの感情が浮かんている。遊ばれている、若しくは舐められていると思っっているのだろう。

昴も当然ネギのその感情には気付いているだろうが、それでもなお反撃しようとしなない。繰り返される攻撃の全てを回避しながら、声も出さずにただじつとネギを静かな目で見ている。

「でやあつ！！」

そんな昴を強い眼差しで睨みつけながら、ネギは再度突撃し拳を繰り出し、すぐ後に蹴りを放つ。が、今度もまた拳一つ分の距離を持って当たり前の様にあっさりと回避された。

「くっ……はあつ！！」

それでも諦めずにネギは接近し、攻撃する。

だが、やはりと言うべきか、それも軽々と避けられ、投げ飛ばされ

た。受け身を取り、悔しさに歯軋りするネギ。再度突撃しようとするも、今度は身体強化の効果が切れた。自分に対する契約執行の効果時間が再び切れたのだ。その為、移動速度なども目に見えて低下する。

ネギも、すぐに再び身体強化をしようとするが、いくら彼の魔力容量が膨大とは言え、流石に連続で何度も使いすぎたのだろう。感じられる魔力が普段よりかなり弱くなっている。

さらに一時間半の間、ほぼ休みなしで激しく動き回っていた為か、呼吸も乱れ、肩で息をしている状態だ。この状態のまま挑んでも、唯でさえ低い勝率がさらに低くなるだけだろう。

「解せませんね」

それでも昴からネギが目を離さないでいると、試験が始まってからずっと黙っていた昴が初めて声を出した。

「解せないって……何がですか？」

「貴方の行動が、ですよ。確かに、貴方が習ったと言う中国拳法はほんの二、三日……いえ、一週間でしたか、齧ったとは思えない程歪みも無い、綺麗な型です。努力もさることながら、素晴らしい才だと言えるでしょう。教えた師が良かったと言うのも有るでしょうが。ですが、何故、「魔法の射手」等の攻撃系魔法を使わず、身体強化を併用した近接戦ばかり行うのです？」

そう言った昴の声は、本当に疑問に思っている様だった。

「別に「攻撃魔法を使うな」と、エヴァンジェリンに制限を受けている訳でもないでしょうに。何故魔法を使わないのですか？ まさかとは思いますが、少し齧った程度の中国拳法で私に勝つ気ですか？ それは君に中国拳法を教えた、古菲さんへの配慮ですか？ 自

分でこう言つのも何ですけど、私は貴方よりも強いですよ？ まさか格上相手に振るえる手段を自分で制限しているのですか？」

「そんな事は……！ 僕は本気でやっています……！」

「ならば何故、持ち得る全ての力と手段を振るわないのです？ 貴方は本気と言いますが、それなら何故、自分の力を制限するのです？」

静かな、しかし良く聞こえる声で昴はネギに問いかける。その表情は試験開始時より変わらず無表情だが、纏う雰囲気は何処かやや冷たい。

心なし、炎の様に紅い瞳も冷たく感じられる。

「本当に、本気でエヴァンジェリンの弟子になりたいと望んでいるのなら、制限などせず、持てる力の全てを出して挑んで来なさい。それが気乗りしなかった相手に頼んだ貴方の義務ですよ、少年。それに――」

そう言った途端、ネギの視界から音も無く昴の姿が消え失せた。突然目の前から消えた昴に驚き、ネギは一瞬硬直する。

「残り時間はたったの三十分。当たる可能性がほぼゼロに等しい貴方の未熟な中国拳法のみ頼るより、攻撃魔法も併用して僅かにでも当てる可能性を上げた方が、選択としては良いと思いますけど？」

「っ！？」

自分の真後ろから聞こえた声に驚き、思わずその場から飛び退き身構える。見れば自分の立っていたすぐ近くに、いつの間にか昴が背を向けて佇んでいた。

何時の間に居たのか、見ればアスナや刹那も驚きの表情を浮かべて

いる。どうやら彼女達にも、いつそこに現れたのか分からなかったようだ。エヴァンジェリンだけは面白くなさそうな、ムスツとした表情で眺めているが。

「もしくは、もう一つの勝利条件である「私に真言を使わせる」をクリアするか、ですが……どちらにしても、身体強化以外の魔法を使った本気で来なければ、万に一つの可能性すら失いますよ？ それでも良いのですか？」

「……………」

昴の言葉にネギは押し黙る。

その様子は、本当に魔法を使っても良い物か、迷っている様にも見える。

しかし、残り時間は既に二十五分を切った。このまま迷っていても、唯でさえ当たらない攻撃がさらに当たらなくなり、試験失敗になるだけだろう。エヴァンジェリンの弟子になり、魔法使いの戦闘方法を学びたいネギとしては、流石にそれは避けたい。

そう思ってしまったえば決断は早かった。

「……………分かりました。でも、本当に良いんですね？ 魔法を使っても」

「私は別に構いませんよ。少年も、「実は攻撃魔法を使わなかったから失敗しました」なんて言い訳、したくないでしょう？」

「僕はそんな事言いません」

「どうでしょうね、人間と言うのは言い訳をする生き物ですから…

…」

そう言って、昴はエヴァンジェリン達の居る方向とは逆の向きに歩きだし、有る程度離れた所で止まり、ネギの方を向いて言った。

「来なさい。残り二十分以内に、見事私に一撃当てるか力を使わせてみなさい、少年」

昴がそう言った直後、ネギは詠唱を始めた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、雷の精霊13人、集い来りて敵を討て！ 魔法の射手・連弾、雷の13矢！」

ネギが紡いだ詠唱は、魔法使いなら誰もが使える初歩の攻撃呪文「魔法の射手」だった。まあ、場所と残りの魔力量を考えれば「雷の暴風」等の長射程高威力の魔法は使えないだろう。

そして言に乗せた属性は、ナギも得意とした雷の属性。思わず僅かに顔を顰める。

（魔法を使っても良いとは言いましたが、よりによって雷属性を使ってきましたか。いえ、許可しておきながら文句を言うのは筋違いだと分かってはいるのですが……：：：そう言えば、少年の現在の最強魔法は「雷の暴風」でしたね。あれはたしか雷と風、二つの属性を宿した魔法でしたか。まったく、慣れない挑発とはするものではありませんね）

昴は雷を嫌っている。

雷は、昴にとつてはある意味怨敵とも言え、嫌な記憶しかないからだ。

自分が一度死ぬ原因（夫婦喧嘩による落雷）を作った、ギリシア神話の恋多き主神ゼウスの持つ属性でもあるそれを、昴は心の底から嫌っていると行って良い。と言うか、ゼウスを心の底どころか魂のレベルで嫌っている。

さらに大戦期にナギが、ラカンとのケンカ時に「千の雷」を使いまくったのだ。しかもその余波が、いつもいつも何故か昴や詠春に

のみ来るのだ。
嫌な思いしかないのはある意味当然と言えよう。

（まあ、掠るつもりもさらさらないんですけどね。電撃系は大嫌い
ですし）

そんな思いを思考の隅に追いやりながら、昴は迫り来る13の雷の
矢を、今度はそれなりに余裕を持って回避した。雷の属性を持つ為、
掠りでもすれば矢に付与された電撃によって麻痺し、動きが阻害さ
れてしまうからである。

取り合えず、麻痺と言つか電撃系全般が嫌いな昴は回避方法を変え
てネギの撃つ魔法の射手を避け始めた。

ひらりひらりと、風に揺られる花卉のような回避から、ダンスのステ
ップを踏む様な回避方法に変えて雷の矢を避け続けている昴に、ネ
ギは残り少ない魔力を持ってさらに矢を追加し、時間差をつけて放
った。さらに自分への身体強化も行い、再度昴に突っ込んで行った。
どうやらある程度の誘導性を持つ魔法の射手で昴の目を眩ませ、そ
の弾幕にまぎれて接近して攻撃するつもりらしい。小細工としては
それなりだろう。

しかしこれまでの連続した身体強化の使用で既に体にはかなりの負
担が溜まっている。体力も既に底を着いている。明日になれば全身
筋肉痛は確実だろう。これ以上やってしまえば、下手をすれば体を
壊しかねない。

出来たとして、「魔法の射手」を合わせてあと一、二回が限度と言
った所であろう。

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！ 雷の精霊13人、集い

来りて、敵を討て！ 魔法の射手・連弾、雷の13矢！！」

だからこそ、ネギはこの一度に残りの魔力も全て込めた。走りながら雷の矢を放ち、今度は別の呪文を詠唱しながら放った矢を追い、避け続ける昴に向かう。しかし、矢は軽々と、踊るように避けられた。

「っ……！！」

強化し過ぎて限界に近い体が軋み、痛みで顔が歪む。だがそれを、歯を食いしばる事で堪えて拳を繰り出す。

それは再び避けられ、繰り出した腕を掴まれて再び投げられそうになるが、今度はその手に対して攻撃した。

「む………？」

その行動に昴は多少驚いたようだったが、すぐにネギの拳に手を添え、受け流した。攻撃を流されたネギの体が流れ、バランスを崩しかけるがすぐに立て直し、肘打ちを昴に見舞う。それもまた回避されたが、構わずネギは連続で攻撃を繰り出す。

「ふむ、スピードを活かした近接連続攻撃ですか。確かに手としては良いかもしれませんが、ペース配分を誤りましたね。フラフラですよ」

連続で繰り出される拳、肘打ち、蹴りを避け、流しながらそう言う。確かにこれだけでは昴に攻撃を当てる事は難しいだろう。いかに強化した身体能力で速度が上昇しているとは言え、昴の回避能力はそれの上を行ってるのだから。

暫くそれを繰り返していると、ネギの動きが急に遅くなった。身体強化が切れたのだらう、体を包んでいた光も消えている。体力も切れたのか、荒い息を吐いている。

「はぁ……はぁ……」

「体力が切れましたか。しかし粘りますね、そんな状態になっただけだ攻撃してくるとは」

汗だくでフラフラになりながら、なおも攻撃して来るネギに昴は若干呆れた様な、感心した様な声でそう言う。

しかし、とうとう限界か。ネギは膝を着いた。

「残り時間はあと五分ですが……ここまでの様ですね。その状態では、もう動く事もままならないでしょう?」

「まだ……やれ……」

「動く事もままならぬ程に疲労している身で何を言いますか。貴方は無駄に激しく動き過ぎなのですよ、少年。ですからここまで疲労するので」

そう言い、昴は立ち上がるうとしているネギを見降ろした。

ネギは何か立とうとしているが、足が痙攣しているようで立ち上がれない。

「残り五分、せめて回復に専念なさい」

そう言ってネギの横を通り、昴はエヴァンジェリン達の居る方へ向かおうとする。もう立ち上がる事は出来ないだらうと思っっているようだ。事実、ネギは立とうとしても立てなかった。しかし

がしっ

「？ おや……？」

ネギが側を通った昴のズボンを掴んだ。その事に困惑の声を上げ、ネギを見る。その目は、諦めた者の目ではなかった。

「確かに、もう僕には動く気力も有りません……ですけど、まだやれる事はあります……！」

「やれる事？」

昴が疑問の言葉を放つと同時に、ネギは取っておいた呪文を介抱した。光で出来た縄の様な物が発生し、それはネギの腕と、昴の足を縛りつけた。

「これは……」

「遅延呪文です……さっき詠唱して、ずっと取っておいた……」

「成る程、雷の矢の後に詠唱していたのですか。ですが、どうも限界時間以上に留めていたみたいですね、構成が分解寸前です。これなら気も使わずに破壊できますよ？」

そう言つて昴は、脚に少しだけ力を込めた。途端、昴とネギを繋いでいる光の帯から軋むような音が響き、どんどんとひび割れて行く。この分では、持っても良くてあと10秒と言つところであろう。だが、それで十分と言つ様にネギは笑みを浮かべて

ゴツッ

「む……？」

「あ……」

「あら……?」

「これで……一撃、入れましたよね……?」

あるうことか、頭突きを慣行した。と言っても、振りかぶりもせず、助走も付けずに頭を対象に向かって突き出して当てるだけの、頭突きとも言えぬものであったが。

思わぬ行動に、昴と観衆から気の抜けたような声が出る。

パキインッ

同時に光の帯は甲高い音を立てて砕け、ネギは顔面から倒れ伏した。どうも、今の行動で完全に残りの魔力も体力も使い果たしたらしい。動く様子がまったく無い。

「……………ふふっ」

そして、脚に頭突きされた昴は僅かな間茫然としていたが、ネギの取った行動に突然笑みを漏らした。何事かと思い、アスナ達が見る。

「ふふっ、ふふふふふ……似てる似てるとは思っていましたが、まさかこんな所まで似ているとは……ふふふっ」

クスクスと、苦笑めいた笑いを漏らしながらそう言う昴。その表情は、何処か懐かしい物を見た様な顔であった。おそらく、ナギやラカンと居た時の事を思い出しているのだろう。アレらも大概、諦めが悪かったり、転んでもただでは起きなかつたりしたのだから。

「諦めの悪さは親譲り、と言う事でしょうか……どうします、エヴァンジェリン? ダメージと言うには程遠いですが、少年は見事、私に一撃与えて見せましたか?」

「お前、最後の最後で……ああ、いい。分かってるよ、約束は約束だからな。つたく、面倒臭いったらない……」

昴の言葉に、エヴァンジェリンが茶を飲みながらそう返した。何処か不機嫌そうである。

「ぼーやが起きたら伝える、魔法は教えてやるからいつでも小屋に来いとな」

「おや、何処に行くのです？」

「寝に行くんだよ、どうせこの中に居たら一日立たなきゃ出られんからな。ああ、お前が持ってきたタルト、起きたら寄せ」

そう言つてエヴァンジェリンは塔の中に入って行つた。

それから数分後、目覚めたネギが結果を聞いて喜んだのは言うまでもない。

ちなみにその後、ネギに触発されてアスナと刹那、ついでに何故か古菲が昴に勝負を挑み、今度は多少本気を出した昴に攻撃を掠らせる事も出来ず、全員沈められたのは余談である。

49話：訓練と選択

ネギの弟子入り試験が終了し、ネギがエヴァンジェリンと古菲、二人の弟子になり、恐ろしい程の筋肉痛から復活して数日経ったある休日。

麻帆良の外れ、苔むした廃墟のとある一角にエヴァンジェリンとネギが居た。そのすぐ傍には、アスナと刹那、木乃香、茶々丸、チャチャゼロ（相変わらず茶々丸の頭に乗っている）、古菲、のどか、あと夕映が居た。

何故ほぼ魔法関係者しか居ないこの場に夕映が居るかと言うと、先日ネギ、のどかと共に図書館等の地下に、京都で詠春から貰った地図に書かれてあったネギの手掛かりとやらを探しに行ったからだ。

地図を貰った当初、ネギは自分でネギの手掛かりを調べていたのだが、作成者がナギにしては思った以上に難解で、その地図が麻帆良学園の物だと言う事しか分からなかった。それからさらに手掛かりを得るため、ネギは何故か、一般人である筈の図書館探検部の三人に地図を渡してしまったのだ（と言っても、魔法を知らない本当の意味での一般人は早乙女ハルナだけになってしまっているが）。図書館島の事も地図には有ったので、おそらく力になってくれるだろうと思っていたのだらう。魔法関係の物を一般人に見せる等、呆れ果てる事この上ないが。

そして、それから手掛かり（ナギの絵付き・日本語カタカナ表記）を見つけた夕映にネギ他学園長達が魔法使いである事が言い訳不可能なレベルでバレ（やはりと言うべきか、昴の事も魔法使いと勘違いしている）、魔法使いの事が知りたいので自分達も一緒に連れて行って欲しいと頼んだのだ。

が、ネギはそれを拒否し、翌日の早朝に自分とカモだけで行こうと

した。しかし二人に、「ネギが行動を起こしたら知らせて欲しい」と頼まれていた木乃香によってそれは失敗し、待ち伏せしていた寝惚け眼の二人と遭遇、何とか説得しようとするも結果として三人と一匹揃って図書館島に空から入り、番人ならぬ番竜に襲われる事となった。

無事でいる為、何とか逃げられたようだが。

ちなみにその時、ネギ達が見つけた扉の向こう側で昴とアルがお茶を飲みながら互いの近況と現状を報告しあっていたのだが、それはどうでもいい事なので置いておこう。

なお、昴とアルが出会ったのはある種偶然である。麻帆良に来てから5ヶ月後、アスナ達が学校に行っている間に地理を把握する為に歩き回っていた昴が、毎度の如く道に迷って何故か図書館島の地下に侵入し、それを感知した番竜にやはり襲いかかられるも、即座にノワールを召喚し、逆に叩きのめした所をそこで隠居していたアルビレオが出迎えたのだ。

ちなみにその時、驚き、再会を喜びながらもアルに「以前私の荷物に女子学生が着る水着を入れたのは貴方ですか?」と確認し、肯定された昴は、かつて心に刻んだ、「取り合えず、次に会う事があったら殴る」と言う誓いを、「絶対に当たる」と言う真言付きで実行したのはどうでもいい事である。

腕を組んで立っているエヴァンジェリンから少し離れた位置にネギが、その近くに刹那とのどかが立っている。

「刹那、気は抑えているな? 既に聞いているかもしれないが、相応の訓練をしていなければ気と魔力は相反するぞ」

「はい。昴さんから聞いています」

「よし、では始める。まず従者に対する魔力供給を360秒」

「はい……行きます。『契約執行360秒間！ ネギの従者、宮崎のどか、桜咲刹那！』」

エヴァンジェリンの言葉にネギは従者のカードを手に持ち、のどかと刹那に魔力を供給した。

二人の体と術者であるネギの体が光に包まれ、のどかは擦ったような声を出した。

「……」

少々きついのか、ネギが僅かにうめき声を上げる。

吸血鬼の真祖と言う上位種故に人よりも五感が発達し、それが聞こえていたであろうエヴァンジェリンはしかし、無視して次の指示を出す。

「次。対物・魔法障壁全方位全力展開」

「ハイ！」

「次、対魔・魔法障壁全方位全力展開」

「ハイ！」

のどかと刹那に魔力供給をし、対物理障壁を全力で展開したネギに、矢継ぎ早に今度は対魔法障壁の全力展開を命じるエヴァンジェリン。この時点で、並の魔法使いなら倒れるかフラフラになるだろう負担である。昴なら最初の供給で、一秒と持たずに倒れてしまうだろう。それでもネギが倒れないのは、ナギ譲りの強大な魔力があるからであろうか。額に汗が浮いているあたり、やや辛そうではあるが。

「そのまま6分持ち堪えた後、北の空に向かって「魔法の射手」を199本撃て。境界を張ってあるから遠慮はいらん」

「つぐ、は……ハイ！！」

そして6分間その状態を維持し、ネギは詠唱を始めた。しかし、既に息が切れかけている。余程にきついらしい。

「…光の精霊199柱、集い来りて、敵を射て。魔法の射手、連弾・光の199矢！」

詠唱が終わると同時に放たれる199条の光の矢。勢いを持って放たれたそれは、エヴァンジェリンの言った結界に激突し、花火の様な光の粒子になって消えた。

「おお………」

「これが魔法、ですか………」

「なんや、花火みたいやなー」

それを見て思い思いの感想を言う木乃香達。意外な事に、刹那もその光景に感嘆の溜息を漏らしている。

「う……あうう……？」

が、撃った当人であるネギは負担に耐えられず、目を回して倒れてしまった。

心配した木乃香とのどかが駆け寄り、膝枕する。

それを見ながら、エヴァンジェリンは鼻を鳴らして言った。

「こんな序の口程度で気絶するなど、話にもならんわ。いくら奴隷りの強大な魔力があったとしても、使いこなせなければ宝の持ち腐れ、意味が無いわ」

「よーよー、エヴァンジェリンさんよお、そりゃ言い過ぎってもんだろ。兄貴はまだ10歳だぜ？ いくら魔力があるったって、同時

契約6分+全力の対物・対魔障壁の全方位展開、それに加えて障壁を6分維持したまま魔法の矢199本なんて、修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だろ」

そのエヴァンジェリンの言葉に、カモが文句を言った。

確かに、いくら魔力があるとは言ってもネギは未だに10歳。体も出来ておらず、下手に負担をかけすぎると成長に悪影響しか出ない年齢である。カモの文句も最もだろう。しかし、文句を言う相手が悪過ぎた。

「並の術者なら、これでも十分だろ？ もちつとソフトに……」

「黙れ、この下等生物が。並の術者程度のレベルで満足できるか家畜にも劣る畜生が。口を挟むなら並以上の魔法を使えるようになってから言えこの屑が。昂に綺麗に無駄なく捌かせて烏に喰わせるぞ？ 貴様、元々不法侵入者だしな。後腐れなく処分出来るわ」

威圧と脅しをたっぷり込めてカモに対してそう宣告するエヴァンジェリン。もし反論すれば、彼女は今言った事をすぐに実行に移すだろう（昂が実行に移す可能性は不明だが）。

当然、妖精とはいえたかがオコジョがそんな威圧に耐えられる筈もない訳で、彼はアスナに泣きつこうとした。が、すぐに掴まれて、草むらに向かつてポイツと放り投げられた。カモはやはり、アスナから嫌われている様である。

確かに、並の術者ならこれでも十分だと普通は言えるかもしれない。いや、言えるだろう。

しかし、ネギが弟子入りしたのは吸血鬼の真祖と言つ真の意味での規格外。今でこそやや丸くなった性格をしているが、かつて「闇の福音」「童姿の闇の魔王」等、様々な異名で呼ばれ、多くの魔法使い達に恐れられた、最高位にして最強の魔法使いの一人でもある。

その彼女が、並の術者レベルの普通等、認める筈が到底なかった。訓練初日からハードモード全開である。実にスパルタだ。

ちなみに訓練のレベルは「ノーマル」「ハード」と言う二種類の上に、エヴァンジェリンがやや本気を出して襲いかかって来る「地獄モード」、完全に潰すつもりで従者と共に襲いかかる「未来が無いモード」が存在していたりする。実はハードモードは、まだそれに優しくかったりするのだ。

ちなみに京都から帰って以降、アスナと刹那は昴相手に地獄モードで訓練を行っていたりする。何でも、フェイト達にやられたのが悔しかったのだとか。

現在のところ、開始直後に魔法楽器を一齐に奏でられて怯んだ所を槍の一撃で沈められているが。

「私を師と呼び教えを乞う以上、生半可な修行で済むと思うなよ？ 今後、私の前でのどのような口応えも泣き言も許さん。少しでも弱音を漏らしたその時は、地獄を見る事になると見えよ、ぼーや？」

薄く笑みを浮かべながらプレッシャー込みでネギにそう言うエヴァンジェリン。この場で言う地獄を見る事になるとは、過程も順序もすっ飛ばして強制的に「未来が無いモード」に移行する事を意味する。そうなった場合、後悔出来るか分からない。実に鬼である。

「は、はい！ よろしくお願いします、エヴァンジェリンさん！」

しかしネギは起き上がり、元気よくそう言った。

それを聞いたエヴァンジェリンが若干感心したような目で片膝を着いているネギを見る。どうやら、回復力はそれなりに有るらしい。唇の端が吊り上がり、ニヤリと、実にイヤらしい笑みが浮かんだ。

「ほう、もうそこまで回復したか。ならば今度は、障壁を全力展開して9分堪え、魔法の射手を400本撃て。全力でだ」

「うえっ!?!」

「何だ、その反応は？ 泣き言や弱音は許さんと言ったぞ。そら、さっさと撃て。でないとさらに100本増やすぞ?」

「あわわ……は、はいっ!!」

「そうそう、私の事は「マスター 師匠」と呼べ。良いな?」

「は、はい!」

薄く、とても綺麗な、しかし何処か恐怖を感じさせる微笑みを浮かべてさりとそう言うエヴァンジェリン。

それが本気だと分かったのだらう、ネギは慌てて立ちあがり、言われたとおりに障壁を全力で9分間展開し、400本の光の矢を撃った。やはりと言うべきか、撃った直後に気絶して倒れたが。

「……鬼ね」

「鬼アルな」

「鬼です」

アスナ達がこぼしたその言葉は無視され、綺麗な青空に消えて行った。

ちなみに、エヴァンジェリンはネギの魔力と体力が尽きる寸前まで同じ事を続けさせた。

陽が沈み、辺りは夕焼けによって美しいオレンジ色に染め上げられた。

ハートモーター 訓練初日が終了して、ネギは体力・魔力共に切れてぐったりと倒れ伏している。

「ね、ネギせんせー、大丈夫ですかー？」

「だ、大丈夫です……ただ、体が凄く、だるくて重くて……」

「まあ、魔力も体力も切れたんじゃないやあそうなるのもしょうがないわな」

心配して声をかけるのどかに、何とか声を出してそう伝える。しかし動くのは口だけで、体はまったくと言って良い程反応しない。全身の筋肉と精神がかなり疲労しているのだろう。

それを、アスナや刹那が何処か遠い目をして見ていた。おそらく、最初に「地獄モード」の昴と戦った後の自分達の状態と重ねて見ているのだろう。

「あ……あの、師匠……聞きたい事があるんですが……」

「何だ？」

「その、ドラゴンを倒せるようになるには、どれくらい修行すれば良いでしょうか……？」

「……は？」

いきなりのネギの言葉に、思わず思考が停止する。

「…待て、もう一度言ってみる。ドラゴンだと？」

「はい、ドラゴンです。倒すにはどれくらい修行したらいいでしょうか？」

「そうかそうか、ドラゴンか。そうだなあ………って、アホかー！ーっ！ー！」

叫ぶエヴァンジェリン。その声の影響か、周囲の木々に留まっていたらしい鳥達が数十羽、バサバサと音を立てて飛び立って行く。夕焼け空に、風に乗った多くの羽毛が舞う。

「馬鹿か貴様は！？ 21世紀の日本でドラゴンと戦う事等有る筈が無かるうが！ そんなアホな事を言ってる暇があったら術の効率化をするか新しい呪文の一つでも覚えておけ！！」

「あ、あううーっ！？」

多少は回復したのだろうか、未だに倒れているネギの襟首を引つ掴んで持ち上げて強い勢いで揺らしながらそう言うエヴァンジェリン。もしここに卓袱台があれば、おそらくひっくり返していただろう。取り敢えず、ネギが吐く可能性もあるので揺らすのはやめた方が良いと思う。茶々丸が止めようとしているが、どうも止まりそうにな

「？ ドラゴンって、何かあったの？」

「いえ、信じられないかもしれませんが実は昨日……」

エヴァンジェリンの言った言葉に疑問を抱いたか、アスナが何故か隣に居た夕映に聞く。

アスナの問いに彼女は、ネギがナギの手掛かりを探して図書館島に行った事、自分とのどかも着いて行った事、その地下でいかにも怪しい扉を見つけた事、その扉を開こうとするもネギが言ったドラゴン（夕映曰く「ちよつと大きいだけのトカゲ（しかし目測は約10〜15m）」）に遭遇し追われた事、隠れながら着いて来ていた茶々丸のおかげで何とか逃げ帰って来た事等を詳しく説明した。

「ふふふ、ちよつと大きいだけのトカゲが私の顔に大量の涎を……いつかギャフンと言わせてやるです」

「……なんて言うか、茶々丸さんのおかげとは言え良く無事だったわね、二人とも」

夕映の恨み言に、呆れとも関心とも着かぬ声を漏らすアスナ。竜に出会ってこの態度をしているとは、肝が据わっていると云うか、何と云うか……。

単に恐怖を興奮が凌駕しているだけだろうか？ いつかりベンジすると意気込んでいるが、挑むつもりなのか、この少女は。

「まあいい。今日はもう解散だ、面倒だし」

「あ、ハイ。それでは皆さんも、態々ありがとうございました」

「なんのなんのー」

「いえー…それでは、失礼しますー」

そう言っただけで解散し、のどか達は寮の部屋に戻って行った。何とか歩けるぐらいまでには回復したネギも木乃香達と一緒に帰ろうとするが、ふと何かを思い出したエヴァンジェリンによって止められた。

「っと、そうだ、忘れる所だった。ぼーや、それに近衛木乃香。お前達には少し話がある。帰りはウチに寄って行け」

「え、ウチも？」

エヴァンジェリンの言葉に、名を呼ばれた木乃香が反応した。一体何の話なのだろうか？

「別に取って食ったりはせんから安心しろ。魔法の事について話すだけだ。近衛詠春にも頼まれているしな」

「お父様から？」

「そうだ。まったくあの男、自分は関西から離れられんとか言っただけで私と昂に説明を押し付けたんだよ。自分の娘の事ぐらい自分でやれと言っのに……」

まったく面倒臭い。

そつづつと文句を溢しながら、エヴァンジェリンは茶々丸を連れて自分の家に歩き出した。ネギ達も、少し遅れてそれに着いて行った。

（数時間後）

全てを飲み込む暗黒を思わせる夜空に赤や青、白と言った光を放つ数多の星が瞬き、月が穏やかな、しかし燦然とした輝きを放っている。

都市部から離れた森の中の空気は綺麗な為、普段目にする事の出来ない弱い光の星々さえもハッキリと見る事が出来る。それは大小様々な宝石が散りばめられた様で、実に美しい。

そんな森の中に有るエヴァンジェリン邸では現在、家の主であるエヴァンジェリンが眼鏡を掛けてネギと木乃香に初歩的な魔法講座を行っていた。

……何故か、魔力的な問題で魔法を使えない昴も居る。

「あの、何で私が呼ばれたのですか？ 明日の仕込みとか今日の掃除とか、他にも色々やる事があるのですけど……」

「近衛木乃香に説明する。貴様も近衛詠春に頼まれていただろう」「確かに頼まれてはいましたけど……まあ、仕込みの途中で呼ばれるよりはましですか」

どうやら仕込みをする直前に呼び出されたらしい。

しかしエヴァンジェリンは昴の言葉をスルーし、眼鏡を軽く押し上げ説明を始めた。

「お前達二人の魔力容量は強大だ。これはトレーニングなどでは強化し難い、言わば天賦の才だ。ラッキーだったと思え」

「特に木乃香ちゃんの魔力量は凄まじいですからね。何せ、両面宿儺と言っ、低いとは言え神の一柱に数えられる存在を召喚されても魔力が尽きませんでしたから。極東最大の魔力は伊達ではないと言っ事でしょうか」

「だろうな。だが、それだけでは唯デカイだけの魔力タンクに過ぎん。膨大な魔力はある種アドバンテージにはなるが、どれだけ有ったとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ」

そう言って、エヴァンジェリンはいつの間にか据え付けてあつた黒板にチョークで、デフォルメされたネギと木乃香の絵を描いた。体が丸く、その中に液体の様な物が満ち、それに『魔力』と書かれてる。どうやら今言った様に、二人をタンクに当て嵌めているらしい。

しかし、パツと見タンクではなく水風船のようにも見える。

「使いこなす為にはそれを扱う為の精神力の強化、あるいは術の効率化が必要になっってくる」

そう言いながら絵の下に文を書き、エヴァンジェリンは説明を続ける。意外と教師と言っか、物を教える職が向いてるのかもしれない。結構、様になっっている。

「ちなみに試験の時にぼーやが使っていた、自身に対する契約執行による身体強化だが……」

「はい」

「使っものは禁止する。多少は効率化しているかもしれんが無駄が多すぎる。と言っか、ハッキリ言って無駄の塊としか言えん」

「えっつ！？」

「術式に無駄が多い、身体強化の効率が悪い、魔力の消費効率が凄まじく悪い。と言うか最悪だ。大方、従者に魔力供給する術式を参考に自分に合ったものを組み上げたのだろうか……」

あんなものは参考にすらならん。

そう言いながらどんどんネギの身体強化魔法のダメ出しをして行くエヴァンジェリン。他にも発動までのタイムラグが大きい、魔力に物を言わせて発動させるな等、術式の無駄どころか術者の錬度にもまで言及し始めた。

一切容赦なく問題を指摘しているので、対象となっているネギは涙目だ。それでも泣きださないのは多少なりとも成長したと言う事だろうか。

取り敢えず、このまま放っておいたら話が進まなくなると思った昴が軌道修正した。

「エヴァンジェリン、少年の術式に対する問題の指摘はそこまでにしてください。話がずれて行っていますよ」

「む、まだ言い足りないのだが……」

昴の言葉にエヴァンジェリンが不服そうな声を出す。余程に問題点があったらしい。と言うか、散々指摘してまだ言い足りないのか、この吸血鬼は。

助け舟を出した昴に、ネギが感謝の視線を向ける。

しかし彼は気付いているのだろうか？　これがほんの僅かな時間稼ぎにしかないと言ふ事に。

「まあともかくだ、結局のところ修行あるのみと言ふ事だな。普通に生活しているは、精神力の強化も、術の効率化も出来んからな。それと、近衛木乃香」

「ほえ？」

「夕方にも言ったが、私と昴はお前が望むのなら魔法の事を教えてやって欲しいと近衛詠春に頼まれている。京都でスクナを召喚させられた時にお前の魔力は完全に目覚めているからな。どう言った属性が得意かは分からんが、相応の訓練を積みめば、ぼーやが目指している様な「立派な魔法使い」にもなれるだろうよ」

「ウチが……？」

エヴァンジェリンの言葉にきよとんとする木乃香。魔力に目覚めていると言っても、本人に自覚はあまりない様だ。まあ、魔力を使う様な場面に遭遇した事が京都以来無いので仕方ないかもしれないが。

「そうなれとは私達からは言わんが、お前の道だ。選択の一つとして一応考慮はしておけ。属性が知りたくなったら私か昴に言えば調べてやる。次にぼーや」

「はい」

「今後の事を考えて、お前には自分の戦闘スタイルを選んでもらう。選択次第でこれからの修行方針が決まって行くからな、良く考えて選べ」

そしてエヴァンジェリンは大別して二つのスタイルを提示した。

一つは、前衛は従者に任せて、術者自身は後衛に徹し遠距離から強力な魔法を放ち、敵を倒すオーソドックスな「魔法使い」タイプ。

一般的に、「魔法使いならこれだろう」と言われるスタイルである。もう一つは、自分の肉体に魔力を付与・強化し、従者と共に前線に立ち、『早さ』を重視した魔法を使い、戦場を縦横無尽に駆け巡る「魔法剣士」タイプ。

「魔法使い」タイプよりも火力は僅かに落ちるが、それを補って余りある変幻自在な戦いをするスタイルである。

「『魔法使い』に『魔法剣士』……何か、ゲームみてーだな」
「取り敢えずの分類だ。それにどちらにも長所短所はある。「魔法使い」なら火力はあるが防御と早さが落ちるし、「魔法剣士」なら早さがある代わりに防御と火力が落ちる……小利口なぼーやには、「魔法使い」がお似合いだろうよ」
「何っつーか、どっち選んでも防御は落ちるのな。マジでゲームっばいな……」

カモの言葉にそう返すエヴァンジェリン。確かに、聞いただけならゲームみたいなものだろう。
厳密に言えば、障壁等である程度は防ぐ事が出来るので、そう極端に防御力が落ちると言う事は無いのだが。
その二つを提示されたネギは暫し悩んでいたが、ふと思いついた事を尋ねた。

「あの、一つ良いですか？」

「何だ」

「父さんの……サウザンドマスターのスタイルは？」

やはりと言うべきか、ナギの戦闘スタイルを聞いてきた。おそらく同じスタイルにしたいのだろう。もしかしたら参考にするだけかもしれないが。

「やはり聞いてきたな。京都での白髪のガキとの戦いを見れば分かるように、強くなればこの分け方はあまり関係なくなってくる。だが、あえて言うなら、奴のスタイルは「魔法剣士」。それも従者を必要としない程強力な、だ」

「従者を必要としない……アレ？ 確か昴さんって、父さんの従者でしたよね？」

エヴァンジェリンの言葉に、ふと京都の隠れ家で聞いた事を思い出したネギ。

あの時、確か昴は仮契約カードを取り出して「ナギとのカード」と言っていなかったか？ だったら、ナギと並んで戦っていたのでは？ その事を、いつの間にか夜食として軽い料理を作って持って来ていた（ちなみに材料はポーチから取り出した）昴に聞くと、彼はこう返した。

「確かに私はナギの従者として彼と契約していますが、並んで戦った事はほとんどと言って良い程有りませんでしたね。大抵別々に動いていましたし……まあ、時折サポートはしましたけど」

「どうしてですか？」

「単純にスタイルの違いです。ナギは確かに「魔法剣士」タイプですが、私はどちらかと言えば「魔法使い」タイプです。まあ、私の場合は少々変則的な魔法使いタイプでしたけど、前衛と後衛が別れるのは基本でしょう？」

厳密には魔法使いですらないのですがね。

そう言っただけはエヴァンジェリンや木乃香、空気と化していたアスナと刹那に夜食を配って行った。

その途中、チャチャゼロの居る場所を通りかかった時に、彼女と何かを話し始めた。「ナイフ」「作成」「クリスタル」等、良く分からないが、何やら物騒な単語が聞こえた気がしたが、おそらく気の所為だろう。

それを見ながら、ネギは考える。「魔法使い」と「魔法剣士」、どちらの道に進むかを。

……と言っても、顔を見るにどの道に進むかは決めている様に感じるが。

「まあ、ゆっくりと考えるがいい。木乃香、お前にはもう少し詳し

い話があるから着いて来い」

「了解や、エヴァちゃん」

「エヴァちゃん言うな」

そう言い合いながら、木乃香とエヴァンジェリンは一階に下りて行き、それにやや遅れて茶々丸も、やはり頭にチャチャゼロを乗せて着いて行った。

それを見て、昴も帰り支度を始めた。と言っても、まずは店に行くのだろうが。

「さて、それでは私も戻るとしましょうか。明日の仕込みも有りま
すし……っと、そうだ。アスナちゃん、刹那さん」

「何？」

「今度の休みに、木乃香ちゃんを連れて家に来てください。三人に
渡す物があります」

「渡す物、ですか？」

昴の言葉に疑問符を頭に浮かべる刹那。

渡すのなら、今この場で渡しても良いだろうに。現在持っていない
と言っ事だろうか？

「まあ、予定も無いから別にいいけど。刹那は？」

「私も特に予定はありませんけど……」

「では、次の休みに。それでは」

そう言って昴は階段を降り、下に居たエヴァンジェリン達に挨拶を
してから帰って行った。

50話・緋乃宮邸へ(前書き)

今回、聖剣伝説のキャラクター(?)が出ます。

50話：緋乃宮邸へ

燦々と陽が降り注ぐある休日の昼下がりに。

五人の少女（内二人は厳密に言えば人間ではないのだが）と一人の少年が人も疎らな道を歩き、とある場所へと向かっていた。少年の肩には、此処は自分の指定席、と言わんばかりに白いオコジョが一匹乗っている。

「こーして昴さん家に三人揃って行くんも久しぶりやなー。何や楽しみやー」

「楽しみって、前とほとんど変わって無いわよ？ それに私達だけじゃないし」

「アスナさんは大抵土日に戻っているでしょうけど、このちゃんは、昴さんの家に行くのは大体3ヶ月ぶりと言う所ですから」

「せっちゃんもアスナも、誘ってくれへんもんなー」

アスナと刹那、木乃香の幼馴染三人組はそう談笑しながら昴の家に向かう。前の休日の折、昴に「渡す物がある」と、三人共が呼ばれたからだ。

「昴さんの家ですか：どんな所なんでしょうか？」

「私に聞くな。思えば私も、アイツの家には一度も行った事が無いからな。と言うか、何でばーやが居るんだ？」

「それを言ったらアンタもだろ」

「ゴ主人は家二引キ籠ッテゲームシテルカ、茶ヲ飲ミニスバルノ店ニ行ッテバカリダッタカラナ。珍シイツチャ珍シイワナ」

前を歩きながら談笑する幼馴染達を見ながら、エヴァンジェリン、ネギ、茶々丸がついて行く。ネギの肩にはカモが、茶々丸の頭には

チャチャゼロがそれぞれ乗ってそんな事を言う。
何故昂に呼ばれなかった筈の三人が居るかと言うと、ネギとカモは寮の部屋から出る時について来、エヴァンジェリンと茶々丸は昂の家に行く途中で偶然遭遇し、着いて来たからだ。

「黙れチャチャゼロ。前に緋乃宮アスナが果物とかの採取に連れて行けと言っていたし、私もそれに便乗することにしたのさ。アイツの持つてる魔法球がどんな物か、それなりに興味も有ったしな。丁度いい」

「んな事言つて、ホントはどんなところ興味有ったんじゃねーの？」

「縊り殺されたいようだな？」

「すんませんっしたー！！」

エヴァンジェリンの脅しに、土下座せんばかりの勢い（肩の上なので土下座出来ない）でそう謝るカモ。傍から見ればそれなりに微笑ましい風景で、茶々丸も微笑ましげ（あくまで無表情だが）に見ているが、言葉は物騒極まりない。

そんなやり取りをしつつ歩いて行くと、それなりに大きな瓦屋根の家が進行方向に見えた。見た感じ、二階建ての様だ。家を囲むように塀があり、その塀の上から庭木なのだろう、松や桜の枝葉が見える。庭に鹿威しでも設置しているのか、時折カコーンと言う、何処か心地良い音が聞こえてくる。風流である。

それを聞いて、エヴァンジェリンがピクリと反応した気がした。

門の横の塀に付けられている木製の表札には、やけに達筆な文字で「緋乃宮」と書かれている。

「なんつーか、洋風建築の街並みにこの家は違和感がすげーな…」

ネギの肩の上で、カモがそんな事を言う。

麻帆良学園は基本、西洋の街並みを彷彿とさせる学園都市である。住宅地も街並みに合わせる為か、自然と洋風建築になる傾向があるのだが、その中で、純和風な雰囲気醸し出しているそれは少々どころかかなり違和感がある。日本と言う国で見れば問題は無い筈なのだが、何と言うか、かなり浮いている。

「まあ、普通はそうかもしれないわね。私はもう慣れたけど」

カモの言葉にそう返しながら、アスナは鍵を取り出して門を開く。ちなみにこの家、元々は洋風建築に近い和風建築だったのだが、住人となった昴が『和洋折衷とは言いますが、中途半端で落ち着きません』と言って、アスナが小学校の行事で数日ほど外泊している間に、態々真言を使って部屋の配置や間取り、構造や内装等はそのままだに、外見のみを純和風　何処となく神社の様な雰囲気あり　に作り変えたのだ。洋風建築にしないあたり、彼の好みが透けて見える様である。

僅か一晩で建物が建て替わると普通は周囲が騒ぎ立てする物だが、そこは認識障害結界のおかげか、一切問題にならずに済んだ。帰って来てそれを見たアスナは少々引き攣った笑みを浮かべたが。

「まあ、取り合えず上がりなさいな。スバルも追い返したりはしないだろうし」

そうアスナが言っている間に、刹那と木乃香は既に家に上がっていた。それを見、さらにアスナにも言われてエヴァンジェリンとネギ、茶々丸も靴を脱いで家にかかる。

木の床のひんやりとした感触が気持ちいい。

「スバルー、木乃香連れて来たわよー？」

アスナが家の中のどこかに居るであろう昴を探しながらそう呼びかけるが、彼女達を家に招いた昴からの反応は帰ってこない。アスナはそれに疑問に思いつつ居間や台所、書斎等、昴が居そうな場所を探して回るが、影はおるか気配すらも感じられない。

「おかしいわね、何処に居るのかしら……？」

「何処かに出かけているんでしょうか？」

「アイツの性格でそれは有り得んだらう。何処かで寝ているんじゃないのか？」

「それは無いでしょう。昴さんは昼寝とかはあまりしない人ですから」

そんな事を言いながら、今度はエヴァンジェリン達も参加して昴を探し始める。寝室、離れ、風呂場、庭、盆栽の側の他に、先程探した場所も再度見回る。が、やはり昴の姿は何処にも見えない代わりに、縁側でそれなりに大きく黄色いウサギの様なネズミの様な、四肢は退化しているのか全体的に丸っこく、フワフワの体毛と少々垂れた耳、ウサギの様なフサフサの尻尾とげっ歯類のような歯を持つ、一見ぬいぐるみの様な、可愛らしくも良く分からない生命体を抱いて、実に気持ち良さそうに昼寝をしていたさよを見つけたが。彼女が抱いている黄ネズミ（仮）も、体が僅かに上下している所から見ると、ぐっすり眠っているようだ。

「……むにゃ……」

「……寝てるわね」

「寝てますね」

「寝ているな。と言うか、何だ、この毛玉は？」

穏やかな陽気に包まれて、実にだらしない笑顔でぐっすり眠っているさよを見る。時々ニヤケている所から察するに、それなりに良

い夢を見ているようだ。時折強く抱き締めているのか、さよの抱き枕と化している黄ネズミ（仮）が苦しそうな鳴き声を上げる。

「さよちゃんと一緒に寝とるの、生き物なんやるか？ 何や、かわえーな。触っても大丈夫やるか？」

そんな黄ネズミ（仮）に、木乃香は手を出したり引つ込めたりしている。どうも、触ろうとしているらしい。手を引つ込めたりするのは触って起こしたら悪いと思っっているからだろうか？

そんなさよと木乃香を見て、起こすかどうかを考えるアスナ。昴の居場所をさよが知っている可能性はあるが、こつも気持ち良さげに眠っているのを見ると起こすのを少し躊躇ってしまう。昴なら余程の用事が無い限り起こさないだろう。今はその昴を探しているのだが。

（って言うか、この動物って確か魔法球の中に居た奴じゃない。何で外に連れ出してるのよ）

そう思いながらさよの抱いている丸っこい黄色い動物を見るアスナ。記憶が確かならこの動物、確かウサギ型の魔物の一種。昴はラビと呼んでいた。ではなかったか？

魔物と言っても意外と臆病な種族で、人間（厳密に言えばさよは人間ではないのだが）に近づく事は基本的に余り無い雑魚モンスターで、ペットでもない限り近くに居たら一目散に逃げるか、威嚇するかのどちらかの筈だが……さよに抱かれて嫌がらずに一緒に寝ているあたり、昴かさよのペットモンスターかもしれないが。

だが、もしペットだとしても一応魔物の一種である。魔法球から出す事は昴に禁止されている筈だが……。

ちらりと横目で刹那を見てみると、彼女と目が合った。どうやら彼女も同じことを思っていたようだ。取り敢えず、昴の居場所を聞く

ついでに注意する為に起こす事にした。

「さよちゃん、起きてちょうだい」

「…ん…んん…?」

ゆさゆさとさよの肩を揺ると、多少の間を持って瞼を震わせ目を開いた。昴とはまた違った雰囲気を持つ綺麗な赤い目が現れる。昴の目をルビーと例えるならこちらはスピネルだろうか？ 目覚めたばかりの為か、何処かぼんやりとしているが。

「にゅ…くあゝあ、ふゅ…あ、アスナさん刹那さん、お早うございませ…」

「お早うって言いたい所だけど、もうお昼過ぎてるわよ」

「ふえ…?」

ラビを抱き締めたままゆっくりと体を起こし、寝惚け眼を片手でこしこしと擦りながらさよがそう言う。その動作で、一緒に眠っていたラビも起きたようだ。

「キユウ…」と言う可愛らしい鳴き声を上げてさよの腕の中から出て縁側に降り、フルフルと体を震わせて目を開いた。瑠璃色の丸くくりつとした目が、丸っこい体と垂れた耳に相まって実に可愛らしい。

「かわえーなー、こっちおいでー」

木乃香が腰を屈めて手を出し笑顔でそう言い、エヴァンジェリンと茶々丸、ネギも興味深そうに見ている。カモは何やら対抗心を燃やした目で見ているが。「マスコットの座は渡さん」とか聞こえるのは、きつと気の所為だろう。

しかし見知らぬ人間の為か、ラビは警戒して近付こうとせず、寧ろ

逃げようとしている風に見える。

そんな木乃香達を見やり、カモに対して「アンタはマスコットじゃなくて淫獣でしょ」と思いつつ、アスナはさよに問いかけた。

「さよちゃん、あれって魔法球の中に居たやつでしょ？」

「あ、はい、ラビちゃんです。私のペットです」

「そう、でも駄目じゃない、魔法球の中の生き物を外に連れ出したら。スバルも怒るわよ？」

「あ、それなんですけどね、昴さんが「この子だったら家の外に連れ出さなければ良いですよ」って許可してくれました」

「そうなの？」

「はい」

さよの言葉に僅かに驚くアスナ。昴は基本的に魔法楽器や自作の武器、モンスターを魔法球の中から出す事は許可しない。

それは周囲を混乱させたり、何かの拍子にモンスターが人に襲いかからない様にするためだが、その昴がさよのラビをこの家の敷地内限定とはいえ連れ出す事を許可した。と言う事は、人に襲いかかる可能性が無いと言って良い程に人に慣れているのだろうか？アスナはそう考える。

「ラビちゃん、おいでー」

さよがそう呼びかけると、木乃香達を前に逃げ腰だったラビが「キユッ！」と鳴いてぴよんぴよん飛び跳ねながら彼女に近付いた。そのスピードは意外に早い。

それを見てラビが近寄って来るのを待っていた木乃香が残念そうな声を出す、飛びついて来たラビを若干よろけながらも抱き留めたさよから「触りますか？」と聞かれて喜んで触りに行った。ラビは多少怯えていたようだが、主であるさよが側に居て、さらに彼女が

警戒していない為か少々震えながらも暴れたりはずせ、じつと木乃香に撫でられていた。徐々に気持ち良くなってきたのか、体の強張りも無くなつて行く。それを見て茶々丸も近付き、さよに撫でていか聞き、許可を貰って木乃香と一緒に撫で始めた。そんな木乃香達を見ながら、再度アスナが問う。

「ああそつだ。さよちゃん、スバル何処に居るか知らない？ 今日呼ばれてただけ……」

「昴さんですか？ 確か、保存してる野菜類が切れたから魔法球に採りに行くつて言つてましたけど」

「それつていつ？」

「大体3時間前くらいです。もうそろそろ出てくると思いますが、どうします？」

「待つても良いけど……どうする？ エヴァちゃん」

「エヴァちゃん言つなと言つに……待つているだけと言つのもつまらんし、昴の魔法球がどんなものか興味があるからな、私は行くぞ」

昴の居場所を聞いて、どうするかをエヴァンジェリンに問うアスナ。それを聞き、ラビを撫でていた木乃香達にも聞いて皆が着いて来ると言い、さよも含めた全員を連れて庭の外れに在る蔵に向かった。ちなみにラビも一緒である。

蔵に着くと観音開きの扉を開き、中に入る。蔵の床には魔法陣が書かれ、その中央にエヴァンジェリンの物よりも二回りほど大きな試験管の様な球体が安置されている。試験管の中には古城の様な、遺跡の様な物が浮遊している。

その魔法球を中心として、一回り小さな魔法球が他にも10個程、魔法陣の上に衛星の様に置かれていた。見ようによつては木にも見える配置である。それら一つ一つの中にも、森に囲まれた湖や塔、海、渓谷など様々な環境が存在していた。

「ふわー……蔵の中ってこんなになつとつたんや……」

「これが昴の魔法球か？ やけに多いな」

「天空都市とか、空中都市って私やスバルは呼んでるわ。これら全部が揃って、初めて一つの魔法球として機能するの。中には見ての通り、色々な場所があるから鍛錬にはもってこいだし、中央の都市にはお風呂やスバルの工房、さよちゃんが抱いてる生き物を飼育してる牧場も有るわ。他にも色々とあるけど」

「なんか、凄いですね。こんな物を持つてるなんて……」

アスナの説明にネギが溜息を吐きながらそう言う。

「まあ、取り敢えず中に入りましょ。入り方はエヴァちゃんので知ってるわよね？」

「はい」

「だから、エヴァちゃん言うなと言うのに……」

そつぶつくさ言いながらもエヴァンジェリンは中央の魔法球に近付き、床の魔法陣が一瞬強く光ったかと思ったら次の瞬間には消えていた。それを見て、ネギ、木乃香、刹那、茶々丸、さよの順で続き、最後にアスナが蔵の扉を閉じて魔法球に入って行った。

50話・緋乃宮邸へ(後書き)

出て来たのは聖剣伝説シリーズより、ラビでした。

51話：空中都市

魔法球に入ったアスナ達を最初に出迎えたのは、所有者である昴でも、住人である精霊達でもなく、目も覚める様な青空と都市のすぐ隣を流れる霧の様な雲、都市へと続く長い通路、強い勢いで吹く風、そして上空に存在するが故の冷たい空気だった。

「……寒いな。空中に在るからか？」

魔法球の入口でもある魔法陣の刻まれた、空中都市の外れに在る石畳の広場で周囲を見ながら、月光の様な長い金の髪を風に遊ばせつつエヴァンジェリンがそう言った。吐く息が白く染まり、肌には若干だが鳥肌が立つが、言っている程寒くはなさそうだ。属性が闇と氷だから、冷気に慣れているのだろうか？

チラリと横を見れば雲が幾つも流れており、広場の端から顔を出して都市の下を見ると何処までも雲海が広がり、白と空中都市の影である黒以外の色は見えない。かなりの高度にあるようだ。落ちたらひとたまりもないだろう。と言うか、危険である。

「（ピピッ）気温約 - 20度。気圧やその他から計測して、最低でも高度約4000m以上と思われます」

「高度4000m!? マジかよ!？」

自身に搭載された様々な機能の内、気圧計等を使って高度を計測した茶々丸の言葉にネギの肩に乗っていたカモが驚く。毛皮がある為か、彼はあまり寒くなさそうだ。しかしネギと木乃香の二人は上空数千メートルと言う慣れない環境の為か、寒そうに身を震わせている。と言っても、木乃香に比べればネギはあまり寒そうではない様に見えるが。出身地や育った場所の違いの為だろうか。

「このちゃん、大丈夫？」

「大丈夫やけど、寒いえ……」

「入口のここの気温は常にマイナスですからね。私達は何度も来ていますから慣れていますし、都市に入れば多少は違いますけど……」

「木乃香、取り敢えずコレ着ときなさい、少しは寒さも軽減されるから。ネギとエヴァちゃんも」

「ええい、エヴァちゃん言うなと言うのに……」

さよの説明を聞きながら身を震わせている二人と平気そうなエヴァンジェリンに、アスナは何処からともなく黒いローブを三着取り出し、手渡した。見た感じかなりブカブカだが、三人がそれを羽織った瞬間、何とローブがザワザワと蠢き始めた。

「うわわっ、何ですかコレ!？」

「なんか、動いとるえ!？」

「そんなに慌てなくても大丈夫よ、体型に有った形と大きさに変わるだけだから」

「私達も最初はびっくりしましたけどね。何せ、いきなり動き出すんですから」

「あはは……」

突然蠢きだしたローブに驚くネギと木乃香を尻目に、初めてこの魔法球に入った時の事を思い出して苦笑いを浮かべる刹那とさよ。どうやら彼女達も同じ物で驚いた事があるらしい。まあ確かに、無機物が身につけた途端、ひとりで動き出せば驚くのも無理はないかもしれない。

ちなみにこのローブ、この魔法球に初めて入る人用に昴が普通のローブを幾つか買い、その在り方をアーティファクト《天沼矛》で書き換え、さらに色々と手を加えて魔法具にした物である。決して着

用者の動きを阻害せず、冷暖房機能完備で防御力もそれなりにあり、傷も時間が経てば自己修復し、さらにイメージする事が得意な人ならそのイメージをローブに流す事でデザインを好き勝手に変える事が出来ると言う、無駄に凄い機能を持っていたりする。なお、このローブを作って暫くして、作成者である昴は「何でこんな無駄に凄い機能を……」と頭を抱えたとか何とか。

「ん、終わったわね」

「ほえー、凄いなー。これも魔法なん？」

「魔法と言うか、魔法具みたいですけど」

「似た様な物：かしら？ スバルも私も魔法は使えないから。まあそれはいいとして、行きましようかって、エヴァちゃん早っ！」

形状変化はすぐに済み、無駄に高性能なローブが三人に合った形と大きさに変化したのを確認したアスナはそう言い、都市へと続く通路を進み始めた。前を見ると、既に200m先にさよとエヴァンジェリン、茶々丸が進んでいた。茶々丸の頭に乗っていたチャチャゼロも、珍しく通路に降りてテクテクと歩いている……事は無く、現在はさよのペットのラビに乗って進んでいた。いつの間に乗ったのだろうか。取り敢えず、ラビは相当嫌がっているようである。ジグザグに飛び跳ね、何とかチャチャゼロを振り落とそうとしているようだが、当のチャチャゼロは口デオでもしている気分なのだろう。不気味ではあるが、実にいい笑い声が聞こえてくる。

「キュツ！ キュウツ！！」

「ケケケ、意外ト楽シイジヤネエカ。オラ、モットスピードアゲロヤ」

「キュウウツ！！」

「ケケケケケ」

「あの、あんまり苛めないで下さいねー？」

ラビに跨り、ナイフ片手にそう言うチャチャゼロ。

別に脅している訳ではないのかもしれないが、傍から見たらどう見ても脅している風には見えぬ。そしてラビは、そんなチャチャゼロを背から落そうと躍起になっているようだ。跳ねまわるスピードが先程よりも上がっている。どうやら、さよに抱き枕にされたり、撫でられたりするのには良くても乗り物にされたりするのはかなり嫌らしい。と言うか、本気で嫌そうだ。

しかし、それでも背に跨る彼女が落ちる事はない。バランスを巧く取っているらしく、体が前後に揺れこそするものの、落ちる気配は見られない。それを知ってか、ラビも涙目になりながらさらに強く早くそして高く跳ねまわる。

そんなラビを見て流石に不憫に思ったか、エヴァンジェリンと並んでいたさよがチャチャゼロにその声をかける。じゃれている様なものと分かつてはいるだろうが、流石に自分のペットに嫌がる事をされ続けて黙っている事は出来なかったのだろう。と言っても、彼女の性格もあって強くではなく、やんわりとした口調で、だが。

それを若干呆れた目で見ながら、アスナは木乃香達を連れて通路を進み、さよ達の後を追う。

そして彼女等に追い付き、風を感じつつ談笑しながら暫く歩いていると、石造りの建造物群が視界に入った。

古代ギリシアの都市を彷彿とさせる石造りの町並みは陽に照らされ美しく輝き、時折流れて来る雲に隠れて何処か幻想的に映る。

街の所々には街路樹であるう、陽に照らされて宝石の様に輝く翠が幾つも見える。街の入り口でもある場所で幾つも見えるのだ、実際にはもつと多くあるのだろう。

街の奥には魔法球に入る前にも見る事が出来た古城が見え、これも陽に照らされ、時に雲に隠れては現れてを繰り返している。まるで某天空の城の様であり、それを知る木乃香が思わずと言った風に感嘆の溜息を漏らす。

「はあ〜……キレーやな〜……」

「昼も良いけど、夜も星が良く見えて凄く綺麗よ。凄く寒いのが珠に瑕だけだね」

雲から顔を出す街を見て、うつとりとした感じでそう言う木乃香に、夜の空も中々だとアスナが言う。人口の光や空気の汚れなどがほとんど無いと言っても良い為、星が地上よりも遥かに良く見えるのだ。何故星が見えるのかは所有者にも良く分かっていないのだが。

少しの間入口で街を眺めた後、アスナを先頭にして全員が街に入った。途端、寒さを感じなくなり、強く吹いていた風は勢いを失くして微風の様になる。気付いた木乃香がどうしてかをアスナに聞くと、そう言う術式が都市全体に掛かっているらしいと言った。昴からの又聞きらしい。

それを聞いたネギや木乃香が興味深そうな目で……と言うか、観光者の様な目で街並みを眺めながら歩く。ちょっととした海外旅行気分なのかもしれない。

そんな二人をアスナ達は微笑ましそうに（エヴァンジェリンは呆れた様な目で、茶々丸は変わらず無表情で）見つつ大通りとも言える広い石畳の道を通り、出会った様々な属性の精霊に挨拶しながら

その際に昴が数日前に庭園に向かったとも聞いた 空中都市に在る唯一の移動手段でもあるそれぞれのエリアと空中都市を繋ぐマルクトの門に向かった。

全長3km、幅20mも有る長大な通路 昴は大回廊と呼んでいる には見苦しくない程度に蔓の巻き付いた白大理石で作られた無数の柱が立ち並び、通路の向こう側、第10エリアであるマルクトの門へと来訪者を誘う。

柱に支えられている天井には様々な星座の物語 中には星座の物語ではない物も有るが がそれぞれの物語別に絵として描かれ、その荘厳さはあたかも何処かの王城や神殿に居る様にすら感じ

させる。

「スゲーな。こんなの俺っち初めて見るぜ」

「ふむ、あれはアンドロメダの物語か。あれはヘラクレス……ほう、ブレアデスの七人姉妹やニンフの物語もある。あれは……何だ？

やけに可愛らしい獣に3人程乗って空を飛んでいるが……私が知らない物も幾つかあるか？」

「なんや、おつきな……蛇、なんかな？ やけにおつきいけど、それが街やら山やら飲みこんどるのもあるな。なんやるか？」

「蒼い竜や骨の竜、紅い竜と数人の人が戦っている物も有りますね。これは木乃香さんの見ているのとは違う物語みたいですけど……僕もこんな物語は知りませんね」

「6人の少年少女が、8体の魔物と戦っている物も有りますね。マスターの見ている物語に出ている獣がこちらにも出ています」

天井に描かれた様々な物語を見て考察したり、目を輝かせたりする木乃香達を連れてアスナ達は道を進み、10分以上歩いてようやくよく門のある広場に着いた。

魔法球の入口よりも広い広場から延びる10本の道の先に、それぞれ白、灰、黒、青、赤、黄、緑、橙、紫と言った9色の巨大な門と太陽と樹、月、星の合わさった様な特徴的な文様の刻まれた門が一つ、計10の門が聳え立っている。

「これは、また随分とカラフルだな」

「それぞれ別のエリアに通じているわ。白い門なら王冠ケテルに、青い門なら慈悲ケセドに、って言う感じにね」

「『王冠ケテル』に『慈悲ケセド』？ セフィラの名前だが、何か関係があるのか？」

「この魔法球の名前がセフィロトから来てるのよ。この都市の名前は『生命樹セフィロトの都』で、他の10のエリアにそれぞれ相応しいだろう

セフィラの名前が付けられてるの。ちなみにこの広場の名は『王国^{マルクト}』。他のエリアへの移動を担う門が有る場所で、唯一空中都市に直接繋がっている所よ」

セフィラの順番的には10番目なんだけどね。

そう言つてアスナは、昴が居るだろう『慈悲^{ケセド}』の名を持つ庭園エリアに続く青い門の前に進み出て手を触れる。するとぼんやりとした青い光が門に灯り、奥の方に音も無く開いてアスナ達の通過を促す。気の所為か、開いた門の向こうから風に乗って花の甘い香りが漂ってきている様に感じる。

力を込めて押した様子も無く、ひとりでに開いた門を見上げていたエヴァンジェリン達だがさっさと進んで門を通ろうとしているアスナとチャチャゼロ搭乗のラビ（未だ暴れている）、自分達を見ている刹那とさよに気付き、足早に門へと近付きアスナ達に少し遅れて門を通った。

そして、全員が通過し終えたと同時に門はまたひとりでに閉じ、灯っていた光も消えた。

門を抜けると、広大な平原と森に囲まれた煌く湖がまず目に入った。平原のいたる所に色とりどりの花が咲き、青々とした葉を生い茂らせた木々が生えている。花々の近くには蝶や蜜蜂　中には妖精の様な存在も見える　　が飛び交いその蜜を集め、木には鳥や栗鼠が枝に留まって木の実や若葉を食べているようだ。下には狐やウサギ、野生種のラビも居り、草木の中を走り回っている。

広大な湖は陽光を反射してか虹色に輝き、宝石の様に美しい。湖岸を見ると、四か所から水が流れ出ており、それぞれ河を作り出している様だ。水に何か効力でもあるのか、河の側の植物は周囲の森と比べても非常に美しい深緑色をしている。

「アスナ、ここはどこなん？」

「第4エリア、『慈悲^{ケセド}』の庭園よ。野菜や果物は基本、ここにある四季の森で採れるの。あの湖は癒しの湖って言って、水に浸かれれば怪我とか病気も癒してくれるわ。流石に大怪我とかだったら治るまで時間がかかるらしいけど。ちなみに飲んだら胃腸の調子とかも整えてくれるわよ」

「これが全部庭園ですか!？」

「どう見ても庭園とか言う広さじゃねーだろ！ 森とか有るしよ！」

「そんな事私に言われてもね、私が作ったんじゃないんだから」

アスナの説明に驚くネギとカモ。まあその気持ちは分からないでもない。

何せ湖や河、森があるのだ。庭園と言うには広いと言うか、広すぎると言っても過言ではないだろう。尤も、それは現実世界なら、だが。

「とにかく行くわよ。スバル探さないと……」

「探すとは言うが緋乃宮アスナ、この広い庭園からアイツを探し出すなど出来るのか？ 森一つ見ても数キロは有るぞ？」

「あ、その点は大丈夫よ。大体の場所を知ってるかもしれない人……人？ いや寧ろ植物？に聞くから」

エヴァンジェリンの言葉にそう返しながら、アスナは湖から流れる河の一つに向かい始めた。エヴァンジェリン達はその言葉に対して疑問を持つが、彼女について河に向かい、流れに沿って下り始める。水の流れる音と緑の匂いが心地良い。河の水は透き通り、多くの魚が泳いでいるのが見える。中には60cmを大きく超える物も居る。釣りをしたらさぞかし楽しめるだろう。

そんな河の側を30分近く歩いて下っていると、森の様子が少し変わった。青々と茂っていた樹の葉の中に、赤や黄、紫、白と言った緑以外の色が入り、所々に見た事も無い果実の様な物も見え始め、同時に森の奥から風に乗って甘い香りが漂ってきた。花の匂いとはまた違う、瑞々しく甘酸っぱい果物の匂いが。

その匂いを辿って河の側から森の中へ入り、道なき道　　と言っても、獣か何かを通った様な痕跡は有るが　　を進んで行くと、開けた場所に出た。広さで言えば、野球スタジアム程の広さは有るだろうか。

奥には古ぼけた大木が一本あり、その幹の所々からは太い枝が幾つも飛び出し、ある枝は根の様に地面に潜り、ある枝は縦横無尽に枝を伸ばして広場中に枝葉を茂らせている。見ようによっては、軽いアスレチックにも見えない事もない。

大木や枝葉の全てから穏やかな魔力を感じ、所々にオレンジ色の棘付きの人参や時計の様な造形をしたパイナップルに似た物、サイの顔の様な緑色の何か　　白い網目が有るからおそらくメロンだろう　　がぶら下がっている。他にも何種類かあるようで、中にはエヴァンジェリンをしてそれなりの危険物と言わしめた爆弾力ボチヤ、パンプキンボムも見える。

「ここは？」

「冬の広場。冬って言っても雪とか氷は無いけどね。ここでスバルが何処に居るか聞いわ」

「聞くつて、誰も居ねーぜ姐さん？」

「居るわよ、そこに」

「？ 何処にですか？」

「だから、そこ」

そう言つてアスナは広場の奥を指さした。示された場所をネギ達は見ると、指で指し示した先には、縦横無尽に生い茂る枝葉の大元で

ある古ぼけた巨木が有るだけだった。それに刹那とさよを除いた皆が首を傾げていると、アスナは巨木に近寄って話しかけた。

「トレント、聞きたい事が有るんだけど、いい？」

木に対して話しかけたアスナに、何処か困惑した様な視線をネギやカモが向ける。木が喋る筈が無いと思っているのだろう。しかしその直後、アスナに話しかけられた木が目を開いた。

「へ？ 目が？」

久しぶりだね、主の娘に白い翼を持つ少女、それに闇の理へと至りつつある少女。初めて見る子供達も居るが、君達の友達かな？

「うおおっ！ 木が喋った!？」

「あやや、スゴいな！。ファンタジーや」

目を開き、落ち着いた声音でアスナにそう返した木にカモが驚きの声を上げる。刹那とさよは慣れているのか驚きはないが、ネギや木乃香は目を丸くしてトレントと呼ばれた木を見た。

エヴァンジェリンや滅多に表情を変える事が無い茶々丸も、僅かに目を見開いている様に見える。流石に少しは驚いたようだ。

「親友とクラスメイトね。それと教師と淫獣」

「ここでも俺たちの扱いは淫獣なんスカ!？」

アスナの言葉に嘆くカモ。しかし今までの行動が行動である為、文句を言っても無意味である。これから一生、知っている人間にはそう呼ばれて行くのだろう。

哀れとは微塵も思わないが。

賑やかだね。それに元気そうで何よりだ、精霊達も喜ぶだろう。それで、聞きたい事とは何かな？ 私が知っている範囲、答えられる事なら答えてあげよう。

「スバルの居場所、何処分かる？ この庭園の何処かに居ると思うんだけど……」

主の居場所かね？ 彼なら今、森の奥から此処に向かっているよ。もう暫くすれば来ると思うが……。

「そう、じゃあその間待とうかしら。木乃香達はどうする？」

トレントに昴が現在此処に向かっている事を聞き、アスナは待つかどうかを木乃香達に問うた。しかし初めての場所で、さらに深い森の中で動き回れば迷う事は必至である為、全員がここで待つ事になった。その事をトレントに伝え、太い枝や草の上に全員が座る。

ちなみにこの場ではトレント以外知らない事だが、昴は初めてこの森に入った時、お約束の様に方向音痴を発動して盛大に迷った経験を持つ。と言うか、魔法球内のいたる所で必ず3度は道に迷っていたりする。

皆がそれぞれ、枝や地面に座って談笑したりしながら昴の到着を待つて約20分後、トレントの側の茂みからガサガサと音がした。顔を向けると、探し人である昴が木の枝の様な、所々に葉や蔓の付いた緑色の木製の杖を片手にそこから現れた。相も変わらず、全身黒一色である。

「おや？ アスナちゃん達ではありませんか、何をしていますのです？」

「何してるって、スバルを探しに来たの。前に呼んだでしょ？」

昴の言葉にそう返すアスナ。

彼は少し首を傾げるが、すぐに納得が行った様に僅かに頷いた。

「ああ、そう言えば渡す物が有ると言って確かに呼びましたね。しかし魔法球に入らずとも、外で待っていてくれれば良かったのに」「何時間も待つのも流石にね。エヴァちゃん達も興味有ったみたいだから」

そう言つてアスナが後ろを振り返ると、エヴァンジェリンが上を向いて何かを見ているのが目に入った。視線を追うと、そこには彼女が店で食べた物と同じ、透き通った薄い紫と赤のコントラストが綺麗な球体。ビーダマンベリーが幾つかなっていた。彼女はそれを、じつと見ている。それを見て、トレントが声を掛けた。

採るかね？ 可愛らしいお嬢さん。

「お嬢さんと言つな！ 私はこれでも600歳を超えているんだぞ！」

私の年齢は2042歳だから、私にとっては十分お嬢さんだよ。それで、どうかな？ 欲しいのなら採って貰って構わないが。

「……なら採らせて貰おうか。後で文句を言つなよ」

トレントに対してそう言い返し、エヴァンジェリンは浮遊術を使って浮き上がりビーダマンベリーに近付き、片手で枝と繋がっている所を持ちもぎ取るうとした。

が、彼女が選んだ物は枝との繋がりが存外に固かったらしく、多少

引つ張るだけに終わった。再度力を込めて何度も引くが、一向にもげない。

採り難いなら別の物を採ればいいのだが、ムキになったかかはたまた吸血鬼としてのプライドか、それとも別の何かかは分からないが最初に決めた獲物を意地でも採ろうというのだろう。躍起になって枝から取るうとしていく。

その様子を、地上から茶々丸がじっと見ていた。おそらく映像や画像を残しているのだろう。小さく「記録中」と言っているのが聞こえる。

「トレントさん、ウチも採らせてもらってええやるか？」

「あ、僕も良いでしょうか？」

構わないよ、子供達。望むだけ採って行くと良い。

そう言つて彼は木乃香達にも果物を採る許可を出した。と言つても最初から駄目だというつもりはなかったようだが。

許可を貰つた彼女達は、チラリと昴の方を見た。所有者の許可も欲しい様で、視線には大丈夫か、と言う感情が見て取れる。

別に困る事でもないの、昴は頷いて了承の意を示したが、木乃香と刹那の二人だけ呼んだ。

「何でしょうか？」

「以前の休日に言つた、三人に渡す物を今この場で渡しておこうと思ひまして」

刹那の言葉にそう返し、昴は杖を腰のポーチに入れた。彼の身長4分の3程も有る杖がほんの10cm程度の物に入るのはある種異様な光景である。

微妙な目でそれを木乃香達が見る中、彼はポーチの中をゴソゴソと

漁っていた。20秒程それをして、目的の物を探り当てたのだろう。手をポーチから引き出した。3つの箱が手に乗っていた。

「昴さん、ウチらに渡したい物ってこれなん？」

「はい。京都から帰ってすぐに作成した物です」

「開けていい？」

「どうぞ、貴女達のも物ですから」

三人に一つずつ箱を渡し、アスナの言葉にそう返す。

箱を開けると、アスナの箱には赤い結晶が、刹那の箱には薄緑の結晶が、木乃香の箱には白金の結晶が付いたブレスレットがそれぞれ入っていた。それら三つから、やはり凄まじい程の魔力を感じる。それらとエヴァンジェリンのペンダント、さよのブローチ、アスナの鈴飾りが、まるで共鳴するかの様にキラリと光った。

「これは？」

「貴女達に最も馴染むだろう属性のマナクリスタルを使って作り上げた物です。アスナちゃんには火、刹那さんには風、木乃香ちゃんには光と言つ場合に。それぞれに癒し、防御力補助等の能力と、一つの攻撃魔法を付与しています」

「攻撃魔法？ 昴さんは魔法は使えない筈じゃあ……」

「正確には、魔法楽器で発生させた物を固定し、それらに封入して使えるように細工した物です。疑似魔法楽器とってください。木乃香ちゃんのは、馴染めばそれが発動体の代わりにもなってくれます」

そう言って昴は、ブレスレットに封入した魔法の種類と危険性、その他諸々を説明して、最後に人に言い触らさないで下さいと言って説明を終えた。

その後、昴を除いた皆で果物を幾つか取り、空中都市に戻って昴の料理を食べて三日ほど魔法球の中で過ごし、外に出て解散した。

52話：稽古2

湖の側、さわさわと風のそよぐ草原で、二つの人影が対峙していた。影の一つは木製の長大な杖　見ようによっては槍の様にも見える　を手に持ち、黒衣にローブを羽織った、パツと見二十代前半の男。

顔立ちが中性的で、見ようによっては女性にすら見える。星と月の光を編み上げた様な、幻想的な輝きを持つ僅かに青い銀の髪がうなじで束ねられ、尻尾の様に背中^に流されている。

杖を持った手とは逆の手の指には銀の指輪が一つ有り、添え付けられた石は陽光を受けて緑色に輝いている。

もう一つの影は、こちらも長い髪をしているが、色は男の銀髪とは対照的な、陽光を織り上げた様な輝く金色。光の加減で白金の様にも見える手触りの良さそうなそれは下ろされ、吹く風にサラサラと遊ばれている。

腰に流麗な文様の刻まれた白い鞘を差し、手には植物の様な印象を持たせる特徴的な形のナツクルガードと柄頭を持つ長剣が握られている。長さ1mは有るだろうその剣身はどう言う原理か、植物の様に柔らかな印象を見る者に持たせる薄緑色にぼんやりと、かつ穏やかに光っていた。

歳の頃は17歳程と言ったところだろう。対峙している男よりも背は低く、身体つきはどちらかと言えばスレンダーアクアマレンジェイトながらも出る所は出ているので十分に女性的と言える。藍玉と翡翠アキマリンジェイトに輝く連星の瞳が目を引く、美しい少女だ。しかしその目は現在細められ、油断なく男を見ている。

二人から少し離れた場所に在る湖の側には焚き火とそれに掛けられた水の張られた鍋、二人の荷物が無造作に置かれ、荷物の上には金の毛並みを持つ栗鼠と狐の合いの子の様な印象の小動物が一匹乗っており、対峙する二人を見ている。

『
.....』

互いに無言。男は杖を構えもせず立って少女を見、少女は剣を腰だめに構えて男を睨むように見ている。ピリピリと、張り詰めた空気が周囲に満ち、焚き火のパチパチと爆ぜる音だけが場違いに響く。穏やかな風が吹き、草原を撫で

パチツと、一際高く焚き火が爆ぜた。

『
シッ!』

それと同時に少女が地を蹴り、前に飛び出す。魔力でブーストしているのだろう、体は光に包まれ、その速度は風の如く疾い。衝撃も強かったようで、少女が立っていた場所の地面が多少抉れている。目にも留まらぬ早さで男に接近し、その手に持った剣を袈裟掛けに振るう。その剣筋は鋭く、並の戦士では防ぐ事すら出来ないだろう。高速で男に迫る刃の軌跡に乗って、剣を包む美しく柔らかな薄緑色の光が線を引き、優美な弧を描く。

しかしそれは、ギンツと言う鈍い音を立てて男の持つ杖に防がれた。いつの間にか男も杖を強化していたようで、杖は金色の光を纏っている。続けて何度か剣を振り、遅れて発生した衝撃が男と後ろの地面に奔るが、男には何ら気にした様子も見られない。ダメージは殆ど無いようだ。少女はそれに、やや悔しそうな表情を浮かべる。

暫く鏢迫り合っていたが、剣は杖を断つどころか表面を削ることす

らできない。

『くっ……ハアアアッ!!』

少女は僅かに後ろに下がり、今度は連続で、先程よりも疾く剣を振る。どうやら一撃の威力ではなく手数で攻め立てる事にしたらしい。速度が上がった分、一撃としての威力はやはり落ちる様だが代わりに攻撃速度は尋常ではなく、一息の内に6もの剣戟を8秒間、48の斬撃を男に対して叩き込んだ。余りの速度に、剣を持つ手先が霞んで見える。薄緑の軌跡が流星の様に幾筋もの糸を引く。

しかし男はどう言う反応速度をしているのか、それら全てを手に持つ杖一本で防ぎきった。

『うえっ!?!』

『たわけ、この程度で呆けるな。風よ』

『あ』

『荒べ』

高速の48連撃を、まさか完全に防がれるとは思ってもいなかったのだろう。少女は驚き、動きが一瞬だが止まった。その隙を見逃さず、男はお返しとばかりに杖を振るう。

それを少女は慌てて避けるが、それが悪かった。慌てて避けた為に体勢は崩れ、直後に発生した強風で空中に飛ばされてしまった。

『わぶ、わ、きやああああっ!』

風に飛ばされ、クルクルと空中で回りながら慌てる少女。彼女は実に、地面から30mの高さまで飛ばされてしまった。しかも回っているから酔いそうだ。

少女が落下を始める前に、上を見て男が言う。

『何をそんなに慌てている。別に空を飛ぶのは初めてでは無かるう』
『あ、慌てるなって言う方が無理ですよ！ 自分の意志で飛ぶのはともかく、こう言う風に飛ばされるのは初めてなんですからあ！』

『そうか、それは悪かったな。だがさつさと浮遊術か飛行術を使えでないと、落下の衝撃で死ぬぞ？』

『うええっ！？』

『運が良ければ身体中の骨が砕けるだけで済むかも知れんがな』

『それ死にます！ 普通に死んじやいます！ て言うか、どっちも嫌ですよお！！ し、浮遊^{レリテーション}！！』

男の言葉に慌てて浮遊術を使う少女。落下を始めそうになって使ったそれは何の問題も無く発動し、彼女の体は宙に浮いたまま停止した。安堵の溜息を吐く少女。

『……寿命が10年は縮みましたよ』

『貴重な体験だったな。いい経験になる』

『こんな経験ありませんよう！！』

しれっとそんな事を言う男に、空からギャースカ文句を言い始める少女。気の所為でなければ、目の端に薄らと光る物が見える。怖かったようだ。

しかし悪びれもせずに笑みを浮かべている男を見て顔を赤くし、涙を滲ませ空に浮いたまま詠唱を始めた。両手で構えた剣に魔力が宿る。

それを感じ取り、男は僅かに身構えたが、余裕を崩してはいない。おそらく、初級か中級の魔法を放つつもりだと思っているのだろう。

『レイク・イル・レイズ・レ・デステイネス！』

「む………?」

「我が呼びかけに応え現れよ！ 其は巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆
！」

しかし実際には違った。

聞き覚えのない言に男が顔を上げると、顔を赤くし目の端に涙を滲ませた弟子の姿が視界に入った。初級や中級の魔法ではなく、最高位の魔法に必要な程の膨大な魔力が感じられる。紡がれる詠唱には、千の雷に近いものを感じさせる。

「ミスガルズの守護者の加護もて、来れ、打ち砕くもの！ 灼熱纏
う雷神の戦鎚！！」

「……………ほう?」

詠唱の終了と共に剣から膨大な魔力が溢れ、剣を包み、別の形を象った。男が感心した様な声を出し、少女とその手に在る武器を見る。それは大きな、とても大きなハンマーだった。柄は長く、少女の身長の4倍近くあるだろう。頭には流麗な装飾の施された巨大な直方体が付けられて、柄の装飾と絡み合っている。俗にウォーハンマーと呼ばれる形状だ。

ベースとなった剣の影響か、薄緑色の光を纏っているが全体は燃える様に紅く、実際に場所によっては燃えている。しかしそれだけに留まらず、至る所から稲妻が迸っている。空気の焦げる匂いが立ち込める。

少女が灼熱した戦鎚を振り上げると、彼女の怒りを代弁するかの様にバチリと稲妻が一筋爆ぜた。

「よもやその歳で千の雷から詠唱を変え、ミヨルニルを引き出すとはな。感情の昂ぶりによる魔力増幅の後押しが大きい様だが……素晴らしい。しかし槍でも剣でも無く、戦鎚か。別に差別する気はな

いが、あまり女子らしくない武器だな』

『お師匠様の……お師匠様のおお……!!』

『ふむ、流石にそれを喰らえば、いくら私でもただでは済まん。

其は五つの切っ先持ち雷宿す灼熱の槍。ゴリアスより来る、女神ダヌの民の四宝。祖父たる魔眼の王を殺し、勝利を齎せ、貫くものよ。顕現せよ、光神ブリューナク振るう灼雷の神槍』

そんな事を言いながら言葉を紡ぎ、男は自身の杖に光と炎、雷を魔力と共に叩き込んだ。溢れんばかりに叩き込まれた魔力が炎や雷ごと杖を包み込み、その形を長く、そして巨大に変える。

数秒後には杖の姿は何処にも見えず、男の手には穂先が五つに分かれた輝く巨大な槍が存在していた。少女のミヨルニルとは違い、こちらには装飾は一切ないが、それでも見る者には美しいと感じさせる気品が有る。

直後、少女の手に在るミヨルニルが振り下ろされた。

『バカアアアアアアアアッ!!』

『取り敢えず、お前は感情の制御もする必要が有るな。と言うか誰がバカだ、この馬鹿弟子が』

カ一杯振り下ろされたミヨルニルに、ブリューナクの切っ先を突き出す。衝突と共に凄まじい衝撃が発生し、炎や雷が荒れ狂い、草原は焼かれ地が裂けた。

が、それもその一合だけの事。僅かな拮抗の後、振り下ろされたミヨルニルを突き上げられたブリューナクが貫き、形成していた魔力ごと雷の戦鎚を四散させた。炎や雷属性に染まった魔力が、キラキラと振り注ぐ。

『え……』

四散したミヨルニルに少女は呆然とし、振り下ろした態勢のまま固まった。散らされた事から既にミヨルニルは剣に戻り、穏やかな光を放っている。

そんな弟子に、槍を杖に戻しつつ飛行術を使って高速で近付き、男は拳骨を叩き込んだ。

『ふきゆうつ！？ な、何するんですか！！』

『置きだ、この馬鹿弟子が。兵装を引き出したのは素晴らしいが、感情のままに振るうたわけが居るか。……… 剣を貸せ、抉れた草原を復元する』

『え、あ………』

そう言つて男は少女の手にある剣に手を向けた。すると剣は少女の手から離れ、鞘と共に男の手に収まった。薄緑の光が強くなる。

『剣よ、我が意を糧とし世界に映せ。傷付きし物を癒し、消え去りし物を復元せよ』

男の言と共に剣が光を放つ。温かな光が草原に降り注ぎ、吹き飛んだ場所を包み込んだ。そして、殆どの場所を光が包んだ事を確認した男は剣を払った。

光が爆ぜ、草原に薄緑の粒子が舞う。気付けば炎で焼かれ、雷で穿たれ破壊された草原は元の姿を取り戻していた。ついでに拳骨で出来た、弟子の頭のたんこぶも癒して。

『まあこんな物でいいだろう。で、馬鹿弟子。あの言は何だ？』

『ふえ？』

『ふえ？ではない。詠唱の前に聞き覚えの無い言を連ねただろう。レイク・イル・レイズとか言っていたが、何だあれは？』

剣を鞘に収めつつ、心底疑問に思っていると言う風に男は少女にそう聞いた。

『えと、兵装については？ あれ、結構自信あったんですけど』

『ミヨルニルを引き出した事は見事の一言だが、一合で砕けた物をどう評価しろと言うのだ？ まあ、あえて言うならまだまだだな。』

イメージが決定的に欠けている』

『あつ……』

『で、それを引き出した詠唱の前に付けた言は一体何だ？ アレに意味は有るのか？』

『えと、詠唱の前に付けたらカツコイイかなーって……意味については、今から詠唱しますって言う事を精霊達に教えるんですけど……』

……』

『……色々と言いたい事は有るが、まあ、今回はいいだろう。復習等を忘れない様に』

『はいっ』

そう言つて男は焚き火の側に歩いて行き、荷物の中から食材を幾つか取り出し、何かを呟いて鍋の中に入れた。途端にいい香りが漂い、食欲を増進させる。少女も後を追ひ、焚き火を挟んで男と反対側に座り、料理が出来るまでの間、術式の事などについて話し始めた。

ネギ達が昴の魔法球に入り、木乃香とアスナ、刹那の三人が昴製の魔法具を貰い、果物を採取してから暫く経ったある日の事。ネギは

教師の仕事をする傍ら、エヴァンジェリン、チャチャゼロ、茶々丸の三人を相手に昴の魔法球にある、峻巖の名を冠した修練場で稽古をつけてもらっていた。

いつもならエヴァンジェリンの魔法球で訓練するのだが、偶には別の環境で、との事でエヴァンジェリンが昴に掛け合い、使わせてもらっているのだ。ちなみにアスナと刹那、ついでにさよも、昴相手に稽古をつけて貰っており、木乃香はそんな全員を魔法書片手に見ている。どうやら魔法を習う事にしたらしい。

魔力を込め、さらに吸血鬼としての身体能力を以て繰り出された掌底を食らい、ネギは吹き飛ばされ、何度かバウンドしながら床を転がる。

それを追って茶々丸が肘からジェット噴射し加速した拳で、チャチャゼロが逆手に持った二振りのナイフで襲いかかる。

「くっ……風花・風障壁!!!」
フランス パリエース・アエリアリス

しかしすぐに体勢を立て直し、ネギは風の障壁を展開する。彼の周囲に強風が発生し、二人の攻撃を防ぐ。

「へぶっ!!」

……が、障壁が発生するのはほんの一瞬。攻撃を防ぐと同時に障壁は掻き消え、直後に茶々丸に頭を掴まれ床に叩きつけられた。そしてチャチャゼロがネギの頭のすぐ近くに、笑いながらナイフを突き刺す。

ザゴン、と鈍い音一つ。かなり鋭いのだろう、刀身の半分が石畳に埋まった。

「うひいっ!?!」

目の前に突き立てられたナイフの威力に思わずネギは悲鳴を漏らす。陽の光を受けキラリと輝くそれは、まるで血に濡れている様にも見えたと。

それを見てカタカタ震えるネギの頬を、エヴァンジェリンが腕を組みながらむにむにと踏む。

「へみゅ」

「どうした、まだたった10秒だぞ。いくら3対1とは言え、せめて1分は持たせる、でなければ話にならん。あの白髪の少年には相手にすらならんぞ」

「ぐ……」

「へたれている暇はない。さらに行くぞ」

エヴァンジェリンはそう言うと、踏んでいたネギを蹴り飛ばした。5mほど宙に浮くネギ。それを追ってエヴァンジェリンも跳躍し、腕を掴んだ。

「加減はしてやる、耐えてみる」

「あうっつ！？」

「ケノテートス アストラブサトー・リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、デ・テム来れ、ケノテートス アストラブサトー・虚空の雷、デ・テム薙ぎ払え」

無詠唱で2、3本の魔法の射手を零距离で放ち、ネギを吹き飛ばしたエヴァンジェリンは追いながら詠唱を連ねる。それを聞いて、ネギは慌てて障壁を張る。

紡ぐ詠唱は、威力は中程度だが出が早い、雷系の攻撃魔法。

ディオス・テュコス
「雷の斧」

詠唱が終わると同時に振るわれる腕。そこから放たれる斧の形をした巨大な雷。襲いかかるそれをネギは障壁に魔力を注ぎ、強度を上げて防ぐ。

「今のが決めとしてそれなりに有効な雷系ハイ・エンシェント上位古代語魔法、ディオス・テュコス雷の斧だ……っておい、聞いているか？」

「し、しび……しびび……」

加減されていた事もあってそれを防ぐ事は出来た……が、どうやら電撃までは防ぐ事が出来なかつたらしい。火傷は負っていないが、麻痺してしまつたようだ。

「やれやれ、だらしないな。雷の属性は副次効果として敵を麻痺させる事ぐらい知っているだろうに」

「あうあうあ……」

「……聞いちやいないな。では貴様の耳に絶対に入る事を言つてやろう。今の連携はサウザンドマスターが好んで使っていた物でもある。今の貴様にはまだ無理だが、いずれ覚えておいて損は無いぞ」

「父さんが……？」

エヴァンジェリンの言った通り、本当にネギの意識に入ったようだ。とことんまで父親が好きらしい。エヴァンジェリンも、呆れた様な目で見ている。

そんな眼差しを未だ麻痺から回復していないネギに向けながら言った。

「取り敢えず、休憩だな。回復したらまた2時間程戦闘訓練をする」

「は、はいっ！」

そう言つてエヴァンジェリンは修練場の端の方に居る木乃香の方に

歩いて行った。拗っているかどうかを聞きに行ったようだ。木乃香も、近付いて来るエヴァンジェリンに気付いたようで、小走りに近寄りどうやればいいのか聞き始めた。

それを倒れたままで見ながら、ネギはふとある存在を此処に入った時から見ない事に思い至った。

「そう言えば、カモ君何処に行ったんだろう？」

その呟きは誰の耳にも入らないまま、上に広がる青空に消えて言った。

ネギとエヴァンジェリンが訓練していた場所から少し離れた場所で、昴はアスナと刹那、さよの三人を相手に稽古をつけていた。

前衛二人に後衛一人と言う、それなりにバランスの良いパーティーだ。

「魔法の射手、セリエス連弾・闇の28矢！」

さよの声と共に、前方から総数28本の闇属性魔法の射手が高速で昴に襲いかかる。ちなみに無詠唱だ。

闇のマナクリスタルの影響で闇の精霊になりつつある彼女は、他の属性は難しいが闇属性の魔法なら無詠唱で発動できるようになりつつあるのだ……今のところ、魔法の射手だけが。

黒紫の軌跡が流星の様に糸を引き、アスナ達もそれを追うように空を駆ける。

「速度も密度も申し分ないですね。しかし……真直ぐすぎます」

高速で迫る闇の矢を、昴は多少引きつけてあっさりと回避した。壁でもある岩盤に辺り、岩が砕け散る。

「ある程度は誘導が効くのですから、もう少し意識すればいいかもしれないですね」と

「斬空閃！」

さよの魔法の射手に少々のアドバイス？をしながら昴は横に飛び、アスナの斬空閃を回避する。連続で放たれるそれを、剣の振り方だけで何処に来るかを判断し回避するその姿はあたかも舞を舞っているようだ。

「せあっ！」

「つと、疾いですね。ですが殺気は出来るだけ抑える様に。気付かれやすくなりますよ？」

翼を広げて上空から切りかかる刹那に回避しながらそう言い、昴は何処からともなく白いドラムを取り出し周囲に浮かせた。指を一振りすると、それがひとりでに動き出し、音を奏でる。

「詠いなさい、光の精霊ウィル・オ・ウィスプ。秘めし光を、剣として解き放て。ホーリーセイバー」

「うえっ、光!？」

「さよちゃん下がって！」

昴の言葉と共に響くドラムの音。同時に彼の周囲に数本の光で出来た剣が現れ、三人に襲いかかる。が、それらはアスナが前に出ると彼女に当たる瞬間に跡形も無く消え失せた。彼女の持つ完全魔力無効化能力で無効化されたのだ。

「刹那！」

「来れ！」

シーカ・シシクシロ

「来れ！ ヒ首・十六串呂！ 行けっ！！」

「む？」

呼び出されたアーティファクトが、主である刹那の命を受けて高速で飛翔し昂に迫る。それらは八本が昂の周囲を囲う様に飛翔し、八本がその合間から襲いかかる。

「む、器用な使い方をしますね。ですが、これだけでは当てる事など出来ませんよ？」

飛び交うアーティファクトを回避しながらそう言ってドラムをしまい、今度は薄い翠の笛を取り出した。触れると、これもまたひとりでに音楽を奏で始めた。マナが吹きあがる。

「風の精霊シルフィード、我が周囲に吹き荒れよ。サイクロンフラワー」

その言葉と共に花弁を含んだ風が吹き荒れ、飛び交っていた物、突っ込んで来ていた物を含めて全ての刃が吹き飛ばされた。

そして刹那達の方を見ると、今度は黒い暴風が突っ込んで来ていた。その向こう側を見ると、さよが両手を翳して魔法を放っていた。どうやら先程の内に詠唱を済ませておいたらしい。

流石に少々焦り、虚空瞬動を使って回避する。しかしそれを狙っていたようで、移動した場所に先回りしていたのだらう。アスナと刹那が剣を振りかぶっていた。それぞれ、咸卦の気や純粋な気に包まれている。また、周囲にはヒ首が浮かんでいる。

そして、剣が電撃を纏い始め、さよの居る方から魔力の昂ぶりと詠唱が感じられる。

「おや、これは……」

『雷鳴剣!!』

ニウイス・テンベス・オプスクランス
「闇の吹雪!!」

若干頬を引き攣らせた昴に対し、問答無用で放たれる二つの雷撃と16の刃、そして闇を纏った吹雪。それらを見て、昴は何かを呟く。直後、雷撃と吹雪がぶつかり、刃の破片を散らせながらもうもうと煙を立ち昇らせた。アスナ達はそれでも気を抜かずに煙の中心を見ていた。

が。

「はい、お疲れ様でした」

「え!? (シパアンツ) はびうっ!？」

「(シパアンツ) ふみゅっ!？」

「(シパアンツ) あいたっ!？」

いきなりアスナの背後から声が掛かり、振り向くと同時に頭に叩き込まれるハリセン。どうやら転移したらしく、それらはどう言う訳か、離れた場所に居た刹那達にも同時に叩き込まれたらしい。頭を押さえて蹲っている。……宙に浮きながら蹲る、と言うのも妙な物だが。

「はい、これで375戦375勝0敗ですね。残念でした」

「うっ……また当てる事も出来なかった」

「と言うか、今度は槍も出させてませんよ……」

昴の終了宣言に嘆くアスナと刹那。どうやら、未だに当てることから出来ていないらしい。さよも、何処となく残念そうだ。そんな三人を見ながら、昴が言う。

「いえ、所々危ない所もありました。それでも避けきれたのは戦闘経験の差が有るからです。あと、三人共真直ぐすぎるのです。それではすぐに読まれてしまいますよ」

そう言うと、またがっくりと肩を落とす三人。

「しかし強くなりましたね。私は真言を使つつもりはなかったのですが……最後の転移で使つてしまいました」

「え……あ」

が、そう気落ちする事ばかりではないらしい。昴の言葉を聞いて、アスナと刹那の顔に喜色が浮かぶ。さよも、良く分かっていないようだ。が何処となく嬉しそうだ。

「では、本日の稽古は此処まで。少し休んだら空中都市に戻りましょう。雫を作つて置いてあります」

「雫!?!」

雫の一言でアスナが反応した。過剰反応と言っても良い程で、刹那とさよもビックリしている。しかし、そんなこと知らんとばかりにアスナは昴に問う。

「雫つて、もしかして緋の!?!」

「はい、そうです。しかしアスナちゃん、そこまで反応しなくても……って、行つちやいましたね。何とまあ速い事で」

昴に確認を取ると同時に連続で虚空瞬動をして門に向かうアスナ。稽古で疲れている筈なのに、疲れた様子が微塵も見られない。

昴はそれに若干呆れた様子だが、すぐにいつもの笑みを浮かべて修煉場に降り、エヴァンジェリン達に声を掛けてから門に向かった。

ちなみに、エヴァンジェリン達も付いて空中都市に戻った。

52話・稽古2（後書き）

その頃のカモ

空中都市、大回廊の先にある王国の門で、ポツンと彼は佇んでいた。
そして一言。

「……………兄貴達、遅えなあ……………」

どうやら彼一人だけ門を通る前に門が閉まってしまったらしい。哀
れ。

53話：黒い足音

街灯も無く、闇に沈んだ暗い夜道を、ぼんやりとした月明かりだけを頼りに駆ける人影が一つ。

小さな影だ。闇や木の影に紛れて分かり辛い、大きさとしては小学生中・高学年位と言ったところだろう。もしかすれば低学年にも見えるかもしれない大きさだ。

草叢を掻き分け、木の枝を飛び移り、息を切らせながら走る何者かは、ただ真直ぐに進んでいた。愚直に、只管真直ぐに、ある場所を目指して。

ざつ、と言う音を立てて草叢から飛び出し、月明かりに照らされその姿が露わになる。

少年だった。実に纏う物は黒の学生服で、前を肌蹴て白いシャツが見えている。しかし争いでもあったのか、学生服は上下ともにボロボロだ。

歳の頃は9歳か10歳と言うところだろう。小学3年かそれくらいの男の子だ。まだ幼さの抜けきらない、何処にでも居そうなやんちゃ坊主と言った風貌である。それだけならば。

少年の体には普通の人間には無いものが有った。頭には犬や猫の様な、三角に尖った耳が有り、それはピクピク動いていた。時にはピントと立ち、ピクリピクリと忙しなく動く。どう見ても本物としか言えない様な動きだ。尾？骨の部分には尻尾の様な物もある。

笑えば可愛いだろう、やんちゃそうで、しかしどこかに愛らしさも秘めたその顔には現在、誰の目にも明らかな焦りが滲んでいる。

彼の名は犬上小太郎。先の京都での木乃香誘拐事件の折り、西洋魔術師が気に入らないと言う子供じみた（実際まだ子供だが）理由から主犯である天ヶ崎千草に加担し、一度と無くネギと戦い（二度目は長瀬楓に邪魔されたが）足止めした、狗族とのハーフである少年である。

事件解決後は罰として、術を封じられて関西呪術協会の懲罰房（反省室とも言う）に入れられていた彼が、何故外に出ているかと言えば答えは単純、脱走したのである。

彼が牢に入れられてポーっという時に、先の事件で一応の協力関係にあったフェイト・アーウエルンクスが突如何処からともなく現れ、「逃がしてやる代わりに、戦力分析のついでにネギを襲え」と言っ

て来たのだ。
だが幼いからか、それとも生来の気質か、良くも悪くも真直ぐすぎる小太郎はそれを拒否した。理由としては、「闇討ちとか男らしくない」かららしい。彼なりの美学と言うものだろうか。

それを断られたフェイトは元々あまり期待していなかったのか、あっさりとの元から去るが、小太郎の代わりに何処からか入手した魔族の封印された瓶を使用し、封印されていた魔族を解き放つて麻帆学園の調査とネギ達の分析を依頼した。当然と言うべきか、解放された魔族は依頼に則り、一緒に瓶に押し込められていた使い魔の様な何かを連れて学園に向かった。

しかしその情報を一体何処から入手したのか、小太郎は懲罰房を破壊し無理矢理脱出した。だが無理矢理脱出したので当然無事とは言わず、体の傷こそ持ち前の回復力で殆ど癒えている物の、狗神召喚や獣化等、能力の大半を封じられたままである（それでも気弾等は使えるが）。

そして彼は現在、己がライバルと定めたネギに危険を伝える為に京都から麻帆良学園まで、全速力でフルマラソンしていた。

「ハアツ、ハツ……急がな……」

既に数時間、数十キロの道を走破して尚、彼は走る。

迫る危険を、自分が唯一認めた少年西洋魔法使いに伝える為に。

サアア……と、静かな音を立てながら雨が降り注ぐ。強くも無く、かと言って弱くも無い勢いで振り続けるそれは、例外はあるものの多くの人達の気分を滅入らせる。そしてそれは、この男も同じだったようだ。

「はあ……」

月に一度の喫茶店の定休日である今日、昴は西洋建築の街並みにそぐわない事この上ない和風建築の家で、溜息を吐きながら久しぶりに自身の数少ない趣味の一つである小物作りをしていた。傍には金銀二種類の粘土とヘラ、ピンセットその他多様な専用の道具と水を入れた容器、大きさの違う数種類の宝石を置いている。が、その手は殆ど動いていなかった。頬杖をつき、憂鬱そうな溜息を頻繁に吐いている。どうやら、あまり雨が好きではないらしい。

「何でよりもよって、月に一度の定休日当日に降りますかね。天気予報では降るのは明日の筈なのに……まあ、貯水量が多少なりとも増えると考えれば良いですか。最近、晴れ続きでしたし、水の量もそれなりに心配でしたし……」

ぶつくさと、そんな事を言いながら宝石の一つを手に取り、灯りを当てる。

半球状にカットされ、宝石自体の輝きが際立つそれには、中央から六つの線が放射状に浮かび、石の中に星が閉じ込められた様な印象

を与える。スター効果と言うやつだ。

ぼんやりと「これはどんなアクセサリに合いますかね」と思いながらそれを見てみると、ふと自分の右手にある指輪が目に入った。

数年前、京都でドッペルさんと遭遇した後手に入れ、詠春に頼んでお直しして貰い、しかし指に嵌めて以来外れなくなつた指輪だ。アレキサンドライトを使用しているらしく、嵌められた石がスペクトルによつてその色を赤と緑の二色に変える。

現在は蛍光灯の影響で緑色に輝いている。

なんとはなしにそれをじつと見てみると、何故か先日の夢 見

知らぬ男女が修行と言う名の戦闘で草原を吹き飛ばす夢 が頭

に浮かんだ。

「……そう言えば、夢を見始めたのは京都でこれを拾つてからでしたっけ。どう考えても、夢と関係ありますよね……何らかの魔法具か呪具でしょうか？ 洗剤を使つても外れませんし……思えば、何故拾つてしまったのでしょうか？」

謎です。

そう言つてまた、昴は自分の指に在る魔力も呪力も感じないのに外れない指輪を見た。楕円の宝石を囲う様に、銀で象られた蔓が指輪全体に象嵌されている。

何故か、夢で見た剣の装飾を思い出す。目を閉じると、まるで直に見、手に持つたかのように鮮明にイメージできる。

植物の様なナツクルガードはまるで鳶の様で、柄頭から剣身の半ばまで伸びている。

緩やかな曲線を描く両刃の剣身は細身で、女性的な印象を持たせるそれには流麗な文様が浮かんでいる。

金に輝く鍔は、まるで鳥が翼を広げている様で。

そこまでイメージした所で、ふと思いついた様に常に腰につけているポーチを探る。家の中でくらい外せば良いだろうに。

ゴソゴソと手を動かし、取り出したのは二枚の仮契約カード。
アーティファクトを携えた自分が映っている、ナギを主とした仮契約カードと、アスナとの仮契約で出来たカードのマスターカード。
自分のアーティファクト、触れていると認識した物全ての在り方を、自身のイメージ通りに書き換える天沼矛と、魔力や気を以て引き起こされた現象全てを否定し、消滅させるアスナのアーティファクト、ハマノツルギ。

夢で見た剣とは形も大きさも、何もかもがまるで違うそれが何故か、夢の剣と同じに思えた。

「……何を馬鹿な。形も能力もまるで違うと言つのに、何故そんな事を思っているのでしょうかね、私は」

どちらかと言えば、似ているのはアリカさんの持っていた黄金の剣の方でしょうに。

そう言つてポーチにカードを戻し、机の上に置いていた道具と材料を片付け、立ち上がった。

ずきりと、僅かに頭に痛みが奔る。しかしその痛みはすぐに消え失せた。

「興が乗りませんね。物作りはやめて、本でも読んで時間を潰すと思いますか。何を読みましようかね。書齋の本は全て読み尽してしまいました^{ダクト}が、知識の書庫なら、様々なジャンルの本が読み尽せない程ありますし、退屈はしないでしょう」

厄介極まる危険物も有りますが。

そう言つて昴は廊下を歩き、庭に出て傘を差して蔵の方に歩いて行った。

「ん……？」

しかし何かを感じたか、半分ほど進んだ所で立ち止まり、ある方向を見る。庭木や塀によって遮られている為、街を見る事は出来ないが、この男には何か見えているのだろうか。
サアア……と言う、雨の降る音だけが静かに響く。

「今、都市に何かが入り込んだような………気の所為でしょうか？」

はて？と首を傾げる。

そのまま暫くじっと塀の向こうの何処かを見ていたが、気の所為だったと言う事にしたのだろう。視線を蔵の方へと戻し、水溜りの在る庭を歩いて扉を開き、蔵に入ってしまった。

綾瀬夕映は困惑していた。

授業中、かなり疲労気味でフラフラになっていたネギに疑問を感じた彼女は、親友の宮崎のどかと一緒に、エヴァンジェリンと一緒に何処かへ向かうネギを尾行した。

途中でネギ達にアスナと木乃香、刹那が、自分達に朝倉和美と古菲が合流して結構な大所帯になり、街行く人々に怪訝そうな目で見られた（そう見られたのは勿論夕映達である）が、然程気にせずに行を続行。

エヴァンジェリン邸に入って行った彼ら彼女等を、本人達は微塵にも思っていないだろうが不法侵入上等で追跡し、自分達も家に上が

った。家主の許可も無く。

しかし上がった家の中には誰も居らず、ネギ達の姿を探して家の中を歩きまわった。

途中で古菲が何かを思い出したか、「もしかして……」とある場所に向かい、地下室への入口を見つけ、多くの人形が安置されたそこを通り、魔法球の安置された部屋に出た。

初めてそれを見た夕映達は当然魔法球と分ならず、精巧なミニチュアとして興味深そうに見ていたのだが、いつの間にか古菲が居なくなっており、彼女を探して歩き回っていたのだが

「……………何処でしょうか、ここは？ 私は確か、地下室に居た筈ですが……………」

気付けば、風景が何も無い地下室から青空へと変わり、彼女は何処かの塔の頂上へ立っていた。

水平線には雲が浮かび、蒼天には鳥が飛んでいる。気温は高いがジメジメする様な暑さではなく、赤道付近の南国を思わせる。

床に円と五芒星の描かれた塔の端から顔を出して見ると、薄雲を挟んで遙か下方に青く輝く海が見える。かなりの高さだ。思わず膝が震える。

「あれー…ここって…………？ あ、ゆえー」

「外…だよね、どう見ても。何かさっきのミニチュアっぽい所だけど……………」

背後から聞こえた声に振り向くとそこには一緒に古菲を探していた朝倉と宮崎が居た。二人とも、興味深そうに手摺の無い橋と、その向こうに在る建物を見ている。

「のどか、朝倉さんも…………遅かったですね。待ちくたびれたですよ」

「遅かったって、アンタが居なくなっただけよ、2分だよ？ 待ちくたびれる程じゃないと思うけど」

朝倉のその言葉に、夕映が言い返そうとした。しかし、

「お、ようやく来たアルか」

いつの間にか、橋の側に居なくなっただけだと思っていた古菲が立っていた。

「クーフエ、アンタ何処に居たのさ？」

「それよりも、此処は何処なのさ？ 私達はエヴァンジェリンさんの家の地下に居た筈ですが」

「私アルか？ 私はエヴァンジェリンの所に行ったアルよ。此処の事については、何と言ったアルか……まあ、エヴァンジェリンやネギ坊主が色々説明してくれるアルよ」

そう言っただけで古菲は橋を渡り、繋がっている広場の方へと歩いて行った。夕映達も、ここでじっとしていても得る物は無いと思ったのだらう。古菲の後を追う様に橋を渡った。

………夕映とのどかは、足が震えて渡り切るのに20分近くかかったが。

そしてエヴァンジェリンに会った直後、不法侵入の事で当たり前だが盛大に怒られた。

夕映達がエヴァンジェリンの家に入った、ほぼ同時刻。降りしきる雨の中を、二人の少女が一つの傘に入って歩いていた。俗に言う、相合傘と言うやつだ。

と言っても、傘に入っている二人は単なるルームメイトであって、恋人でも何でもないのだが。

二人の名前は、頬にそばかすの有る少女が村上夏美。演劇部に所属し、騒がしさが売り（と言って良いのかどうか）の3 Aメンバーの中で、比較のおとなしい少女である。

その隣を歩く、左目に泣き黒子のある少女の名前は那波千鶴。天文部に所属し、ボランティアで保母の仕事を手伝っている少女だ。ちなみに昴の喫茶店の常連の一人でもあり、ケーキなどを良く買って行く。

実家は友人であり、もう一人のルームメイトであり、財閥の娘でもある雪広あやかの家には匹敵する。つまりお嬢様だ。また、逆らい難い威圧感を出す事も有る女性でもある。

「ネギ先生、大丈夫かなー？ フラフラで、しかもやつれてたけど……」

「風邪かしらねえ？」

「いや、ちづ姉。風邪でやつれる事は無いんじゃない？……？」

どうやら、二人はネギの容体の事で話していたらしい。

声音や表情、雰囲気からそれなりに心配している事が感じられる。

まあ、まだ十歳なのに疲労困憊でさらにやつれていたのだ。心配しないと言う方が無理だろう。

「あら……？」

「どしたの？ ちづ姉」

「行き倒れよ、夏美」

「へ？ 行き倒れ！？ ど、何処に!？」

突然さらりとそんな事を言われ、夏美は慌てふためき、キョロキョロ口周りを見渡す。それを落ち着かせ、街路樹の下のある場所を指差した。

黒い毛並みの犬が一匹倒れていた。額に何か、文字にも見える奇妙な模様が有る。

「あ、行き倒れって、犬？ 何だ、ビックリした」

「この子、弱ってるわね。しかも怪我してるわ」

「わ、バツチくない？ ちづ姉」

傘を渡し、何の躊躇いも無く犬を抱き上げた千鶴にそう聞く夏美。

暫く何かを言っていたが、二人はその犬を自分達の部屋に連れて行った。

54話・ネギ、夢への誘い（前書き）

タイトルに意味はあんまりない……はず。

54話：ネギ、夢への誘い

「は？ 魔法を教えて欲しい？」

不法侵入についての説教が終わった後、茶々丸に早めの夕食の準備をさせている中、突然「魔法を教えて欲しい」と言ってきた綾瀬夕映と宮崎のどかに、エヴァンジェリンはワイングラス片手にそう聞き返した。

「はいです。聞けばネギ先生だけでなく、木乃香さんもエヴァンジェリンさんに教わっていると言うではありませんか。私達にも教えて欲しいのです」

「お、お願いしますー……」

「フン、断る。私がぼーやと近衛木乃香に教えているのは、ぼーや自身が試験を突破したのと、あいつの親にあれが望むなら教えてやって欲しいと頼まれたからだ。でなければ、誰が好き好んで自分から教えるか、面倒臭い」

心の底から面倒臭そうにそう言って、彼女はワインを一口飲み、手に持つ本へと視線を落した。ラテン語で書かれた、パツと見て五百ページは有ろう黒革張りの分厚い本だが、既に半分ほど読み終えているようだ。側の机には同じ様に分厚い本がさらに2冊と、薄い本が一冊積まれている。

「と言うかな、向こうに子供とは言え、教師と言う物を教える専門家が居るんだからそっちに頼め。魔法先生にな」

「へ？ 僕ですか！？」

「他に誰が居る。その歳でボケたか」

突然話題に上げられたネギは驚き、エヴァンジェリンを見るが彼女は「後の事は知らん」と言った雰囲気を出して本を読んでいた。夕映とのどかの方を見ると、二人とも期待を込めた目でじっと見ている。妙なプレッシャーがかかる。

「あの、良いんでしょうかマスター師匠？」

「私が担当するのはお前と近衛木乃香だけだ、他の連中の事は知らん。魔法を教えて、そいつらの所為で一般人にバレようがどうなるうが貴様の自己責任だ。私は知らん」

ネギの問いに、ページを捲りながらそう言い放つエヴァンジェリン。その様子から、本当に二人以外の事に興味が無い事が分かる。

それを見てネギは多少悩むが、表面上は無表情ながらもじつと熱い眼差しで自分を見てくる二人に気圧されたか、先端に星や羽と言った飾りの付いた杖を幾つか取り出した。教える事にしたらしい。

「で、では簡単なのから行きましょう。お二人には初心者用の杖をお渡しします。これを振りながら『プラクテ・ビギ・ナル、アイルテスカ火よ灯れ』トです」

そう言つてネギは取り出した杖の一本を手に取り、二人に見せる様に振るつて見せた。

「いいですか？ こうです。『アイルテスカプラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ』」

そう言つて杖を振ると、ポツと音を立てて杖の飾り部分から小さなライターやマツチ程度の火が出た。手品でも出来そうな物である。しかしそれでも十分凄いと思ったのだらう。のどかは顔を赤くし、夕映は興味深そうにそれを見て手を叩く。

「まあ、この程度だったら普通にライターとかを使った方が速いし、効率も良いんですけどね。初心者用の呪文です」

「お？ 面白そうな事やってるねえ、私達も混ぜてよ」

ネギ達がやっている事を見て面白そうだと思ったか、少し離れた場所に居た朝倉と古菲もネギ達の側にやって来た。そして彼女達も、各々杖を一本ずつ取って行き、ネギがしたように呪文を唱えた。

「プ、プラクテ・ビギ・ナル」
アールデスカット「火よ灯れー！」

のんびりと、何処か間延びしたような可愛らしい声でのどかが火を出す呪文を唱える。
しかし出なかった。

「あうう、出ないですー」

「ソウ簡単ニ出ル訳ネーダロ。マ、アセラズノンビリヤルコツタナ。ココハ外ヨリモ魔力ガ濃イカラナ、何度モヤツテリヤ、ソノウチ出ルンジャーネーノ」

「つまり魔力とは、空気や水、その他全ての万物に宿るエネルギーという事でしょうか？」

「大体あってます。それを息を吸う様に体内に取り込んで、杖の一点に集中するイメージで……」

恥ずかしさからか、顔を赤くして残念がるのどかと、ネギに魔力とはどういう物かを聞いている夕映。一体何処から取り出したのか、メモ帳に聞いた事を一字一句漏らさずに書いている。

そして彼女も杖を持ち、深呼吸し、クワツと目を開いて呪文を唱えた。取り敢えず、目を見開く必要は何処にも無いのだが。

「行くです。プラクテ・ビギ・ナル、
アールデスカット火よ灯れー！」

そしてやはり出なかった。さらに気合いを入れて言ったのに出なかった所為か、恥ずかしさで夕映の顔が赤く染まって行く。

それを朝倉や古菲はクスクス笑いながら見ていた。彼女達もそれぞれ杖を取り、唱えるがやはりと言っべきか、火花どころか発動の兆候を示す光さえ出ない。

「プラクテ・ビギ・ナル……って、何かやってみたら結構恥ずかしいね、コレ。……そう言えば、木乃香は出来るの？」

「ウチ？ ウチは出来るよ、エヴァちゃんやネギ君にも結構教えてもらって、昴さんにも分かりやすい教科書もらっとるから」

朝倉からの突然の問いにも驚かずにそう返し、木乃香は読んでいた本を閉じて、ポケットから先端にハートの付いた杖を取り出し、少し集中し唱えた。

「プラクテ・ビギ・ナル、光よ」

唱えるのは初心者用と言う点では同じだが、火ではなく光を灯す呪文。

彼女は魔法球の中と外で練習を繰り返し、既に初心者用の魔法と軽い治癒魔法なら普通に使える程になっており、現在はより高位の治癒魔法と魔法の射手その他の習得と、時々昴や刹那に陰陽術の基礎等を学んで呪符を作ったりしている。本人曰く、「目が回るようだけれど割と楽しい」とのこと。

木乃香が言を紡ぐと同時に杖の先端に魔力が集中し、少し浮いた所に白く仄かに輝く小さな光の珠が現れた。停電時等に使えるような魔法である。

「おお、光ってる光ってる」

「他にも風とか起こしたりできるんよ。まあ、せやけど……」

そう言いながら、木乃香はあさつての方向を見た。釣られて朝倉達も、その方向を見る。

「炎よ、怒涛となりて全てを飲み込み、焼き尽くせ！ ノヴァドライブ！」

「荒ぶる風よ、切り刻め！ トルネードアーク！」

アスナと刹那が広場の端に立って片手を前に突き出し、爆炎や暴風を何も無い空中に向けて放っていた。どうやら彼女等は、既にブレスレットに封入された魔法を引き出せるようになったらしい。練習として軽く試し打ちしているのだろう。刹那の魔法は、アスナの魔法は彼女自身の能力の影響が若干威力が落ち、刹那の魔法は魔力に慣れていないせいか予想以上の威力を以て放たれたようだが。

「あんな事はまだ出来へんけどな」

「いや、あんな事出来る様になるつもりかい」

のほほんとそう言う木乃香に思わず突っ込む朝倉。ちなみに木乃香も、属性こそ違いが同じブレスレットを昂より貰っているので出来ない事はない。現在、まだ魔力しか引き出せないが。

のどかと夕映はポカンとした表情でアスナと刹那の打ち合いを見ていた。

少しして、試し打ちも終わったのか二人は木乃香の側にやって来た。息を弾ませて、僅かではあるが汗もかいている。

「おかえりー。どないな？」

「思った以上のじゃじゃ馬ってとこかしら。軽く引き出しただけでネギの「雷の暴風」位の威力の魔法が出てくるし。制御するのにも

「苦勞よ」

「予想以上に精神力と体力を持って行かれますし……おいそれと使えませんかよ、コレに封入された魔法は」

木乃香の言葉に、戻ってきた二人は手首に付けているブレスレットを見せてそう言った。以前三人が昂に貰った物だ。

夕陽の様に紅く輝く金属の環には植物の様な紋様が浮き彫りにされ、それぞれにピンポン玉くらいの大きさの薄緑と深紅の結晶が付けれ、その周囲に細々とした古代文字が幾つも刻まれている。

紅い金属の輝きは炎の様に揺らめいている様にも見え、その揺らめきによつて浮き彫りにされた紋様がまるで蛇の様に動いている様にも見える。美しいブレスレットだ。

「それに、今まで気ばかり使っていた私には魔力は馴染みが薄いです。西洋魔法を使った事も無いので、引き出す事は出来ても制御が

……

「西洋（西）と東洋（東）で術式体系は違う上に、さらに特殊な魔法楽器の魔法だもの。魔力も属性に染まつてるから咸卦法に使うのも難しいみたいだし、その辺は時間を掛けて馴染ませるしかないかもね」

そう言つて二人は引き出した魔力をどうすれば巧く使えるかを話しながら、茶々丸の手伝いに向かった。と言つても、調理は既に済んでいたの後はテーブルに並べるだけだった。

食事が用意されるまで、また食べ終えた後も暫く朝倉達は「火よ灯れ」を練習していた。

疲れて眠りに落ちるまで、練習していた全員火花の火の字はおろか、前兆の光すらも出せなかったが。

ちなみにアスナ達はエヴァンジェリンから魔力の制御方法を学んでいた。

夜。

月が輝き、潮騒が夜風に乗って微かに耳に届く静かな夜。他の皆も眠る中、アスナは一人眠りから目を覚ました。

「う……トイレ……」

どうやら尿意を催したらしい。もぞもぞと一応の寢床から出て、服を羽織ってからトイレを目指してテクテク歩く。

周りには刹那や木乃香の他に、古菲やのどか、夕映、朝倉が眠っていた。エヴァンジェリンとチャチャゼロ、茶々丸の姿が見えないが、彼女達はこの魔法球の主とその従者なのでちゃんと部屋で寝ているのだろう。

寝ている連中を起こさない様に、物音を立てずに以前エヴァンジェリンに教えられたトイレの場所を目指し、用をたす。そしてまた寝る為に寢床に入ろうとするが、ふと寝ている者達を見てある事に気付く。

ネギが居ない。その事に気付くと同時に、何かを撃つ様な音が耳に届いた。

気になり、音の聞こえる場所に行くと、広場にネギが居た。中国拳法と魔法の練習か、簡易の杖を持って拳や肘、脚を繰り出しながら何かをぼそぼそと呟いている。

「……来れ、虚空の雷、薙ぎ払え。雷の斧！」

そう言ってネギは手を振り下ろした。すると手から斧の形をした雷が放たれ、いつの間にか置かれていた空き缶に命中した。甲高い音を立てて空き缶が炸裂する。

「スゲーな兄貴！ 習得にや2、3ヶ月はかかるって言われてたのに、この調子ならすぐ習得できるぜ！」

発動した魔法に、カモが賛辞の言葉を送る。しかしネギはその言葉に首を横に振った。

「いや、まだダメだよ。威力も低いし、無詠唱の魔法の射手もまだ出来ないし。それに此処は外より魔力が多いから出やすいんだし」

そう言っただけは自分の手を見た。どうやら彼は、以前エヴァンジェリンに見せて貰ったナギの連携を習得しようとしているらしい。どうも思う様に行っていないようだ。

そんなネギに、アスナは若干の呆れを含んだ声を掛けた。

「修行熱心なのは良いけど、あんまりやったら明日に響くわよ」

「え……」

掛けられた声にネギが振り向くと、アスナが階段から降りて来ている所だった。いつもは鈴の付いたリボンで二つに束ねられている髪は下ろされ、普段よりも彼女を大人っぽく見せている。サラサラと風に靡く橙色の髪は、月明かりに照らされて薄い金色に煌いて見える。

「アスナさん、起きたんですか？」

「ちょっとね。それより、もう寝なさいよ。明日もまだ学校有るんだし、寝てなくて動けなかったらエヴァちゃん達との訓練、今よりもっと厳しくなるわよ」

「そ、それは……でも、今日はのどかさん達の事もあって遊んでしまいましたし、一日サボったら取り戻すのに三日はかかるって言いますし……」

「適度に休むのもまた修行ってエヴァちゃんもスバルも言ってた筈よ。ぶっ続けでやってても、体に疲労を溜めて具合を悪くするだけ。体を壊したら元も子もないでしょ」

「ですけど……」

アスナの言葉に、ネギは渋る。まだやり足りないと言った感じがだ。

「アンタさ、何でそんな急いで力を付けようとしてるの？ こう言うのは何だけど、アンタくらいの歳の子でそれは、ちょっと異常よ」
まるで生き急いでる様にも見える。

ネギの目を見ながら、そうアスナは言った。そう言われたネギは黙り込み、アスナから視線を逸らし、水平線の方を見た。柔らかく輝く月が、二人を照らす。

「ま、私が言えた義理じゃないかもしれないけどね。話したくないならそれでも良いわ。でも、少しは自分を労わりなさい」

そう言つてアスナは寢床に戻ろうとしたが、水平線に目を向けたまま、ネギがアスナに問いかけた。

「アスナさんは、どうして力をつけたんですか？」

「いきなりね。それを聞いてどうするの？」

「いえ、ただ、気になったんで」

ネギの言葉に、アスナは僅かに考え、言った。

「……私が力をつけたのは、私の大事な人に負担を掛けたくなかったから。私を護って、あの人に傷付いて欲しく無かったから」

銀に輝く月を見上げながら、脳裏に描くのは大戦で出会い、戦が終わった時からずっと一緒に居る、今では自分の保護者でもある黒い真言使いの姿。

この世の誰よりも信頼している、たった一人の男性の姿。いつも自分を心配してくれる、何よりも大切な家族の姿。

「あの人に掛かる負担が少しでも軽くなるように、私は力を付けた
いって言ったわ。せめて、自分の身は自分で守れるくらいには……
！」

そこまで言っつて、アスナは口を噤んだ。当時そう頼んだ事を思い出
し、やや感情的になっていた事に気付いたらしい。
その事に苦笑を漏らす。

「ちよつと熱くなつたかしら？ まあ、私が力を付けた理由は今言
つた通り」

「その人がとても大切なんですわ、アスナさんは」
「っ！」

にこやかなネギの言葉に、アスナは顔が熱くなるのを感じ思わず明
後日の方を向く。おそらく今の彼女の顔は、夜でも分かるくらいに
赤くなっているのだろう。

そんなアスナの様子にネギは疑問を持つが、彼女はネギに背を向け
た。

「と、とにかく私の理由はそれだから！ 明日も早いんだし、アン
タも早く寝なさいよ！」

そう言っつて彼女は寢床に戻ろうとした。

「あの、アスナさん」

しかし、ネギからまたもや声が掛けられた。

「……何？」

「その、僕の話しも聞いて貰って良いでしょうか？ アスナさんだけ話して、僕が話さないのは何か、不公平ですし」

「……まあ、聞くだけなら別にいいけど。何を？」

「僕の頑張る理由……6年前、僕が父さんと出会った時の事を」

静かな夜に、その声はやけに響いた。

そしてその様子を、アスナと同じ様に起きたのどかが柱の陰から見ていた。

空中都市第11エリア・ダート。生命の樹セフィロトで言えば深淵に位置し、

知識の名を冠された巨大な書庫。

壁一面と40あるフロア全体に乱立する本棚全てに数万、若しくは数十万冊の本が古今東西、一般書籍や魔導書、奥義書を問わずに収められた、もはや本の迷宮や塔と言って差し支えないだろう大書庫のその一角。

所狭しと立ち並ぶ本棚の間に、オアシスの様に幾つか配置された樹木の枝に昂は腰かけ、手に持つ大きく分厚い本に結晶の付いた万年筆で何かを記していた。傍には半ばから開かれた数冊の分厚い本と光を放つ小さな玉、インク瓶が浮いており、時折それに万年筆を差しこんでいる。

……物作りは興が乗らないと言っておきながら、結局何かを作っている様だ。

「マスター
主」

そんな鼻に下から鈴を鳴らす様な涼やかな声が掛けられた。その声を聞いて鼻は手を止め、本から顔を外して自分の下、木の根元を見た。

小柄な少女が根元に立って彼を見上げていた。髪の色は白く、絹の様に滑らかで膝裏まで伸ばされている。陶器の様に滑らかな肌はシミ一つなく、いっそ病的なまでに白いが、不思議と不健康には見えない。さらにシンプルな純白のワンピースを着た、全身黒一色の鼻とは正反対の何処までも白い少女だ。胸には古めかしく分厚い一冊の本を抱いており、眠たげな眼はオパールのように虹色に煌いている。

「どうかしましたか、ジオ？」

「時間。もうすぐ書庫が閉じるから、本を元の所に戻して」

「む、もうですか？ もう少し居たいのですが」

「ダメ。此処は書庫、本を収め、読む所。勉強するのは良いけど、それでもずっと居て良いのは二日だけ。主でも時間は守って貰う。」

それとその本をしまう場所は2階の入口から13番目の本棚の下から2段目と3段目のそれぞれ左から15冊目のスペースと、33階の入口から22番目の本棚の上から8段目左から5冊目と11冊目、18冊目に在るスペース。場所が分からないなら渡して。戻しておく」

「流石、この書庫を統べる司書ですね。全ての本の在るべき場所を覚えていたとは……」

「私はこの知識を司る書庫の司書。此処に在る47万3764冊全ての種類と内容、場所を覚えているのは当然」

鼻の言葉に特に自慢するでもなく、淡々と返すジオと呼ばれた白い少女。

彼女は此処、「知識」^{ダクト}を名に冠された書庫のただ一人の司書であり、

この巨大な書庫に収められた本達全ての情報を記録している魔導書の精霊でもあり、このエリアの統括存在でもある。分かりやすく言えば、「慈悲^{ケセド}」の庭園に居るトレントと同じ様な存在だ。彼は「慈悲」で、植物を統括している存在でもある。

ついでに言えば、ジオも年齢は軽く千を超える。それを言ったら本体である魔導書の角で攻撃してくるが。

眠そうな目で淡々とそう言うジオに苦笑を返しながら昴は本を閉じ、インク瓶などをポーチにしまって本を抱えて樹から飛び降り、自分で戻すと言って階段を上り始め、ジオもその後を追う。おそらく、それぞれ元有った場所にきちんと戻せるかを確認する為だろう。その事に苦笑しながら、昴は長い階段を上り、本を戻す。その中で、ふと気になった事を聞いた。

「そう言えば、相坂さん…… ああ、闇の精霊になりつつある女の子ですよ。彼女はどうしました？ 確か、私と一緒に此処に入ったと思いましたが」

「闇の見習い精霊なら入口近くの椅子で頭から煙を出して横になっている」

「け、煙？ 何故煙を？」

「読もうとしたのが古ギリシャ語で書かれたとても難しい哲学書だった。日本生まれの精霊じゃあ、内容が理解できなかったんだと思う。一緒に居たシェイドが呆れて溜息吐いてた。「いきなりそんな難しい本を読む奴が居るか」って」

「……………」
「今は主の事を待ちながら、闇の理はどう言った物かを言い聞かせてると思う」

想像してみると、小言を言い続ける闇の精霊の姿が容易に思い浮かんだ。思わず苦笑する。

その他にも色々話しながら本を片付け、白い本をポーチにしまいな

がら入口で小言を言われ続けてぐったりとしていたさよと言いつづけていたシェイドと一緒に夕飯はどつするかを話しながら書庫を出て行った。

55話：記憶体験へ

それぞれの魔法球の中でネギがアスナに自分の過去を話そうとし、昂が書庫を出て空中都市の一角で夕飯を作っている頃、現実ではとある一室が賑わっていた。

「んがんぐ……はぐもぐ……ぶはっ！ いやー、美味いわコレ！
こんな美味いん食うのは初めてや、いくらでも食えるで！」

「あら良かった。まだあるから、遠慮しないでしっかり食べてね」

「おう、おかわり！」

「はいはい」

そう言つて空になつた器を差し出し、また食べ始める小太郎。余程に空腹だったのか、遠慮と言う物は微塵も見られない。……遠慮するなど言う、那波千鶴の言葉も有るから遠慮しないのかもしれないが。

「よく食べるねー、君。そんなにお腹空いてたの？ それに熱も下がってるっばいし……スゴイ回復力」

その様子を見ながら、村上夏美は呆れた様な感心した様な口調で行儀も何も無く、ががつとががつく様に料理を食べている小太郎に聞く。

彼女達は怪我をしていた犬を拾った後、寮の自室に戻り雨に濡れた体を拭いて着替えた後、手当てをする為に犬の体を拭いたのだが、何と犬が傷だらけの少年に変化した。

当初こそそれに驚きつつも（盛大に驚いたのは夏美の方で、千鶴はどちらかと言えば困惑と言った感じだったが）、すぐに気を取り直して少年の体の状態を確認し、医務室に連絡しようとした。何故犬

が人間に変化したのかを余り気にしない辺り、流石は全学年で最も混沌としたクラスと名高い3 Aと言うべきか………驚嘆すべきか呆れるべきか、判断に迷う所である。

しかし千鶴が医務室に連絡しようとした所で少年が覚醒。受話器を破壊し、彼の犬耳に興味を示し、触ろうとしていた夏美を人質にとつて衣服と食事を要求した。

が、気絶から覚醒したばかりで、しかも全身傷だらけの状態ではそう激しく動ける物でもない。彼は安心させる様に近付いて来た千鶴に攻撃を加えた後、その事に怯み、自身が傷付けた千鶴に抱き留められ再び気絶した。その後目覚め、軽くだが傷の手当てをしていた千鶴達に謝った後、互いに自己紹介して現在に至る。

尚、小太郎が気絶している間に魘されネギと呟き、それを聞いた千鶴がネギを何処からともなく取り出したのは気にしてはいけない。

「ほう、はんふあふつへえはふあへっほうんは。ふあふいがふおは」「いや、何言ってるか全然分かんないから。ハムスターみたいに溜めこんでないで、口の中の物飲み込んでから喋って」

「んご、ふぐ……んぐつ。おう、なんやすっげえ腹へつとるんや、ありがとな、千鶴ねーちゃん」

「いいのよ、そんな事は。それより、名前以外に何か思い出せた？」
口の中の物全てを飲み込み、言い直した後に礼を言う小太郎に千鶴は微笑みながらそう返す。おおらかでよく知られる彼女だが、取り敢えず、おおらか過ぎであろうと思う。

「いや、何も。なんや頭に霞がかかった様な感じだな……」

そんな千鶴にそう返す小太郎。思い出せないのが不快なのか、顔は曇められている。しかしそれでも食べるのはやめない。もふもふと咀嚼し、嚥下する。

それを見ながら千鶴は僅かに眉を下げ、言った。

「そう、仕方ないわね。それじゃあ……………お待ちかねのおシリにネギ、行ってみましようか？」

そして千鶴は腕まくりし、何処からともなく細長い、一本の野菜を取り出した。

長さは5、60cmくらいだろうか。全体は新雪の様に白く、しかし先端部のみが鮮やかな緑色の瑞々しい野菜は、様々な料理に薬味として使われる、日本人に広く知られた野菜　　ネギだった。何処からどう見ても、何の変哲もないネギだった。

しかしそれを見た途端、殺気とは違う薄ら寒い物を感じ、夏美の顔が青褪めて強張り、小太郎の背筋にまるで氷柱でも刺したかの様な強烈な寒気が奔った。全身の毛が逆立ち、毛穴と言う毛穴が開き、冷や汗が滝の様な勢いで流れ出る。視線は千鶴がその手に持つネギに釘付けた。

静かで穏やかな、しかし凄まじく禍々しく黒いと言う異様なプレッシャーが千鶴とネギから放たれる。気の所為か、ネギが優しくもおぞましい緑色の光に包まれている様にも見えた。本当にネギなのだろうか、コレ？　ネギの形をした別のナニ力ではないのか。

「さつきは寸前で小太郎君が目覚めちゃったからね」

「ま、ままま待って、待ってや！　何するつもりやそのネギで！？　てーか何でそんな楽しそうなん！？」

「何って、おシリにこう、プスツと。もしかしたら、ショックで記憶が戻るかも知れないしね」

「ヒッ！？　い、嫌やつ！　記憶が戻るとしてもこんな戻り方は絶対嫌やーっ！！」

もう一本ネギを取り出し、不気味極まる雰囲気を纏った千鶴は上品

な笑い声を出しながら一歩、また一歩と小太郎にゆっくり近付いて行く。やけに楽しそうに見えるのは一体何故なのか。手に持つのは何の変哲もないネギの筈なのに、それが何故こつも恐怖を掻き立てるのか。あれか、この少女にはネギを兵器にする力でもあるのだろうか？

対する小太郎は腰でも抜かしたか、立ち上がるうともせず、後ずさり、何とか千鶴から離れようとする。しかしすぐに壁にぶつかり、退路は無くなった。逃げ道は無いかと周りを見るも見当たらず、頼みの綱として願いを込めた目で夏美を見た。

この姉ちゃんを止めてくれ、と、懇願するような眼差しで。

「……………（サツ）」

しかし何か言えば巻き込まれると本能的に悟っているのだろう、思い切り目と言つか、顔を逸らされた。

頼みの綱、機能せず。寧ろ見捨てられた。

その事実には絶望を感じる小太郎。既に千鶴は、小太郎まで後4歩と言った所まで来ている。このまま行けば、小太郎は尻にネギを刺されるだろう。それも二本。

肉体的に死にはしないだろうが、尊厳的には致死レベルだろう。この4歩、まさに死へのカウントダウン。げに恐ろしきは保母志望か。保母まったく関係無いが。

「い、イヤヤ！ やめてえーっ！ 近付かんといてえーっ！
っ！…！」

今までに感じた事の無いタイプの恐怖を感じ、小太郎は壁を背にして青褪めた顔で泣き叫ぶ。既に本能で勝てないと理解しているのだろう、耳や尻尾はヘタれており、暴漢に襲われた乙女のような悲鳴を上げながら千鶴から離れようと足掻く。気分は魔王に襲われた捕わ

れの姫君か。性別的にポジション逆だろうと思うが、気にしないで
おこう。
しかし当然、そんな物で目の前の現実が消えてくれる訳も無く、距
離はじわじわと、しかし確実に縮まっていく。
そして

………イヤやあああ—————っ！！！！

まるでこの世の終わりかといった悲痛な叫びが、女子寮の一室から
響いたとか。

魔法球の外で小太郎が悲惨な(?)目に会っている事など露知らず
(そもそも彼が麻帆良に来ている事さえ知らないが)、ネギとアス
ナは話し合っていた。

「………6年前にアンタがナ………お父さんと出会った時の事？」
「はい」

波の打ち寄せる音が静かに耳に届く中、アスナはネギに問い返す。
ナギと言いつつになつたのを直したのは、自分がナギの関係者の一
人でもある事を隠す為か。幸い、ネギは気付いていないようだ。

「何で私に？」

「いえ、他の皆さんにも聞いて貰った方が良いかな、とは思っているんですけど、アスナさんにはお世話になってますし、先に話しておいた方が良いかなって」

恥ずかしいのか、微妙に頬を赤くしそう言うネギ。取り敢えず、世話になっていると言うのならアスナだけでなく木乃香にも話すべきであろう。頻繁に食事を作ってくれているのだから。

(どうするべきかしらね……………)

アスナは考えていた。ネギの話、6年前に何が有ったのか、ナギと出会って何を得たのかを聞くかどうかを。

正直に言っただけ興味が無いとは言いがたいが、興味本位で他人の過去を聞いていいものか。

10歳と言う年齢で頑張る理由と言うのだから、過去に何か良くない事が有ったと連想するのは割と容易い。それを興味だけで聞いてしまっただけなのか？ 悩む。

ネギが話そうとしているのだから気にしなくても良いかもしれないが、これがアスナの性格だった。

どうするか考え、沈黙する。

「あ、でも、聞きたくないんだっただらそれでもいいんです。ただ、僕としてはその……………すいません」

しかしネギはその沈黙を「聞きたくない」と取ったようだ。何処となく気落ちした様子で考え込んでいるアスナにそう言い、離れて寝床に向かおうとする。

それをアスナは苦笑しながら止めた。

「何勘違いしてんのよ、まだ返事してないのに……いいわ、聞いたげる。聞くだけなら良いって言ったから、あくまで聞くだけだけどね。それに……」

そう言つて、アスナは自分の後ろを見た。釣られてネギもアスナの
見ている場所を見るが、誰も居ないようだ。しかしアスナには誰か
達が隠れている事が既に分かつていた。

「話すんだつたら、一人ずつよりもみんな纏めての方が楽でしょ？」

「え？」

「全員居るんでしょ？ 隠れてないで、出て来たら？」

居る事を確信している口調で、アスナは闇に向かって言い放つた。
それは月光に照らされた薄闇に飲まれて消えて言ったが、言葉を放
つて約15秒後、柱やその土台の影から木乃香や刹那、エヴァンジ
エリン他、この魔法球の中に居る麻帆良学園生徒全員が出て来た。
これだけいけば、気配で何かいるぐらいは分かつてしまつたろう。
おそらくアスナも、それで気付いたのだろう。エヴァンジェリンや
昴レベルとはいかない物の、昴と世界中を旅していたので気配察知
で言えばある意味刹那よりも上なのだから。

全員苦笑し、朝倉に至つては「何でばれたかなあ」と言っている。
しかし、居る事に気付かなかつたネギは驚く。

「え、え？ ええっ！？ み、皆さん、^{マスター}師匠まで、いつの間に!？」

「お前が緋乃宮アスナに「6年前の事を聞いて貰えますか？」と言
つた辺りからだ。まったく、気付けないとは情けないな、ぼーや。

緋乃宮アスナは気付いたと言つのに……気配察知の訓練を厳しくす
る必要が有るか？」

「ひっ!？ あ、ああああの、それだけのご勘弁を！ あ、あれ以
上厳しくなつたら死んじゃいます!！」

エヴァンジェリンの言葉にガタガタと震え出し、そう懇願するネギ。一体どんな修行をしているのか、恐ろしいが気になるのだが、この藪を突いたら蛇どころじゃない危険物が出て来そうである。

「本屋ちゃん、それ……」

「あ、えとー……これはー、そのー……」

のどかの手に在る物を見て呆れた声を出すアスナ。見れば彼女の手には「いどのえにつき」が出されていた。おそらく、対象者の表層意識を読み取るこのアーティファクトでネギの記憶を読もうとしていたのだろう。

考えてみれば、思考を読み取ればプライベートも何も全てを暴く事が出来る、イヤらしいアーティファクトである。アーティファクトは従者に見合った物が出るとは言いが、この少女には人の心を覗く嗜好でもあるのだろうか？

チラチラとエヴァンジェリンを見ているあたり、大方「好きな男の過去を知っていると有利」とでも彼女に言いくるめられたのだろう。

「エヴァちゃん……」

「元々話すつもりだったのなら別に問題は無かるう。遅いか早いかの違いだけだ、さっさと話せ、ぼーや」

アスナの言葉を流してそう催促するエヴァンジェリン。彼女もネギの過去には多少興味が有るようだ。見れば木乃香達も、目を輝かせてと言うか、そんな感じの目でネギを見ていた。やはり興味が有るのだろう。

それに引き攀った笑みで苦笑を返しながら、ネギは皆に集まるように言い、杖を構えた。足元ではカモが、全員が入る様な魔法陣を書いている。

「ちょっと、話すだけで魔法陣なんていらないでしょ。何する気？」
疑問に思ったアスナが問う。それにネギが何か言おうとするが、彼が何かを言う前に陣の構成を見ていたエヴァンジェリンが言った。

「少々弄つてあるみたいだが、この構成は意識シンクロだな。自分の記憶を体験させる気か」

「はい。時間を掛けて話すよりも、この方が手っ取り早いでしょうから」

流石は600年の時を生きる魔法使いと言ったところか、敷かれた魔法陣の構成を見ただけでネギがどう言った魔法を使おうとしているかを容易に当てて見せた。

エヴァンジェリンの言葉に肯定の言葉を返してから、ネギは魔法を発動させる為に詠唱を始めようとした。

しかし、いざ詠唱しようとした所でアスナが言った。

「待った。記憶を体験するならアンタ達だけで行って、私は行かない」

「なんでさ？ アスナもネギ君の話は聞くんでしょ」

「あくまで話を聞くつてだけで、記憶の体験をするなんて言っただけ。人の記憶を見たりする趣味なんて私には無いもの」

妙な所で律儀と言うか、何と言うか。

朝倉の疑問にそう返してから、アスナは魔法陣から出ようとした。

「待つですアスナさん。話すなら全員に纏めて話した方が楽だと言ったのはアスナさんでしょう。だったら貴女もネギ先生の記憶に潜る必要が有ると思いませんか？」

しかしのどかの側に居た夕映に止められた。彼女の目には「言った事を覆すのか」と言う疑問が見えた。

「確かにそう言ったわね」

「でしたら……」

「けど、私が言ったのはあくまで「話を聞くだけ」よ。記憶の体験までするなんて言った覚えは無いわ」

そして彼女はネギに「後で聞く」と言っただけ魔法陣から出て、少し離れた広場の端に腰掛け、月を見上げた。そんな彼女を見てネギが何か言おうとする。

「見たくない奴に無理に見せる必要など無かるう。放っておけ」

しかしエヴァンジェリンにそう言われ、ネギはアスナを見つつも詠唱を始めた。声と高まる魔力に応じて、魔法陣が光り始める。

夕映達が感嘆の声を上げる。

「マール・ムールム・ムネーモシュネー、アド・セー・ノース、アリキアット、おのがもとへと我らを誘え」

そして、詠唱が終わると同時に光が爆ぜ、魔法陣内に居たネギ以外の意識を白く塗り潰した。

56話：記憶

魔法陣の光に閉じていた目を開くと、木乃香達の目に最初に映ったのは音も無く降り積もる雪と、それによって白く染まるレンガと石造りの家々だった。

厚い雲に空は覆われて時間帯は良く分からず、道に人影は見えない。そんな道のど真ん中、寒々とした空気の中に木乃香達全員は立っていた
全裸で。

『ぬなっ！？ な、何故裸なのですか！？ 服はちゃんと着ていた筈です！ どう言う事ですかこれは！？ それに此処は何処ですか！？』
『へうえっ！？』

一糸纏わぬ自分達の姿を確認して驚く夕映達。まあ、服を着ていたのが気付けば全裸では驚くのも無理はないだろう。のどかは羞恥も感じているのか、自分自身を抱き締めて胸などを隠そうとしている。

『6年前に僕が住んでた山間の村です。それとすみません、そう言う仕様の魔法なもので……寒くは無いですけど』

『うん、まあ確かに寒くは無いです、流石に雪の降る街中で全裸つてのはちよつとねえ……もしかしてネギ君の趣味？ だとしたらやらしいねえ』

『ちよつ、趣味じゃありませんよ！？ 僕の趣味はアンティークを集める事で、つて言うかこう言う仕様の魔法だっと言いましたよね！？』

何処からともなく聞こえたネギの声に、朝倉がからかう様にそう返す。見れば彼女も、胸の前に腕をやって隠しながら街並みを見てい

た。

そんな朝倉達を見ながら、エヴァンジェリンが呆れた様な声を出す。彼女は隠す事も無く、腕を組んで堂々と立っていた。

『精神の中に入るのに肉体や実体のある物を持ったまま入れるわけがないだろうが。まあこの魔法を使った現代のぼーや以外には認識されんから安心しとけ』

『エヴァちゃんどうしてそんなに堂々としてるのさ、恥ずかしく無いの？ それにネギ君以外に認識されないってどう言う事さ』

『エヴァンジェリンは露出狂だたアルか？』

朝倉の問いに応えようとした時に、古菲が言った言葉でエヴァンジェリンが額に青筋を浮かべた。まあ、説明しようと言う時に露出狂呼ばわりされたら怒りたくもなるだろう。

『氷漬けにされたいかバカイエロー……！ 今の私達はぼーやの記憶を基にした夢の世界に、精神だけで存在している様な物なんだよ。過去の世界の映像を体験する形で見ていると言えば分かりやすいか？』

『分からないアル！』

即答だった。

その言葉を聞いた全員が思わずこける様な、いつそ清々しいまでの即答だった。

『少しは考えて物を言えよお前は……！』

『まーまー、エヴァちゃん抑えて……で、現代のネギ君以外に認識されないってのはどうしてなのさ？』

古菲の即答に叫ぶエヴァンジェリン。それを押さえながら朝倉が疑

問に思っている事を聞いた。

その言葉に気を取り直してエヴァンジェリンは説明を始めた。

『簡単な事だ。さつきも言ったが、今の私達は精神体、肉体なんて持つちやいない状態だ。そしてここはぼーやの記憶の中、言ってしまえば過去の映像だな』

『過去つて、じゃああたしら時間旅行してるって事？』

『話はきちんと聞け、過去の映像だと言っただろうが。実際に過去に飛んでいる訳じゃなく、あくまで過去を見ているだけだ。お前達、試しにその壁に触ってみろ』

そう言われ、全員が側にある建物の壁に触ろうとした。

しかし、触れたと思った手は何の抵抗も無く壁をすり抜けてしまった。

『おおっ？ 手がすり抜けたアルよ』

『触った感触が全然ないです。と言うか、何にも触れませんね。私達自身の体には触れるようですが……』

『映像で、さらに私達は精神体の状態だ。分かりやすく言うなら幽霊と似たような状態だからな、触った感触も何もないのは当然だ。』

さて、そんな私達を記憶から再生された映像が認識できると思うか？』

『あー、そりゃ無理だね。エヴァちゃんの説明が確かなら、あたし達が見てるのは記憶って言う名のビデオになるんだし、見る側であるあたし達はともかく、映像が見る側を認識できる訳が無い』

エヴァンジェリンの説明に、朝倉が納得した様な声を出す。

彼女達が見ているのは、ネギの記憶と言う名の過去の幻像、言うなれば映像である。映像を見る側の人間ならともかく、見られる側の映像が見る側の人間を認識できる筈が無いのだ。

さらに見る側も、出来る事は記憶を追体験し、過去に何が有ったかを認識するだけである。記憶の世界に影響を与える事など、何人であるかと出来はしないのだ。　　昂なら真言で以てその理を軽々と無視できるかもしれないが。あの男、ほとほと何でも有りである。その説明を聞きながら、古菲達が物に触れられない現在の状態で建物の壁等で遊んでいると、木乃香と刹那が薄暗い道の向こうからやって来る人影に気付いた。

『誰か来るえ』

木乃香の言葉に全員がそちらを向くと、確かにこちらに向かって歩いて来る人影が見えた。それを見て夕映が若干、のどかが大いに慌てる。どうやら認識されないとは言っても、全裸でいるのは年頃の少女らしく極めて恥ずかしい。のどかの顔は今にも噴火せんばかりに真赤だ。

やって来たのは長い金髪を持つ年頃の女性と、その女性に手を引かれ楽しげに笑う赤毛の少年だった。その少年の顔を見て、女性も微笑みを浮かべている。

微笑ましげなその風景は親子か、歳の離れた姉弟の様にも見える。

『あの人達は？』

『6年前の僕と、ネカネお姉ちゃんです。お姉ちゃんと言っても従姉ですけれど』

『何か、顔の輪郭とか少しアスナに似てる気がするね。雰囲気は全然似てないけど』

ネギの言葉を見ると、赤毛の少年には確かに現在のネギの面影が見えた。ネカネと呼ばれた女性の方も、朝倉が言う様に、顔の輪郭はややアスナと似ていた。

彼女はネギに対して何かを言っている様だった。

「あなたのお父さんはね、とっても有名なヒーロー……スーパーマンみたいな人だったの」

「スーパーマン？ 何それ？」

「誰かがピンチになったら何処からともなくやって来て助けてくれるのよ。正義の味方って所かしら」

「へー、かっこいいー……」

どうやらネギの父親、ナギの事について話しているらしい。まだ子供のネギは手を引かれながらキラキラと輝くような眼差しでネカネを見て、その話を聞いている。

「ねえねえ、ネカネお姉ちゃんもお父さんに助けられたことあるの？」

「フフ、それは秘密」

「えー、教えてよー」

ネギ（小）の言葉に、ネカネは指を空に向けて微笑みながらそう返す。それにネギ（小）は風船の様に頬を膨らませるが、ネカネはそれを微笑みながらつつく。ネギ（小）はそれから逃げようとするが、顔は笑っている。そこで嫌ではないらしい。

見る者の心を穏やかにさせる、有りし日の風景だ。思わず頬が緩む。

「じゃが奴は死んだ。散々無茶をした拳句、幼いお前を放つたらかしてな。まったく、馬鹿な奴じゃよ」

ネカネとネギがそうやって立ち止まり、その様子をエヴァンジェリン達が和やかに見ていると、後ろの方からしゃがれた、しかし響く様な声が聞こえた。声の質からして、男性の様である。

誰だと思いつつ後ろを向くと、つばの広い三角帽子とくたびれたローブを着た、いかにも魔法使い然とした容姿の老人が立っていた。白い

髭と口に啜えたパイプが妙に似合っている。そして見える限り、頭は普通である。

「スタンさん、ネギはまだ子供ですよ。そんな言い方……」

「本当の事を言っただけ何が悪いか。アイツのおかげでワシがどれだけ迷惑を被ったか……」

柔らかくも咎める様なネカネの言葉にそう返し、スタンと呼ばれた老人はぶつくさ呟きながら建物の一つに入って行った。それを見た後、ネギが聞いた。

「おねーちゃん、死んだって？ どう言う事なの？」

「っ……」

ネギの問いに、ネカネは表情を翳らせ一瞬言葉を詰まらせる。

しかし不思議そうな顔でじっと見ているネギに、何処か寂しそうな笑みを浮かべて言った。

「……もう、会えないって言う事よ」

「もう会えないって？ お父さん、何処か遠くに引越したの？」

「そう、ね……遠い、とても遠い国へ行ってしまったの。誰も行けない様な、遠い所に……死んだ、って言うのは、そう言う事なの」

直接的に言わず、出来るだけ柔らかい表現を使って「死」と言う物をネカネはネギに伝えようとする。

「じゃあさ、もし僕がピンチになったらお父さん来てくれるかな？」

「そ、それは……ええと……」

しかしネギは、まだ子供だから仕方ないのかも知れないが理解出来

ていないようだ。ピンチになれば来てくれるかをネカネに聞いた。当然、二度と現れないと言う事を正直に教えるべきかネカネは悩む。ネギを泣かせたくないのだろう。

「バカねー、死んだ人には二度と会えないのよ」

が、ネカネが悩んでいると、別の声がネギにそう言った。声のした方をネカネとネギが見て、朝倉達もその方向を向くと、目も覚める様な赤毛の少女が腕を組んで立っていた。

「アーニヤちゃん、こんにちは」

「こんにちは、お姉ちゃん」

ネカネの挨拶に、アーニヤと呼ばれた少女が朗らかに返す。それを見て、のどか達がネギ（現代）に聞く。

『あの、あの子は？』

《アーニヤです。僕の幼馴染で、一つ年上の女の子です》

『おしゃまなんだろね。可愛らしーじゃん』

ネギの言葉に朝倉がちゃかし、のどかや夕映がその少女を見ている中、その二人を除いたエヴァンジェリン達はそれを無視して過去の映像を見ていた。

「サウザンドマスターの子供なのに、そんな事も分からないのかしら」

「む、そんなことないもん。お父さんはきっと来てくれるもん」

「だから馬鹿だって言ってるの。あんた、「死ぬ」の意味分かって無いでしょ」

アーニヤの言葉にネギが反論し、互いにギヤイギヤイ言い合う。ネカネはそれを微笑ましそうに見ていたが、表情は何処か困っている様だった。止めるかどうかで悩んでいるのだろう。結局はじゃれあいの様なものと見て止めはしなかったが。それから5分か10分か、それぐらい言い合ってアーニヤが溜息を吐いた。飽きたか、言っても無駄と思ったのだろう。彼女は何処からともなく一本の杖を取り出し、ネギに押し付ける様に差し出して渡した。一体何処にしまっていたのだろうか。突然差し出された杖を持ってネギが問う。

「これは？」

「初心者用の練習杖。来年からアンタも学校に来るんでしょ？ あげるから、ちよつとは練習しときなさいよね、ネギ。生きてた頃のお父さんみたいになりたいんだったらね」

そう言つてアーニヤは用事は済んだとばかりに背を向け、父や母の名を呼びながら走つて行つた。おそらく、家に向かつたのだろう。ネギはそれを見た後、渡された杖をじつと見ていた。

場面は変わり、今度は何処かの室内に風景が切り替わつた。店の様で、カウンター席にはスタンと他数名の客が座り、酒を飲んでいた。

「ナギの奴には苦勞をかけられつぱなしじゃつたわい。アイツさえいなけりゃ、ワシも村も、もちつと平和じゃつたものを、まったく

……」

「スタンさん、飲みすぎだよ」

どうやらかなり酔っているらしい。マスターに注意されるも、彼は酒を飲むのをやめようとしなない。ぶつぶつと愚痴をこぼしているあたり、余程に苦勞を掛けさせられたと見える。

それを見ながら、ネギと一緒に食事をしてきたネカネが若干の溜息を吐く。

「もう、スタンさんたらまた……」

そう言いながら、ネカネは横目でミルクを飲んでいるネギを見るが、彼は席におらず、いつの間にもやらスタンの近くに行っていた。

「お父さんは悪い人だったの？」

「おお、悪ガキじゃったわい。アイツが引き起こした騒ぎの後始末に、ワシや村が何度巻き込まれた事か。アイツが死んじまってせいせいとるわい」

しゃっくりを出しながらそう言うと、スタンは再び酒を飲み始め、ネギは走って店から出て行った。

「あつ、ネギ！」

「じーさん、もうちつと言い様ってもんが有るだろ。まだ子供なんだし」

「フン、本当の事じゃい」

走り出たネギをネカネが追い、今度は客の一人に注意されるもスタンは構わず酒を飲む。

顔はアルコールの所為か紅く染まり、無然とした表情をしているが、何処か寂しそうに見えた。

親よりも早く死んでしまった子供を想い、気を紛らわせるためにやけ酒をしている様な、そんな感じ。

朝倉達はそれに気付いていないようでスタンに対して文句を言い、エヴァンジェリンがその様をつまらなそうに見る中、木乃香だけがそれを感じていた。

再び場面は変わり、今度はまた雪景色の中に出た。
ネカネとアーニヤが車の前で、ネギに何かを話している。

「じゃあ、また一月後にね。元気にしてるのよネギ」

「うん」

「ちゃんと練習しなさいよー」

『え？ ちょ、お姉さんどっか行っちゃうの？ ちっちゃいネギ君
ほっぽいて？』

《お姉ちゃんはウェールズの学校の学生だったんで、たまの休みに
しか会えなかつたんです》

ネカネ達が車に乗り、ネギ（小）がそれを見送るのを見て朝倉がネ
ギ（現代）に聞き、彼はそう返した。

そしてネカネ達の乗った車が見えなくなるとネギは家に入り、アー
ニヤに貰った杖を振るって魔法の練習を始めた。

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ（アールデスカット）ー。えい
っ」

杖を振ると同時に、先端部分からシャランと音を立てて光の粒子が
出た。それを見てネギはやや興奮した様子で、再び杖を振り始める。
広い室内で、たった一人で練習するネギ。殆ど放任していると言っ
ても良い光景がそこには有った。

『おじさん家の離れで殆ど一人暮らし状態、か』

『これは、殆ど放任しているも同じではありませんか』

『せんせー、ちよつとかわいそう……』

幾度か杖を振った後、鼻歌を歌いながら絵を描いているネギ（小）

を見ながら朝倉達は思い思いの事を言う。
絵を見ると、父の絵を描いている様だった。

『下手くそな絵だな、てんで似とらん』

『エヴァちゃん、ストレート過ぎるて』

どストレートにそう言ったエヴァンジェリンに、木乃香が苦笑しながらそう言う。まだ幼い時の物なので、下手なのは仕方ない事である。

それから彼女達は犬に追われるネギを見て呆れつつも笑い、冬の湖に自分から飛び込んで40度以上の熱を出すのを見て心配になり大丈夫なのかと聞いたりした。流石に死ぬと思ったのだろう。

映像では、スタンは呆れながらも何処か心配そうな目で見、ネカネは心配で泣き、見舞いに来ていた他の村人は呆れた様子ながら「元気なのはいい事だ」と言っていた。

その様子に、木乃香と刹那の二人は流石に異常に思い始めた。子供が死に掛けたと言うのに心配する人間が少なすぎるのである。

『せつちゃん、これ……』

『いくらなんでも可笑しいです。心配しているのがネカネさんとそ
のご家族だけとは』

『スタンさんもやえ、せつちゃん』

そう言いながら映像を見ると、ネカネが泣きながらベッドに寝ているネギに抱き着いていた。かなり心配だったのだろう、ネギも彼女に謝っている。

その様子を、エヴァンジェリンは感情の読み取れない目で見ていた。

再び場面は変わり、また雪の降る景色になった。

最初の時とは違い、晴れ間が見えるが。

『また雪、か……もう春も近いって言うのにねー』
『あ、ネギせんせー……』

のどかの言葉に目を向けると、穏やかな陽気に照らされた湖の近くでネギ（小）が腰を下ろして糸を垂らしていた。釣りをしているらしい。尤も、釣れてはいないようだが。

「ピンチになったら現れる〜 何処からともなく現れる〜」

竿を手に持ち、水に浮かんでいる浮きを見ながら楽しげに歌うネギ。しかし何かを思い出したようで、彼は顔を上げた。

「あ、そうだ。今日はお姉ちゃんが帰って来る日だった。早く村に戻らなきゃ」

そう言つてネギは竿をしまい、杖を持って村へと走り出した。久しぶりに姉と会つのが楽しみなのだろう。息を切らせながらも草原を走り、村を目指す。

朝倉達も宙に浮きながら後を追い、笑みを浮かべる。しかしふと村の方を見てみると、空が赤く染まっていた。夕焼けかとも思ったが、湖の方の空は未だに青い。

嫌な予感がするも、ネギは気付いていないようだ。姉との久しぶりの再会に胸躍らせているのだろう、ネカネの名を呼びながら村を近くで一望できる丘の上まで走る。

そしてその光景を見た。

「え……」

燃えていた。

建物が、植物が、村に在るあらゆる物が燃え、崩れ落ち、黒煙を立ち昇らせ空を赤と黒の二色に塗り潰していた。側に在る湖も、炎を反射しオレンジに染まっっている様に見える。

燃える村の中には飛び回る黒い影と、逃げ惑う影、立ち向かう影が建物の合間に僅かに見える。

『な………』

『火事？ そんな、何で！？』

『どう言う事ですかこれは、何故村が！？』

平穏だった村の突然の惨状に一瞬言葉を失くす。

しかしエヴァンジェリンは素早く状況を認識したようだ。

『違うな、これはただの火事ではない。地震などが併発したならともかく、ただの火事で村全体が燃え崩れる事など滅多に無い。少なくとも、暖炉等が種火ではないだろうよ』

『じゃあ人為的な火事？ でも誰が！？』

『先程村の中に、明らかに人間とは違う奴等が居た。十中八九、そいつらだろうよ』

吸血鬼の知覚能力で確認したエヴァンジェリンはそう言って村へと進んで行った。見ればネギ（小）も、姉とその家族の名を呼びながら村へと走って行っている。

「ネカネお姉ちゃん！ おじさーん！」

『ちょ、ネギ君危ないよ！？ 戻って！』

『危険です！』

『あわわ、せ、せんせー………！』

慌てた朝倉達がそう言い、ネギを止めようとするが無駄な事。今彼

女達が見ているのは記憶と言う名の映像である。当然、彼女達の声や姿を認識できる筈もない。

それでもエヴァンジェリンを除いた彼女達は声をかけて止めようとするが、聞こえる事の無いネギは村人を探しながら懸命に燃える村を走る。

そしてある程度進んだ所で、彼は探し求めていた一人を見つけた。しかし

「おじ…さん…?」

石と言う、変わり果てた姿で、だが。

村の防衛の指揮をしていたのか、彼の周囲には同じく石化した数名の男女の姿が見て取れた。全員、形こそ違えど杖を持っている。

周囲を見れば、離れた場所にも複数の人影が見える。ピクリとも動かないので、全員石化しているようだが。怒号や悲鳴が村のあちこちから聞こえる。

「僕が…僕がピンチになったらお父さんが来てくれるって思ったから?」

石化した村人を見てそう自問し、泣き始めるネギ。しかし答えは出ず、否定する朝倉達の声も届かない。

涙し、動かないネギを見て、村を襲撃した人間でない者　魔族が近寄って来た。巨体な者、長身な者、人間の様に衣服や武器を持っている者、様々だ。当然、恐怖に竦んでいるネギが動ける訳も無い。泣きながら父を呼ぶ。

動かないネギを獲物と判断したのだろう。腕を振り上げ、打ち下ろした。エヴァを除く全員が恐怖に目をつぶり　しかし肉が潰れる様な音がしない事に疑問を持ち、目を開けた。

『え……』

全員が驚いた。いつの間にかネギの前に長身の男がおり、打ち下ろされた魔族の拳を片手で受け止めていたのだから。手には現代のネギが持っている杖を持っている。

拳を止められた魔族はさらに力を込め、男諸共ネギを潰そうとするがどう言う腕力をしているのか、びくともしない。

『……ナギ』

思わずと言った風にエヴァンジェリンがその名を呼んだ。同時に風が吹き、男の服に付いているフードを頭から下ろす。表情こそ見えないが、ネギと同じ質感と色合いの赤毛が見えた。

「……雷の斧」

拳を受け止めたまま、男は呪文を詠唱し、魔法を発動した。発生した斧の形をした雷が魔族の体を真一つにし、その魔族の体は溶ける様に虚空に消えて行った。

それを見て、いつの間にか居た大勢の魔族が男に一齐に襲いかかる。余りの多さに悲鳴を上げるのどか達。このままではネギも襲われるだろう。

「魔法の射手・複合連弾・雷と風の200矢」

しかし男は関係ないとばかりに無詠唱で雷属性の魔法の射手を多量に展開、全方位に向けて撃ち出した。それらは石化した村人や燃える家を避け、襲いかかって来る魔族のみに襲いかかる。

当然、襲いかかっていた魔族達が急に止まれる訳もない。彼等はほぼ全員、撃ち出された魔法の射手に直撃しどう言う訳か上空へと打

ち上げられ、一ヶ所に集合させられる。

「こんなところか。雷の暴風」
ヨウイス・テンベスターイス・フルグリエンス

それを見て彼は杖を掲げて魔法陣を頭上に展開し、発動する魔法の名前を言つて魔法陣を殴りつけた。

放たれる暴風と雷光。それは轟音を放ちながら恐ろしい速度で空へと至り、密集させられていた魔族達に直撃。悲鳴どころか塵一つ残さず、空を覆っていた雲ごと現世から消滅させた。

それを見て、運よく打ち上げられなかった魔族の一人が息も絶え絶えに言う。

「コノ力……ソウカ、貴様ガアノ……」

その声を聞いて彼は魔族に近付き、しゃがんで首を掴んだ。ギリギリと音がしているあたり、徐々に力を込めているようだ。呻く魔族。

「ク、ガ……フフ、コレデハドチラガ化ケ物カ、分カツタモノデハ
ナイナ……化ケ物メ」

「……」

その言葉を聞くと同時に、彼は魔族の首を握り潰した。グチャリと生々しい音が響き、青い血が彼の手を濡らす。魔族は虚空に溶けて行った。

それに我に返ったか、茫然と蹂躪撃を見ていたネギは怯え、顔を青くして男に背を向け逃げ出した。

「あつ、こら！ 何故逃げる！ 戻れ、ナギが見えなくなるだろが
！」

「あんなの見せられたら逃げるのも無理無いつて！ て言うかマズ

「イよ！ まだ他にも生き残りが居るかもしれないのに！」
「先生、止まるです！」

遠ざかるナギを尻目に、走り去るネギを追う。

わき目も振らずに逃げるネギ。余程に恐ろしかったのだろう、目には再び涙が浮かんでいる。

しかし、一人で逃げ出したのが悪かった。目の前に、懸念された生き残りの魔族が現れたのだから。

当然驚き、ネギの足が止まる。それを見て魔族が口を開き、光線を放った。

「せんせー！！！」

のどかが悲鳴を上げる。

しかしこれは過去の記憶。既に有った事柄だ。もしここでネギが死ねば、現代にネギが居る筈がない。つまりネギは助かると言う事だ。直後、二つの影がネギの前に現れ光線を防いだ。甲高い音が響く。

「え？ あ！」

「お姉さんとお爺さんです！」

ネギの前に立っていたのは、ネギに会いに村に戻って来たネカネと、ナギの事で愚痴を漏らしていたスタンだった。二人とも杖を持ち、手を翳している。

しかしかなり強い光線だったのだろう、ネカネは両足が、スタンに至っては下半身全体が石と化している。障壁が殆ど役に立っていない。

「ぐ、む……」

「う……ああっ！」

「おね、お姉ちゃん！」

しかも石化の速度が思った以上に速い。ネカネの足が彼女の体を支えきれずに碎け、スタンは片腕も石と化した。

三人に石化光線を放った悪魔と、水から出て来た何かが同時に襲いかかる。

「ヘキサグラム・エト・ペンタグラム 六亡の星と五亡の星よ、マロース・スピリトゥス・シギレント 悪しき靈に封印を！ラゲイナ・シグナートーリア 封魔の瓶！！！」

しかし唯ではやられない。向かって来る悪魔たちに、まだ石と化していない左手で懐から瓶を取り出し、詠唱と共に放り投げる。

その瓶から魔法陣が現れ、襲いかかった悪魔達を吸い込み封印した。しかし、同時にスタンの腕が完全に石化した。

「……無事か？ 坊主……ぐっ」

「お、おじいちゃん……」

悪魔達が封印された事を確認し、スタンは石化した足を無理矢理動かし、ネギに歩み寄る。パラパラと、破片が落ちる。

「お姉ちゃんを連れて逃げい、坊主。この石化は強力じゃ、治す方法も無い。ワシは助からん」

「スタンおじいちゃん！」

体がどんどんと石化する中、スタンはネギにネカネと共に逃げるように言う。彼の体は既に生身の部分が首から上しかなく、もはや動くことすらままならない。

かなりの速度で石化している。

「誰か治癒術者を探すんじゃ……このままでは、お姉ちゃんも危な

いぞい」

「おじいちゃん……」

「……頼む、逃げとくれい坊主。お前だけは何が有ろうと護ると、死んでもうたあのバカに誓つとるんじゃ……ほれ、こんな老いぼれは放つて……はよ、う……」

そう言つて、スタンは完全に石と化した。

ネギが縋り付き、涙を流しながら声をかけるも彼が答える事は無い。泣きながらネカネにも縋り付くが、彼女は気絶している。

ざりっ

そんな音が背後からし、涙を湛えた眼で後ろを向く。

フードをかぶり直し、杖をついたナギが居た。白かったローブは薄汚れ、顔には血が涙の様に流れている。表情は影になっていて見えない。

ネギが怯え、ネカネに縋り付くが男はそれを見ても気にした様子は無く、何実かを呟いた。

直後、景色が燃える村からそこを見下ろす草原へと移り変わった。どうやら転移したらしい。

「……すまない、来るのが遅すぎた」

燃える村を見下ろしながらナギはそう言う。

それに対し、ネギはアーニヤから貰った杖を構えて気絶しているネカネの前に立つ。どうやら守るつもりらしいが、震えている。

「お前……そう、か……お前がネギか……俺との間に立つて、お姉ちゃんを護っているつもりか？」

フードに隠れて表情は分からないが、何処か納得した様な声音でそう言いナギはネギに近づく。
ネギは杖を構えているが怯えており、かなり近付かれ手を伸ばされた所で恐怖に目を閉じた。

が、すぐに目を開いた。頭を撫でられていたから。

「大きくなつたな……そうだ、お前にこれをやるう。俺の形見だ」

ネギの頭を撫でながらそう言つて、ナギは手に持つ杖をネギに差し出した。

ネギはそれを受け取るも持ち上げられずによるけた。苦笑するナギ。

「重すぎたか。ま、しょうがねえか、まだガキだしな」

そう言つて僅かに笑い、村の方を見て言つた。

「……もう、時間がねーな」

「え？」

「ネカネの事は安心しろ。石化は止めておいたから、後はゆっくり治して貰え」

そうネギに言つて、ナギはふわりと宙に浮いた。そしてさらに言葉を続ける。

「お父さん？」

「村の奴等の事は、俺の仲間を探しな。並の治癒術師や他の奴等じや分からねえが、アイツになら何とか出来るだろ。今何処に居るか
は分からねえが、ほほ何でも有りだからな」

「お父さん！」

「悪いな、お前には何もしてやれなくて。こんなこと言えた義理じ

「やあねえが……元気に育って、幸せになりな。アイツもきつと、それを望んでるだろ」

そう言いながら宙に浮き、どんどんと地上から離れていくナギ。ネギはナギを呼びながらそれを追うが、こけてしまい、起き上がった時には既に彼の姿は消え失せていた。

「お父さん……お父さあーん!!」

消えた父を思い大声で泣くネギを最後に見て、記憶の景色は白く染まり、木乃香達の意識もまた白く塗り潰された。そして彼女達は現実へと帰還した。

57話：不和

「……戻ってきたみたいね」

ネギの記憶から戻って来た木乃香達を迎えたのは、何処までもあっさりとした感じのアスナのそんな言葉だった。

「どうだった、なんて聞かないわよ。顔を見ればすぐに分かるから」
「何でさ」

「簡単よ、全員泣いているもの。流石にエヴァちゃんはそんな事無いみたいけど」

「当たり前だ、あれぐらいで誰が泣くか」

アスナの言葉に目元を拭うと、確かに涙であろう水が手に付いた。そして気付けば、頬にも涙が流れた様な感覚が有った。

互いの顔を見れば、アスナの言う様にエヴァンジェリン以外ほぼ全員が涙していた。特にのどかは滝かと思紛う程に泣いていた。水分は大丈夫なのだろうか。

「……先生、あの後どうなったのですか？」

「三日後にやって来た人達に救助されて、ウエールズの山奥にある魔法使い達が住む街に移り住みました。それから5年は、魔法学校で勉強の毎日で……」

夕映に聞かれ、ネギは救助された5年間、魔法の勉強に打ち込んだ事、村人の事を聞いても教えて貰えなかった事を話した。

「あの雪の日の事が恐くて、でもあの時僕を助けてくれた父さんに

もう一度会いたいって思つて……でも時々、こつちも思つんです。あれは「ピンチになつたら父さんが助けに来てくれる」って思つた、僕への天罰なんじゃないかつて」

それは逃避でもあり、憧憬でもあるのだろう。

引き起こされた出来事で幼いながらに感じた死の恐怖と、その原因が自分の思つた事に有ると思つた自責の念はどれほどか。そして、望んだ父によつてそれから救われた感情の揺れはいかばかりか。

幼い心に刻み付けられた感情は強烈で、どれだけ時が経つても根深く残り、その時に抱いた第一衝動に縛り付ける。完全に癒える事など、有りはしないだろう。

曰く、精神的^{トラウマ}外傷と言つ物だ。それを振り払うのは容易ではなく、さらに一筋縄ではいかない。一生それを振り払えずに生きる者もいるだろう。おそらく、いや確実にネギもそれに捕われているだろう。それが恐怖か憎悪か、それともまるで別の感情なのかは分からないが。

「なん……」

「そんな事ありません！ 思つただけで、それが現実になる事などありません！ あれはネギ先生の責任ではありません！」

そう言つてネギの言葉を否定する夕映達。普段の理路整然とし、冷静な彼女から変わつて、珍しく感情的になつているようだ。

だがそれも仕方ないのだろう。彼女達が興味本位で見た記憶は、ネギのトラウマで有ると同時に、現在の彼を形作る重要極まる物でもあつたのだから。

「まさかあんな過去だとは思つてもみなかつたけど……ネギ君！」

「は、はいっ!？」

「この朝倉和美、及ばずながらネギ君のお父さん探しに協力するよ

「え……ええっ!？」

突然の朝倉の宣言に驚愕するネギ。まあ、いきなり言われれば驚くのも無理はないと言える。そしてそれに同調する様に、記憶に潜っていた彼女達は一部を除いて次々に手伝うと言い始めた。

おそらく、純粹に善意でそう言っているのだろう。朝倉はそれだけではないだろうが。

しかし内容は笑って済ませられるレベルの話ではない。

いかにナギが英雄と言えども、所詮は戦争における英雄だ。恨んでいる人間はごまんと、それこそ掃いて捨てるほど居るだろう。

いくらそれを知らないとは言え、いや、知らないからこそ言えるのか。ネギに関わり、真実英雄であるナギを探すと言う事は、自分から危険に向かつて突っ込んで行く事に他ならないのだ。それこそ、命を落とす様な危険にも。

「だ、ダメですよ協力なんて！ さっきみたいな事に合うかも知れないのに……」

「へーきへーき、なんとかなるって。それにいざとなったらネギ君が守ってくれるでしょ？」

「それは、そうですね……」

ネギはそれを聞いて、混乱しつつもやめる様に言う。自分に関われば、先の記憶と同じ様な目に合うかも知れないと思っている為、巻き込みたくないと思っているのだろう。今さらな気もするが。

だが朝倉達は樂觀視してその危険性をまるで考慮していない。しかもネギに頼る気満々だ。この調子では同居しているアスナや木乃香も巻き込むだろう。従者として契約している刹那は言わずもがなだ。

「でも、ダメです！ マ、師匠も何か言ってください！」

このままでは押し切られると思ったか、ネギはエヴァンジェリンに救援要請を出す。

しかしこの場で彼女に救援を要請してもあまり意味は無いだろう。意外と人情深かったり、面倒見が良かったりするもので忘れられているかもしれないが、彼女は（自称でもあるが）悪の魔法使いなのである。基本的に、自分に迷惑がかからなければ他人がどうなるかが別にどうでもいいのだ。

「さて、私としては別にどうでもいいがな。ぼーやの記憶に潜ったのも、6年前にナギに会っていると云った確認だしな」

「ちよ、師匠!?!」

「だが、確かにあの記憶と同じ様な事が無いとも限らん。他の奴等はどうでもいいが、一応弟子であるお前があの程度に負けると思うと腹が立つ。どれ、明日からは今まで以上に厳しく行くか」

「え!?!」

「喜べ、ぼーや。あの程度の魔族共なぞ、軽く捻れる位には強くしてやるわ」

不敵な、しかし何処か黒い笑みを浮かべながらエヴァンジェリンはそう言った。おそらく今言った事は絶対に現実になるのだろう。一体どれほどの厳しさなのか。ネギが燃え尽きなければいいのだが…既に顔面蒼白になって震えている。燃え尽きるのは確定か。側でチャチャゼロが楽しそうに笑う。

「ああ、そうだ。ナギ探しなら私も手伝ってやらんでも無い。アイツには色々と言いたい事も有るしな。これが私の何か、だ」
「ちよっ!?!」

ついでに、ナギ探しは手伝う気が有るらしい。

彼女はそう言っただけで、明日からの修行メニューを考え始めた。実にスパルタである。

エヴァンジェリンも手伝う気が有ると聞いて、朝倉達はさらに賑やかになる。このまま宴会でも始めてしまふ様な雰囲気だ。

「お、そうだ。アスナー、アンタも手伝ってよ。人数は多い方が良いしな」

やはりと言っべきか、朝倉は賑やかに話し合う彼女等と離れて、刹那と木乃香と話しているアスナーにも声をかけた。

「イヤ」

「え？ 何で」

しかし一言で、しかも即答で断られた。

その事に驚き、間の抜けた声で聞き返す。おそらく断ると言う風には考えていなかったのだろう。見ればネギも、驚いているようだ。

「自分から危険に突っ込んで行く趣味なんて私には無いもの、断るのは当然でしょ」

「いやでも、即答は無いんじゃないかな。もうちょっと考えるくらい……」

「嫌な物は嫌。何を言われても、私に手伝う気はないわ。絶対に負担を掛ける事になるし」

そう言っただけでアスナーは話していた木乃香達から離れて、朝倉達に向き直った。

鋭い視線が皆を射抜き、それに怯えた様に夕映とのどかが一歩下がった。

「逆に聞くわ、何でアンタ達はナ……ネギのお父さん探しを手伝おうって思ったの？」

「アスナ……」

「ゴメン木乃香、少し黙ってて。聞いておかなきゃいけない事だから」

咎める様に自分の名前を呼ぶ木乃香に、硬い口調でそう返す。

嘘偽りは許さないと言う雰囲気だ。

それに対して木乃香は尚も何かを言おうとするが、刹那に腕を掴まれて首を静かに横に振られ、不安そうな目でアスナを見た。

「なんでって、そりゃネギ君が可哀想だからだよ。村の皆が石にされてさ……まあ、面白そうって言うのも多少は有るけどさ」

「朝倉さんの言葉は置いておくとして、先生は村を襲撃されて、先生のお父さんにお姉さんと二人だけ助けられたのです。きっと、いえ、確実に心に深い傷を負っているでしょう。ですがそれでもお父さんを探そうとしているのです」

「一人じゃ出来ない事も有るでしょうから……ですから、その……手伝いたいんですー」

アスナの問いにそう答えるのどか達。この答えでどうだと言わんばかりに朝倉と夕映はアスナを見、のどかもじっと見つめるが、アスナは顔を顰めていた。

その事に困惑し、何故そんな顔をしているのかを聞こうとした所でアスナが口を開いた。

「可哀想、ね……それだけ？」

「それだけって、何さその言い方。何か文句でも有るの？」

「大有りね。特に朝倉、アンタには」

アスナの言葉に不機嫌そうに顔を顰めてそう言った朝倉に、アスナは同じ様に顔を顰め、さらに溜息を吐きながらそう返した。しかしその口調は刺々しい。

少し離れた所でその様子を見ていたネギがオロオロとした様子で二人を見ている。

「アンタ達がネギの記憶に潜って何を見て、どうして手伝いたいつて思ったのかは、見るつもりが無かったから見てない私には当たり前だけど分からないわ。まあ、可哀想って思ったんなら、何か悲劇が有ったんでしょね」

「さつきも言ったと思うけどね、ネギ君の村の人達が石にされたつて。それでお父さんに助けられたのを見た時は柄にも無く感動したね。あれを見て同情的にならない人が居たら人間じゃないよ」

「じゃあ聞くけどね朝倉、感動云々は抜きにして、そんな悲劇を見て、さらに疑似的とは言え体験して、何でアンタの口からは「面白そう」なんて言う言葉が出てくるのかしら？」

冷たくそう言い放ったアスナの言葉に、はっとした様子で朝倉を見る。

確かに、本当に同情的に見ているのならば、間違っても「面白そう」等と言う言葉は出てこない筈である。

「本当に可哀想とか同情的に見ているのなら、たとえ軽い気持ち、嘘だとしてもそんな言葉は絶対に出てこないと思うけど……アンタ、本当にネギが可哀想だって思ってるの？」

「思ってるよ。だからネギ君を手伝いたいつて思ったんじゃないか」

「だったら面白そうなんて言葉は出てこない筈よ。アンタ、面白半分でごつち側に関わろうとしてるんじゃないでしょうね」

「それ、は……だけど、確かに可哀想だとは思って……」

刃の様に目を細め、睨むように見ているアスナに朝倉は言葉を詰まらせる。おそらく彼女としては、そんな風に言われるとは思っても居なかったのだろう。きつと己の好奇心が先行し、軽い気持ちで言っただけなのだろう。

だがそれを言うタイミングが最悪だった。最終的には全員が見た後に感動したとはいえ、あの記憶は間違いなく悲劇に分類される物だ。それを見た後で面白そう等と言っては、感性を疑われるどころか人格を疑われても無理はない。

そんな思いを含んだ視線を受け、黙ってしまった朝倉を見やり、木乃香が咎める様な口調でアスナに言った。

「……アスナ、いくらなんでも言い過ぎや。そんな気はないんは知つとるやろ？」

「そうは言ってもね、木乃香。こうでも言わないと、絶対に面白半分興味半分でこつち側に関わろうとするわ。こつち側の危険性は、アンタも京都で十分理解している筈でしょう？」

「やっても、もっと言い様ってものが有るやろ？ ウチらはお父様やネギ君のお父さんがどう言った人やったんかを昂さんに聞いたからこつち側の危険性は知つとるし、何でネギ君があんな目にあつたんかも大体予想できるけど、夕映達はその事は知らんのやし……アスナは優しいのに、今みたいな言い方したら嫌われるで」

アスナの言葉に、若干沈んだ声で木乃香はそう言う。口調は何処か悲しげで、寂しげだ。

それを見て安心させるつもりなのだろう、刹那がさりげなく木乃香の横に行き、優しく手を握った。

その言葉を聞き、沈んだ様子の木乃香を見てアスナも少し頭が冷えただろう、ピリピリとした雰囲気はなりを潜め、少しばかり沈んだ雰囲気になった。

「……………そう、ね。ゴメン朝倉。少し、頭に血が昇ってた」
「え、いや、私も今思えば、人の悲劇見といて面白そうなんて、ネギ君の事考えない台詞言っちゃったし、怒られても仕方ないと言うか……。でもアスナ、アンタ、何であそこまで怒ったの？」
「こつちの世界は危険なの。面白そうだからって理由で関われば、まず間違いなく取り返しのつかない事になる。だから、そんな思いで関わらないで」

アスナはそう朝倉に謝り、しかし一言背を向けて言ってから自分の寢床に戻って行った。

それを茫然と見送り、彼女の姿が視界から無くなった後、残っていた皆で先のネギの記憶で見たナギの事やこれからの事で話し合い、それぞれの寢床に戻って行った。

しかし木乃香と刹那がアスナと一緒にエヴァンジェリンに使わせて貰っている寢床に戻っても、彼女の姿はそこには無かった。

空中都市の一角に在る工房に、金属を叩く音が響き渡る。

室内には三つの人影が在った。一つは言わずもがな、この魔法球の持ち主である昴である。他の二つの人影は人間の形ではなく異形で、一つは紅い、炎のような印象を持たせる蜥蜴のような姿をした何か。全体の大きさは昴の頭くらいか、あまり大きく無く、手には炎を意匠化した全体的に黒い錫杖を持っている。

もう一つの影は、赤い蜥蜴と違って姿形は人間に近く服を纏い、先端に赤い球体の付いた可愛らしい帽子を被っているが尖った耳と先程の紅い影と同じ程度の大きさが人間ではないと示している。顔は全体的に髭に覆われ、パツと見ブラウニーと言ったところか。しかしその手には身の丈に似合わぬ巨大な鎚が握られ、昴と一緒に灼熱した小さく細い二つの金属を叩いている

『ほれ、もう一息で完成じゃ！ 気を入れるんじゃぞ主殿！』
「言われなくとも、入れますよ、ノーム。頼まれていた物が、ようやく完成するのですからね」
『ま、完成つつつてもまだ刃を研いだりとか有るけどな』
「そう言う事は言わなくても良いんですよサラマンダー。今日中には絶対に完成させるのですから」

サラマンダーと呼ばれた燃える火の様に紅い蜥蜴にそう言い返し、
昴はノームと呼ばれた存在と共に鎚を振るう。

書庫をジオに追い出されてから数日間、彼はチャチャゼロに頼まれていたナイフ作成を思い出し、態々原料となる鉱石を取りに「勝利の渓谷」に行き、火属性と地属性を担う二人の精霊と一緒にそれを精錬して金属を作り、属性を宿した武器を作っていた。

ちなみに大きさこそ小さいが、こう見えて二人とも精霊としてはかなり高位に属している。

そしてその会話から十数時間、休まずに金属を打ち続け、形を整え、
研ぎ、およそ刃物の作成に必要な作業全てを完了した。

「完成、です。ようやく……」

『ほっほ、これはまた見事な出来栄じゃなあ』

『ジジイ、自分で言っても気持ちワリーだけだぞ』

『何じゃとこの燃えトカゲが！』

『火蜥蜴なんだから燃えてんのは当たり前だが！ ボケてんのか
デメエー！』

ギヤーギヤーと言い合う二人の精霊を尻目に、昴は完成したばかりの二振りの刃物を手に取った。

二つとも、2、30cm程の大きさをしており、柄の片面を覆う様な形で護拳が付けられている。刃は一振りは両刃で、もう一振りは

片刃であり、若干反りが入っている。そして両方とも、刃には古代文字で何かが刻まれている。

刃と柄の繋ぎの部分にはそれぞれ、両刃の方に深紅の、片刃の方に薄緑の結晶が埋め込まれており、まるで芸術品の様にも見える。

それらを収める鞘にも、刃に刻まれているのと同じ文字が刻まれていた。

『ふむ、後はこれらの状態の固定と、名付けじゃな』

『だったら先に名付けだな、先に固定しちゃうと名付けも出来なくなっちまうし。固定は主ならずくに済ませられるだろ』

『じゃな。して、主殿。名はもう決めてあるのかの？』

「ええ、これに付与した属性に関わりの有る物です」

聞いて来る精霊達にそう返し、昴は名付けと固定を同時に行った。

「二本一対、風と炎の力を宿す汝等が名はザンガ、風炎双刃ザンガ。汝等が主となる者の、永久の力とならん事を」

特別番外編・剣の舞姫様とのコラボです（前書き）

まずは剣の舞姫様に感謝と謝罪を。

大変長らくお待たせいたしました。

今回の話はタイトル通り、剣の舞姫様の「英雄と女王の子」とのコラボ作品です。

コラボが苦手な方はご注意を。

尚、この話は本編とは何の関係もない……ハズです。

特別番外編・剣の舞姫様とのコラボです

特別コラボ【近くて遠い世界の友人】

喫茶ホタルブクロの朝は早い。

店として開店するのは午前8時以降だが、朝の掃除や時折来る少女達の朝食作り、その他諸々もあつて実質午前5時から6時くらいには開くのだ。

そんなホタルブクロの前で現在、夜の闇をさらに深くしたような黒い髪に、装飾も模様も一切無い、ファッションセンス絶無と言つて良い程に何処までも真黒な服を着た、全身是余す所無く黒一色のパツと見不審者の様な服装の男が一人、竹箒片手に店の前の道を掃除していた。

全身黒一色なので、人と言うよりも影の様に見える。さらに全身黒の中で、瞳の深紅が異彩を放つ。割と不気味である。

「……………何か、今、非常に不愉快な紹介をされた様な気がしますね」
気のせいである。

男の名は緋乃宮昴。この喫茶店、ホタルブクロの主その人である。名前に赤に連なる色が有るのに黒を好んでいる事は気にしてはいけない。

ちなみに外見年齢は20代前半だが、実年齢は45のおじさんである。若づくりにも程がある。

いつもなら4時頃に起き、時折異常に早く目が覚める癖を持つ。今日もどうやらその日だったらしく、午前3時20分頃に起きた彼はやはりというか、いつも通りに早めの朝食を取り家を出て、せっせと軽い仕込みや店先の掃除をしていた。ちなみに現時刻は午前5時

半である。

まだ僅かに薄暗い時間帯、人通りも有る所は有るが、殆ど無い道に
箒を掃く音だけが響く。

「しかし今日は僅かですが、いつもと違う空気を感じますね。以前
も何処かで感じた様な空気ですが……はて、何処で感じたのでした
か？」

箒で店の前を掃きながらそんな事を言う昴。しかし疑問を口にしな
がらも、その口調は何処か楽しげに聞こえる。

そんな彼が、さらに10分程掃除した時だった。

「……む？」

妙な空間の揺れを感じた気がした。

転移に似た、しかし通常のそれとは何処かが違う空間の揺れ。

魔力量はまるで無いと言っても良い程無い（一般人以下とゼクトと
アルのお墨付きである）為に魔法を使う事は出来ないが、似たよう
な事は真言で出来る為になんとなく分かるのだ。
今回感じた揺れは少々毛色が違う様に感じるが。

「今の揺れは一体……？ むおっ！？」

揺れ自体は然程でもなく、すぐに収まった。おそらく気付いた者は
ほとんど居ないだろう。

だが次の瞬間、今度は彼の目の前の空間に歪みが現れた。歪み自体
は彼も真言で作り上げ、転移に利用しているが今回彼は真言を発動
していない。

いきなりの事に驚き、飛び退いてその歪みから離れる昴。しかもそ
の直後、歪みは縦に裂け、人が通れるほどの穴を創り出した。

「こ、これは一体何事でしょうか………ぬ？」

目の前で突然発生した空間の裂け目と穴に警戒する。

しかし、その警戒心はすぐに霧散した。空間に開いた穴から出て来た人の姿によって。

出て来たのは二人組の男女だった。一人は赤味がかった長い金髪を三つ編みにして赤いリボンで束ねた、こう言つては何だが、パツと見女性にも見える男性。歳の頃は若く、二十歳前と言つたところだろう。その表情は凜々しくも僅かに笑みを浮かべており、何処か気品を感じさせる。手には宝石で出来た特徴的な刀身を持つ短剣を持つており、それは七色に輝いている。

もう一人は、同じ様に長髪だが色は烏の濡羽の様な艶の有る漆黒の髪をした少女。こちらは髪を編んだりせず、ストレートに下ろしている。歳の頃は15か16と言つたところだろうが、落ち着いた雰囲気から外見年齢よりも大人びている様に感じさせる。柔らかな雰囲気に穏やかな微笑みを浮かべた美少女だ。

二人とも和やかな雰囲気をしているが、隙の無い佇まいからして只者ではないと言う事が分かる。

「ふう、ようやく着いた。お久しぶりです、昴さん」

「この人がそうなん？ 初めまして、近衛木乃香です」

空間に開いた穴から出て来たのは、以前何の偶然か迷い込んだ、近くて遠い並行世界で出会った戦友の息子で、新たに出来た友人達の一人であった。

「アリス君、ですか？ それに……木乃香ちゃん？ いえ、しかし雰囲気が……それに背丈も少々、高くなっている様な……」

「え？ ……ああ、私の世界の木乃香です。二代目紅き翼の一員で

もありません」

「アリス君の世界の……成る程、だから初めまして、ですか。吃驚しましたよ、知っている筈の人に初めましてと言われたのですからですが、アリス君の世界の木乃香ちゃんなら納得ですね。それにその力強い気配も、二代目に所属しているのなら納得です。……つと、私とした事が失礼を。挨拶を返さねば」

空間の裂け目から現れた彼等に少々目を見開いて驚きを露わにする昴。

さらに知り合いでもある少女に初めましてと言われて少々困惑していたようだが、アリスに説明されて納得したようだ。

居住まいを直し、箒を店に立てかけて挨拶を返す。

「初めまして、木乃香さん。既に知っているかも知れませんが、一応自己紹介を。私は緋乃宮昴と申します、こちらの世界の紅き翼の一員でした。現在は此处、麻帆良ではない喫茶店の店主をしますが」

「はい、アリスさんから聞いとります。別の世界の先輩さんやって」「一応、そう言う事になりますかね。貴女達から見たら、私は初代に所属していた人間と言う事になりますから」

そう挨拶をし、少しの間談笑してから「立ち話もなんですし、どうぞ」と言つて昴は客人である二人を喫茶店に招き入れた。

「……良い店ですね。静かで、けど何処か温かい。それに妙に穏やかになるこの感じは……魔力、ですか？ そんなに濃くは無いですけど」

「よく分かりましたね……と言つても、魔法使だから気付くのは当然ですか。店に入った人が落ち着ける様に、木属性と光属性、水属性の魔力を多少ですが発生させています。静かなのは開店時間前

で、さらに朝早くだからと言つのも有りますけどね。良い店だと言つて貰えると嬉しいです」

そう言つて昴は席に座るように促し、二人が席に着いた事を確認して紅茶と軽い食事としてサンドイッチとヨーグルトを出した。朝早い時間帯の為、まだ何も食べていないだろうと思つた為である。

「美味しいそーやなー。ありがとうございます」

「ありがとうございます。お代は……」

「いいですよ。まだ開店まで時間が有りますし、遠い地からはるばる訪れてくれた友人に対する初回サービスと思つて頂ければ」

「そうですね。では、頂きます」

昴の言葉に礼を言つて、二人は出された物を食べ始めた。

瑞々しく新鮮な野菜とハム、マヨネーズの風味が互いを損ねる事無く絡み合い、実に美味しい。紅茶も、良い香りを出している。

「美味しいですえ。特にハムと野菜がいいです」

「自家製のハムです。味見はしていましたが他の人の口に合うかは不安でしたので……ですが、お口に合った様で何よりです」

「確かに美味しいけど、野菜の味が少し普通と違うかな？」

「あ、それはウチも思つとつた。どんな物を使つてるんですか？」

二人とも料理をする事が有り、しかも上手なのでやはり味には鋭いようだ。普通の物とは違う材料を使っている事を一口食べて見抜いたらしい。

それに昴は僅かに驚いた様だが、すぐに頬笑みを浮かべた。

「気付きましたか。その野菜は私の持つている魔法球内で採れる野菜を使っています。市販の物よりも味が濃く、美味しいのです。ま

あ、形は少々独特なのですがね」

「どんな形を見せて貰っても良いですか？」

「いいですよ。何種類かありますし、まだ幾つか残っていますから」

そう言うってから、昴は自分のポーチに手を突っ込み、その大きさよりもずっと大きい野菜・果物を幾つか取り出した。

しかし毎度の事ながら、小さい物の中からそれを超えた大きさの物が出てくるのはある種異様な光景である。

「どうしましたか？」

「いえ、何と言いますか。そのポーチ、魔法具なんでしょうけれど、その大きさを遥かに超える物が幾つも出てくるのを見るのは少し、妙な感覚になると言いますか」

「出てくるのを見るのも妙な気分やけど、入れる時はどうやって入れるんやらか……」

ふと視線を感じて見れば、アリス達は若干、苦笑いしていた。

アリス自身、自分の影の中に武装や生活用品など様々な物を入れているが、流石に20cm程度の大きさしかないポーチから、それに倍する大きさの物がポンポンと幾つも出てくるのを見たら妙な感覚になったのかもしれない。

取り出された野菜や果物は動物の様な外見をした物、トランプの絵柄をした物等、様々だ。以前エヴァンジェリンやさよが食べたフルーツであるビーダマンベリーやサイコロイチゴもある。

「本当に独特な形をしていますね。と言うか、妙な形の物が多い様な……」

「見た目はアレですけど、美味しいんですよ？」

そう言うて昴は既に食事を終えていた二人の食器と野菜類をしまい、

取り出していた物の一つであるビーダマンベリーを包丁で一口サイズに切つて器に盛り付け、二人に出した。
存外に柔らかい果肉のようで、フルフルと揺れている。
アリスと木乃香は出されそれを興味深げに見て、一口程度の大きさに切りそろえられたビーダマンベリーを口に入れた。

「あ、美味しい」

途端、口内に満ちる何とも言えない甘酸っぱい果汁。

一口程度に小さく切られたその瑞々しい果肉の何処に溜めていたのかと言う様な量の果汁が一噛み毎に溢れ出る。十分に甘さを持つているが水のようにさらりとした飲み心地のそれは渴きなどと与えず、逆に潤いを与える。

木乃香が口にした途端に言った様に、それは本当に美味しかった。

「しかし、どうやってこちらの世界に来たのですか？ 世界間の壁を超えるのは、そう易々と出来る事ではないと思いますが」

「宝石剣を使いました。覚えていますか？ 以前昴さん達が私達の世界にやって来た時に原因となった、この剣です」

「それですか……あの時は驚きましたね。突然空間に裂け目が出来たかと思えば、引き摺り込まれて意識を失って、気付けばこちらの世界とは別の魔法世界に居たのですから」

昴の問いに、アリスはフォークを置いて宝石剣を手に持ち、世界間の壁を越えたと説明した。

それに対してそう言いつつも、何処か納得した様子で頷く。

あの時は事故の様な物で発生した次元の歪みと裂け目に飲み込まれて、自分を含めた別々の世界の人間がアリスの世界に渡ってしまったが、その原因となった物の所有者であるアリス達がその力を使って別の世界に渡れないと言う事は無いだろう。

ふと、あの時に出会った他の世界の友人達は元気だろうかと思つた……が、しかし確認しようがないのですぐに意識の底に沈めた。真言を使えば世界間の壁を越える事は可能かもしれないが、あくまで可能性であつて実際に越えられるかは分からない。下手をすれば次元の狭間に迷い込んで一生出られなくなるかも知れないのだ。そして昴は（本人は否定しているが）重度の方向音痴（しかも少しずつ酷くなっている）である為、そうなる可能性、否、危険性は言つては何だが極めて高い。

「しかしこちらの世界に来たと言つ事は、アリス君の望んだ事は叶つたと言つ事でしようか？」

「はい。『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』を倒して魔法世界も救済し、母さんの名誉を貶めていたメガロメセンブリア元老院もほぼ全員を倒しました。捕われていた父さんと母さんも助けて、後は王国を復興させるだけですな」

「そうですか。アリカさんの名誉は回復したのですね……………本当に、良かった」

アリスの言葉を聞き、心の底から良かったと思つた。

並行世界の存在故に実際には関係が無いとは言え、昴にとっては大戦を共に駆け抜けた戦友でもあつた女性である。

世界や国、そして己が民の行く末を案じて行動した彼女の名誉が、コスモ・エンテレケイア名誉や利権等に狂つた元老院の黒い部分に汚され、「完全なる世界」との関与の他全ての罪を被せられ、世界を滅ぼしかけた災厄の女王と貶められた時は、頭に血が昇つたのだ。

その彼女の名誉が、別の世界とは言え回復した。友の名誉が正しく世界に公表されて、嬉しくない訳がない。

厳密に言えば別世界の彼女なので友ではないのだが、そんな事は関係なかった。

「昴さん……」

「ああ、すいません。思わず少し、涙が……歳を取ると涙腺が緩くなつて困りますね」

「いえ、それだけ母さん達の事を大切に思ってくれていたんでしょ
う？　ありがとうございます」

目から流れた一筋の涙を拭く昴にアリスはそう言った。別の世界の人間とは言え、父と母を大切に思われるのは嬉しいのだろう。顔もほころび、隣に座っている木乃香も、とても嬉しそうに笑んでいる。しかし次の昴の問いに、その笑みが翳った。

「そう言えば、そちらの世界の少年はどうなりましたか？　確か、アリス君の弟さんでしたよね。別行動を取っていたみたいですが……どうしました？　顔色が優れない様ですが」

「あ、いえ……ネギは、魔族に堕ちてしまいました。闇の魔法の使い過ぎで……魔族に堕ちた後、争いになり……墓守り人の宮殿に封印しました」

「……申し訳ありません。どうやら、配慮が足りなかったようです」

アリスの言った言葉に一瞬息を呑むも、自分の失言を悟り、言い辛そうにそう言ったアリスに謝る。

何故兄弟で争い、ネギを封印する事になったのか、それは分からないが、彼も好きでそうした訳ではないのだろう。

深く詮索すべきではない。そう思い、重くなつた雰囲気を変える為に話題を変える。

「そう言えば、お二人はやけに仲が良いようですが……？」

「え、えっと……」

昴の言葉に、木乃香が若干顔を赤らめ、手を頬に添える。見ればアリスも、僅かに頬を赤くしている。

二人のその様子を疑問に思い、どうしたのかと問おうとするがその時、木乃香の左手の薬指に嵌められた指輪が目に入った。

光を受けてキラリと輝く銀の指輪にはダイヤモンドが添え付けられ、しかし身を飾る為とは別の印象を抱かせた。

アリスの方を見れば、彼の左手薬指にも大きさの違う、しかし同じ形をした指輪が在った。

指輪をしている事自体は別に可笑しくない。魔法の発動体にも指輪の形をした物は有るし、普通にアクセサリーとして身に着けている人も居るのだ。昴も、右手人差し指に魔法発動体とは関係の無いアレキサンドライトの指輪をしている（尤も、これは外そうにも外れないのだが）。

だが二人揃いの指輪を、揃って左手薬指にしている事が、身を飾る為だけではない事を示している。

「その指輪は……まさか、貴方達」

「はい、その……私達、結婚することになりました」

「なんと！ それはめでたい！！」

顔を赤くしてそう言ったアリスに、驚きを露わにする。

これが女子や知りたがりならばどちらが先にプロポーズしたのか聞きたがるだろうが、昴はそんな事はせず、純粹に祝いの言葉を述べた。

心からの祝いの言葉にくすぐったくなったのか、二人とも目を細める。実に嬉しそうだ。

「おめでとうございます、心より祝福させて頂きますよ。しかし、よく詠春が認めましたね。あの親バカが……」

「あ、ありがとうございます。認めて貰う事は認めて貰ったんです。

けど……」

「？　ど、どうしました？　急にそんな、遠い目をして」

「いえ、やっぱりと言うか、戦う事になりました……」

濁いた笑いを漏らしながら、遠い目で何処かを見るアリス。おそろく彼の世界で、彼の隣に座っている木乃香との結婚を認めて貰う為に行った詠春との戦いを思い出しているのだろう。

若干顔色が青くなっているのは気の所為だと思いたい。

「……よく、無事で……」

一体どう言う事が有ったのかを知る事は昴には出来ないが、きっと雷光剣や雷鳴剣等、神鳴流の奥義を乱れ撃ちされたのだろう。

娘の為なら恐ろしい力を振るう馬鹿親である為、想像する事は割と簡単だったが……実際に想像してみると、洒落にならないくらい恐ろしい光景だ。軽くトラウマになりそうである。

というか、詠春も衰えているだろうとは言えそれでも最強クラスの一人である。そんな男と戦って、良く死ななかったものだ。

まあ、殺すつもりはなかったのだろう、きっと。そう思いたい。

「しかし、結婚ですか。盛大な式になるでしょうねえ……」

「あの、昴さん」

「はい？」

「これを」

そう言つて木乃香から差し出されたのは、一通の純白の封筒だった。

「これは？」

「結婚式への招待状です。一年後に予定して……もし宜しければ、どうぞいらしてください」

「いいのですか？」

「はい。他にも色々な人に渡していますから。それと昴さんには、来賓のスピーチをお願いしたいと思って……都合が悪ければ、断って頂いても」

「友人の頼みを断る等、とんでもないです。しかもそれが結婚式と言う、一生に一度の大切な儀式ならば尚更に」

「では」

「はい、承りました。僭越ながらこの緋乃宮昴、来賓の祝辞を務めさせて頂きます」

微笑みを浮かべながらそう言った昴に、アリスと木乃香は喜びを露わにした。

それを見て昴もまた笑みを深くし、こちら側の世界での祝いとして自分の持ち得る技術や知識、経験をつぎ込み、そして材料をふんだんに使った特製の「緋の雫」を振舞った。

そして宝石剣に魔力が溜まるまでの二日間、店を臨時休業にして今までどのような事をしていたのかを話したり、魔法球の中で果物を採ったりして過ごした。

その際さよやアスナとも出会い、アリスの世界の二人がどう言った存在なのかを聞いて顔を赤くしたりもしていた。

そして宝石剣に魔力が溜まった二日後、二人は元居た世界に戻る為に緋乃宮邸の庭に立っていた。周囲には感知されない為の結果が真言によって張られている為、絶対に気付かれない。

昴も見送りの為、少し離れた所に立っている。

「お世話になりました、昴さん」

「どうもありがとうございます」

「いえいえ、私も久しぶりに楽しいと思えましたから。あ、コレお土産としてどうぞ」

そう言つて昴は二人に近寄り、それなりに大きな箱を渡した。受け取つて見ると、見た目に反してずっしりと重い。

「これは？」

「私の魔法球で採れた果物と、緋の雫です。このような物しか渡せなくて申し訳ありませんが……」

「いえ、ありがとうございます。嬉しいです」

そう言つてアリスは受け取つた箱を自分の影へとしまった。

そして宝石剣を起動し、空間に人が通れるほどの大きさの歪みと裂け目を作つた。

「それでは、二人ともお別れですね」

「はい。スピーチの方、お願いしますね」

「はい。お気に召すかは分かりませんが、精一杯やらせて頂きます。一年後にまた会いましょう」

「楽しみにしててください。じゃあ木乃香、行こうか」

「はいな、アリスさん」

昴に礼を言つて、二人は空間の裂け目へと入ろうとした。入つてしまえば、二人とは一年の間会う事は出来ないだろう。

だからこそ、二人が完全に裂け目に入る前に昴は声を掛けた。

「アリス君！ 木乃香さん！」

「？」

「貴方達二人のこれからに、永遠の幸せが在らん事を、心より祈つていますよ」

「……ありがとうございます！」

「絶対に幸せになりますから！」

昴の言葉にそう返して、二人は次元の裂け目に入って行った。二人が入ると、何事も無かったかのようにそれは消え去った。少しの間昴が裂け目の有った空間を見ていたが、懐から木乃香に貰った白い封筒を取り出した。

「……………」

じっとそれを見て、僅かに微笑んでから昴はそれを戻した。

「さて、それでは祝辞の内容を考えなければいけませんね。一年しか有りませんから、急いで、しかし陳腐な内容の物にしない様になければ」

そう言いながら、彼は家の中へと戻って行った。

特別番外編・剣の舞姫様とのコラボです（後書き）

アリスのキャラは如何でしたでしょうか？

何か変なところがあったら言って下さい。修正しますので。

58話・迫る影

雷が鳴り、大粒の雨が降りしきる。

分厚い雨雲に覆われた空は夜と言う時間帯を差し引いても余りあるほどに暗く、学園都市を暗い闇で包んでいた。所々に街灯や家の電気だるう灯りも有るには有るが、それらはそこまで明るく無く、寧ろ闇を強調するだけに見える。

さらに降り注ぐ雨が光を歪ませ、暗い都市をより一層暗く沈んでいる様に見せる。

そんな暗く、誰も外に出ていない街へと続く道を、一つの影が傘も差さずに歩んでいた。黒いコートに黒い帽子、そして黒い手袋と黒いブーツと言った、全身黒一色の不審者の様な服装だ。

背は高く、体格もがっしりとしているのでおそらく男性だろう。しかし目深にかぶった帽子の為に、その顔を見る事は出来ない。

男性は無言で、深い水溜りも気にせずただ真直ぐに道を歩いていた。向かっている先には、巨大な橋、麻帆良大橋を挟んで学園都市が見える。

どうやら男性はそこを目指しているようで、学園都市と対岸を繋げる道の一つである麻帆良大橋を渡り始めた。

「……………ここが境界みたいだな」

橋を半分ほど進んだ所で男はそう言い、立ち止って何もない虚空を見た。

障壁も何もない場所で立ち止まりそう言った男性に、普通人なら「何を言っているのだ」と呆れるだろう。

しかし男性の目には都市の内と外を分け隔てる、不可視の境界がありありと映っていた。

見上げると、それは巨大な半球状になって都市を覆っている。麻帆良の街を守る学園結界だ。

「ふむ……見た感じ、侵入者感知と認識阻害と言った所か。もう一つ有った様にも見えるが……まあさして変わらんか」

学園都市を覆う結界を見て男性はそう言い、何かをぼそぼそと呟いた。

おそらく魔法か何かだろう。言葉を呟いた途端、男性の何かが変わった気がした。この時点で、男性が一般人ではないと判断できる。心なし、男性の足元の水溜りも蠢いて見える。

「しかし都市の防衛が感知だけとは、不用心な事だ。まあ、私としては楽でいいがね」

笑いながらそうそう言って男性は結界を通り抜け、都市へと侵入した。

本来なら結界を越えた時点で学園の警備をしている魔法先生達に連絡が行くのだが、誰かが向かって来るような気配はない。

どうやら先程呟いたのは、結界の機能を誤魔化すものだったらしい。

「さあ、始めようか。君はあの時からどれだけ出来るようになってるかな？ 少年」

会うのが楽しみで仕方がない。

そう言って黒い男性は道を進み、街へと入って行った。

アスナを除いた全員がエヴァンジェリンの魔法球の中でネギの記憶

を見た翌日（と言っても現実では1時間しか経っていないが）、魔法球から出た彼女達は土砂降りの雨の中を進んで寮へと戻って行った。

大振りの雨の中、傘をさして走って行く彼女等を見てエヴァンジェリンが呟く。

「やれやれ、ようやく喧しい奴等が帰って行ったか。これでやっと静かに過ごせる」

「ですがマスター、とても楽しそうに見えましたが」

「何処をどう見ればそう見えたんだ、お前は」

どうやら茶々丸には、あの喧騒をエヴァンジェリンが楽しんでいる様に見えたらしい。それに対し、彼女は呆れた様な口調で茶々丸にそう返した。

「アイツラノ話ハトモカク、アノガキノ記憶ハソレナリニ楽シメタゼ。欲ヲ言ヤア、モウチツトバカシ血ガ見タカツタケドヨ」

「やめんか、まったく」

ケタケタ笑いながらそう言うチャチャゼ口。

物騒極まる初代従者に、エヴァンジェリンは溜息を吐いた。彼女も最近、丸くなって行っている様である。

「ですが、アスナさんの反応は意外でしたね。朝倉さん達にあの様な事を言うとは思いませんでした」

「親の性格とかの影響を考えれば別に可笑しくは無いがな。まあ、アイツからはそれ以外の何かも感じるが……」

「何か、とは？」

「知らん。だが……」

茶々丸の言葉にエヴァンジェリンはそう返すが、視線はアスナ達が帰って行った方向を見ていた。

「あの時の雰囲気から考えるに、本気であいつ等を関わらせたくないんだろつさ。京都での脅しや魔法球での詰問じみた問答も、純粹にあいつ等の事を案じてだろう。まあ、それも無駄な事だろうがな」

「アー、アイツラノ性格考エリヤ、ソリヤ無理ダナ」

「? どう言う事ですか?」

主と姉の会話に疑問を持ったか、茶々丸が聞いた。

「言葉だけであのバカ共が止まるのなら、京都のあの一件に関わる前に止まっていると言う事だ」

従者からの問いに対し、エヴァンジェリンは何処か嘲笑を含んだ声音でそう返した。

あのメンバーの中で、アスナや刹那と言った昂やエヴァンジェリンと近い人間を除いて魔法やその類の物の危険性を正しく認識しているのはネギと、良くて京都での木乃香奪還戦に参戦した古菲、そしてその事件の当事者となり、魔法等を帰って来てから教えて貰っている木乃香くらいであろう。

「ツーカーダ。京都で一時的ニツツテモ石ニサレタツテノーニ、ナンド関ワロウトスルカネ、アノガキドモハ。恐怖ツテモンヲ知ラネーノカ」

「おそらくだが、向こうの術者が解呪と共に石にされた時の記憶を消したんだろつ。普通に暮らすのなら、石にされた記憶など必要無いからな」

エヴァンジェリンの言葉に、茶々丸も納得したように頷く。

一般人にとって、石にされた記憶などは有っても害にしかならぬだろう。変わらない日常生活を送らせる為に記憶を消したその判断は妥当だったと言える。

と言っても、それは記憶を消された後も関わらなければの話で、関わるのならば寧ろ残しておいた方が良かったかもしれない。今となっては既に遅いが。

「まあ、あいつ等がどんな選択をするにしても、私にとってはどうでもいい事だがな」

「死ニソウニナツタラドウスルヨ。放ツトクノカ？」

「寢覚めが悪くなるし、クラスメイトのよしみもあるからな、一度は助けてやらんでも無い。その後どうなるうが知った事ではないがな」

「……ツンデレですか？」

「今の言葉の何処を取ればそんな判断が出来る。と言っかな、お前は一体どっからそんな言葉を調べて来るんだ、茶々丸。くだらん事言っていないで、戻るぞ……ん？」

妙な事を言った従者に呆れたようにそう返しながら、エヴァンジェリンは道に背を向け、家の中へと戻ろうとした。

しかしどうしたか、二歩進んだ所で足を止めて森の向こうへと目を向けた。

「マスター？ どうなされましたか？」

「いや、何か感じた気がしたが………気の所為か？ だが今の感覚は………」

「ナンダ、ゴ主人。600年生キテウトウボケタカ？」

「誰がボケるか。このボケ人形」

失礼な事を言ったチャチャゼロにそう返しながらもう一度森の向こ

うに目を向け、彼女は家の中に戻って行った。

寮へと戻って来たアスナ達は、誰も居ないロビーで雨に濡れた体をタオルで軽く拭いた後、皆で少し話してから別れてそれぞれの部屋に戻っていた。

そして夕映、のどかの二人は部屋に戻った後、風呂に入る為に入浴セットを持って揃って大浴場へと向かっていた。

いつもはどのような本を読んだか、感想はどんなだったかを言いながら向かう二人の雰囲気はしかし、ネギの過去に何が有ったかを見た為か暗い。

「はあ……………ネギ先生、あんな思いしてたなんて」

「そうですね……………」

何処か沈んだ雰囲気と口調でそう言うのどかに、隣を歩く夕映も同じ様な雰囲気です。

「私ね、ネギ先生が魔法使いだって分かってワクワクしてたんだ……………戦ってるネギ先生もかっこいいなって思っちゃったし、もしかしたら私にも魔法が使えるかも知れないって思った時も……………」

「のどか、それは私も同じです。京都での事件や図書館島地下での事で、退屈だった毎日にとって来た刺激に満ちた非日常に心躍らされました。学校の授業より、余程に楽しいと思っていました……………ですが、ネギ先生のあの記憶を見えたら、そんな自分が非常に愚かしく思えて……………」

ふう、と暗い雰囲気です息をつきながら夕映はそう言う。

のどかもそれを聞いて、顔を俯かせた。

「私達は、少し、浮かれ過ぎていたのでしょうか……魔法と言う物を知って喜んでいた先程までの自分が恥ずかしいです」

「私も……」

そう言つて二人揃つてまた溜息を吐く。

暗い雰囲気二人から漂い、どんよりと重苦しい空気が立ち込めた気がする。

「……………お父さん、見つかるといいね……………」

「そうですね。出来る事なら手伝いたいです、アスナさんに「興味本位や面白半分で関わるな」と言われていますし、先生の記憶を見ればそう言われるのも納得がいきますし……………」

「うん……………でも、やっぱり手伝いたいよ……………」

「ええ」

暗い雰囲気です言いながら、二人は浴場へとたどり着いた。

脱衣場には彼女等の他にも何人がクラスメイトの姿が見える。その中には、二人の親友でもある早乙女ハルナも居た。

ハルナが二人に気付き、声をかける。

「お？ 二人とも帰つて来てたんだ、遅かったじゃん」

「あ、パルー」

「大丈夫なのですか？ 漫画の原稿の締め切りがもうすぐだと言つていたと思いますが」

「あはは。まー確かにヤバいけど、お風呂ぐらい入らないとね。臭くなるし。にしても、二人とも何か暗いねー。何かあった？」

のどかと夕映、二人の言葉にカラカラと笑いながらハルナはそう返す。

締め切り寸前になると鬼気迫る雰囲気を出す彼女だが、どうやら年頃の乙女らしく体臭等には気を使っているらしい。こう言うのは何だが、実に意外である。

しかし割と頻繁に手伝う事も有る二人にはそうでもないのだろう。いつも通りの様だと苦笑していた。

しかしそんな二人の雰囲気がいっつもよりも暗いと見たハルナがどうしたのかを問うと、二人はどうしようかと互いを見る。流石にネギの記憶の事や、魔法の事を説明する訳にもいかない。

二人がどうしようかと悩んでいると、入口が開いて今度は朝倉と古菲が入って来た。

その二人は夕映とのどかを見つけると、真直ぐに湯に浸かりながら雑談している彼女達の元に向かった。

「お？ パルじゃんか、漫画の締め切りは大丈夫？」

「ヤバイけど、焦って失敗したらヤバイし。この時期忙しいのはいつもの事だしね。ま、私も年頃の乙女ってことさね」

「自分で言う事じゃないって、それ」

ハルナのその言葉に笑い、彼女に気付かれない様夕映とのどかに笑みと共にウイंकを投げる朝倉。それを見て、のどかと夕映も笑顔を浮かべる。

おそらく、彼女はどうしようか悩んでいる二人を助けてくれたのだろう。それに思い至り、二人はハルナに聞こえない様小声で朝倉に礼を言った。

（ありがとうございます朝倉さん）

（良いつて。ネギ君の事言ったら絶対何が有ったか聞いて来るだろうし、流石に記憶の事は話せないしね）

夕映の言葉にそう返し、朝倉と古菲もまた彼女等の側に浸かり、談

笑する。

少し離れた場所ではクラスメイト達が学園祭や、その前にある中間テストの話題を出していて色々と話している。

と、突然その集団が騒ぎ出した。騒ぎと共に美白や潤いがどうのと聞こえる。おそらく、そう言った女性に嬉しい効果があるだろう何かを誰かが持ってきてきているのだろう。気になったか、ハルナも落ちらの集団に向かっていった。

それを見て、丁度いいとばかりに朝倉が話し出す。

「どうする？ ネギ君の事。アスナにああ言われても、あたしはまだネギ君に関わりたと思って思ってるけど」

「どうすると言われましても、あれを見た後では軽い気持ちで関わるかどうかは決められませんし」

「私は先生を手伝いたいけど……でも……」

「むつかしいアルな。ワタシは強者と戦えればそれでいいとおもってたアルが、しかし……」

ネギの記憶を見た4人が湯船に浸かって集中して話し合う。ネギの父探しを手伝い、非日常に関わるか否かについて。

途中、離れた場所で騒ぎが聞こえたが、呆れた表情を向けたただけですぐに話に戻した。

しかし、集中して話していたからこそ気付かなかった。人間ではない何か浴場に入って来た事も、それが騒ぎの原因である事も。

当然、その騒ぎの原因となった何か自分達のすぐ傍に来た事に気付かず、その4人は突如膨れ上がった水に飲み込まれ、浴場からその姿を消した。

少し後にハルナが消えた4人に気付いたが、先に上がったのだろうと判断し、疑問に思う事はなかった。

そして、4人が浴場から消えたその少し後、廊下を歩いていた刹那

と、部屋に戻って早めに就寝していたアスナと木乃香の3人もその姿を消した。

消えた後に、室内に在る筈の無い水溜りだけをそこに残して。

59話：怒りに向かう静寂

アスナ達が寮の自室から人知れずにその姿を消した、その数分前。魔法球の中でナイフ等の作成を終えた昴は、作り終えたそれらをいつものようにポーチに収めた後、現実へと戻って来ていた。

作成を手伝ってくれた二柱の精霊に礼を言い、シェイドに知識や技能、その他様々な事を闇の精霊として扱かれ、頭から煙を出してぐったりとしていたさよを回収して魔法球から出た彼は、魔法球を収めている蔵の扉を開け、まだ降り続けている雨に憂鬱そうな溜息を吐く。

「いえ、まあ分かつてはいましたけどね。あちらで数日過ごして晴れても、現実ではほんの数時間しか経っていないのですから………うん?」

「どうかしました?」

「いえ、何か妙な感覚が……?」

蔵から出た途端に感じた奇妙な感覚に首を傾げ、昴は目を閉じ集中する。自分の意識を土地に重ね、何かあったのかを探ろうとしているのだろう。

急に目を閉じた昴に、それを不思議に思ったさよが首を傾げる。しかしすぐに意識を何かと同調させていると気づき、彼女も目を閉じ闇と意識を繋げて探ろうとする。

しかし、いかに上位精霊になるとは言え、未だ完全に至っていないなりかけの精霊である彼女はそれに失敗し、身震いした。おそらく、シェイドに知られた時の事を考えたのだろう。

面倒見はいいが、いちいち高圧的で尊大な物言いをするあの精霊だ。己の属性に当て嵌まる物に意識を繋げる事を失敗した事を知られれば、今まで以上に厳しく稽古をつけられ、知識を叩き込まれるだろ

う。

しかし、そんなさよは気にせずには昂は己の意識を麻帆良に重ね、以前の停電時の様に麻帆良の内に存在する波動を探っていく。

「……………」

自宅、住宅街、商店街から小中高の学校エリア、大学部、世界樹、郊外の森林そして生徒達が住んでいる学生寮へと、土地に重ねた意識を広げ、探る。痛みが走るのか、時折顔を僅かに顰めるがそんな物無視してただ奇妙な感覚の正体を探り、そして見つけ出した。異質な、普通の人間とは何処か違う感覚の波動。それぞれ学園都市の外れの家、学生寮の別々の部屋と廊下、天井裏、浴場にそれらは数か所に分かれて存在していた。

火と風、光のManaを共に感じる波動が学生寮の同じ部屋に二つ。これはアスナと木乃香だろう。アスナの波動は特徴的なのですぐに分かるが、それ以前に20年近く一緒に居るのでまず間違える事は無い。眠っているのか二人とも動かず、しかし穏やかな感じだ。

精霊の様な波動の持ち主が二つ。一つは闇のManaを共に感じ、自分の隣に居る。これは感じるまでも無くさよだ。

もう一つは麻帆良学園の下の、水と木のManaに満ちたある部屋に居る。戦争中に共に戦った仲間の懐かしい波動だ。何処か胡散臭そうな魔力も感じる。これはアルビレオだろう。近くに番竜だろう。ワイバーンの波動も有る。

純粋な魔の波動を持つ存在が学園都市の外れの森に一つ、学生寮に二つの合計三つ。一つは部屋でじっとしており、もう一つは廊下を歩いている。都市の外れと部屋でじっとしている波動の二つは、良く自分の喫茶店に来るエヴァンジェリンと、偶にやって来る極めて

無口な3 Aのクラスメイトの一人だろう。

もう一つの波動には欠片も覚えがないが、進行方向に別々の存在が混ざった様な波動を一つ感じる。おそらくこの波動の持ち主に向かっているのだろう。

地下深くにもそれなりに大きな波動を六程感じるが、動く様子はないのでこれはどうでもいいだろう。

別々の種族の間に生まれた混血の波動が四つ。一つは都市の外れ、エヴァンジェリン魔の波動のすぐ傍にいる。

これは茶々丸だろう。何故彼女までと疑問に思うが、確か彼女は科学と魔法の融合によって創り出された存在だったか。だとすると特徴的なこの波動も一応頷ける。

もう三つの内二つは部屋におり、もう一つはその波動の持ち主だろう一人の居る部屋に向かっているようだ。風のマナも同時に感じるこの波動は刹那だろう。

彼女のルームメイトは確か龍宮神社の娘だったか。とすると彼女の向かっている先に居る、もう一つの混ざった波動は彼女と言う事が残りのもう一つは確か、京都で同じ波動を持っていた少年が居た筈だ。

確か名は犬上小太郎と言ったか。彼は呪術協会の懲罰房に入れられている筈だが、何故麻帆良に居るのだろうか？ 彼の側にはよく自分の店に来て茶を飲んだり、ケーキなどを買っていく少女の波動も感じる。僅かにだが木や光のマナも感じるのでまず間違いないだろう。

どうやら見知らぬ波動の持ち主が目指しているのは彼のようだ。

魔法生物じみた波動が都市の外れに一つと学生寮に三つの計四つ。

一つは自分もよく知るエヴァンジェリンの従者、チャチャゼ口の物だ。他の三つは、どの波動も似たような感じがし、同じ種族だろうと思われる。転移でもしながら移動しているのか、消えたかと思え

ば別の場所に現れ、そしてまた消えてを繰り返している。何かを探しているのか、それとも遊んでいるだけなのか。

合計4つ、自分の見知らぬ、怪しい波動が見つかった。

しかし学園都市中の波動を探ってみるに、どうも魔法先生達は侵入者達に誰も気付いていないらしい。学園長室に意識を向けてみれば、何やらのんびりとした波動が感じられる。茶でも飲んでいるのだからか。

それで大丈夫なのかと溜息を吐く。

「何か分かりましたか？」

「ええ、どうも招かれざる客が麻帆良に入っているようです……っ！？」

「わあっ！？」

突然閉じていた目を勢いよく開いた昴にさよが飛び上らなばかりに驚いた。

赤い目を見開き、白い髪が跳ねるその様はウサギのようだ。

「ど、どうしたんですか？」

「……………」

突然目を見開いた昴に驚きながらもどうしたのか気になったのか、さよはじつとある方向　この方向は世界樹か　を向いていた昴に聞くが彼はそれに答えない。

「昴さん？ どうしたんですか、昴さん？」

「……………アスナちゃんが」

「え？ アスナさんがどうかしたんですか？」

突然アスナの名を呟いた昴に首を傾げ、何が有ったのかを聞こうとする。しかし昴はそれに答えず、雨に濡れる事も忘れて傘を差さずに家を出てある方向に向かって走り出した。強化した脚力で、道に敷かれたレンガやアスファルトを踏み砕きながら。

「ちよつ、昴さん！？ 傘も持たずに何処行くんですか！？ それも道を踏み砕きながらって言うか、踏み砕く！？ 踏み砕くってどんな脚力してるんですか！？ 街の人が困りますから直しながら行ってください！ て言うか、転移出来ましたよね！？ 待って下さいー！！！」

さよが雨の中、傘も差さずに駆けだした昴にそう言いながら精霊の力を解放して追いかけるが、身体能力をかなり強化しているのだから。追い付けず、寧ろ距離は広がるばかりだ。しかも聞こえていないようだ。

そして3秒後、彼女の視界に昴の姿はなかった。彼が踏み砕いたであろうレンガなどは残っていたので、追う事は出来たが。取り敢えず、それを目印にさよは昴を追う事にした。

一体アスナがどうしたのかと走りながら闇に意識を繋げ、彼女の状態を探る。精霊としての力を解放している為か、今度はすんなりと繋げる事に成功した。

初めからこうすればよかったとさよは思った。

「あれ？ これって……？」

そして感じた事に疑問を持つ。もう夜も遅いこの時間帯、普段なら寮の自室に居る筈の彼女の波動が、何故かまるで違う場所から感じられた。

場所は世界樹下の広場の一角、学祭用に大学部が作ったステージが

在る所。側には木乃香と刹那の他にクラスメイトの波動が五つと知らない波動が四つある。動く様子はなく、どう言う訳かアスナと木乃香、刹那が持っている筈の火と光、風のマナクリスタルの波動が見知らぬ波動から感じられる。

どうやら昴はそこを指しているらしく、感じた彼の波動はかなりの速度で移動している。

その他にも女子寮から向かう波動が二つ。空を飛んでいるようで、一直線に向かっている。ネギと誰かの波動だ。空を飛んでいる為か、移動速度は昴よりも速い。

何かおかしい。そう思ったさよは、未だ短距離しか移動できない闇を使った転移を連続で実行し、世界樹下へと向かった。

「……………う、ん……………？」

麻帆良中央部、世界樹下に作られた学祭用のステージ。

劇か、何かのコンテストの為に作られたであろうそこで、素肌に触れる寒気と、サアアと降り注ぐ雨の音に身を震わせながら、アスナは閉じていた目を開いた。

「寒い……………ここ、外？ 何で、私、部屋に戻って寝てた筈……………」

目覚めたばかりで霞がかかった様にぼんやりとしている意識で疑問の声を出す。

エヴァンジェリンの所から戻り、部屋に帰って体を拭き、着変えて布団に入った筈だが何故外に居るのか。

気になるもやけに肌寒いと思い、自分の体を見て彼女の顔は朱に染まった。

「っ！？ きゃああああっ！？」

羞恥に顔を朱に染め叫ぶアスナ。

彼女は布団に入った時の寝間着姿ではなく、下着姿だった。それも隠すべき場所を、敢えて強調する様なデザインの、実にイヤらしい下着だった。色は白で清楚なイメージを持たせるが、それが朱に染まった肌を強調し、さらにイヤらしさを強調する。

下着姿で屋外に居るなど、まるで痴女ではないか。こんな下着を買った覚えのない彼女は顔をさらに赤くしながらそう思い、体を抱きしめて自分の体を隠そうとする。

「っ、腕が！？」

しかし彼女の腕は動かず、逆に何かに引つ張られた。

見れば水を凝縮した触手の様な何かに縛られ、上に吊り上げられていた。

何故、いつの間にもこの様な事になったのか。羞恥で混乱している思考とは別の、冷静さを保った思考で考えようとし 直後に声が聞こえた。

「はっはっは、元気なお嬢さん。ようやくお目覚めかね？」

「だ、誰！？」

そう言いながら声のした方向に顔を向ける。

そこには全身黒一色の服の壮年の男性が居た。

何処か紳士然とした雰囲気、左右に広がった髪形が愉快的な気の良さそうな男性だ。明らかに自然になる髪型ではない。

「囚われのお姫様がパジャマ姿では雰囲気も出ないかと思っ

てね。失礼ながら、少し趣向を凝らせてもらっ

たよ」

「なっ……あ、あんたがこれに着替えさせたの!？」

「君に合う物を選んだつもりだが？」

「こっ、この変態! スケベ!!! 何考えてんのよ女の敵!!!」

「着替えさせたのは私ではなくその三人だが？」

「そう言う問題じゃないわよ! このっ、離しなさいよ!」

目の前で笑う男性にそう言いながら、アスナは自分の腕を吊り上げている水の様な何かから逃れようともがく。

しかしそれはゴムの様に伸び縮みし、さらにもがけばもがくほど腕に絡みついて来てより強く吊り上げる。

「余り暴れない方が良い。それは特別製でね、暴れれば暴れる程肌に食い込み、その拘束力を上げる。それ自体が痛みを与える事は無いが、君も女性なら肌に痕は付けたくないだろう？」

「あうっ!」

男性がそう言った途端、先程よりも強く腕が吊り上げられた。急に引き上げられたので痛みが走り、呻く。

「アスナーっ! 大丈夫ーっ!？」

「アスナさーん!」

すると彼女の後ろから、親友である幼馴染と魔法に関わる事の危険さを警告したクラスメイトの声が聞こえた。

まさかと思いい顔を向けると、大きな水球が中央と左右に合わせて三つ在った。それぞれ、人が容易く入る様な大きさをしており、実際にそれらの中に親友達が入っていた。

中央の水球に入っているのは、木乃香を除いて何故か全裸だが。

「このエロ男爵! せめて服くらい寄こしなよ!」

「ここから出すアルヨー!!」

「情けないです。まさかいきなり足手纏いになるとは……」
「あつ……」

ドムドムと内側から叩く朝倉達。しかしその程度の衝撃で一般人に破られる訳も無く、多少揺れるだけに終わった。

それを見て水球の側に居た小さな何かが言う。

「無駄な事デス」

「私達特製のその水牢からは出れませんヨ。内側からの衝撃は全部無効化しますカラ。強力な魔法でも使わない限り、中からは絶対に破れません」

「やるだけ無駄だからじつとしとけヨ。一般人が興味半分で足突っ込むからこーゆー目に遭うんだぜ。溶かして食われないだけ有り難く思いナ」

そう言われて、水球の中で騒いでいた朝倉達が黙る。流石に喰われたくはないようだ。

が、またすぐに騒ぎ始めた。

せめて服を寄せ、と。

「あんた達、何で……それに、那波さんまで!？」

「彼女達は観客だよ。君を含め、ネギ君の仲間と思われた7名は全員招待させてもらった。まあ、彼女達はどうも浴場に居た様でね、そこは非常に失礼したと思っているのだが。退魔士の少女は危険なので、少々眠って貰っているがね」

「ちよつと、那波さんはこつちとは関係ない一般人よ!？」

「そのお嬢さんは成り行きの飛び入りだよ。私が気に入ったというのも有るが、彼女を包む魔力に少し興味が有ってね、来て貰った」

「魔力?」

そう言つて男性は水球の中で眠る千鶴を見た。

「気付かないかね？ 精々体の調子が良くなつたり、ほんの僅かに回復力が上がったたりと言う程度の物だろうが、彼女は精霊の加護と言つべき物を受けているようだ。それも滅多に与えられる事のない、木属性の精霊の加護を」

「え？」

「何故そんな加護を受けている人間が居るのか少々気になつてね。まあ気になつただけで、何もするつもりはないから安心するといい。これにも興味が有るからね」

そう言つて男性は右手を上げ、持っていた物をアスナ達全員に見える様にした。三つの金属の環が男性の掌の上に浮く。それぞれ共鳴して、赤、白、薄緑の光が結晶から漏れる。

「それっ、私のブレスレット！ 何であんたが持つてるの！？」

「せつちゃんのと、ウチのも！」

「素晴らしい品だ。材料である金属と結晶に秘められたこの魔力。さらにその魔力を制御する為にさりげなく装飾に配された古代文字の数々。芸術品としての価値も然る事ながら、魔法的な価値でもこれ程の物はそう無いだろう。実に素晴らしい」

それは少し前、アスナと木乃香、刹那の三人が鼻に渡された、赤い金属で作られた三つのブレスレットだった。

男性はそれを暫し見ていたが、何を思ったか、薄緑と赤の結晶の付いたそれを自分の両手首に嵌め始めた。

「何やつてるの！？」

「見て分からないかね？ 手首に嵌めているのだが……ふむ、これ

は中々、難しい」

「返しなさいよ！ 返してっ！！」

ブレスレットを手首に嵌めた男性にそう言うアスナだが、当然そんな言葉が聞き入れられる筈も無く、スルーされてアスナと刹那のブレスレットが男性の手首に嵌められ、木乃香のブレスレットはコートのポケットに入れられた。

アスナはそれを、射殺さんばかりに睨みつける。

「こんな事して、一体何が目的なのよ!？」

「何、そう大した事ではないよ。仕事を依頼されていてね、この学園の調査が主な目的なのだが……」

男性はブレスレットを嵌めた手首をしきりに触りながらそう言い、アスナの方を見て言った。

「ネギ・スプリングフィールドが今後、どれだけの脅威になるかの調査も含まれている。それともう一つ、これは可能であればだが、君の保護者である緋乃宮昴の懐柔、若しくは抹殺もね」

「なんつ、どう言う事よそれ!? スバルの抹殺!？」

「私の依頼主はどうも彼が邪魔みたいだね。可能であると判断したならそうして欲しいと依頼されている。君を連れて来たのはそれと、もう一つの理由が有っての事なのだが……む」

アスナの言葉にそう返し、男性は空の一角を見た。

「ふむ、どうやら来たようだ。楽しみだね」

「どう言う事ですか、楽しみとは?」

「ネギ君には個人的に思い入れが有ってね、あの時からどの程度使える少年に成長したか……実に楽しみだよ」

夕映の言葉にそう返し、男性は空の一角に向き直る。その方向から、幾筋もの矢が降り注いだ。風を纏った薄い緑色のそれは、捕縛を目的とした風属性魔法の射手、「戒めの風矢」だ。それが放たれたであろう場所には、接近してくる何かが見える。男性の言葉から考えるに、おそらくネギだろう。杖に乗る彼の後ろにはもう一人、黒髪の少年が乗っている。

「あっ!？」

だがそれは男性が手を掲げると、アスナの首に掛けられた首飾りが一瞬光を放ち、全て跡形も無く消滅した。消えた瞬間、アスナが突然の痛みに苦悶の声を出す。

ネギ達は掻き消された矢に驚いた顔をしたが、すぐにその表情を消して客席上部に降り立った。

「来たで、おっさん！」

「皆さんを返してください……って、アスナさんがエッチな事に!？」

「っ! み、見るなあーっ!! あっっ！」

ネギの言葉に再度顔を真っ赤にしてもがくアスナ。子供とは言え、やはり素肌を見られるのは抵抗が有るのだろう。

しかしそのせいで拘束力が上がり、また呻く。

「貴方は一体誰なんです!？ 何故こんな事を!！」

「手荒な真似をした無礼は詫びようネギ君。だがこうでもしなければ君は全力で戦ってくれないのではと思ってね」

「はっ、よお言っわ。人質取られたらその方が全力出して戦えんやろ、アホかおっさん」

男性の言葉に小太郎がそう言う。

確かに、人質が居る状況で全力を出して戦う等出来ないだろう。人質の状態が気になり、全力など出せる筈もない。だがそれに、男性は笑みで返した。

「何、安心したまえ。私はただ君達の实力を知りたいだけだ。好んで彼女達に手を出すつもりはない。私を倒す事が出来たら彼女等は返そう。条件はそれだけだ、簡単だろう?」

「はん! そんな事でええんか、楽勝やな!」

そう言い、小太郎は拳を握り構えた。

「僕が行くよ、小太郎君は下がってて」

「は!?!」

しかしネギの言葉に思わず構えを解いて彼の方を見た。ネギは杖を背負い、拳を構えている。当然、小太郎は嘔みつく。

「お前何ゆーとるんやネギ! 魔法使いやろお前、勝てる訳ないから引つ込んで!」

「そう言う小太郎君こそ何言ってるのさ! あのおじさんに負けたばっかじゃん!」

「狗神出せたら勝てとったわ!」

「今使えないじゃん! 京都で僕にも負けてたし、ダメダメじゃん!」

「アホか! あんな奇襲二度も喰らうかい! もっかいやったらお前の方がボロボロや! あん時もそうやったしな! つーかダメダメ言うなや!」

ギヤイギヤイと互いに言い合う二人。それを、捕われて意識の有る全員が呆れた様な目で見ていた。時折溜息を吐かれ、完全に呆れられている。

「あの時と同じに思わないでよね！ あれからかなり修行したから、変身と狗神無しならもう僕の方が強いと思うよ！ とにかく僕がやる！」

「上等やこのチビ！ この後とは言わん、今この場でどっちが強いかわ黒つけたるわ！！」

「良いよ、分かった！！ あの時から成長した僕の実力、見せてあげるよ！！」

そう言つて二人は男性達から視線を外し、互いに向かい合つて拳を握つた。

何をやってんだと心より言いたい。

「あんた等いつたい何しに来たのよー！？」

まったくである。

「はっはっは、元気があつて大変結構。だが、二人で来るのが賢明だと思つがね？」

「！？」

男性のその言葉に二人が互いから視線を外すと、水球の側に居た三体の小さい存在が襲いかかつて来ていた。

60話・嬰鱗（えいりん）（前書き）

嬰鱗とは、逆鱗を漢語で表した言葉であり、81枚あるとされる龍の鱗の内、顎の下に一枚だけ存在する逆さに生えた鱗の事を示す。基本的に穏やかな気性を持ち、元来危害を加える事のない龍だが、これに触れられる事を極端に嫌い、触れられた途端に激高し、触れた者を即座に殺すとされる。

このため、逆鱗は「決して触れてはならない物」を表現する言葉となり、王などの激怒を呼ぶ行為を「逆鱗に触れる」と表現される。現代では目上の人間の怒りに触れる事を「逆鱗に触れる」としている。

60話：嬰鱗（えいりん）

どちらが先に男性に挑むかで揉め、いつかの決着をつけようとしたネギと小太郎は水球の側に居た少女の姿をした三体の小さい何かによってステージ側に蹴り飛ばされた。ネギの背から杖が落ちる。

「なんや、あいつら！？ ちっこいなりして結構力あるで！」

「パツと見て人間じゃないって言うのは分かるけど……」

「ありやスライムって奴だな。有名だから名前ぐらいは知ってるだろ？」

蹴りをガードし、しかしその予想以上の威力に驚きながら受け身を取った二人にカモがそう言う。

「……スライム？ あれが？」

「なんや、ぜんっぜんイメージとちゃうな。もっとこう、半透明の水っぽいヤツみたいな印象があつたんやけど……」

「そりゃゲームだろ……」

カモが言った三体の少女の正体に、二人揃って微妙な表情をする。二人のスライムのイメージとしては、頭文字にDの付く某国民的RPGで、序盤のレベル上げで出会った瞬間ほぼ確実に殺戮される雑魚モンスター一族の姿があつたのだろう。イメージと違う事で、何処か落胆した様な雰囲気の声から感じられる。特に小太郎。しかしゲームと現実とは違うのだと割り切り、二人に再び襲いかかる三体のスライムに気を取り直して迎撃態勢を取る。

「ネギ、休んでてええんやで？ 接近戦は苦手やろ」

「舐めないでよね、近接戦の修行もしてたんだから。そう言う小太

郎君こそ、女の子は殴れないんじゃないの？」

「はっ！ 女ゆつても、軟体生物が姿真似して擬態しとるだけやったら……」

ネギの言葉にそう返し、小太郎は拳を強く握りしめ

「関係無いわ!!」

やって来たうちの一体を殴りつけた。

殴られたスライムは後ろに続いていた一体にぶつかり、揃って少し後ずさる。だがすぐにまた飛びかかって来た。どうもダメージは無いようだ。

それを見て、ネギも構える。

「兄貴、いけるのか!?!」

「大丈夫、戦いの歌!!」
カントゥス・ヘラークス

カモの言葉にそう返し、ネギは自分の体に魔力供給を実行した。体を魔力の光が覆い、動きが段違いに良くなる。

以前エヴァンジェリンにダメ出しされまくって泣きそうになった、仮契約カードの機能を参考とした物とは違う完全版の魔力供給だ。直後に髪を二つに結ったスライムが貫手をしてきたがそれを流し、逆に両の掌底で他の二体の所に吹き飛ばす。

「おっ？ ネギ、何やそれ!?!」

その動きを見た小太郎がスライムを蹴り飛ばし、投げ飛ばしながら聞く。何処かキラキラと、輝くような目をしている。

「何って、魔力供給だよ。前のは違う完全版」

「それは見りゃ分かるわ！俺が言うてるんは今の動きや！変な動きや、流派は何や!?」

「中国拳法。八卦掌とか、八極拳とか習ってる」

「八八ツ！中国拳法か、そらええわ!!!」

今度は三体同時に襲いかかって来たスライムの繰り出す攻撃を、背中合わせに流し、防ぎながらそう言い、互いに笑う。

そして攻撃を防ぐ中、ネギは思った。手数こそそれなりだが、茶々丸達よりも遅く、軽いと。

連日連夜、体力と魔力が切れるまでエヴァンジェリン達に徹底的に扱われているネギである。これ以上の速度や重さ、鋭さの攻撃を受けて来たのだからそう思うのも無理はなかった。

隙を見つけ、二人揃ってスライム達を殴り飛ばして傍観していた男性を指す。

「奴等は相手にすんな！骨も何もねえ軟体生物だから、打撃も斬撃も効果はねえぞ！」

「んなもんとつくに分かつとるわ！にしても、中々やるようになってたやんかネギ！見直したで！」

「言つたでしょ、舐めないでって！」

そう言い合いながら自分達をじつと見ている黒い男性を指して走る。

(有効範囲は2.8m、しくじんなや)

(分かつてる)

途中、やはり効いていなかったスライム達が妨害しに来たが今度も蹴り飛ばす。スライムだからかどうなのか、そんなに実力は高くないようだ。打撃系全般が効かないというのは厄介な事この上ないが。

吹き飛ばされても堪えた様子も無く起き上がるそれらを見て、小太郎はネギを先に行かせ、足止めに残った。

「流石に軟体生物、しぶといな。けどな、お前らの相手は俺だけで十分や!!」

不敵な笑みを浮かべ、スライムの数と同じ三体に分身して各個迎撃する小太郎。

それをチラリと見て、ネギは加速し、簡易の杖を取り出し構え、魔力を練る。

「一本だけなら出せる筈……」はああ!」
「む?」

玩具の様な杖を構えて一直線に駆けてくるネギを見ても男性はじつと見たまま動かない。余裕なのか、それとも何かを期待しているのか。

「サギタ・マジカ魔法の射手・ウチ・ルークス光の一矢!!」

「!」

しかし無詠唱でネギが魔法の射手を放った瞬間、一瞬だが顔が強張った。一本だけとは言え、十歳の少年が無詠唱で魔法を使った事に驚いたのだろう。

しかしそれは再び掲げられた手によって抹消された。魔力の残滓が煙と共に男性の周囲に漂う。

(また掻き消された!? でも……)

再び掻き消された魔法にネギは驚くも、消された後に残った煙と男

性の硬直を利用し

(目くらましには十分！)

捕えられたアスナと男性の間に割り込み、五亡星の描かれた瓶の口を男性に向ける。何処かで見た様な瓶だ。

「僕達の勝ちです。皆さんは返してもらいますよ」

「む」

ラゲーナ・シグナートーリア
「封魔の瓶！！」

そして紡がれる封印の呪文。

呪文を唱えた瞬間、瓶を中心に魔法陣が現れ、瓶の口を塞いでいたコルクの栓が外れ、その内に男性を吸い込もうとする。それを見てネギも、スライム達を足止めしていた小太郎も、ニヤリと勝利の笑みを浮かべた。

……… イイイ

「え………？」

しかし、アスナが戸惑いの声を上げると同時にその笑みも凍りついた。

……… イイイイイイイイイイン！！

「っ！ うあ、あ、あああああああああああつ！？」

「なっ、アスナさん！？ アスナさん！！」

「何や、一体どうした！？」

封印の呪文をネギが唱えた途端、アスナの首に掛けられた飾りが輝き、ガラスを引っ掻く様な甲高く耳障りな音を立て始めた。

同時に絶叫するアスナ。彼女は目を見開き、体を弓なりに仰け反らせて痙攣する。

開かれた口からは「あ」と言う叫びのみが出て　　バチッ！と音を立てて、封印に使われる筈だった魔力が弾けて消えた。

「なっ……！？」

「封印の呪文が、掻き消された！？　　どう言うこったよ！？」

その事に驚き、混乱するネギとカモ。呪文が弾けた途端、音は消え、アスナの叫びも無くなつたが彼女は酷く息を切らせ、膝をつき、前のめりに倒れそうになるが腕を触手に捕われているので倒れる事は無かった。痛みも有つたのか、目には涙が滲んでいる。それを見て男性が動く。

「ふむ、実験は成功のようだ。接触型はまだ分からないが、放出型の呪文に対しては万全、と言ったところかな？」

男性の言葉にネギ達がそちらを向くと、彼は手袋を嵌め直していた。黒い服と手袋の間から、赤と薄緑の輝きが見える………昂の作ったプレスレットだ。

しかし火や風を固めて生み出された様に美しかったその結晶の輝きは心なしか、灰に塗れた様に煤け、黒ずんで見えた。

「それ、何であなたが……！」

「これかね？　少々借り受けているだけだよ。……さて、そろそろ私も本気でやらせてもらおうとしよう。まさかこれで終わりと言う事は有るまい、ネギ・スプリングフィールド君？」

「っ！」

「この辺り一帯に結界を張らせて貰った。全力で戦い大騒ぎしても、周囲に気付かれる事は無い。存分に戦おうではないかね」

そう言つて男性はボクシングをするように構えを取り、魔力を纏つたその拳を繰り出した。黒ずんだ赤い輝きがその軌跡に走る。

デーモン・シエア・シユラーク

「悪魔。パンチ!!!」

「なんつ!?!」

男性が拳を繰り出すと同時に、その射線軸上に衝撃が奔る。

それはあたかも砲撃の様で、ネギ達は避けたが、直撃した観客席を粉々にした。同時に、空気の焦げる嫌な匂いもする。

その威力を見て、ネギ達の頬に冷や汗が伝う。直撃すれば唯では済まないだろう。

「この威力、今まで手え抜いとつたんか！　これが本気かおっさん!!!」

観客席を粉碎し、空気を焦がしたその威力を見て笑みを浮かべながら小太郎がそう言う。しかしその額や頬には冷や汗が伝っている。予想以上だったのだろう。

その言葉を聞きながらも男性は連続して、無言で拳を連ねる。速度を重視したその攻撃は速射性と連射性に優れ、威力こそ先の砲撃の様な拳よりも低いものの牽制や足止めには十分だ。先程の物を単発のバズーカとするなら、こちらは連射の利くピストルと言ったところか。

赤い軌跡が流星の様に二人に流れる。

「ちまちまと鬱陶しいな！　つーか熱いわ、この攻撃!」

「そこまで威力が高くないのが救いだけ！　熱いのは多分、あの腕輪の所為!!!」

拳の弾幕を防ぎ、捌きながらそう言う小太郎に、同じく防いでいたネギがそう返す。

見れば男性が拳を繰り出す度に、ブレスレットの結晶が鈍く輝き、拳に濁った赤い魔力を乗せている。おそらく熱いと感じるのはその魔力の所為だろう。輝きが濁っているのは正当な所有者ではない為、無理矢理に魔力を引き出している所為か。

ネギ達が自分の体を見ると、服は所々焦げ、腕や足には赤い痕が有り、痛みの他にじわじわと発熱している様に感じる。軽い火傷を負ったようだ。そこまで強い痛みではないのが幸いだが、攻撃全てに火属性が乗っているとすると厄介な事この上ない。

「あれか！ くそがつ、近付けたらぶっ壊したるのに……！」

連続で打ち出される拳の隙間にチラリと見えた赤い金属の輝きに小太郎がそう言う。しかしそれは不可能だろう。

彼は知らないが、あのブレスレットを作り上げたのは昴である。唯でさえアスナに対しては過保護極まると言っても良い彼が、彼女と木乃香、刹那の三人専用に素材から何まで選び抜いて作り上げた物だ。

材料として使われている赤い金属は緋緋色金と言い、一説にはオリハルコンと同じ物と言われる特殊な生きた金属である。金よりも軽く、決して錆びず、永久不変と言われるその金属は原料も精錬方法も既に喪われて久しく、純粹に加工されずに残っている物は既に無いが、昴の天沼矛によって在り方を書き換えられこの世に再び創り出されたのだ。

元々並外れて高い強度を持つそれだが、現在では既に喪われている古の精錬方法も使って精霊と共に鍛え上げている為にさらに強度が上がっている。

装飾として浮き彫りにされた蛇の様にも植物の様にも見える模様は永遠と生命の力強さを表す。朽ちず、決して砕けぬようにと思いを

込めて作られたそれは、回復力を上げる効果を装備者に齎している。内と外の両面に刻まれた文字の数々にも加護と防御、魔力の制御を意味する物が使われており、装備者は勿論の事プレスレット自体も凄まじい強度を持ち、例え傷付いたとしても自動で再生するというとんでもない物だ。

さらに昴が真言で以て、唯でさえ並外れている強度をより化け物じみたレベルに引き上げているのだ。おそらく、エヴァンジェリン吸血鬼の真祖と並ぶとされる魔法世界に存在する最強種、「古龍・龍樹」エインシエンガウラシヨ・ナーガシヤですらこの腕輪を破壊する事は不可能だろう。

そしてそれは、龍樹とタメを張るラカンですら事実上破壊不可能と言う事を示す。

そんな存在自体が化け物じみた者達に破壊不可能な、神話や伝説に名を残しそうな物が、並の格闘家よりも強いとは言え、たかだか10歳の小僧である小太郎に破壊できる筈が到底無かった。

「瓶も使えないし、このままじゃジリ貧だよ！」

「だったらゴリ押ししか無いやろ！」

焦るネギの言葉にそう返し、小太郎は自分の手に気を籠め始める。今の彼が籠められる限界値近くまで籠められたそれは、圧縮されてポウツと蒼白い光を放つ。

隣を見ればネギも、「白き雷」を詠唱していた。練り上げられる魔力が、呪文に呼応して放電現象を引き起こす。

「犬上流・空牙!!!」

フルグマティオー・アルピカンス
「白き雷!!!」

放たれる爪の形をした気弾と、白く輝く一筋の雷光。今まで以上に無い威力と精度を持って撃ち出されたそれは、真直ぐに男性に向かっ
つていき

「イイイイイン！！」

「あ、あああああつ！！！」

今度は手を翳されもせず、アスナの叫びと共に再び掻き消えた。

「また掻き消された！？ とつときの気弾やで今の！？」

「しかも今度は動いてねえ！！」

「アスナさん！？」

再度消滅した魔法や気弾に目を見開いて小太郎は驚き、ネギは息を切らせて倒れそうになっているアスナを心配して声をかける。それを見ながら、男性が説明を始める。

「私に当たらずに魔法が消える事が不思議かね？ 簡単だ、マジックキャンセル……魔法無効化能力と言う奴だよ」

「魔法無効化……！！？」

「そう、魔法無効化だ。君達も裏に関わるのなら聞いた事ぐらいは有るだろう？」

そう言つて男性は構えを解き、後ろのアスナを見やる。

荒い息を吐いて膝をつく彼女は肌を紅潮させて色っぽいが、そんな事気にならない程に疲労している様に見えた。目尻には涙が見える。

「彼女、緋乃宮アスナ嬢がその身に宿す、魔法や気と言つたありとあらゆる物を文字通り無効化し消滅せしめる、魔法使いにとっては天敵としか言いようのない能力………極めて稀少かつ、極めて危険な能力だ。今回は我々が逆用させて貰つたがね」

「なっ……！！」

男性の説明に絶句する二人。今の説明が本当なら、魔法を主体とする戦闘では彼女に傷は付けられないという事だ。そして、それを逆用しているという男性にも。何故そんな能力を彼女が持っているのか、どうしてそんな事を知っているのか、疑問がネギの頭に渦巻く。

「アスナさん、大丈夫ですか!？ どうしてこんな事を!!」

「先程言っただろう? 実験だよ、我々にも利用できるかどうかのね。あと緋乃宮昴を誘き寄せる為と言うのも有るが……結果は成功だった、これで我々に放出系の魔法や気弾は効果が無い。大した力だよ」

「や……やだ……やだあああつ!!」

「!？」

「やだあつ! イヤ、イヤあああああつ!! スバル、助けてスバルツ!!」

男性が二人を見ながらそう言った直後、アスナが泣き叫びながら暴れ出した。それを見て、いつものアスナを知る全員が驚いた。

彼女にとっては思い出さたくも無い過去の記憶、自分の生まれた国、ウエスペルティア王国の防衛兵器として使用されていた記憶が浮上したのだろう。

奴隷の様に鎖に繋がれ無理矢理力を引き出され、望まないのに多くの命を奪い、血を流した忌まわしい記憶。

体に奔る痛みや、無理矢理に引き出され防御に使われる自分の能力がその記憶を如実に思い出させたようだ。

彼女は髪を振り乱して本気で暴れ、気すら纏って何とか拘束から逃れようとするが、より強く縛りあげられ動けなくなる。しかしそれも関係ないとばかりに暴れ、強烈な締め付けによって彼女の白い肌に痛々しい痕が付く。

それを見てネギが走り出そうとするが、ふと肩が軽くなり目で見るとカモが何処かに行こうとしていた。

「カモ君!？」

(少しの間持ち耐えてくれ兄貴！ 俺っちが何とかしてみる!!)

(何とかかって、どうやって!?)

(首飾りだ！ 姐さんの首に掛けられたあれが、無効化の際に光を放ってた。多分あれを外せば、無効化は無くなる!!)

そう言つてカモはまだ無事な客席に隠れながらアスナの元へと向かう。

「見やす過ぎデスヨー」

「ゲツ!!」

「あれを外されると厄介なんデナ。テメーもあの中入つてナ!!」

「お、おわあああああつ!! むおつぷ!!」

しかし舞台上上がった所でスライム達に取り押さえられ、木乃香達の入っている水球に放り込まれた。途端に朝倉達から放たれる役立たずコール。所詮小動物か。

「カモ君つ!!」

「バカつ！ 余所見すんなネギつ!!」

「小太郎君の言つとおりだ。敵が目の前に居るのに目を外すとは愚の骨頂。反省したまえ。そして君も男なら、拳で語りたまえよ!!」

そう言つて接近し、すくい上げる様に拳を振り切つた。今度は薄汚れた薄緑の輝きが拳に宿る。刹那のブレスレットの風属性だ。

「もう一つ!？」

「悪魔アツパー!!!」

降り抜いた途端、衝撃と暴風が吹き荒れ、客席を破壊しながらネギと小太郎を打ちのめす。

体勢を立て直し、何とか防ぎ、捌こうとするが整えようとした途端に拳の連射で体勢を崩され、強烈な一撃を見舞われる。今は障壁で何とかなっているが、それが貫かれるのも時間の問題だ。叩きのめされるネギ達を見て、木乃香達が目をつぶった。

打ちのめされ、叩きのめされるネギ達の様子を世界樹の枝のある場所から見ている影が三つ。

一つは翡翠を思わせる長い翠の髪を風になびかせた少女。無機質な目をしており、頭の上には不気味に笑う人形を乗せている。

一つは長い髪を首筋で一束に纏め、およそ現代ではコスプレとしかとられないだろう忍装束を纏った少女。目は細く、しかし真剣に戦いを見ている。

最後の一つは、他の二人に比べて小さいものの、肌は白く、顔立ち是非常に整っており蒼玉を思わせる瞳と金系の髪がまるでビスクドールのように思わせる、非常に整った容姿をしていた。

微笑みを浮かべれば誰もが見惚れるだろうその表情はしかし、下の戦いを見て憮然としている。

「マスター、このままではネギ先生達は負けてしまいますが」

翠の髪の少女、茶々丸が、彼女の主である金髪の少女、エヴァンジェリンにそう言う。瞳は相変わらず無機質だがその声音は何処かハラハラしている様に感じる。

それを聞いてもエヴァンジェリンは何も言わず、ただじつと下の戦

鬨を冷めた目で見ていた。

「どつするのでござるか？ ネギ坊主はエヴァンジェリン殿の弟子でござるう？」

細目の少女、長瀬楓がエヴァンジェリンの方に顔を向けてそう言う。何処か非難する様な色が声音から窺えた。

「別にどうもせん。あの程度の魔族、私が手を下すまでも無い。ほーや達の助力に行きたければ行けばよかるう」

それを聞いて、エヴァンジェリンは視線も向けずにそう返した。その返事に楓が怒気を籠めた目で睨むが、まるで堪えた様には見えな

い。それでも楓が睨んでいると、突然エヴァンジェリンが樹に出来ていた影の一つに手を突っ込んだ。

呆気にとられ、どうしたのかと茶々丸と揃って見ていると、彼女はズルリと影から白い何かを引き摺り出した。

「イタタタタタッ！！ 痛い痛い、痛いです！ 髪を引っ張らないで下さいい！！」

エヴァンジェリンが影から引き摺り出したのは、時々魔法の出来を見てやっているさよだった。彼女は自分の白い髪を引っ張られ、涙目で抗議している。

軽い謝罪と共に髪を掴んでいた手をエヴァンジェリンが離すと、彼女はすぐに頭を摩り始めた。余程に痛かったらしい。

「うう、痛い……転移した途端何でこんな事に……」

「お主は……さよ殿？ どうしてここに」

「？ あ、楓さん茶々丸さん、こんばんは。そう言う楓さんこそどうしてここに？」

楓の言葉に、呑気に挨拶をするさよ。それを聞いて若干毒気が抜かれるが、すぐに気を取り直して何故ここに来たのか聞くこととする。しかし楓が聞くよりも先に、エヴァンジェリンがさよに問うた。

「さよ、昴はどうした？ 緋乃宮アスナが捕まっているんだ、過保護なアイツが動かない道理が無い」

「昴さんですか？ 道を踏み砕きながらもものすごい勢いで走って行ったんですけど、まだ来てないんですか？」

「ああ、流石にこんな時に道に迷う事は無いと思うが……」

エヴァンジェリンの言葉に、楓は「昴殿は方向音痴なのでござるか……」と内心呆れていたが、今はどうでもいいことなので意識の彼方に放り捨てた。

下の戦闘を見ながら、新たに来たさよを加えてどうするかを話そうとすると、ふと視界の端に何かが映った。

それは他の全員にも見えていたようで、揃ってその方向を向き

直後、音が全て消え、世界が凍った様な錯覚にその場の全員が捕われた。

重く、酷く冷たい空気が立ち込める。

「っ！ あ……は……っ」

「こ、れは……何と言う殺気……！」

「オーオ、コリヤスゲー殺気ダナ、ココマデ届クナンテヨ。ツーカー、

マジデブチ切れテルダロ、コレ」

茶々丸の頭に乗ったチャチャゼロがそう言う。

彼女達の視線の先には、ようやく到着したらしい昴が客席の一番上に立っていた。ただしいつもの様な温和な微笑みは浮かべず、表情全てが抜け落ちた様な無表情で、その手には天沼矛を握って。心なし、二色の飾り布は風も無いのにざわざわとざわめき、矛本体は力タカタと震えている様にも見える。

下を見れば戦闘をやめ、全員が彼の方を見ていた。ただし、ネギや小太郎、一般人は全員顔を青ざめさせ、震えていたが。

世界全てを凍てつかせる様な冷たく、重い怒気と殺気に冷や汗が吹き出す。

その怒気と殺気の発生源である昴は戦闘をやめた全員の内、黒い服に身を包んだ男性を見ながら静かに、しかし良く通る声で問うた。

「……貴方ですか？ アスナちゃんに、私の娘に泣き叫ぶような事を仕出かしてくれた、たわけた魔族は……」

全身から殺意と怒気を迸らせながら紡ぎ出された言葉は酷く冷たく、紅玉を思わせる双眸は何処までも虚ろで、しかしどす黒く不気味な、紅色がかった虹色の輝きを放っていた。

61話：鏡（前書き）

今回、主人公が無双します。

あと、名前は出ませんが、聖剣伝説の技も一つ出てきます。

61話：鏡

無表情で、ガラス玉の様に冷たく無機質なその視線の先には触手に捕われ、未だ涙を流しているアスナの姿がある。

その姿を見る紅がかつた虹に輝く瞳は異常なまでに剣呑な輝きを宿し、心なしその一帯の重圧が増し、気温が10 近く下がった様な気がした。

しかし、おぞましいとさえ感じられるその殺気を昂に直接向けられている男性は柔らかい笑みを浮かべ、気さくに話しかけた。

「君が緋乃宮昂かね？ 初めまして、私はヘルマン。ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵だ。まあ、伯爵と言っても没落貴族でね、今はしがない雇われの身だ。君と少し話したい事が有るのだが……」

「貴方の名前や爵位など、興味も無いうえにどうでもいいのですよ。私が聞いているのは、彼女を泣かせたのが貴方か否かと言う事だけです。それから、人の娘を攫っておいて話など……笑わせないで欲しい物ですね。話す事など有りません」

「……これは無理かな。仕方ない、倒させて貰うとしよう」

そう言つてヘルマンと名乗った男性は溜息を吐き、構えを取った。今の僅かな会話だけで懐柔は不可能と判断したようだ。両拳に濁った赤と薄緑の光が宿る。

しかし構えた直後、充満していた殺気が忽然と消え、ヘルマンの視界から音も無く昂の姿が消えた。何の予備動作も無く消えた昂に焦る。

トンッ

背後から軽い音が聞こえ振り向くと、彼はアスナの前に立って天沼矛を薙ごうとしていた。狙いはアスナの腕を取り、その動きを阻害している触手。

フォンと言う、軽く風を切る音を伴いそれは振られ

矛の刃が触れた瞬間、触手全体が跡形も無く消滅した。

「ナン……ッ!?」

何の予兆も無く、触れた瞬間に消滅した触手を見て水球の側に居たスライム達が驚きの声を上げる。まさか消滅するとは思ってもみなかったのだらう。水球に捕われている木乃香達も、目を見開いている。

昴アーティファクトの神造魔装具・天沼矛の能力は、所有者が触れていると認識出来ているありとあらゆる存在の『在り方の書き換え』であり、国生み神話ではイザナギ・イザナミの夫婦神がこれを以て混沌としていた脂の漂う原初の海水を掻き混ぜ、穂先より滴り落ちた水滴あるいは塩を積もらせて最初の島であるオノゴロ島を作り上げたと言われる。混沌を破壊し島を創造した、破壊と創造、どちらにも当て嵌まり、しかしそのどちらにも当て嵌まらないという矛盾した能力を宿すそれは、矛と言う武器の形状を取っているながらも直接的な殺傷能力を何故か持たない。しかしそれは刃で物理的に傷付けると言った事の

みであり、ダメージこそ与えられないものの、切ったり刺したりと言った事は出来るのだ。切り傷や刺し傷と言ったものは絶対に出来ないが。

だがこの武器の能力は先も示したとおり、『在り方を書き換える事』であり、万物問わずにうつろわす事である。対象に触れ、明確に、かつ鮮明にイメージする必要があるが、それが出来るならどんな物でも望む物に存在自体を交換できる。

すなわち、在り方を書き換えるという事は、存在そのものをまったく別の物に変えてしまうという事だ。創造の力を宿していない為、何も無い空間を書き換え、創造する事は流石に出来ないが。

だが言ってしまうえば、イメージ出来るのなら何の変哲もない小石を黄金に変えたり、木の棒を鋼鉄の槍に変えたり、雨や雪を薔薇の花弁に変える事も出来る。そして

生物を無機物に変えたり、万物を構成する最小の物質、素粒子に変える事も出来るのだ。

触手の消滅も、この力で以て構成していた水や魔力の全ての在り方を根源レベルで書き換え、消滅させたのだ。

腕を捕えていた触手が消滅し、解放されたアスナは力を無理矢理引き出された事による疲労で倒れそうになるが、昂に抱き留められ、倒れる事はなかった。

「……スバル……？」

「すいません、来るのが遅れてしまいました。もう大丈夫ですよ」

そう言つて首飾りを外しながらアスナに微笑みかけると、彼女は泣きながら昴に抱き着いた。そんな彼女の背に昴は自分の上着を掛け、あやすように優しく叩いて安心させようとする。

しかし敵に背を向け、隙だらけなその姿を好機と見たか、スライム達が背後と左右の三方向から飛びかかつて来た。

それを見て、昴の殺気に怯え、震えていた全員が声を上げる。

「昴さん、おちびちゃん達が!!」

「よ、避けてー!」

水球の中から口々に回避する様に言う朝倉達だが、昴にアスナがしがみついて泣いている為、回避はどうしても遅れてしまう。いくら回避に定評のある昴でも、その状態で避ける事は困難だろう。さらに、過保護な彼が泣いているアスナを振り払う事など出来る筈も無い。

声の他に気配でスライム達が襲いかかつて来ている事は知っているだろうがしかし、泣き続けるアスナを昴はただただあやし続け、そうしている間にスライム達との距離が殆ど無くなった。

笑みを浮かべ、手を貫手の状態にし、さらにそれを刃の様な形状にして腕を引くスライム達。アスナごと殺すつもりなのか、加減をしている様には見られない。

そして貫手は繰り出され、木乃香達が悲鳴を上げ

『汝等、その魂さえも凍て付き、砕け、塵となりそして虚無と帰せ』

背を向けたまま昴がそう言つと同時にスライム達の手先から何まで、

全てが一瞬にして氷結した。おそらく彼女達は、自分が凍り付いた事にすら気付いていないだろう。顔に勝利を確信した笑みが浮かべたまま、彼女達は完全に凍り付いていた。直後に甲高い音を立てて微塵と砕け、塵となり、その塵すらも虚空に溶ける様に消えて行った。

「なっ!？」

瞬き一つする間に消滅した自分の部下達に驚愕し、ヘルマンは目を見開く。よもや何もできずに消されるとは思っても居なかったのだろう。ネギや小太郎、水球に捕まっている者達も、啞然とした表情で消えて行く塵を見ていた。

一瞬、ほんの一瞬の間に終わってしまった。それもしゃがんでいる場所から一ミリも動かず、言葉を連ねただけで三体のスライムは消滅した。

「魂ごと氷結し、砕いて塵にしました。もはや彼女達は蘇生も、転生も出来ません。まあ、体^{うわ}ごと魂が消滅したのですから当然ですよね。塵が残れば話は別だったかもしれませんが、その塵も一粒残さず抹消しましたし」

「なん、だと……?」

昴の言葉に、ヘルマンが呻く。その声を聞きながら昴はようやく落ち着き始めたアスナの手を服から優しく剥がし、頭や頬を撫でて何かを言った後、ゆっくりと立ち上がった。それを見て、ヘルマンは構えを取って警戒する。

「ああ、久しいですね、怒りで頭に血が昇っていると理解しているのに、思考は奇妙に冷え切っているこの感覚。何でしたっけ、確かこれをキレル、と昨今の若人は言うのですか? 思えば、本気で

頭に来たのは一体何十年ぶりでしょうか……………」

立ち上がったまたアスナに微笑みかけ、ヘルマンの方を向いて昴はそう言った。どう言う訳か、その目は閉じられている。

酷く静かな、しかしおぞましい程の冷たさを感じる言葉を出すごとに、抑えられていた怒気と殺意がじわじわと溢れ、アスナと枝の上に居るエヴァンジェリン主従を除く全員が震えあがった。静かだが威圧の有るその雰囲気気圧されたか、思わず後ずさる。

「おかしなことですね、後ずさるなど。人の大切な存在に手を出したのです……………当然、

滅ぼされる覚悟くらい、出来ていたのでは

しょう?」

一切の感情を消し去ってその一言を言い放ち、昴は閉じていた目を開いた。その瞳は既に紅がかかった虹色ではなく、完全にどす黒い虹色に変色して不気味に輝いていた。

途端に感じられる殺気が一気に増し、彼が立っている場所を中心として、蜘蛛の巣の様な罫が舞台中に広がった。心なし、瘴気を放っている様にも感じる。

余りにも重く、冷たい殺気に、それを直接向けられていた訳でもないのどか達は気絶し、それなりに殺気や敵意を受けた事のある小太郎やネギ、古菲は顔を真っ青にして震えていた。流石に一般人にこ

の殺気は強烈過ぎたらしい。意識を保っているのは世界樹の枝に居る者達とアスナ、ネギ、小太郎、古菲とヘルマンだけだ。そのヘルマンも、冷や汗をかいて少しずつ後ろに下がっている。

そんなヘルマンを見て、昴がポーチに手を入れ、何かを取り出した。取り出されたのは……………銀色に輝く、歪な形をした何かの欠片。

『連言を以て幻想を紡ぎ、言奏を以て現創と成す。全てが逆なる鏡像の世界を此処に開き、汝を誘おう』

昴が欠片を手に持ったままそう言うと破片が輝き、その場の全てが反転した。

厚い雨雲に覆われ、黒かった筈の空には巨大な青みがかった銀色の月が燦然と輝き、幻想的なれど圧倒的な存在感を示している。

罅の入った舞台や吹き飛ばされた筈の客席には損傷は一つもなく、側に居た筈のネギ達の姿は何処に行ったのか、忽然と消えていた。キョロキョロと周囲を見回し、気配を探っても何も感じられない。自分が張った筈の結界の気配も無い。

「こゝ、此処は一体…………？ なつ…………！」

気付けば向けられていた筈の殺気を感じず、目の前に居た筈の昴もいつの間にか居なくなっていた。心のどこかでそれに安堵の溜息を吐き、周囲を見回すと、予想外の物が目に入って来た。

それは巨大な樹だった。麻帆良の生徒には俗に世界樹と呼ばれる、天高くそびえ、それこそ北欧神話の世界樹ユグドラシルをイメージさせる様な、余りにも巨大な樹だった。広葉樹でありながら、冬でも関係ないとはかりに常に緑の葉を生い茂らせ、彼自身もそれを見て、ある意味学園都市のシンボルともなっているそれはしかし

枯れていた。

人が百人いてようやく一周出来そうな太い幹には所々に巨大な亀裂が入り、根元は腐った様にボロボロになっている。今にも倒れそうだ。

上を見ると葉は一枚も見えず、場所によっては折れている枝はしかし月明かりを受け、まるで巨人の骨の様に白く、夜の闇に不気味に浮かんでいた。

死んでいる。誰が見てもそう判断するだろう。先程まで青々とした葉を生い茂らせていた世界樹が目の前で、枯れ果てた姿でそびえていた。

「こ、これは……」

「世界樹が枯れ果てているのはこの世界だからです。向こうではちゃんと生きて、葉を生い茂らせていますよ」

「っ!？」

背後から聞こえた声にすぐさま拳を構え、振り向く。観客席の一番上、ヘルマンから見て丁度月が背に浮かぶ席に昴が一人、脚を組んで座っていた。目は虹色に輝き、黒かった髪は月明かりに照らされ銀色に煌いている。

彼自身整った容貌をしている為、月を背にして闇夜に浮かぶその姿は何処までも幻想的で、美しく、しかし

その美しさ以上に恐ろしかった。

「本当はあちら側で貴方を滅ぼしても良かったのですが、下手にあの子達にトラウマを植え付ける訳にもいきませんし……少々面倒で

したが、こちら側に「ご足労いただきました」

「こちら側あちら側と、何を言つて……いや、それよりもその目は一体……？」

「この世界はあちら側の映し絵であり、同時に少々違う世界。あちらで美しく咲き誇る花はこちらでは醜く朽ち枯れ果て、こちらで全てを癒す薬はあちら側では何者をも殺す猛毒となる。私に対しては効力を持ちませんが、善と悪、生と死、光と闇、ありとあらゆる全てが逆転せし鏡の世界。それが此処、鏡面世界」

今回は鏡の欠片を媒体として展開しました。

そう言つて昴は組んでいた足を解き、右手の掌を上にして前にかざした。その手の上には、ポーチから取り出された銀色の破片、「鏡の欠片」が浮かんでクルクルと回っていた。その煌きの中にはネギや小太郎、アスナやエヴァンジェリンの姿も見える。

しかしヘルマンはその言葉について行けず、混乱していた。爵位を持ち長い時を生き、かなりの知識を持つ彼でも、映し絵の世界？鏡が媒体？あらゆるものが逆転する？一体何を言っているのだという感じだ。

推測できる事と言えば、この世界はおそらく現実ではない事と、自分がそれに閉じ込められた事、展開者が居るから、彼を倒せば出る事が出来るだろうと言つ事のみ。そして自分の仕事は、客席に座る昴の抹殺と現実には居るネギの戦力調査と、その彼を戦闘不能にする事である。

ならば取るべき手段は一つのみ。そう思い、ヘルマンは自分の姿を老紳士から本来の魔族の物へと変じさせた。

横に伸びていた愉快的な形をした髪は黒く染まり、捻じれ、硬質化し、先端が尖って山羊と野牛の中間の様な形状をした角となり、黒いコートが変形し、腰からは蝙蝠を連想させる黒い翼と先端が槍の穂先の様な細長い尾が生えた。

顔は鼻や耳と言つた凹凸部分が無くなり、出来の悪い人形の様子の

つべりとした感じの物になった。口は笑みの様な形で、人間で言う耳が有る場所まで裂けている。醜悪。その一言に尽きる姿だった。

『例えこの世界に私を取り込んだとしても、展開者である君を倒せば効果は消え、出られるだろう！ 懐柔出来そうにも無い今、遠慮する必要は微塵にも無い！ 早々に倒させて貰うぞ！！』

そう言つて本来の姿に戻つたヘルマンは宙に浮かび口を開き、その口腔に光を溜め始めた。

圧縮され、白く輝くそれは見るだけでかなりの魔力が籠められていると判断できる。判別できないが、何かの呪いの様な物も一緒に籠められている様に感じる。

昂は知らないが、ヘルマンが撃とうとしている光はかつて、ネギの村に居た人々の殆どを石化させた物である。その呪いは強力で、熟練の老魔法使いスタンと白魔法使いであるネカネの二人の障壁を以てしても完全には防げず、スタンを石としたものだ。直撃どころか掠つただけでそこから徐々に石になつて行くだろう。

『終わりだ、石となつて果てたまえ！！』

その光はすぐに臨界に達し、ヘルマンは座つたまま動こうともせず、ただ自分を冷めた目で見上げている昂に照準を合わせ、石化の光を撃ち出し

その光は彼の口の中で爆発した。

『っが、っああっ!?!』

衝撃に驚き、ヘルマンは口を抑えて落下した。受け身を取れずに舞台に叩きつけられ、呻く。流石に自分の能力で石化する事は無いらしく、石になって行く様な鈍い音はしないが、彼は口から煙と青い液体　　血を流していた。

「ば、馬鹿な……。何故、石化光線が私に……。!?!」

まさか暴発するとは思ってもみなかったのだろう。ヘルマンは人間の姿に戻り、口を抑えた。しかし血は流れ続け、彼の手を汚す。そんなヘルマンを見下ろして、昴は冷たく言い放った。

「愚かですね、先程言ったでしょう？　この世界では、私を除いたあらゆるものが逆転する、と」

「あらゆるものが、逆転……。まさか……。!?!」

「そう。あらゆるものと言うのは、何も先程言った物のみに当て嵌まる事では有りません。川の流れは逆巻き、降り注ぐ雨雪は天に降り、癒しは痛みに変わり、繰り出された攻撃はその全てが繰り出した張本人へと帰ります」

その言葉にヘルマンは戦慄した。

何もかもが逆転する世界。その言葉が本当だとしたら、この世界に居る限り、昴に向かう筈の攻撃は全て自分に帰り、自分自身を傷付けるという事に他ならない。

さらに彼は「自身を除いて」と言った。つまり彼は、この世界の「逆転」の法則に当て嵌められる事は無く、普通に攻撃も治療も出来るという事だ。

つい今しがた、自身に帰って来た攻撃を体験したヘルマンに疑う事

など、もはや出来るはずも無かった。

自分の攻撃は自分に帰り、彼は普通に攻める事が出来る。それはまるで、天に向かって吐いた唾が自分に降って来るようなものである。

「ば、化け物め………！」

身を起こし、昴を睨みつけ呻くように言った彼を誰が責められようか。

自分が攻撃してもそれは全て自分に帰り、しかし相手の攻撃は全て帰る事無く自分に襲いかかる、展開した存在を神の如き存在と成し、他者を嘲笑う理不尽極まるこの世界。

しかし怨嗟と憎悪を含み、並の人間なら震え上がる程の殺気を受けても昴は怯まず、ただ冷めた目でヘルマンを見ていた。その目に、感情の色は一切見えない。

「化け物ですか。悪魔の貴方にそれを言われたら、色々とお終いですね」

笑みも浮かべずにそう言っつて、昴は虹色に輝く目を閉じた。同時に、夜空に浮かぶ巨大な銀月がゆっくりと、しかし目に見える速度で黒く染まって行く。月食だ。

「遺言はそれでお終いですか？ それでは」

さようなら。

そう言っつと同時に月が完全に隠れ、銀色に輝く光が幾筋もヘルマンに降り注いだ。それはまるで生きている様に縦横無尽に、複雑に動き、軌跡に沿って爆発を起こし、ヘルマンの体を容赦なく薙ぎ払い、吹き飛ばす。

断末魔の叫びも何も上げられず、ヘルマンと言う存在はこの世から消滅した。

「来世があるなら、今度はもっとよく考えて行動することですね。まあ、魔族や精霊に来世があるか分かりませんが、興味もありますね。………貴方の失敗は唯一つだけ。アスナちゃんを泣かせ、私を怒らせた事です」

そう言って昴は目を開き、鏡の世界を閉じて現実へと戻って行った。

61話：鏡（後書き）

真言による魂の浸食率：86%

浸食率が80%を超えた事で体の色素が一部変色します。

髪：黒 銀

目：紅 紅虹（真言発動時には虹）

また、浸食に伴い、一部の記憶と感情が欠落しました。
欠落した記憶と感情は以下の通りです。

感情：悲しみ、喜び

記憶：転生前の自身の家族に関する20年間の記憶全て

62話：黒から白へ

アスナの涙によって昴の怒りが一瞬にして臨界点を超え、彼が鏡面世界にヘルマンを引き摺り込み、何処までも無表情で冷たい思考のまま一切の容赦なく彼を消滅させようとしている頃、現実世界側では何とか意識を保っているネギや小太郎が震える体を抑え、それを鎮めようとしていた。

捕われたままになっている古菲も水の中で、同じ様に震えを落ちつけようと自分の体を抱き締めるような体勢を取っている。

他の人間、木乃香、のどか、夕映、朝倉は全員が昴の殺気で気絶し、糸の切れた人形のようにぐったりと倒れ伏していた。ピクリとも動かず、肌も血の気が無くなり白くなっているのが下手をすれば死んでいる様にも見えるかもしれない。放り込まれたカモに至っては、まるでクラゲの様に水球の中を漂っている。

刹那と千鶴はどれほど強力な眠りにつかされたのか、未だ目覚めていない。しかし世界全てが凍て付く様な錯覚を覚える程強烈な殺気に気付かなかつたのは幸いだろう。気付いていたら、起きた瞬間千鶴は再び意識を失うだろうが、刹那はおそらくネギ達と同じ状態になっただろう。

舞台の中央には昴の上着を掛けられた下着姿のアスナが居て、彼女の少し前方には銀色に輝く鏡の破片が宙に浮いてクルクルと回っていた。泣いた事による充血で目を赤くし、しゃくりあげながら彼女は鏡の破片をじっと見ている。

「はっ、はあっ、あ、かつ……あ……ゴホッ、がつ、はあっ、はっ……！」

蒼褪めた顔で、喘ぐように荒い呼吸を繰り返して時折咳き込みながら、小太郎は全身から冷たく、嫌な感じの汗を流す。

震えるその手の片方は彼自身の胸に当てられていた。自分の心臓がちゃんと動いているのを確認する為だろう。果たして、心臓は動いていた。しかしその鼓動は、京都の呪術協会本山からこの学園に走って来た時よりも遙かに早く、まるで早鐘の様に胸を撃つ。余りの激しさに、苦しさを他に痛みも感じる程だ。少し離れた所を見ればネギも、およそ同じ様な状態で杖を握りしめていた。しかしその杖は腕の震えによって床にぶつかりカタカタと五月蠅いくらいの音を立てている。その音は雨もやみ、誰も喋らない夜の闇に乾いた響きを立てていた。

「はあ……………はあ……………は……………」

目を閉じ、若干落ち着いて来た呼吸を深呼吸してさらに落ち着かせる。そう長い時間あの殺気の中に居なかつた事と、ネギ達よりも裏に関わつた期間が多少なりとも長い事が幸いしたのだろう。すぐに元通りとは言わないが、平時に限りなく近い状態に戻つた。そして立ち上がるうとするが、腰でも抜けたか、立つた直後にへたりこんだ。

同時に、背後に降り立つ気配。瞬時に警戒するが、今の状態では殆ど何も出来ないと言つて良いだろう。敵意などは感じない為、おそらく味方なのだろうが。

「どつやら、先程の昴殿の殺気に中てられた様でござるな」

聞き覚えのある声に振り向けば、そこには京都で二度目のネギとの戦いを邪魔し、自分を足止めして倒した細目の少女の姿が有つた。側には同じく京都で見た、金髪の幼女と翠髪の少女の姿、そして京都では見なかつた白い髪の少女の姿も有る。翠の髪の少女は、何処か少女と似たデザインの人形を頭の上に乗せていた。どうしてか、酷く不気味に感じた。白い少女は顔色が悪い様に見える。

「あんだ……どっから出て来とんや」

「世界樹の枝から少々。もう暫く時間を置いた方が良いでござろう。間近であの殺気を浴びたんでござるからな。しかし………」

へたり込んでいる小太郎と、未だ震えているネギを見てから楓はアスナの前に浮かぶ、鏡の破片に目を向けた。いつもは昴と同じ様にのほほんと微笑んでいて何を考えているか良く分からない彼女だが、現在の表情は硬く、頬には汗が一筋流れている。

「以前より只者ではないと思っただござるが、一体何者でござろうか……。あれほどの殺気の持ち主が唯の喫茶店の店主など、到底信じられんでござる」

いつもより硬い感じがするその声からは、若干の敵意と警戒が読み取れた。

その声を聞いてエヴァンジェリンが忠告する。

「やめておけ、いつもの昴ならともかく、今のアイツが相手では挑んでも一蹴されるのがオチだ。一言で潰されるだろうよ」

「エヴァンジェリン殿、それは一体どう言う事でござるか？」

「言った通りだ。昴の力はある種、規格外だからな。一言でも言葉を出させた時点でもうお終いだ。あのヘルマンと言う魔族、緋乃宮アスナを餌に昴を誘き出す事には成功したが、それが逆鱗に触れてしまったようだ。初めて見るが、完全にキレていた。おそらく昴は問答無用でヘルマンを滅ぼすだろう。魂ごと塵にされるか、それとも時空の彼方に消し飛ばされるか……どちらにせよ、碌な死に方はできんだろうよ」

普段穏やかな人間程、怒り狂った時は恐ろしいと言うしな。

そう言つて彼女は、空中でクルクルと回り続ける鏡の破片の側に歩いて行つた。

魔力も感じず、魔法を使った様な痕跡も感じられない歪な形をした鏡はしかし、どう言う原理か浮いてクルクル回っている。いつの間にか雲も切れており、そこから顔を覗かせた月が柔らかい月明かりで鏡を照らしていた。何処となく幻想的である。

しかしエヴァンジェリンはそんな事気にせず、近くまで行って回り続ける鏡の欠片を手に取りとうとする。

「触れない……？」

伸ばした手は、鏡の欠片に触れる事は出来なかつた。するりと、まるで幻影の様に伸ばした手は鏡をすり抜けた。鏡をすり抜けたまま、左右に手を振つてみるが抵抗は一切感じられない。立体映像の様な物の様だろうか。

「ふむ……」

伸ばしていた手を戻し、その手を顎に当てて考える。昴はこれ確かに手に取つていた。ならば実体が有る筈なのだが、手を伸ばしても触れない。

魔法具か何かかとも思うが、枝から見て居た限りではこの鏡からは魔力の類は感じなかつた。それなりに距離も有つたので、それで感じ取れなかつたのかもしれないが。

仮に魔法具だつたとしても、こんな割れて砕けた様な鏡の欠片を作るのに態々貴重なマナクリスタルを使う事はないだろう。

しかしそれだと、何の変哲もないただの鏡の欠片が魔力も無いのに浮き、しかも触れないと言う理由が分からない。魔法具で有れば魔力を感じないのが可笑しく、魔法具でなければ宙に浮いて触れない

と言つのが可笑しい。

目の前で回り続ける鏡の欠片を見ながら思考の海に沈み、どう言う原理か考える。もしかしたら、先に紡いだ真言の能力かもしれないが、聞こえた言には触れなくなるようにする物は無かった筈だ。色々と考え、鏡を覗きこもつとした直後、鏡がぼんやりと発光し始めた。

「む、何だ？」

突然発光を始めた鏡に疑問の声を上げるエヴァンジェリン。

朧月の様にぼんやりとしている銀色の光は、初めは10cm程度の大きさの鏡を薄く包むように発光していたそれは、徐々に、しかし確実にその大きさを広げ、輝きを強めていく。魔力的な物は感じず、茶々丸に調べさせても魔力は検出されなかった。

意識を保っている全員が徐々に強く、大きくなっていく銀色の光を見ていた。

15cm、20cm、30cm……少しずつ大きくなっていく光。

初めは朧月の様にぼんやりとした柔らかな輝きだったそれは、既に満月と同じ程の輝きを湛えていて……その直径が60cm程になった時、大きくなっていったのが嘘の様に急速に縮んだ。輝きがいかに強まる。

何かヤバイ。エヴァンジェリンはそう感じ、勢いよく後ろに飛んだ。その直後、

ガッシャアアアアアアン

硬質な何かが砕け散る甲高い音がした。同時に鏡を包んでいた銀色の光が爆ぜ、それはボロボロになった舞台全体を銀一色に染め上げた。

その光は冷たく、柔らかく、しかし強烈だった。たかが10cm程度の鏡に宿っていたとは思えない強い光に、全員が咄嗟に目を閉じる。もし直視していれば、おそらく何らかの影響が出るだろう輝きだった。最悪、失明も有り得たかもしれない。

幸いその輝きは僅か数秒で収まり、光が爆ぜる直前に全員がきつく目を閉じていた事で影響も出なかった。

そして目を開けると、鏡の有った場所に銀の光の残滓を体の周りに漂わせた昴が立っていた。

「ん、やはり現実世界の方が落ち着きますね。あちらも静かで良いですが、こちらの方が生命の息吹に満ちていると言いますか……」

そんな事を言いながら、昴はぐつと背筋を伸ばす。凝り固まっていたのが、ゴキボキと鈍い音がした。

どうやら怒りは収まつたらしく、雰囲気としてはいつもの彼に戻っていた。既に殺気も、怒気も感じない。穏やかな雰囲気だ。

しかしいつもの彼とは何処かが違う感じがする。何が違うのか分からないが、とにかく何かが違うと感じ、エヴァンジェリンは思わずじろじろと見てしまう。

その視線を感じたか、昴が彼女の方を向く。

「どうかしましたか？ 人の顔をじろじろと……」

「いや、お前本当に昴か？ なんか、微妙に雰囲気が変わった様な

……ん？」

「あ……」

エヴァンジェリンが昴の体の一部を見て疑問の声を上げる。それとほぼ同時に、昴の後ろにしゃがみ込んでいたアスナの声も聞こえた。前と後ろ、双方から感じる視線の先には……昴の頭が有った。

「な、何ですか？ 人の頭をじろじろと見て……アスナちゃんまで、どうしたんですか？ 別に私、禿げていませんよ？」

「いや、そうじゃなくてだな。と言うか、まず気にする所は禿げているかどうかなのか」

「これでも一応、年齢としては四十代ですからね。で、私の頭がどうしたんですか？ 他の人達も何やらじろじろと見ていますし」

その場に居る全員の視線（気絶しているカモは除く）を向けられ、居心地悪そうにする昴。その言葉に、いつの間にか水球を破壊して捕われていた全員を助け出していたさよが言った。気付けどもされたのか全員が目覚ましており、一部を除いて昴を怯えた目で見ていた。のどかに至っては涙目で、朝倉の後ろに隠れてカタカタと震えている。

「昴さん、髪です。髪」

「髪？ 私の髪がどうかし……」

さよの言葉に疑問を返しながら、昴は自分の前髪を一房摘んで見て、そして固まった。

「……………はい？ え、しろ……………い……………？」

沈黙の後、昴は自分の髪を摘んだまま間抜けな声を出した。

「白いな」

「シラガダナ」

「白いです」

「真白ですねー」

「銀にも見えるでござるが、白、でござるな」

固まったままの昴の髪を見て、口々にそう言う。

月明かりに照らされて浮かび上がった色彩は、昴本来の黒ではなく、寧ろ真逆の白だった。真黒ではなく、真白。色と言う色が完全に抜け落ちた、ものの見事な純白だった。月光に照らされて心なし、青みがかつた銀色にも見える。それは何処か月や星の光を連想させる。それを見て、アスナが言った。

「スバル、銀色」

「な……何故!? 私の髪が、何故突如として銀色に!? どう言う事ですかこれは!？」

「私達を知る訳なからう。気付いてなかったのか? と言うか、黒髪に思い入れでもあるのか?」

混乱し叫ぶ昴に、呆れた様な口調でエヴァンジェリンがそう言った。その言葉に対し、昴はこう返した。

「別段赤毛や金髪を差別するつもりは有りませんが、加齢による白髪を除けば日本人なら黒髪でしょう!！」

「そう言う物か?」

「少なくとも、私にとってはそう言う物です! 絶対に染めないと決めていました!」

それは大層気合いの入った一言だった。

「それなのに……何故え……何故私の髪が銀色にい……」

「……………」

しかしその後には続けられた言葉は絶望に染まっていた。かなりショックだったらしい。黒に拘りでもあるのだろうか。

「上から見て居た限りでは、お前がヘルマンを向こうに引き摺り込む前は黒だったぞ。銀に変わったのはこっちに戻ってからだ。と言うか、鬱陶しいから髪の色が変わった程度で嘆くな。染めればいーだろ」

「それは何かに負けたみたいで嫌なんですよ……………自然の黒だからこそ良かったのに……………」

「でしたら真言で戻せばいいのでは？」

「余り使いたくないんです」

自分の髪が変色した事に嘆く昂に茶々丸はそう提案したが、彼はどんなよりとした雰囲気纏ってそう返した。少なくとも、料理やら何やらの日常生活で時々真言を使っている者の言う事ではないだろう。今さら何言っているんだと言う感じである。

エヴァンジェリンもそう思っていたようで、呆れた表情で昂を見ていた。

「はぁ……………」

「溜息吐く程に嫌なのか……………」

「加齢で少しずつ白くなるなら別に良かったんですけどね、急に白くなったら脱色したみたいではありませんか……………ああ、良いです。エヴァンジェリンの言う事が確かだしたらおそろく真言の影響でこうなったのでしようし、これがこれからの私の普通の状態になるんでしようし……………受け入れるしかありません。しかし今までこの様な事はなかったのに、何故急に……………」

ぶつくさとそう呟き、再度溜息を吐きながら昴はアスナの側に転がっていた自分のアーティファクトを拾い上げ、カードに戻してポーチにしまってからポロポロに壊された舞台を見て言った。

「取り敢えず、この場の修復ですかね。『全ては癒える』」

観客席を含めた舞台全体を見回しそう言って、真言を紡いだ。治療系の力を宿した言の効果はすぐに現れ、吹き飛ばされた客席、罅だらけの舞台を元の綺麗な状態へと戻し、ついでとばかりにネギと小太郎のダメージも癒した。

「え、これ……」

「なんや、痛みがのうなったで」

突然体から消えた痛みにネギと小太郎が驚き、立ってその場で跳ねてみて再び驚いた。ボコボコに殴られていた筈だが、痛みは完全に消えている。

しかし不意にふらりと体が揺れ、揃って尻もちをついた。どうやら、痛みは癒えて消えても疲労は消えなかったらしい。

「すみません、頭に血が昇って感情の制御が出来ませんでした。恐かったですしょう？」

そんな二人を見て、昴は所構わず殺気と怒気を撒き散らした事に対する謝罪の言葉を口にする。その言葉は二人だけに向けられたものではなく、水球に捕われていた者たちにも向けられていた。しかし殆どが裸だった為、彼は彼女等の方を見ておらず、目も閉じている。向けられたのは言葉だけだ。

「あれで頭に血が昇っていたアルか……本気で死を覚悟したアルヨ」

「気絶する直前の記憶が有りませんが、昴さんが怒るととても怖い人だと言う事は理解できました」

「普段怒らない人が怒ると恐いって言うけど……クーフエじゃないけど、マジで死ぬかと思ったわ」

その謝罪に、まだ何処か蒼白い顔色で古菲達はそう返す。だが、どうやら古菲を除いて気絶していた、あるいは眠らされていた面々は気絶する直前に昴がほぼ無差別に撒き散らした殺気の事を覚えていないらしい。

無論、完全に忘れていた訳ではないだろうが、下手に覚えていて日常生活に支障が出る可能性が低くなった事は喜ぶべきだろう。昴の怒りに対し、もしかしたらトラウマの様な物が出来たかもしれないが。

「あ、あの……」

「む？」

その様子を、目を閉じて微笑ましく思っていた昴だが、不意にネギに掛けられた声にその方を向く。しかし念の為にまだその目は閉じられている。

「どうかしましたか、少年」

「あの……ヘルマンさんは、どうなったんですか？」

「ああ、何かと思えば彼の事ですか。滅ぼしましたよ？」

「え……」

世間話でもするかのように気軽に出された「滅ぼした」と言う言葉に沈黙が下りる。

「ほ、滅ぼした……？」

「あのおっさんを、あの短い時間でか!？」

「ええ、滅ぼしました。塵も残さず、魂ごと。もしかしたら魂の残滓が運よく残っているかも知れませんが……残っていたとして、異次元の彼方を彷徨っているでしょうね」

「な、何ですか？ 何も、滅ぼす事無かったんじゃ」

昴の言葉に、ネギは僅かに震えながらもそう言った。

明らかに、やり過ぎと思っている。

「貴方は優しいのですね、そう思うのですから。ふむ……確かに、今にして思えば少々やり過ぎの感が有りますが……」

「だったら」

「しかし少年。貴方は人間の心理と言う物を知らないようですね」

「え？」

「あの悪魔はアスナちゃんを、私の大切な娘を泣かせました。……私にとっては、それだけで殲滅、抹消の対象とするには十分過ぎるのですよ」

その言葉からは、感情の色が一切窺えなかった。酷く冷たい声音に、全員の背筋に寒いモノが奔る。

その雰囲気を感じながら、昴は目を閉じたままネギに背を向け、アスナの元に歩み寄り、抱き上げた。

「あ……」

「もう夜も遅いです。連絡は私の方からしておきますから、皆さん、今日は私の家に泊まると良いでしょう」

「良いのか？ 寮に送る方が良いと思うが」

「街中に人は出ていないとはいえ、流石に全身ずぶ濡れの人をそのまま返す訳には行きませんよ。どう言う訳か、全裸の人もいますしね」

その言葉を聞いて、数人の女子が体の一部に手をやって隠した。目を閉じている昴には見えないが、顔も紅くなっている。特にのどかの顔は他の誰よりも紅かった。ネギが側に居るからだろうか。それに対して目を閉じたまま苦笑を浮かべ、昴は言葉を紡いで空間に歪みを創り出した。

「それは……？」

「私の家に続く空間の歪みです。街中を歩かせる訳にも行きませんから」

この歪みを通るようにと言って、昴は先に古菲達を通らせた。何故かついでにエヴァンジェリンや茶々丸、チャチャゼ口、楓も通ったが、それは気にしない事にした。

そして木乃香と刹那、さよが通って、次は自分とアスナの番と言う時に、ふと何かに気付いた様な声を出した。

「どうしたの？」

「いえ、鏡面世界に忘れ物をしていた事を思い出しまして」

アスナの問いにそう返し、昴は彼女を抱き上げたまま再度真言を紡いだ。

『ありとあらゆる境界を越え、在るべき者の手へと戻れ』

そう言うと同時に、アスナの手首が光り輝いた。また、歪みの向こう側からも驚いた様な声が聞こえる。

そして光が消えた時、彼女の手首にはヘルマンに奪われていたブレスレットが輝いていた。添え付けられた紅いマナクリスタルも、本来の主の元に戻り濁ったものではなく穏やかな澄んだ輝きを放って

いる。

「これ、私の……」

「木乃香ちゃんと刹那さんの元にも戻っている筈です。よもやあの悪魔が無理矢理クリスタルから力を引き出すとは思いませんでしたが……伊達に爵位持ちではないと言う事でしょうか。もう無くしたりしないよう、気をつけてくださいね」

「……うん」

そう言つてアスナは昴に抱き着き、昴もそんなアスナを軽く抱き返してから歪みを通り、緋乃宮邸に戻った。その後、全員が風呂に入り、用意されていた簡素な浴衣を来てから眠りに就いた。

昴はそれを確認し、学園長に一連の出来事を連絡してから眠りに就こうとしてエヴァンジェリンに捕まり、何故か酒に付き合わされた。ちなみにその酒は昴が魔法球内で作成し、酒蔵に秘蔵していた酒だシュタインベルガった。

そしてその日の夜、昴は夢を見た。

63話：創世への夢

賑やかな町中、大勢の人々が行きかい、店が軒を連ねる大通りをその男女は歩いていった。

二人とも、およそ街中には似つかわしくない杖や剣を身に付けており、片割れである少女に至ってはその肩に栗鼠の様な小動物を乗せている。さらに金髪や銀髪と言うのもあって、目立つ。

その為かどうかは分からないが、住民達からは少々物珍しげな目で見られたりしているのだが、二人は気にせず道歩いていった。

『やけに賑やかですね、お祭りでもあるのでしょうか？』

『賑やかだからと言って祭りが有る訳では無かるう。確かにその様な賑やかさではあるが、何処か違う感じもしないでもない。だがそのような事よりもまず水と食料だ。そろそろ切れるからな、補充しておかねばならん。切れる前に街に辿り着けたのは幸いだっただな』

『……………お師匠様、もう少し周りに関心を持ちましょうよお』

そっけなく返された銀の髪の男の言葉に金の髪の少女は溜息を吐く。しかしそれでも男の反応はそっけなかった。

『私が気に掛けるのはお前だけで十分すぎる。そんなに気になるならそこらを歩いている奴にでも聞けばよかるう。しかし聞くなら一人で聞け、私は食料と水を買う』

そう言って銀髪の男は店の一つに向かい、店主だろ浅黒い肌の男と話し始めた。先程言っていたように、水や食料を買う為だろう。それなりに金銭や、物々交換する為の資材は持っているようだ。

「ハア……」

そんな男の言葉に若干頬を赤く染めつつも少女は溜息を吐き、肩に乗せた栗鼠に頬を舐められながら、彼女も師匠である男の後を追って店に向かった。

男が店主に、それなりに大きい袋を差し出して言う。

「食料と水をこの袋に詰められるだけ貰いたい。食料は長持ちする物、保存がきく物を頼む。それと宿が在るなら、その場所を教えてください」

「あいよ、この袋の大きさだったら銀貨4枚と銅貨7枚だね。宿だつたらこの道を真直ぐ行つたつきあたりには在るよ。あんた、旅人かい？」

「ああ。6、7年前から連れと旅をしている」

「砂漠越えは大変だつたらう、ゆっくりしていくと良いよ」

「体を十分に休めたらすぐに旅を再開するが、それまではな」

店主と話しながら宿の場所を聞き、男は懐から革袋を取り出してそれの中から料金分の銀貨と銅貨を出して店主に渡した。それを確認し、出された袋に保存のきく食料を詰める。そして男の側にやって来た少女を見て言った。

「この人が連れかい？別嬪さんだねえ、アンタの連れ合いかい？」

「ああ、連れと言えばそうだ。しかし……」

「つつ、連れ合い！？ 私がですか！？」

「違うのかい？ お似合いだけ」

「お似合い……私とお師匠様が……連れ合い……」

袋に食料などを詰めながら言われた店主の言葉に少女は顔を真っ赤

に染め、ポーツとした様子でぶつぶつと何かを言い始めた。取り敢えず、言つては何だが不気味である。そんな少女を見て店主は若干引きながらも笑みを深くする。初々しいと思つてゐるのだろう。

『店主よ、連れ合いではなく弟子だ。物覚えが良く教え甲斐もあるが、ここぞと言つ時にダメになる不肖の馬鹿弟子でな。共に旅を続けているが、間違つても妻ではないぞ』
『……………』

しかしそれを男がバツサリと否定した。それを聞いて心なしか、少女の気分が沈んだ気がする。

『む、どうした？ いきなり暗くなつて』
『何でも有りません！ ……………お師匠様のバカ』
『誰がバカだ、聞こえてゐるぞ馬鹿弟子。その様な事を言うのはこの口か？ ん？』

聞こえない様になりに小声で言つた少女の言葉に反応して、男は少女の両頬を摘んで引つ張つた。地獄耳である。むにー、と引つ張られた少女の頬が伸びる。あまり加減せずにしてゐるのだろう。実に痛そうだ。

『いふあいふあい！ いふあいえふ、ほっひよーはふあー！』
訳：いたいたい！ いたいです、お師匠様ー！
『何を言つてゐるかまるで分らん。きちんと分かるように喋れ、たわけ』

『ふあつはあはひゃひへふふあはひ〜！』（訳：だったら離してください〜！）
『だが断る。仕置きだからな、さらに伸ばしてくれるわ』

『ふみやああああー!!』

事実、かなり痛いらしい。少女はまるで猫の様な悲鳴を上げつつ男の手に自分の手を掛け、頬から外そうとするが、一向に外れる感じがしない。

ジタバタと店先で暴れる少女と、頬を伸ばしながらもそれを抑える男。取り敢えず、他の人の迷惑になるのでやめた方が良かったらう。道行く人々も、何事かと目を向けている。

しかしそんな二人を見て店主が楽しそうに、そして微笑ましげに笑う。

『仲良いんだねえ、お二人さん。でも、本当にもつたいないねえ、こんな別嬪さんなのに。俺だったら絶対に放っておかないけどなあ』

『見目麗しいと言うのは私も認めるが、それで連れ合いになるかどうかは別問題と言う事だ。まあそれ以前に、弟子に欲情する程浅ましくないのな、私は』

『あうう、痛いです……と言うか酷いです。そんなハッキリ言わなくても……』

『何か言ったか?』

『何でも有りません』

からからと笑う店主にそう言って男は少女の頬から手を離れた。

当たり前だが、少女の頬は赤くなっている。それを摩る少女の目はやはりと言うか、涙目だ。余程に痛かったらしい。

心配してか、肩に乗っている栗鼠がその頬を舐める。

『うう、酷いですお師匠様。何もあんなに伸ばさなくても……イタタ、やめて、舐めないで。まだヒリヒリするの』

『師をバカ呼ばわりするからだ、たわけめ。それよりも、丁度いいではないか。ほれ、お前が気になっている事を店主に聞いてみる』

『ん？ 何か聞きたいのかい？』

男の言葉に店主が少女の方を見る。

文句を言おうとした所で話題を変えられ、少女は恨めしげな眼差しで男を見るが、そんなものど吹く風と言う様な感じである。

少女はそれに、内心で文句を言いながらも無駄と分かっているので男から目を外し、気になっている事を店主に聞いた。

『この街、随分と賑やかな気がするんですけど、お祭りでもあるんですか？』

『ああ、その事が。あるって言うか、あったって言うべきだね』

『あった？』

『ああ。二日前にこの街の長の娘さんが結婚してね、それを街総出で祝ったんだよ。あんたが感じてる賑やかさは、その名残だろうね』

『へえ……』

店主の言葉にそう漏らし、少女は店の周りを見る。

子供達が楽しそうに走り回り、酒場だろう店ではまだ昼間だと言うのに酒を飲んでいる人が居た。皆が皆、明るく朗らかな雰囲気をしている。良い結婚だったのだろう。

自分に色目の様な物を向けている人間も居たが、それはスルーした。

『つと、待たせたね。食料は詰め込み終わったよ』

『水はどうした？ 私は水も頼んだ筈だが』

『体が休まるまで街に居るんだろ？ 街を出る時にウチに来たら、その時に渡すよ』

『本当だろうな？』

『ウチはこれで30年以上おまんま食ってた。嘘なんて吐きやしないよ』

男の言葉に笑いながらそう返し、店主は食料を詰めた袋を男に渡した。それを確認し、店主に礼を言ってから二人は店を出て宿に向かおうとした。

しかし出ようとした途端、道の向こうから喧騒が聞こえた。

『？ 何でしょうか？』

『知らん。が、何やら妙な感じだな』

突然聞こえて来た喧騒と、それによつて変わった雰囲気二人は怪訝そうな顔をする。

耳に届くのは罵声や悲鳴と言った、およそ賑やかな雰囲気とは合わない類のものだ。よくよく耳を澄ませば、「死ね！」だの「この悪魔！」だの、物騒極まる言葉と、呻くようなくぐもつた声が聞こえる。

耳に届くその言葉に眉をひそめ、何が有るのか確認する為に二人ともその喧噪の方に行こうとするが、店主に止められた。

『やめときな。あの悪魔に関わつたら呪われるよ』

『呪われる？ それに悪魔とは……穏やかではないな』

『そういやあんた達は旅してたんだっただね。……半年くらい前に急に街に現れた奴でね。最初の内は別に何とも無かつただけど、一週間くらい経つた頃から街中で妙な事が起こり始めたんだよ』

『妙な事？』

『ああ、突然道に大きな亀裂が出来たり、厩が炎上したり、季節じやないのに嵐が来たり……歩いてた人が突然倒れてそのまま亡くなつた事も有るよ。元気な人だつただけどねえ』

ウチの前でも二人死んだよ。

顔を顰め、思い出すのも嫌そうに店主がそう言う。そして喧騒の方

に顔を向け、つられて二人もそちらに顔を向け……人の群の間から見た物に男が目を細め、少女がハッと息を呑んだ。

人垣の間から見たのは、一体どれほどの間着ていたのかと言う程汚れ、ボロボロになった衣服と、それから出ている骨と皮だけと言わんばかりに痩せこけ、薄汚れた腕。

元は美しかったであろう髪はぼさぼさに伸ばされ血や埃に汚れ、満足な手入れもされずにいたのだろう、かなり痛んでいる事が分かる。碌に食事もとっていないのだろう、頬はこけ、血や埃、垢に汚れた顔は病的なまでに蒼白い。唇は罅割れ、水すら飲んでいるかあやしい。

余りにも汚れ、ボロボロの格好の為そうは見えないが、年齢は少女よりもやや上と言ったところか、時折聞こえる呻き声から性別は男性と判断できる。

大小様々な石を投げつけられ、長い木の棒で身体中を叩かれて、頭を抱えて蹲ってそれに耐えており、腕と髪の間からチラリと見えたその瞳は、黄金に輝いていた。

それを認識した瞬間、かなりの魔力を感じた。

『あの目……！』

『不気味だろう？ あんな目の奴は生まれてこの方初めて見たよ。』

おまけに時々訳の分からない事も言うし、悪魔に違いねえよ。あんな等も、関わらない方が身のためだよ』

そう言つて店主は腕をさすりながら店の奥に戻って行った。

その間にも彼は民衆に痛めつけられ、血を流し、吐きながら蹲つて耐えている。そんな彼を、民衆は汚いものを見る様な目で見て攻撃していた。

『……』

少女の連星の瞳に怒りが灯り、痛めつけられている男性の所に走りだそうとし

『ならん』

しかし、男に止められた。
どうも真言を使ったようで、首以外がまるで金縛りにあつたかのようになり固まり、動けない。

『お師匠様……っ！ 縛りを解いてくださいっ！ あの人は、あの人は私と同じなんですよ！？』
『ならん。既に手遅れだ』

そう言つて男が少女から視線を外し、民衆の方を見る。
おそらく気絶したのだらう男性を、民衆全員が直接手に触れない様に棒等を使つて荷車に乗せ、まるで荷物でも運ぶかのような扱いで街の外に連れて行つていた。そして門を通り、少し行つた所で荷車を傾けて乱雑に男性を落した。グシャツと、肉が潰れる鈍い音が聞こえた。
それを見ても民衆は何も思う所は無様で、嫌な顔を向け、運んだ人間に至つては唾すら吐きかけて街に戻つて行つた。

『っ！』

直後、真言の縛りを解かれ、しかし今度は別の真言を掛けられた少

女が門の向こう側へと走る。足を魔力で強化しているのだろう、その速度は馬と同レベルか、それ以上に早い。

しかしそんな速度を出していながら、少女は街人に反応を向けられなかった。男に掛けられた真言の効力か、どうも認識出来ていない様である。

それを見ながら男も、食料を詰められた革袋を持って、ゆっくりとした足取りで少女を追った。

門の外で少女はしゃがみ込み、襜褕雑巾の様に転がされている男性の側に居た。

痩せこけ、血だらけになった男性の腕を持って俯いている。その雰囲気はとても暗い。

転がされた男性の体には多くの痣と傷痕が有り、その他にも骨折の為か、体の所々が腫れ上がっていた。

顔も腫れ、痣だらけで血を流している。呼吸音は聞こえず、脈も無い。死んでいた。

『……………どうして、こんな事が出来るの……………？』

少女がぼつりと、そう呟いた。その声は震え、俯いた顔からはぼたりぼたりと輝く雫が死体の顔に零れ落ちている。

『同じ人間なのに……………少し人と違う力を持つて言うだけで、どうしてこんな酷い事が……………？』

『人間だからだ』

噁り泣きながら死んだ男の頭を抱き締め、そう言う少女に師である男はそう言った。

『人間、だから……………？』

『そう、人間だからだ。人は自分と違う物に憧れを抱く癖に、いざそれを目の前にすれば忌避する傾向を持つ、難儀な生き物だ。その男も、周囲に影響を持つ程の魔力を生まれ持たなければ、あるいはその魔力を制御出来ていれば、ここで死ぬ事も無かつたろうに……何度見ても、人が死ぬ事は慣れんな』

『どうして、忌避するの……？』

『恐ろしいのだろう。自分達と違う、強すぎる力を持つ存在が。その力を自分達に向けるのではないか、気が気ではないのだろう。だからこそ、忌避し、痛めつけ、領域から排除しようとする』

そう言いながら男は少女の腰から鞘ごと剣を引き抜き、男性の死体にその切っ先を向けた。

少女が息を呑み、非難の視線をぶつけてくる。しかし男は目を閉じ、何かをぶつぶつと唱え始めた。途端に周囲に結界が張られ、光の粒子が舞い、剣と遺体を澄んだ緑の光が包み込む。

『優しき腕かいなに抱かれ、せめて安らかに眠れ、名も知らぬ同胞はらからよ』

男がそう言った瞬間、光が一瞬だけ強く輝き、男の遺体と共に虚空に消えて行った。

『……………さようなら、名前を知るところか、言葉を交わす事さえも出来なかった、私の同胞』

『……………』

散って行く光を見て、少女が腕を虚空に伸ばしながらそう言った。はらはらと、目からは涙が止め処なく流れている。

男もその様子を見て、何処か哀しげな雰囲気を感じながら剣を鞘に収め、街の方を向き、歩き出した。

『…………お師匠様』

しかし五歩ほど歩いた所で、少女に呼び止められた。足を止め、振り返る。少女は未だに涙を流しながら、しかし何かを決意した表情で男に言った。

『魔法で、世界を創る事は可能ですか？』

『……………予想はつくが、一応聞いておこうか。何の為に世界を創ろうと言う？』

少女の問いに、男が感情の色を消した、底冷えする様な声で聞く。しかし少女は怯える様子も見せず、寧ろその返答で世界を創る事が出来ると確信したのだろう。師である男に理由を述べた。

『未だ見えぬ同胞と、これから生まれて来るその子供達が迫害される事無く、笑って暮らせる世界を創りたいからです。それが無理だとしても、せめて普通の人間と同じ様に暮らせる世界を同胞の為に創りたい。だから…………』

私に創世魔法を教えてください。

涙に濡れた目で男を真直ぐ見て、震える声で少女はそう言った。

ヘルマンがネギ達を襲撃し、昴の逆鱗に触れて世界から消滅されたその翌日。

エヴァンジェリンの酒に付き合わされ、2時過ぎに眠った昴はしかし、いつもと同じ午前4時に目を覚ました。

「また夢ですか……一体何の（ズキリ）、ぐ……………」

寝不足か、それとも先日の酒によるものか、はたまたその両方が原因か、鈍い痛みが奔る頭を抑え、顔を顰めながら布団から出る。そしていつもの彼からは考えられない、亀の様な緩慢な動きで立ち上がり、意識をハッキリさせる為に洗面所に向かった。フラフラと覚束ない足取りで、時々柱や角に頭をぶつけながら廊下を進み、辿り着いた洗面所で水を出し、顔を洗った。

「ふう……………ハア……………」

顔を洗い、若干スッキリした顔で鏡を見て深い溜息を吐く。

鏡には当然ながら自分の姿が映っていた。ただし夜の闇の様に黒かった髪は一転して漂白でもしたかの様に白くなり、ルビーの様に紅かった瞳はほんの僅かだが虹色がかった緋色になっている。パツと見ではよく分からないが、注意して見ればすぐに分かるだろう。

「出来ればこの髪も夢だったら良かったのですがね……………見事に真白ですか……………」

そう言って再び深い溜息を一つ。昨日までは黒だった髪が一日で真白になっているのを見られれば、脱色でもしたのかと思われるだろう。どうやって誤魔化そうかと考える。

しかしそんな事しても意味無いと思つたのか頭を振ってその考えを捨て去り、部屋に戻っていつもと同じ様な黒い服に着替え、台所に行つて朝食の準備にかかる。

まず米を洗い、釜に入れて火に掛けた後、冷蔵庫の中から鮭の切り身と卵、わかめ、豆腐、ネギ、味噌を取り出し、鮭の切り身に塩を振りかけ、卵を割つて出汁等と共に掻き混ぜ、具材を切っていく。かなり手慣れているようだ。作る物は鮭の塩焼きと出汁巻き卵、味噌汁と言つた典型的な日本の朝食メニューだ。

「そう言えば、昨日はアスナちゃん達の他に少年達も泊まつたのでしたか」

鮭を焼いている時に、ふと思ひ出したようにそう口にする。

昨晚家に泊めたのは、土日には大抵戻つて来るアスナと時々彼女について来る木乃香と刹那、ほぼ居候状態にあるさよ、ヘルマン達に捕まっていた朝倉、のどか、夕映、古菲、千鶴と、戦いを挑んだネギと小太郎。あと何故か付いて来たエヴァンジェリンとチャチャゼ口、茶々丸、楓の総勢15名。ほぼ3 A メンバーの半数だ。

しかし現在作っている食事は自分を除いてもアスナ、木乃香、刹那、

さよの四人分だけ。チャチャゼロと茶々丸は食べる必要はないだろう（チャチャゼロは酒を飲めるので食べる事も出来るかもしれない）が、流石に泊めた人間に食事を出さない訳にもいくまい。そう思い、焼き終わった鮭を皿に乗せて冷蔵庫の中を見て食材を確認する。

「ひの、ふの、み……………一応、人数分は有る様ですが……………」

足りるかどうかは不明……………いや、おそらく足りないだろう。全員育ち盛りであり、意外と大食いと言われている楓と古菲も居るのだ。さらに茶々丸や木乃香の情報では、最近ではネギも多く食べる様になつて来ている。

エヴァンジェリンや朝倉達は良く分からないが、おそらく出さなければ文句を言つて来るだろう。

昨晚寝る前に千鶴に聞いた情報では小太郎もかなり食べるらしい。

「そう言う事を考えると、絶対に足りませんよね……………仕方ありませんか」

そう言つて昴は腕まくりし、アスナ達と同じメニューを作り上げた。ものの10分で作り終え、料理が冷めない様に時間を止め、今度はポーチから魔法球内で採取した食材を幾つか取り出し、再び調理を始めた。

今度はサラダやスープと言つた、余り重く無くない洋食を作り上げて行く。先程作つた日本食に合う様に作られた物だ。

それらも一時間ほどで作り終え、その後ついでに弁当も鼻歌交じりに作つて包んだ。完全に主夫である。

そして作つたそれらを元々あつたテーブルの他に、大きめのテーブルを一つ出してその上に並べて行く。

同時に、誰かが起きて来る気配を感じ　振り向こうとした所で背中に軽い衝撃が来た。それと同時に腹部に腕が回される。抱き着かれたようだ。自分にこんな事をするのは昴の知る中でたった一人しか居ない。どうやら最初に起きたのは彼女の様だ。

「あの、アスナちゃん？　いきなり背中に抱き着かれると、驚きはしませんけど私としては非常に行動し辛いのですが……」
「んー……」

溜息交じりにそう注意するが、アスナは背中に抱き着きじつとしている。どうも顔を擦り付けているようで、背中の一部に妙な感覚が有る。

体勢を変えず、首だけ動かして背中を見ると実際に顔を擦り付けていた。目も細めていて、実にネコっぽい。

2分ほどそうして満足したのか、離れて朝の挨拶をする。

「おはよ、スバル」

「はい、お早うございます。ですが、いきなり抱き着いて来るのはやめて欲しいのですが」

「ヤ」

「………なんでしょう、いつかも同じ様に一言と言っか、一文字で断られた覚えが有るのですが……」

何年前でしたっけ。そう言って昴は再び溜息を吐く。取り敢えず、溜息を吐き過ぎである。

「まあいいですか。他の方々はまだ寝ているのでしょうか？」

「ん、もうすぐ木乃香は起きると思うけど」

「ふむ……では皆さんを起こして来てください。今日が休日なら自然に起きるまで待っても良かったのですが、学校が有りますからね

朝食は用意してありますが、遅刻させる訳にはいきませんし」
「わかった」

そう返し、アスナは離れの方に向かって行った。途中で木乃香、千鶴の二人とも出会い、三人でまだ寝ている者達を起こしに行った。そして寝惚け眼でやって来た全員（一人目が細いので判別しにくい）に用意していた朝食を提供し、朝食が終わった後に弁当を持たせて寮に続く歪みを作り、小太郎を除いた全員を寮に戻らせ千鶴の記憶から空間転移の事を削除した。

そして小太郎を学園長達の所に連れて行き、昨晚の事で少々話してから自分の店に行き、いつもと同じ様に店を開けた。

なお、髪の色が変わっていた事を客に驚かれたのは言うまでもない。

64話：学園祭への準備

麻帆良学園都市。

日本は関東に存在する西洋魔法使い達が教師を務めながら一般市民と共存している一大学園都市であり、世界樹と通称される巨大な樹と、魔法世界と旧世界を繋ぐ『^{ゲート}門』を所有している、旧世界における魔法使い達の活動拠点の一つでもある。

その学園を治める長、学生達には「妖怪ぬらりひょん」あるいは「元始天尊」もしくは「洋梨頭」または「茄子」とも呼ばれ、学園中央に存在する世界樹や図書館島と並んで、その頭の長さや形が麻帆良学園七不思議の一つにも数えられていたりする学園長こと近衛近右衛門は、己が仕事場である学園長室で今日も今日とて大量の書類を捌きながら、ある人物と電話をしていた。部屋の中央には一人の少年が立っており、彼は日光を反射して光沢を放つ仕事机を挟んで学園長を見ていた。

「……………そう言う訳なんじゃが、どうかのお？ 本人も反省してる様じゃし」

『そうですね、一緒に居た方が何かとやりやすいでしょうし……………分かりました。犬上小太郎の反省室からの脱走の件は不問としましょう。その代わり』

「分かっておるよ。それではの」

そう言って学園長は電話を切り、机を挟んで前に立っている少年

犬上小太郎に向き直った。

「さて、聞いておったじゃろうが、4日前の悪魔襲撃事件に対処し

てくれた事で、君の脱走の件は不問となった。良かったのう」

「お、おう……」

朗らかにそう言った近右衛門に対し、小太郎はがちがちに緊張した様子でそう返した。京都で詠春を「おっさん」と呼んでいた彼だが、この老人に面と向かって「爺さん」とは言えないようだ。

「ほっほ、そんなに緊張せんでもよいじゃろ。でじゃ、君にはこちらの学校に通って貰う事になるが……」

「学校……俺、仕事の方がええんやけど。用心棒とかそう言うの」「義務教育と言う物が有るのは知っておるか？ 流石にまだ10歳の子供を働かせる訳には行かんよ」

「ネギは？ アイツ、教師って聞いたんやけど」

「彼の場合は魔法使いの修行も有るが、大学卒業レベルの学力は有るからの。こう言うては何じゃが、君にそれほどの学力が有る様には思えんし」

そう言うと小太郎は何処か不満そうな表情を向けて来たが、学園長は気にした様子を見せず、何処か胡散臭そうに笑っているだけだった。

「必要な書類は作っておくから、暫くはこの街を楽しむと良いじゃろ。もうすぐ学園祭じゃし、本格的に学校に行く事になるのは学園祭が終わってからじゃな」

そう言って学園長はしずなを呼び、小太郎を連れて下がらせた。しかし二人が出て行って10分後。

「……あ、保護責任者の事伝えるの忘れとった」

その言葉は誰に聞こえるでもなく、部屋に溶けて行った。

登校する多くの生徒達の喧騒が道を埋め尽くす中、別世界の様に静かなホテルブクロに居る昴は自分用に淹れたコーヒーを飲みながら、走り行く人影を眺めていた。

店内には店主である彼の他に、数人の人影が有る。そして当然の様に、その中にはエヴァンジェリンの姿も有った。相変わらずサボっている様である。

「何と云うか、この時期になるといつにも増して騒がしくなりますね……」

「あと15日で学園祭ですからね。ウチの学生達はバイタリテイ有りますし……少々有り過ぎな感じはしますが」

「毎年毎年、よくもまあ飽きずに騒げるものだな」

昴の言葉に、珍しくやって来てトーストと紅茶を頼んで食べていた明石教授がそう返し、それにエヴァンジェリンが窓から外を見ながら呆れたように言う。

かぶり物やコスプレでもしているのだろう。怪獣やぬいぐるみの様な外見の何かや、鎧武者の格好をした生徒達が制服姿の生徒に交じって走っている。重く無いのだろうか。

「学園祭ですか………店を構える身としては、客が増える事を喜ぶべきなのでしょうが、しかし………」

「あまり嬉しくなさそうですね」

「毎年この時期になると過労で死にそうになりますからね。去年など、忙しすぎて危うく川を渡りきる所でしたよ」

溜息交じりにそう言った昴に、明石教授は引き攣った様な笑みを浮かべた。

喫茶ホタルブクロは料理の種類と安さと美味しさ、店の雰囲気、帆良の中でも人気の店で、普段から来客数は多く、土日や祝祭日にはそれに増して大勢の客が来る。

特に学祭期間ではそれが顕著になり、連日大勢のデート客が朝から閉店時間ギリギリまでやって来るのだ。その来客数は一日平均で500人を軽く超える。カウンター席の数が10、4人掛けのテーブル席が5と言うあまり大きく無い店でこれはかなりきついだろう。さらに学祭期間中限定で、昴が趣味で作り上げた銀細工並びに金細工を売るアクセサリーショップ「ギャラルホルン」も開店する。この店も売っている物の質に比べて値段が安い為若い人達に人気である。

幸いと言うべきか、学祭準備期間中では超包子の方に多くの客が行く為に割とのんびりできるのだが、それを過ぎれば、休み時間など無いと言っても良い程に忙しい地獄の様な三日間となる。

去年など、あまりの忙しさに疲労が過ぎて、三日目終了と同時に倒れ伏してしまっただけだ。ヘルプとして魔法球の中から出て来させて、人間に擬態させて手伝わせた精霊達も全員が疲労で四日間まともに動けなくなったほどである。その忙しさたるや、推して知るべし。

「幸いと言いますか、その忙しさの為に学祭中の見回りを免除されているのは良いのですが……」

「その事なんです昴さん、学園長が「今年は出来るなら手伝って欲しい」との事です」

去年の事を思い出してか、遠い目で何処かを見ながらそう言った昴に明石教授は非情なる一言を放った。

それを聞いて昴がビシリと音を立てて固まり、紅茶を飲んでいたエヴァンジェリンも動きを止めて明石教授の方を見た。学祭期間中の昴の忙しさ（休み時間ほぼ零の調理・接客業）は彼女も知っている為、信じられない物を見る様な目になっている。

「冗談、ですよね？」

「わ、私もそう思って学園長に聞いたんですが……残念ながら、冗談ではないんです」

「ドウイウコトデスカ？」

錆ついた歯車の様にギギギと軋む様な音を立て、虚ろな目でプレッシャーを放ちながら、カタコトになった言葉で明石にそう問う昴。その声色からは疑問の他に、これ以上さらに忙しくなるのかと言う絶望の感情が窺えた。かなり不気味である。明石の背筋に冷や汗が流れる。

「せ、世界樹伝説は知ってますよね？」

「これでも喫茶店の店主ですからね、店に来る女子学生達から噂話とかそう言うのは良く聞きますよ。学際最終日に、発光している世界樹の下で好意を持つ人に告白すれば必ず成功し、結ばれると言う都市伝説的なあれでしょう。私はやった事有りませんが、どこぞの恋愛ゲームにも似た様な物が有りましたね。一応知っていますが、それがどう関係しているのです？」

客の噂話などを聞くのに喫茶店の店主は便利な職業である。割とすんなり親しまれ、気軽に話しかけられたりするのだから。

おそらく昴はその噂を聞いて世界樹伝説を知ったのだろう。それが学祭期間中の見回りとどう関係しているのかは分からないが。

「告白の他にキスでも良いみたいですが、22年周期で実現するらしいです。お金が欲しいとか、世界征服したいとかの即物的な物は叶わないんですが、こと告白に限って成就の確率は120%とか……以前起こったのは21年前です」

「21年前でしたら、次にそれが起こるのは来年ではありませんか。来年にするのも嫌ですが、別に今年参加しなくても……」

「それが、異常気象の影響で一年ほど早くなってしまったみたいなんです。つまり、今年にその現象が起こります」

世界樹を見てください。

そう明石に言われ、昴は店の外に出て世界樹の方を向く。走り行く生徒達の喧騒が激しいが、じっと見つめる。

何の変哲もない巨大な樹がそびえ立っている。

「どうもありませんが」

「目に魔力を集中して見てください」

そう言われ、昴は目に魔力を集中して見ようとし、しかしすぐに魔力切れを起こして倒れそうになった為慌てて目に集中する物を気に変えて世界樹を見た。

明るい為に分かり辛いですが、ぼんやりと発光している様に見える。

「ぼんやりとですが、光っているでしょう?」

「そうですね、例年なら最終日にのみ光る筈ですが……側に寄る事はしない方が良さそうですね、魔力酔いしそうです」

明石の言葉に的外れな返答を返す。

どうでもいいがこの男、本気で魔力が無さ過ぎである。

「まあ、学園長も出来ればと言っていたので、時間が開いたらいいと思いますけど」

「無理を言わないで下さい。毎年死ぬほど忙しいのですから」

そう言っつて明石は最後のトーストを口に放り、紅茶を飲んで席を立った。

「御馳走様、美味しかったですよ」

「御粗末さまです。学園長には「過労死させる気か」と伝えておいてください」

昴の伝言に苦笑を漏らし、代金を渡して明石は店から出て彼が担当する大学部へと向かって行った。

エヴァンジェリンも、彼が出て行って少ししてから紅茶を飲み終え、のんびりと学校に登校していった。

それを見送り、昴は世界樹を見てぼつりと呟く。

「世界樹伝説、ですか……………」

気を目に集中し、発光する世界樹を見る。

ぼんやりと、柔らかに光るそれは夜になれば随分神秘的に映るだろう。明石が言った様に魔力もかなり高まっているようで、樹から2km近く離れている現在地からも穏やかで力強いそれを感じる事が出来る。

しかし、それに混じって何時か、何処かで感じた様な波動も感じた。特徴的なその波動は、20年前に共に戦った少年と、相対した相手を思い出させ

「……………まさか、ね」

その想像を振り払って、昴は店に戻っていった。

学祭まであと15日となり、騒々しさが普段の倍以上に跳ね上がった校舎の中で、群を抜いて騒がしい教室が有った。ご存知、3 Aの教室である。

教師であるネギが職員会議に出ている間に学祭での出し物を話し合った事で3 Aの出し物はメイドカフェに決まり(普通の喫茶店ではダメなのかとのアスナの問いは面白みがないとの事で却下された)、あやかによつて用意された衣装を着て練習していた。楽しんでいられる様に見えるのは間違いではあるまい。

そして会議が終わり、やって来たネギを相手に再度練習を始めたのだが

「ネギくん、私もこのカクテル飲んでいーかなー？」

「え？ あの……はあ……」

「よっ、社長太っ腹！」

接待と化していた。

カクテルと言つても未成年の為流石にノンアルコールの様だが、立場や地位的に目上の物にそれを奢らせようとしている。一体何処からその様な知識を仕入れてくるのだろうか、この少女達は。

しかも一人の客に大勢で接するのが余計に接待を連想させる。

ネギの肩に居る力モが鼻息を荒くしている。どう思っているのか容易に想像できる。

「あ、あの……これって一体、どーゆー……?」
「やだなあネギ君、これがオ・ト・ナの世界だよ?」

ネギの問いに、メイド服を着た柿崎が答える。その言葉は、何故か妙にイヤらしく感じた。

目の前に展開するその光景に、アスナを始めとした数人が目を丸くして固まる。

「お会計は7800円になります」

「えええええっ!?!」

「ちょ、待ちなさい!?!」

「一体なんのお店なんですのー!?!」

そして桜子が言った代金に驚愕する。ぼったくりである。

アスナとあやかが問うが、取り敢えず、喫茶店ではなくなっているのは確かだろう。

「まだまだ衣装は用意してあるよーっ!」

そう言っ出て来たのは、古菲、裕奈、まき絵、アキラ、超、ハカセの6人だった。それぞれ中華風の衣装や大正風の衣装に着変えている。元々整った容姿をしているので、実によく似合っている。

………一人、明らかに食事処に関係ない服装をした少女が居たが、何も言わないでいるのが優しさと言う物だろう。

しかしメイドカフェだった筈が、もはやメイドの「メ」の字も無い。

「12000円になります」

「ひいっ!?!」

見ただけでこの代金。既にぼったくりとか、そう言う物すら外れて

いた。

「ちょっと、全然趣旨が違ってるじゃないのよ!」

「えー、だって色んな服着たいし、お金も儲かってネギ君も大人の世界の厳しさを学べて一石三鳥……………」

「こんなイロモノ喫茶をやるなんて私嫌よ!？」

アスナがそう叫ぶ。まったくである。

「でも、なーんか今イチ、グツと来ないなー？」

「そだねー。もつとこう、客を引ける何かを……………」

そう言つて朝倉と裕奈は、今度は龍宮、鳴滝姉妹、刹那、亜子、美空を着変えさせた。それぞれ巫女、シスター、水着、赤ずきん的な服、ナース服と言つた、イロモノとしか言えない服である。

もはや喫茶店の「き」の字すら無かつた。

しかし、その後もホームルーム時間が終了しても騒ぎ続け

「朝っぱらから何をやっとするかーっ!」

「ひいっ!？」

「新田先生、私達は真剣に学園祭での出し物についての討論を……………」

「もうホームルームは終わっとする!」 全員、正座!」

新田先生の怒号が響き渡った。

65話：超包子

3 Aが学園祭の出し物決めて大騒ぎし、その騒ぎを聞き付けた新田先生に説教された（その際にメイドカフェは禁止となった）数日後の早朝。

5時半と、まだ学校に行くには早い時間帯にアスナ達はネギを連れ、外を歩いていった。

「今日も良い天気ね」

「せやなー、毎日こんな天気やったらええんやけどなー」

朝の澄んだ空気の中、背筋を伸ばしながら歩いているアスナと木乃香がそう言う。側を歩いている刹那も、朝の柔らかな日差しを浴びて気持ち良さそうに目を細めて歩いている。

「そうですねー。でもどうしたんですか？ こんな早い時間に、朝御飯も食わずに部屋を出て……」

「ねみーし、腹減ったぜー？」

そんな三人に、眠っていた所を起こされて連れ出されたネギとカモが問う。ネギの目は完全に覚めている様だが、カモは寝足りないのかまだ眠そうだ。大口を開けて欠伸をしている。小動物の癖に、まるで可愛らしく無い。実にオヤジ臭い欠伸だ。

「学祭準備期間の名物が有るのよ。この時期は大体そこで朝を食べるわね」

「名物？」

「ここやここ」

そう言つて木乃香が指し示した場所には、電車の様な特徴的な形をした屋台が有つた。周辺に在るテーブルには生徒や教師を問わず多くの客が居り、その間を茶々丸や古菲が注文を取りながら走り回つて料理を届けている。

中央に在る屋台本体には超やハカセ、四葉五月が居り料理を作りながら客と談笑していた。繁盛している様である。

「あの、あの屋台つて路面電車じゃありませんでしたっけ？ 朝お客さんに乗せて走つてるのを何度か見た事有りますけど」

「チャオさん達がやつてる屋台でもあるのよ。あんたもあいつ等の作る点心が美味しいの知つてるでしょ？」

「ウチらもファンやから、学祭ん時はいつもより早う起きて朝食へに来るんよ」

「へー……」

そう言いつて適当に空いているテーブルに着き、メニューを開いて注文する物を見ているとネギの前に器が一つ差し出された。中には黄金色の液体が注がれており、湯気と共に美味しそうな香りを漂わせている。スープの様だ。

何かと思ひ差し出された先を見ると、屋台で料理を作っていた四葉五月が微笑みながら立っていた。

「あ、四葉さん」

どうぞ、サービスの特性スタミナスープです。……元気、出ますよ。

「あ、どうも。ありがとうございます」

「あ、えーなー、ネギ君だけ」

静かな、しかし何処か印象に残る特徴的な声と喋り方でそう言った彼女はスープの注がれた器をテーブルに置いた。黄金色のスープが静かに波打ち、湯気と共に匂いを立ち昇らせる。美味しそうなその匂いを嗅いで、ネギのお腹がグウと鳴った。それを聞いて五月は笑みを僅かに深め、ネギの顔が赤く染まった。

修行、頑張ってるみたいですね。

「え、何でその事を？」

くーさんに聞きました。毎日朝晩、欠かさずにやってるって。

ネギの疑問にそう答えて、五月は少し振り向いた。視線の先には、客とテーブルの間をすいすいと滑る様に移動して料理を運び、注文を取っている古菲が居た。客がどんどんやって来る中クルクルと動き回って、実に忙しそうである。

ですけど、あまり無理はしちゃダメです。疲労が溜まって、体を壊しやすくなりますから。

「はあ……」

人間誰でも体が資本ですから。健康第一です。

「はあ。あの、どうして僕にサービスを？」

最近元気がない様に見えたので。前と比べて疲れている様に

も見えましたし……。

どうやら彼女は、ネギが普段よりも疲れていると思ってスープを出したらしい。

午前はともかく、放課後は魔法球の中で休みながらやっており、体力も付いて来たのかそこまで疲労が溜まっていると言う訳ではない（ヘルマン襲撃後、エヴァンジェリンの修行はさらに厳しくなった）のだが。

しかし自分の生徒が自分の為に作ってくれた物を無碍には出来ないので、ネギは礼を言ってスープを飲み始めた。

「ありがとうございます、四葉さん」

いえ。修行、大変そうですけど、お仕事も頑張ってくださいね。

「はい」

美味しそうにスープを飲むネギを見て、五月は笑みを浮かべて帽子を被りながら、小走りで屋台の方に戻って行った。見れば、屋台では超とハカセがかなり忙しそうに動き回っていた。そんな彼女を見て、ネギはぼつりと言った。

「四葉さん、良い人ですねー」

「ネギ君、それ今更やえー」

「四葉さんは凄い人ですよ。料理は達人ですし」

「料理の腕はスバルも認めるぐらいだからね。偶にだけど、ご飯を

食べに来るぐらいだし。ま、あんたも教師なら、自分の任された生徒の事ぐらいはキチンと把握しときなさい」

そう言った後アスナ達は側を通った茶々丸に注文し、少し経って持って来られた籠を開けて小籠包やにくまんを食べ始めた。噛むと皮を破って中から具材の旨味を含んだ熱い汁が溢れ出す。美味であるが、一度は絶対に口に火傷を負う熱さだ。ちなみにどうでもいい事だが二年前、さよが昂によって実体化出来る様になってそう経っていない時、彼女は小籠包を食べてお約束の様に口内に火傷を負った事が有る。その為、彼女は小籠包がその時から苦手だったりする。

「さて、と。ご飯も食べたし、時間もそろそろ良いわね。行こっか」

食事を終え、アスナがそう言って席を立ち、食事代を払って学校に向かい始める。

道すがら、彼女達はまだ決まらない自分達のクラスの出し物について話し合った。

「早く決めないといけないわね、もう時間あまり無いし……部活のはもう決まってるんだけどねえ」

「せやねえ。メイドカフェも新田センセに禁止されてもったし」

「あれはある意味、仕方ないと思いますけど……騒ぎに騒いでいますし……私は何故か水着を着せられました。何で、カフェで水着なんですか……」

「途中からカフェとまるで関係無い着せ替えパーティになったものね。寧ろ、あれは禁止されて良かったと私は思うわ。あのまま可決されてたら一体どうなってた事か……想像するだけで恐いわ」

可決されていた場合を想像し、身震いするアスナと刹那。刹那の顔色が若干悪い気がするのはいきつと気の所為ではないのだろう。

もし禁止されずに決まっていたら、まず間違いなくとんでもない格好をさせられていた事だろう。新田先生には感謝である。

それを聞いてネギが苦笑いし、木乃香は変わらざるのほほんと笑んでいた。

「残りの準備期間も考えると、今日明日にはもう決めておいた方が良いでしょう……決まるかなあ」

「騒がなくて、真面目に考えれば決まるとは思うけど……ウチのクラスの性質から考えて、騒がないってのはまず有り得ないわね」

「去年もそうでしたしね。まともな物を案として出しても、騒ぎに乗じてとんでもない物にするのはもう分かり切っていますし……まともな物に決まると良いんだけどなあ」

準備期間の残り日数を考えてそう言ったネギに、アスナと刹那がそう返す。その目は何処か遠い場所を見ている様に見えた。

それを見てネギは苦笑を浮かべたまま表情を引き攣らせ、そして思った。

「一体去年の学園祭の出し物で何が有ったのだろう、と。」

そして無事に決まるのだろうか、何処か不安げにそう思いながらアスナ達と共に学校への道を進んで行った。

「……………頑張ろう」

ぽつりとそう呟いたが、その言葉は何処か虚しく空に消えて行った。

そして数時間後、彼はホームルームで学園祭について話をしていた。内容は当然、出し物についてだ。

「えー、それでは皆さん。学園祭の出し物を何にするかについてですが……」

そう切り出し、案を取ろうとするネギ。しかしどう言う訳か、朝倉と裕奈の二人が立ち上がり、やけに渋い表情で溜息を吐いた。似合わない事この上ない。

「そいつは難しい問題ですぜ、ネギの親分」

「ああ、メイドカフェを超える集客数となるとなかなか、ねえ……」

「そのメイドカフェって言うのは新田先生に禁止されましたからね……と言うか、何ですか親分って。僕先生ですよ」

そう言う二人に苦笑を送り、何か案がないかと言う意思を込めてクラスを見回す。すると、桜子が元気よく手を上げた。

「ハイハイ！ 『ドキッ、女だらけの水着大会・カフェ』が良いと思います」

彼女がそう言った直後、アスナが机に頭を思い切り打ちつけ、他にも数人の生徒が椅子に座っていたのに何故かこけた。ゴンツと言う、鈍い音が響く。

「ちょっと、何よそれ！？ 意味分かんないわよ！？」

「えー？ フツーに楽しそくない？」

「何処が！？ って言うか、楽しそくないって何語よ！？」

一応日本語であろう。

「……それだ」

「その二人！ キメ顔で何言ってるのよ！」

そしてそれに反応したハルナと裕奈。一体何を考えてその様な反応を示すのか。

その二人の反応を見て、他にも動く生徒達が現れた。

「じゃあ『女だらけの泥んこレスリング大会喫茶』！！」

「は！？」

「負けねーぞ！ 『ネコミミラゾクバー』！！」

「ちよつ、意味分かって言ってるの！？」

まき絵と、それに対抗するように風香（鳴滝姉）が提案するが、登校前にアスナ達が危惧したようにどんどんと騒ぎは大きくなり、危険な方向に外れて行っている。

と言うか、バーは中学生が行っていい場所ではない。

「もう素直に『ノーパン喫茶』で良いんじゃないかしら？」

「『それだあああつー！！』」

「じゃないわよ！ 認めないわよそんな物！！」

「80年代に実在したと記録に有りますが、今は違法の様です」

「だったら尚更認められないわよ！」

「つーか、そんな年代の物知ってるって何歳だよ、あのおばはん」

「おば……………何かしら？」

「何でも無いです！」

その後も案を出し合い、しかし似たり寄ったりな物の中で、何故か

最後に出された千鶴の案の喰い付きが異常に良かった。
喫茶店の店主を保護者に持つアスナと委員長であるあやかは断固として認めようとしなが、数の利は相手側に在るのでこのままでは押し切られてしまう可能性もある。

「あ、あの……オンナダラケとかノーパンキツサとか、意味分らないんですが……？」

「な、何させられるですかー……？」

それらを見ていたネギと一部の良識ある生徒達は来る可能性のある未来を想像し、しかし何をさせられるか想像しきれずに怯えていた。それを見て、参加せずに傍観していた龍宮が言った。

「うむ、君達は生涯知らなくていい事だ。そして良い子は意味が分からなくても決してお父さんお母さんに聞いてはいけない。お姉さんの約束だ！」

「龍宮さん、何処向いて言っとなるん？」

ネギ達にそう言った後、明後日の方向を向いて「約束だ」と言った龍宮に木乃香が突っ込んだ。

そんな事をしている間にも話題と騒ぎは進み、ハルナの「有りがちだから見世物を女子から男子に逆転させてみてはどうか？」との言葉で、何故かネギがノーパンで女装する事になった。

当然その話題が出た途端にネギは己が身の危険を感じ、逃げようとしたが僅かに行動が遅れ、取り押さえられてしまい嬉々とした少女達に次々と衣服を剥ぎ取られて行く。もはや出し物決めから外れて完全にお祭り騒ぎになっていた。

「コラお前達！ 朝っぱらから何をやっている！ 既にホームルームは終わって……！？」

泣いている。言っただけだがその雰囲気は暗く湿っぽく、鬱陶しい。そんなネギを少し離れた物陰に隠れて、木乃香達が心配そうに見ていた。

「ネギ君、落ち込んでる……」

「まあ、あんなだけ騒がれればね……結局まともな案はお化け屋敷くらいしか出なかったし……」

午前の一仕事を思い出しながらそう言うアスナ。ホームルーム時間を一杯使ってそれでも結局、まともな物はそれと演劇くらいしか出なかったのだ。

他には中華飯店や大正風カフェと言った案が出たが、クラスの性質上まともな物になるかは極めて微妙なので彼女はまともな物として見ていなかった。特に大正風カフェ。

「あれ？」

「どうしたの、刹那」

「いえ、四葉さんが……」

刹那の言葉にネギの方を見ると、彼の側に何時の間にか四葉五月がいつもと同じ微笑みを浮かべて立っていた。

彼女は泣いていたネギと少し話した後、彼を連れて何処かに歩いて行った。方向から察するに、おそらく超包子だろう。

「どうする？」

「せやね、少し早いけど晩御飯食べる？ ネギ君の事も気になるし」

「そうしましょうか」

そう言って、彼女達も超包子に向かった。

午後七時、超包子はかなりの繁盛を見せていた。来客は皆学生や教師で、安くて美味いと評判の此処に夕飯を食べに来ているのだろう。その中には五月に連れられて来たネギの姿も有った。

「美味しいですねー。四葉さん、料理の天才ですね」

出された食事の美味しさに、ネギは彼女に掛け値なしの賛辞を送る。幾分気分も戻ったようで、暗さはなりを潜めていた。

「それにしても、朝も思いましたけどスゴイ人気有るんですね。先生や大学の人達までいます」

少しは元気、出ましたか？

「あ、はい。ありがとうございます」

五月の問いにそう返したネギに、彼女は微笑みを浮かべた。見る物を和やかな気分にさせる、柔らかな笑顔だ。その笑顔を見せてから、彼女は十分の夢を話し始めた。

私、将来自分のお店を持つ事が夢なんです。食べ物で皆に元気をあげられたらなって思っ……。

「……、四葉さんなら絶対に持てますよ。こんなに美味しいんですから！」

応援します！と、ネギはそう言った。

それに笑みを浮かべて、礼を言つて五月は料理を続けた。
途中、学生同士の喧嘩を止めたり、夕飯を食べに来た新田先生達に出会い、甘酒を飲んでネギが酔つて泣き始めたり、昴が小太郎を連れて現れたり、木乃香が昴に占い用の道具を貸して欲しいと言つたり、久しぶりに現れた夕カミチがネギに約束の腕試しをしようかと誘つたりと有つたが、それ以外は特に大きな騒動は起きなかつた。

66話：繋がり

学園祭の出し物決めで3 Aが毎度の如く大騒ぎし、新田先生に説教され、超包子で食事を取っていたネギが甘酒で酔い潰れた数日後。彼の教室は珍しく、非常に珍しく静かだった。静かと言っても、物音一つ無い静寂空間と言う訳ではなく、騒ぎがいつもよりも低いレベルに留まっているという意味での静かだが。

しかしそれでも、常日頃からお祭り騒ぎを地で行くクラスである。クラス全員で他愛のない話をしてはいるが、いつもよりも若干ではあるが抑えられたその騒がしさが如何に珍しい事かは、おそらく想像するに容易いだろう。

ネギが酔い潰れた次の日の朝、彼はそれまでに出されていた案で多数決を行い、その中から興味と自分に来る可能性のある（主に尊厳的な）被害のレベルを考えて、出し物をお化け屋敷に決めたのだ（決めた直後、再び騒いで普通のお化け屋敷から外れかけたが、それは何とか阻止した）。

そして残りの準備期間が残り7日となった日の昼休みである現在、
3 Aクラスメイト達はお化け屋敷用の衣装や内装を作成していた。

「やー、昼休み返上で学祭準備なんて私達も殊勝だねえ」

「そーせんと間に合わんだけやんか」

「なかなか決まらなかつたからね」

頭にネコミミの付いたカチューシャと顔に猫の髭を着け、手に針を持ってちくちくと衣装用の布を縫いながらお気楽にそう言う裕奈に、同じくネコミミを着けて編み物をしていた和泉亜子と大河内アキラが苦笑しながらそう言った。

編み物や縫物をするそのペースは、遅くはないが早いとも言えない。

……………尤も、一部の生徒達は違うようだが。

「へえ、上手いのねさよちゃん」

「ほんまやねー」

「そう言うアスナさん達も上手じゃないですか。茶々丸さんも」

その一部の生徒達（一人は精霊で、一人はガイノイドだが）であるアスナ達は、他の生徒達よりも早いペースでそれぞれ衣装やお化け屋敷に使う装飾を縫い上げる。特に茶々丸の縫い上げる速度は取分けて早く、まるで針と糸が踊っているようにさえ見える。アスナ達が一つ縫い終える頃には、彼女は二つ縫い終えているのだ。早過ぎである。

そして隠れているが、千雨もかなりの速度で縫い上げている。

「マスター直伝の縫い方です。アスナさん達は昴さんから習ったのですか？」

「ええ。料理の方法も裁縫の仕方、効率のいい掃除の仕方、私は全部スバルから習ったわ。あと、舞の踊り方とかも」

「他にも食材の見分け方や楽器の手入れの仕方とかも教えて貰いましたね。……時々思うんですが、あの人本当に男性なんでしょうか？ 多芸なのはともかく、やけに家庭的と言いますか」

「まあ、昴さんですから」

さよの言葉に、昴を知るクラスのほぼ全員が内心で頷くが、刹那の説明にもなっていない説明に何故か納得してしまった。あの男、どれだけ家庭的だと思われるのだろうか。

そう言いながらまた一つ、彼女達は衣装を縫い上げた。そう遠くないうちに彼女達に割り振られた仕事は終わりそうである。

と、その時、教室の外に出ていたまき絵が戻ってきた。手には何かの紙を持っている。

「ねーねー皆、これ見た！？ 麻帆良スポーツ新聞！ 面白いのが書いてあるよー！」

「面白いのって……これ？ 世界樹伝説の」

「ホントに効果アリだって。あちこちで話題になってるよ」

朗らかに笑いながら、まき絵はそう言っただけのクラスメイト達にも読むよう勧める。

興味が有るのか、数名の生徒が仕事をする手を休めて読みに行く。

「世界樹伝説、なあ……」

「コレ、ホントかなあ？」

「まほスポって嘘記事も多いしね、眉唾ものじゃないの？」

手を休め、記事を読んでいた裕奈達が苦笑しながらそう言う。面白そうに読んで居るが、信じている訳ではなさそうだ。何かのネタとして楽しんでいるのだろう。

「あ、でもねー」

「ん？」

「麻帆高に行った二つ年上の部活の先輩の話んだけどね、何でも去年の学祭の時に絶対無理って言われてた、競争率メチャ高の超美形部長にダメ元で告白したら、即OK貰えたって」

「マジで!？」

しかしそれを聞いて、思い出しながら言った美空の言葉に、記事を読んでいた生徒達と一部の生徒の空気が一変した。

「あー、それ聞いたことあるわ。私が聞いた別の話でも、ウチの同学年で去年、教育実習生に告白してOK貰った子が3人は居るってな」

「同年年って、中2！？ それってやばいんじゃないの!？」

「他にもあるねー。未確認だけど、テレビに出てアイドルやってる男子を世界樹伝説でゲットした子も居るらしいよー？」

「ウソ!？」

次々に出て来る、世界樹伝説での告白成功の話し。それを聞いて、仕事をしていた他の生徒達も裕奈達の側にやって来て記事を見ようとす。

「何々？ あらゆる障害・困難を突破！ 周囲からは有り得ないと言われる程の年齢差や外見アンバランス、セレブ度を越え多くのカップルが成立。追跡調査では告白後の安定性も高く……」

「うわー、これはスゴいわ」

「でしょー?」

記事を読んでキヤイキヤイとはしゃぎ始める少女達。やはり彼女達も年頃の乙女らしく、恋愛に関する話題は皆好きなようだ。

「あー、ウチも世界中の下で先輩に告白したら良かったわー」

「なーんか、私も告白したくなってきちゃったかなー?」

「告白って、ゆーな、相手は?」

「そうなんだよねー。此処って女子校だし、相手がねー」

世界樹伝説の話題でどんどんと盛り上がっていくクラスメイト達。

このまま行ったら、全員の手が止まってしまいかもしれない。

そう思った直後、パンパンと手を打つ音が教室に響いた。何かかと思いがした方向を見ると、委員長であるあやかが手を合わせた状態で立っていた。

「皆さん、話をするのは良いですが手を休ませないで下さい。残り

日数も余り有りませんのに、時間を潰してしまつては出来る事も出来なくなりますわ。徹夜したくはないでしょう?」

「確かにそうだけど、でも夜の学校つて言つのも面白そうじゃない?」

「朝倉さん!？」

「冗談、冗談だつていーんちよ」

あやかの声に肩をすくめ、朝倉は自分の作業に戻つて行き、記事を読んでいた他の生徒達も先程の会話を続けながら各々の作業に戻つた。

それらを聞いて、編み棒を動かしながら木乃香が問うた。

「告白なあ。せつちゃんやアスナは誰か好きな人いーひんの?」

「わ、私ですか!？ その、特にそう言つた男性は……」

突然振られた話題に刹那が驚き、口ごもりながら否定の言葉を出す。しかし顔が赤い為、本当にいないかどうかは怪しいモノが有る。単純に、恥ずかしさから顔が赤くなっているのかも知れないが。

「ただ、気になると言つ点ではネギ先生でしょうか。昴さんにも好意は抱いていますが、それは恋愛方面ではないと思えますし………:ですからアスナさん、そんな底冷えする様な目で睨まないで下さい、恐いです」

「べ、別に睨んでないわよう」

「いえ、普通に睨んでましたよ? ジトゝつて」

顔を赤くして、しかし冷や汗を流しながらそう言つ刹那に、少々顔を逸らしながらアスナが否定の言葉を出す。思わずと言つた感じで睨んでしまったのだらう。逸らされてはいるが、その顔は若干赤い。しかしそれを、側で編み物をしていたさよが苦笑しながら否定した。

言われてアスナが頬を膨らませる。

「アスナは昴さんの事が好きやしねー。睨むのもしようがないかなー」

「だ、だから睨んでないってば」

「でもなーアスナ。いくら血が繋がって無いとは言っても昴さんとは親子やる？ それって倫理的に不味いんじゃないん？」

「あ、アンター一体何を想像してるのよ!？」

木乃香の言葉に何を想像したか、アスナが顔をさらに赤く染め上げる。見れば刹那とさよも、苦笑しながらも頬を朱に染めている。考える事は同じの様だ。

義理とは言え、昴とアスナの関係は親子である。彼女達の想像通りの事をしてしまえば、まず間違いなく大問題になるだろう。それも色々な意味で。

まあ、そんな事を昴も、彼に育てられたアスナもするとはとても思えないのだが。特に昴。彼はそう言う倫理観に対してはとてつもない程に五月蠅くなる傾向が有るのだ。自分が娘と見ている少女と付き合う等、余程の事が無ければ絶対に有り得ないだろうと断言できる。

「わ、私はスバルとは、その、そんな事は……そんな関係には……

……」

「あ、アスナさん落ち着いてください！ そんなスピードで編み棒を動かしたら糸がこんがらがって大変な事になりますよ!」

「と言うか切れます！ 糸が切れます!」

顔を真っ赤に染めて恥ずかしそうに俯き、そんな事を言いながら編み棒を高速で動かすアスナ。その仕草はとても可愛らしく、生温かい目で見守りたくなるものだが手の速度は残像すら出来るほどで、

とてもではないが目で追えるものではない（茶々丸は追えているよ
うだが）。

しかも無意識に気を使っているのか、手は僅かにだが輝いている。
力も入っているようで、ミシミシと危険な音を立てて編み棒は軋み
を上げる。

当然、そんなスピードと力に普通の糸や編み棒が耐えられる筈も無
く。

ブチツと言う鈍い音を立てて糸は切れ、バキツと言う固い音を伴っ
て編み棒は砕け散った。

「あ、ああっ！？ 編み棒が砕けた！？」

「へ？ つて、ええっ！？」

「ちよつとアスナさん！？ 一体何をしているのですか！？」

当然その音に気付かないほど鈍い人間はこのクラスには居ない。音
がした方を見て何が有ったかを認識した彼女達はアスナをからかい
始める。

勿論アスナはそれに反論するが、砕けた編み棒を持ったままで反論
しても効果はあまりないだろう。結果として、彼女は部活の時間ま
で羞恥で顔をさらに赤くする事になる。

それを見て、我関せずとばかりに本を読んでいたエヴァンジェリン
が一言。

「ふっ、初心だな」

「っーか、編み棒へし折るってどんな握力だよ」

呆れた様な、疲れた様な口調で布を縫っていた千雨もそう言った。

午後4時半、夕陽が街を紅く照らし出す時間帯。

現在非常に珍しくも客が一人も居ないホテルブクロでは、昴が売り物とは関係ないお茶を飲みながら、本を読みつつのんびりと過ごしていた。白くなつてしまつた彼の髪を、窓から差し込む夕陽が燃える様なオレンジに染め上げ、彼の雰囲気を変える。

ちなみに読んでいる本の題名は「世界の中間管理職」上司を支えた苦勞人達」である。

.....何を思つてこの様な題名の本を読んでいるのか、そもそもどうして有るのか、それ以前に一体誰が書いたのが非常に気になるがおそらく気にしたら負けなのだろう。何に負けるのかは分からないが。

その風景自体は、彼の容姿が整つていたので非常に絵になるのだが、読んでいる本の題名が題名の為に非常に微妙な光景になっている。何と言うか、色褪せている様に見える。

「.....」

既に3分の2程読み終えているそれに頬を挟み、閉じてテーブルの上に置く。そして目頭を揉み、背筋を伸ばして窓の外に目を向ける。視線の先には、雄大にそびえる世界樹が見える。天にも届かんばかりに枝葉を広げ聳え立つその樹を、昴はじつと見つめた。

先日、明石教授に世界樹の発光について教えられた彼はその日から毎日、必ず一度は世界樹を観察していた。

理由は単純に、気になつたからである。

明石教授の説明によれば、毎年学園祭の最終日に膨大な魔力が臨界に達し、それが発光現象となつて現れるらしい。しかも22年周期で魔力は極大になり学祭期間中は常に光り続け、さらに魔力溜まりを形成するのだとか。

それ自体は別に気にするほどの事でもない。アスナを連れて世界中

を旅していた時にも、同じ様な不可思議な現象が起こる場所や物

一般には聖地と言われている　　は幾つか見た事が有るから

だ。イギリスのストーンヘンジ然り、イスラエルのエルサレム然り

……………。

それらと同じ物ならば昴も別に気にする事は無く、事実麻帆良学園
に来てからの数年間、昴は世界樹の発光を珍しいと思いつつも他の
聖地と同じ様な物なのだろうと認識し、余り気にしていなかった。

だが先日の明石教授の説明で世界樹を見た時、同時に感じた波動が
彼に疑問を抱かせた。

（あの時感じた波動は、どう考えてもナギと造物主の物……………何
故敵同士だったあの二人の波動が、世界樹の魔力に乗って感じられ
たのでしょうか？　いえそもそも、何故彼女の波動が……………？）

……………ズキリ

「っ、っ……………」

疑問に思いながら昴は考える。しかしそう思った直後、頭に鈍い痛
みが奔った。痛みと言っても、さして強い痛みではないが。

しかしそれでも痛みは痛みである。昴は短く呻き、頭に手を当てて
顔を顰めた。

（彼女？　彼女とは一体誰です？　ナギと造物主の事を考えていた
筈なのに、何故私は自然に女性と……………？）

顔を顰め、自分の思考に疑問を持つ。

自分の思考に自然に浮き上がってきた言葉は『彼女』、つまり女性である。ナギは男性である為、そう思った対象は必然的に造物主と
言う事になる。

だが何故、自分は造物主の事を、まるで旧知の仲の様に親しみを込めて『彼女』と思ったのか？ 自分が造物主と相対したのは、後にも先にも20年前の、あの最終決戦の時のみの筈。造物主の性別も纏っていた黒いローブの所為で確認は出来なかったし、それ以前に出会っていたと言う記憶は、自分には無い。

しかし考えれば考える程、頭の痛みは増し、その思考を掻き乱す。それは思い出せとも、思い出すとも言っている様に感じられて…

……酷く、鬱陶しい。

「……………アルなら何か、知っていますかね？」

ぼつりとそう口に出し、彼は図書館島地下に居る戦友の胡散臭い笑みを思い浮かべた。アルと考えてまず真っ先に胡散臭い笑みが浮かぶ辺り、あの男がどう思われているかが読み取れる。

取り敢えず、時間が出来た時に聞きに行こう。

そう思つて彼は再度世界樹の方を見た。別の事を考えたからか痛みは収まり、思考を乱す鬱陶しさも無くなっている。

それに内心苦笑しつつも、昂は世界樹を暫く見て、冷めてしまったお茶を飲み干して厨房に引つ込んで行つた。

もしこの場に他の人間が誰か一人でも居れば気付いただろう。世界樹を見つめる彼の目が、何処か懐かしいものを見る様になっていた事に。

愛しいものを見る様な、柔らかく、慈愛で満ちた、しかし何処か哀しげな眼差しになっていた事に。

暗い、何処までも暗い空間。

時間全てが停止したと錯覚する様な、何処までも暗い、全てを呑み込む闇のみが存在する空間。

一切の光も無く、温かさの欠片も無い筈のその空間に、一つの巨大な結晶が浮いていた。

水晶の様に透明なそれは、光の無いこの黒い空間に在りながらぼんやりと、自ら発光して唯一の光源となっている。

弱々しいその光に照らし出され、結晶の周囲にぼんやりと浮かび上がるのは文字の様な何かと太く、長い茶色のナニカ。

距離がそれなりに在るのか、ハッキリとは分からないがそれは一本だけでなく、良く見れば無数に存在しているようだ。

それらはまるで、この空間全てを包み込むように、縦横無尽に張り巡らされている。見ようによっては、それは囚人を収監する『檻』の様にも見える。

牢獄。この空間を表現するに、これ程相応しいものは無いだろう。

そして事実、此処はある存在を封印する為の牢獄であった。矮小な存在が、それ以上の存在を閉じ込め、その力を抑えつけ、眠らせる為の牢獄。

そして、その空間の中央に存在する結晶の中には『ナニカ』が居た。黒い、夜の闇以上に黒い衣に身を包んだナニカ。

形からして人の様に見えるが、黒い衣で身を包み込んでおり、目深に被ったフードでその体つきも、顔つきも分からない。

結晶に包まれているせいもあるだろう。身じろぎ一つしないそれはしかし、何処か眠っている様にも感じられる。

出入り口の見えない空間に存在し、結晶に包まれたそれは捕われている様に見えた。檻に閉じ込められた様な、鎖に繋がれている様な

……そんな風に感じられた。

結晶に捕われ、閉じ込められたこの存在こそかつて、かの世界で現在、英雄の集団とも言われている『紅き翼』と戦い、死闘の末に打ち倒された神にも等しき存在『造物主』である。

その『彼』^{彼女}は現在、眠りに就いていた。

「
」

ふと、その存在が身じろぎした様に感じられた。

それは結晶が光を歪ませ、そう見せただけの錯覚かも知れないが、確かに身じろぎしたように見えた。

何かに反応してか、それとも何かの夢を見ているのか　それは分からない。

「
」

結晶の中で何かを言うが、それは結晶に阻まれ、音としては聞こえなかった。

しかし何かを言っただろうその雰囲気は、何処か、酷く哀しげに思えた。

微睡の中、『彼』^{彼女}は目覚めの刻を待つ。

67話：学祭準備、勧誘者達

学園祭まで、残りあと二日となった。

学園に在るどの学校のクラスも、それぞれ殆どが出し物の準備を終えて来るべき学園祭当日を、今か今かと待っていた。

その気迫は学校どころか街中に立ち込め、昂をして「まるで戦争になる一步手前の様に感じる」と言わしめるほどである。

学生達がどれだけ心待ちにしているか、良く分かると言う物だ。

そんな中、一つのクラスは他のクラスと違って大騒ぎであった。

いや、勿論他のクラスも騒いではいるのだが、そのクラスだけは他とは段違いに大騒ぎであった。

ご存知我等が子供先生、ネギ・スプリングフィールドが受け持つクラス、女子中等部3 A である。

彼女達はクラスの出し物をお化け屋敷と決め、それを完成させる為に約十日前から衣装や装飾、内装などを休み時間返上で作成していた。のだが、いかんせん出し物を確定させるのに余計な手間と時間を掛け過ぎた（この辺りは余計な案を出した早乙女ハルナや明石裕奈、朝倉和美が原因である）ようで、未だ完成しては居なかった。

衣装や内装の装飾は裁縫が上手なクラスメイト達（主に茶々丸や木乃香達と千雨）の尽力もあって先日までに全て、何とか完成はしたのだが、メインとなる内装の完成度はせいぜい6〜7割程度であった。

他にも同じ様に出し物が未完成のクラスはあるにはあるのだが、それらと比べても全体の完成度は低かった。

当然と言つべきか、そんな中途半端な出来の物を出し物として出すなど出来る訳がない。

必然的に、彼女達は完成させる為に徹夜して作成に勤しんでいた。

「あー、ヤバイよ！ 間に合わないよー!!」
「言っている暇があったら手を動かさない！ ああもう、だからもっと早くに決めるべきだと言ったのに……………」

トンカチ片手に嘆きながらそう言う裕奈に、委員長であるあやかがペンキの色に染まった刷毛を持ってそう返す。彼女が身につけているエプロンは様々なペンキの色に汚れている。

他のクラスメイト達も、完成させる為にトンカチを振るい、ペンキを塗る。

そんな中、唯一人のんびりとペンキを塗っている女子が居た。現在のこの状況を作り上げた原因たる人物の一人、早乙女ハルナである。他のクラスメイト達が大慌てで釘を打ったりペンキを塗ったりする中、彼女だけは鼻歌交じりにのんびりとペンキを塗っていた。

「ふんふん　るるる」

「ちょっとハルナさん！？ 何鼻歌交じりにのんびりと作業しているんですか！ もう残り時間は殆ど無いんですよ!？」

鼻歌を歌いながらペンキを塗るハルナに、別の場所で同じくペンキを塗っていたあやかが噛みつく。

残り時間も僅かだと言つのにそのような態度で作業されている、怒りたくなるのも分からないでもない。

しかし当のハルナはどこ吹く風だ。

「だーいじょうぶだって、いーんちょ。ちゃんと完成するからさ。締め切り前の修羅場は逆に落ち着く事が肝心なんだよー？」

「こ、この状況でその余裕！ 一体何処から来ているのですか!？」

「何って……………経験?」

「ハルナは毎月修羅場を経験していますからね。私達も手伝いで何度かやっていますし……………」

ハルナに向かつて吠えるあやかに、ペンキを塗る作業を続けながら夕映が説明する。

彼女の説明通りハルナは部活で漫画を描いており、その原稿を締め切り前に仕上げる為に何度も徹夜や修羅場を経験していたりする。

その為か、彼女の言葉には奇妙な説得力が在った。

同じ物を経験したいとは思わないが。

それを聞きながら、他のクラスメイト達は溜息を吐きつつ釘を打つ。呆れている事が丸わかりである。

「こんにちは、皆さん作業の程はどうですか？」

そんな中、ネギが教室にやってきた。

出てきた言葉から、どれだけ進んでいるかを確認しに来たようだ。

「ヤバイよネギくん！ 間に合わないよー！」

「手伝ってーっ！」

「え？」

「ちよつと貴女達！ 教師になつてまだ一年目のネギ先生に手伝わせようとはどういう見ですか！！」

やって来たネギに助力を求めた裕奈とまき絵にあやかが吠える。叫んではかりで喉が傷まないのだろうか、この少女は。

「この学園にネギ先生が来て初めての学園祭ですし、存分に楽しんでくださいね」

「は、はあ……」

そしてさりげなくネギの手を取り、微笑みを浮かべながら言った。変わり身が早過ぎである。

それを見て、まき絵達は文句を言った。年齢が近いとはいえ教師を手伝わせようとは、割と態度が太い少女である。

「あ、そうだネギ君。私達学祭でライブイベント出るんだよ。よかつたら見に来てねー」

「あ、はい」

「あーっ！そこずるいですーっ！！」

「さんぽ部の学園一周散歩イベントにも来てよー！」

まき絵の文句を聞き流して、桜子がネギをライブイベントに誘い、チケットを渡した。いつの間にか、ネギの周りには彼女を含めて4人のクラスメイトが居た。メンバーなのだろう。

そしてそれに対抗するかのように鳴滝姉妹がネギを散歩に誘う。

学園一周と言うが、一体何十km あると思っているのか。一周歩くだけで何時間か潰れそうである。

それを聞いて他のクラスメイトも、ネギをそれぞれの部活等の出し物に誘う。中武研、料理研、新体操部、馬術部、天文部、水泳部、バスケット部……他にも様々だ。

「あぶぶぶ、な、何ですかー!？」

出し物に誘う生徒達に囲まれ、もみくちやにされるネギ。

それを見ながら、作業を続けている生徒達が苦笑と共に溜息を吐く。作業が止まってしまっている。

「あらら、こりやちよっといけねーな……姉さん」

「はいよ、カモっち」

生徒達にもみくちやにされるネギを見て、いつの間にやら朝倉の肩の上に居たカモがそう言うと、彼女はネギを囲んでいる生徒たちを

掻き分けて彼の側に行き、手帳を取り出した。

「はいはい、全員下がってー。ネギ君に予約がある人は専属マネージャーの私を通して言ってるねー」

「なっ……」

（代理だけどな）

（うっさいよカモっち）

アイコンタクトで肩に居るカモとそんな会話をしながら、朝倉は皆に向かってそう言った。

それによってネギは解放されたが、いつの間にそんな事になったのかを知らない生徒達は勿論いる訳で。

当然、納得がいかないと大声を出す生徒が出た。

「なっ、何で朝倉がネギ君のマネージャーなのー!?!」

「納得行きませんわ! 一体どう言う事ですかー!?!」

「いーからいーから、予約ある人は並んで並んでー」

叫ぶあやか達を尻目に、朝倉は皆の予約を聞いてネギの予定を組み始めた。完全にマネージャーとなっている。ある意味でカモ以上かも知れない。

「ちよつとー! 騒いでないで作業してよーっ!?!」

作業していた夏美がそう言うが、結局、騒いでいた生徒達が原因で大騒ぎとなり、もはやある意味恒例と化した新田先生のお説教を受ける事となった。

学習しないと言うか、何と言うか……いつもより短い説教を受けながら、新田先生に気付かれない様にアスナは溜息を吐いた。

燦々と太陽が光る穏やかな昼下がり、学園祭の準備で賑わっている街中を一人の少年が歩いていった。

ツンツンとあちこちに跳ねている堅そうな黒い髪と、麻帆良学園ではあまり見ない黒い学生服。歳の頃は10歳程だろう、顔立ちは年齢もあつて愛らしいが、纏う雰囲気は都市と不釣り合いで、何処か生意気そうだ。

彼の名は犬上小太郎。先のヘルマン襲撃事件の折り、彼は自分がライバルと認めたネギに危険を知らせるべく関西呪術協会総本山の反省房を破壊してやつて来た、狗族との混血でもある狗神使いである。先の戦いの後、彼は本山の反省房を破壊して脱走した事を学園長から詠春に取り成して貰い、年齢もあつて麻帆良の小学校に通う事となった。当初、本人は学校に通う事を若干渋っていたが呪術協会の一室を破壊して脱走した事と、義務教育期間と言う事で強く文句を言う事は出来ず、諦めの表情で通う事を受け入れた。やけにあつさりを受け入れた理由はネギがこの学園に居るからと言うのも有つたのだろう。

ちなみに監視兼保護責任者となつたのは、詠春と学園長双方の相談によつて推薦された（決められたとも言つ）昴となつた。何かあつても、彼ならば楽に鎮圧出来るだろうと言う事から他の先生方にも納得して貰えた。もう一人、3 A生徒の一人である千鶴が受け入れるつもりだったようだが、彼女と出会った瞬間小太郎が怯えだし、涙目で頑なに拒否を示したのでそれは無くなった。仕方ないとは思つが、余程にアレ（尻にネギ）が効いたのだろう。それを見て学園長が首を傾げ、夏美が同情の眼差しを向けていた。

ちなみにそれを電話（昔懐かしの黒電話）で伝えられた昴は「仕方

がないですね」と言って小太郎の保護責任者となる事を受け入れた。アスナやさよの保護者にもなっているので、今更一人増えようが然して変わらないだろうと思っただろう。

が、自分の与り知らぬ所で勝手に決められたのは流石に頂けなかつたらしい。

後日、運動も何もしていないのに突然発生した、原因不明の凄まじい筋肉痛に東西の長二人が悶え苦しみ、送られてきた昴の手作りシツプ（効果は高いが使用している材料の関係で匂いが凄まじい）の匂いにさらに苦しむ事になったのだが、それは現在どうでもいい事である。

現在、小太郎は外出前に昴に貰った小遣い（残金19,500円）の入った財布を持ってぶらぶらと歩いてきた。手には出店で買ったのだろう、たこ焼き（10個入り）の箱を持っている。出来たての状態で、温かさを示す湯気が立っている。

「にしても、随分と賑やかやなあ……………本当に学園祭かいな」

たこ焼きを食べながらぶらぶらと歩き、軒を連ねる出店を見て回る。焼き鳥、タイヤキ、林檎飴、射的……………他にもあるが、祭りの時にはよく出ている出店である。

しかしその出店の他にも、何らかの催し物の参加を呼び掛けている者が居たり、場所によっては飛行機や巨大な茶汲み人形など、様々な物が展示と言う名の元設置されている。学園の規模が規模だから可笑しくないのかもしれないが、とてもではないが、普通の学園祭には思えない規模である。

（つーか、所々におったあの妙ちきりんな生き物は何やね……………？
何か魔の匂いがすっけど、害意とかは感じんし……………）

街の所々で見た、奇妙な形をした黒い何かを思い出す。

あれらはどう考えても人間には見えなかったが、魔族と言うには余りにもランクが低く思えた。自我も乏しい様で、何者かに召喚された使い魔の一種かとも思ったが、偵察にも護衛にも使えなさそうな使い魔を一体誰が召喚するのか。

（まあ、ほつといても大丈夫やる。見た感じ雑魚ばっかやし、何やあの姉ちゃんに懐いとるみたいやったし）

思い浮かぶのは目の下に褐色肌の、頭に鳥を乗せ、ピエロの様なメイクを施した一人の女子。何故か分からないがあれらは皆、彼女の周りに集中していた。

密集して、彼女が歩けばそれについて行く姿は見ようによっては飼い主と良く躡けられたペットの様にも見えたが………お世辞にも可愛らしいとは思えなかった。寧ろ、音を立てずについて行く分不気味に思う。夜道で会ったらかなり恐いだろう。

ちなみにそれらを見て昴が彼女に「顔　しの仲間ですか？」と聞いて否定されていたのは至極どうでもいい話である。

「そついやあの兄ちゃん、長と同年代なんやっただか……どう見ても20歳くらいにしか見えへんけどなあ」

頭に浮かんだ、自分の保護者となった白髪紅眼の男の姿にそう呟く。彼が詠春やネギの父「サウザンドマスター」の仲間と同じく英雄と呼ばれている（本人はそう呼ばれる事を酷く嫌っている）事にも勿論驚いたが、それよりもまず外見年齢に驚いた。詠春と同年代なら確実に40歳は過ぎている筈だが、彼はどう見ても20代前半にしか見えなかったからだ。

魔法薬でも使って年齢誤魔化しているのではと思ったが、どうも素

での外見年齢らしい。いつもネギと一緒に居る白いオコジョがそう言っていた。黒髪だった時の姿も見ていたので、白髪になって若干老けた感じがしなくもないが、それもほんの僅かである。色々と女性に睨まれそうな男である。

「お？」

そんな事を思いながら貰った金で買い食いしつつ見て回っているとある物が目に入った。

数人の男性が（上半身裸の禿げマッチョは意図的に無視した）、旗の側でチラシを配っている。それらは学園祭の催し物に勧誘する為のものだと、自分も幾つかのチラシを貰った為に理解していた。

その彼が現在、見ている旗には「学園格闘大会・参加者募集中」と言う字が書かれていた。

強くなる事に喜びを感じ、何処かバトルマニアの気が在る少年である彼は、気付くと宣伝している男性達に近付き、そのチラシを貰っていた。

「……………おお」

貰ったチラシを見ると、主催者の名前と大会会場の場所と賞金、時間帯その他が書かれていた。どうやら学園都市中から参加者を募っているらしい。賞金等も有るようだが、小太郎はそんな物よりも「強い奴等と戦えるかもしれない」と言う考えを先に抱いた。おそらく彼の脳裏には、京都で戦った楓や刹那とアスナ、ネギに中国拳法を教えている古菲の他にも、まだ見ぬ強敵の姿が浮かんでいるのだろう。

（ネギも誘お。アイツも強くなつとるやろつし、勝負出来る場所が在るなら逃がさん手は無いで）

そう考え、自然と笑みが浮かぶが、その笑みは何処か獲物を前にした肉食獣を思わせる。ネギは完全にロックオンされていた。此処に昂かさよでも居れば、余り無理強くないようにと注意するのだから、生憎と両名とも仕事や学業で居ない。

そうと決まったら話は早い。小太郎はチラシを手にネギが居るだろう女子中方面に駆けだした。途中、チラシの中に年齢制限による部門分けの文を見つけた。見れば12歳以下だと子供の部として、大人とは分けられてしまつらしい。

自分達が同年代の子供達と戦ったら弱い者虐めになると考えた小太郎は若干気落ちしたようだが、そのすぐ後には「魔法薬とかで何とかならんかな」と考えていた。目的の為には手段は選ばない様である。

取り敢えずオコジヨや昂に聞いてみよう。そう考え、彼はネギを探して走りだした。

……途中、遠目に千鶴を確認して足が竦んだのは余談である。

68話：前日

午後9時27分44秒、緋乃宮邸。

午後7時に喫茶店を閉め、帰宅して居候しているさよと、新たな住人となった小太郎に夕飯を作って食べさせ、食器を片づけた約2時間後の現在。

昴は書斎にて、一人机に座り、白い、何処までも白い分厚い書物に虹色の結晶の付いた万年筆で何かを書いていた。その厚さは、開いているが広辞苑と同等かそれ以上と分かる。

インク瓶に万年筆を差してインクを吸わせ、真剣な目をしてブツブツと呟きながら踊る様に手を動かす。その度に白い紙面を舐める様に走る万年筆からインクが出て、紙面に艶やかな黒い複雑なラインが引かれ、文字を形成する。どう言う訳か、書かれた文字はその一瞬だけ七色に光る。

カリカリと、字を書く音が広い室内に静かに響く。

ちなみに現在、家に居るのは昴を除いて居間でテレビを見ている小太郎と、昴が学祭期間中の喫茶店の手伝いとして魔法球の中から連れて出た精霊達（擬態して人間型となっている）しか居ない。8時頃まではさよも居たのだが、学祭の出し物であるお化け屋敷の内装が未だ完成していない為、完成させる為にアスナ達と共に学校に行った。

前日以外に学校に泊まり込みで作業するのは校則違反であるが、他のクラスも同じ様な事をしているので別にいいだろう。

見回りの新田先生に見つかれば、普通のお説教では済まされないだろうが。

「……………ふう」

溜息を吐き、手に持った万年筆を置いて眉間を揉み解し、座ったま

ま仰け反る様に背筋を伸ばす。長時間微動すらせず同じ体勢でいた為^ニに固まった骨が、ゴキゴキと鈍い音を立てる。背中や腰、首の筋肉が多少なり引き攣る感じがする。余り強くしたら攣りそうだ。

トントン

『主様、いらつしやいますか?』

体の凝りを解す為^ニに手を伸ばしたりしていると、誰かが部屋の戸を軽くノックした。同時に聞こえる、柔らかなアルトの声。扉越しで若干くぐもっているが、女性だと分かる。

「どうぞ、鍵は掛かっていますよ」

『失礼します』

昴がそう言うと、音もなく扉を開いて、森を思わせる深い緑色の長い髪をした、整った顔立ちの女性が一人、部屋の中に入って来た。

『お疲れですか? 主様』

座っている昴の姿を確認し、微笑みを浮かべながら女性はそう問う。肌はすべすべと白く滑らかで、顔は綺麗な逆卵型。額を晒す様に前で分けられた長い髪は膝裏まであり、髪の間^ニに僅かに覗いて見える耳は先がピンと尖っている。鼻梁は高く整っており、瞳は最高級の緑柱石をイメージさせる煌く翠。身^ニに纏う服は白地に淡い緑系の色合^ニいで、体のラインを隠す様にゆったりとしたそれは、何処か神に仕える神官の法衣を思わせる。

和風の家には似合わないデザインの服だが、色合いと彼女自身の雰囲気^ニの為か、不思議と違和感^ニは然して感じられない。

彼女が部屋に入ったと認識した途端、朝の森の中に居る様な、爽や

かな感じがした。

「ドリアード、どうかしましたか？」

『主様が書齋に籠って二時間が経っていますので、喉が渴いているやもと思ひ、お茶を淹れて参りました。どうぞ』

昴が女性の名を呼び、女性が問いに答える。

彼女の名は精霊ドリアード。魔法球「セライローティア生命樹の都」に住み、契約こそしていないが昴に忠を誓っている最上位精霊の内、木属性を司る精霊である。

ちなみに昴が最初に魔法球に入った時、植物を操って真つ先に襲いかかって来た精霊でもある。懇切丁寧な昴の『お話（と言う名のお説教）』を10時間受けて以降、絶対の忠誠を誓っているが。

ついでに言っておくと、20年前の大戦期にラカンが対詠春に投げたカプセルの精霊族とは違う、純粋な精霊である。

彼女は手に盆を持っており、その上には淡い色合いの湯呑みと急須、お茶受けだろう羊羹が乗っていた。何故か、急須を除いて二つずつ。彼女は淑やかに歩いて近付き、急須を持って湯呑みに澄んだ緑色のお茶を注いで昴に差し出す。独特の匂いが書齋に満ちる。

「ああ、どうもありがとうございます。丁度と言いますか、少し喉が渴いていたので」

礼を言い、差し出された湯呑みを受け取って昴は笑む。それを見てドリアードもまた微笑みを深くし、もう一つの湯呑みに茶を注ぐ。注がれる液体が、ほこほこ湯気を立てる。西洋の精霊が日本のお茶を淹れると言つのも妙な話だ。

それを見ながら昴は開いていた白い本を閉じ、インク瓶に栓をして片付けてからお茶を一口飲み、喉を湿らせる。いつ頃淹れたのか分からないが、丁度いい温かさが湯呑み越しに感じられる。使ってい

るだろつ茶葉も中々良いもので、仄かな苦み、渋みと共にお茶特有の甘味を感じる。
ほっと一息。

「やはりお茶は良いですね、飲んでいると落ち着きます。それに、淹れる腕を上げましたか、ドリアーダ？」

『自分では良く分かりませんが、以前より練習していましたので。如何でしょうか？』

「ええ、温度も風味も、実に私好みです」

『お口に合ったようで何よりです』

嬉しそうにそう言うドリアーダ。

そんな彼女を見つつ昴はお茶受けの羊羹を一口大に切り、口に運び咀嚼する。濃厚な甘みが口に広がるが、しつこくは無く、寧ろあっさりとしている様にすら感じる。お茶を飲みながらなら丁度いいだろう甘さだ。かなりの腕を持つ職人が作ったものと分かる。

それを堪能し、再びお茶を飲む。お茶の苦みと羊羹の甘さが互いを引き立て合い、実に美味である。色々として疲れた頭に、この甘さはあるがたい。

美味しそうに羊羹とお茶を交互に口に入れる昴を見て、ドリアーダもまたお茶を飲む。ふうふうと息を吹きかけて冷ましているあたり、どうも彼女は猫舌の様だ。

穏やか。そう言って良い時間が流れる。

「明後日、ですね」

『？ 何がでしょうか？』

ぽつりとそう呟いた昴に、冷ましながらお茶を飲んでいたドリアーダが首を傾げながら聞く。

昴はそれに、苦笑を浮かべて返す。

「明後日から学園祭なのですよ」

そう言うと、ドリアードは眉をひそめ、端正なその顔に若干だが嫌悪の色を浮かべた。

『学園祭……あの忙しい催し物の時期ですか……。こう言うのは何ですが、私としてはあの催し物は好きになれません。騒々しいですし、お手伝いは非常に忙しいですし、私やウンディーネ、ウィル・オ・ウイスプの体を下卑た目で見て来る輩もいますし……。良い事と言えば、大気にマナが満ちるぐらいではありませんか』

「祭りですから、騒がしいのは仕方がないと思いますけどね。そう言えば去年は注文を取っていたルナを見て顔を赤らめたり、鼻息を荒くしていた人が何人居ましたっけ。他のお客に追い出されましたが、何だったのでしょうか？」

静かな、ゆったりとした空気を好むドリアードはどうも祭りの騒々しさが余り好きではないらしい。

苦笑しながらそう言って、昴は去年の学園祭期間を思い出す。

期間中は連日満員と言って良い店に来ていた客は、若い男女の連れ合いが多かったがその他にも友人同士だろう男性や女性が良く来ていた。どちらかと言えば女性客の比率が高かった気がするが……。

何故か彼女達は幼い少女の外見の月の精霊ルナを見て顔を紅くしていた。クールな大人の男性の姿を取る闇の精霊シェイドやワイルドな青年の外見の火の精霊サリマンダーを見てそうなるなら納得は行くが、何故少女の外見のルナを見て彼女達は顔を紅くしたのだろうか？ 記憶が確かなら、お持ち帰りがどうか言っていたような気もするが、その時にケーキやクッキーと言った物を持ち返りで注文された覚えはない。

男性客はほぼ全員、ルナの他にドリアードや水の精霊ウンディーネ、光の精霊ウィル・オ・ウイスプ、氷の精霊セルシウスと言った女性の姿をした精霊を見て顔を紅くしていたが。

（まあ、それも男の哀しい性と言う物なのでしょうかね。私にはよく分かりませんが、男性と言うのは見目麗しい女性に目移りする様ですし）

何処か、冷めた思考でそう思う。

彼女達は鼻屑目に見てもかなりの美人（美精霊と言うべきか？）であるので、こちらはまあ一応だが分からないでもない。仲間達からは枯れているだの爺臭いだの若年寄だの何だのと言われてはいたが、自分も一応男なのだからそう言う欲求は無い事も無いのだ。単に、人よりもそう言う事に対する欲求が薄いと言うだけで。流石に下卑た目で彼女達を見るのは頂けないが。

（彼女も、そう言う目で見られる事を嫌っていましたしね）

ズキリ

頭痛。

一瞬だが、確かにあつた痛みに僅かに顔を顰める。そしてまたも自然と思考に浮かび上がった単語に疑問を覚える。
心臓が熱を持つ。

（また彼女……私と造物主の関係は敵対者だったと言うのに、何なのですか、この気持ちは……）

思考が上がった単語を認識すると同時に熱を持った胸と穏やかにな

る心に、疑問と僅かな鬱陶しさを感じる。心なし、かつて造物主に撃ち貫かれた腹部が熱を持っている様にも感じる。

既に思考に浮かび上がる「彼女」が造物主だと言う事にもはや疑問すら思っていない。今まで不定期に、しかし何度も見て来た連続した夢を照らし合わせれば自然とそう思うのも仕方ないのだろう。

以前見た物でようやく、自分以外の真言使いが出て来るあの夢が遙か過去の物だと理解出来た。

アスナと似た、まだ年若い少女であった造物主と、その師である銀の髪の男性の夢。

二人が世界中を旅して廻っていた、穏やかな、しかし時に哀しい、過去の夢。それは何処か、懐かしさすら感じさせ

自分と関係ない筈のその夢を、まるで自分が体験した事のように感じさせるその感覚が、酷く感情をささくれ立たせる。

ビキリと、湯呑みが軋みを上げる。

『主様？』

と、ドリアードが声を掛けて来る。見れば彼女は心配そうな顔で自分を見ていた。彼女の手は湯呑みを持っている自分の手に重ねられている。いつの間。

『どうかなされましたか？ 何やら、酷く苛立っておられた様ですが』

柔らかなアルトの声に、苛立った精神が落ち着いていくのが分かる。同時に感じる、穏やかな木属性の魔力。木の属性に染まった魔力には強弱にもよるが、精神を落ち着かせる効果がある。どうやら彼女は昴を心配して、自分の属性の魔力を重ねた手を伝えて流しているようだ。自然に存在する木属性の魔力でその効果が有るのだから、

精霊である自分の魔力なら、より効果があるだろうと思ったのだらう。

そして彼女の想像通りに昴の精神は落ち着き

「……………う、ぷ……………」

『あ、主様？ どうしたのですか、主様？ 顔色が優れませんが…』

…』

「ど、ドリアード……………魔力を流すのを、やめて、くだ……………ぐ……………」
『え？ え！？』

しかしその魔力の濃度に酔った。

顔を蒼白にし、急にダウンした昴にドリアードは驚き、崩折れそうな体を支えようとする。

しかし急な事に慌てている為か、触れた場所から余計に魔力を流してしまふ。

昴は魔法を使えない。

それはタカミチの様に生まれつき呪文詠唱が出来ない体質と言う訳でも、アスナの様に完全魔法無効化能力を持っていると言う訳でもなく、単純に体に宿す魔力の量が余りにも少ないからである。

一般人の魔力容量を5〜10とし、魔法使いの容量を平均して50〜100、上位の魔法使いを300〜500、ナギを1,000〜2,000、木乃香を3,000〜5,000、エヴァンジェリンを10,000以上とするなら、昴の容量は僅かに1〜3。一般人以下だ。そして魔法を使えない昴は、魔力に対して耐性等が殆ど無いとも言える。

そして精霊は超高密度の魔力結晶体の様な存在である。下位の精霊ですら、並の魔法使い以上の魔力を持っており、僅かに流す魔力ですら、自然に多大な影響を与える程に濃い属性に染まっているのだ。さよの様に幽霊から精霊に変わった特殊例も有るには有るが、基本

的にその体が属性に染まった高密度の魔力で編まれている事には変わりない。

さて、そんな一般人以下の魔力しか持たず、耐性すら満足に得ていない昂が、魔力の結晶の様な存在であり、しかも最上位に位置する精霊の魔力を僅かずつとは言え直接流されて耐える事が出来るだろうか？

否、耐える事など、出来よう筈も無い。
それは言うなれば、急性アルコール中毒にも似た様な物で。

『あ、主様！　しっかりしてください主様！』

「で、でしたら……魔力を、流すのを……や、め………ぐ………」

……………は……………っ」

『主様あつ！？　う、ウンディーネ、ウンディーネ！　水をーっ！』

結果、彼は自分を主と慕う木の精霊に、魔力供給による急性魔力中毒と言う何とも言えない方法で倒された。おそらく、こんな情けない方法で倒されたのは色々な意味で史上初であろう。情けない事この上ない。

そして薄れゆく意識の中で思った。今度からは、心配だからと言って魔力を流さない様にして貰おう、と。

『なんなのですかドリアード。私達今、明後日の主の手伝いの練習で忙しいんですけどって、主い！？　どうしたんですか一体！』

『あ、主様が苛立っていたみたいだから、落ち着かせようとmanaを少しだけ流したらこうなって……………』

『なっ……………アホですかっ！！　主の魔力容量が普通の人間よりずっと低いのは知っている筈でしょう！？　何をやっているのですかドリアード！』

『ウンディーネ、五月蠅い。主、起きる』

『ちょっ、ダメですルナ！　揺すったら悪化します！！　って、い

つの間に来たんですかアナタは!？」

『ついさっき』

「おっさん、電話やでー。ガトウっつー人から……どうしたんや一体?」

最後にそんな喧騒を聞きながら、昴の意識は闇へと落ちた。

『できたーっ!』

午前8時、3 A生徒が歓声を上げる。

学園祭の出し物を完成させるために彼女達は夜の学校に残り、巡回の新田先生の監視をやり過ごしながら徹夜で作業していたのだ。

その彼女達の前には完成したばかりのお化け屋敷の入口があった。

雰囲気も有り、中々良い出来である。………中学生が作るにしては、少々クオリティが高すぎる気もするが。

「まあ出来たと言っても、完全に出来たのは入口だけで、肝心の中身はまだなのですが」

「夕映ちゃん、それ言わないで〜」

「ですが残りの内装もあと2割程度です。皆さん、今日中に仕上げますわよ!」

「あいよっ! 前夜祭にも出たいしね!」

あやかという言葉にクラスの全員が応える。徹夜明けでほぼ全員、顔に疲労の色が見えるが声は元気一杯だ。

唯一、ハルナだけは慣れた物の様で疲労の色は余り見えないが。

「それじゃあたしら、部活の方に行って来るねー」

「時間が出来たら戻ってらしてくださいねー！」

「はいよー」

「徹夜明けで元気だなーあいつら」

そう言つてアスナを含めた数人の生徒が教室から離れ、所属する部活の出し物の場所に行く。まだ午前だが、学園祭前日には授業が休みなのだ。

教師でありながら同じく徹夜で手伝っていたネギも、アスナ達について学校を出た。

「流石と言いますか、前日だけあつて変なのがいっぱいですね」

「せやねー。ウチらは見慣れ取るけど、ネギ君は始めてやったっけ？」

「はい」

そう言つて、走りながらネギは周囲を見る。茶々丸に似た巨大な茶汲み人形、鎧武者、ぬいぐるみのような被り物、宣伝の旗や飛行船等、様々な物が目に入る。祭りだからと言えば仕方ないが、統一性は一切ない。

祭りの前日で賑わう学園都市を走る。

「あら、ネギ先生」

道を走っていると、偶然しずな先生に出会った。

「しずな先生」

「丁度良かったわ。学園長先生がお呼びよ、ネギ先生」

「学園長が？ 分かりました、場所は第1校舎の学園長室でいいで

すよね？」

しずなの言葉に、学園長室の場所を思い出す。しかし彼女は笑みを浮かべて否定した。

「いえ、場所は世界樹前広場よ。出来れば桜咲さんと緋乃宮さんにも来て欲しいらしいけど」

「部活の出し物の仕上げが有るので、私はちょっと……もうあまり時間も有りませんし」

「あ、だったら僕が伝えておきます。それでいいですよね？」

言い淀むアスナにネギがそう言う。部活の出し物の完成を潰してまどと言うのは気が引けるのだろう。

しずなはそれに微笑みながら頷きを返し、校舎へと歩いて行った。

「何の用かしら？」

「さあ……取り敢えず、行きましようネギ先生」

「あ、はい」

「どう言った内容だったか後で教えてね」

そう言っつて4人はネギと刹那、アスナと木乃香の二人ずつに別れた。そしてアスナ達を見送った後、二人は世界樹前広場への道を進む。

「あれ……？」

「？ どうしました？」

「いえ、人が……」

暫く進んで、疑問に思った。先程まで大勢居た筈の人が、少しずつ減って行っているのだ。

広場に向かうにつれてそれは顕著になり、目的地に着いた頃には一

一般人は一人も見られなくなっていた。

その事に疑問を抱きながら広場の中央に進むと、階段の上から声が掛けられた。

「待つとつたぞ、ネギ君」

そこには学園長の他に、10人以上の人影があった。タカミチや瀬流彦、小太郎と言った知り合いの姿も有る。

「学園長、この方達は……」

「そう言えば、ネギ君にはまだ紹介しとらんかったのお。此処に集まっとるのは、学園都市の各地に散らばる小・中・高・大学に常時勤務する魔法先生及び魔法生徒じゃよ。無論、全員ではないがの」

全員来たら此処が埋め尽くされるからのお。

髭を撫でながら学園長はそう言うが、ネギは驚きで聞いていなかった。まさか自分やタカミチ、学園長、エヴァンジェリン、昴、アスナ、刹那の他に魔法関係者が居るとは思わなかったのだろう。それも大勢。

ポカンとするネギに、数人の教師が笑いを堪える。

「さて、今日わざわざ皆に集まって貰ったのは他でもない。とある問題が起きておるのじゃ。解決の為、諸君の力を貸して貰いたい」

「問題って……敵か!？」

「また何か大変な事が!？」

「いや、修学旅行の様な深刻なトンデモバトルは無いぞい? 別の意味で深刻な問題じゃが……」

問題と聞いて警戒心を引き上げるネギと血気逸る小太郎（何故か嬉しそう）をなだめながら、学園長は此処に皆を集めた理由を話した

した。

内容は現在、学園中で噂となつて新聞にも載っている世界樹伝説だ。それを聞いて、小太郎が鼻で笑う。

「あー、学祭最終日に世界樹にお願いすると願いが叶うとかどーとかゆーあれか。くだらんわ、七夕かつーの」

「願いが叶う？ 恋人になるんじゃないくて？」

「恋人？俺が聞いたんは願い事が叶うつーのやけど」

互いに情報を提示し、確認し合う。何やら齟齬があるようだ。

それを聞いて、学園長が頷く。

「まあ、大体そんなとこじゃな。ちなみにその噂な、事実なんじゃ」
『は？』

「マジで願いが叶ってしまうんじゃないよ。22年に1度じゃがな」

そう言つて学園長は世界樹の正式な名は「神木・蟠桃」と言い、魔力を生み出す特殊な樹である事、22年周期で魔力は極大に達し、全部で6ヶ所に強力な魔力溜まりを形成する事、即物的な願いは叶わないが、こと告白に関する限りその成率は120%と下手な呪いより強力である事、しかもその効果は一方的で、相手がどんな人間だろうと強制的に結びつけてしまう事を説明する。

「この広場も、その6ヶ所の一つじゃ。本来、魔力が極大に達するのは来年の筈だったのじゃが異常気象の影響か、1年早まってしまうたのじゃ。今回の緊急招集はそれが原因じゃ」

「ですが、恋人になれちゃうなら良いんじゃないですか？」

「とんでもないぞい。人の心を永久に操ってしまう等と言う事は魔法使いとしての本義に反する以前に人として如何か。好きでも無い奴と恋人になつてもうたら嫌じゃろ？」

恋心と言う物は突然発生し、時間や心の揺れ、その対象である人との関わりによつて自然と育まれていくものである。

時に甘酸っぱく、時に切なく、そして時に恐ろしいものだ。

想いが実つても、実らなくても、練磨され輝きを増し様々な面を見せるそれは、あらゆる人が持つ感情の中でも取分けて美しい宝である。まかり間違つても呪いや魔法の効果で心を縛つてまで成就させるものではないと、そう言っている様にも聞こえた。

だったらトリスタンとイゾルデの恋物語や、ニーベルンゲンの歌にあるジークフリートとブリュンヒルデの恋はどうなるんだと思つてはいけない。決して。

「既にこの噂は生徒達の間はかなり広まつとる。刀子君」

「はい。『学園七不思議研究会』、『学園史編纂室』による研究の他に『オカルト研究会』、『世界樹をこよなく愛する会』の発光現象観測により、かなり真実に近付かれています。また、麻帆良スポーツやネットの書き込み等により、現在の噂の浸透率は男子34%、女子79%となっています。あくまで噂ですから、本気で信じている人は少ないと思われませんが……」

「楽観は出来ません。占いや迷信好きな女生徒を中心として、実行したがる人は少なくないと思われます」

秘書の様な刀子の言葉を、資料を持った明石教授が引き継いで言った。男性にも同じ様な人間は居るが、何故か年若い女性にその傾向が多いのだ。

「マジでマズイのは最終日じゃが、今の段階からそれなりに影響は出始める。生徒達には悪いとは思うが、コトはその生徒達の所為春に関わる問題じゃ。この広場を含めた6ヶ所で告白者が出ない様、

また告白されんよう見張っていて欲しい」

そう言った後、学園長は事前に決めていたパトロールのシフトを皆に伝えようとするが、集まっていた魔法関係者の中の一人である佐倉メイが何かに気付いた。

「誰かに見られています」

彼女がそう言った直後、サングラスを掛けて煙草をふかしていた神多羅木　　パツと見ファイア　　が指を弾き、佐倉のしている場所に向かって無詠唱の風の刃を放った。

それは射線上に存在していた何かを切り裂き、破壊した。破壊された何かが落下する。

「魔法の力は感じなかった……機械だな」

「生徒かな？　人払いの結界を抜いて来るか……やるねー」

「ウチの生徒達は案外侮れませんからねー」

若干の驚きを込めながらそう言う教師陣。しかしその口調は何処か楽しげに聞こえる。

「追います」

「深追いはせんでいいよ。こんな事が出来る生徒は限られとるからの」

学園長にそう言い、偵察機を察知した佐倉メイと高音・D・グッドマン、教師の一人であるガンドルフィーニが離れて行った。それを見送り、学園長が残ったもの達を見渡して言う。

「さて、たかが告白と侮るなかれ！　生徒達の青春を護る為にも、

油断せず、心してかかるように！ 以上、解散！」

そう言つて学園長が手を振ると、今まで人が寄り付かなかった広場にぞろぞろとやってきた。人払いの結界を解いたのだ。

すぐに人混みができ、その人ごみに紛れて集まっていた魔法関係者は各々の持ち場に戻つて行つた。

ネギ達も、小太郎と共に街へとくり出した。

刹那、ネギと別れた後、アスナは木乃香と少し話して別れ、大通りを歩いていった。それぞれの部室が別々の場所に在るからだ。ワイワイと、多くの人で賑わっている。

「ルルル……ラ・ラ……」

祭りの賑わいの中てられてか、珍しく鼻歌を口ずさみながら進む。昴が好んで良く吹いているメロディだ。普段落ち着いた感じではないとは言え、彼女もやはり3 Aと言つべきか、意外とお祭り好きのようだ。スキップ等はしていないが。

「あら？」

ある場所を見て脚を止める。視線の先には店先に出て如雨露を持っている昴。おそらく花壇の花に水をやっていたのである。それとも一人。

クラスメイトだろうか、見覚えのある後ろ姿だ。黒い髪と二つのシニヨンが特徴的な彼女は

「超さん？ 珍しいわね、昴と話してるなんて」

店先で昴と話しているのは、お料理研究会や中国武術研究会、ロボット工学研究会、東洋医学研究会、生物工学研究会、大学の量子力学研究会に所属している、通称、麻帆良の最強頭脳の超鈴音だった。

珍しい事も有るものだと思う。あの二人は時折出会う事はあっても、それぞれが互いに話しかける事は殆ど無かったからだ。

始めの内は一方的に超が避けているのかとも思っていたが、昴も彼女に話しかけるのを躊躇っていたようだった。理由を聞いても自分でも分からないらしく、何故でしょうかと首を傾げていた。

その二人が、（昴は若干困惑した表情をしているが）向かい合って何かを話している。気になったアスナは二人に近付いて行った。

「おはよ、スバル、超さん」

声を掛けると、二人ともアスナの方を見た。そして挨拶を返す。

「お早うございます、アスナちゃん」

「お早うネ、アスナサン」

「珍しいわね、二人が話してるなんて」

不思議そうにそう言うと、超は「にやはは」と妙な笑い声を上げた。対する昴は困惑とした表情のままである。超の事を計りかねているようだ。

「どしたの？ スバル」

「あ、いえ……」

「それではね、昴サン」

そう言っただけは二人から離れ、人混みに紛れて行った。
彼女が見えなくなった事を確認し、昂が深い溜息を吐く。

「ふう……」

「本当にどうしたの？ スバル、超さんと出会ったらいつもそんな風になるけど……」

「私にも分かりません。あの子と会って、如何してか妙な感覚になるのです」

「妙な感覚？」

「はい。どのような感覚かと聞かれると説明に困るのですが……まるで、自分の体の一部を見ているような」

そう言っただけは、超が進んで行った方向を見た。その表情は、やはりというか、困惑したままだった。

69話：学園祭開催

快晴。穏やかな風が吹き、鳩を始めとした鳥達が空を舞う。

太陽が燦々と輝き、突き抜ける様に澄み渡った蒼穹を、数機のプロペラ機が編隊を組みながら飛ぶ。

時に横回転し、時に宙返りし散開すると言う曲芸飛行を披露しながら巨大な飛行船や数多くのアドバルーンが浮かぶ麻帆良学園上空を、紅、蒼、翠、桃、黄など、様々な色の付いた煙を尾として引きながら泳ぐように飛び回るその編隊は地上、西洋建築の街並みの中に居る学園生徒達や麻帆良在住の一般市民、外部からの訪問客を問わずに見る者を楽しませる。

『生徒の皆さん、午前10時となりました。只今より、第78回・麻帆良祭を開催します!』

そんな多くの人々で賑わう街中に、スピーカーで拡張された女性の声が高らかに響き渡った。

それを聞いて、学園都市中に居る生徒達が歓声を上げ、それに釣られて一般市民も大声を出す。教師達も楽しそうで、普段厳格な新田先生も心なし、表情が緩んでいた。これより三日間、昼夜問わずのお祭り騒ぎが開催される。

去年の冬に赴任してきたネギも、初日と言うのにかなりの賑わいを見せる祭りに目を輝かせる。

「うわー、スゴイや! こんな大きなお祭りとは思ってませんでしたよ」

キョロキョロと、大勢の人で賑わう街並みを見渡す。右も左も、何

処を見渡しても人、人、人。余りに多くの人が居るので、まるでどこぞのテーマパークに来たようにすら思える。
人が余り多く無い山奥の村出身のネギには、およそ初めて見る光景であろう。

「三日間の入場者数は約40万人。世界でも有数の規模を誇る学園都市の、さらに小学から大学まで含めた全校合同のイベントです。から。三日間は大騒ぎのバカ騒ぎ、お祭り騒ぎで昼夜問わずの乱痴気騒ぎと言つ訳です」

そんなネギを微笑ましそうに見て、いつもと同じく奇妙奇天烈ドリンク（海のように濃い青色の紙パック・学祭限定仕様）を飲みながら夕映がどう言つた祭りなのかを説明する。
ちなみに、喫茶店で仕事中の昴にも差し入れする予定である。彼ならきつと、微妙な笑顔で受け取るだろう。

「この麻帆良学園は、学園祭と言う名の一大テーマパークの様相を呈します。期間中、バイタリテイ溢れる学生達によって技術と熱意とおふざけを結集したイベントやアトラクション、その他様々な催し物が学園都市の至る所で開かれます」

そう言つて夕映は手に持っていたドリンクを飲んで喉を湿らせ、観光客の事や動く金額の事等を説明した。金額で、1日に2億円以上動くと言つた時のネギの驚いた表情が印象的だった。

「これ、学園祭のガイドマップですー」

「あ、ありがとうございます。のどかさん」

夕映の説明が終わつた後、差し出されたガイドマップを受け取り開く。書かれている内容や絵は、まんま何処かの遊園地の様だった。

色々と見ていると、食事処やレストランの紹介の中に、さり気なく喫茶ホテルブクロの名があった。しかも側には「手頃な値段で美味しいお勧めの店」とも「学祭期間限定アクセサリーショップ併設」とも書かれている。

「本当に何処かの何とかランドみたいですねー」

（こりゃ三日じゃ回り切れねえな。寧ろ一週間あっても足りるかどうか……）

「そうだねー……………つとと」

肩に居る力モと小声で話していると、急にネギがよろめいた。

（アニキ？）

「大丈夫だよ、あんまり寝てないから少しよろけただけ。仕事の他に、クラスの皆の手伝いもあつて忙しかったからね」

（無理すんなよ。まだ子供なんだし、のどかの嬢ちゃんとデートもあんだろ？）

気遣わしげな力モの言葉に苦笑を返し、大丈夫だと言う。しかし、いかに最近の鍛錬で体力が付いて来ているとは言え、やはり肉体系年齢はまだ9〜10歳の子供である。多少ではあるが体もふらつき、眠そうな目をしている。

「あつ！ ネギ君危ない！」

「はい？」

そんな状態のまま大通りを歩いてみると、慌てたようにハルナが注意する。その声音からは、結構な焦りが感じられる。

何かと思い、彼女の方を向いた途端

巨大な何か、ド

スンと鈍い音を立ててネギの横50cmの場所に出現した。パツと

見、鳥の足にも見えるがしかし、大きさが尋常じゃない。しかも鳥の足の様に細くは無く、寧ろ肉食獣の様に雄々しく力強い。日光を反射し、巨大な爪が鈍く光る。

「ひいつ!? ななな、何ですかこれ!？」

「そのこのボクー、危ないからパレードに入っちゃダメだよー」

ネギの声を聞きつけたか、仮装してパレードに参加していた人の一人が注意する。

それを聞きながら見上げると、そこには一頭の恐竜が存在していた。体を支える為の巨大な後脚と、退化した小さな前脚。長い尾が地面に触れるか触れないかの場所でゆらゆらと揺れるが、それもまた体を支える為の物。

頭は大きく、下から僅かに見える口には肉食竜固有の、刃の様に鋭く輝く白い、鋭利な牙がずらりと並んでいる。錯覚だろうか、血に塗れている様にも見える。

目は鮮やかに輝き宝石の様で、凶暴さの中にも堂々とした威風を持つそれは、さながら白亜の時代の王者が如し。

人間がまだ存在しなかった時代、最強と呼ばれた恐竜の一頭がそこに居た。

「な、な、ななななな………!」

思わぬ存在の出現に、ネギとカモは間抜けにも大口を開けて硬直する。信じられない物を見た様な目だ。よもやこの時代、極東の一都市の学園祭で恐竜に出会えるとは思ってもみなかったのだらう。普通は確かに思いもすまいが。

しかし良く見れば、脚の付け根の部分に何か書いてある。見てみると、読み取れたのは「ロボット研究会」や「巨大二足歩行システム研究会」、「古代生物研究会」、「恐竜友の会」と言ったサーク

ルの名であった。それらの研究会が結託し、創り上げた偽物なのだろう。本物と見紛う程に精巧でリアルだ。

その恐竜は自分が踏み潰しかけた少年を一瞥もせず、象や他のロボットに混じって悠々とパレードを進んで行った。ズシン、ズシンと足音が響く。

「……………っ！！」

「やー、仮装パレードは毎年人気有るけど、年々派手になってくねー」
「あれの何処が仮装ですか！？ どう見ても本物ですよ！？」

悠々と去り行く恐竜ロボを見てのほほんとそう言ったハルナにネギが突っ込みを入れる。そもそも仮装でも本物でも無く、ロボットなのだが、そう言う突っ込みは厳禁なのだろう。

しかしそんな事を言いながらも、ネギの目は興味深そうに、キラキラと輝いている。まるでおもちゃを与えられた幼子おさなごの様だ。外見年齢相応に子供らしく見えて、実に微笑ましい。

「ネギくーん、そろそろクラスの方に行ってみよー」

「あ、はい！」

そう返事をして、ネギはハルナ達について自分の受け持つクラスの出し物　お化け屋敷へと向かった。

校舎に入ると、子供・大人を問わず長蛇の列が出来ていた。階段の上から校舎の入り口まで続いている。

気になってその列を伝って行ってみると、ある教室からその列は始まっている様だった。やけにクオリティの高いお化け屋敷の入口は、自分が担当する3　Aのクラスのものだ。客の入りを見るに、大繁盛の様である。

「あ、ネギくん！」

感心したように見ていると、入口に立っていた裕奈と桜子、史伽がやけに露出の高い衣装を着て受付をしていた。可愛らしいが、目のやり場に困りそうな衣装である。

尤も、史伽だけはそんな衣装ではなく、コロポックルの様な格好だが。彼女の身長（ぶっちゃけ幼児体型）もあって、普通に可愛らしい。

「見て見て、開演間に合ったよー！ 手伝ってくれてありがとニヤ

ー！」

「おかげで『ドキッ、女だらけのお化け屋敷』大成功の大繁盛だよ

ー！」

笑いながらそう言う二人。しかし少々聞き捨てならない単語が聞こえた為、ネギは質問する。

「ちょっと、何ですか、その女だらけって……まさか」

「お客一人につき、コンパニオンの女の子が一人つくんだよ。ちなみにタッチ一回500円」

「おさわりパブですかっ！！ って言うか、いいんちよさんにやめるよと言われたのにまだ諦めてなかったんですか！！ 新田先生にまた怒られますよ!？」

どちらかと言えばイメクラなのだが、それ以前に何故10歳の少年がパブを知っているのだろうか……… 故郷にでもあったのだろうか？

しかしそんなネギの言葉を軽く受け流し、彼女達はお化け屋敷を体験させようと背中を押す。

「あれ？ その子優先なの？ズルイなー」
「ゴメン遊ばせー。私達の先生なんですー」

それに対し、お客の一人が何かを言ったが教師だからという理由で流された。

普通なら文句を言うだろうが、お客の人も良い人だったらしく、特に何を言うでもなくネギに譲る形になった。学園結界は正常に作動しているようだ。

入口を潜ると、さらに三つの門が目に入った。「ゴシックホラー」、
「日本の怪談」、「学校の恐い話」と三種類あり、どうも入場者の好みによって入る場所を選択できるようだ。

そして門の前には、案内役としてか三人の生徒が居た。ゴシックホラーの扉の前にはドレスを着たあやかが、日本の怪談の扉の前には和服を着た佐々木まき絵が、学校の恐い話の扉にはさよが着ている物と同じタイプの、古いデザインの制服を着た大河内アキラがそれぞれ立っていた。

「ようこそ、3 Aホラーハウスへ……」

雰囲気を出す為か、薄暗い室内で出来るだけおどろおどろしくそう言う。中々いい感じだ。

しかし入って来たのがネギだと知った時、三人の内二人の目がギリと光ったのは気の所為だと思いたい。

「どのコースを選びますか？」

そう言われ、ネギは三つの扉を見る。それぞれ恐怖度、可愛さ、推奨年齢、ハート（おそらくラブ度）が書かれてある。恐怖度と推奨

年齢、ハートはゴシックホラー、日本の怪談、学校の恐い話の順で上がって行くらしい。逆に可愛さはゴシックホラーが一番高く、日本の怪談、学校の恐い話の順に低くなっている。

初めてお化け屋敷に入るネギは、どんな物が有るか分からないので一番怖くなさそうなコースを選択しようと思い、あやかの方を見た。

目が異様な輝きを放っていた。同時に感じる、奇妙な寒気と威圧感。口は笑みを作っているが、目はまるで獲物を狙う猟犬の様に鋭い。別の意味で恐怖を誘う笑みだ。

身の危険を感じ、二番目に恐くない日本の怪談を見る。推奨年齢は15歳だが、何とかなるだろうと思ったのだろう。まき絵と目が合った。

あやかと同じ、いやそれ以上に異様な輝きを湛えていた。何と云うか、イツちゃってる感じの目である。感じる威圧はあやかと同等であり、しかも何故か、鼻息も荒い。背筋に冷たいモノが奔る。

喰われる。何が喰われるのか分からないが、この二つを選んだらまず間違いなく喰われると、何故かそう直感した。まだ入り口の段階なのに、気分はもうラスボス一歩手前だ。冷や汗が吹き出る。

此処も危険だ。そう思い、ネギは残った最後の一つ、18歳以上推奨の学校の怪談とアキラの方を見た。彼女は他の二人と違い、ただ微笑んでいるだけだった。それが心を安心させる。

「じゃあ、学校の怪談コースで」

18歳以上と言うのは気になるが、他二つよりは（貞操的な）危険度は少ないだろうと判断し、ネギは三つの中で最も恐いそのコースを選択した。直後に聞こえてきた残り二人の誘いの声は、危険と感じた為スルーした。恐怖心など、己の（貞操的）危機に比べれば二

の次である。

戦闘とはまるで別物の恐怖を、彼はまだ知らない。

「先生、このコース恐いけどいいの？」

「余り恐すぎるのは好きではありませんけど、ここが一番安全そうだったから……残り二つは別の意味で恐い事が起こりそうですし……」

……」

おそらくその直感は正しいのだろう。こうして少年は（ある意味）貞操の危機を回避した。

そして彼はアキラに連れられ、ドアを開いてあやかとまき絵の眼差しから逃げる様に教室の中に入って行った。

しかし彼は忘れていた。どのコースも3 A生徒がやっているのだから、結局弄られる可能性は残ったままだと言つ事を。

「うわー、真つ暗ですね………それに何と言うか、ホントにココ、教室の中ですか？ 広すぎる気が……」

ドアを潜り、中身の広さに関心と少々の疑問を持つ。教室の大きさは直径約15 m程の筈だが、ここは通路の様で、しかも奥行きが軽く見ても100 m以上ありそうだ。

「よく分からないけど、超さんの最新技術だつて言ってたよ……」

「へー、スゴいなー」

魔法みたいだ、と呟き薄暗い通路を二人で歩く。これがもう少し歳の行った仲の良い男女だったなら抱き着いたりするのもかもしれないが、そんな甘い要素は今のところ皆無だ。

お化け屋敷と言う物が初めてなネギは、どんなお化けが出るのかと

密かに心躍らせながらアキラと共に道を進む。

グニッ

「？ グニ……？」

と、何か妙に柔らかいモノを踏んだ気がした。

やけにリアルなその感触が気になり、何を踏んだのだろうと足元を見ると

薄闇にぼんやりと浮かび上がる、白目を剥いて床に倒れている、物凄い形相をした学園長の姿が。

「つて、え、えええええええつ！！？」

予想外の存在に絶叫するネギ。よくよく考えればこんな所で学園の最高指導者が寝転がっている訳が無く、マネキンだと分かる物だが、恐ろしく精巧な作りとリアル過ぎる感触、予想外過ぎる不意打ちでネギは一気に混乱した。

薄闇にぼんやりと浮かび上がっている分、恐怖度は倍増である。不気味極まりない。

「がっが、学園長！？ し、死んで……！！？ ヒイイツ！？」

腰を抜かし、倒れ込むネギ。しかし何かにつつかり、背後を見ると

頭を斧で割られ、鎌を突き刺された、和泉亜子と村上夏美の変わり果てた姿がそこに在った。

当然と言うべきか、自分の生徒の変わり果てた姿を見てネギは驚き恐怖する。微妙に笑い声が聞こえた気がしたが、今のネギの耳には届かない。

「あ、ああアキラさん、み、みなみな皆さんが、し、しん、死ん……」

…！」

「落ち着くんだ、先生」

涙目でわたわたと慌てるネギに、冷静にアキラが言って落ち着かせようとする。そんなネギを見て、彼女は密か可愛いと思っただが、そんな事を目の前の混乱した少年が知る筈もない。

内心を顔に出さない様にしながら、彼女はこのコースの設定を口にする。

「どうも私達は、この学園に潜む怨霊を怒らせてしまったらしい。

このままだと、君も私も恐ろしい呪いに掛かって死んでしまうかもしれない」

「え、ええっ!？」

「急いで逃げないと。早く、私について来……」

そう言っつてネギの手を引き、アキラが走り出そうとした途端、衝撃と共に不自然な場所で言葉が切れた。

ゴトツ、ゴツ、ゴロゴロゴロ……

そして床に落ち、転がって行く丸いモノ。薄闇の中でなお美しい、波打つ黒い糸の束を巻き込み転がって行くそれは、案内人たる大河内アキラその人の首。

崩折れ、倒れる彼女の体。首が在った場所から、紅い飛沫が吹き散る。

「……………っ!」

突然の事に茫然とし、しかし何が起こったかを徐々に認識して眼を見開く。足元には前のめりに倒れ伏した案内人で、同時に自分の生

徒の一人の体。しかしその体には在るべき場所が無く、そこからは深紅の液体が勢いよく流れ出ている。紅い染みが広がる。

叫び出しそうになる自分を何とか抑え、蒼褪めた顔でアキラの首の方を見る。体がガタガタと震えているように見えるのは気の所為ではないのだろうか。

そんなネギに、首だけとなったアキラが目を向けた。頭から流れ出たであろう紅い液体で、顔と髪、床が汚れる。

「あ、アキラ……………さん？ アキラさん!？」

「先……………生……………に、げ……………」

息も絶え絶えと言った風にそう言い、ピクリとも動かなくなるアキラ。その目は虚ろで、何処とも知れぬ場所を向いている。首と胴が離れているのに何故話せるのかと言う疑問が有るが、暗がりでは恐ろしい。

そして、初めてお化け屋敷に来たと言うネギが、心の準備も無く耐えられる筈もない。見れば目に零れそうなほどの涙を溜め、今にも叫びそうだ。

しかし恐怖はまだ続く。

バンッ

「ひっ!？」

何かが叩きつけられる音が、すぐ傍の窓から聞こえた。

恐怖に染まった目でそちらを見ると、窓の隅には白い、白過ぎる手形が一つ。

バンッ、バンッ

じつと見ていると、それは一つ、また一つと勢いを増しながら増えていく。その勢いに、窓が軋み、罅が入る。恐怖に体が震え出す。そして約10秒後、甲高い音を立てて窓ガラスは砕け散った。紅に塗れた無数の手がネギを捕まえようと動く。怪我はしてないのでご安心を。

「き、キャー……ッ!?」

捕まり、まるで少女の様な悲鳴を上げるネギ。冷静に見ればその手の正体がクラスメイトだと分かりそうなものだが、恐怖と混乱からか、気付く様子は見られない。肩に居る力モは気付いているようだが。

彼女達はネギを捕まえると、わさわさと手を動かしてネギを弄り始める。悪乗りしているのか、服まで脱がし始めた。そして再び感じる（貞操的）危機！

「たっ、だ、誰か助けてーっ!!」

「あ、逃げた」

「待て〜っ」

隙を見て脱出し、逃げ出したネギを追う生徒達。明るい場所で見たら微笑ましいものだろうが、薄明るい場所では何と云うか、やはり幽霊のように見えなくもない。それに恐怖し、ネギは本気で逃げ出した。

暫く走って、お化けを撒いたネギは膝につき、大きく息を吐き出した。落ち着こうとしているらしい。全身、汗だくである。

「はあ……はあ……」

「アニキー、流石に驚き過ぎじゃねえか？」

「だ、だって……ホントに恐くて……」

カモの言葉にそう返すネギ。それを示すかのように体は震え、声は涙に滲んでいる。若干10歳の少年に、あれは流石に恐すぎた様だ。

「アニキはまだ子供だしな。ま、後はもう無いだろ。出口まで進もうぜ」

「う、うん……そうだといいなあ……」

少し休み、誰も居ない通路を進み始めるネギ。カモは余裕そうだが、ネギは小動物が警戒するようにキョロキョロと見回しながらゆつくりと進んで行く。此処にあやか達が居れば、身悶えして飛びかかって行くかもしれない。幸いと言うべきか、居ないが。

「……あれ？」

「どうした、アニキ」

「いや、今何か、白い物が……」

そう言っただけで足を止め、壁に背を預け警戒しながら薄暗い通路を見渡すネギ。腰が引けている様に見えるのはきつと気の所為だ。

キョロキョロと通路を見渡し、ネギが見たと言う白いナニカを探すが………見つからない。

「何も居ないぜ、アニキ。気の所為じゃねえのか？」

「そ、そう……？ 僕の勘違いかな……？」

「きつとそうだって。気にせず行こうぜ」

カモの言葉に、もう一度周囲を見てからネギは再度歩き始めた。やはりというか、壁に背を預ける様にして進んでいる。カニ歩きと言っただけ。かなり警戒している様で、目にはやはり怯えが見える。

「アニキ、警戒しすぎだつて」

そんなネギに、カモが呆れたように言う。小動物の癖に、肝だけは並の人間以上に太い様だ。それを聞きながら、ネギは力二歩きで少しずつ進み

視界の端に、白いナニカが映った。

「っ!!」

思わずその方向を向くネギ。勢いよく振り向いた為、カモが肩から振り落とされそうになったがそんな事気にしていられない。

「あ、アニキ？ いきなりどうしたんだよ」

「……………」

カモがそう問いかけるが、ネギは聞こえていないらしく通路の一部を見ていた。カモもつられてそちらを見るが、視線の先には何も無い。

暫くじつとそうして居たが、何も無いと判断したのだろう、体の強張りを解いた。眼だけは未だにその方向を向いているが。

「アニキ、どうしたんだよ」

「また、白い物が見えたよ、カモ君」

「さっき言つてたヤツか？ 警戒しすぎだつて、カーテンか何かだろ?」

腰が引けながらも警戒心全開状態のネギにカモがそう言うが、彼は気付いているのだろうか？ この通路に、カーテンなど無いと言う事に。

カモの言葉を耳に入れながら、ネギは壁を背にしてじりじりと動く。

本音を言えばわき目も振らずに走り出したいだろう。恐怖からか、足が震えているが。

直後、背後に何かの気配を感じた。すぐに振り向くが、そこに在るのは警戒の為、背にしていた壁だけ。

そう、壁だけである。気配は間違いなく背後から感じた。しかしその背後には唯の壁だけ。人の「ひ」の字すら見当たらない。恐怖が増す。

「あ、アニキ……………」

と、カモがネギに声を掛ける。しかしどう言う訳か、その声は実感震えている様に感じた。

「ど、どうしたのかモ君」

「あ、アレ……………アレ……………！」

ネギの問いに、カモは小さな前脚を使って今まで通って来た方向を示した。ネギがその方向を見ると、視界に入ったのは薄らと蒼白く輝く、白い髪の女の子。

多少離れている為かその輪郭はぼんやりとして見え、その気配は視界に入っていると言うのにとんでもなく薄い。

「……………っ！！」

叫び出しそうになるのを必死で堪える。気付かれたら間違いなく追われると思うているのだろう。

少女は少しの間、何もせずに立っているだけだったが、ふと歩き出し……………融ける様に壁に消えた。消える前にネギに気付いたのか、三日月の様な薄い笑みを浮かべて。

「っひ……!!」

消える直前にその笑みを見て、ネギは息をつまらせる。その目には涙が浮かび、しかも決壊寸前の様だ。ガタガタと震えている。

そして少女が消えると同時に、彼は振り返って出口に向かって走り出した。10歳には恐すぎたのだろう。先の見えない通路を走る。しかしその途中、ふと何かが視界の端に映った気がした。まさかと思ひ、彼は眼だけをそちらに向けて見た。そして、見てしまった。

窓の外に、先程の白い少女が浮かんでいた。俯いている為に目は見えないが、消えた時と同じ様に、裂けた様な笑みを、紅に塗れたその顔に張り付けて。

そしてネギが見たことに気付いたのだろう、その笑みを、ニイイとさらに深くした。少女が手を伸ばし、窓を透過して手が出て来る。

「っ!!!! う、うわああああああっ!!!!」

絶叫。それは今までに無い程の叫びだったとか。

流石に今度はカモも恐怖したのだろう、顔を青くし、全身の毛を逆立てている。

涙を流しながら今度こそ、ネギは脇目も振らず逃げ出した。

「……………やりすぎちゃった?」

白い闇の精霊少女　　さよの眩きは、薄闇の通路に溶ける様に消えて行った。

学園祭。

それは学校に通う生徒達や、その親族、友人達が催し物を出し、あるいは参加して楽しむ、人生において数度しかない催し物の一つである。

祭りは気分を開放的にさせる。

特に麻帆良学園のそれは盛大で、学園外からも入場者がやって来る極めて大規模なものだ。当然、催し物なども多くあり、大勢の人々を楽しませる。

この催しで恋人を得たり、新たな友人を得たりも多いので人生においては割と重要な催しであったりもする。

..... まあ、それもこの男には現在、関係ない事なのだが。

「3番テーブルの注文、出来ました！ 持って行って下さいディーネ！」

「はいっ！」

「2番テーブル注文入ります、定食、雪月花の雪です！」

「カウンター席、三種のチーズと茸のパスタ、デザートに特製ラズベリームースとエスプレッソ」

「お会計ですね、「風」定食と10種の野菜のリゾット、チョコレートムースとカフェ・ラッテで、合計2,850円になります.....
ありがとうございます」

学園祭開始後1時間と少しで、喫茶ホタルブクロは満員となっていた。満席となった店内を、手伝いである精霊達（人間形態）が走り回る。ちなみに、ディーネとは昴がウンディーネを呼ぶ時の名である。

外には席が開くのを待っている人が、およそ100mに渡っている。待ち時間は約2時間だ。

時折質の悪いお客（女性型精霊をナンパしたり、怒鳴りながら厨房に侵入しようとしたりする）も来るが、そう言う人は精霊達や自主的に手伝ってくれるお客の手により「丁重」にお帰り願っている。後者の場合は昴が対応しているが。

『お待たせしましたお客様。ベーコンとアスパラのクリームパスタで御座います』

そう言つて客の一人（女性客）に料理を運んで行くのは精霊達のリーダー格でもあるシェイド。ピシリとした黒い服装と柔らかな（営業）スマイルが、多くの女性を虜にする。こう言つたら本人は怒るが、ホストの様にも見える。

それを見て他の客（男性）が恨めしそうに睨むが、セルシウスやウィル・オ・ウィスプが料理を運んだり注文を取りに行ったりすると表情をだらしく緩ませる。現金な物である。

『チーズケーキとラズベリージャムお持ち帰りですね、ありがとうございます。……マスター！ラズベリージャムが無くなりました！』

「ドリアード！ 20 持って行って下さい！」

『は、はいっ！』

『マスター！ 雪定食上がったぜ！』

「2 番テーブルでしたね。持って行きなさい、今すぐに！」

『他にもあつて手が離せないんだよ！』

「それは私も同じです！」

『だったら私が持つて行く。サラマンドー、それ寄こして』

『すまんルナ！ 頼む！』

『良いから寄こせ、燃えトカゲ』

『お前までそう言つか！？』

喫茶ホタルブクロ、大忙しである。

70話・学園祭1日目

しくしくしくしくめそめそめそめそ……………

人も疎らな廊下に、時折しゃくり上げながらもすすり泣く声が満ちる。声の質から少年と判断できる声だ。

アスナは目の前の光景に困惑していた。

彼女は例の如く木乃香、刹那と一緒に学祭を回って歩き、出店や催し物を楽しんでいたのだが、校内の催し物を見て回っている途中で何かすすり泣く声を聞いた。

迷子か何かかと思いい（毎年必ず50人は出る）、彼女達は急いでその場所に向かったのだが、辿り着いた場所で視界に入ってきたのは廊下の端で体育座りしてプルプル震えながらめそめそと泣く、スーツを着た赤毛の少年と肩に乗る白いオコジョ、そしてその少年を慰める、古いデザインの学生服とやけに露出の強い衣装を着たクラスメイト数人だった。

何事かと思いい、道行く人の多くがそちらに目を向ける。

「……………どういう状況なの？ コレ」

「さ、さあ……………」

「ネギ君、泣いとるなあ……………何が有ったんやろ？」

暗い影を背負っているその少年は、よく見れば自分達の担任であるネギだと分かった。壁を向いて体育座りして、頭を抱えて震えながらグスグスメソメソと泣いている。正直に言っつて、かなり鬱陶しい。困惑したアスナの問いに、刹那もまた戸惑った様子で返す。彼女に

しても、現在の様にすすり泣くネギを見るのは初めてなのだろう。そのまま見て居ても何も分からない為、彼女達はその集団に近付き何が有ったのかを問う。

「ねえ、何でアイツ泣いてるの？」

「ネギ君、学校の怪談コースに入っちゃったからね。あのコース、超さんやハカセの手も入ってて、かなりリアルに仕上がってるから……」

「でも、あの悲鳴が聞こえたのは出口付近だよ？ 相坂さん担当のあの辺りに二人の発明品なんて置いてたっけ？」

アスナの問いに、ネギから少し離れて様子を見ていた桜子と夏美（コースから出て来た）が言った。しかし夏美のその言葉で、アスナは何が有ったのかを大体悟った。

自分達と同じ様に昴からマナクリスタルを使用したお手製の魔法具を貰っている相坂さよは、元自縛霊で現在は闇を担う精霊の一柱となっている。おそらく、闇の精霊となったことで得た特性である闇や影と言った黒系統の物と同化出来る能力をフルに活用して客を脅かしているのだろう。先日、笑いながらも彼女がやけに気合いを入れていたのを覚えている。

確かにお化け屋敷や肝試しと言った催しで闇の精霊の特性は効果があるだろう。さらに元幽霊としての異常なまでの隠密性の高さもまだ持っているので、少々効果が有り過ぎるだろうがこう言った物では客を一番脅かす事が出来るだろう。何と言う能力の無駄遣いか。見れば、刹那は頬をやや引き攣らせ、木乃香は苦笑を漏らしていた。考える事は同じの様である。

（取り敢えず、後でシェイドに報告しておきましょうか……）

そう思ったアスナによって確かに報告され、後日、さよは師でもあ

るシェイドに「精霊の力をそんな事に使うとは何事か！」と激怒される事になるのだが、それはあくまで後日なので今は置いておこう。ネギはまだ震えている。慰める事も考えたが他のクラスメイト達がそれはしているし、別にいいだろう。

そう考え、アスナ達はネギの慰めをクラスメイト達に任せてその場から離れようと歩き出した。

う、うわああああああつ！！

きゃあああああつ！？

ひっ、千鶴姉ちゃん！？ な、何で……！！

「……繁盛しとるみたいやねー」

「そうねー、正直言って予想以上の賑わいだわ」

「あの、最後に聞こえた声って……」

「気にしたら駄目よ、刹那」

「いや、気にしたら駄目ってアスナさん、今の……」

「ダメよ」

途中、お化け屋敷の方から多くの悲鳴が聞こえてきた。声の質から考えるに、どうも学校の怪談コースに居るらしい。

その中で、聞き覚えのある声が耳に入った気がしたが気にしないことにした。

どんな物が興味があってそのコースに入ったのかもしれないが、どうやら『天敵』に見つかってしまったらしい。また、彼自身夜目も利くのでそれで直接確認してしまったのだろう。

暗闇でも普通に見る事が出来る吸血鬼や人狼種の目では、お化け屋敷などの面白みが半減してしまう物だが、天敵がいれば話は別である。まあ、望んでいた物とは別種の恐怖だろうが。

捕まって弄られない事を祈ろう。

い、イヤやああああああっ！！！！

……………もう、遅いかもしれないが。

その悲鳴を聞いて、アスナは別に信者でもないのに十字を切った。刹那もいつの間にもやら数珠を持って、手を合わせて念仏的な物を唱えている。どっから取り出した。

「アスナ、せつちゃんも、まだコタ君死んどらんで……………たぶん」

そんな二人を見て、木乃香がそう突っ込んだ。

校舎内の催し物を一通り見て回り、外へ出た三人は街へと繰り出していた。小学の他に中学、高校、大学の部活やサークルが様々な催し物を出展し、競い合う様に客引きをしていた。

ライドアクション、シューティングゲーム、3D映像、鳥人間コンテスト、飛行船遊覧、戦車やジェット機の展示、貸衣装屋、たこ焼き、大判焼き、占い、くじ引き、射的、金魚すくい……………その他様々だ。それらを大勢の人々が見て、あるいは参加して回っている。小さな子供連れの夫婦や学園外からの参加者だろう集団も居り、実に楽しそうだ。

「なんて言うか、今年はいつにも増して賑やかね」

「せやね。でもお祭りなんやし、これぐらいでも丁度ええんやない？」

アスナの言葉に木乃香がそう返しながら出ている出店でクレープ（20種以上あった）を買い、食べ歩きしながら見て歩く。買ったクレープはアスナが4種のベリーとチーズクリーム、木乃香がチョコレートとバナナ、刹那が宇治抹茶と甘栗である。

ゴーヤも勧められたが、生地やクリームにも練り込んでいるらしく、

とんでもなく苦そうなので遠慮した。その苦みが人気な品らしいが、抹茶以上に苦い物を態々クレープで食べる気はない。

出来たてのクレープの甘い匂いが食欲を誘う。

食べると口の中に、クリームの甘さと果物等の味が広がる。濃厚だがしつこく無く、果物等の味を殺さずにいる甘さは中々だ。

「おいしいなー」

「ちょっと物足りない気もするけどね。もう一味と言うか……」

「アスナさん、昴さん基準で考えるのはどうかと思いますよ」

しかしクレープを食べながらアスナはそう言う。

祭りの出店でこの味はかなりのものだが、昴の料理を普段食べ慣れている彼女からしたら少々物足りない味らしい。

それを聞いた刹那が食べ歩きながらアスナにそう言うが、彼女も少し物足りないさそうだ。同じ様に食べ歩きしている木乃香はあまり物足りないさそうでもないが。

彼の料理（緋の雫ではない）は詠春の鍋と並んで大戦中、王族であり、舌が肥えている筈のアリカやテオドラも称賛したほどだ。

戦争の後も度々作って振舞い、「紅き翼」が解散した後はアスナと世界中を旅していた十数年の間に巡った様々な国の料理を習い、習得し自分の料理に組み込んで元々の料理の腕を上げている。レパトリーも、最も得意な和食（精進料理や懐石含む）の他に中華、フランス、イタリア、ドイツ、インド、オランダ、ロシア、アイスランド、ベルギー、ハンガリー、メキシコ、ブラジル、オーストラリア、エジプトとかなり多彩だ。

さらに京都で仲良くなった木乃香の母と時に競う様に、時に教え合っていて、時に協力して多くの料理を作ってきたことで、ことと和食に関してはかなりの腕を持っているのだ。その料理を長年食べ続けて来て、舌が肥えない筈がない。

寧ろ、そんな料理を食べ続けてきたアスナ達に「少し物足りない」

と言わせた出店のクレープの方が凄いだろう。流石は様々な事でレベルが高い麻帆良と言うべきか。
ちなみに京都に住んでいた時、昴は詠春に「そんなに習得してお前は一体何をやる気だ」と、習得した料理の種類豊富さに突っ込まれた事が有る。

「色々あるけど、何処に行く？」

食べ掛けのクレープ片手にアスナが聞く。

告白阻止の見回りの事は先日刹那から聞いてはいるが、せっかくの祭りである。見回りをしないと言う事は無いだろうが、見回りだけで時間を潰すのは嫌らしく、少しは楽しみたいらしい。何処か大人びている所が有ると言っても、やはり年頃の女の子と言ったところか。

「そうやねー。全部楽しそうやし、色々と見て回りたいけど見回りも有るんやろ？　せやったら、あんまり動き回るのもどうかと思うんよ」

「そうですね、一応関係者全員に警戒エリアと見回りの時間が割り振られていますから、余り広範囲を動き回るのは……」

そんなアスナを見て、苦笑を浮かべながら二人がそう言う。二人も見回りしながらでも楽しもつとは思っているらしい。

木乃香は頼まれていない為、別に見回りに参加する必要はないのだが、手伝う気はそれなりに有るようだ。友人達がやるなら自分も、と言う事だろうか？

「まあ、普通に考えたらそうなるわよね。面倒だけど、仕方ないか

……」

何で1年早まるかなあと、やる気を余り感じさせない口調でそう言
つてアスナは溜息を吐いた。

正義感の強い学園の魔法使い達（特にガンドルフィーニや高音）な
らそのやる気の無さに文句や注意をするだろうが、例年通り行けば
最終日以外は遊んでいたのだから、そう思うのも仕方はないかもし
れない。

「まあ、そんなすぐには出ないでしょうし、それまでは楽しみまし
よう。エリアから余り離れなければいいでしょうし」

そう言つて、彼女達は警戒エリア近辺の出店や催し物を回る事にし
た。

クレープを食べ終えて出たゴミをゴミ箱に捨て、くじ引きやたこ焼
きなどの出店、大学のサークルや部活が出しているアトラクショ
ン、展示されている物を見て回り始めた。

その三人を、上空約500mの辺りを飛ぶ、一羽の黄金の目を持つ
黒い鳥が見ていた。

チリンチリーン

『いらっしやいませー……………うあ』

最も忙しくなる時間であるお昼時から数時間。ようやく客足が落ち
着き始めた頃、喫茶ホテルブクロで、レジにて接客していた光の精
霊ウィル・オ・ウィスプが心底嫌そうな声で呻いた。彼女の前には
白いローブを着て、目深に被ったフードで顔を隠している人影が有
った。その口元には、失礼な反応をされたと言うのに笑みが浮かん

でいる。

『また貴方ですか……』

「おやおや、客にその様な事を面と向かって言うとは。褒められた行為ではありませんね、ウイスプさん」

『食事をとる必要のない体で出て来て、最も忙しい時間帯に来てお茶しか飲まない貴方にはこういう態度で十分だと、私を含めたマスターに従う全精霊の共通認識です。サラマンダーではないだけマシだと思ってください。彼だったら、目が合った瞬間ブレイズヴァイスですよ？』

「それは恐いですね。では、今日は運が良かったと言う事でしょうか」

ふふふ……と、何処か胡散臭げに含み笑いをしながらそう言う客人に、ウイスプはげんなりした表情で溜息を吐く。接客業で褒められた行為ではないが、それだけ嫌な客人と言う事か。

しかし、嫌な人物だろうと客は客である。すぐに嫌そうに歪んでいた表情を消し、柔らかな（営業）スマイルを浮かべて空いているカウンター席に案内する。その席はある意味、エヴァンジェリンの専用席となっている場所の隣の席だった。

『ご注文が決まりましたらお呼びください』

そう言ってウイスプはレジに戻って行った。そして、少し離れた地点でフードを下ろした客が店員を呼ぶ。やや色素が薄い長い髪を首元で一束に纏めた美形の男性だ。

その客に、料理を客に運び終えて一番近い場所に居たルナが注文を取る為に近づく。

……何か、嫌な予感がした。

『ご注文?』

「はい。ダージリンのホワイトティーをお願いします……あ、お嬢さん。よろしければ、これを着て貰えますか?」

メモを取って厨房に向かおうとしたルナにそう言って男が取り出したのは、黒い生地で作られた服の上に、エプロンの様な白い布が一緒にになっている、所々をレースで飾られたロングドレスの様な物

エプロンドレスだった。しかもゴスロリの様な装飾過多な物ではなく、最低限の飾りしか付けられていない、ヴィクトリアンメイド風の衣装である。

それを見て思わず噴き出すウイСП。一体何処から取り出した。いや、それ以前に何故そんな物を大の大人が持っている。

『? 何、この服?』

それを見てルナは首を傾げる。

普段精霊状態にいる為に服を着る事は余り無く、着たとしても精霊の法衣で済ませるので、男が差し出したこの服がどう言った物なのか、彼女は分からないようだ。しげしげと、閉じられた目を向けている。

……見えているのだろうか?

「この衣装はですね、メイドと言う、いわゆる女中さんが着る仕事着です」

『……わたし、メイドじゃない。精霊』

「今は店員さんですよね?」

そう言って目を閉じたまま、人形の様可愛らしいその顔を僅かに覗めるルナにそう言って返す客人。

幼い少女の姿をしているとは言え彼女は精霊であり、しかも一つの

属性の最上位に位置する力を宿す存在である。そんな存在にメイド服を出して「着てくれ」とは……命知らずというか、何と云うか。しかしメイドではないとはいえ、現在彼女を含めた精霊達がしている仕事は接客業と厨房係である。それで自分は精霊と言っても、あまり意味はないだろう。しかも今の姿は、髪の色（ルナは銀混じりの薄い金色）や僅かに尖った耳を除けばまんま人間なのだから尚更だ。

それが彼女の精霊としてのプライドに触ったのか、僅かにだが、ざわりと殺気混じりのマナを男に向けて放つルナ。幼い少女の外見をしている為か、彼女の沸点は他の精霊（ただしサラマンダー除く）に比べてもやや低い。他の客に気付かれない様、ピンポイントに男に向けてのみ殺気を放っているあたり、器用ではあるが。

しかし男はそれを向けられても笑みを崩さず、メイド服を出している。この男も割と神経が太い。

そんなルナと男を見て慌てるウイスプ。あまり広く無い店内で戦わせる訳にはいかない。戦いになったらまず間違いなくこの店は吹き飛ばし、それ以前に店内には主や仲間の他に、食事中のお客もまだ居るのだから。

「ルナ、いけませんよ。少し落ち着きなさい」

『……主』

しかしその心配は無用だったようだ。

マナの動きを察知したか、厨房から出て来た昴に注意され、ルナは殺気を鎮める。彼の手には銀製のティーポットと白磁のカップがあった。

テーブルにポットとカップを置き、殺気を鎮めたルナの頭を撫でると、彼女は閉じた目をさらに細めて気持ち良さそうにした。

それを見ながら、昴は客にも一言。

「アルも、余りそう言う事を頼まないで下さい。ウチはそういう店ではないのですから」

「それは残念」

若干呆れた様な口調でそう言う昴に、男　　アルビレオ・イマはまるで残念そうでない口調でそう返し、出していたメイド服をロ―ブの中にしまいながら含み笑いを零す。実に胡散臭げだ。そんなアルに、変わっていませんねと苦笑しながら昴は言った。するとアルは一言。

「昴、私の事はアルビレオではなく、クウネル・サンダースと呼んでください、気に入っていますので」

「クウネルって、また妙な名前を……何処のフライドチキンのおじさんですか、貴方は」

そう言うて再び苦笑を漏らす昴。この男、溜息や苦笑を漏らす事が多過ぎである。

しかしアルの奇妙なこだわりや趣味は20年前から知っている。おそらく、そう呼ばなければこの男はまるで反応しないだろう。

内心で呆れながらも、カップにお茶を注ぎアルの前に出す。薄い色の液体がカップに満ち、湯気と共に良い匂いが立ち昇る。

出されたカップを持ち、口に運ぶクウネル（アル）。黙って茶を飲むその姿は、窓から射す陽の光に照らされ、さらに本人の整った容貌も有る為、非常に絵になる。……性格は、人の慌てる姿を見て楽しむと言う、少々アレな所があるが。まあ、趣味である他人の人生の収集に比べたらまだいい方だろう。

それを知らない客の女性達は、彼がお茶を飲む姿に見惚れている。

「先程、ネギ君を見ましたよ」

「少年を？」

「ええ、何やらキティに追いかけていましたが……見ていて面白かったですよ」

「？ キティとは？」

聞き慣れぬ名前に疑問符を浮かべる昴。彼に頭を撫でられていたルナは、同じく彼女の頭を撫でようとしていたアルの手を避けて厨房奥の休憩室に引っ込んでいる。どうやらアルは彼女に嫌われたらしい。

しかし彼は笑みを浮かべたまま、昴の問いに返す。

「そう言えば、昴は彼女のフルネームを知りませんでしたか。エヴァンジェリンの事ですよ」

「エヴァンジェリンの？」

「ええ、今度彼女の前で言ってみると良いでしょう。……面白いですよ？」

ぼそりと最後に小さくそう付け加えて、再び茶を飲むアル。

後日、茶を飲みに来たエヴァンジェリンにそう言っ昴は彼女に掴みかかられ「その名を何処で知ったあ!？」と思い切り首を振りまわされる事になるのだが、それは割とどうでもいい事である。

「彼はそれなりに強くなっているようですね」

「エヴァンジェリンと古菲さんの訓練も有りますからね。少なくとも、並の人達よりは強いと思いますよ。小太郎少年とも切磋琢磨し合っている様です。小太郎少年からの情報だと、武術大会にも出るらしいですよ」

「ほう、それは良い事を聞きました。それでは私も、参加するつもりでしょうか、約束を果たす為に」

「約束……?」

「ええ、10年前に、ナギとある約束をしていますが。ようやく果

たす事が出来ます」

そう言ってお茶を飲み干し、暫く昴との談笑を楽しんでアルは店を出て行った。

その直後、世界樹の光が若干だが強まり 自分の中の何かがざわめく様な感覚を昴は感じた。

飛行船の中、彼女は何をするでもなく小脇に一冊の分厚い白い本を抱え、窓から地上と、そこで起こっている喧騒を薄く笑みを浮かべながら眺めていた。

地上から数千メートルの高度を飛んでいる為、人や催し物は豆粒のようにしか見えない。

「…………そろそろ、ネギ坊主が宮崎サンにキスを望まれる頃かな…………」
そう言ってお世界樹を見た直後、ぼんやりとした樹の輝きが強まった。同時に、少し離れた場所で細い光の柱が一本立つ。

ピンゴネ。まるで嬉しくはないガ…………。

苦笑を零す。

今頃はアスナや刹那と戦っているのだろう。分かっただけだが、あの少年はつくづく騒動に縁がある。

きつと2度目や3度目、それ以降のネギも面白い騒動を起こしてくれることだろう。

「まあ、そんな事は別にどうでもいいんだがナ」

あの少年が引き起こすだろう騒動は、自分の計画には然して関係はないし影響もない。寧ろ、自分の行動から魔法先生達の目を逸らす為の良い目くらましになってくれるだろう。

問題としては学園長を含めたこの学園で最上位の力を持つ数人だが……エヴァンジェリンには基本干渉を取り付けてあるので、不利益になる事をしなければ彼女とその従者が邪魔して来る事はおそらくないだろう。学園長とタカミチも、カシオペアを含めた自分の『切り札』を全て使えば何とかなるだろう。

問題はもう一人、英雄にも数えられ、しかしその呼ばれ方を嫌っている彼だが……アスナに手を出さなければ何とかなるかも知れない。

「……………この時代では、まだ元気そうだったナ。二人トモ……………」
ぽつりとそう呟き、閉じた右目に手を当てる。

気の所為か、そこは熱を持っている様に感じられた。

「……………絶対に、変えて見せる」

呟くようにそう言って、彼女　超は目を開けて時計を見た。もうそろそろ武道会予戦が始まる時間だ。主催者である自分が、開催の挨拶などに遅れる訳にはいかない。
彼女は小脇に抱えた本を開いた。

「
」

そして聞きとれない言葉で何かを言った瞬間、彼女の姿は蜃気楼のように消えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496p/>

真言の紡ぎ手

2011年12月4日01時17分発行